根来寺坊院跡

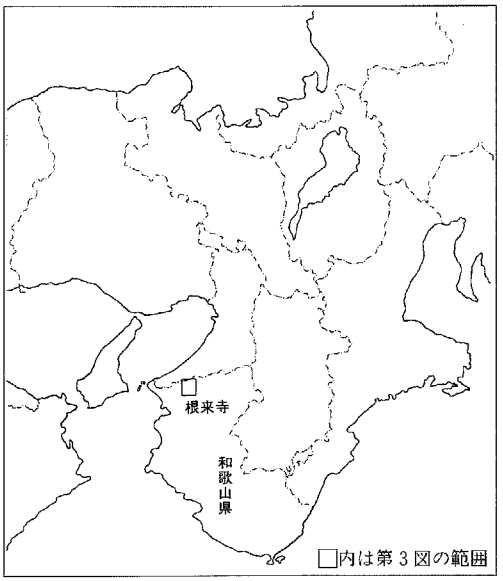
－県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う根来工区発掘調査報告書－

1997年3月

財団法人　和歌山県文化財センター

根来寺坊院跡

－県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う根来工区発掘調査報告書－



1997年３月

財団法人　和歌山県文化財センター

1．調査地と西側丘陵（南西上空から）

2．第II区南側 堀跡全景（北々東から）

1．第II区北側 谷状地形全景（北々東から）

2．第III区 調査地全景（北々東上空から）

1．第Ⅳ区 調査地全景と堀跡の地形（東南東上空から）

2．第Ⅳ区 堀SH２の石造遺物出土状況（南東から）

1．一石五輪塔

2．一石五輪塔

3．一石五輪塔

4．地蔵石仏

5．板碑

6．宝篋印塔基礎

第Ⅳ区 堀SH 2 出土の石造遺物

1．喉輪

2．垂

3．吹返

第Ⅳ区 堀SH１・SH２出土の武具

序

新義真言宗一乗山根来寺は、保延六年（1140）興教大師覚鑁による開山以来、高野山金剛峯寺と二分するほどの勢力を擁し、最盛期には堂塔坊舎の数が二千数百ともいわれ、中世には全国でも有数の規模をもった寺院であります。しかしながら、天正十三年（1585）羽柴秀吉軍の根来攻めにより、大伝法堂・大塔および大師堂などの一部を遺し、全山ことごとく灰燼に帰しました。根来寺山内の調査の開始された昭和50年代には、戦国期の重要な遺跡の一つとして、広島県草戸千軒町遺跡、福井県一乗谷・朝倉氏館跡と合わせて日本の中世三大遺跡と称されるほどでした。

さて、県土木部が今後増加することが予想される和歌山県と大阪府間の交通需要に対応するため、交通網の整備事業の一環として着手した主要地方道泉佐野岩出線道路改良事業の建設が歴史的に重要な根来地区におよぶことになり、事前の発掘調査が実施されることとなりました。

発掘調査は、平成３年度から５箇年にわたり実施されました。その結果、旧石器時代から江戸時代にかけての多くの遺構が膨大な量の遺物を伴い検出されました。中でも、中世末期の遺構・遺物は、戦国期の根来寺を考える上で欠かすことのできない資料であり、これをもとにして城砦化した根来寺の一面を明らかにすることができるようになってまいりました。

このたび、発掘調査の成果をまとめ報告書として刊行するはこびになりましたが、本書が県民の皆様のみならず、広く一般の活用に資することができれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、本事業の推進にあたり種々ご指導、ご支援を賜りました諸先生方や和歌山県岩出土木事務所をはじめとする関係機関、地元の皆様に対し、改めて厚くお礼申し上げます。

平成９年３月

財団法人 和歌山県文化財センター
理事長　西口　勇

例　言

1．本書は、和歌山県那賀郡岩出町根来に所在する根来寺坊院跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴うもので、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、(財) 和歌山県文化財センターが実施した。

3．発掘調査および整理業務にかかる経費はすべて和歌山県が負担した。

4．一連の事業遂行にあたっては、和歌山県岩出土木事務所、岩出町教育委員会、岩出町民俗資料館を初め、関係機関および地元の方々から多大なる協力を得た。記して感謝する次第であります。なお、発掘調査にあたっては、阪口毅司・前田晃嗣・本山　剛・山岡邦章・山野晃司が補佐した。

5．本書は、調査担当者で討議のうえ土井が執筆・編集した。付章の執筆分担は目次に示すとおりである。

6．図版編に使用した遺構写真は、各区調査担当者が撮影した。遺物写真は、金属製品の一部・木製品について財団法人元興寺文化財研究所　保存科学センターの提供を受け、それ以外のものは土井が撮影した。

7．調査および報告書作成にあたっては、安部みき子 (大阪市立大学医学部)、中井　均 (米原町教育委員会)、藤澤典彦 (元興寺文化財研究所)、水島大二 (和歌山県立和歌山工業高等学校)、村田修三 (奈良女子大学) の各氏を初め、多くの方々からご指導・ご教示を得た。記して感謝の意を表する次第であります。

愛甲昇寛 (稲沢市教育委員会)、植田直見 (元興寺文化財研究所保存科学センター)、榎本栄進 (岩出町文化財保護審議委員会委員)、川口宏海 (大手前栄養文化学院)、河内一浩 (羽曳野市教育委員会)、北垣総一郎 (兵庫県立兵庫工業高等学校)、北野信彦 (元興寺文化財研究所保存科学センター)、北野隆亮 (和歌山市文化体育振興事業団)、木下浩良 (高野山大学)、窪田雅秀 (岩出町民俗資料館)、小賀直樹 (和歌山県立吉備高等学校)、酒井宏直 (和歌山県漆器試験場)、嶋谷和彦 (堺市立埋蔵文化財センター)、白石博則 (大阪府立佐野工業高等学校)、西山昌孝 (千早赤阪村教育委員会)、前田敬彦 (和歌山市教育委員会)、南川耕司 (摂河泉文庫)、森村健一 (堺市立埋蔵文化財センター) (50音順)

8．調査・整理作業に伴う基準点測量・標定点測量および航空写真撮影・遺構図化は株式会社パスコに、木製品・金属製品の保存処理は財団法人元興寺文化財研究所保存科学センターに、土壌の微化石等の科学分析・種実の同定は株式会社パリノ・サーヴェイにそれぞれ委託した。

9．調査・整理作業で作成した図面・写真および台帳等の記録資料は (財) 和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

10．本書に掲載した遺物は膨大な量の中から任意に抽出したもので、各遺構の遺物を網羅するものではない。

11．発掘調査・整理業務の調査組織は次頁に示すとおりである。

調査組織

調査委員

岡田　英男（奈良大学教授・和歌山県文化財保護審議委員会委員）

羯磨　正信（日本考古学協会員・　〃　〃　、故人）（平成７年度まで）

巽　三郎（日本考古学協会員・　〃　〃　）

都出比呂志（大阪大学教授・　〃　〃　）（平成７年度まで）

藤澤　一夫（四天王寺国際仏教大学名誉教授・　〃　〃　）

和田　晴吾（立命館大学教授・　〃　〃　）（平成８年度から）

事務局

専務理事　鍋島伊津夫（平成６年度まで）

（事務局長兼務）　中谷　博昭（平成７年度から）

事務局次長　菅原　正明（県教育委員会文化財課主幹）

管理課長　松田　正昭（平成４年度まで）（県教育委員会文化財課主任）

管理課長心得　西本　悦子（平成５年度から）　管理課主事　森　和美（平成７年度まで）

主査　西本　悦子（平成４年度まで）　〃　松尾　克人（平成７年度から）

主事　永長　美保（平成５年度まで）　〃　久保　陽子（平成８年度から）

埋蔵文化財課長　辻林　浩（平成４年度まで）（県教育委員会文化財課主任）

埋蔵文化財課長　松田　正昭（平成５年度から）（県教育委員会文化財課主任）

主任　永光　寛（平成５年度まで）（県教育委員会文化財課主任）

（現、県立紀伊風土記の丘管理事務所）

〃　上田　秀夫（平成５年度まで）（県教育委員会文化財課主任）

（現、山口県立萩美術館・浦上記念館）

〃　松下　彰（平成６年度から）（県教育委員会文化財課主任）

主査　冨加見泰彦　（県教育委員会文化財課主査）

調査業務担当

埋蔵文化財課主任　上田　秀夫　平成３年度・第１次確認調査、平成４年度・第２次確認調査

主査　冨加見泰彦　平成５年度・第３次確認調査、平成５年度・第１次調査

〃　土井　孝之　平成５年度・第２次調査、平成６年度・第３次調査、

平成７年度・第４次調査

整理業務担当

埋蔵文化財課主査　土井　孝之　平成８年度

※なお、震災復興のための兵庫県派遣に伴う異動について、その期間の記述は省いている。

凡　例

1．調査地区の地区割は、第III章第３節に記述する。

2．調査および本書に使用した遺構の略号は、ＳＨ－堀、ＳＫ－土坑墓・土坑・水溜め、ＳＥ－井戸、Ｐ－柱穴、ＳＤ－溝、ＳＷ－池状遺構・落ち込み、ＳＲ－自然流路　である。遺構番号は、その種類に拘らず、調査次毎に１番からの通し番号とした。本書に使用した遺構番号は、現地調査時のものをそのまま使用している。

3．調査および整理作業で使用した調査地のコード番号は、各々、下記のとおりである。

（平成３年度）1991年度－岩出町・根来寺坊院跡－第１次県道確認調査（91－11・016－ＲＴ１）
（平成４年度）1992年度－　〃　・　〃　－第２次県道確認調査（92－11・016－ＲＴ２）
（平成５年度）1993年度－　〃　・　〃　－第３次県道確認調査（93－11・016－ＲＴ３）
（　〃　）1993年度－岩出町・根来寺坊院跡－第１次県道調査（93－11・016－Ｒ１）
（　〃　）1993年度－　〃　・　〃　－第２次県道調査（93－11・016－Ｒ２）
（平成６年度）1994年度－　〃　・　〃　－第３次県道調査（94－11・016－Ｒ３）
（平成７年度）1995年度－　〃　・　〃　－第４次県道調査（95－11・016－Ｒ４）

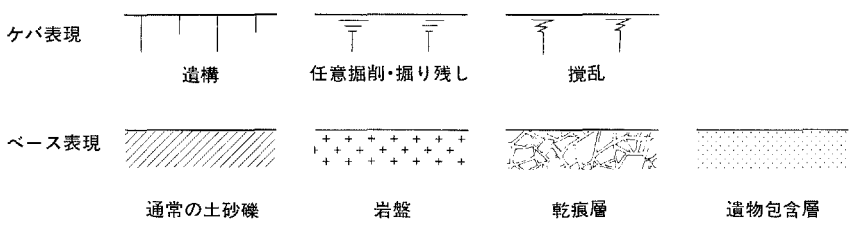
出土遺物・記録資料の整理に当って、全て上記のコード番号を使用している。

4．土層の色調および土性の粒径区分は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帳』（1993年版）に準拠した。土層名で２種類以上の記載のある場合は、前者が主体で、後者が副になることを示す。

5．本書に掲載した遺物のうち、確認調査に関するものは「Ｔ」を冠し、旧石器～弥生時代に関する石器には第Ｉ区～第IV区まで「Ｓ」を冠し通し番号を付した。それ以外のものは全地区で通し番号を付した。本書の遺物実測図・出土遺物一覧・遺物写真図版に付した遺物番号は各々一致する。遺物の内、2000番台は写真図版のみに掲載したものである。

6．本書に示した遺構実測図および地区割の基準線は、国土座標第VI系に基づく。北方位は国土座標北を示す。また、遺構実測図の基準高は東京湾標準潮位（Ｔ．Ｐ．＋）の数値である。

7．本書の遺構・土層実測図は、特に縮尺を統一していないが、各々に明示している。遺構のケバ・ベースの表現は、右のとおりである。



8．挿図に示した「遺物取り上げ層位」は、現地調査での遺物取り上げに際して付した層位で「第…層」、もしくは「最上・上・中・下・最下層」で表している。本文中における「第…層」の表現は、遺物取り上げ層位を示したものである。土層図の細別層位で表現する必要のある場合は、「図○○層」で示している。

9．遺物実測図は、土器類１／４、石造遺物１／６の縮尺を基本としたが、異なる場合は各々縮尺を明示している。

本文目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2
第1節　地質的環境 …… 2
第2節　地理的・歴史的環境 …… 3
第Ⅲ章　調査の範囲・方法と概要 …… 6
第1節　既往の調査と範囲確認調査 …… 6
1　既往の調査 …… 6
2　第1次確認調査 …… 6
3　第2次確認調査 …… 8
4　第3次確認調査 …… 8
第2節　本調査の範囲と概要 …… 10
1　第Ⅰ区 …… 10
2　第Ⅱ区 …… 10
3　第Ⅲ区 …… 10
4　第Ⅳ区 …… 10
第3節　発掘調査の方法 …… 12
第4節　出土遺物整理 …… 13
第Ⅳ章　調査の成果 …… 15
第1節　第Ⅰ区の検出遺構と出土遺物 …… 15
1　基本層序 …… 15
2　検出遺構と出土遺物 …… 15
3　遺物包含層と出土遺物 …… 17
第2節　第Ⅱ区の検出遺構と出土遺物 …… 21
1　基本層序 …… 21
2　検出遺構と出土遺物 …… 22
3　遺物包含層と出土遺物 …… 44
第3節　第Ⅲ区の検出遺構と出土遺物 …… 47
1　基本層序 …… 47
2　検出遺構と出土遺物 …… 48
3　遺物包含層と出土遺物 …… 57
第4節　第Ⅳ区の検出遺構と出土遺物 …… 63
1　基本層序 …… 63

2　検出遺構と出土遺物 …… 64
3　遺物包含層と出土遺物 …… 77
第Ⅴ章　まとめ …… 81
第１節　出土遺物と検出遺構 …… 81
1　出土遺物 …… 81
2　出土遺物の比率と分布 …… 82
3　円盤状土製品の法量分布 …… 84
4　検出遺構 …… 85
第２節　文献史料の記載 …… 86
第３節　石造遺物の基礎資料作成 …… 88
1　整理方法と計測 …… 88
2　石造遺物の総数 …… 89
3　石造遺物と銘文 …… 90
4　一石五輪塔の法量 …… 91
5　調査地周辺の石造物 …… 92
第４節　根来寺坊院跡における城砦的景観の復元 …… 94

付章 …… 97
第１節　堀ＳＨ29出土　塝付着物の分析 ……(元興寺文化財研究所保存科学センター)…… 97
第２節　堀ＳＨ１出土　喉輪の分析と保存処理 ……(植田直見)…… 98
第３節　漆器資料の分析と検討 ……(北野信彦)… 102
第４節　根来寺坊院跡から出土した人骨と動物遺体 ……(安部みき子)… 108
第５節　土壌分析等からみた調査地の古環境 ……(㈱パリノ・サーヴェイ)… 113

出土遺物実測図 …… 131
出土遺物一覧 …… 184
石造遺物計測一覧 …… 199
参考文献 …… 222
報告書抄録 …… 228

巻頭図版目次

巻頭図版１　１　調査地と西側丘陵（南西上空から）

　　２　第Ⅱ区南側　堀跡全景（北々東から）

巻頭図版２　１　第Ⅱ区北側　谷状地形全景（北々東から）

　　２　第Ⅲ区　調査地全景（北々東上空から）

巻頭図版３　１　第Ⅳ区　調査地全景と堀跡の地形（東南東上空から）

　　２　第Ⅳ区　堀ＳＨ２石造遺物出土状況（南東から）

巻頭図版４　第Ⅳ区　堀ＳＨ２出土の石造遺物

巻頭図版５　第Ⅳ区　堀ＳＨ１・ＳＨ２出土の武具

図版目次

ＰＬ．１　根来寺坊院跡と周辺（1958年撮影）

ＰＬ．２　調査地と周辺（1958年航空写真に調査地を合成）

ＰＬ．３　１　調査地と周辺（西南西上空から）　２　調査地遠景（東側根来霊園から）

ＰＬ．４　調査地全体（モザイク写真）

ＰＬ．５　第Ｉ区　１　第Ｉ区と北側の状況（南東上空から）　２　調査地全景（東上空から）

ＰＬ．６　第Ｉ区　１　Ａ区全景（南から）　３　土坑ＳＫ123（西から）

　　２　Ｃ区土坑群（東から）　４　埋桶82（北西から）

ＰＬ．７　第Ⅱ区　１　調査地全景（東南東上空から）　２　調査地全景（南々西から）

ＰＬ．８　第Ⅱ区　１　谷状地形（北東から）　３　谷状地形南北土層（西から）

　　２　谷状地形南北土層（南西から）

ＰＬ．９　第Ⅱ区　１　土坑ＳＫ11須恵器大甕（西から）　４　谷状地形遺物出土状況（東から）

　　２　土坑ＳＫ11須恵器大甕（西から）　５　溝ＳＤ12（南西から）

　　３　土坑ＳＫ11須恵器大甕据付け状況（西から）

ＰＬ．10　第Ⅱ区　１　溝ＳＤ12橋脚丸太（南西から）　３　Ｑ・Ｔ段全景（北々東から）

　　２　水溜めＳＫ24（北から）　４　井戸ＳＥ14木製品出土状況（西から）

ＰＬ．11　第Ⅱ区　１　Ｔ段全景（東南東から）　４　溝ＳＤ６（東北東から）

　　２　Ｔ段南端土坑群（東から）　５　溝ＳＤ６南北土層（東北東から）

　　３　Ｔ段土坑群（東から）

ＰＬ．12　第Ⅱ区　１　堀ＳＨ27・ＳＨ29全景（東上空から）　２　堀ＳＨ27・ＳＨ29全景（東から）

ＰＬ．13　第Ⅱ区　１　堀ＳＨ27・ＳＨ29全景（南々西から）　２　堀ＳＨ27・ＳＨ29間土橋（北から）

ＰＬ．14　第Ⅱ区　１　堀ＳＨ27最下層上位曲物（西から）　４　堀ＳＨ27下層獣骨Ｎ（北から）

　　２　堀ＳＨ27東肩下層木製品（北々西から）　５　堀ＳＨ29下層曲物（南々東から）

　　３　堀ＳＨ27下層獣骨Ｅ・Ｆ（北東から）　６　堀ＳＨ29最下層凹部折敷（東から）

ＰＬ．15　第Ⅱ区　1　堀ＳＨ27南北土層中央部（東北東から）　3　堀ＳＨ27中央凹部（東から）
2　堀ＳＨ29東西土層（北々西から）　4　堀ＳＨ29中央凹部（西から）
ＰＬ．16　第Ⅱ区　1　溝ＳＤ４（東南東から）　3　池状遺構ＳＷ１（西南西から）
2　溝ＳＤ４南北土層（東から）
ＰＬ．17　第Ⅲ区　1　調査地全景（真上から）　2　調査地全景（北々東から）
ＰＬ．18　第Ⅲ区　1　溝ＳＤ38（北から）　4　土坑ＳＫ237（北から）
2　溝ＳＤ38東西土層（南から）　5　土坑ＳＫ237馬歯出土状況（北から）
3　Ｌ段以南全景（北々東から）
ＰＬ．19　第Ⅲ区　1　土坑墓ＳＫ240（北から）　5　集石土坑ＳＫ166（南から）
2　土坑墓ＳＫ240鉄製品（北から）　6　集石土坑ＳＫ314（北西から）
3　土坑ＳＫ300（北々東から）　7　Ｎ段西半土坑群（北から）
4　土坑墓ＳＫ241（北々西から）　8　Ｌ段南端土坑群（北から）
ＰＬ．20　第Ⅲ区　1　L'段・Ｎ段全景（西から）　3　井戸ＳＥ283（東から）
2　Ｎ段南北土層（東南東から）　4　井戸ＳＥ283井側内（南東から）
ＰＬ．21　第Ⅲ区　1　堀ＳＨ47（東北東から）　4　落ち込みＳＷ40（南々東から）
2　堀ＳＨ47南東－北西土層（北東から）　5　田畑の段ＳＷ37と鋤溝群（西南西から）
3　堀ＳＨ47北東肩土層（南々東から）
ＰＬ．22　第Ⅳ区　1　調査地全景（北々東上空から）　2　調査地と根来寺（南々西から）
ＰＬ．23　第Ⅳ区　1　調査地全景（北々東から）　3　堀ＳＨ１喉輪出土状況（東北東から）
2　堀ＳＨ１南西隅状況（東北東から）　4　堀ＳＨ１東西土層（南々西から）
ＰＬ．24　第Ⅳ区　1　堀ＳＨ２全景（南々東から）　3　堀ＳＨ２石造遺物群（西北西から）
2　堀ＳＨ２石造遺物群（南東から）
ＰＬ．25　第Ⅳ区　1　堀ＳＨ２石造遺物群（南々東から）　3　堀ＳＨ２石造遺物廃棄状況（南東から）
2　堀ＳＨ２石造遺物群（北東から）　4　堀ＳＨ２石造遺物廃棄状況（南東から）
ＰＬ．26　第Ⅳ区　1　堀ＳＨ２大別第２層大形平瓦（東北東から）　4　堀ＳＨ２東側の土坑・溝（南から）
2　堀ＳＨ２段１（東南東から）　5　堀ＳＨ２東西土層（南から）
3　堀ＳＨ２段１石造遺物群（東から）
ＰＬ．27　第Ⅳ区　1　Ａ段石造遺物転用石積み（南から）　3　溝ＳＤ36（南々西から）
2　Ｅ段全景（北々東から）　4　溝ＳＤ36出土遺物（東南東から）
ＰＬ．28　第Ⅰ～Ⅳ区出土旧石器～弥生時代石器　ＰＬ．29　第Ⅰ・Ⅱ区出土遺物
ＰＬ．30～ＰＬ．31　第Ⅱ区谷状地形出土遺物　ＰＬ．32　第Ⅱ区遺構出土木製品・金属製品
ＰＬ．33～ＰＬ．35　第Ⅱ区堀出土遺物　ＰＬ．36　第Ⅱ区堀・他出土遺物
ＰＬ．37　第Ⅱ区堀出土木製品・他　ＰＬ．38～ＰＬ．39　第Ⅱ区堀出土木製品
ＰＬ．40　第Ⅱ区出土遺物　ＰＬ．41　第Ⅲ区遺構・包含層出土遺物
ＰＬ．42～ＰＬ．44　第Ⅲ区包含層・他出土遺物　ＰＬ．45～ＰＬ．46　第Ⅳ区堀・他出土遺物
ＰＬ．47　第Ⅳ区堀ＳＨ２出土瓦　ＰＬ．48　第Ⅳ区堀出土金属製品
ＰＬ．49　第Ⅳ区堀出土金属製品・他　ＰＬ．50　第Ⅳ区堀・他出土木製品
ＰＬ．51～ＰＬ．56　第Ⅳ区堀ＳＨ２出土石造遺物　ＰＬ．57　第Ⅱ区出土人骨と動物遺体

挿図目次

第１図　県道泉佐野岩出線概念図 …… 1

第２図　調査地周辺の中央構造線活断層系ストリップマップ …… 2

第３図　根来寺坊院跡の範囲と周辺遺跡 …… 4

第４図　範囲確認調査のトレンチ位置図 …… 7

第５図　範囲確認調査の出土遺物実測図 …… 9

第６図　調査地区の位置図 …… 11

第７図　第Ⅰ区の地区割と遺物取り上げ区画図 …… 12

第８図　第Ⅱ～Ⅳ区の地区割と遺物取り上げ区画図 …… 12

第９図　第Ⅰ区の基本層序 …… 15

第10図　第Ⅰ区調査遺構全体図 …… 16

第11図　第Ⅰ区包含層出土遺物実測図 …… 18

第12図　第Ⅰ区包含層出土遺物の分布密度 …… 20

第13図　第Ⅱ区の基本層序 …… 21

第14図　第Ⅱ区谷状地形の基本層序 …… 22

第15図　第Ⅱ区調査遺構全体図 …… 23・24

第16図　第Ⅱ区谷状地形南北土層実測図 …… 25・26

第17図　第Ⅱ区土坑ＳＫ11実測図 …… 27

第18図　第Ⅱ区土坑ＳＫ11出土遺物実測図 …… 27

第19図　第Ⅱ区溝ＳＤ12土層実測図 …… 28

第20図　第Ⅱ区井戸ＳＥ14実測図 …… 28

第21図　第Ⅱ区水溜めＳＫ24実測図 …… 29

第22図　第Ⅱ区Ｔ段土坑群実測図 …… 30

第23図　第Ⅱ区溝ＳＤ４南北土層実測図 …… 31

第24図　第Ⅱ区溝ＳＤ６南北土層実測図 …… 32

第25図　第Ⅱ区堀ＳＨ27獣骨出土状況実測図 …… 34

第26図　第Ⅱ区堀ＳＨ27・ＳＨ29土層実測図 …… 35・36

第27図　第Ⅱ区堀ＳＨ27－ＳＨ29断面実測図 …… 37

第28図　第Ⅱ区池状遺構ＳＷ１実測図 …… 38

第29図　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物の分布密度１ …… 40

第30図　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物の分布密度２ …… 41

第31図　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物の分布密度３ …… 43

第32図　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物実測図 …… 44

第33図　第Ⅱ区谷状地形出土の特殊遺物実測図 …… 46

第34図　第Ⅲ区の基本層序 …… 47
第35図　第Ⅲ区溝ＳＤ38東西土層実測図 …… 48
第36図　第Ⅲ区調査遺構全体図 …… 49・50
第37図　第Ⅲ区土坑ＳＫ237実測図 …… 51
第38図　第Ⅲ区土坑墓ＳＫ240実測図 …… 51
第39図　第Ⅲ区土坑墓ＳＫ241実測図 …… 51
第40図　第Ⅲ区集石土坑ＳＫ166実測図 …… 52
第41図　第Ⅲ区集石土坑ＳＫ314実測図 …… 52
第42図　第Ⅲ区土坑ＳＫ296実測図 …… 53
第43図　第Ⅲ区土坑ＳＫ300実測図 …… 54
第44図　第Ⅲ区井戸ＳＥ283実測図 …… 54
第45図　第Ⅲ区堀ＳＨ47土層実測図 …… 55
第46図　第Ⅲ区落ち込みＳＷ40・溝ＳＤ41東西土層実測図 …… 56
第47図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図 …… 57
第48図　第Ⅲ区Ｌ段～Ｎ段南北土層実測図 …… 58
第49図　第Ⅲ区包含層出土遺物の分布密度１ …… 60
第50図　第Ⅲ区包含層出土遺物の分布密度２ …… 61
第51図　第Ⅳ区の基本層序 …… 63
第52図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図 …… 64
第53図　第Ⅳ区溝ＳＤ36東西土層実測図 …… 64
第54図　第Ⅳ区調査遺構全体図 …… 65・66
第55図　第Ⅳ区堀ＳＨ１東西土層実測図 …… 68
第56図　第Ⅳ区堀ＳＨ２石造遺物出土状況実測図 …… 70
第57図　第Ⅳ区堀ＳＨ２東西土層実測図 …… 71
第58図　第Ⅲ・Ⅳ区堀ＳＨ47－ＳＨ１－ＳＨ２断面実測図 …… 72
第59図　第Ⅳ区石造遺物転用石積み実測図 …… 73
第60図　第Ⅳ区堀ＳＨ２と周辺の遺構 …… 74
第61図　第Ⅳ区溝ＳＤ３東西土層実測図 …… 75
第62図　第Ⅳ区遺構・包含層出土遺物の分布密度１ …… 78・79
第63図　第Ⅳ区遺構・包含層出土遺物の分布密度２ …… 79
第64図　第Ⅳ区遺構・包含層出土遺物の分布密度３ …… 80
第65図　円盤状土製品法量分布図 …… 84
第66図　石造遺物の計測 …… 88
第67図　戦国時代末期の根来寺及び周辺の様相 …… 94
第68図　根来寺坊院における城砦的施設 …… 95

第69図　第Ⅰ区遺構・包含層出土遺物実測図… 132
第70図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図1…… 133
第71図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図2…… 134
第72図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図3…… 135
第73図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図4…… 136
第74図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図5…… 137
第75図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図6…… 138
第76図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図7…… 139
第77図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図8…… 140
第78図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図9…… 141
第79図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図10…… 142
第80図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図11…… 143
第81図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図12…… 144
第82図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図13…… 145
第83図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図14…… 146
第84図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図15…… 147
第85図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図16…… 148
第86図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図17…… 149
第87図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図18…… 150
第88図　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図19…… 151
第89図　第Ⅱ区包含層他出土遺物実測図…… 152
第90図　第Ⅲ区遺構出土遺物実測図1…… 153
第91図　第Ⅲ区遺構出土遺物実測図2…… 154
第92図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図1…… 155
第93図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図2…… 156
第94図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図3…… 157
第95図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図4…… 158
第96図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図5…… 159
第97図　第Ⅲ区遺構・包含層出土遺物実測図… 160
第98図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図1…… 161
第99図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図2…… 162
第100図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図3…… 163
第101図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図4…… 164
第102図　第Ⅳ区包含層他出土遺物実測図…… 165
第103図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図5…… 166
第104図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図6…… 167
第105図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図7…… 168
第106図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図8…… 169
第107図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図9…… 170
第108図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図10…… 171
第109図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図11…… 172
第110図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図12…… 173
第111図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図13…… 174
第112図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図14…… 175
第113図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図15…… 176
第114図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影1…… 177
第115図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影2…… 178
第116図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影3…… 179
第117図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影4…… 180
第118図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影5…… 181
第119図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影6…… 182
第120図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影7…… 183

表目次

表1　出土遺物破片点数登録表 …… 14
表2　第Ⅰ区中地区毎の包含層出土遺物 …… 18
表3　第Ⅰ区包含層出土遺物の構成比率 …… 19
表4　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物の構成比率1 …… 39
表5　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物の構成比率2 …… 42
表6　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物の構成比率3 …… 45
表7　第Ⅲ区包含層出土遺物の構成比率1 …… 59

表８　第Ⅲ区包含層出土遺物の構成比率２ …… 62
表９　第Ⅳ区遺構出土遺物の構成比率 …… 76
表10　第Ⅳ区遺構・包含層出土遺物の構成比率 …… 77
表11　第Ⅰ区～第Ⅳ区全出土遺物の構成比率 …… 82
表12　根来寺坊院跡山内出土の遺物構成比率 …… 83
表13　石造遺物の種類別数量 …… 89
表14　在銘石造遺物の数量 …… 90
表15　石造遺物と法名 …… 90
表16　一石五輪塔の銘文記載型式と地輪の関係 …… 91
表17　一石五輪塔の法量分布 …… 92

写真目次

写真１　和泉山脈の岩層 …… 2
写真２　紀伊国分寺跡航空写真 …… 3
写真３　根来寺坊院跡山内の調査 …… 5
写真４　根来寺坊院跡の中心部 …… 5
写真５　第１次範囲確認調査の状況 …… 6
写真６　第２次範囲確認調査の状況 …… 8
写真７　調査状況 …… 10
写真８　出土遺物整理の状況 …… 13
写真９　第Ⅰ区自然流路ＳＲ222東壁土層 …… 15
写真10　第Ⅱ区調査前の状況 …… 21
写真11　第Ⅱ区谷状地形礫層の遺物 …… 22
写真12　第Ⅲ区Ｎ段西壁土層 …… 47
写真13　第Ⅲ区Ｎ段旧石器の出土状況 …… 57
写真14　第Ⅳ区調査前の状況 …… 63
写真15　第Ⅳ区ベースの状況 …… 63
写真16　第Ⅳ区自然流路ＳＲ７ …… 64
写真17　調査地周辺の石造物 …… 93
写真18　根来寺坊院に遺る城砦的施設ほか …… 96

付章　挿図・表・写真目次

第１節　堀ＳＨ29出土　鍋付着物の分析

図１　付着物のＦＴ-ＩＲ分析チャート …… 97
図２　灰白色部分のＦＴ-ＩＲ分析チャート …… 97
図３　木炭のＦＴ－ＩＲ分析チャート …… 97
写真１　土鍋の分析部位 …… 97

第２節　堀ＳＨ１出土　喉輪の分析と保存処理

図１　標準とする漆のＦＴ-ＩＲ分析チャート …… 99
図２　漆膜最上層のＦＴ-ＩＲ分析チャート …… 99
図３　漆膜中層のＦＴ-ＩＲ分析チャート …… 99
図４　漆膜下地層のＦＴ-ＩＲ分析チャート …… 99
図５　漆膜下地層のＥＰＭＡ分析チャート …… 99
写真１　漆膜の断面１ …… 99
写真２　漆膜の断面２ …… 99
写真３　Ｘ線写真 …… 100
写真４　喉輪細部１ …… 100
写真５　喉輪細部２ …… 100
写真６　喉輪細部３ …… 100
写真７　喉輪細部４ …… 100
写真８　保存処理前 …… 100
写真９　保存処理後 …… 100

第３節　漆器資料の分析と検討

図１　近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法 …… 105
図２　漆塗り構造の分類 …… 105
図３　赤色系漆(ベンガラ漆)のＸ線分析結果 …… 103
図４　赤色系漆(朱漆)のＸ線分析結果 …… 103
表１　漆器資料一覧 …… 106
表２　ろくろ挽き物の用材分類 …… 105
写真１　漆塗り構造の顕微鏡写真 …… 107

第４節　根来寺坊院跡から出土した人骨と動物遺体

表１　根来寺坊院跡出土の遺体の一覧表 …… 111
表２　根来寺坊院跡出土の動物遺体の出現頻度 …… 110
表３　ウマとウシの臼歯の計測値 …… 112
表４　ウシの下顎骨の計測値 …… 112
表５　イヌの下顎骨と臼歯の計測値 …… 112
表６　大型哺乳動物の長骨の計測値 …… 112
表７　肩甲骨と寛骨の計測値 …… 112

第５節　土壌分析等からみた調査地の古環境

図１　各遺構の主要試料採取層位(1) …… 114
図２　各遺構の主要試料採取層位(2) …… 115
図３　主要珪藻化石群集 …… 118
図４　主要花粉化石群集 …… 119
表１　珪藻の生態性 …… 115
表２　各分析結果一覧 …… 117
表３　各遺構の性格と環境変遷 …… 123
写真１　珪藻化石 …… 128
写真２　花粉化石 …… 129
写真３　木材・植物珪酸体・種実遺体 …… 130

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過（第１図）

和歌山県と大阪府の自然境界となっている和泉山脈には、南北にいく本かの横断道路が開かれている。主要幹線道路として、県道５本、国道３本、高速道路１本の計９本があり、古くからよく使われてきた峠道と重複、あるいは併走している場合が多い。これらの道路が、府県間の道路交通のほとんどを占めている。これらの内、交通量が多く、よく整備された道路として国道26号線、阪和高速道路、国道371号線、県道泉佐野岩出線（県道63号線）がある。

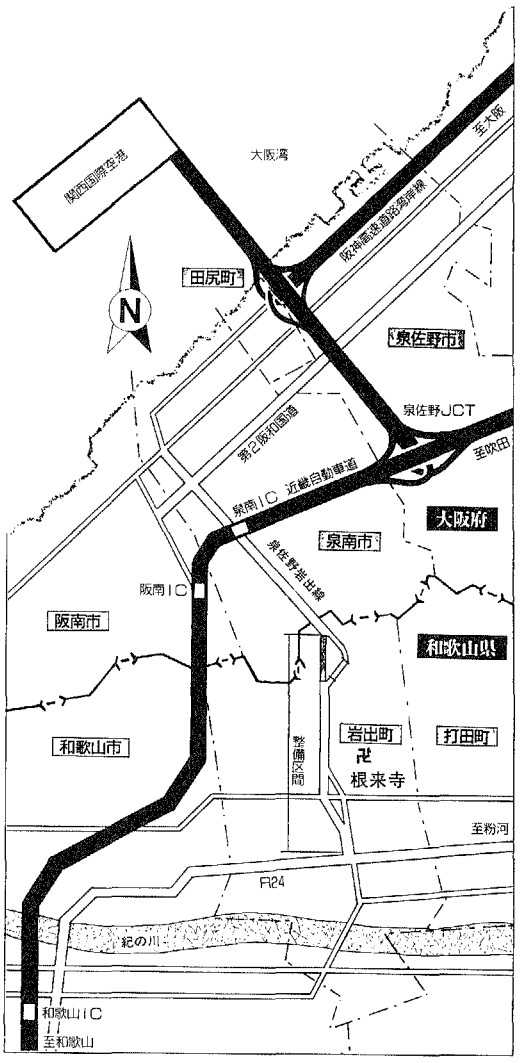
今般、大阪府泉佐野市を起点として和歌山県那賀郡岩出町備前間の府県界を結ぶ主要幹線道路であり、県長期総合計画において、関西国際空港に関連する道路として位置づけられている県道泉佐野岩出線バイパスの施工が計画されていた。

近年、交通量が増加し、交通渋滞をきたしているため、増大する交通需要への対応を主目的として、国道24号線備前交差点から府県界までの 6.7km間を４車線化する事業を４工区に分割し、昭和63年度（1988）から着手された。本路線は、利便性の高い関西国際空港や阪和自動車道へのアクセスが確保でき、国際軸・国土軸へ直結するとともに、企業誘致等による産業の活性化、観光客の増加、交通の利便性・安全性の向上、交通混雑の解消等を目指すものである。

計画路線の内、根来工区（根来バイパス－大規模農道分岐点～県道粉河・加太線間－）には周知の遺跡として根来寺坊院跡が所在したため、遺跡の取扱いについて、県教育委員会と県岩出土木事務所が協議・調整を重ねた結果、平成３年度（1991）から遺跡の範囲確認調査を実施することになった。根来寺坊院跡の周知の遺跡の範囲とは言え、根来寺の本来の寺域や町屋から外れた範囲に在り、山内とかなり様相を異にするものと予測された。

確認調査結果をもとに、調査の取扱いについて、当センターを交えての協議が行われ、平成５年度(1993)から３年次にわたる発掘調査の実施が決定された。しかし、この時点で予定された全面調査範囲は、用地買収や民家の立ち退きが未完了であり、南端（第Ⅰ区）と北端（第Ⅳ区）を先行して調査することとなった。

また、平成８年度（1996）に出土遺物整理事業を実施し、発掘調査報告書を刊行することが決定された。



第１図　県道泉佐野岩出線概念図
（和歌山県道路建設課発行冊子から）

第II章　遺跡の位置と環境

第１節　地質的環境（第２図、写真１）

根来寺坊院跡の北側に横たわる和泉山脈から前山丘陵一帯は、中央構造線が東西方向に存在することにおいて日本の中でも特に注目される地質構造の一地域である。

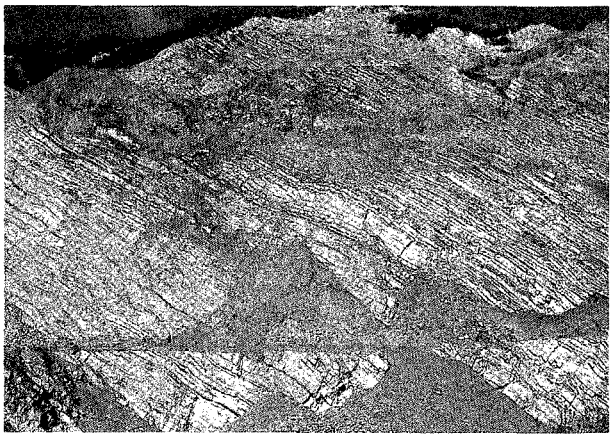
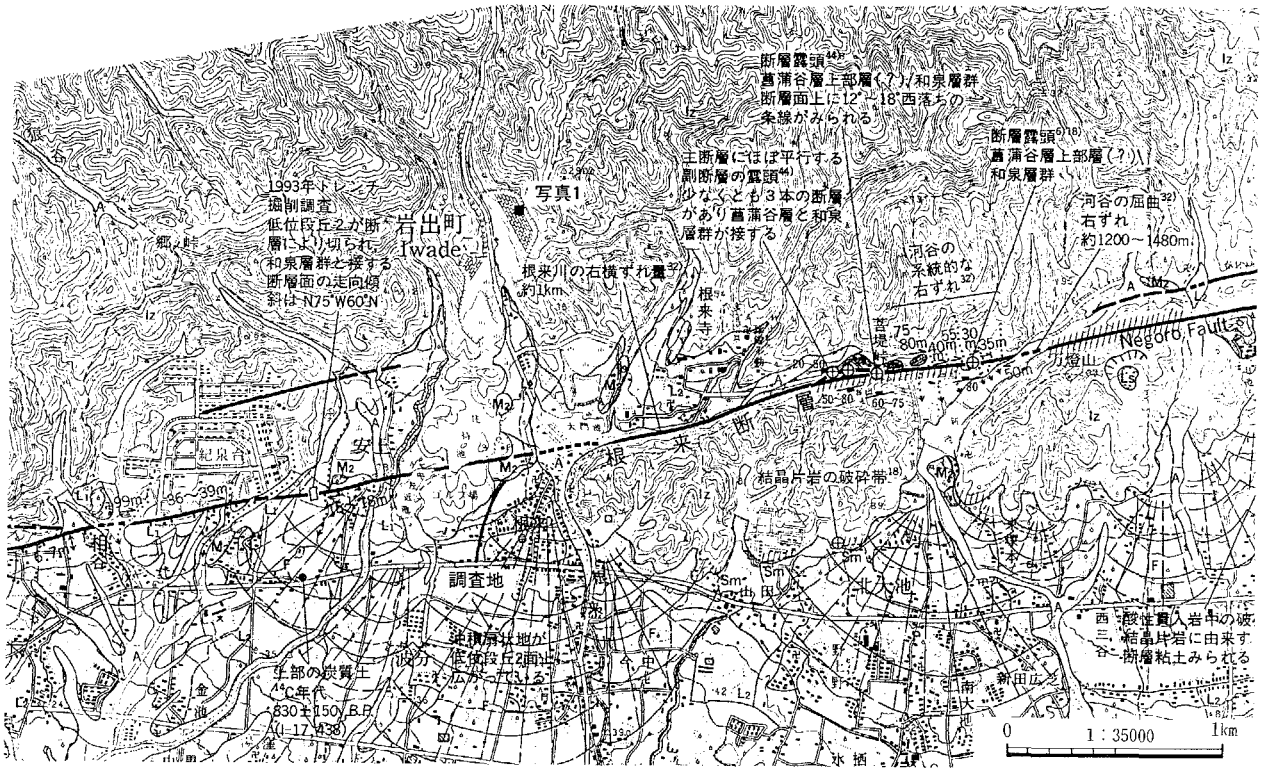


写真１　和泉山脈の岩層（1987年）

和泉山脈の主体をなすのは、和泉層群と呼ばれる上部白亜紀の地層である。古くは和泉砂岩層と呼ばれてきたが、礫岩、砂岩、泥岩およびそれらの互層よりなる。一般に、東北東－西南西の走向で、南に傾斜する。和泉山脈南縁の中央構造線のすぐ近くでは北に傾斜する非対称的な向斜構造をなしている。この和泉山脈には、加工に適した石材（和泉砂岩）が多く産出することから、古くは、泉南地域の石切場と同様の切出し場・作業場が和歌山側にも存在したものと考えられる。現在、県道泉佐野岩出線に隣接した和泉山脈の山中では、砕石に利用する和泉砂岩の採集が盛んに行われている。

調査地は、北側の和泉山脈から南側の紀ノ川にかけて緩やかに下降していく中位段丘面と一段下がった下位段丘面の上に存在している。



第２図　調査地周辺の中央構造線活断層系ストリップマップ（地質調査所　1994年発行）

第２節　地理的・歴史的環境（第３図、写真２～４）

根来寺坊院跡（16）は、紀ノ川の北岸、和泉山脈の山麓に位置している。この山麓部は、中央構造線に沿った幾筋かの破砕帯（根来断層）が東西に延びるため、山脈南麓にありながら南側に丘陵（前山）をもった盆地状の地形を呈しており、密教の聖地にふさわしい地勢に営まれている。また、背後に深い和泉山脈、前面に急峻な前山を配し、天然の要害としての立地を備えているともいえる。

根来寺は、現在新義真言宗総本山で一乗山大伝法院と号し、平安時代後期に沿源をもつ。高野山大伝法院を創始した覚鑁上人が、高野山金剛峯寺方との争いを避けるため、保延六年（1140）に院領であった和泉山地南麓にある当地の同院末寺に止住し、のち円明寺を創建したことに始まる。正応元年(1288)には、高野山から大伝法院や密厳院の寺名をうつし本格的な根来寺が成立していく。

中世には、足利尊氏に寺領を安堵され、ほぼ同時に大阪南部の和泉国信達庄の寄進をうけ、以後根来寺の勢力は泉南地方への進出が見られる。

15世紀後半以降、紀伊でも近隣諸国の影響を受けて中小の寺院勢力・地方土豪層が互いに抗争を展開した。その代表的な事例は高野山金剛峯寺・根来寺・粉河寺・太田党・湯川氏などの諸勢力であり、これらの勢力は互いに敵味方となる拮抗を繰り返し、時に戦国大名と相対する立場にあった。こうした中で、根来寺は紀伊国北部・和泉国南部の土豪層や地侍層と結び付き、宗教集団であると同時に武装する僧兵集団としても勢力を伸長し、戦国時代には、伝来後いち早く鉄砲に着目し、寺院領主として守護大名や戦国大名に比肩しうる勢力を持つに至っている。

戦国時代末期となると行人方の武力発展に伴い、和泉地域への進出と他勢力との対抗が目立って増加してくる。まさに、ここに僧兵集団と異名を放つ根来寺の行人方の姿が浮き彫りにされてくる。根来寺の壊滅は、根来寺総体として捉えるわけにはいかない。学徒・行人の権力構造の内部分裂と、執拗なまでの外部との締結の変遷により根来寺は自ら崩壊の一因を導く結果となったであろうと推測されるのである。

そして、中世後半の最盛期には坊院の数2500から3500、八千人から一万人を擁したといわれる根来寺は、天正十三年（1585）羽柴（豊臣）秀吉の来襲するところとなり、大部分が炎上し焼土と化してしまったのである。地方の小勢力の因果であろうか、そして現在、根来寺は数々の地中の発掘調査によって新たな事実を垣間見ることができるようになってきている。

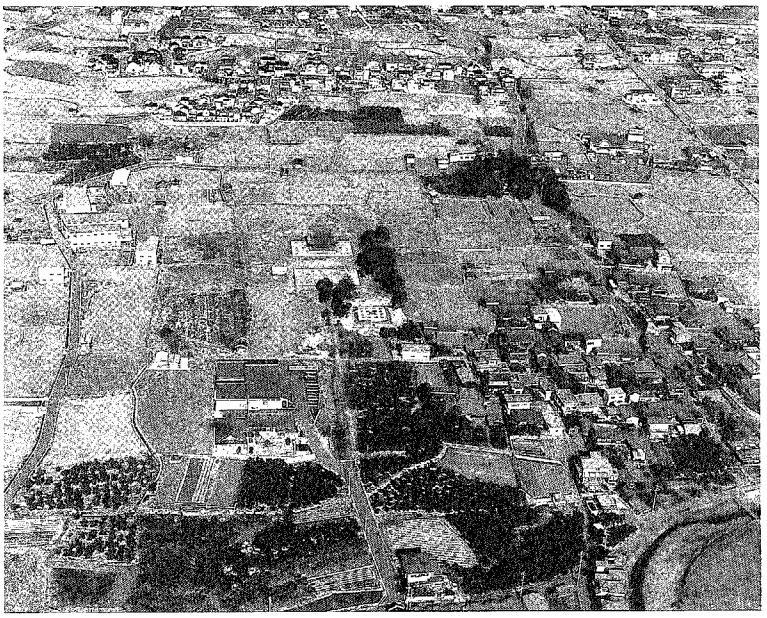
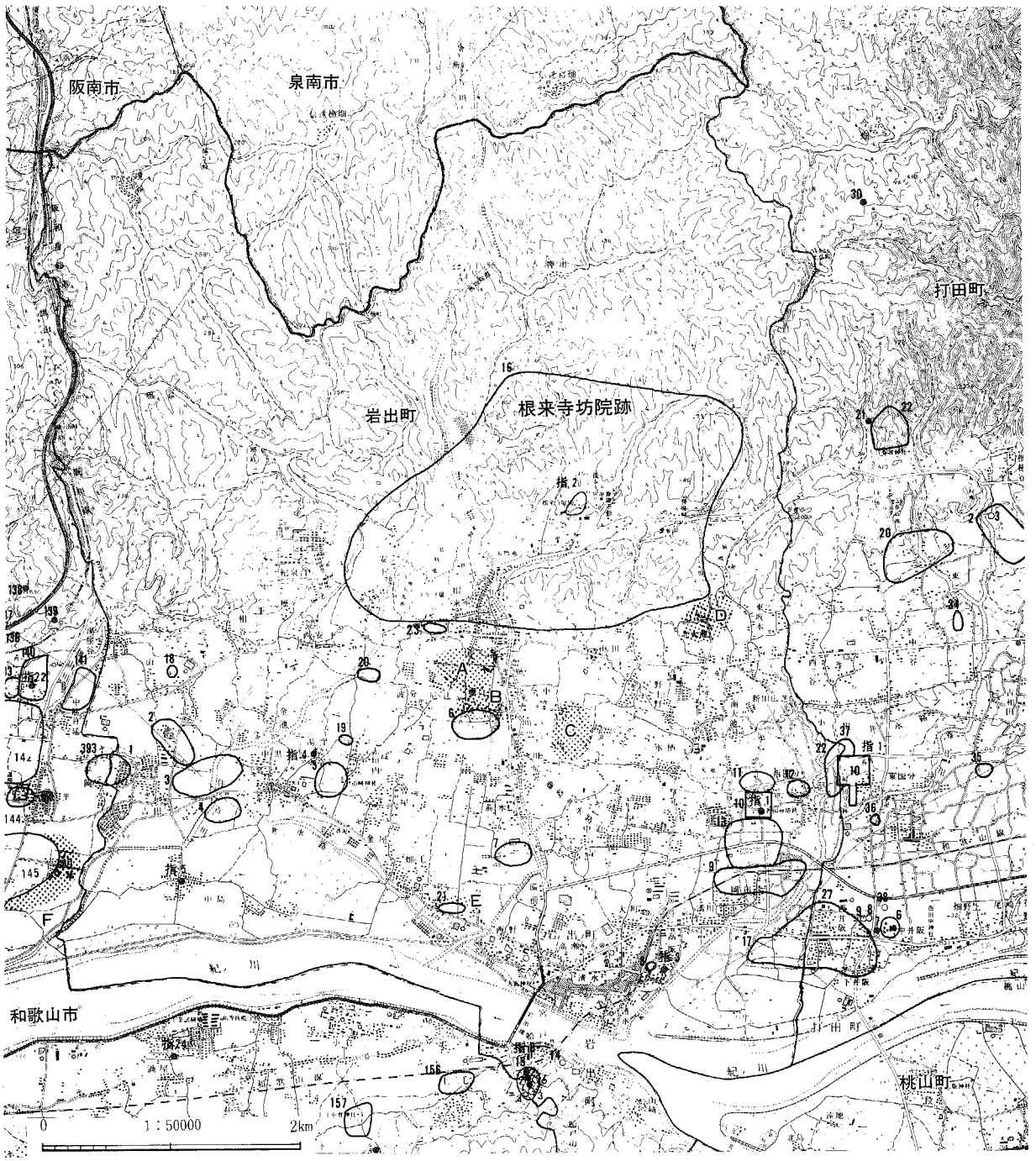


写真２　紀伊国分寺跡航空写真（南上空から　1995年）



第3図　根来寺坊院跡の範囲と周辺遺跡　　遺物採集範囲

（『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』和歌山県教育委員会　1989年発行）

岩出町

1 吉田遺跡
2 山一遺跡
3 中黒I遺跡
4 中黒II遺跡
5 山崎遺跡
6 荒田遺跡
7 荊本遺跡
8 高塚遺跡
9 岡田遺跡
10 西国分廃寺
11 西国分I遺跡
12 土器田遺跡
13 西国分II遺跡
14 箱山古墳
15 船戸古墳群
16 根来寺坊院跡
17 岡田II遺跡
18 山遺跡
19 赤垣内遺跡
20 波分遺跡
21 畑毛遺跡
22 東国分II遺跡
23 根来遺跡

打田町

2 枇杷谷遺跡
3 枇杷谷古墳
6 三味塚古墳群
7 八幡塚古墳
8 じょう穴古墳
9 無名塚古墳
10 紀伊国分寺跡
20 東三谷遺跡
21 不動寺谷遺跡
22 春日山城跡
27 岡田II遺跡
34 池田遺跡
35 古和田遺跡
36 東国分I遺跡
37 東国分II遺跡

和歌山市

136～139 山口古墳群
140 山口廃寺跡
141 中筋日延遺跡
142 山口遺跡
144 里遺跡
145 川辺遺跡
156 上三毛遺跡
157 下三毛遺跡
380 山口御殿跡
393 吉田遺跡

根来寺坊院跡に係る埋蔵文化財の発掘調査が開始されたのは、和歌山県農林部が進める広域営農団地農道（大規模農道）の建設が計画されたことに始まる。昭和51年度（1976）に那賀工区の施工が開始され、これに伴って、根来寺坊院跡の緊急発掘調査と根来地区の基本調査が実施された。また、根来寺坊院跡山内の埋蔵文化財の調査が昭和52年度（1977）から本格的に開始される運びとなった。その調査成果は『根来寺坊院跡発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（和歌山県教育委員会1978・1979・1980年発行）に概要が報告されている。同時に、根来寺坊院跡の重要性が鑑みられ、「根来寺を守る会」などの協力によってこの施工ルートの建設は一時中断され、昭和55年度（1980）より保存資料作成およびルート変更のための資料を得るための10箇年計画に伴って調査が継続されることとなった。その後、重要遺跡の内容把握のため、新たに平成２年度（1990）から５箇年計画で調査が継続された。

写真３　根来寺坊院跡山内の調査（1989年）

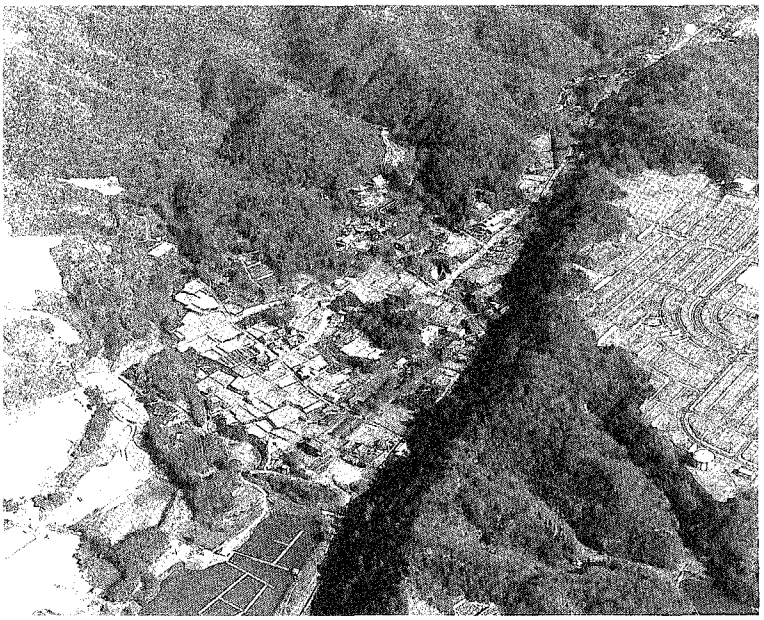


写真４　根来寺坊院跡の中心部（南西上空から　1995年）

また、大規模農道に係る調査が根来寺坊院跡の山内を主としたものであるのに対して、昭和55年度より紀ノ川用水や町道整備事業に伴い西部地区（県道泉佐野岩出線より西側地区）の調査が開始されている。西部地区では室町時代中期から江戸時代にいたる町屋の区画や建物跡などが発見され、多くの遺物が出土している。

このような根来寺坊院跡の調査経過を経て、これまでの調査の主体が和歌山県教育委員会や（社）和歌山県文化財研究会・（財）和歌山県文化財センターであったのが、現在では調査の主体が岩出町教育委員会となり進められている。県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う調査に関しては、さらに、残りの３工区の内、森工区（県道粉河・加太線～農面道路間）についても埋蔵文化財の所在することが明らかとなったため、平成８年度（1996）に尼ケ辻遺跡、荒田遺跡第１次・第２次調査が実施され、引き続き平成９年度（1997）に第３次・第４次調査が予定されている。

第Ⅲ章　調査の範囲・方法と概要

第１節　範囲確認調査

範囲確認調査は、順次、用地交渉の済んだ部分から行ったため統一性を欠くが、道路建設予定地にある大半の田畑でトレンチによる調査を行った。都合、38箇所のトレンチを設定することができた。

ここでは、西部地区（旧県道泉佐野岩出線より西側地区）での既往の調査を含めた記述を行う。

１　既往の調査（第４・６図）

歴史的環境で記述したように、大規模農道に係る調査が根来寺坊院跡の山内を主としたものであるのに対して、西部地区では昭和55年度（1980）より紀ノ川用水整備事業（Ｂ～Ｅ地点）や町道整備事業（Ｇ・Ｋ・Ｍ地点）・宅地開発（Ｈ～Ｊ・Ｌ地点）に伴い調査が開始されている。

これらの西部地区の調査の内、Ｃ地点では室町時代中期から江戸時代にいたる町屋の小区画の屋敷地や建物跡などが発見され、14世紀末～15世紀初頭以降の多くの遺物が出土している。その一部は、漆器製作の生産遺構に比定される向きもある。Ｊ地点では、建物遺構の内容は不明確ではあるが、多量の鍛冶滓・鞴の羽口・坩堝などが出土しており、鍛冶屋が存在した可能性が指摘されている。また、Ｋ～Ｍ地点では、今回の報告の主となっている城砦関連遺構としての堀跡が検出されている。

２　第１次範囲確認調査：平成３年度（第４・５図、写真５）

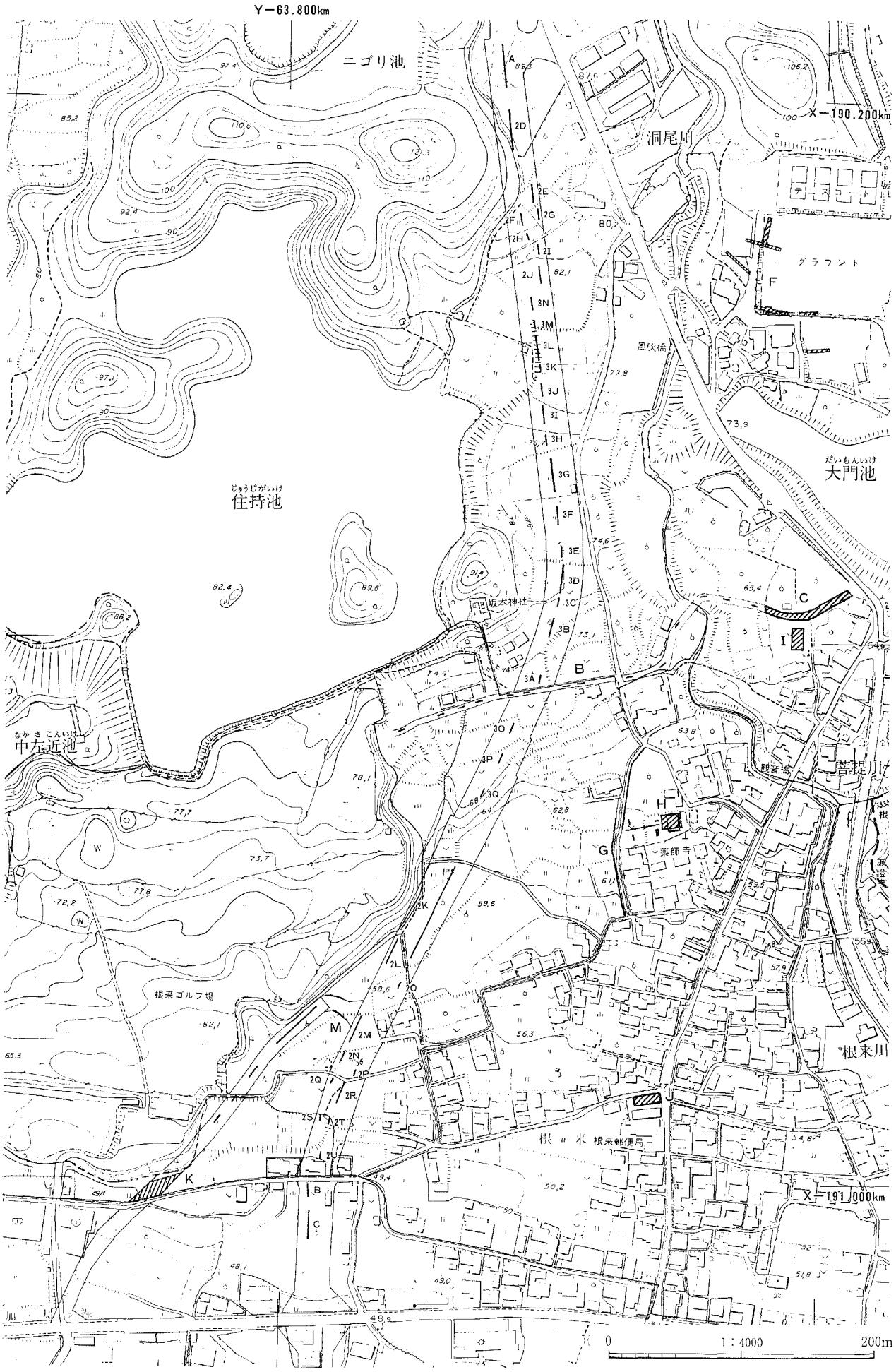
調査地点は根来寺の西方に位置し、和泉山脈の山麓部にあたる地点（Ａトレンチ＝本調査対象外）と、南に約１㎞下った県道粉河加太線に近い地点（Ｂ・Ｃトレンチ＝本調査第ＩＡ・Ｂ区）とに分かれる。調査は、幅員２ｍのトレンチを計３箇所（160㎡）設定して行なっている。

この確認調査において、明確な遺構が確認されたのはＢトレンチのみである。また、Ｂトレンチにおいて最も多くの遺物が出土した。

遺物は奈良時代の須恵器を主体として、鎌倉時代から江戸時代に至るものである。Ｃトレンチにおいても若干の遺物が出土するが、明確な遺構は検出されなかった。

この時点では、第ＩＢ区の遺物は第ＩＡ区からの流れ込みの可能性の高いもので、第ＩＢ区には遺構が存在しないものと考えられていた。

写真５　第１次範囲確認調査の状況（Ｃトレンチ北から）


Y−63.800km
ニゴリ池
X−190.200km
洞尾川
テニスコート
グラウンド
風吹橋
住持池
大門池
坂木神社
中左近池
観音橋
菩提川
裏師寺
根来ゴルフ場
根来川
根来郵便局
X−191.000km
0
1：4000
200m

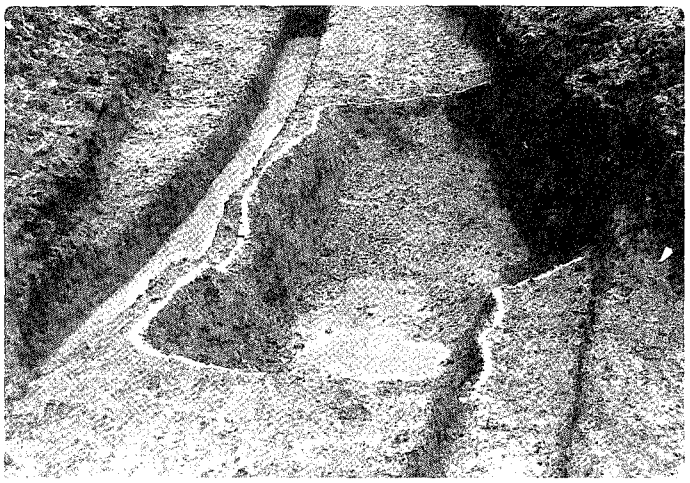
▨ ―― 既往の調査地

3　第２次範囲確認調査：平成４年度（第４・５図、写真６）

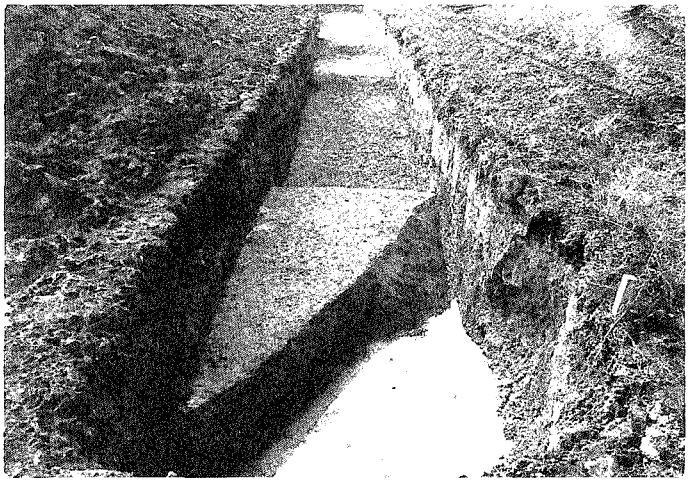
調査地点は第１次確認調査に続くもので、和泉山脈の山麓部にあたる地域（２Ｄ～２Ｊトレンチ＝本調査対象外）と、南に約 500m下った県道粉河加太線に近い地域（２Ｋ～２Ｕトレンチ＝第II区～第IV区）とに分かれている。調査は、幅員２mのトレンチを計18箇所（583m²）設定して行なった。

第１次確認調査同様、山麓部に近い地域ではほとんど遺構・遺物が認められないが、２Ｄ・２Ｊトレンチにおいて若干のサヌカイト剥片の出土が確認されており、気掛かりな存在となっていた。

県道粉河加太線に近い地域に設定した２Ｋ～２Ｕトレンチの範囲においては、全ての地区で遺構・遺物を検出した。遺物は奈良時代の須恵器を主体とし、これに中世や若干の近世の遺物が混在する出土状況を示す。狭い範囲の確認調査においては、遺構の時期判断が極めて困難であるが、奈良時代・中近世の遺構が同一面で存在するものと考えられた。第１次確認調査でのこの付近の状況を考え合わせると奈良時代の厚い包含層を削平する形で中世以降の開発が行なわれたと考えられる。



Ｋトレンチ SK09（南から）



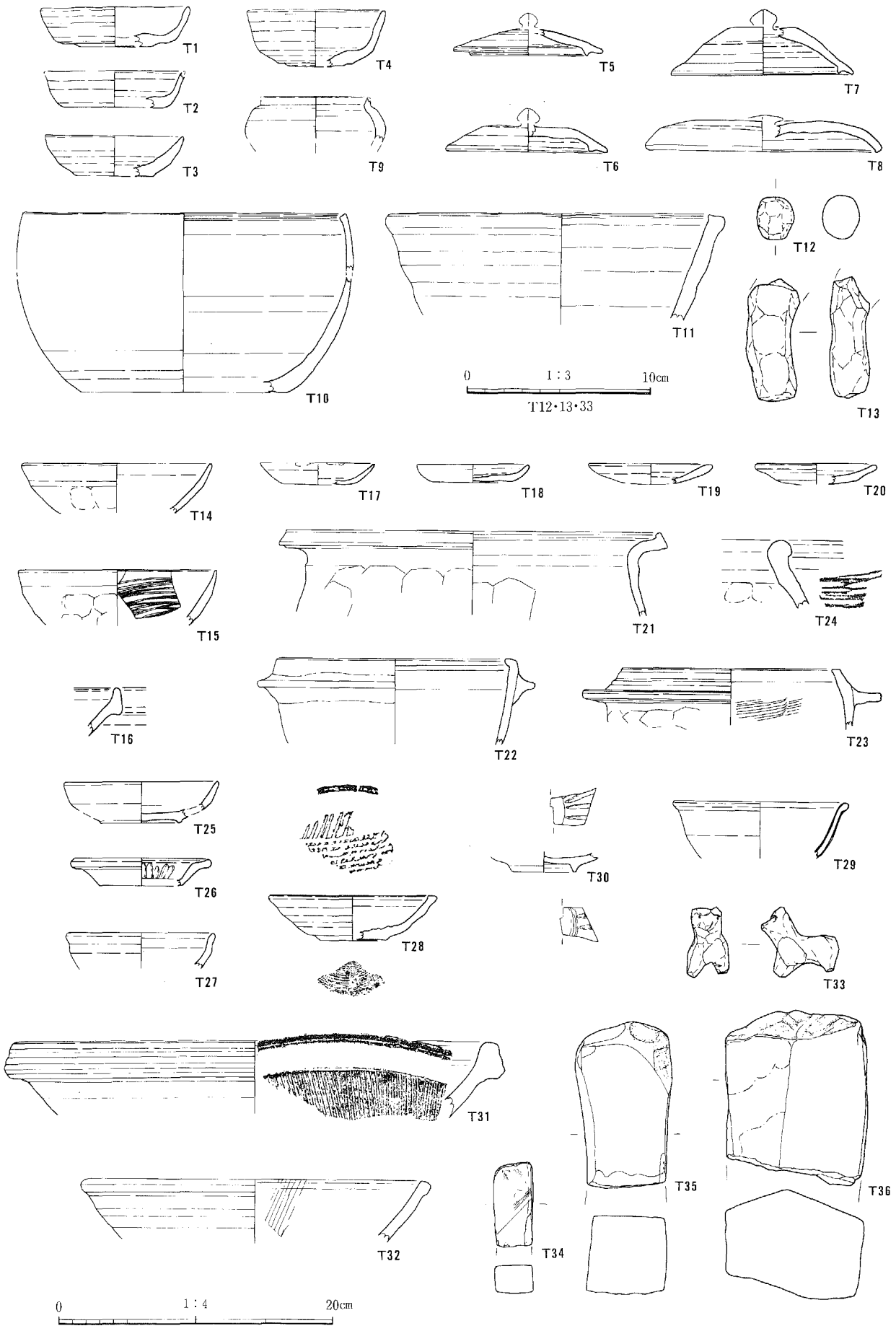
Ｌトレンチ全景（北から）手前が堀SH47

写真６　第２次範囲確認調査の状況

4　第３次範囲確認調査：平成５年度（第４図）

調査地点は第１・２次確認調査に続くもので、住持池の東側にあたる地域（３Ａ～３Ｑトレンチ＝本調査対象外）である。調査は、幅員２mのトレンチを計17箇所（480m²）設定して行なっている。この確認調査では、僅かな近世遺構・遺物が認められるものの、それ以前の遺構は全く存在しておらず、開墾等によって削平を受けたものと考えられた。

後日、道路工事の削平時に３Ｊ～３Ｎトレンチ付近で、サヌカイト剥片や土器片を採集することができたり、３Ｑトレンチの延長上の第IV区Ｊ段において良好な遺物包含層を確認している。また、坂本神社南側の３Ｏ・３Ｐトレンチの田畑においてまとまった量の遺物を表面採集している。このように確認調査において遺構・遺物の確認できなかった部分が多分に存在するようである。このことから全面調査の対象にならなかった範囲は、一部の範囲において遺構・遺物の希薄な部分も認められるが、総体として根来寺坊院跡の周知の遺跡の一連として考えて差し支えのないものと考えられる。



第５図　範囲確認調査の出土遺物実測図

第２節　本調査の範囲と概要（写真７、第６図）

本調査の総面積は、約11,500㎡を対象として、実質10,250㎡について調査を行っている。調査地の現状地形は、水田・宅地で30段の段差から成り、調査地の北と南で約20mの高低差が存在する。

１　第Ⅰ区（第１次調査地区：平成５年度）

調査面積は2,605㎡で、遺構の検出面は一面である。遺構は、奈良時代に埋まった自然流路、中近世以降の土坑・溝が中心となり、多くは所属時期や性格を明確にできない遺構である。

遺物は遺構からの出土が少なく、大半が遺物包含層から出土している。

２　第Ⅱ区（第３次調査地区：平成６年度、第４次調査南側地区：平成７年度）

調査面積は2,374㎡で、遺構の検出面は二面である。遺構は、奈良時代から室町時代にかけて改変された谷状地形、鎌倉時代の柱穴群・井戸・溝、旧淡路街道に沿う室町時代の堀・土橋などが中心となる。谷状地形の上部では、江戸時代に埋められた室町時代末の池状遺構を検出した。これらの内、室町時代の堀は、北側の丘陵と従来調査されてきた中世根来寺の町屋をも取り囲む外堀と推定される。

遺物は各時代の遺構・遺物包含層から多量に出土している。大半は、古墳時代末～奈良時代の須恵器と室町時代後期から江戸時代前期の土器類で占められる。鎌倉時代の井戸や室町時代の堀からは、鍛冶に伴う遺物、木製品・獣骨なども出土している。

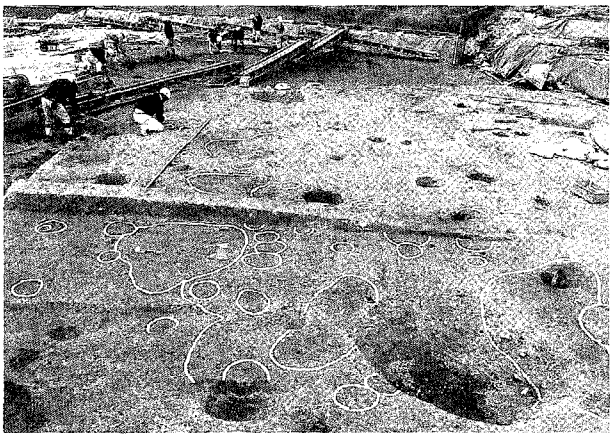
３　第Ⅲ区（第４次調査北側地区：平成７年度）

調査面積は2,240㎡で、遺構の検出面は二面である。遺構は、縄文時代の土坑、鎌倉時代から室町時代の柱穴群・井戸・溝・土坑・土坑墓、西側の丘陵裾に沿う室町時代の堀・土橋などが中心となる。

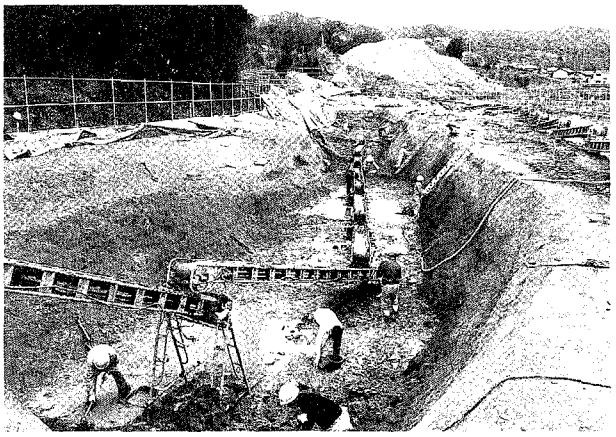
遺物の大半は、鎌倉時代後期から室町時代の土器類で占められる。室町時代の井戸や遺物包含層からは、本来の遺構の時期の遺物に混じって、県内で２例目の陶棺の破片が出土している。また、中世遺構のベース層から旧石器時代に属する細石刃などの遺物も出土している。

４　第Ⅳ区（第２次調査地区：平成５年度）

調査面積は3,030㎡で、遺構の検出面は一面である。遺構は、鎌倉時代の溝、室町時代の堀・土橋が中心となり、江戸時代の溝・水溜め・土坑・田畑の鋤溝を明らかにしている。室町時代の堀は、現状地形からも西側にある丘陵の裾に

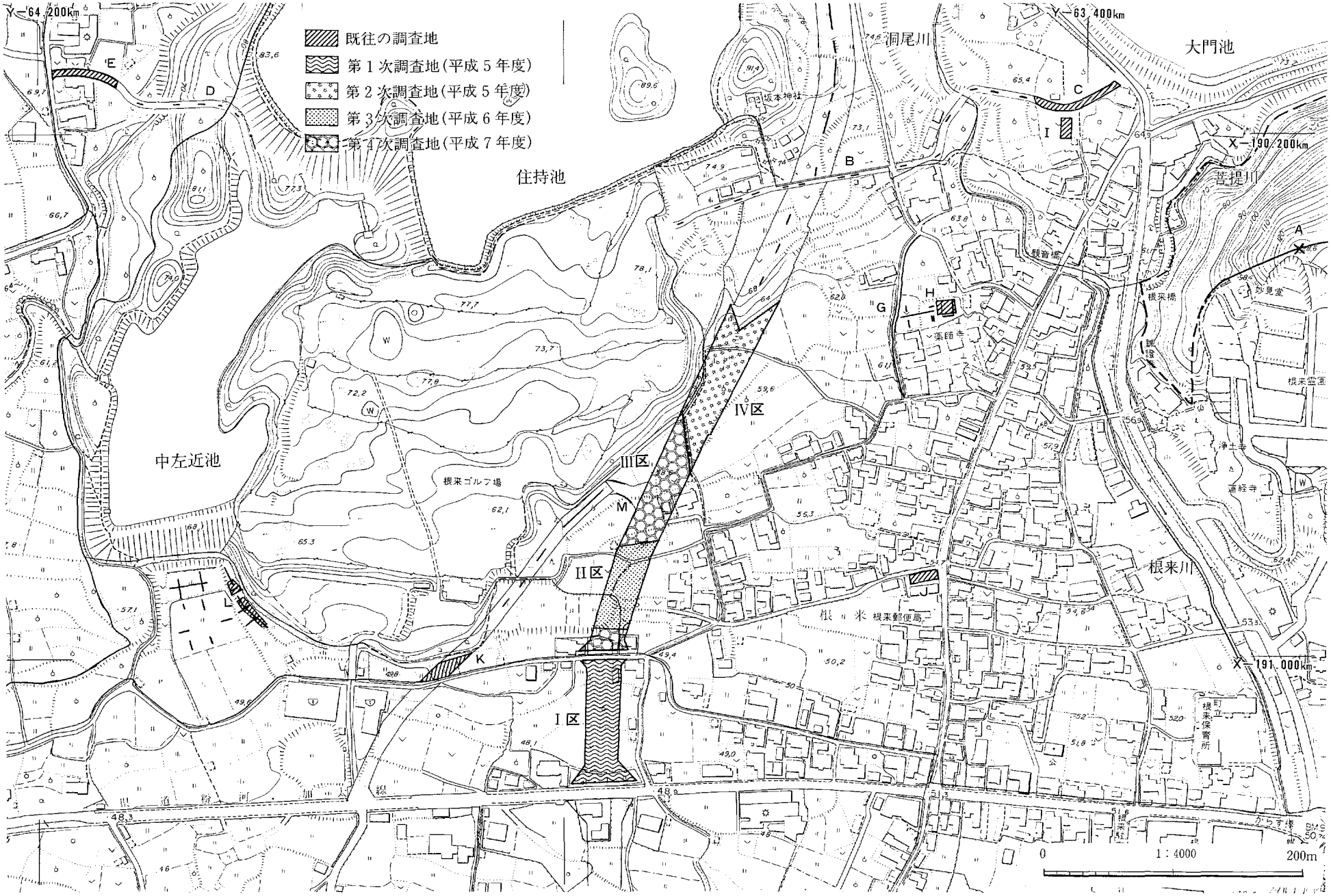


第Ⅲ区　L段遺構検出状況（東北東から）



第Ⅳ区　堀SH１掘削状況（南々西から）

写真７　調査状況



第6図　調査地区の位置図

(1981年　岩出町発行に加筆)

沿って廻ることが確認されている。

遺物の大半は、室町時代の石造遺物・瓦で占められ、次いで土器類・陶磁器・金属製品・木製品などが少量出土している。

第３節　発掘調査の方法

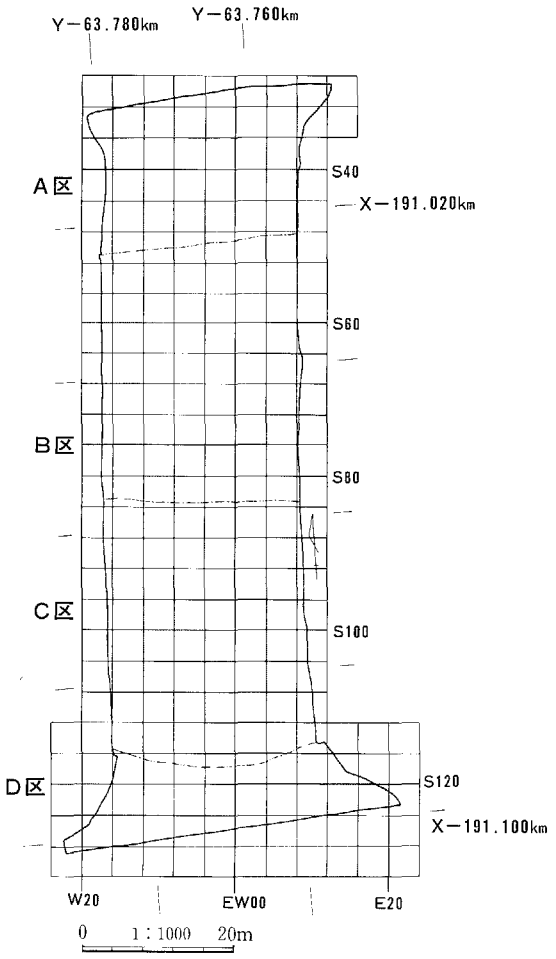
第Ⅰ区（第７図）

第Ⅰ区の区割りは、第Ⅰ区の北側に任意の基準点ＥＷ00ＮＳ00を設定し、国土座標に対してＮ４°30′Ｅに偏した基準線から割り付けている。地点名称は、基準点より東はＥ、西はＷ、南はＳを冠し、これに基準点からのｍ距離で表示した。調査地区に設定した方４ｍの小区画名は、各々の北東隅の距離をもって呼称することにした。

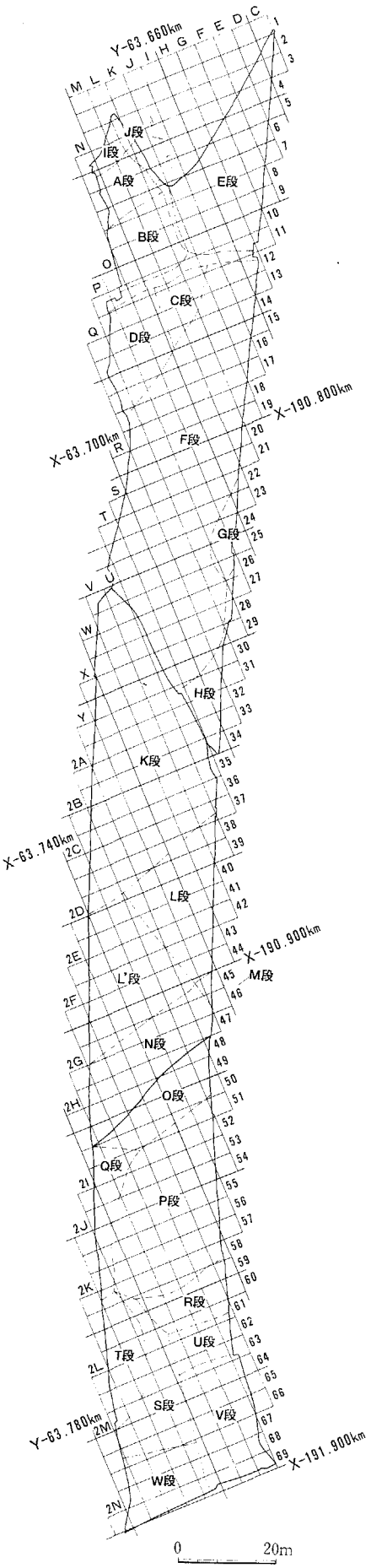
中地区名は、現状地形の田畑の区画に合わせてＡ～Ｄ区の呼称表示を行なっている。

第Ⅱ区～第Ⅳ区（第８図）

第Ⅱ区～第Ⅳ区の区割りは、国土座標に合わせて割り付けている。小区画割は、第Ⅳ区の北端から、Ｘ軸に対してＡ～Ｙ・２Ａ～２Ｎ、Ｙ軸に対して１～69の記号を与え、４ｍ方眼に区切っている。調査地区に設定した方４ｍの小区画名は、各々の組合せによって呼称することにした。



第７図　第Ⅰ区の地区割と遺物取上げ区画図



第８図　第Ⅱ～Ⅳ区の地区割と遺物取上げ区画図

中地区名は、現状地形の田畑の区画に合わせてＡ～Ｗ段の呼称表示を行なっている。

第４節　出土遺物整理（写真８）

調査で出土した遺物は、応急的な整理のみであったため、調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行うと共に、遺構図面・遺構写真などの調査資料の整理を行い資料登録台帳を作成した。

調査後の出土遺物は、通常の遺物収納コンテナにして約900箱である。出土遺物の整理は全遺物を対象に、台帳登録・遺物洗浄・土壌サンプルの洗浄（土嚢袋406袋）・注記・破片点数の集計・接合作業を行なった。また、主要遺物のみを対象に、石膏復元・実測・実測遺物台帳登録・墨拓本・実測図製図・製図レイアウト・遺物実測図の整理・遺物写真撮影・遺物写真の整理・遺物実測図カード作成・石造遺物各部位の計測作業を行なった。

遺構図面の整理は、台帳登録・報告書用図面の作図・空撮図化図の校正・図面製図・製図レイアウト作業を行なった。

遺構・遺物撮影写真の整理は全写真を対象に、アルバム収納・記録の記載・登録番号の記載・写真アルバム収納台帳（概要）作成作業を行なった。

資料の登録台帳は、発掘調査基礎資料一覧・出土遺物登録台帳・実測遺物登録台帳・報告書用遺物コンテナ収納状況台帳・発掘調査遺構図面登録台帳・写真アルバム収納台帳（概要）・保存処理遺物一覧（概要）・保存処理遺物登録台帳・拓本一覧（概要）・石造遺物計測一覧などを作成した。

遺物整理・報告書作成に伴う諸作業について、主に下記の整理補助員・整理作業員が担当した。

整理補助員：遺構実測図作図・製図（鈴木加代子）、遺物実測・製図（西畑美恵子、玉井朱美、谷口敦子、森川真喜子、山本洋子）、整理作業員：図面レイアウト（岩崎頼子、福田紀美）、写真整理・写真図版（井上正美、高橋麻紀、谷口悠紀代）、遺物洗浄・注記・接合・破片点数（池田末子、高橋和子、西本満智子）、石膏復元（北川啓子）、遺物カード（高岸佐久子、山本薫）、出土遺物破片点数集計（藤原紀美）、石造遺物計測（岩崎頼子、楠部明子、福田紀美）

石造遺物の計測作業

石造遺物の収納作業

写真８　出土遺物整理の状況

出土遺物の破片点数（表１）

出土遺物の破片点数の数量化は、土器類とその他の遺物に分けて作業を進めている。土器の分類は、表１に示したとおりである。その他の遺物には、瓦、陶棺・鞴の羽口・円盤状土製品・各種土製品・坩堝・土錘、木製品、金属製品・鍛治滓、石製品などがあり、土器類とは別に数量化している。

土器の種類・器種は、矛盾のない程度に簡素化している。また、基準とした時代の年代観は、凡その西暦年で表すと、古墳時代末～奈良時代は600～800年頃、平安時代前期・中期は800～1050年頃、平安時代後期～鎌倉時代は1050～1400年頃、室町時代は1400年頃～根来寺滅亡の1585年、江戸時代は1585年以後としている。これらの年代観は、あくまで目安であることを前提としている。

縄文・弥生時代の石器・剥片は、数量を示しただけで、比率は除外している。

一部、15世紀初頭に入る東播系の須恵器（質）椀・捏鉢は、鎌倉時代の中で数量化した。

室町時代の中で数量化した瓦器（質）製品には、鎌倉時代に遡るものがあるかもしれない。

漳州窯系の染付は、江戸時代の中国製磁器・染付として数量化している。

本来、室町時代と江戸時代の狭間にある安土・桃山時代の遺物群や江戸時代前期、中期の遺物群を区別するべきであるが、なし得ていない。

なお、紙面の都合上、主要な遺構・遺物包含層についてのみ数量を掲載している。

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器			
	石器・石製品			
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀		
		高坏		
		甕・土釜		
		堝		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB		
		蓋		
		鉢・捏鉢		
		壺		
		甕・堝		
		甑		
		甑		
		高坏		
		横瓶		
		平瓶		
		竈		
小計				
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀		
		甕・土釜		
		竈		
	黒色土器	坏・皿		
		椀		
	須恵器			
	緑釉			
	灰釉			
小計				
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿		
		捏鉢		
		土釜・甕		
		堝		
	瓦器	椀・鉢		
		皿		
		足釜		
	須恵器（質）	椀・捏鉢		
		壺・甕		
	陶器	備前		
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
小計				

時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿		
		椀		
		捏鉢		
		土釜		
		堝		
		蓋		
	瓦器（質）	捏鉢		
		土釜		
		堝		
		甕		
		湯釜		
		火舎・香炉		
	陶器	備前		
		瀬戸美濃		
		常滑		
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付		
	朝鮮			
	その他	堝		
小計				
江戸	土師器（質）	皿		
		土釜・堝		
		焙烙		
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前		
		堺		
		瀬戸美濃		
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器		
		肥前系磁器		
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付		
小計				
合計				

表１　出土遺物破片点数登録表

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　第Ｉ区の検出遺構と出土遺物

第Ｉ区の現況は、４段の田畑からなり、北端と南端の現耕土面の高低差は 1.9mである。全調査区の中でも最も高低差の小さい範囲である。旧地形は、比較的緩やかな北々西－南々東方向の傾斜を想定することができる。Ａ区以外は、遺構・遺物ともに第Ⅱ区以北の調査区と比べて希薄である。これは出土遺物の分布密度（第12図）に顕著な傾向を示している。

１　基本層序（第９図、写真９）

第Ｉ区の基本層序は、高低差の小さい分、４段にわたる田畑においてあまり変化は認められない。一部の客土を省けば、耕土・床土（図１・２層）、旧耕土・旧床土（図３～６層）、遺物包含層（図７層）となり、大別して３段階に分けることができる。調査は、客土、耕土・床土、旧耕土の一部を機械掘削排土し、以下を人力掘削により作業を進めた。旧耕土・旧床土には下部からの遺物が若干認められるが、江戸時代から明治時代の水田と考えられる。

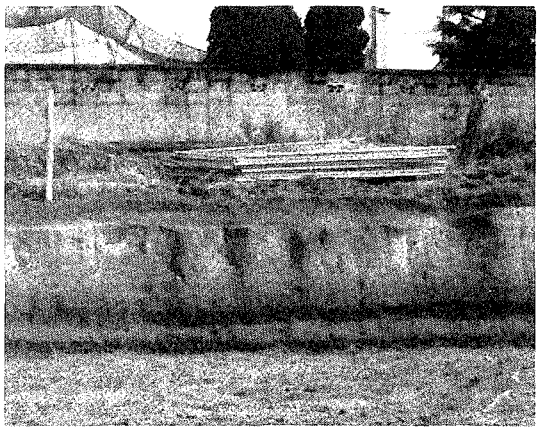
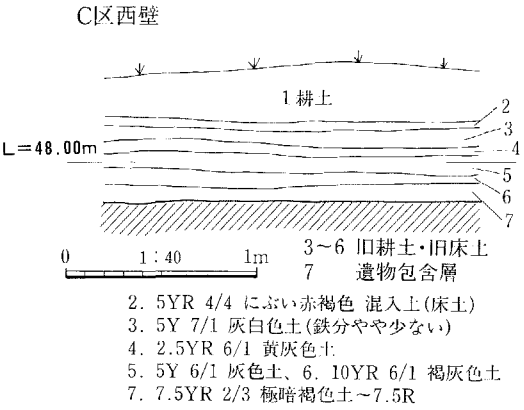


写真９　第Ｉ区自然流路SR222東壁土層（西から）

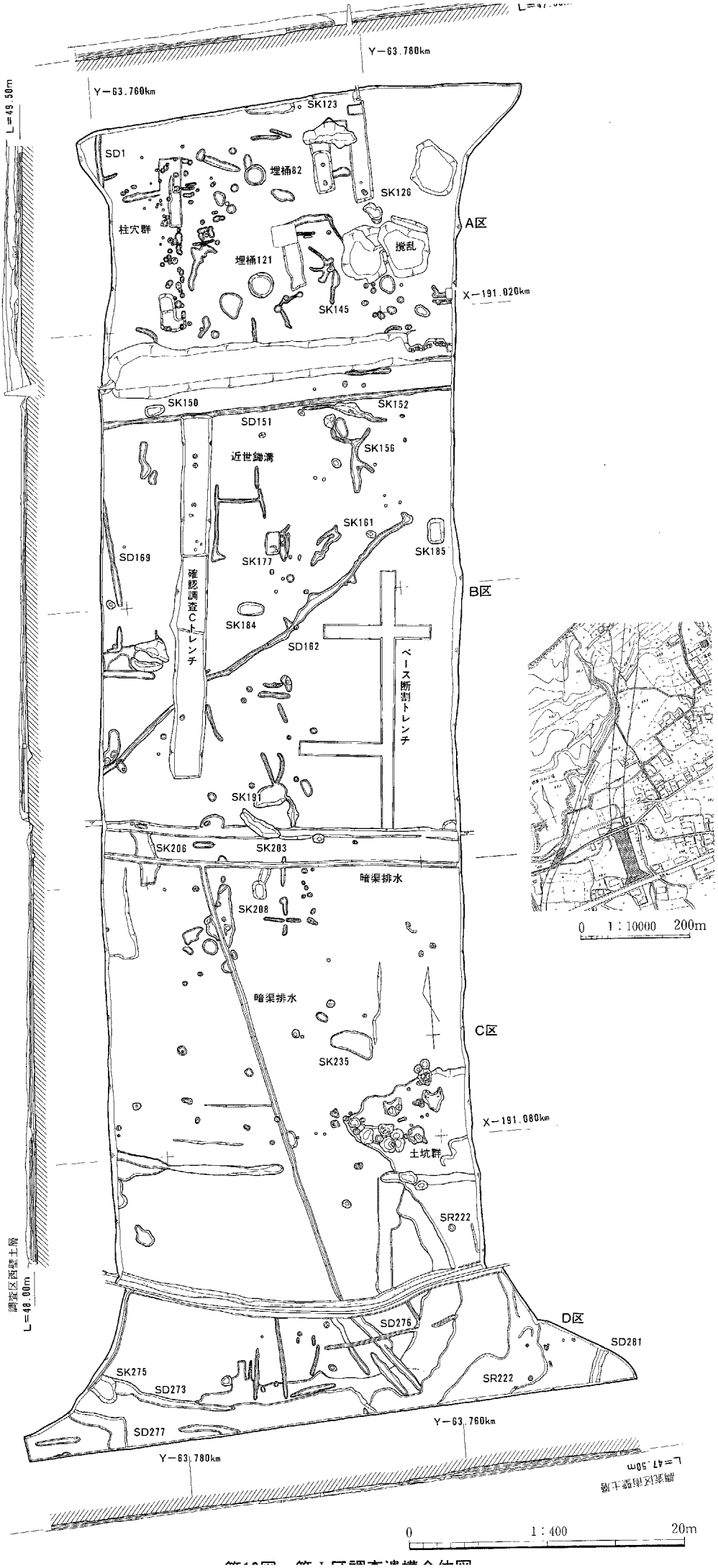


第９図　第Ｉ区の基本層序

２　検出遺構と出土遺物（第10・69図、ＰＬ．５・６）

検出遺構は、北側の第Ⅱ区から第Ⅳ区と異なり、性格の明確な遺構は極僅かである。Ａ区とＤ区の端で中世と考えられる溝、Ｃ・Ｄ区の東端から南端にかけて自然流路と考えられる落ち込みを検出したに留まる。その他、柱穴状のピット群、不整形な土坑群、単独で存在する土坑などは性格を明確にすることのできないものである。

Ａ区柱穴群（ＰＬ．６）　確認調査Ａトレンチを中心とした範囲に、径15～30cm、深さ５～10cm（稀れに深さ20cm）の柱穴状の小穴が集中して存在するが、並びは不規則である。埋土の大半は、7.5R6/1赤灰色土である。遺物は極僅かである。


Y−63.780km
Y−63.760km
L=49.50m
SK123
SD1
埋桶82
SK126
柱穴群
A区
撹乱
埋桶121
X−191.020km
SK145
SK150
SK152
SD151
SK156
近世鋤溝
SK161
SD169
SK177
SK185
確認調査Cトレンチ
B区
SK184
SD162
ベース断割トレンチ
SK191
SK206
SK203
暗渠排水
SK208
暗渠排水
C区
SK235
X−191.080km
土坑群
SR222
調査区西壁土層
L=48.00m
D区
SD276
SD281
SK275
SD273
SR222
SD277
Y−63.760km
Y−63.780km
調査区南壁土層
L=47.50m
0 1:10000 200m
0 1:400 20m

土坑ＳＫ１２３（ＰＬ．６）　Ａ区のＥＷ00Ｓ32に位置し、大形で不整形の土坑である。長軸（東西）3.96m、短軸（南北）1.58m、深さ48cmである。遺物は奈良時代の須恵器１点、鎌倉時代の瓦器１点が出土している。

土坑ＳＫ１８５　Ｂ区のＥ８Ｓ60に位置し、隅円長方形の土坑である。長軸（南北）1.9m、短軸（東西）1.25m、深さ36cmである。遺物は奈良時代の須恵器２点、室町時代の瀬戸美濃３点が出土している。同様の平面形をした土坑ＳＫ177が西に約10m離れて存在する。

土坑ＳＫ１９１　Ｂ区のW14Ｓ76･80に位置し、やや歪な土坑である。長軸（東西）2.6m、短軸（南北）1.4m、深さ42cmである。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ２０６　Ｃ区のW12Ｓ84に位置し、やや不整形な大形の土坑である。長軸（南北）４m、短軸（東西）1.3m、深さ22cmである。遺物は奈良時代の須恵器５点、鎌倉時代の土師器15点、室町時代の陶磁器２点などが出土している。

Ｃ区土坑群（ＰＬ．６）　Ｃ区の東側に位置し、不整形な土坑の集中する範囲がある。長軸１～1.6m、短軸0.7～１m、深さ10～20cmと規模もまとまりがない。中には、拳大の礫の入り込んだ土坑もあるが、ベース面の礫かどうか判然としない。遺物は出土していない。

埋桶８２（ＰＬ．６）　Ａ区の北側中央W14Ｓ32に位置し、直径1.46mの掘形に、直径1.24m、深さ53cmの桶を埋置したものである。

埋桶１２１（第69図）　埋桶82の南約６mのW14Ｓ40に位置し、直径1.76mの掘形に、直径1.5m、深さ45cmの桶を埋置したものである。遺物は、Ａ・Ｂ区に集中する撹乱坑の遺物と類似し、埋桶の廃棄と共に投棄されたものと考えられる。遺物は古墳時代末～奈良時代の須恵器を若干含むものの、江戸時代中期以後の瓦を主体として、瓦質角火鉢(27)、波佐見染付皿(29)などが出土している。

溝ＳＤ１　Ａ区の北西隅W16Ｓ32に位置する溝で、幅34cm、深さ４cm、延長４m分を検出したに留まる。遺物は出土していない。

溝ＳＤ２８１　Ｄ区の南東隅Ｅ20Ｓ120に位置する溝で、幅75cm、深さ14～23cm、延長2.5m分を検出したに留まる。遺物は出土していない。

溝ＳＤ１６２　Ｂ区を北東から南西に斜行する浅い溝で、幅20～55cm、深さ３～７cm、延長29m分を検出した。遺物は出土していない。

自然流路ＳＲ２２２（写真９）　Ｃ区の東壁側に偏った位置からＤ区の南東隅を湾曲して西側に延びる。最も広い部分で幅10m前後、深さ24～51cmあり、褐灰色・黒褐色を呈する堆積層が認められる。黒褐色土層は、第II区や県道粉河加太線を挟んだ南側の尼ケ辻遺跡でも類似した堆積が認められ、低い部分に自然堆積したものと考えられる。遺物は、弥生土器５点、古墳時代末～奈良時代の土師器６点・須恵器28点、鎌倉時代の土師器１点・瓦器３点、室町時代の土師器１点が出土している。

３　遺物包含層と出土遺物（表２・３、第11・12・69図）

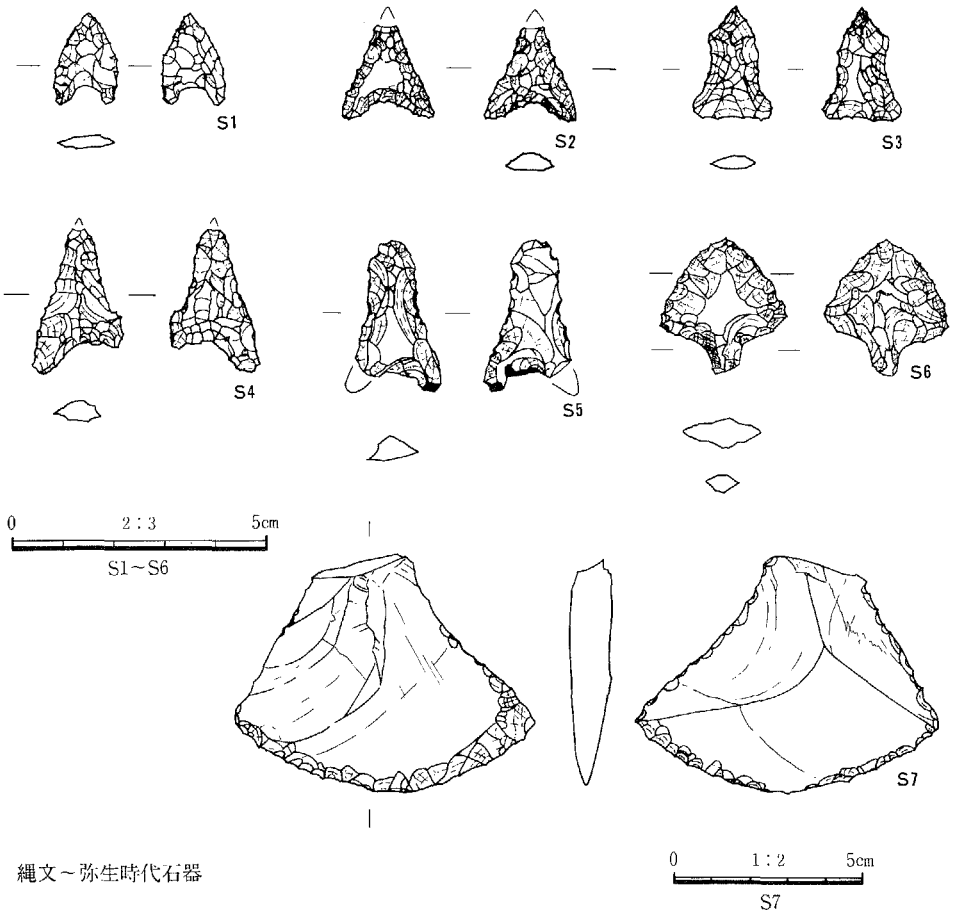
包含層の大半は、人為的な改変の加えられた堆積層と考えられ、一部において撹乱坑の遺物の混じり込む部分も認められる。基本層序の項で、旧耕土・旧床土（図３～６層）、黒褐色土（図７層）とし

た堆積層を掘削したものである。

遺物は、各区において分布密度の違い、時代的な差が認められ（表２・３、第12図）、最も第Ⅱ区に近いＡ区において、比較的多くの遺物が分布する。分布密度図もそれを顕著に表している。時代的には、古墳時代末～奈良時代の須恵器が多くを占め、次いで鎌倉時代の遺物が認められる。

主に7.5ＹＲ2/3極黒褐色土と2.5Ｙ7/6明黄褐色土のベース土が混じり込む堆積層から、縄文・弥生土器24点と共に縄文時代から弥生時代の打製石器12点（Ｓ１～Ｓ７）、サヌカイト剥片48点が出土している。石器・サヌカイト剥片は、Ａ区に集中する傾向が認められる。

遺物は全般に小破片の傾向を示し、他地区にも増して接合率の低さが目立つ。このことは、かなりの遺物が二次的に動かされたものと考えられる。例えば、須恵器塝（第79図 344）では第ＩＡ区Ｗ８Ｓ44



第11図　第Ｉ区包含層出土遺物実測図

	縄文・弥生	奈　良	平安前期～中期	平安後期～鎌倉	室　町	江　戸	計	その他
Ａ　区	13 (36)	10,694	30	2,096	262	76	13,171	46
Ｂ　区	0 (18)	282	5	108	206	4	605	2
Ｃ　区	6 (1)	87	3	100	5	0	201	1
Ｄ　区	5 (5)	579	17	1,222	249	17	2,089	22
計	24 (60)	11,642	55	3,526	722	97	16,066	
その他		2		14	36	20		72

（　）内は、石器・サヌカイト剥片

表２　第Ｉ区中地区毎の包含層出土遺物

包含層と第II区W段２Ｉ・２Ｊ69堀ＳＨ27最上層の破片と24mの距離間で、須恵器甕(第71図74)では第ＩＡ区Ｅ８Ｓ28包含層と第II区Ｐ段２Ｄ54谷状地形第24・26層の破片と70mの距離間で接合する資料などが認められる。その他、陶棺１点(第33図81と同一個体片)、鞴の羽口11点、管状土錘５点、滑石製の有孔円盤(31)、砥石(32・33)などが出土している。

第Ｉ区　Ａ区のみ

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品		2	
弥生	弥生土器・古式土師器		13	0.10
	石器・石製品		34	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	31	0.29
		高坏	2	0.02
		甕・土釜	18	0.17
		鍋	1	0.01
		製塩土器	2	0.02
	黒色土器	椀	1	0.01
	須恵器	皿・坏AB	6,497	60.75
		蓋	1,026	9.59
		鉢・捏鉢	80	0.75
		壺	671	6.27
		甕・鍋	2,317	21.67
		甑		
		鼎		
		高坏	28	0.26
		横瓶	18	0.17
		平瓶		
		竈		
小計			10,694	81.19
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	7	23.33
		甕・土釜	3	10.0
		竈		
	黒色土器	坏・皿	1	3.33
		椀	17	56.67
	須恵器		2	6.67
	緑釉			
	灰釉			
小計			30	0.23
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	782	37.31
		捏鉢		
		土釜・甕	323	15.41
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	933	44.51
		皿	32	1.53
		足釜		
	須恵器(質)	椀・捏鉢	19	0.91
		壺・甕		
	陶器	備前	3	0.14
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁	4	0.19
		白磁		
小計			2,096	15.91

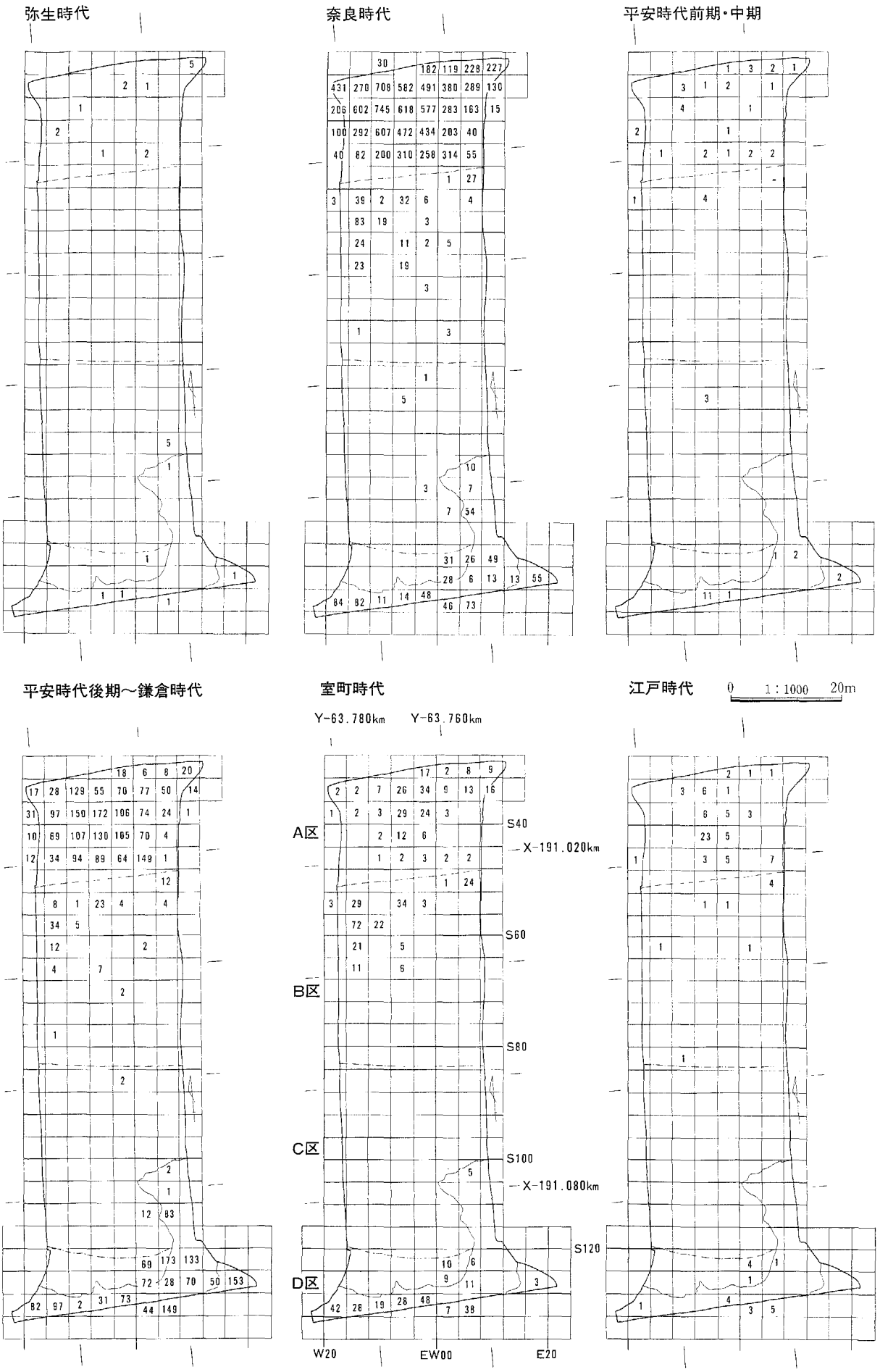
時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	202	77.1
		椀		
		捏鉢	7	2.67
		土釜	8	3.05
		鍋	1	0.38
		蓋		
	瓦器(質)	捏鉢	8	3.05
		土釜	7	2.67
		鍋		
		甕	1	0.38
		湯釜		
		火舎・香炉	1	0.38
	陶器	備前	7	2.67
		瀬戸美濃	7	2.67
		常滑		
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁	9	3.44
		白磁	3	1.15
		染付	1	0.38
	朝鮮			
	その他	鍋		
小計			262	1.99
江戸	土師器(質)	皿	6	7.89
		土釜・鍋		
		焙烙	2	2.63
	瓦質	甕	1	1.32
		火舎・火鉢	1	1.32
	陶磁器	備前	5	6.58
		堺		
		瀬戸美濃	6	7.89
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器	12	15.79
		肥前系磁器	35	46.05
		志野		
		織部		
		京焼系	8	10.53
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付		
小計			76	0.58
合計			13,171	100

第Ｉ区　Ａ～Ｄ区全区

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品		5	
弥生	弥生土器・古式土師器		24	0.15
	石器・石製品		55	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	46	0.40
		高坏	2	0.02
		甕・土釜	18	0.15
		鍋	1	0.01
		製塩土器	2	0.02
	黒色土器	椀	1	0.01
	須恵器	皿・坏AB	7,044	60.51
		蓋	1,099	9.44
		鉢・捏鉢	94	0.81
		壺	736	6.32
		甕・鍋	2,552	21.92
		甑		
		鼎		
		高坏	28	0.24
		横瓶	18	0.15
		平瓶		
		竈	1	0.01
小計			11,642	72.46
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	23	41.82
		甕・土釜	4	7.27
		竈	1	1.82
	黒色土器	坏・皿	1	1.82
		椀	24	43.64
	須恵器		2	3.64
	緑釉			
	灰釉			
小計			55	0.34
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	1,333	37.80
		捏鉢	3	0.09
		土釜・甕	432	12.25
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	1,664	47.19
		皿	45	1.28
		足釜	2	0.06
	須恵器(質)	椀・捏鉢	37	1.05
		壺・甕		
	陶器	備前	4	0.11
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁	5	0.14
		白磁	1	0.03
小計			3,526	21.95

時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	543	75.21
		椀		
		捏鉢	10	1.39
		土釜	37	5.12
		鍋	1	0.14
		蓋		
	瓦器(質)	捏鉢	31	4.29
		土釜	22	3.05
		鍋		
		甕	1	0.14
		湯釜		
		火舎・香炉	1	0.14
	陶器	備前	22	3.05
		瀬戸美濃	19	2.63
		常滑	3	0.42
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁	25	3.46
		白磁	5	0.69
		染付	2	0.28
	朝鮮			
	その他	鍋		
小計			722	4.49
江戸	土師器(質)	皿	7	7.22
		土釜・鍋		
		焙烙	4	4.12
	瓦質	甕	1	1.03
		火舎・火鉢	1	1.03
	陶磁器	備前	8	8.25
		堺		
		瀬戸美濃	7	7.22
		常滑		
		丹波	2	2.06
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器	16	16.49
		肥前系磁器	41	42.27
		志野		
		織部		
		京焼系	9	9.28
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付	1	1.03
小計			97	0.60
合計			16,066	99.99

表３　第Ｉ区包含層出土遺物の構成比率



第12図　第Ⅰ区包含層出土遺物の分布密度

第２節　第II区の検出遺構と出土遺物

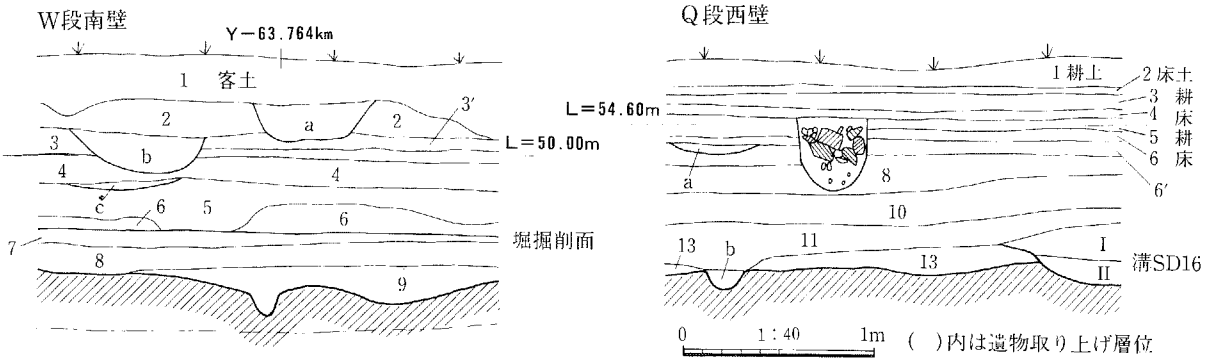
調査の都合により、第II区は大半を第３次調査で、堀の南半を第４次調査に分けて行なっている。第II区の現況は、９段の田畑・宅地からなり、北端と南端の高低差は約５mに及ぶ。特にT段とV・W段間の高低差が著しく、約４mに達している。この著しい高低差については、当初から段丘下に堀の存在を予測していたところである。

１　基本層序（第13図）

第II区の基本層序は、９段にも及ぶ高低差に左右され、Q・T段側とV・W段側ではかなり様相を異にしている。また、P・R・U段の東壁においても異なる状況下にある。比較的共通するQ・T段では、基本的な層序は表土・床土・旧耕土、遺物包含層となる。V・W段では、あまり締りのない堆積土（図７層～図９層）が続き、堀ＳＨ27・ＳＨ29の掘削面（切り込み面）は、図７層面をベースとしている。P段及びR段では、その上部に近世における人為的埋土が厚く堆積し、それらの大半には、拳大から20cm大の円礫が極めて多量含まれているため、ベースの砂礫層にかなりの影響を受けたものとみられる。

谷状地形に重複する範囲

写真10　第II区調査前の状況（南西から）



2～4 旧耕地、5･6 堀SH27埋没時の堆積土（最上層粗砂礫、第2～4層）
7～9 弥生･古墳時代遺物包含層、a～c 近世～近代遺構
2．10YR 5/4 にぶい黄褐色～2.5Y 6/1 黄灰色シルト･細砂
3．2.5Y 6/1 黄灰色～10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト･細砂
3′．3に10YR 4/1 褐灰色シルト ブロック状多量
4．2.5Y 5/1 黄灰色～5/2 暗灰黄色細砂、粗砂少量
5．2.5Y 5/1 黄灰色粗砂･細砂、1～3cm礫中量
6．5Y 5/1 灰色粗砂･細砂、しまりなし
7．10YR 5/1 褐灰色細砂、3～5cm黒褐色粒極多量
8．7.5YR 4/1 褐灰シルト、　〃
9．　〃　細砂･粗砂

3～6 旧耕土、8．遺物包含層（第6層）、10．遺物包含層（第7層）
11･13 遺物包含層（第8層）、a 近世遺構、b 柱穴
2．7.5YR 5/6～5/8 明褐色細砂　3．2.5Y 5/1 黄灰色細砂
4．2.5Y 5/1 黄灰色細砂、5mm明褐色粒中量、5．3と同一
6．4に類似、6′．3と同一
8．7.5YR 4/1 褐灰色細砂、5mm黒褐色粒中量、下半に10が入る
10．10YR 5/2 灰黄褐色細砂
11．10YR 4/2 灰黄褐色細砂、5mm黒褐色粒中量
13．10YR 5/1～4/1 褐灰色微砂･細砂、1～5cm礫多量
ベース 2.5Y 6/3～6/4 にぶい黄色細砂･粗砂、0.5～1cm礫

第13図　第II区の基本層序

2　検出遺構と出土遺物（第15図、ＰＬ．７）

第Ⅱ区では、確認調査成果を受けて、奈良・鎌倉～江戸時代の遺構・遺物の存在を予測していた。調査の結果、奈良時代から室町時代にかけて大規模に改変された谷状地形、旧淡路街道に沿う室町時代の堀・土橋などの存在が明らかになった。出土遺物の全体量の内、半数以上が第Ⅱ区に集中する。

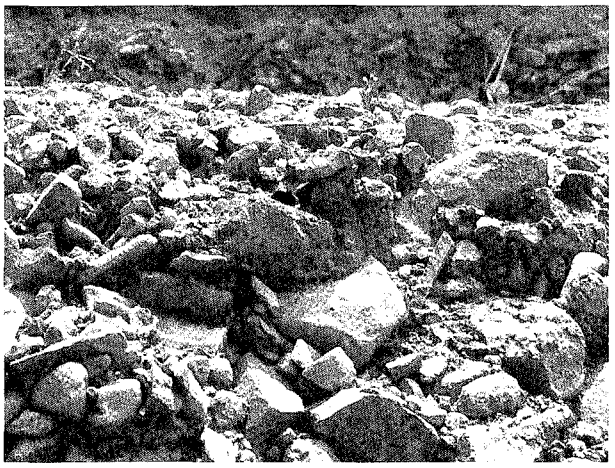


写真11　第Ⅱ区谷状地形礫層の遺物(溝SD12東肩)

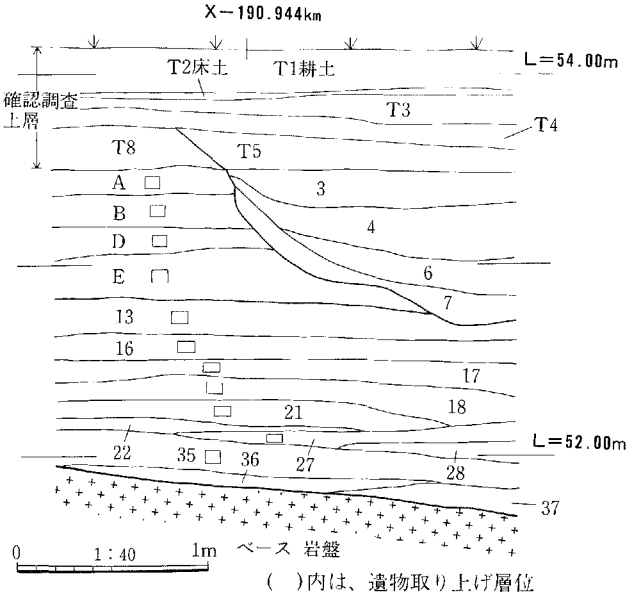
谷状地形（第14・16・29・30・33・70～73図、写真11、表４、ＰＬ．８・９）

第Ⅱ区の東側約半分の面積を占める大規模な遺構である。現状の田畑の区画に沿うＰ・Ｒ・Ｕ段で検出されている。南北延長41m以上、東西幅23.5m以上、深さ約２～2.2mの規模である。土砂の堆積状況、出土遺物から上部の土砂：ＳＷ１（礫を極めて多量に含む層）は江戸時代に人為的に埋められたもの、それ以下は室町時代前期に谷地形を岩盤まで掘削した後に、順次自然堆積したものと考えられる。

東肩部のベースと考えていた砂礫層より、須恵器類、鎌倉時代の瓦器片を採集している。当初、平面検出の時点で不明確なまま掘削しており、谷状地形の埋土を全て掘削し得ていない可能性が強くなった。また、この砂礫層から永楽通宝１点(600)が出土している。

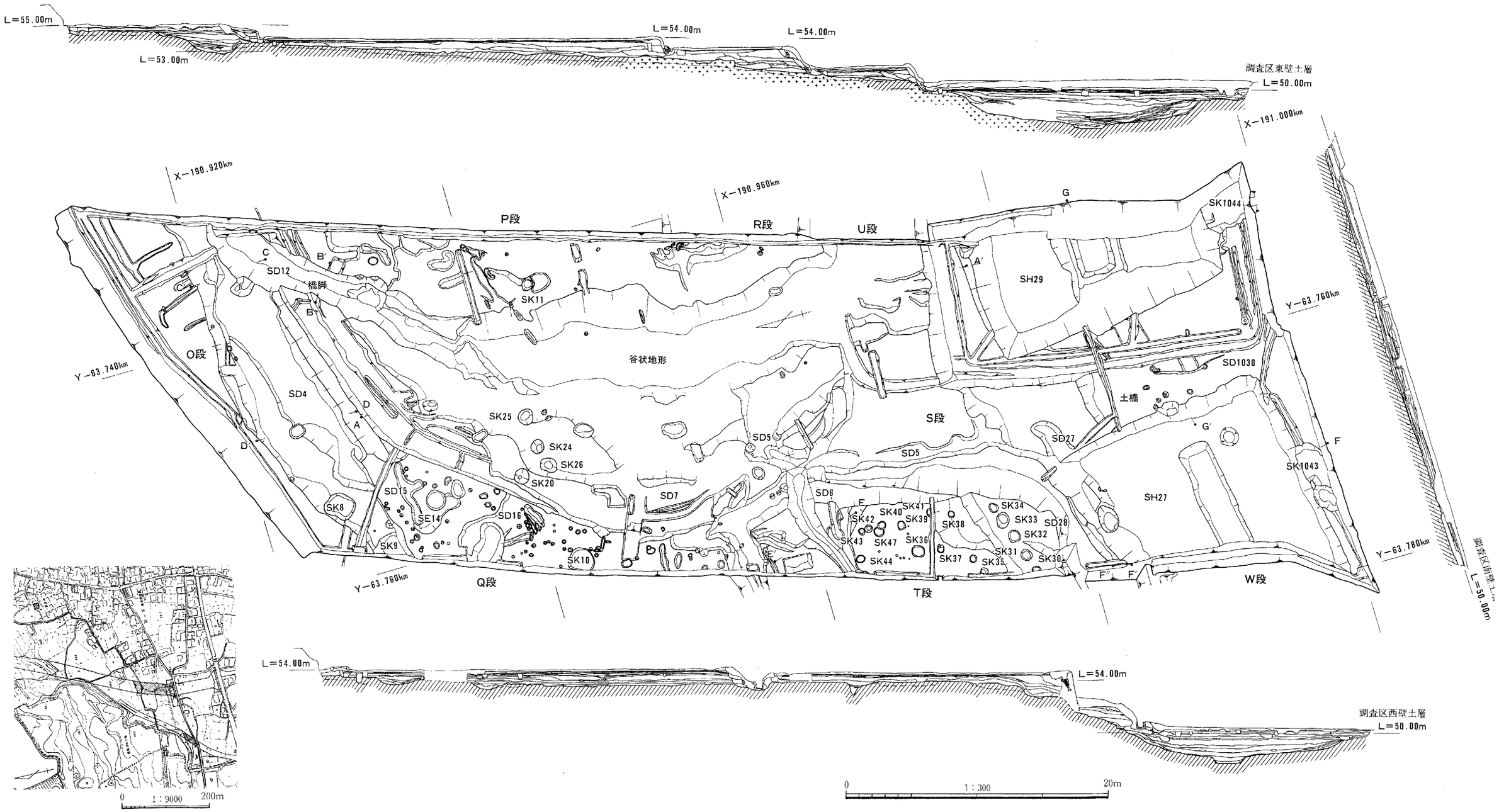
遺物は下層部（第24～26層）から古墳時代末～奈良時代の土師器甕(36)・皿(37)、多量の須恵器(38～83)と共に平安～室町時代のもの(84～92)が828点出土している。須恵器の中には、移動式の竈状の製品(75～79)・陶棺身(80・2003・2004)・陶棺蓋(81)・不明製品(82・83・2005)なども多く認められる。これらの特殊な製品は、焼成の甘い灰白色を呈するものが多い傾向にある。

上層部（第11～13層下の礫層・第22・23層）からも古墳時代～奈良時代の遺物(93～98)が多く出土するが、室町時代の遺物(102～120)が381点と目立つようになる。

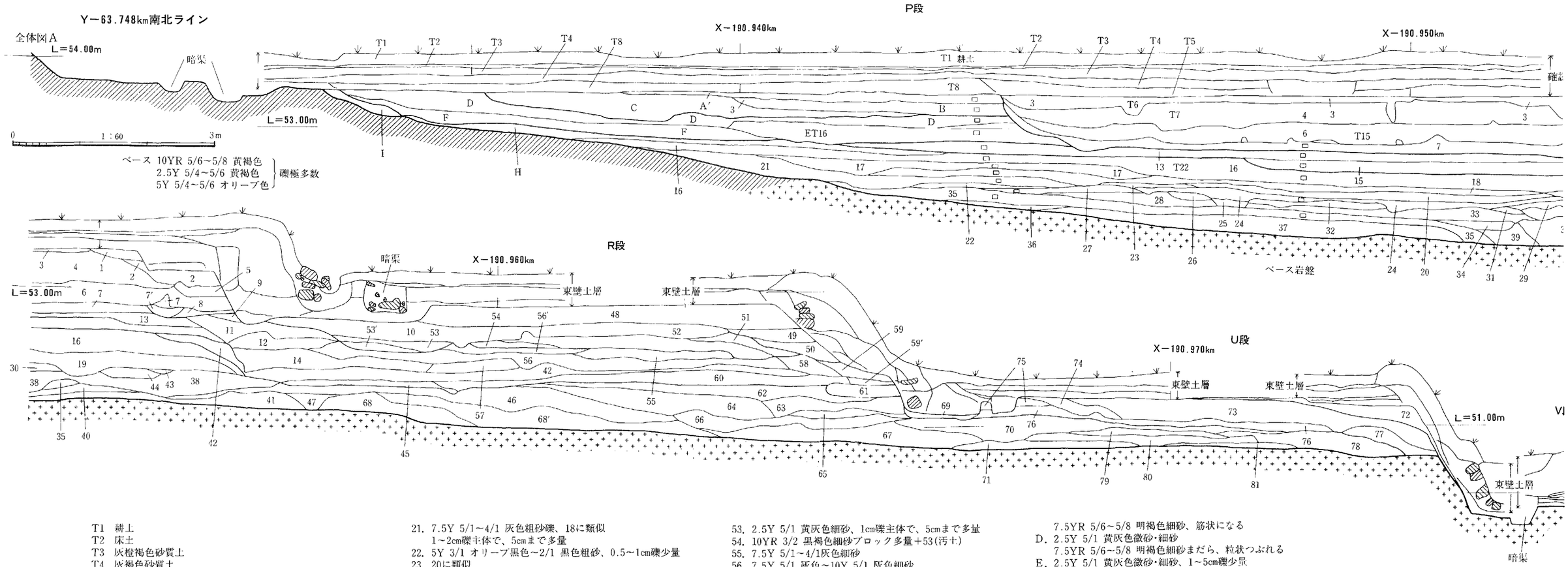


T3・T4 旧耕土
T5・3・4・6・7 池状遺構SW1
　3・4(第5～7層)、6(第15層)、7(第21層)
T8・A・B 池状遺構SW2(第11～13層)
D・E 池状遺構SW3(第14～16層)
13以下 谷状地形堆積土
　13(第22層)、16～18・21(第24層)、22・27・28(第26層)
　35(第25層)、36・37(第26層)
詳細は第16図に記述。

第14図　第Ⅱ区谷状地形の基本層序



第15図　第Ⅱ区調査遺構全体図



T1　耕土
T2　床土
T3　灰橙褐色砂質土
T4　灰褐色砂質土
T5　暗灰褐色砂質土
1．2.5Y 5/1 黄灰色微砂、粗砂少量
　7.5YR 4/4 褐色細砂、0.3cm粒状少量
2．7.5YR 4/4 褐色細砂、10YR 5/8 黄褐色微砂・細砂
　2.5Y 6/1 黄灰色粗砂、2cm礫微量
3(T6)．2.5Y 5/1 黄灰色微砂・シルト、0.3cm褐色粗状多量
　0.2～0.5cm礫少量
4(T7)．7.5YR 5/8 明褐色礫、5cm礫主体、2～7cm礫多量
　10YR 5/2 灰黄褐細砂
5．5Y 4/1 灰色細砂、粗砂少量、10cm礫微量
6(T15)．7.5Y 5/2 灰オリーブ色礫、10cm礫主体、2～15cm礫多量
　7.5Y 5/2 灰オリーブ色細砂・粗砂
7．10YR 4/1 褐灰色微砂・シルトしまり無し、下半1/3は13に類似
7′．5Y 5/1 灰色細砂、7.5Y 4/3 暗オリーブ色礫少量
8．5Y 4/1 灰色細砂
9．7.5Y 5/1 灰色～5Y 4/1 灰色細砂・粗砂
10．2.5Y 6/8 明黄褐色粗砂、0.5～10cm礫多量、4に類似
11．10Y 6/2～5/2 オリーブ灰色細砂・粗砂、5cm礫少量(変色)
　一部に13が入り込む
12．10BG 4/1 暗青灰色細砂、11に礫多量(変色)
13・G・(T22)．10G 4/1 暗緑灰色細砂、微砂(変色)
14．5BG 5/1 青灰色～4/1 暗青灰色細砂、1～2cm礫少量(変色)
　10YR 4/1 褐灰色～3/1 黒褐色細砂ブロック状に入り込む
15．5BG 5/1 青灰色細砂、2.5Y 6/2 灰黄色細砂・微砂(変色)
　0.5cm礫中量、1～5cm礫微量
16．2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂＋5BG 4/1 暗青灰色細砂(変色)
　1～3cm礫主体で、10cmまで中量、北半1～20cm礫多量
17．7.5YR 5/1 灰色細砂・粗砂、礫少量
18．7.5Y 5/1～4/1 灰色粗砂礫、5cm礫多量
　南半 7.5Y 4/3 暗オリーブ色に変色
19．7.5Y～5Y 2/1 黒色細砂・微砂
　1～2cm礫主体で、5cmまで少量
20．10BG 4/1～3/1 暗青灰色細砂・粗砂、0.5～1cm礫少量
　7.5Y 5/2～4/2 灰オリーブ色に変色
21．7.5Y 5/1～4/1 灰色粗砂礫、18に類似
　1～2cm礫主体で、5cmまで多量
22．5Y 3/1 オリーブ黒色～2/1 黒色粗砂、0.5～1cm礫少量
23．20に類似
24．10BG 3/1 暗青灰色～2/1 青黒色細砂・粗砂、1cm礫中量
　7.5Y 3/1 オリーブ黒色に変色
25．28＋24
26．7.5Y 5/2～4/2 灰オリーブ色粗砂礫、1～2cm礫多量(変色)
27．24に類似、5Y 2/1 黒色粗砂＋N 2/0 黒色シルト
　1～3cm礫少量、28に35が入り込む
28．10BG 4/1 暗青灰色粗砂、35が縞状に入り込む
　南半10BG 5/1 青灰色細砂
29．20に類似、7.5Y 5/2～4/2 灰オリーブ色粗砂礫
30．2～3cm礫極多量、15cm礫少量、29が入り込む
31．33に類似、7.5Y 5/2灰オリーブ色細砂・粗砂(変色)
32．26と同じ
33．28と同じ
34．35と10BG 5/1 青灰色細砂が縞状に堆積
35．N 2/0 黒色シルト・粘土、北半2～5cm礫少量
36．10BG 5/1 青灰色シルト・粘土、35がブロック状に入り込む
37．10BG 5/1 青灰色細砂・粗砂、N 4/0 灰色シルト・粘土
　10BG 4/1 暗青灰色粘土～5G 3/1 暗緑灰色礫(軟質)
38．10Y 5/1～4/1 灰色粗砂、5～10cm礫極多量
39．38に34・35が入り込む
40．35に37が入り込む
41．37に類似
42．5BG 5/1 青灰色～4/1 暗青灰色微砂、細砂中量
43．10Y 5/1～4/1 灰色粗砂、基本は38
44．7.5Y 4/1 灰色粗砂＋10GY 4/1 暗緑灰色粗砂
　19が入り込む
45．5BG 4/1 暗青灰色細砂・粗砂、0.2～0.3cm礫多量
　7.5Y 4/1～5/1 灰色に変色
46．10BG 4/1～3/1 暗青灰色細砂・粗砂＋7.5Y 2/1 黒色細砂
　1cm礫主体で、3cmまで多量
47．10BG 5/1 青灰色～4/1 暗青灰色シルト・粘土
48．2.5Y 5/1～4/1 黄灰色細砂、粗砂少量(汚土)
　0.3cm黒褐色粒多量、2～5cm礫主体で10cmまで多量
49．2.5Y 4/1 黄灰色細砂、粗砂少量(汚土)
50．10＋49(汚土)
51．52に類似、黄灰色みが少ない(汚土)
52．2.5Y 5/1 黄灰色細砂＋10(汚土)
53．2.5Y 5/1 黄灰色細砂、1cm礫主体で、5cmまで多量
54．10YR 3/2 黒褐色細砂ブロック多量＋53(汚土)
55．7.5Y 5/1～4/1灰色細砂
56．7.5Y 5/1 灰色～10Y 5/1 灰色細砂
　10BG 5/1 青灰色細砂
57．56を基本として＋42
58．5Y 5/1 灰色細砂～2.5Y 5/1 黄灰色細砂、Dに類似
59．2.5Y 5/1 黄灰色細砂、0.3～0.5cm黒褐色粒極多量
59′．黒褐色粒少量
60．10G 4/1 暗緑灰色微砂・細砂、5Y 4/1 灰色に変色
61．59の黒褐色粒が筋状になる、10YR 4/2 灰黄褐色細砂
62．5BG 4/1 暗青灰色細砂・粗砂、1～5cm礫少量
　5Y 5/1 灰色に変色
63．62＋64微砂、基本は62に類似
64．5BG 4/1 暗青灰色粗砂、2～5cm礫少量
　5Y 4/1 灰色に変色
65．7.5Y 4/1 灰色粗砂礫(変色)、2～4cm礫多量
66．10G 4/1 暗緑灰色粗砂礫(変色)、0.5～5cm礫多量
67．66に類似～7.5Y 4/1 灰色粗砂礫、1～10cm礫極多量
68．37に類似し、岩多量
69．37に類似し、岩稀れ
69．59に類似
70．66に類似、5～15cm礫多量
71．10BG 5/1 青灰色～4/1 暗青灰色粘土＋細砂
72．10に類似、0.5～1cm礫主体で、2cmまで極多量
73．2.5Y 5/1 黄灰色細砂、10YR 4/6 褐色細砂まだら
　0.2～0.3cm黒褐色粒多量、0.5～2cm礫少量
74．61に類似、7.5Y 4/4 褐色細砂が筋状に入る
75．7.5Y 5/1 灰色細砂、粗砂少量、7.5YR 4/4 褐色筋状
76．5Y 4/1 灰色シルト・細砂、南半シルト主体
　0.5～2cm礫少量
77．5Y 5/1 灰色細砂、7.5YR 4/6 褐色細砂まだら多量
78．7.5Y 4/1 灰色粗砂礫、15cm礫多量
79．10YR 2/1 黒色シルト(粘土)
80．5Y 4/1 灰色細砂・粗砂、10BG 5/1 青灰色粗砂
　70に類似、N 4/0 灰色シルト　ブロック状に入り込む
81．71＋N 3/0 暗灰色シルト
A．2.5Y 5/1 黄灰色細砂、粗砂少量、0.5cm褐色粒状中量
B．7.5YR 4/3～4/4 褐色まだら極多量
　2.5Y 5/1 黄灰色細砂、粗砂少量
C．2.5Y 5/1 黄灰色細砂、粗砂少量、Bよりやや6/1に近い
　7.5YR 5/6～5/8 明褐色細砂、筋状になる
D．2.5Y 5/1 黄灰色微砂・細砂
　7.5YR 5/6～5/8 明褐色細砂まだら、粒状つぶれる
E．2.5Y 5/1 黄灰色微砂・細砂、1～5cm礫少量
F．2.5Y 4/1 黄灰色微砂・細砂、1cm礫主体で、2～5cmの少量
H．N 3/0 暗灰色微砂・シルト、5cm礫主体で、2～15cm多量
I．5～15cm礫多量に、Fが入り込む

遺物取り上げ対応　P段
池状遺構ＳW1第5′～7′層－1・2
　第５～７層黄褐色礫－3・4
　第５～７層－5
　第15層灰色礫－6
　第12層－7・7′・8
池状遺構ＳW2第11～13層－A～C
〃　ＳW3第14・16層－D～F
　第17～20層－南北土層より東側
谷状地形　第22層－13・15
　第23層－南北土層より東側
　第24層－H・16
　第25層－35
　第26層－36・37・41
　第24～26層－17～19より下層

R段
R段整地土第６・７層－10・48～50
〃　第15層－51～54
谷状地形　第22層の上－11・12・14
　55・56・56′
　第22層－42・45・60
　第24層－62～64
　第25層－46
　第24～26層－41・47・65～67

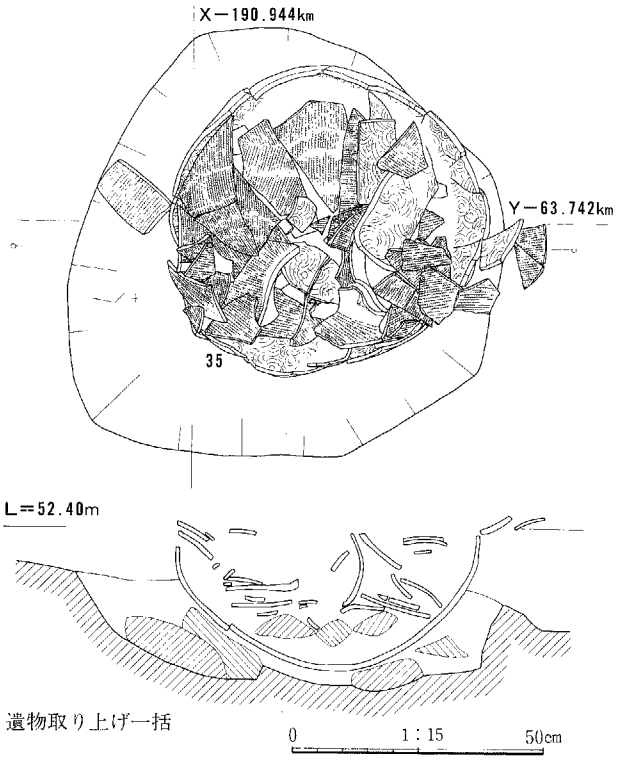
U段
U段整地土－72～77
灰黄色細砂
第24～26層－70・71・78～80

第16図 第Ⅱ区谷状地形南北土層実測図

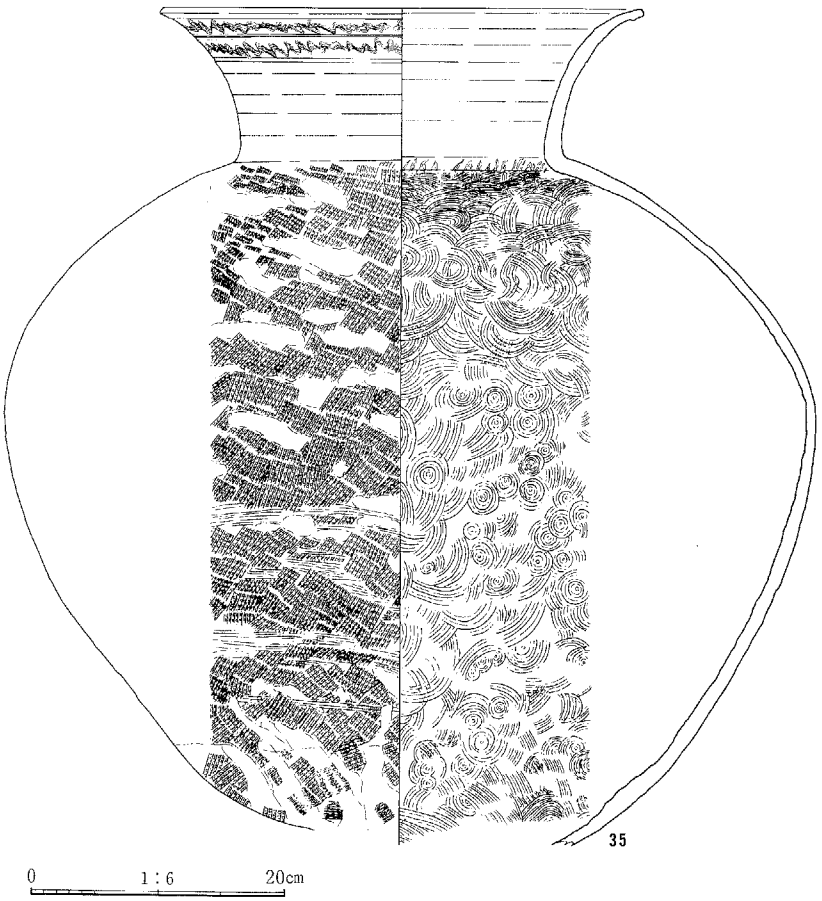
土坑ＳＫ１１（第17・18図、ＰＬ．９）

谷状地形の東肩付近、Ｐ段の２Ｄ56に位置する。直径0.85m、深さ20cmのほぼ円形の据え付け穴を掘り込んで須恵器の大甕(35)を据え付け、根石（５～25cmの円礫）を入れて大甕を固定している。大甕は、人為的に破砕したのかどうか不明であるが、大半が体部の内側に落ち込んだ状況で出土している。甕の底部は、据え置かれた時点で欠損しており、くり抜かれたような状況にある。土坑ＳＫ11の西側の谷状地形の堆積層からは、古墳時代末～奈良時代の須恵器が特に密集した状態で出土している。

大甕そのものの形態はかなり整っている。外面は、細かい単位の格子状タタキである。内面の当て具痕跡は、頸部から底部まで大きく三分割されている。



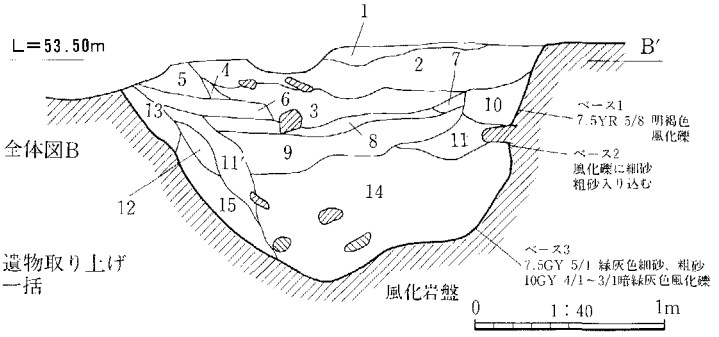
第17図　第II区土坑SK11実測図



第18図　第II区土坑SK11出土遺物実測図

溝ＳＤ１２（第19・73・74図、ＰＬ．9・10）

第Ⅱ区の北東側、Ｏ段－Ｐ段の２Ａ50－２Ｅ54に位置する。北東から南西方向に緩やかに蛇行して延び、幅2.34～2.7m、深さ1.05～1.28m、延長26.7m分を検出した。南西側は谷状地形と重複して、溝の方向・規模を明らかにすることができなかった。溝底の中央北寄りで、橋脚の材と考えられる直径約15cmの丸太杭３本(2006～2008)が検出された。



1．7.5YR 5/1 褐灰色細砂・粗砂
　7.5YR 4/2 灰褐色粗砂
2．7.5YR 4/2 灰褐色細砂、粗砂少量
　7.5YR 4/1 褐灰色細砂
　1cm主体2～7cm礫中量
3．2.5Y 6/2 灰黄色粗砂、
　2cm主体～10cm礫中量
4．2.5Y 4/1 黄灰色微砂シルト
5．2.5Y 5/1 黄灰色細砂、粗砂少量
6．4＋8、基本は8
7．7.5YR 6/1～5/1 灰色粗砂
8．N 2/0 黒色微砂、シルト
9．7.5Y 4/1 灰色粗砂、7cm礫多量
10．10YR 5/1 褐灰色細砂、5mm礫多量
11．10Y 5/1 灰色細砂、粗砂中量
11′ 風化礫多量
12．5Y 4/1 灰色微砂
13．7.5Y 5/1 灰色細砂、5cm礫多量
14．5Y 5/1 灰色粗砂
　2～3cm主体～15cmの礫極多量
15．12に類似、風化礫中量

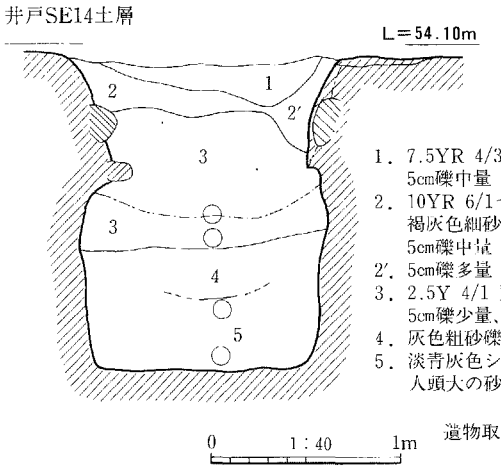
第19図　第Ⅱ区溝SD12東西土層実測図

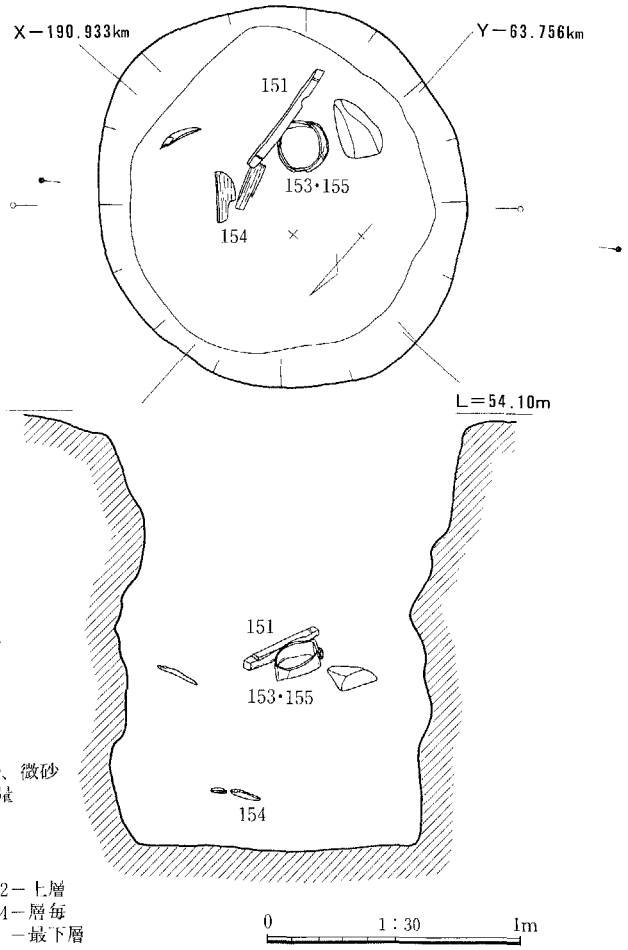
遺物(121～131)は、下層～最下層で147点、その他の層で237点、奈良時代の瓦１点、鎌倉時代の瓦２点が出土している。

井戸ＳＥ１４（第20・74図、ＰＬ．10）

第Ⅱ区の北西側、Ｑ段の２Ｇ・２Ｈ53に位置する。井戸は素掘りの円形で、直径1.5m、深さ1.6mで、堆積土の中層から木製の曲物(153)・蓋板把手(152)・加工材(151)・板材などが出土している。現状でも井戸の検出面から－1.2mで湧水が有り、常時水を湛えている。

土器類は計７点、最下層で平安後期～鎌倉時代の砥石１点が出土している。曲物(153)は、内面に黒色物が厚く付着している。この黒色物は黒漆とみられ、指先で撫で付けたような痕跡が確認できる。また、曲物は蓋板(154)と底板(155)が一括して出土している。中層（図３層下部）はこれらの遺物と共に松





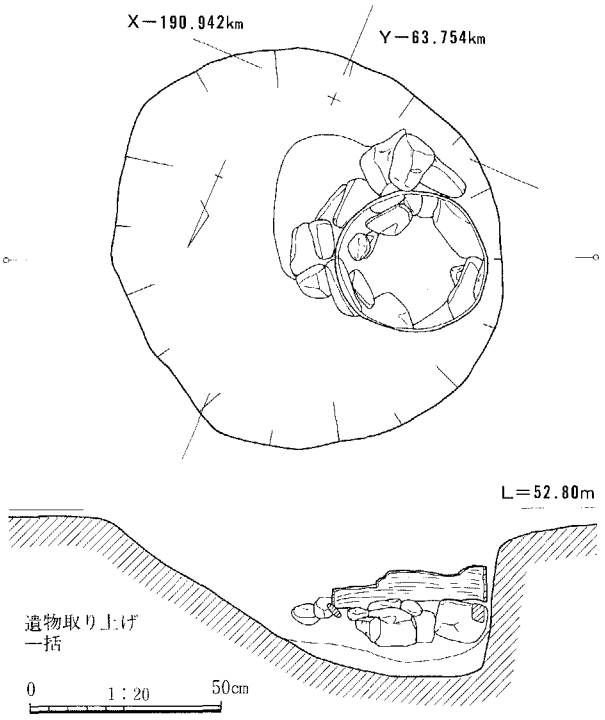
第20図　第Ⅱ区井戸SE14実測図

の小枝・球果、表皮の付いた松などが多量に出土している。土壌の花粉分析を行なった結果、これらの遺物と共にツタ属の植物が大量に投棄されていたことが判明している。

水溜めＳＫ２４（第21図、ＰＬ．10）

ＳＥ14井戸の南側で谷状地形の斜面、Ｐ段の２Ｇ55に位置する。ほぼ円形で、長軸（東西）1.11m、短軸（南北）1.08m、深さ39cmの規模で、土坑の西側に偏って木製の曲物が据えられている。木製の曲物は、底板が外され側だけで、10cm～20cm大の円礫で固定されている。湧水が著しく、その状況からして谷状地形の斜面地に営まれた水溜めとしての性格の強いものである。周辺部に位置する土坑ＳＫ20・25・26についても同様の性格が考えられる。土坑ＳＫ26から曲物の残片が出土している。また、土坑ＳＫ20において同時期と考えられる瓦器片が出土し、鎌倉時代後期と考えることができる。

遺物は、奈良時代の須恵器５点、鎌倉時代の土師器５点・瓦器12点・須恵器１点、奈良時代の瓦１点が出土している。



第21図　第II区水溜めSK24実測図

土坑ＳＫ２０　Ｐ段の２Ｇ54の南西隅に位置し、ほぼ円形の土坑である。長軸（東西）1.15m、短軸（南北）1.13m、深さ52cmである。遺物は、奈良時代の須恵器４点、鎌倉時代の土師器２点・瓦器４点・陶器３点・中国製磁器１点が出土している。

土坑ＳＫ２５　Ｐ段の２Ｆ55に位置し、歪つな円形（隅円三角形）の土坑である。長軸（南北）1.15m、短軸（東西）1.08m、深さ35cmである。遺物は、奈良時代の土師器１点・須恵器２点、鎌倉時代の土師器１点が出土している。

土坑ＳＫ２６　Ｐ段の２Ｇ55に位置し、歪つな楕円ぎみの土坑である。長軸（南北）1.25m、短軸（東西）0.95m、深さ33cmである。遺物は、鎌倉時代の土師器６点・瓦器５点、不明製品１点が出土している。

Ｔ段土坑群（第22図、ＰＬ．11）

これらの土坑群で凡そ共通する点として、形態上、円形の掘形で丸底状の基底部を有することにある。埋土の中には厚さ２～３cmの炭層があったり、炭粒を多量に含む層があることも共通している。Ｔ段北半の土坑群が比較的不揃いで、重複関係を有するのに対して、南半の縁辺部にある土坑群が重複しない点で異なる。これらの土坑群は、構築物の柱穴としての規則性は認められない。

遺物は何れの土坑においても少量で、最も新しい物として16世紀代の土師器小皿などが数点みられる。共通する要素をもたないものもあるが、類似したものに土坑ＳＫ30～44・47などがある。

土坑ＳＫ３４　２Ｊ63に位置し、歪つな楕円ぎみの土坑である。長軸（東西）0.8m、短軸（南北）0.66m、深さ17cmである。遺物は、奈良時代の須恵器１点、鎌倉時代の土師器１点、室町時代の土師器４点が出土している。

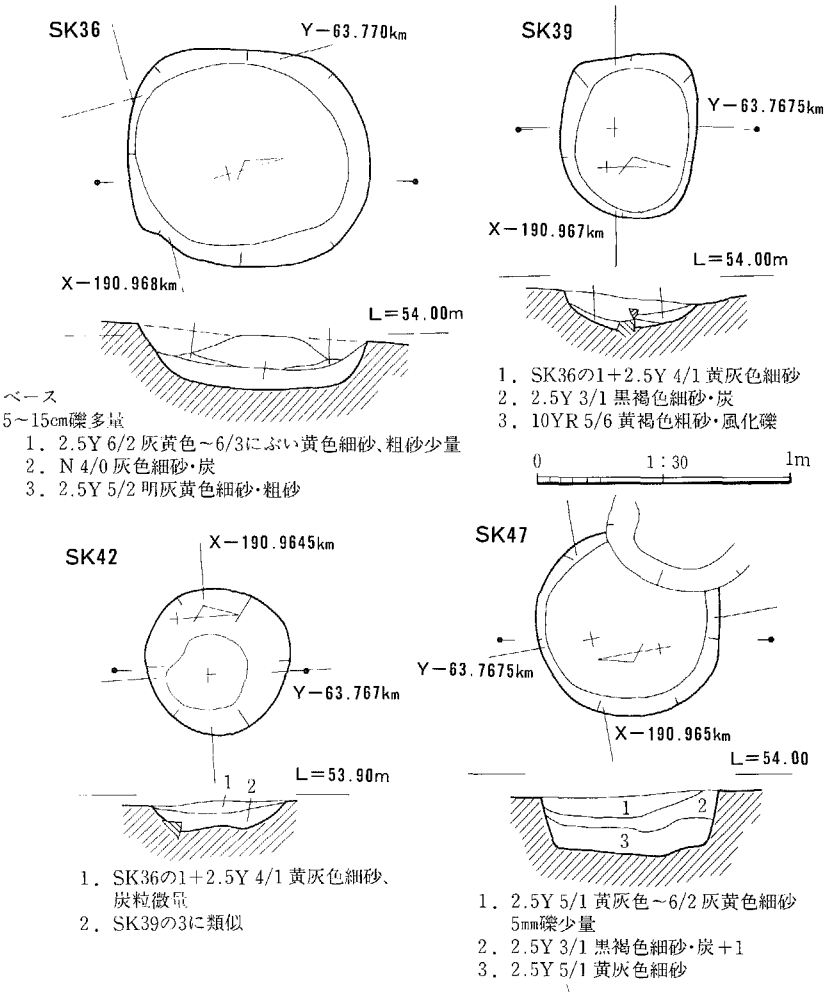
土坑ＳＫ36（第22図）　２Ｋ61に位置し、歪つな円形の土坑である。長軸（南北）0.96m、短軸（東西）0.86m、深さ22cmである。遺物は、鎌倉時代の土師器５点、鎌倉時代の瓦２点が出土している。

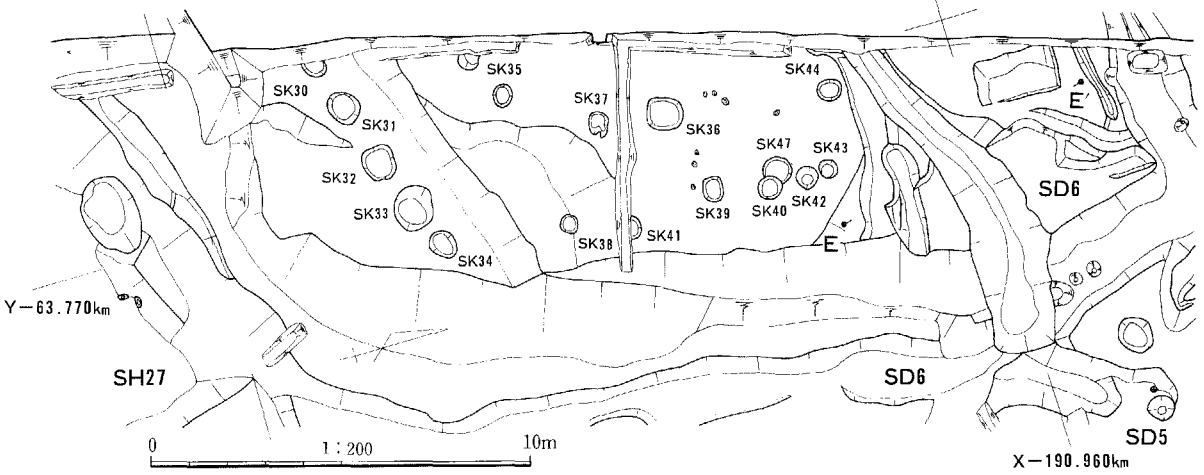
土坑ＳＫ３９（第22図）

溝ＳＤ６の南側、Ｔ段の２Ｊ61に位置する。東半は歪つな円形、西半は隅円方形で、長軸(東西)0.64m、短軸(南北) 0.56m、深さ14cmの規模で、埋土の一部に炭粒が多量に認められる。遺物は、室町時代の土師器２点が出土している。

土坑ＳＫ４０　２Ｊ61に位置し、楕円ぎみの土坑である。長軸（南北）0.66m、短軸（東西）0.6m、深さ７cmである。遺物は、鎌倉時代の瓦器１点、室町時代の土師器１点が出土している。

土坑ＳＫ４１　２Ｊ62に位置し、ほぼ円形の土坑である。長軸（東西）0.6m、短軸（南北）0.3m以上、深さ８cmである。遺物は、奈良時代の須恵器10点、鎌倉時代の土師器３





第22図　第Ⅱ区Ｔ段土坑群実測図

点・瓦器２点が出土している。

土坑ＳＫ４２（第22図）　２Ｊ60・61に位置し、円形の土坑である。径0.58m、深さ11cmである。遺物は、奈良時代の須恵器１点、鎌倉時代の瓦器５点が出土している。

土坑ＳＫ４３　２Ｊ60に位置し、ほぼ円形の土坑である。長軸（東西）0.52m、短軸（南北）0.46m、深さ16cmである。遺物は、奈良時代の須恵器１点、鎌倉時代の土師器２点が出土している。

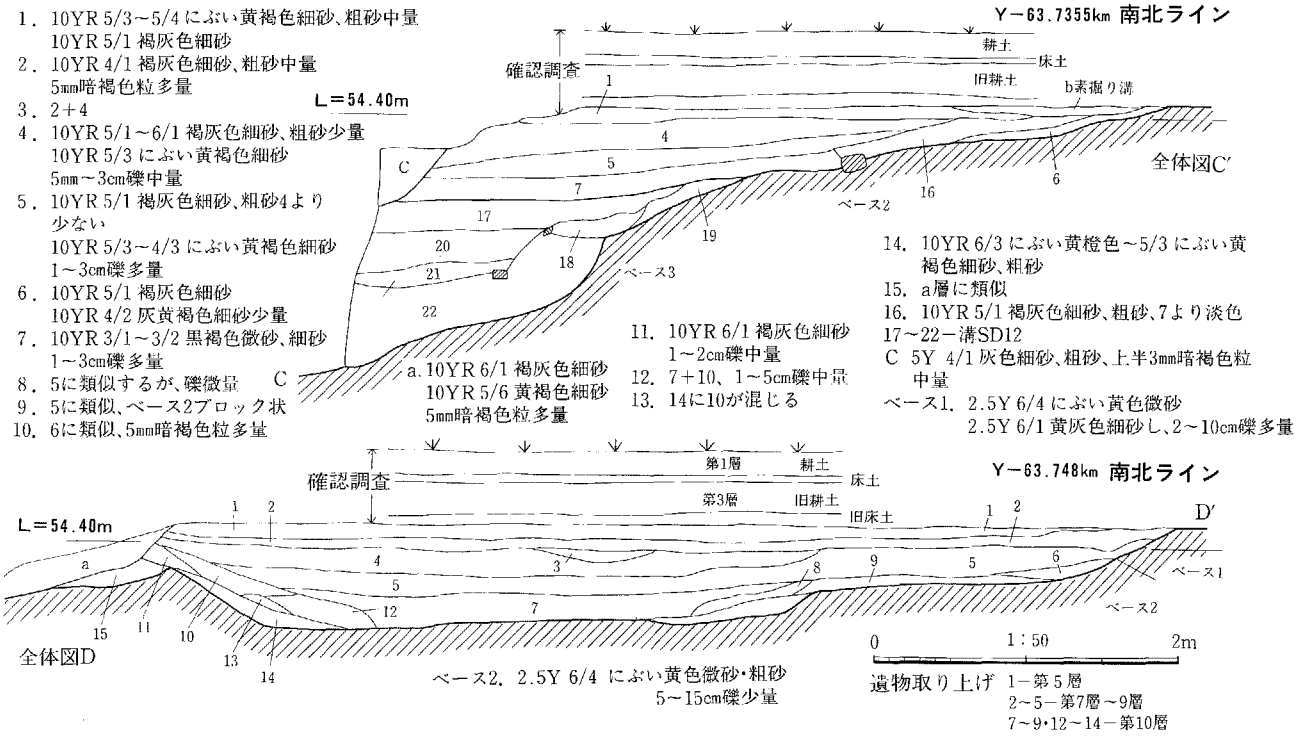
土坑ＳＫ４７（第22図）　２Ｊ61に位置し、円形の土坑である。径0.76m、深さ25cmである。遺物は、奈良時代の土師器１点、室町時代の土師器４点が出土している。

溝ＳＤ４（第23・30・73図、ＰＬ．16）

Ｏ段全体に位置し、やや蛇行ぎみで、東から西方向に延びる。溝ＳＤ12の堆積土を掘り込んでいる。幅2.7～6.15m、深さ70cmで、延長28.9m分を検出した。溝の形状はＯ段中央部では比較的明確であるが、東西両端にいくと平面形が不明瞭となってくる。東端では、溝ＳＤ12の埋土を削平する状況にある。溝の基底面では重複関係を明らかにできていない土坑を３基検出している。土坑ＳＫ９では、埋土の堆積後に、溝ＳＤ４の堆積があった状況を示しているが、明確ではない。溝ＳＤ４埋土の状況は大別して、上層・下層に区分することができ、遺物の内容に若干の差異を見出すことができる。

土器類（132～139）は全体量からすれば少ないが、第５′層で213点、第５～９層で129点、第７～９層で238点、第10層で132点が出土している。最も新しいものは、16世紀後半の遺物群である。

この溝を境にして南側に谷状地形が広がり、第III区北側では緩やかな傾斜をもって高レベルになる。第II区と第III区を繋いで溝ＳＤ４の存在を考えれば、比較的深い規模で捉えることが可能である。他地区で検出されている城砦施設の堀と比較した場合、その差は歴然としている。しかし、位置・規模等から南北を区画する機能を有するものと判断できる。

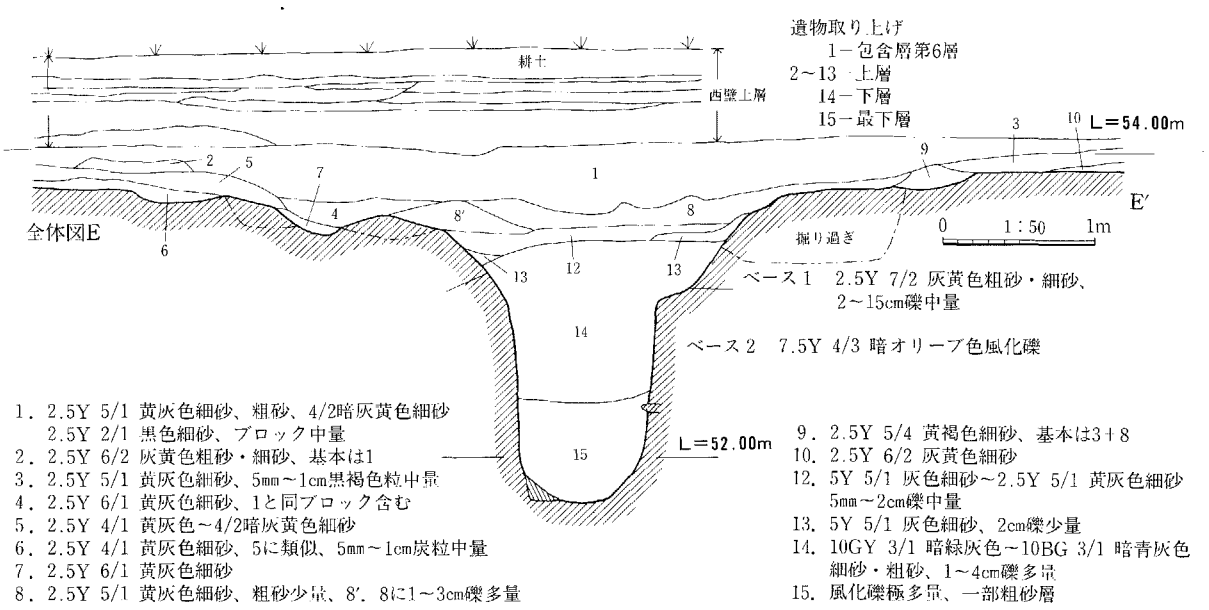


第23図　第II区溝SD４南北土層実測図

溝ＳＤ５（第73図）

Ｒ段の２Ｈ59－２Ｉ59・60に位置し、屈折して延びる。Ｒ段西端で谷状地形の肩部から溝ＳＤ６の浅くなる方に合流する、幅1.7m、深さ72～90cm、延長4.7m分の溝である。方向性から考えれば、溝ＳＤ12から直線的に続くものであるが、遺物の時代性、掘形の形状から、異なるものと判断した。

遺物（140～145）は近代の染付１点を省けば、他は室町時代以前のものである。土器類が163点出土している。その他、室町時代の瓦７点、石鍋１点、鞴の羽口４点も出土している。



第24図　第II区溝SD６南北土層実測図

溝ＳＤ６（第24・73・74図、ＰＬ．11）

Ｔ段の２Ｋ60－２Ｉ59に位置し、西南西から東北東方向に延びる。西：幅0.93m、深さ0.71～1.6cm、東：幅1.9m、深さ1.8mの規模で、西側に狭くなり、東側になるに連れ非常に深くえぐれ込んでいる。東側約９mの地点（Ｓ段）から急に方向を南に変え、南約16mの地点で堀ＳＨ27に流れ込む。埋土の大半は青灰色砂礫層で、拳大から20cm大の円礫を多量に含んでいる。Ｓ段における溝ＳＤ６の方向性については、本来Ｔ段とＲ・Ｕ段の間を南流していたが、近代以降のＲ・Ｕ段の水田化に伴って、かなりの深さで削平されたものと考えるのが妥当である。検出した西端の状況から、本来70cm程度の深さの溝がベースの変化と急激な流水作用によって、極端にえぐれ込んだものと考えられる。

遺物は、下層から室町時代の少量の土器（146～149）と共に木製の曲物底板（157）・桶側板（156）・不明木製品（159）・杭などが出土している。土器類は上層で26点、下層で32点、最下層で27点が出土している。その他、有機分も多く、木の葉・自然木・松球果などが認められる。

溝ＳＤ１６

Ｑ段の２Ｉ53－２Ｈ55に位置し、蛇行して延びる。幅1.8～3.4m、深さ36cm、延長６m分を検出した。遺物は、上層で奈良時代の土師器10点・須恵器９点、平安時代の黒色土器３点、鎌倉時代の土師器１点、下層・最下層で弥生時代の石器（サヌカイト）１点、奈良時代の土師器４点・須恵器19点が出土している。

堀ＳＨ27（第25～27・30～32・75～77・79～86図、表５、ＰＬ．12～15）

W段に位置する。堀ＳＨ27の規模は、南北幅18.9m、深さ3.8mであるが、南北幅をどの地点で計測するかによって、その数値はかなり変動する。南端はベース面への掘り込みが明確であるが、北側についてはＴ段の段丘面までとするのか、Ｓ段のテラス面までとするかによって異なってくる。Ｓ段のテラス面までとすれば、南北幅16.9m、深さ2.8mとなる。南壁法面は傾斜角50°、北壁法面は傾斜角25°に掘削されており、東壁法面は堀そのものの東肩から緩やかに落ち込む、連続した傾斜（傾斜角40°）である。また、堀ＳＨ27の中央部には、堀の東西方向と並行する南北幅 2.6m、深さ60cmの掘り込みが存在する。堀の掘形の断面形は、緩やかな逆台形状を成している。

堀内部の土層観察（第26図土層Ｆ－Ｆ′）によると堀の中に埋まった土は、粘質土を主体として自然堆積したもの（図７・22～24層）と粗砂礫もしくは有機物を多量に含んだ人為的な埋土（図11～16層など）と考えられる両者が存在する。土壌分析の結果、図22～24層が堆積した頃には、堀内全体にかなりの水深があったものと考えられている。

堀の西側は現在の田畑の区画の形から、段丘裾に沿ってさらに調査地外へ続くことが確認でき、1989年度岩出町教育委員会の調査した堀（第４・６図Ｋ地点）に続くものである。

堀ＳＨ27に関しても他の遺構同様、堆積層の違いによって忠実に掘削することを念頭においた。しかし、下層においても江戸時代の土器類（11点）が認められ、かなり下部まで江戸時代に人為的に埋められた土や、自然堆積層であることが判明している。最上層には近代の遺物も多量に含み、水田化に伴う暗渠排水や、近代以降の撹乱坑の遺物（第80図368など）がかなりの量で認められる。堀ＳＨ27からは各層において様々なものが出土している。堆積層の掘削に合わせ、破片点数の数量化について忠実に行なっている。先述したように、下層でも江戸時代の遺物（唐津199・200など）が認められるが、中央凹み部の最下層上位において江戸時代の遺物は１点のみである。

土器類は、大きく上半・下半に二分して数量化している（表５）。これらの各層の出土破片点数は、上半部の最上層1,402点、上層309点、下半部の中層890点（内、江戸時代57点）、下層662点、最下層は比較的少なく126点が出土している。出土遺物（169～264など）は奈良時代の物を含み、16世紀後半～17世紀前半を主体としている。遺物の内、木製品では中・下層に多く、独楽（426～428）・下駄（455～462）・曲物製柄杓（463）・柄杓の柄（465～466）・曲物の底板（467～473）・桶の側板（477・478・480など）・加工材などがまとまって出土している。石製品では下層で砥石（404・405・407）、中層で火打ち石（411）、最上層で砥石（406）、金属製品では第２～４層から銭貨（409・410）などが出土している。

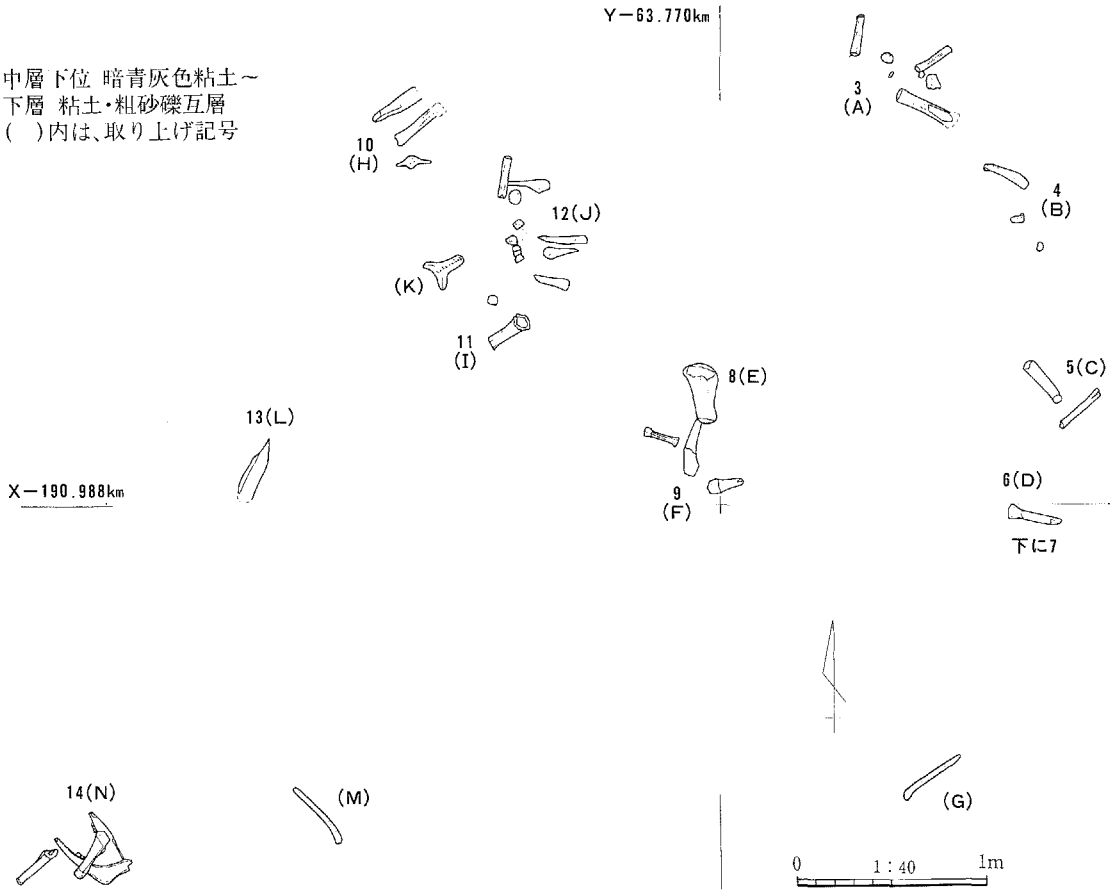
これらの遺物と共に、W段２Ｋ66を中心とした範囲の中層下位から下層にかけて獣骨（第25図・ＰＬ．57）、木葉・種実などの植物遺体も多量に出土している。

堀ＳＨ29（第26・27・77～80・82～86図、表５、ＰＬ．12～15）

Ｖ段に位置する。堀ＳＨ29の掘り込みは、三方において比較的明確で南北幅19m、深さ2.9mある。南壁法面は傾斜角43°、北壁法面は傾斜角30°～48°に掘削されており、西壁法面は堀そのものの西肩から緩やかに落ち込む、連続した傾斜（傾斜角35°～38°）である。また、堀ＳＨ29の中央部には堀の東西方向と並行する南北幅 4.2m、深さ70cmの二段の掘り込みが存在する。堀の掘形の断面形は、緩やかな逆

堀SH27南北土層

1．耕土、撹乱土
2．5Y 5/1 灰色細砂・シルト、10BG 5/1 青灰色ぎみ
　a明褐色・黄褐色シルト・細砂微粒状に極多量
3．5Y 5/1 灰色シルト、a0.5～1cm筋状極多量
4．5Y 5/1 灰色シルト、粘質土a　〃
4'．2.5Y 6/2 灰黄色～6/1 黄灰色細砂・粗砂～5cm礫中量、5～15cm礫少量
5．10BG 5/1 青灰色粘質土～5B 5/1 青灰色粘質土
　2.5Y 6/1 黄灰色ぎみ(変色)、5～10cm礫少量
6．10BG 5/1 青灰色粘質土、粗砂・細砂中量
　粘土ブロック状に入る
　北半粗砂礫主体、10YR 3/1 黒褐色シルト10cm大ブロック少量
7．5B 5/1 青灰色粘土、5～10cm礫微量
8．2.5Y 6/2 灰黄色～6/1 黄灰色細砂、5cm礫微量
9．8＋ベース1、ベース2のブロック状
10．5Y 5/1灰色細砂
　2.5Y 5/6黄褐色～10YR4/4褐色細砂　混合
　5Y 5/1 灰色細砂筋状、粗砂、2～3mm礫中量
11．5B 4/1 暗青灰色粘土、有機分多量
　2.5Y 5/2 暗灰黄色粘質土ブロック状多量
12．5B 5/1 青灰色～4/1 暗青灰色粘質土
　細砂、粗砂少量、有機分多量
13．12が主体で、14が入り込む
14．7.5Y 5/1 灰色～5Y 5/1 灰色粗砂・細砂
　5B 5/1 青灰色～4/1 暗青灰色粘質土が筋状、5cm大ブロック
　5～10cm礫多量
15．14の礫のない状態
16．5BG 5/1 青灰色～4/1 暗青灰色粘土
　7.5Y 5/1 灰色～5Y 5/1 灰色細砂　互層
　5cm前後の互層状態、有機分多量
17．10BG 4/1 暗青灰色粘質土・細砂
　2.5Y 3/2 黒褐色粘質土　互層
　1cm前後の互層
18．17に2～5cm礫少量、粗砂、互層
19．7.5Y 5/1 灰色～5Y 5/1 灰色細砂・粗砂
　5B 4/1 暗青灰色粘土
　N 3/0 暗灰色シルト
　ベース2　互層
　0.5～1cm前後の互層
20．11に類似、5～15cm礫中量、有機分多量
21．5B 4/1 暗青灰色粘土、有機分多量
　2.5Y 6/2 灰黄色ぎみ(変色)
22．5B 4/1 暗青灰色粘土、有機分多量
　暗色土ブロック状に多量
23．5B 4/1 暗青灰色粘土
　10G 6/1 緑灰色粘土1cm厚　互層
24．ベース4、ベース5の粗砂
25．5B 5/1 青灰色粘土、6に近い部分は粗砂混
26．10BG 5/1 青灰色シルト・細砂、5cm礫中量
27．6に類似し、シルト混
28．5～10cm礫多量＋7の粘土・粗砂
29．21に類似、有機分多量
　10G 6/1 緑灰色粘土ブロック状少量
30．ベース7の粗砂礫＋N 4/0 灰色粘土
31．30に類似、下半は粘土、2～3cm礫主体
49．2.5Y 5/1 黄灰色細砂・粗砂
　1～3cm礫多量
50．2.5Y 5/1～4/1黄灰色細砂、粗砂少量、1cm礫主体で、5cmまで多量
51．2.5Y 4/1 黄灰色粗砂
　2cm礫少量
52．2.5Y 5/1～4/1 黄灰色粗砂・細砂
　1cm礫少量
b．0.5～1cm礫主体で、10cmまで多量
b'．3～5cm礫主体で、15cmまで極多量



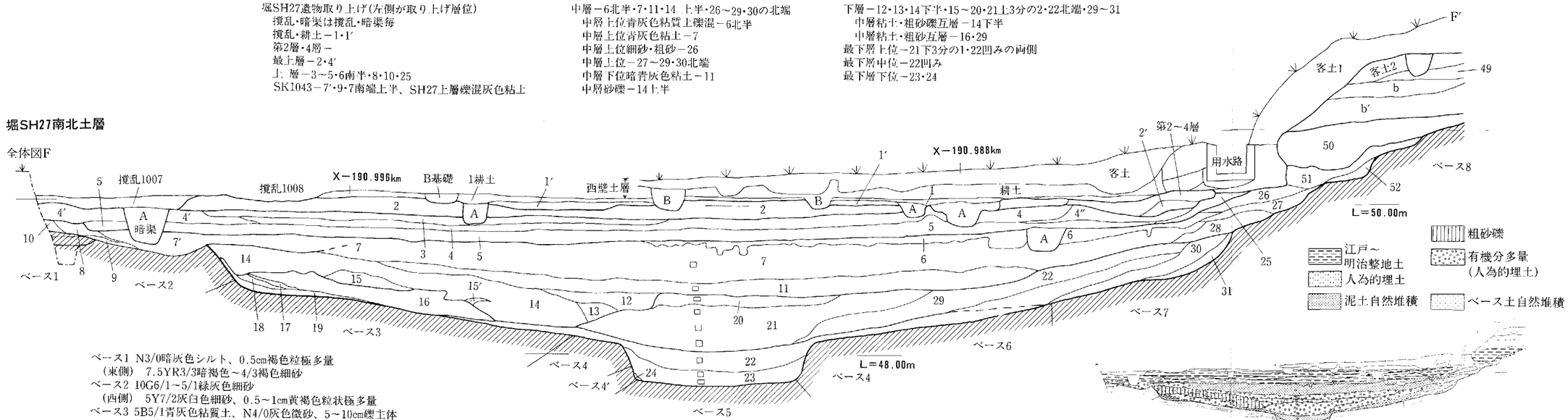
第25図　第II区堀SH27獣骨出土状況実測図

堀SH27遺物取り上げ(左側が取り上げ層位)
撹乱・暗渠は撹乱・暗渠毎
撹乱・耕土－1・1′
第2層・4層－
最上層－2・4′
上 層－3～5・6南半・8・10・25
SK1043－7′・9・7南端上半、SH27上層礫混灰色粘土

中層－6北半・7・11・14 上半・26～29・30の北端
中層上位青灰色粘質土礫混－6北半
中層上位青灰色粘土－7
中層上位細砂・粗砂－26
中層上位－27～29・30北端
中層下位暗青灰色粘土－11
中層砂礫－14上半

下層－12・13・14下半・15～20・21上3分の2・22北端・29～31
中層粘土・粗砂礫互層－14下半
中層粘土・粗砂互層－16・29
最下層上位－21下3分の1・22凹みの両側
最下層中位－22凹み
最下層下位－23・24

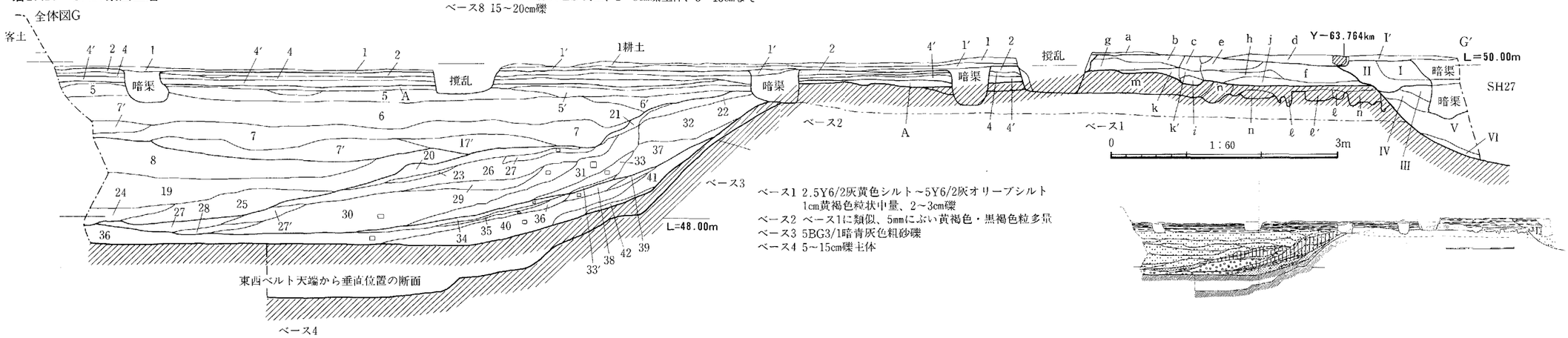
堀SH27南北土層



ベース1 N3/0暗灰色シルト、0.5cm褐色粒極多量
(東側) 7.5YR3/3暗褐色～4/3褐色細砂
ベース2 10G6/1～5/1緑灰色細砂
(西側) 5Y7/2灰白色細砂、0.5～1cm黄褐色粒状極多量
ベース3 5B5/1青灰色粘質土、N4/0灰色微砂、5～10cm礫主体
ベース4 10GY6/1緑灰色～10G6/1緑灰色粘土
ベース4′ ベース4＋ベース5

ベース5 10G6/1～5/1緑灰色シルト、1～2cm礫主体
ベース6 粗砂主体、1～2cm礫極多量
ベース7 粗砂礫、青灰色砂質土、2～3cm礫主体、5～15cmまで
ベース8 15～20cm礫

堀SH29－SH27東西土層



ベース1 2.5Y6/2灰黄色シルト～5Y6/2灰オリーブシルト
1cm黄褐色粒状中量、2～3cm礫
ベース2 ベース1に類似、5mmにぶい黄褐色・黒褐色粒多量
ベース3 5BG3/1暗青灰色粗砂礫
ベース4 5～15cm礫主体

A. 4′＋5、2～5cm礫中量
○印 東壁土層
1. 耕土
1′. 2.5Y 6/1 黄灰色～6/2 灰黄色細砂・シルト(耕土)
2. 5Y 5/1 灰色細砂・シルト
10YR 6/8 明黄褐～7.5YR 5/8 明褐色細砂
③. 5Y 5/1 灰色細砂・シルト、黄褐色粒中量
0.5cm黒褐色粒微量
4. 5Y 5/1 灰色細砂・シルト、黄褐色粒中量
1cm礫少量、下端2cm礫多量
4′. 基本的に4と同じ
5. 5Y 6/1～5/1 灰色細砂・粗砂、4が基本
2～3cm礫中量、5～15cm礫少量、0.5cm黒褐色粒少量
6. 2.5Y 5/1 黄灰色～5Y 5/1 灰色細砂
5～10cm礫多量、10YR 3/2 黒褐色シルト、5～20cmブロック中量
7. 6に類似 7′. 10 4/0 灰色細砂・シルト多量
8. 10BG 4/1 暗青灰色細砂・粗砂
5～10cm礫極多量
⑨. 10BG 5/1 青灰色シルト・粘土、一部に10G 4/1 暗緑灰粗砂
⑩. 2.5Y 5/1 黄灰色細砂・シルト・粘土
⑪～⑱
19. 5B 5/1 青灰色～4/1暗青灰色シルト・粘土
5～10cm礫多量
20. 10BG 5/1 青灰色～4/1 暗青灰色粗砂
2～5cm礫中量
21. 5B 4/1 暗青灰色粘土
2.5Y 6/1 黄灰色～5Y 6/1 灰色ぎみ(変色)
22. 5Y 5/1 灰色シルト・細砂、6′よりやや粘質
にぶい黄褐色粘状極多量
23. 10BG 4/1 暗青灰色粗砂、20より粗い
2～5cm礫多量
24. 19に類似、粗砂主体、1～3cm礫多量
25. 〃 〃 〃
26. 20に類似
27. 2.5Y 5/1 黄灰色粘土、5B 4/1 暗青灰色粘土の混合
27′. 27＋26主体
28. 色調は27に類似、粘土＋粗砂、3cm礫少量
29. 10BG 5/1 青灰色粘土、粗砂の互層
黄灰色ぎみ(変色)、5～15cm礫少量
30. 10BG 5/1 青灰色～4/1 暗青灰色粘土
黄灰色ぎみ(変色)、15cm礫少量、有機分多量
31. 10BG 5/1 青灰色粗砂・細砂、黄灰色ぎみ(変色)
粘土小ブロック状に入る、5～15cm礫中量
32. 2.5Y 6/1 黄灰色～6/2灰黄色粗砂礫
3～5cm礫多量
33. 10BG 5/1 青灰色細砂・粗砂
33′. 33＋粘土混
34. 10BG 5/1 青灰色粘土、黄灰色ぎみ(変色)
35. 10BG 5/1 青灰色粗砂、 〃
36. 5Y 5/1 灰色～10BG 4/1 暗青灰色粘土
黄灰色ぎみ(変色)、有機分多量
37. 5Y 6/3 オリーブ黄色～5/3 灰オリーブ色粗砂
3cm礫中量
38. 10BG 4/1 暗青灰色粗砂
39. 10BG 5/1 青灰色粗砂・細砂
40. {10BG 4/1 暗青灰色粘土 / 10BG 5/1 青灰色粗砂} 互層
N 3/0 暗灰色粘土ブロック状、5cm礫中量
41. 40に類似、1～2cm礫少量
42. 41＋ベース多量
I. 2.5Y 5/1 黄灰色細砂・シルト、褐色粒状筋状に入る
II. N 5/0 灰色細砂、2.5Y 6/1 黄灰色ぎみ、 〃
III. 5Y 6/2 灰オリーブ色～5/2 灰オリーブ色粗砂
IV. 5Y 5/1 灰色粗砂、一部粘土層
V. {5BG 4/1 暗青灰色粘土 / 5Y 5/1 灰色粗砂} 互層
一部に5cm礫中量、有機分多量
VI. 5B 5/1 青灰色粗砂～4/1 暗青灰色粗砂

堀SH29遺物取り上げ(左側が取り上げ層位)
最上層－2・4・4′
上 層－A・5～7・22
中層上位－7′・7″
中 層－8・19・20・21′・23・29・31・33の上端・37
中層粗砂礫－32・37上半
下 層－21・24～31・33・33′
最下層－34～36・38～42
堀SH27遺物取り上げ
最上層砂礫、第2～4層、淡灰緑色粗砂－a～k
暗褐色土(弥生・古墳時代遺物包含層)－ℓ～n
第2～4層－I・II
中層砂礫－III・IV
下層粘土・粗砂互層－V・VI

第26図 第II区堀SH27・SH29土層実測図

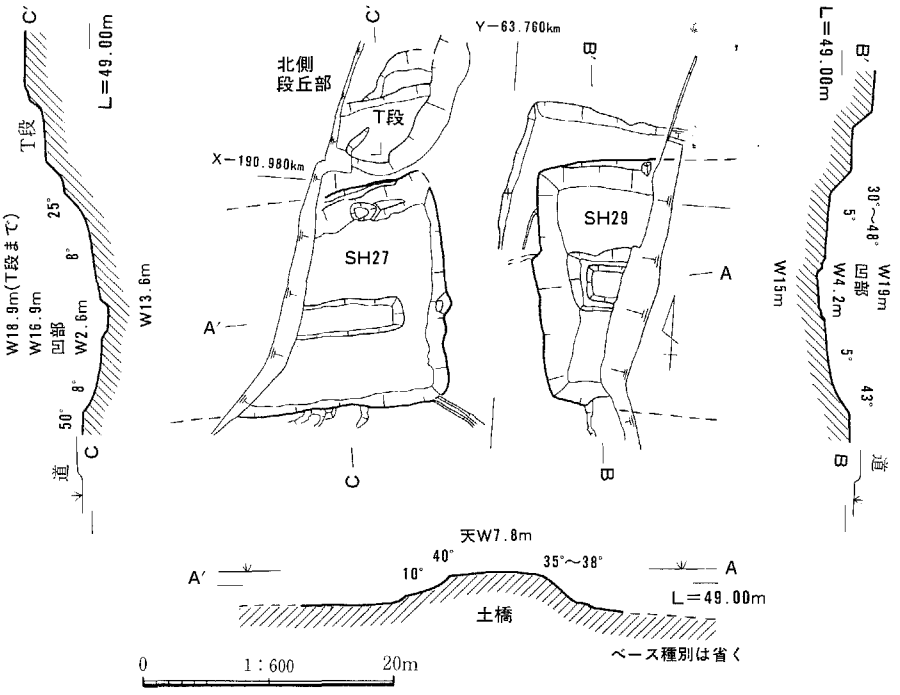
台形状を成している。

堀内部の土層観察（第26図土層Ｇ－Ｇ′）によると堀の中に埋まった土は、粘質土を主体として自然堆積したもの（図27･28･40～42層）と粗砂礫もしくは有機物を多量に含んだ人為的な埋土（図６～８・19・31・32層など）と考えられる両者が存在する。堀の東側は現在の田畑の区画から、さらに調査地外へ続くことが確認でき、中世根来寺の町屋の入口の方向に続くことが確認できる。

出土遺物は、最下層においても江戸時代の土器類（５点）が認められ、最も下部まで江戸時代に人為的に埋められた土や、自然堆積層であることが判明している。出土遺物（265～342など）は奈良時代の物を含み、16世紀後半～17世紀後半を主体としている。全体から見た土器量は少なく、各層の出土破片点数は、上半部の最上層98点、上層230点、下半部の中層307点（内、江戸時代36点）、下層276点(内、江戸時代56点)、最下層は少なく35点が出土している。遺物の内、木製品では木製五輪塔(445)・曲物柄杓(464)・折敷(494)・桶の側板(486・487)・加工材、獣骨などがまとまって出土している。また、下層からは無文銭(408)が出土している。

土橋（第27図、ＰＬ．13）

堀ＳＨ27と堀ＳＨ29の間には掘り残し部分がみられる。つまり調査地の北側に存在する丘陵への通路となる「土橋」を造り出している。土橋の幅は、7.6～8.0mを測り、非常に広い感を与える。土橋上では、土塁･杭列･柱穴などの諸施設を検出することができなかった。



第27図　第Ⅱ区堀SH27－SH29断面実測図

土坑ＳＫ1043（第81図）

堀ＳＨ27の南側のW段２Ｋ69で重複する、大形の土坑である。長軸（東西）5.7m、短軸（南北）２m以上、深さ19～32cmである。土層観察において堀ＳＨ27との堆積層を区分することが出来なかった。堀ＳＨ27の埋土の掘削途中に、土坑ＳＫ1043の範囲と考えられる南北３m×東西６m前後において拳大の円礫を多く含む範囲が認められた。埋土の状況も類似することから、この層位から出土した遺物は当土坑で扱っている。遺物は、江戸時代のものが主体となり、朝鮮粉青沙器碗(390)･織部向付(394)･円盤状土製品（399～401）など143点が出土している。

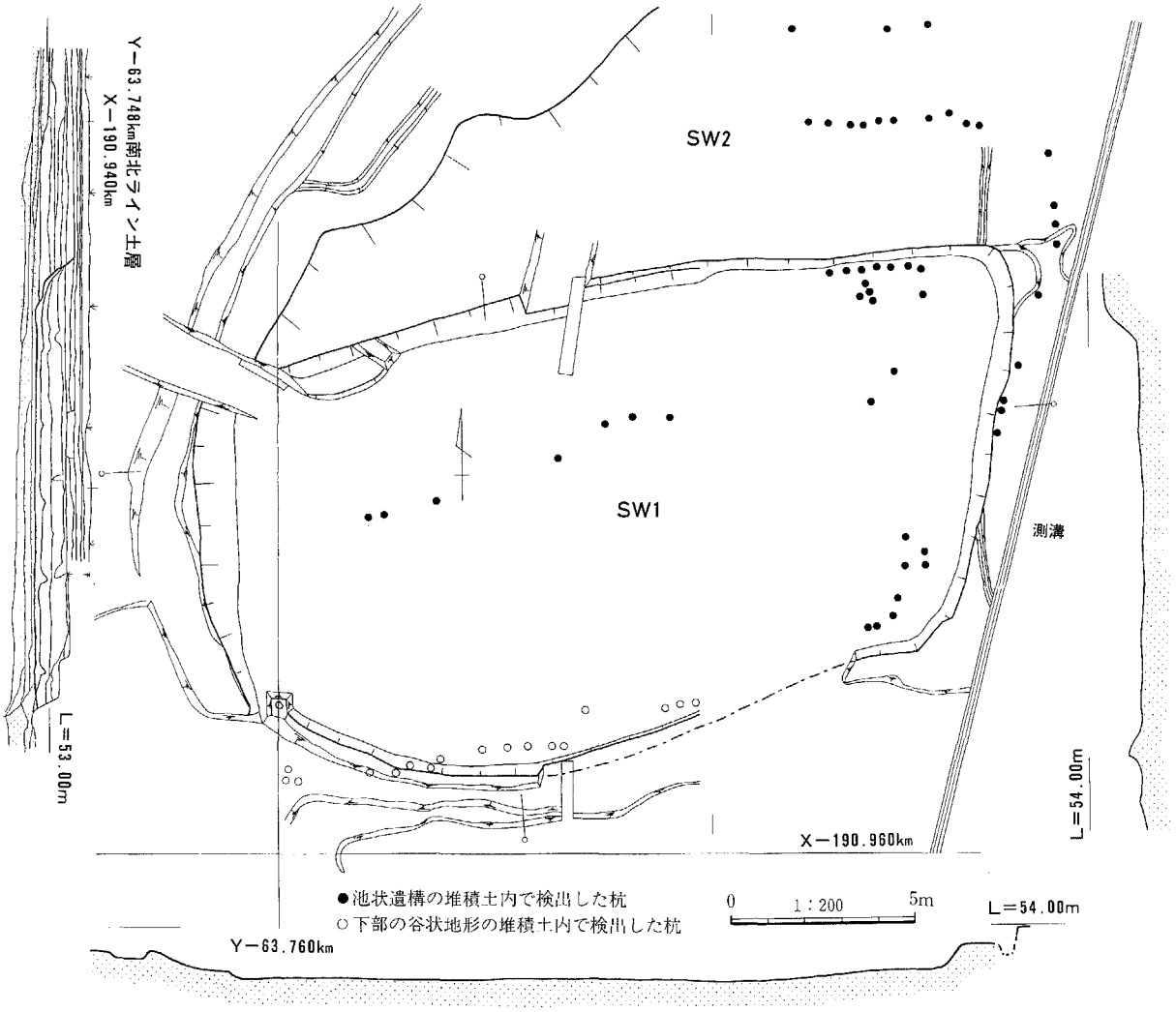
土坑ＳＫ1044は、Ｖ段２Ｆ69で堀ＳＨ29の南東隅に重複し、土坑ＳＫ1043に類似する。大形で、長軸（東西）4.3m以上、短軸（南北）3.4m以上、深さ42cmである。遺物は、江戸時代の肥前系碗（402）

・波佐見碗（403）など17点が出土している。

池状遺構ＳＷ1（第28・31・88図、表６、ＰＬ．16）

Ｐ段の谷状地形に重複して位置する。歪つな楕円形ぎみで、長軸(東西)22.3m、短軸(南北)12.9m、深さ80cm以上の規模である。埋土は大きく二分され、上層の第５～７層にかけては多量の礫を含み、中には黒褐色シルトがブロック状に認められ、明らかに人為的な埋土と考えられるものである。下層はややシルト質の埋土である。上層の人為的埋土、下層において江戸時代の遺物を混入程度に含むため、室町時代末に機能し、江戸時代前期に埋められたものと考えられる。

遺物（531～551）は、最下層で室町時代より新しいものを含まず、土師器皿（533～540）・土釜(542～544)・瓦質鍋(545)・中国製青磁盤(548)などが、上層の礫層からは江戸時代の国産陶磁器などが少量出土している。第５～７層で226点、第５′～７′層で87点、第15層で137点、第21層では663点が



第28図　第Ⅱ区池状遺構SW１実測図

出土している。その他、室町時代の鞴の羽口７点・瓦46点・鍛冶滓２点・砥石２点、江戸時代の瓦９点が出土している。

池状遺構ＳＷ2・3（第28・31・87図、表６）

池状遺構ＳＷ１に重複して、Ｐ段の北側に広がる池状遺構ＳＷ２・３の存在も明らかとなった。ＳＷ１～ＳＷ３の範囲（全てＰ段）には、打ち込み面を明らかにすることができなかったが、一定の方

向性をもった杭列が数箇所に認められる（第28図）。

池状遺構ＳＷ２は、池状遺構ＳＷ1と重複する位置に在り、やや北側が拡大した範囲に広がっている。東西23m以上、南北20m、深さ30cm以上で楕円形ぎみである。土器類(513～530)は、第11～13層で土師器捏鉢(518)・備前壺(525)・景徳鎮窯系染付皿(528・529)・軒丸瓦(530)など589点が出土している。その他、鎌倉時代の瓦１点、室町時代の鞴の羽口４点、瓦36点、石塔１点等が出土している。

第Ⅱ区　谷状地形第24層～第26層

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器		3	0.03
	石器・石製品		7	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	139	1.61
		高坏	7	0.08
		甕・土釜	291	3.37
		鍋		
		製塩土器	2	0.02
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	3,328	38.55
		蓋	412	4.77
		鉢・捏鉢	82	0.95
		壺	871	10.09
		甕・鍋	3,419	39.60
		甑	6	0.07
		高坏	20	0.23
		横瓶	1	0.01
		平瓶	21	0.24
		竈	33	0.38
		その他	2	0.02
小計			8,634	90.42
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	19	22.89
		甕・土釜	22	26.51
		竈		
	黒色土器	坏・皿	1	1.20
		椀	39	46.99
	須恵器			
	緑釉		1	1.20
	灰釉		1	1.20
小計			83	0.87
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	238	34.74
		捏鉢		
		土釜・甕	65	9.49
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	315	45.99
		皿	7	1.02
		足釜	20	2.92
	須恵器（質）	椀・捏鉢	9	1.31
		壺・甕	25	3.65
	陶器	備前	3	0.44
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉		1	0.15
	中国製磁器	青磁	1	0.15
		白磁	1	0.15
小計			685	7.17

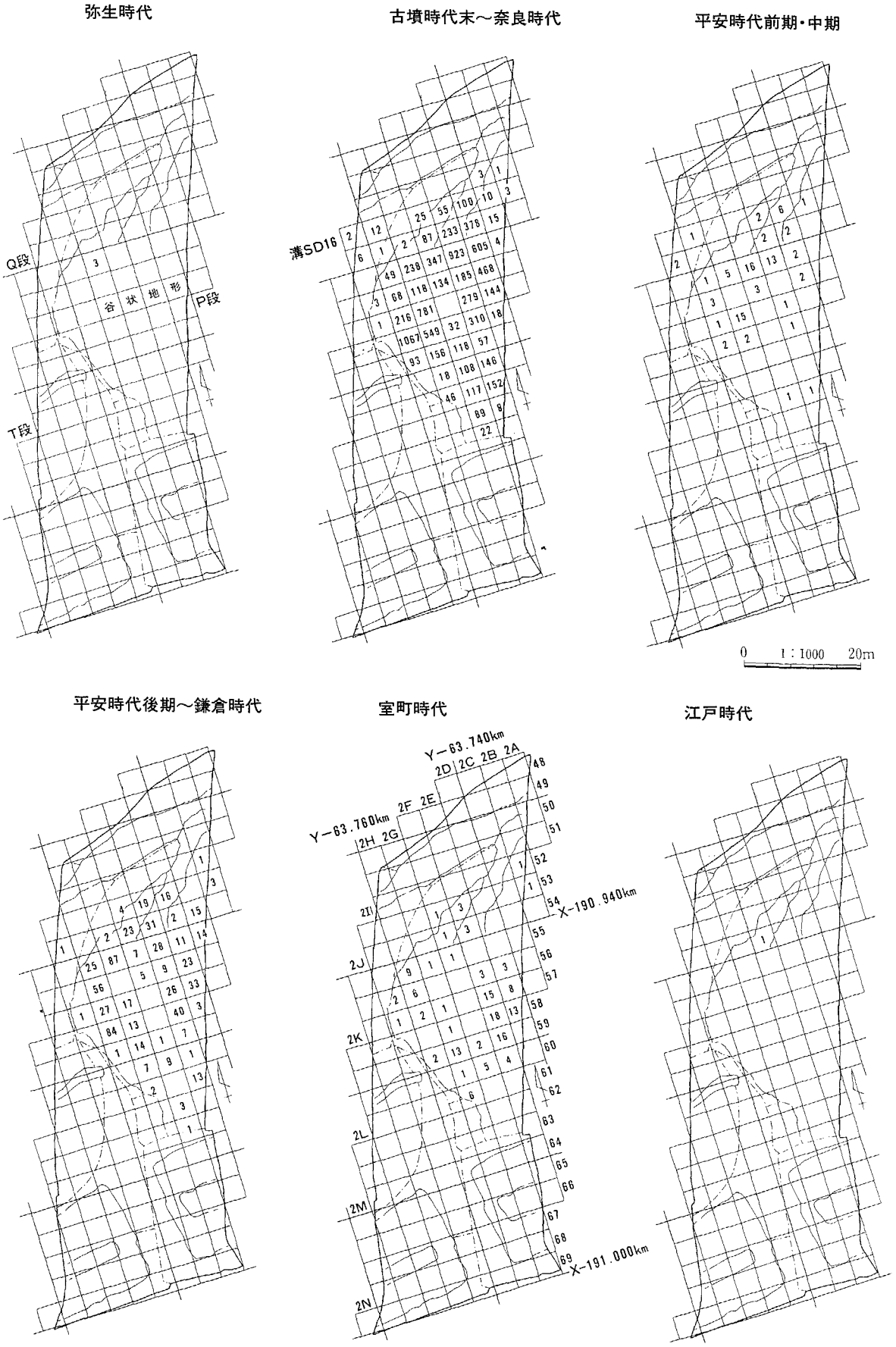
時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	45	31.47
		椀		
		捏鉢	5	3.50
		土釜	37	25.87
		鍋	3	2.10
		蓋		
	瓦器（質）	捏鉢	14	9.79
		土釜	19	13.29
		鍋		
		甕	5	3.50
		湯釜	1	0.70
		火舎・香炉	1	0.70
	陶器	備前	7	4.90
		瀬戸美濃		
		常滑	2	1.40
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁	4	2.80
		白磁		
		染付		
	朝鮮			
	その他	鍋		
小計			143	1.50
江戸	土師器（質）	皿		
		土釜・鍋		
		焙烙		
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前		
		堺		
		瀬戸美濃		
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器		
		肥前系磁器	1	100
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付		
小計			1	0.01
合計			9,549	100

第Ⅱ区　谷状地形第11～13層下の礫・第22層・第23層・第22層＋第24層

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器		1	0.03
	石器・石製品		2	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	26	1.19
		高坏	3	0.14
		甕・土釜	46	2.10
		鍋		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	906	41.41
		蓋	142	6.49
		鉢・捏鉢	15	0.69
		壺	192	8.78
		甕・鍋	833	38.07
		甑		
		甕	1	0.05
		高坏	5	0.23
		横瓶	3	0.14
		平瓶	7	0.32
		竈	9	0.41
小計			2,188	68.57
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	3	23.08
		甕・土釜		
		竈		
	黒色土器	坏・皿	5	38.46
		椀	4	30.77
	須恵器			
	緑釉		1	7.69
	灰釉			
小計			13	0.41
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	232	38.22
		捏鉢	1	0.16
		土釜・甕	81	13.34
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	248	40.86
		皿	14	2.31
		足釜	3	0.49
	須恵器（質）	椀・捏鉢	9	1.48
		壺・甕	5	0.82
	陶器	備前	2	0.33
		常滑	1	0.16
		瀬戸		
	灰釉		1	0.16
	中国製磁器	青磁	8	1.32
		白磁	2	0.33
小計			607	19.02

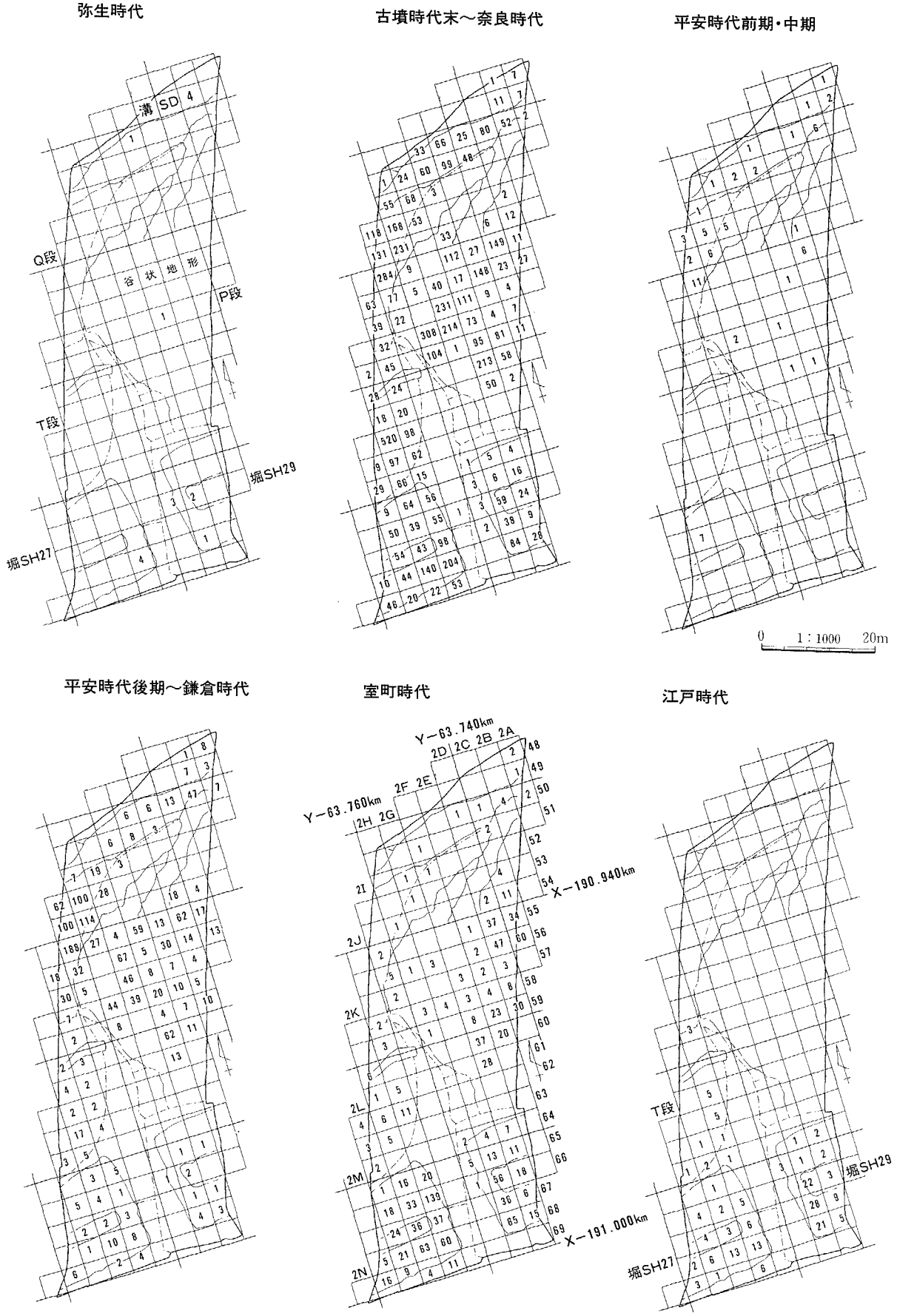
時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	181	47.51
		椀		
		捏鉢	6	1.57
		土釜	85	22.31
		鍋	13	3.41
		蓋	1	0.26
	瓦器（質）	捏鉢	16	4.20
		土釜	26	6.82
		鍋		
		甕	3	0.79
		湯釜	1	0.26
		火舎・香炉	4	1.05
	陶器	備前	23	6.04
		瀬戸美濃	7	1.84
		常滑		
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁	12	3.15
		白磁	1	0.26
		染付	2	0.52
	朝鮮			
	その他	鍋		
小計			381	11.94
江戸	土師器（質）	皿		
		土釜・鍋		
		焙烙		
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前		
		堺		
		瀬戸美濃		
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器		
		肥前系磁器		
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付	1	100
小計			1	0.03
合計			3,191	100

表4　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物の構成比率１



谷状地形第24層～第26層

第29図　第II区遺構・包含層出土遺物の分布密度 1



谷状地形第22層・第23層etc、溝SD4全層、Q・T段遺物包含層、堀SH27・SH29中・下・最下層

第30図　第II区遺構・包含層出土遺物の分布密度２

池状遺構ＳＷ３についても、ＳＷ１・２に重複する位置にあり、ＳＷ２よりさらに北側に規模を広げるものである。東西23m以上、南北25m、深さ70cm以上である。土器類(496～512)は、第14・16層で917点、第17～20層で401点が出土している。その他、奈良時代の瓦４点、鎌倉時代の瓦１点、鍛冶滓１点、土錘１点、坩堝１点、鞴の羽口１点、瓦15点が出土している。

第Ⅱ区　堀ＳＨ27・ＳＨ29中・下・最下層

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器		10	0.44
	石器・石製品		5	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	13	1.01
		高坏		
		甕・土釜	2	0.16
		鍋		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	515	39.92
		蓋	54	4.19
		鉢・捏鉢	19	1.47
		壺	145	11.24
		甕・鍋	527	40.85
		甑		
		甑		
		高坏	3	0.23
		横瓶	5	0.39
		平瓶	3	0.23
		竈	4	0.31
小計			1,290	56.18
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	6	75.0
		甕・土釜		
		竈	2	25.0
	黒色土器	坏・皿		
		椀		
	須恵器			
	緑釉			
	灰釉			
小計			8	0.35
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	9	12.86
		捏鉢		
		土釜・甕	15	21.43
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	27	38.57
		皿		
		足釜		
	須恵器(質)	椀・捏鉢	9	12.86
		壺・甕	5	7.14
	陶器	備前	2	2.86
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁	1	1.43
		白磁	2	2.86
小計			70	3.05

時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	341	45.35
		椀		
		捏鉢	11	1.46
		土釜	8	1.06
		鍋	11	1.46
		蓋	7	0.93
	瓦器(質)	捏鉢	8	1.06
		土釜	17	2.26
		鍋	1	0.13
		甕	5	0.66
		湯釜	15	1.99
		火舎・香炉	33	4.39
	陶器	備前	180	23.94
		瀬戸美濃	25	3.32
		常滑	6	0.80
		丹波	1	0.13
		信楽		
	中国製磁器	青磁	24	3.19
		白磁	15	1.99
		染付	16	2.13
	朝鮮		4	0.53
	その他	鍋	24	3.19
小計			752	32.75
江戸	土師器(質)	皿		
		土釜・鍋	5	3.01
		焙烙	1	0.6
	瓦質	甕	1	0.6
		火舎・火鉢	1	0.6
	陶磁器	備前	17	10.24
		堺	2	1.20
		瀬戸美濃	14	8.43
		常滑		
		丹波	2	1.20
		伊賀信楽系	7	4.22
		肥前系陶器	71	42.77
		肥前系磁器	29	17.47
		志野	4	2.41
		織部		
		京焼系	1	0.60
	中国製磁器	青磁		
		白磁	1	0.60
		染付	10	6.02
小計			166	7.23
合計			2,296	100

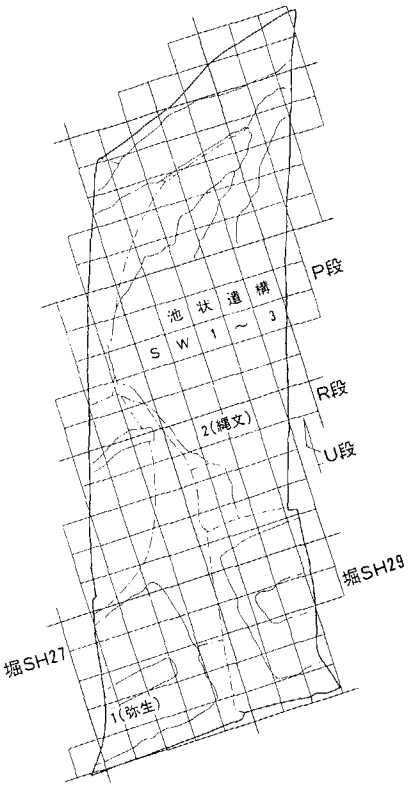
第Ⅱ区　堀ＳＨ27・ＳＨ29最上・上層

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器		1	0.05
	石器・石製品		3	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	13	1.12
		高坏		
		甕・土釜	1	0.09
		鍋		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	550	47.45
		蓋	61	5.26
		鉢・捏鉢	9	0.78
		壺	108	9.32
		甕・鍋	411	35.46
		甑		
		甑		
		高坏		
		横瓶		
		平瓶	4	0.35
		竈	2	0.17
小計			1,159	56.87
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	1	100
		甕・土釜		
		竈		
	黒色土器	坏・皿		
		椀		
	須恵器			
	緑釉			
	灰釉			
小計			1	0.05
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	28	28.57
		捏鉢		
		土釜・甕	11	11.22
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	49	50.00
		皿	2	2.04
		足釜		
	須恵器(質)	椀・捏鉢	2	2.04
		壺・甕	1	1.02
	陶器	備前		
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁	1	1.02
		白磁	4	4.08
小計			98	4.81

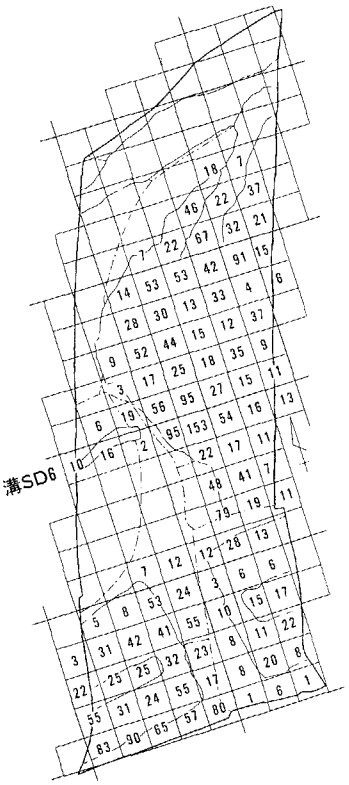
時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	90	27.27
		椀	1	0.30
		捏鉢	9	2.73
		土釜	15	4.55
		鍋	4	1.21
		蓋		
	瓦器(質)	捏鉢	8	2.42
		土釜	23	6.97
		鍋		
		甕	3	0.91
		湯釜		
		火舎・香炉	13	3.94
	陶器	備前	124	37.58
		瀬戸美濃	9	2.73
		常滑	7	2.12
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁	13	3.94
		白磁	6	1.82
		染付	3	0.91
	朝鮮			
	その他	鍋	2	0.61
小計			330	16.19
江戸	土師器(質)	皿	8	1.78
		土釜・鍋	4	0.89
		焙烙	18	4.01
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢	2	0.45
	陶磁器	備前	31	6.90
		堺	19	4.23
		瀬戸美濃	48	10.69
		常滑	3	0.67
		丹波	6	1.34
		伊賀信楽系	14	3.12
		肥前系陶器	118	26.28
		肥前系磁器	169	37.64
		志野	2	0.45
		織部		
		京焼系	1	0.22
	中国製磁器	青磁		
		白磁	3	0.67
		染付	3	0.67
小計			449	22.03
合計			2,038	100

表５　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物の構成比率２

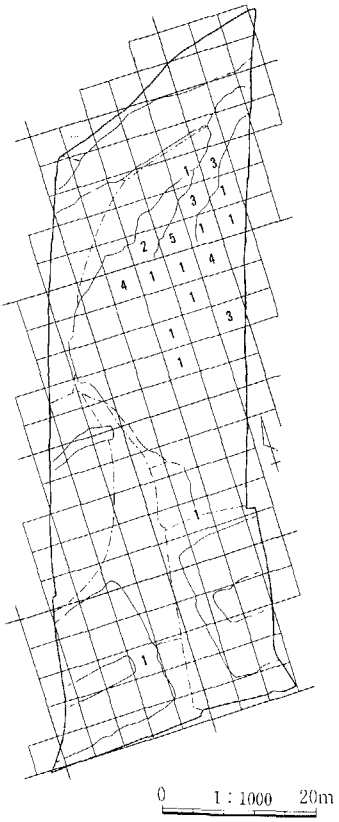
縄文・弥生時代



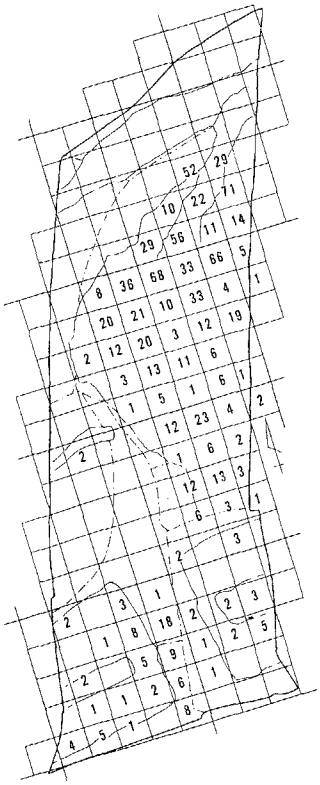
古墳時代末～奈良時代



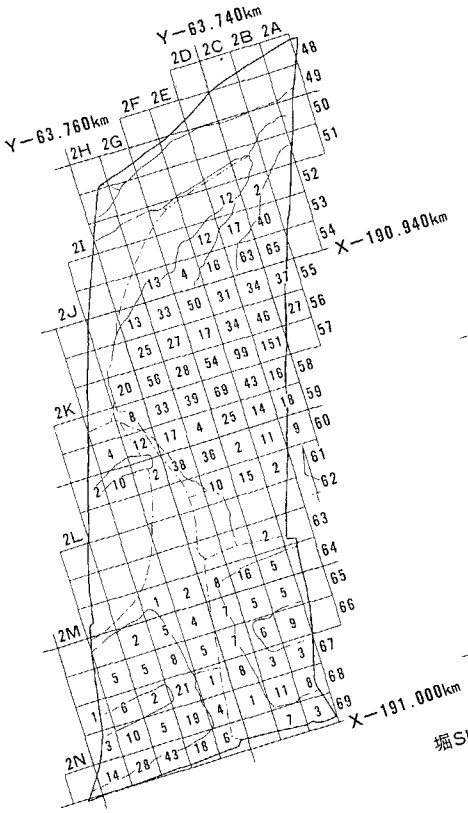
平安時代前期・中期



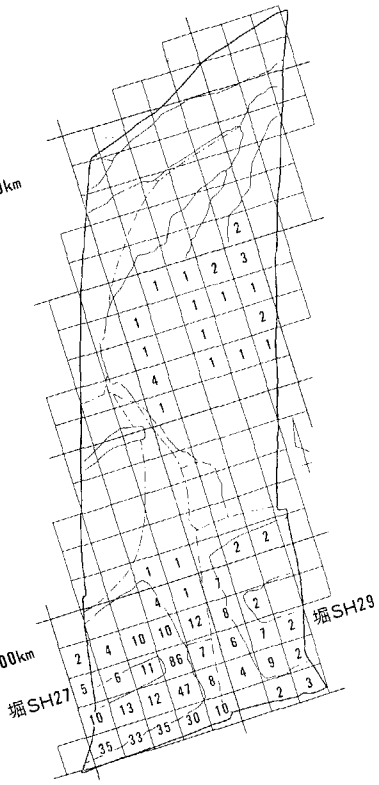
平安時代後期～鎌倉時代



室町時代



江戸時代



池状遺構SW1・SW2・SW3、R段・U段整地土、堀SH27・SH29 最下・上層、溝SD6

第31図　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物の分布密度３

3　遺物包含層と出土遺物（第13・32・89図、表６）

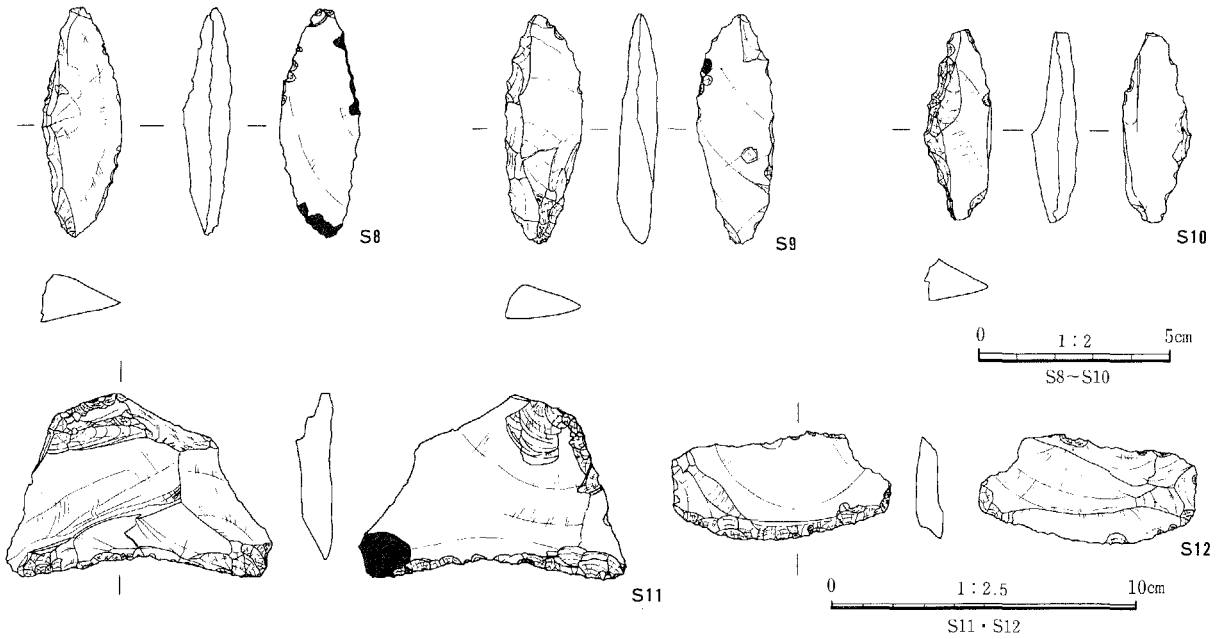
Ｑ・Ｔ段の遺物包含層

遺物包含層で顕著な存在を示しているのが、Ｑ・Ｔ段である。その他の地区における堆積層は、基本的に大規模な遺構の堆積土であったり、遺構の人為的な埋土と考えられる。Ｑ段では第５～８層については、大半の遺物が奈良・鎌倉時代であるが、少量の室町時代（16世紀代）の遺物を含むことから、その時期に整地されたものと考えられる。

Ｔ段の遺物包含層の内、最下層に当る第９層でも大半が奈良時代の遺物であるが、微量の室町時代(16世紀代)の遺物を含むことから、Ｑ段と同様のことが考えられる。土器類は、Ｑ段の第３～６層で528点、第７・８層で1,537点、Ｔ段で710点が出土している。その他、Ｑ・Ｔ段の遺物包含層からは、旧石器～弥生時代にかけてのサヌカイト製石器(Ｓ８・Ｓ10)など10点が出土している。

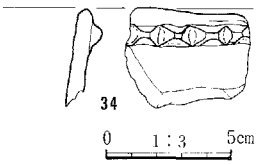
Ｖ・Ｗ段間の遺物包含層（第32図）

堀の掘り込み面には、弥生時代の土器（32点）・石器(Ｓ11)を包含する暗褐色土（第13図７～９層）が認められる。暗褐色土の最も新しい遺物は、奈良時代である。暗褐色土の堆積層の下で幅約5.6m、深さ約1.5mの自然流路を確認することができた。遺物は、微細な素焼き土器１点が出土しているが、時期は不明である。自然流路は、堀ＳＨ29を破壊しない程度の確認に留めている。



旧石器～弥生時代石器

第32図　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物実測図



第Ⅱ区　Ｑ段・Ｔ段遺物包含層

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品		3	
弥生	弥生土器・古式土師器			
	石器・石製品		7	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	40	2.13
		高坏	2	0.11
		甕・土釜	102	5.43
		鍋		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	717	38.20
		蓋	109	5.81
		鉢・捏鉢	12	0.64
		壺	211	11.24
		甕・鍋	677	36.07
		甑		
		聰		
		高坏	4	0.21
		横瓶		
		平瓶		
		竈	3	0.16
小計			1,877	67.64
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	18	54.55
		甕・土釜	2	6.06
		竈	1	3.03
	黒色土器	坏・皿	1	3.03
		椀	11	33.33
	須恵器			
	緑釉			
	灰釉			
小計			33	1.19
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	396	50.32
		捏鉢		
		土釜・甕	54	6.86
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	306	38.88
		皿	11	1.40
		足釜	10	1.27
	須恵器(質)	椀・捏鉢	1	0.13
		壺・甕	4	0.51
	陶器	備前	3	0.38
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁		
		白磁	2	0.25
小計			787	28.36

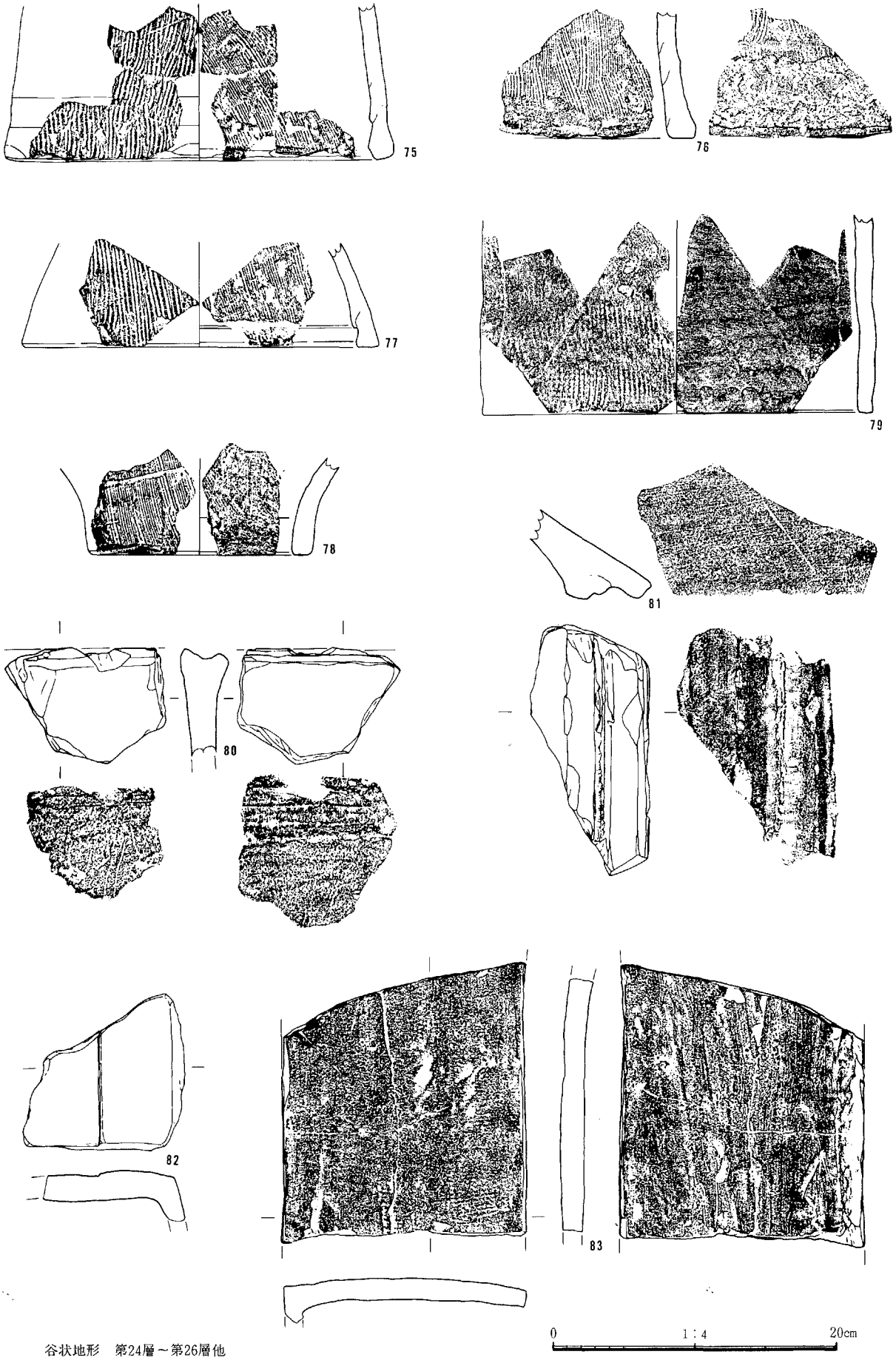
時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	17	29.31
		椀		
		捏鉢	1	1.72
		土釜	4	6.90
		鍋	2	3.45
		蓋		
	瓦器(質)	捏鉢	3	5.17
		土釜	3	5.17
		鍋	1	1.72
		甕	2	3.45
		湯釜	1	1.72
		火舎・香炉	1	1.72
	陶器	備前	9	15.52
		瀬戸美濃	1	1.72
		常滑		
		丹波		
		信楽	1	1.72
	中国製磁器	青磁	5	8.62
		白磁	5	8.62
		染付	2	3.45
	朝鮮			
	その他	鍋		
小計			58	2.09
江戸	土師器(質)	皿		
		土釜・鍋		
		焙烙	1	5.0
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前	2	10.0
		堺		
		瀬戸美濃	1	5.0
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系	1	5.0
		肥前系陶器	1	5.0
		肥前系磁器	13	65.0
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付	1	5.0
小計			20	0.72
合計			2,775	100

第Ⅱ区　池状遺構ＳＷ１・ＳＷ２・ＳＷ３、Ｒ段・Ｕ段整地土

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器		2	0.05
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器			
	石器・石製品		3	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	20	1.15
		高坏		
		甕・土釜	31	1.78
		鍋		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	544	31.30
		蓋	152	8.75
		鉢・捏鉢	27	1.55
		壺	193	11.10
		甕・鍋	760	43.73
		甑		
		聰		
		高坏	3	0.17
		横瓶	3	0.17
		平瓶	3	0.17
		竈	2	0.12
小計			1,738	42.68
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	9	25.71
		甕・土釜	10	28.57
		竈	1	2.86
	黒色土器	坏・皿	1	2.86
		椀	12	34.29
	須恵器		1	2.86
	緑釉			
	灰釉			
小計			35	0.86
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	275	34.12
		捏鉢	1	0.12
		土釜・甕	117	14.52
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	321	39.83
		皿	28	3.47
		足釜	3	0.37
	須恵器(質)	椀・捏鉢	31	3.85
		壺・甕	11	1.36
	陶器	備前	6	0.74
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉		1	0.12
	中国製磁器	青磁	8	0.99
		白磁	4	0.50
小計			806	19.79

時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	849	58.03
		椀		
		捏鉢	37	2.53
		土釜	211	14.42
		鍋	13	0.89
		蓋		
	瓦器(質)	捏鉢	51	3.49
		土釜	56	3.83
		鍋	18	1.23
		甕	21	1.44
		湯釜	2	0.14
		火舎・香炉	15	1.03
	陶器	備前	112	7.66
		瀬戸美濃	18	1.23
		常滑	8	0.55
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁	30	2.05
		白磁	11	0.75
		染付	11	0.75
	朝鮮			
	その他	鍋		
小計			1,463	35.93
江戸	土師器(質)	皿		
		土釜・鍋		
		焙烙		
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前		
		堺		
		瀬戸美濃	4	14.29
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器	12	42.86
		肥前系磁器	6	21.43
		志野	1	3.57
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付	5	17.86
小計			28	0.69
合計			4,072	100

表６　第Ⅱ区遺構・包含層出土遺物の構成比率３



谷状地形　第24層～第26層他

第33図　第II区谷状地形出土の特殊遺物実測図

第３節　第Ⅲ区の検出遺構と出土遺物

第Ⅲ区の現況は、水田・宅地で５段の段差（Ｋ段～Ｎ段）から成り、調査地の北と南で約５ｍの高低差が存在する。第Ⅲ区は、全調査区の中で最も遺構密度の高い地区である。

１　基本層序（第34図、写真12）

第Ⅲ区も現況地形の高低差が著しいため、各段により基本層序をかなり異にする。最も安定していると思われるＫ・Ｎ段の状況について概述しておく。

Ｋ段においては現在の耕土・床土、江戸時代の旧耕土・旧床土（図３～６層）と考えられる。それより以下は、黒褐色粒の沈殿層を伴う室町時代の耕作土α層（図６層）・β層（図７・８層）となる。遺物は少量である。

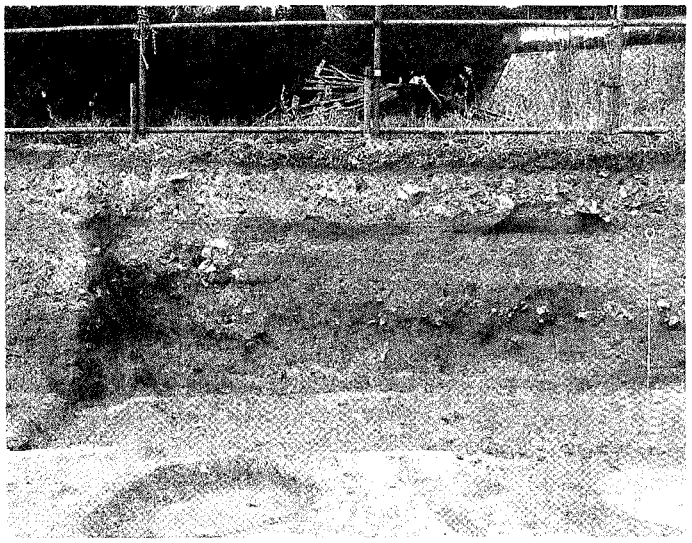
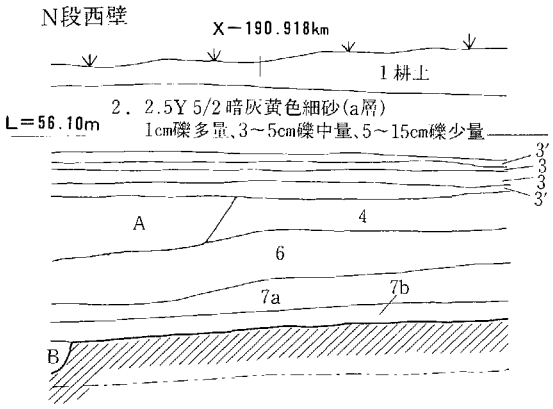
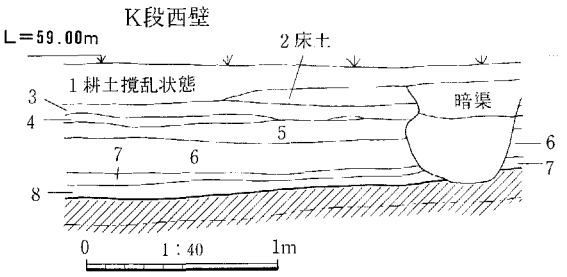


写真12　第Ⅲ区Ｎ段西壁土層（東から）

Ｎ段においては遺物包含層の項で詳述するが、客土及び耕土・床土、その下に旧耕土・旧床土（第３層が旧耕土）が存在する。以下、図４～７層及び第８層が続き、遺物の接合関係からほぼ同一時期ではあるが、若干の間を置いた人為的な整地土と考えられる。さらに、その下に旧石器を含む二次的な堆積層が存在する。





（　）内は遺物取り上げ層位

2・A 整地土　3・3′. 旧耕土(第3層)、４．遺物包含層(第4層)
6．遺物包含層(第6層)、７．遺物包含層(第7層)
3．2.5Y 5/1 黄灰色細砂・粗砂、5mm暗褐色粒多量
3′. 2.5Y 5/1 黄灰色細砂・粗砂、5mm暗褐色粒少量
4．10YR 5/2～4/2 灰黄褐色細砂・シルト
3mm暗褐色粒少量・1mm大多量
6．10YR 4/2 灰黄褐色～4/3にぶい黄褐色細砂・シルト
7a. 2.5Y 5/1 黄灰色細砂、5mm礫中量、5cm大少量
7b. 2.5Y 5/1 黄灰色細砂、1cm礫少量
ベース　2.5Y 6/2 灰黄色～6/3 にぶい黄色細砂・粗砂、1～5cm礫多量

3～5. 旧耕土(第3′層・第4′層)、６．旧耕土(α層)、7・8. 旧耕土(β層)
3．2.5Y 6/1 黄灰色シルト・細砂、3～5mm黒褐色粒少量、
10YR 6/8 明黄褐色細砂まだら
4．2.5Y 6/2 灰黄色細砂・シルト、
10YR 6/6～6/8 明黄褐色細砂・シルト
5．10YR 6/6～6/8 明黄褐色細砂
6．2.5Y 6/1 黄灰色細砂～10YR 6/1 褐灰色細砂・粗砂
5mm黒褐色粒少量
7．4に類似、黒褐色粒中量
8．10YR 5/1～4/1 褐灰色細砂・シルト
0.5～1cm黒褐色粒極多量
ベース　2.5Y 7/3 浅黄色～6/3 にぶい黄色細砂・シルト

第34図　第Ⅲ区の基本層序

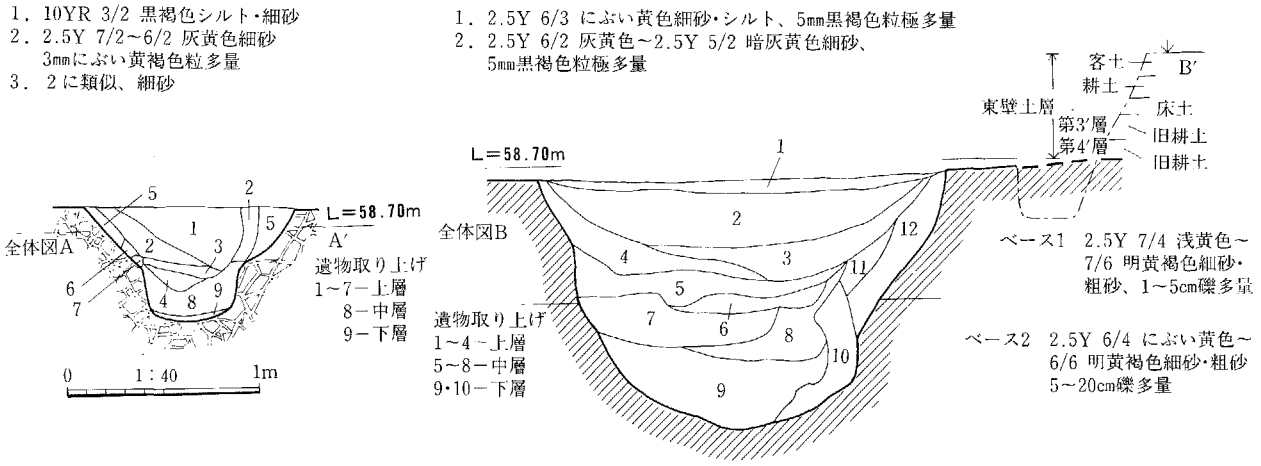
2　検出遺構と出土遺物（第36図、ＰＬ．17）

第Ⅲ区の検出遺構は、Ｌ～Ｎ段にかけて集中する。また、土坑墓・堀・溝など、遺構の掘形の明確なものが多い。遺構・遺物包含層の遺物は、破片点数では第Ⅰ区よりかなり少ないが、他地区に比べて完存品や大破片の多いことが特徴である。

溝ＳＤ38と溝群（第35・90図、ＰＬ．18）

Ｋ段の東端、Ｔ31－Ｔ36に位置する。第２次調査地の溝ＳＤ36の延長部分に当り、東側の江戸時代以後の溝数条と並行して、北から南方向に緩やかに蛇行して延びる。北側は幅1.1m、深さ60cm、南側は幅2.14m、深さ1.3m、延長約25m分を検出した。遺物は奈良時代の須恵器、鎌倉時代の瓦器椀(607・608)・土釜・土師器皿など、中層で10点、上層で室町時代のものを含み37点が出土している。

溝ＳＤ38の東側に並行する位置に溝ＳＤ36・39などの溝群が存在する。これらの溝群は、粗砂礫層を多量に含み、遺物も江戸時代のものが出土している。第Ⅲ区堀ＳＨ47と第Ⅳ区堀ＳＨ１の間に、現在の水路と畔道が同一方向に延びることから、この土橋部分の方向性を踏襲したものと考えられる。



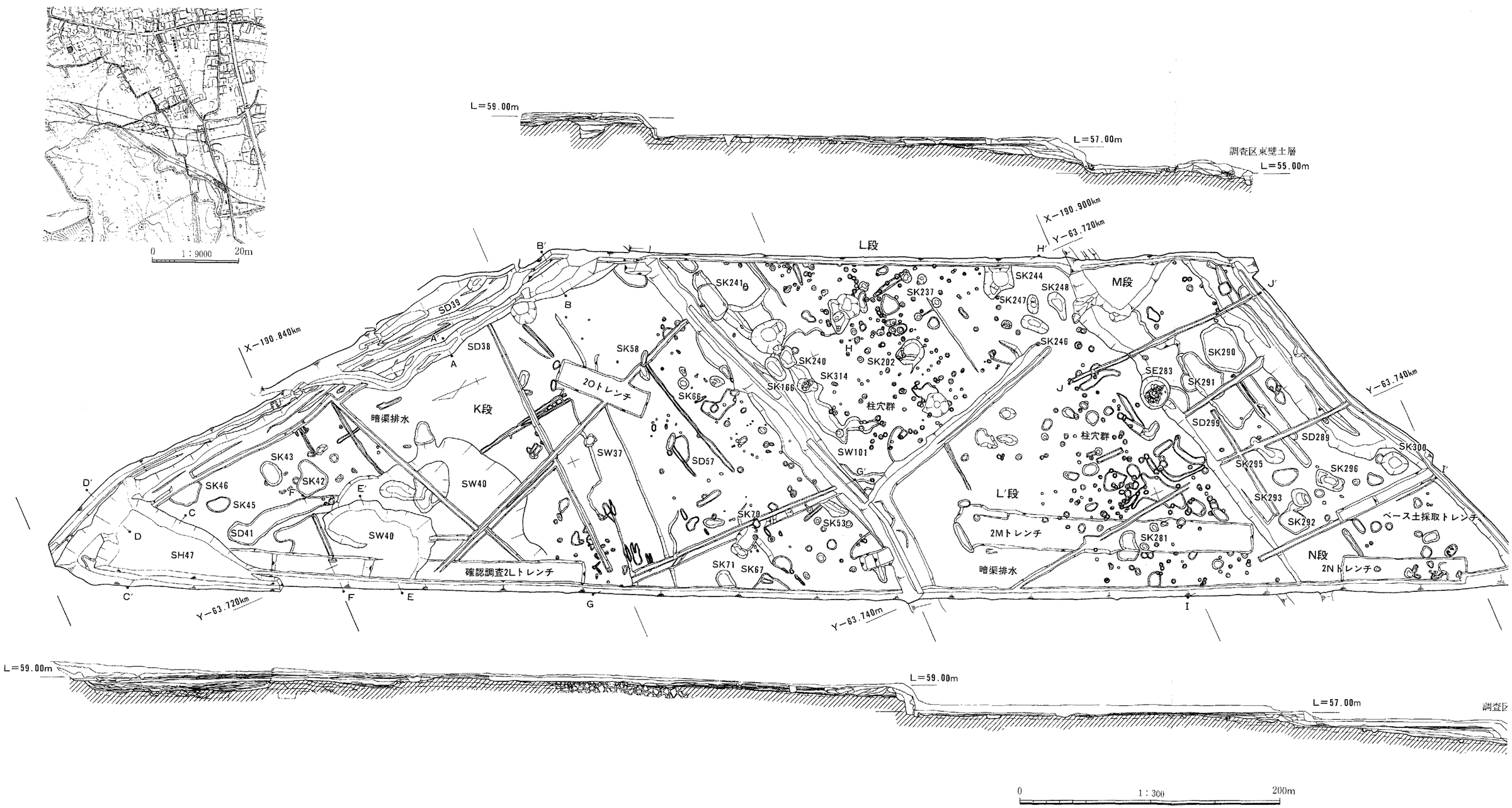
第35図　第Ⅲ区溝SD38東西土層実測図

土坑ＳＫ237（第37・90図、ＰＬ．18）

Ｌ段のW42に位置し、楕円形ぎみの土坑である。短軸（南北）0.74m、長軸（東西）1.0m、深さ33cmである。土坑の西側に偏って馬の歯が、中央に須恵質捏鉢(618)が破砕された状況で出土している。本来、馬の上顎骨が埋め置かれていたものが削平を受け、皮質・骨が溶解したものと判断される。この出土状況から、墓址的な性格をもったものと考えられる。土器類は27点が出土している。

土坑墓ＳＫ240（第38・90図、ＰＬ．19）

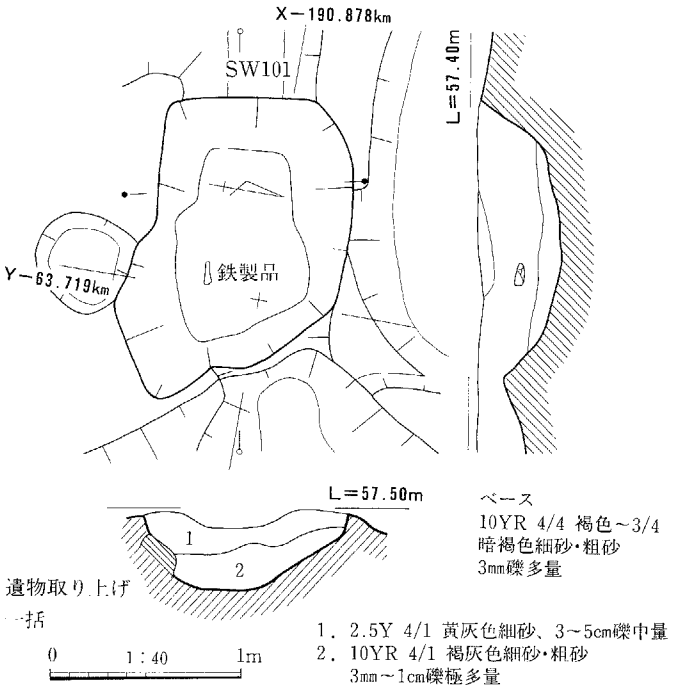
Ｌ段の北端、W39に位置し、西半は隅円方形、東半は歪つな土坑である。室町時代のＳW101に重複する。短軸(南北)1.05m、長軸(東西)1.55m、深さ45cmである。土坑の南側に偏って鎌状鉄製品(628)が出土している。土器は堆積土に混じり込んだ７点が出土しているに過ぎない。



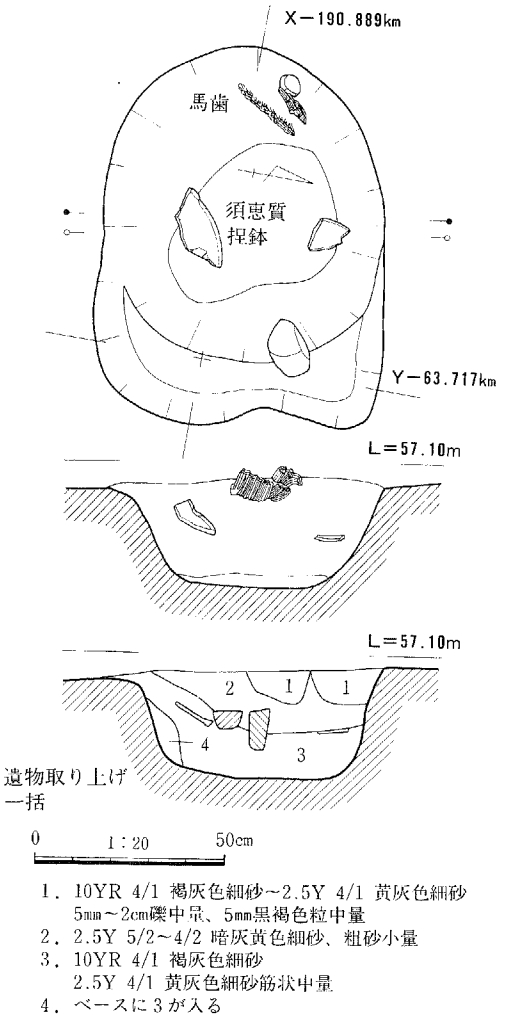
第36図　第Ⅲ区調査遺構全体図

土坑墓ＳＫ241（第39・90図、ＰＬ．19）

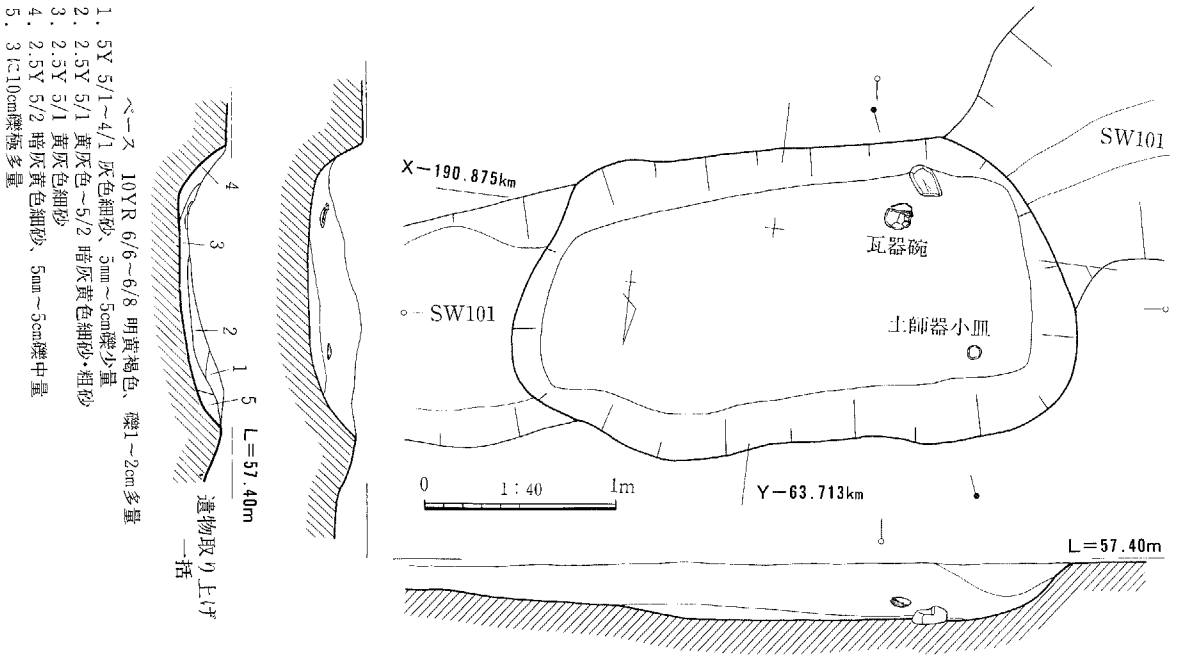
Ｌ段の北東端、Ｖ38に位置し、隅円方形の土坑である。室町時代の落ち込み状遺構ＳＷ101に重複する。短軸（南北）1.54m、長軸（東西）2.9m、深さ30cmである。土坑の西側に偏って瓦器椀(615)と土師器小皿が埋置された状況で出土している。土師器小皿は遺存状況が悪く、取上げ後に粉砕した。土器類は25点が出土している。



第38図　第Ⅲ区土坑墓SK240実測図



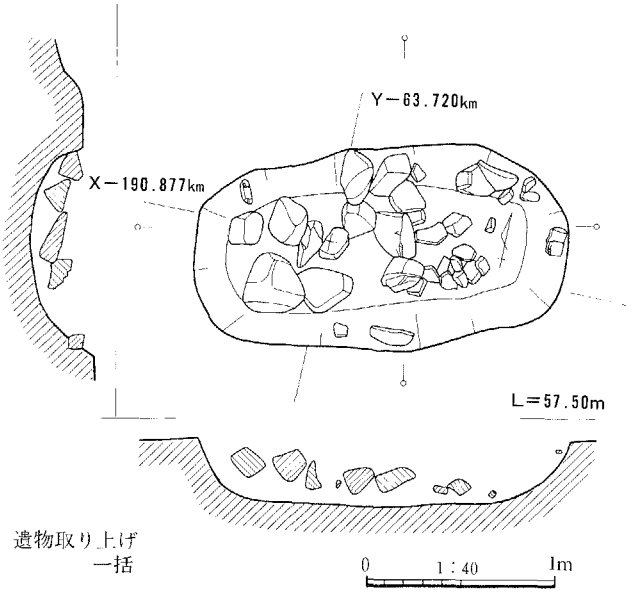
第37図　第Ⅲ区土坑SK237実測図



第39図　第Ⅲ区土坑墓SK241実測図

集石土坑ＳＫ166（第40図、ＰＬ．19）

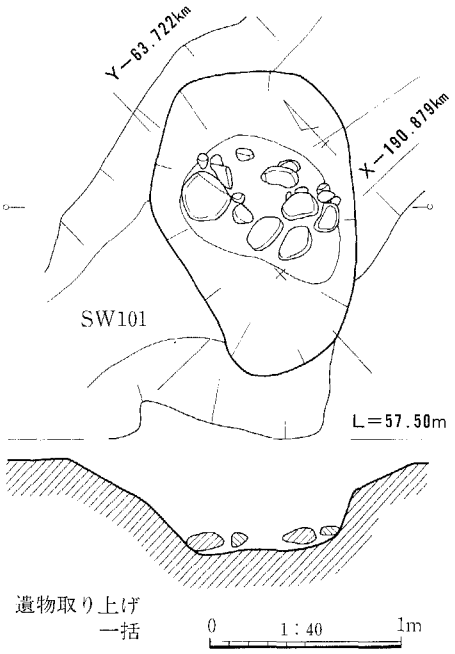
Ｌ段の北端、Ｗ・Ｘ39に位置し、ほぼ楕円形の土坑である。短軸（北々西－南々東）1.08m、長軸(東北東－西南西)2.0m、深さ38cmで、土坑の中には５～30cm大の砂岩の割石・自然石が無作為に入っている状態である。遺物は鎌倉時代の土師器１点、室町時代の土師器１点が出土している。



第40図　第Ⅲ区集石土坑SK166実測図

集石土坑ＳＫ202

Ｌ段の中央、Ｘ41に位置する。不整形で、室町時代の落ち込み状遺構ＳＷ101に伴う土坑である。短軸(東西)1.94m、長軸(南北)2.5m、深さ24cmである。土坑の中には集石土坑ＳＫ166と同様に５～28cm大の砂岩の割石・自然石が無作為に入っている状態である。遺物は出土していない。



第41図　第Ⅲ区集石土坑SK314実測図

集石土坑ＳＫ314

Ｌ段の北端、Ｘ39に位置し、楕円形ぎみの土坑である。長軸(北東－南西)1.6m、短軸(南東－北西)１m、深さ30cmで、ＳＫ166と同様に基底部に円礫が詰まっており、同様の性格をもったものである。遺物は出土していない。Ｌ段では、このような円礫を詰め込むことにおいて共通する土坑が数基ある。集石土坑の性格は、現状では不明である。

落ち込みSW101内集石土坑（第92・93図）

Ｌ段の北端で土坑墓ＳＫ240と土坑墓ＳＫ241の間に位置する、楕円形ぎみの土坑である。室町時代のＳＷ101に伴う土坑である。短軸2.5m、長軸3.0m、深さ0.6mで、土坑の中には10～30cm大の砂岩の割石・自然石が多量に入っている状態である。遺物は鎌倉～室町時代の土師器土堝・皿・瓦器碗・瓦質土器、陶磁器などが出土している。

土坑ＳＫ244（ＰＬ．19）

Ｌ段のＸ43に位置し、歪つな方形の土坑である。短軸（南北）2.23m、長軸（東西）2.35m以上、深さは北肩から64cm、南肩から26cmである。遺物は、奈良時代の須恵器２点、鎌倉時代の土師器15点、瓦器15点、須恵器３点、室町時代の瓦質土釜１点、奈良時代の陶棺？１点が出土している。

土坑ＳＫ244に類似する深い土坑は、Ｌ段の南端で土坑ＳＫ246・247・248などが、Ｎ段の西側で土坑ＳＫ293・294・295・296・300など、一定の範囲に集中して位置する。

土坑ＳＫ246（ＰＬ．19）

Ｌ段のＸ44に位置し、楕円形ぎみの土坑である。短軸（北西－南東）1.05m、長軸（北東－南西）2.16m、深さは54cmである。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ247（ＰＬ．19）

Ｌ段のＸ44に位置し、やや楕円形ぎみの土坑である。短軸（南西－北東）0.84m、長軸（北西－南東）1.4m、深さ52cmである。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ248（ＰＬ．19）

Ｌ段のＸ・Ｙ44に位置し、やや楕円形ぎみの土坑である。短軸（南北）1.06m、長軸（東西）2.3m、深さ40cmである。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ290（第90図）

Ｎ段の２Ａ・２Ｂ47に位置し、浅い大形土坑である。短軸（南北）2.7m、長軸（東西）4.2m、深さ16～30cmである。埋土は単純層であるが、比較的拳大の礫の目立つ土坑である。土器類は、14世紀後半～15世紀初頭の土師器皿(623・624)・土釜(626)、坩堝(625)など25点が出土している。

土坑ＳＫ291

土坑ＳＫ290の北側、Ｎ段の２Ｂ46に位置し、楕円形で大形の土坑である。長軸(東西)4.3m、短軸(南北)1.4～2.3m、深さ10～26cmである。土坑290と形態・遺物内容の類似する土坑である。ＳＫ291は井戸（ＳＥ283）の南側だけにあるのではなく、西側にも広がる、かなり規模の大きい土坑であった可能性が考えられる。土坑ＳＫ290・291の上層部について、遺物包含層の掘削途中に掘り込み過ぎた嫌いがあり、本来の土坑の肩部を削平した可能性がある。

土坑ＳＫ293（ＰＬ．19）

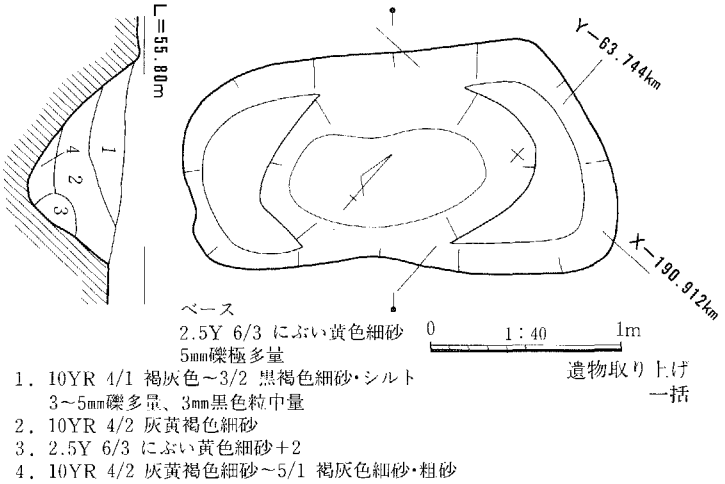
Ｎ段の２Ｅ47に位置し、歪つな隅円方形の土坑である。短軸（南北）1.3m、長軸（東西）1.45m、深さ34cmである。遺物は、鎌倉時代の土師器１点が出土している。

土坑ＳＫ295（ＰＬ．19）

Ｎ段の２Ｄ47に位置し、歪つな楕円形の土坑である。短軸（北西－南東）1.0m、長軸（西南西－東北東）3.0m、深さ72cmである。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ296（第42図、ＰＬ．19）

Ｎ段の２Ｅ48に位置し、歪つな土坑である。短軸(北西－南東)1.1m、長軸(北東－南西)2.3m、深さ50cmで、土坑の中央部で深さ10cm落ち込む、二段掘りの土坑である。埋土は細砂層を主体とし、さほど砂礫層を含まない状況にある。遺物は、奈良時代の土師器（製塩土器）１点が出土している。



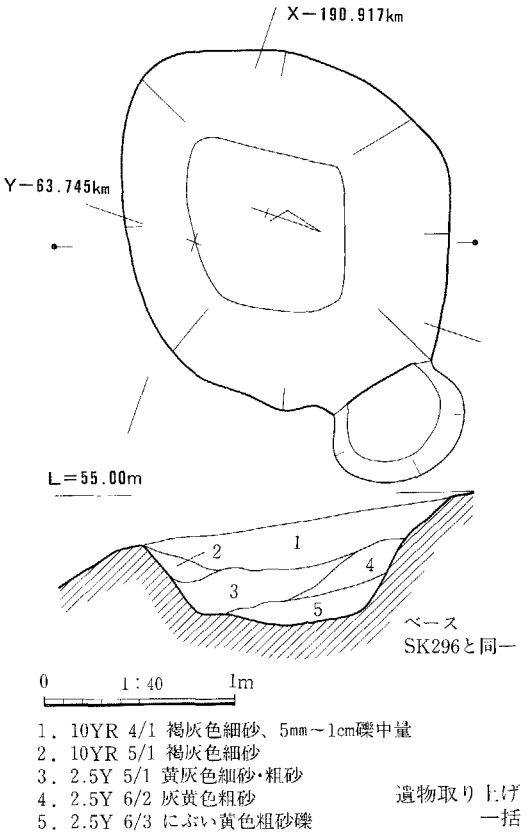
第42図　第Ⅲ区土坑SK296実測図

土坑ＳＫ300（第43図、ＰＬ．19）

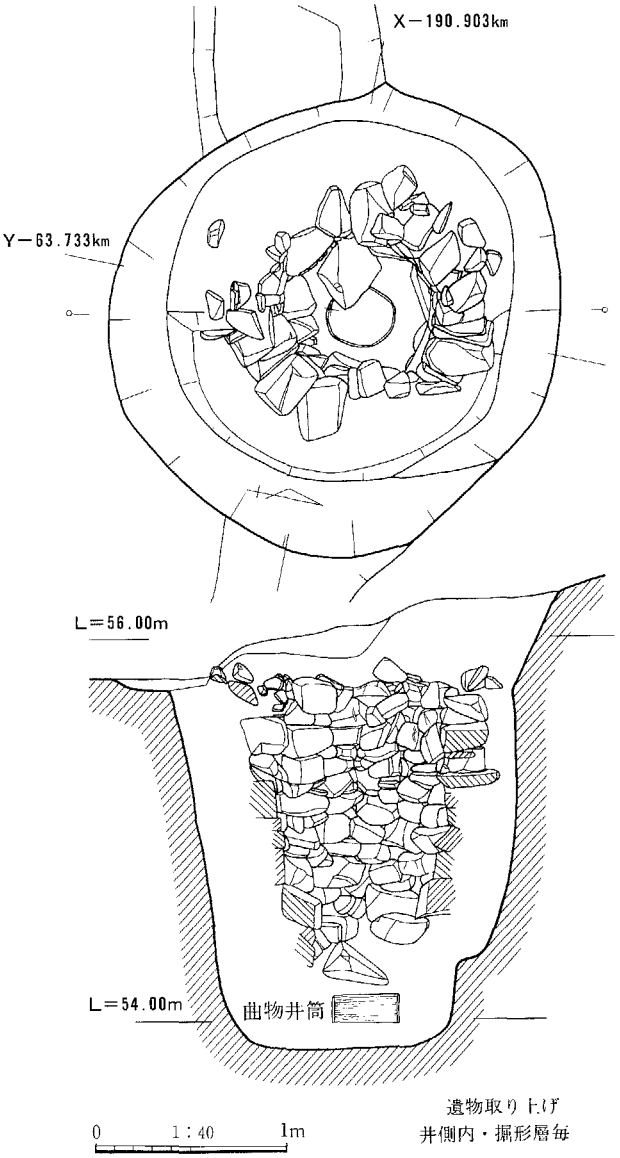
Ｎ段の２Ｅ49に位置し、やや歪つな円形の土坑である。短軸（南北）1.7m、長軸（東西）1.75m、深さ54cmである。埋土は大きく三区分され、あまり変化のみられない堆積層である。遺物は、奈良時代の須恵器12点、鎌倉時代の土師器７点・瓦器２点、室町時代の土師器１点などが出土している。

井戸ＳＥ283（第44・90・91図、ＰＬ．20）

Ｌ′段とＮ段の段の境目、２Ｂ45に位置し、ほぼ円形である。井戸は石組で、上半の石積みが崩落しており、かなり乱れた状態で検出されている。井側は上部径（南北）84cm×（東西）67cm、下部径78cm、深さ1.6mである。堆積土の下層から木製の曲物・木製道具：先端が炭化したもの：(642・643)・折敷(641)・板材などが出土している。井戸の掘形は直径1.8～2.05m、深さ2.4mまで掘り込まれ、基底部に井筒として直径35cm、高さ15cmの曲物(640)が据えられている。石組の最下部と曲物の間の石積みは認められなかった。現状でも井戸の検出面から－1.4mで湧水が有り、常時水を湛えている。土器類は、井側内最下層で土師器小皿（630）など９点、下層で４点、中層で瓦質火舎（632）・湯釜（633）など14点、最上層・上層で９点、掘形で土師器皿（635～637）・土釜（638・639）など24点が出土している。その他、古墳時代末～奈良時代の陶棺３点、鎌倉時代の瓦１点、室町時代の瓦４点が出土している。



第43図　第III区土坑SK300実測図



第44図　第III区井戸SE283実測図

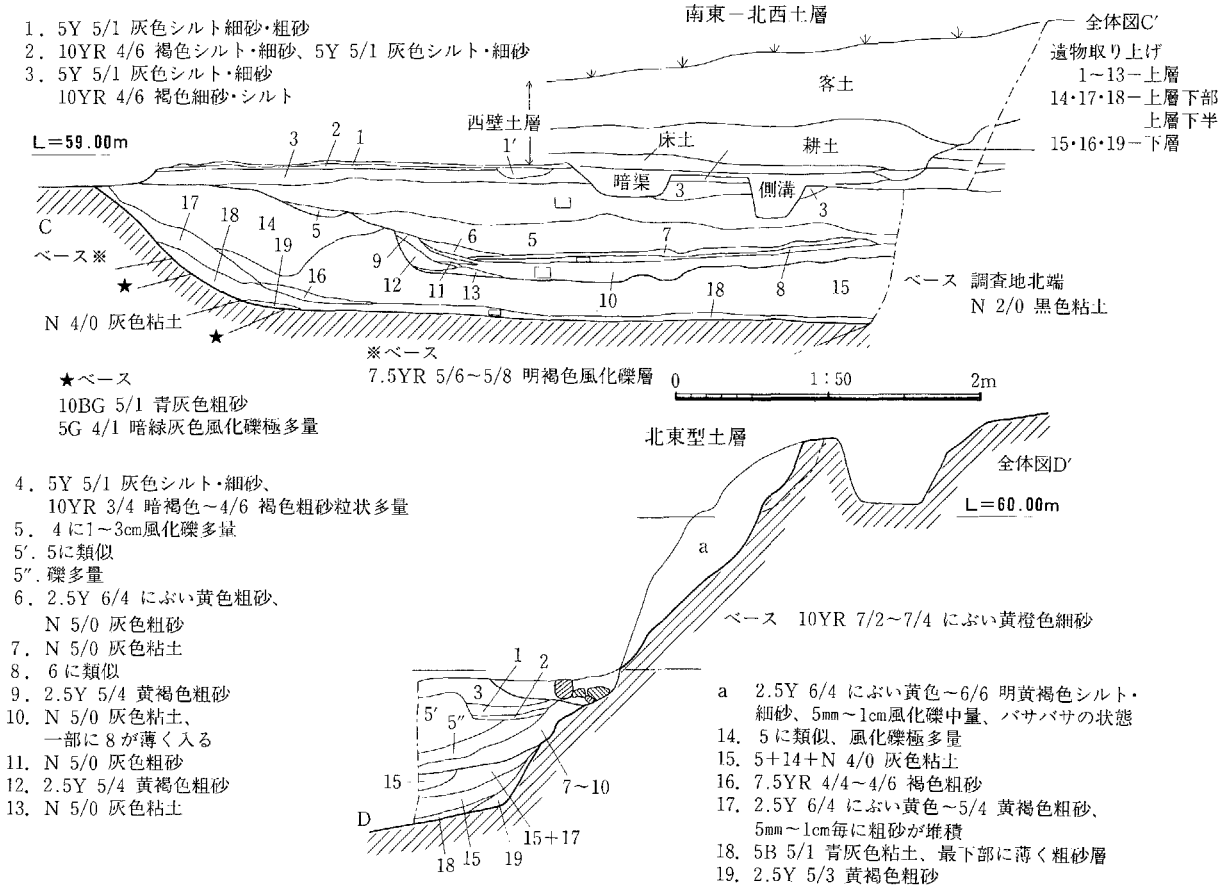
柱穴群（第91図、ＰＬ．20）

Ｌ・Ｌ′段の南側に集中して位置する。直径約0.2～0.4m、深さ0.1～0.5mの規模の柱穴が多く、中には土師器皿を据え置いたもの・据え石を置いたものも認められる。多数検出した柱穴は、Ｘ41・42において３間分の南北方向の並びを確認できたのみである。その他は、現地調査や図面上で建物の並びを捉えるまでに至っていない。しかし、この状況からＬ・Ｌ′段に屋敷地が存在したことは確実である。遺物は、鎌倉～室町時代の土師器皿(644～649)・瓦器椀などが出土している。

堀ＳＨ47（第45・91図、ＰＬ．21）

Ｋ段の北端に位置する。大半が調査区外であるため全容は不明である。深さ約1.2～3.2m、検出幅約８mである。堀ＳＨ47は第Ⅳ区堀ＳＨ１と土橋を隔てて位置し、北西側に位置する丘陵裾に沿って南西方向に延びるものである。堆積土は下層の一部が自然堆積、中層から上層は人為的埋土と考えられる。遺物は、備前擂鉢(651)、軒丸瓦(652)など23点が出土している。その他、室町時代の瓦23点、真蛸壺１点も出土している。堀の中では、最も遺物量の少ない状況にある。

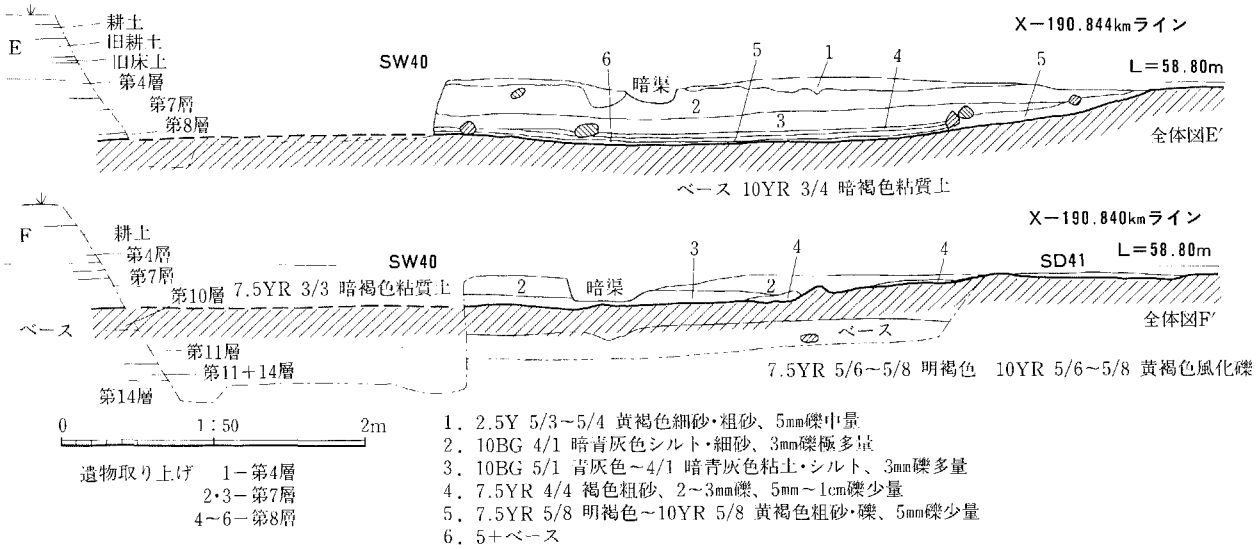
堀ＳＨ47の延長は、第４図Ｍ地点の立会い調査において山裾に沿う位置で確認することができた。堀の規模・堆積土の状況は、堀ＳＨ47にほぼ類似するものである。遺物は確認できなかった。



第45図　第Ⅲ区堀SH47土層実測図

落ち込みＳＷ40（第46・91図、ＰＬ．21）

Ｋ段の堀ＳＨ47の南東側、Ｗ29－Ｗ31から西側に位置する。堀ＳＨ47に取り付くように位置し、南北11.3m、東西６m以上、深さ20～60cmの不整形を呈している。埋土は大きく二分することができ、全



第46図　落ち込みSW40・溝SD41東西土層実測図

て自然堆積層と考えられる。上層が細砂層で緻密であるのに対し、下層は粗砂礫層となり、粗い感がある。遺物は、室町時代の備前、円盤状土製品(653〜655)など24点が出土している。

田畑の段ＳＷ37と鋤溝群（第50・97図、表８、ＰＬ．21）

Ｋ段の南半に位置する。Ｋ段で検出した鋤溝の中には室町時代以後のものも含まれると考えられる。段ＳＷ37は、層位と出土遺物の関係から堀ＳＨ47と同時期の室町時代と判断した。遺物は、奈良時代の須恵器、鎌倉時代の瓦器椀・土釜・土師器皿、室町時代の瓦質不明製品(804)、瓦質捏鉢(805〜807)など376点が出土している。

また、Ｋ段の中央部において、東西方向の数条の素掘り溝を検出した。素掘り溝は幅20〜30cm、深さ10cm、単に素掘り溝の痕跡を留めるものやＵ字形の掘形を呈するものがある。最も顕著に痕跡の遺存しているのは、田畑の段と考えられるＳＷ37のテラス部分である。段ＳＷ37の埋土の堆積は広範囲を占めており、２Ａ35からＶ35より南側に広がるものである。埋土はほとんど粗砂礫を含まず、比較的安定した堆積（第34図3′＋4′層・α層・β層）を示している。Ｋ段北半の第３・４層には、江戸時代の遺物が６点認められるが、段ＳＷ37に伴う下部埋土（α・β層）には江戸時代のものを含んでいない。

その他の検出遺構　Ｋ段の土坑

またＫ段には土坑ＳＫ58に類似した埋土の土坑ＳＫ53・66・70などがある。遺物は非常に少ない。また、Ｋ段の南縁辺部においても、これらの土坑の埋土に類似する暗褐色土が認められる。遺物が出土していないため、その所属時期を明確にし得ていない。

ＳＫ58　Ｋ段のＶ36に位置し、弧状を描く土坑である。長軸(西北西－東南東)2.3m、短軸(南北)0.45〜0.7m、深さ30cmである。埋土は暗褐色土層が主体となり、僅かに粗砂礫が認められる。遺物は縄文土器１点、サヌカイト剥片１点が出土している。

ＳＫ70　Ｋ段の２Ａ37に位置し、小形で隅円方形を呈する土坑である。調査のための任意トレンチに寸断されるが、長軸（東西）0.84m、短軸（南北）0.56m、深さ21cmである。先の土坑ＳＫ58と類似する埋土であるが、遺物は出土していない。

３　遺物包含層と出土遺物

遺物の大半はＬ段、Ｌ′段、Ｎ段に存在した。まず、Ｋ段北半の遺物包含層は、第３・４層で平均層厚20cm前後、Ｙ33からＶ33以北に広がる。この包含層からは、江戸時代のものを含みつつ、48点の遺物が出土している。第３・４層は、江戸時代の旧耕土と考えることができる。

田畑の段ＳＷ37に伴う遺物包含層（第50・97図、表８）

段ＳＷ37の項で記述したように、４種類の包含層が存在する。これらの層は、遺物の状況から第３′層・第４′層が江戸時代、α層・β層が室町時代と判断しているが、Ｋ段北半の第３・４層の兼ね合いから江戸時代に属する可能性も捨て切れない。

Ｌ・Ｌ′段の遺物包含層（第48～50・92・93図、表８）

確認調査の層位に準拠して層位を付し、主に第４層で掘削している。基本的に第４層と落ち込みＳＷ101とは同じである。調査時、落ち込みＳＷ101の上層と下層に区別している“下層”に該当するものである。Ｌ段の南縁部において、さらに第５層が存在する。Ｌ′段も同一の層位の呼称をもって遺物を取り上げている。遺物(656～715)は、Ｌ段において鎌倉時代の遺物を多量に含みつつ、14世紀後半～15世紀前半にかけての遺物群である。これらの遺物包含層は、地形的な窪みや南縁部にいくに従って厚くなる傾向にある。

Ｎ段の遺物包含層（第48～50・94～97図、表７、ＰＬ．20）

全調査地区の中で、最もまとまりのある遺物が出土した包含層である。Ｎ段の包含層は第３層～第８層まで存在し、第３層は江戸時代の遺物（34点）を含んでいる。第４層から第８層までかなりの色調、土性の違いが認められるため、区別して掘削した。しかし、接合関係等を整理していくと、第４層から第８層間や、少し離れた区画での接合が認められる事などから、遺物包含層の度重なる人為的な移動が成されたものと考えられる。遺物(716～812)は、室町時代14世紀後半～15世紀前半の物を主体として、土師器皿(717～739)・土釜(742～750)などが多量に出土している。

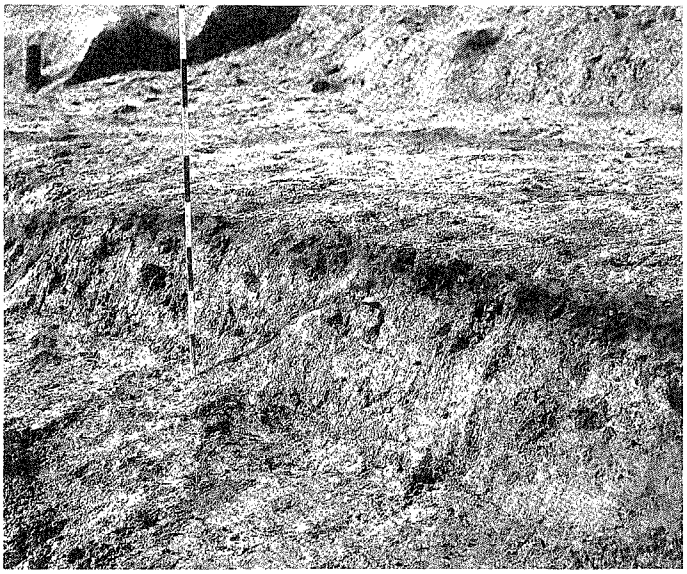
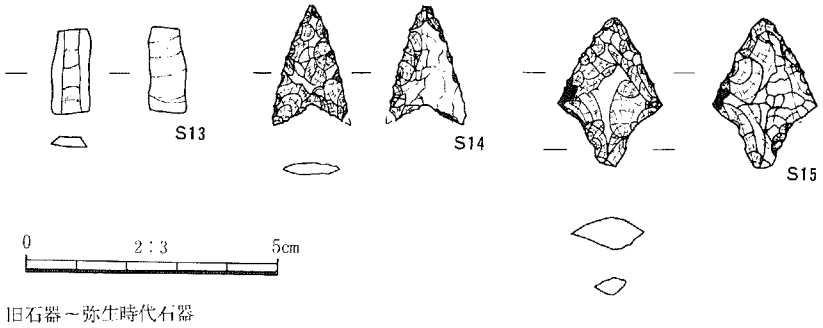
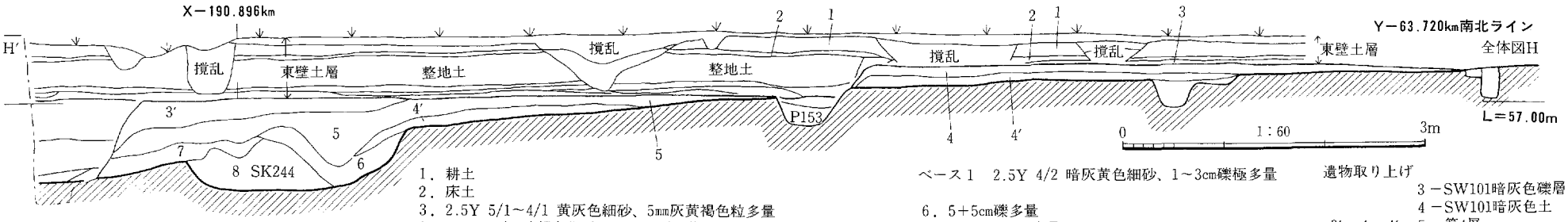


写真13　第Ⅲ区Ｎ段旧石器の出土状況



第47図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図



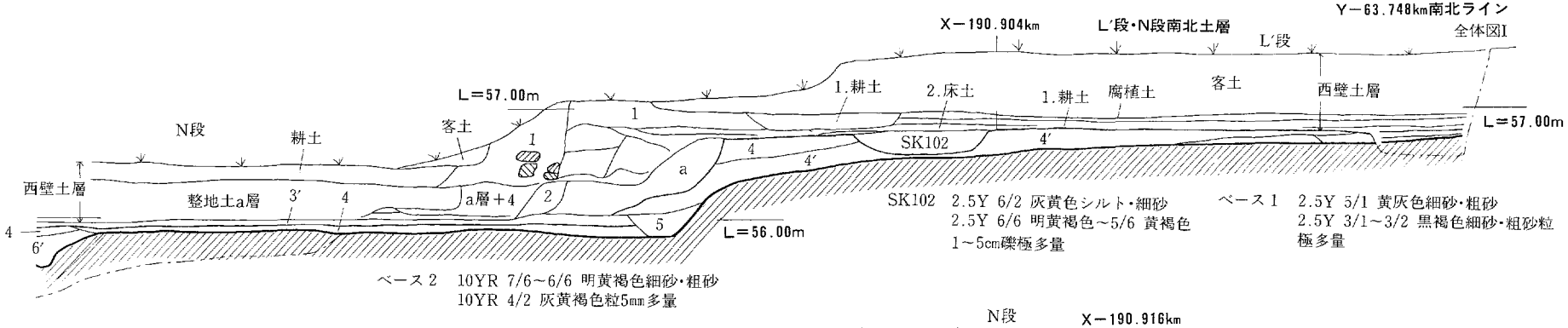
ベース2　10YR 5/6～5/8 風化礫
5mm～2cm極多量
間に2.5Y 5/1～4/1 黄灰色細砂入り込む

1．耕土
2．床土
3．2.5Y 5/1～4/1 黄灰色細砂、5mm灰黄褐色粒多量
3′．10YR 3/4 暗褐色細砂、2.5Y 5/1 黄灰色細砂が筋状、ブロック状
4．2.5Y 5/1 黄灰色細砂、5mm黒褐色粒多量、5mm～1cm礫少量
4′．2.5Y 5/1 黄灰色細砂、1～3cm礫多量
5．10YR 3/4 暗褐色細砂、5mm黒褐色粒多量、5～10cm礫少量

ベース1　2.5Y 4/2 暗灰黄色細砂、1～3cm礫極多量

6．5＋5cm礫多量
7．5＋2～3cm礫中量
8．2.5Y黄灰色細砂、5mm～3cm礫、2～5cm礫多量

遺物取り上げ
3－SW101暗灰色礫層
4－SW101暗灰色土
3′．4．4′．5－第4層
5～7－第4層下部or第5層
5．6下半．8－SK244

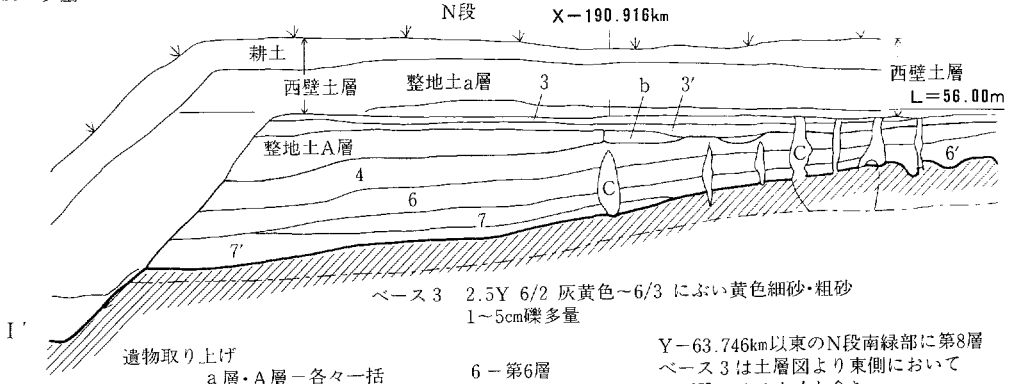


SK102　2.5Y 6/2 灰黄色シルト・細砂
2.5Y 6/6 明黄褐色～5/6 黄褐色
1～5cm礫極多量

ベース1　2.5Y 5/1 黄灰色細砂・粗砂
2.5Y 3/1～3/2 黒褐色細砂・粗砂粒
極多量

ベース2　10YR 7/6～6/6 明黄褐色細砂・粗砂
10YR 4/2 灰黄褐色粒5mm多量

a層　2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂、1cm礫多量、5～15cm礫少量
b．3に類似
c．2.5Y 5/1 黄灰色シルト・細砂、性格不明
A層　5mm～5cm礫極多量
3．2.5Y 5/1 黄灰色細砂・粗砂、5mm暗褐色粒多量
3′．2.5Y 5/1 黄灰色細砂・粗砂、　〃　少量
4．10YR 5/2～4/2 灰黄褐色細砂・シルト、1mm暗褐色粒多量、3mm少量
4′．6に類似
5．2.5Y 5/1 黄灰色シルト・細砂、10YR 5/6 黄褐色細砂・粗砂筋状に入る、東西溝
6．10YR 4/2 灰黄褐色～4/3 にぶい黄褐色細砂(シルト)、5mm暗褐色粒少量
6′．10YR 4/1 褐灰色細砂、1cm礫多量
7．2.5Y 5/1 黄灰色細砂、5mm礫中量、5cm礫少量
7′．2.5Y 5/1 黄灰色細砂、1cm礫少量



ベース3　2.5Y 6/2 灰黄色～6/3 にぶい黄色細砂・粗砂
1～5cm礫多量

遺物取り上げ
a層・A層－各々一括
3．3′－第3層
4．4′一部5－第4層
4′－第4層下部
図より北側4′(L′段)－第4層礫混
6－第6層
6′－第6層礫
7．7′－第7層
(Y－63.742km以西)

Y－63.746km以東のN段南縁部に第8層
ベース3は土層図より東側において
旧石器のサヌカイト含む

第48図　第III区L段～N段南北土層実測図

その他、第８層のさらに下部の、当初ベースと考えていた堆積層において、若干の遺物が認められた。また、第Ⅱ区谷状地形北半部分や溝ＳＤ４部分のベースと考えた堆積層に遺物を含んでいることから、Ｎ段の一部に、トレンチ掘りによる土壌サンプル（土嚢袋406袋）を行なった。その結果、細石刃１点（Ｓ13）・石鏃３点（Ｓ14）・サヌカイト剥片多数などを採集することができた。これらの遺物包

第Ⅲ区　Ｎ段遺物包含層第４層～第８層

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器		4	0.24
	石器・石製品		3	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	30	5.39
		高坏	1	0.18
		甕・土釜	10	1.80
		鍋		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	48	8.62
		蓋	19	3.41
		鉢・捏鉢	3	0.54
		壺	57	10.23
		甕・鍋	381	68.40
		甑		
		鼎		
		高坏	3	0.54
		横瓶	1	0.18
		平瓶		
		竈	4	0.72
小計			557	33.31
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	1	20.00
		甕・土釜		
		竈		
	黒色土器	坏・皿		
		椀	3	60.00
	須恵器			
	緑釉		1	20.00
	灰釉			
小計			5	0.30
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	286	58.25
		捏鉢		
		土釜・甕	151	30.76
		鍋	6	1.22
	瓦器	椀・鉢	8	1.63
		皿	2	0.41
		足釜	5	1.02
	須恵器（質）	椀・捏鉢	15	3.05
		壺・甕		
	陶器	備前	10	2.04
		常滑	3	0.61
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁	2	0.41
		白磁	3	0.61
小計			491	29.37

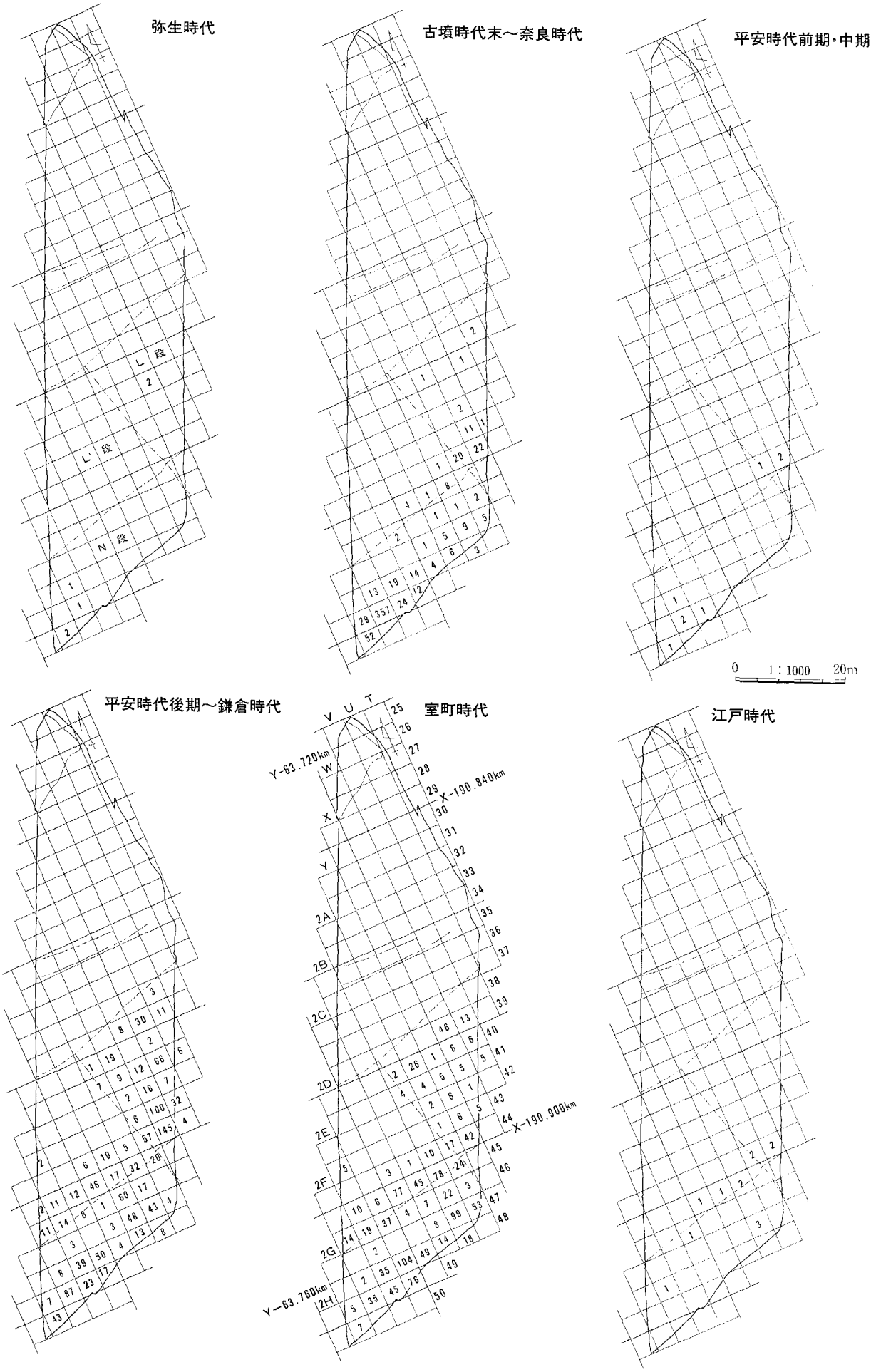
時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	250	40.92
		椀		
		捏鉢	24	3.93
		土釜	161	26.35
		鍋	38	6.22
		蓋		
	瓦器（質）	捏鉢	8	1.31
		土釜	69	11.29
		鍋	2	0.33
		甕	10	1.64
		湯釜	1	0.16
		火舎・香炉	2	0.33
	陶器	備前	21	3.44
		瀬戸美濃	5	0.82
		常滑	6	0.98
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁	13	2.13
		白磁	1	0.16
		染付		
	朝鮮			
	その他	鍋		
小計			611	36.54
江戸	土師器（質）	皿		
		土釜・鍋	2	50.00
		焙烙		
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前		
		堺		
		瀬戸美濃		
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器	1	25.00
		肥前系磁器		
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付	1	25.00
小計			4	0.24
合計			1,672	100

第Ⅲ区　Ｎ段遺物包含層第３層、整地土Ａ層

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器		1	0.18
	石器・石製品		5	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	1	1.27
		高坏		
		甕・土釜	1	1.27
		鍋		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	15	18.99
		蓋	2	2.53
		鉢・捏鉢	2	2.53
		壺	16	20.25
		甕・鍋	42	53.16
		甑		
		鼎		
		高坏		
		横瓶		
		平瓶		
		竈		
小計			79	14.60
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀		
		甕・土釜		
		竈		
	黒色土器	坏・皿		
		椀		
	須恵器			
	緑釉			
	灰釉			
小計				
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	99	58.93
		捏鉢		
		土釜・甕	41	24.40
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	16	9.52
		皿		
		足釜	3	1.79
	須恵器（質）	椀・捏鉢	8	4.76
		壺・甕		
	陶器	備前	1	0.60
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
小計			168	31.05

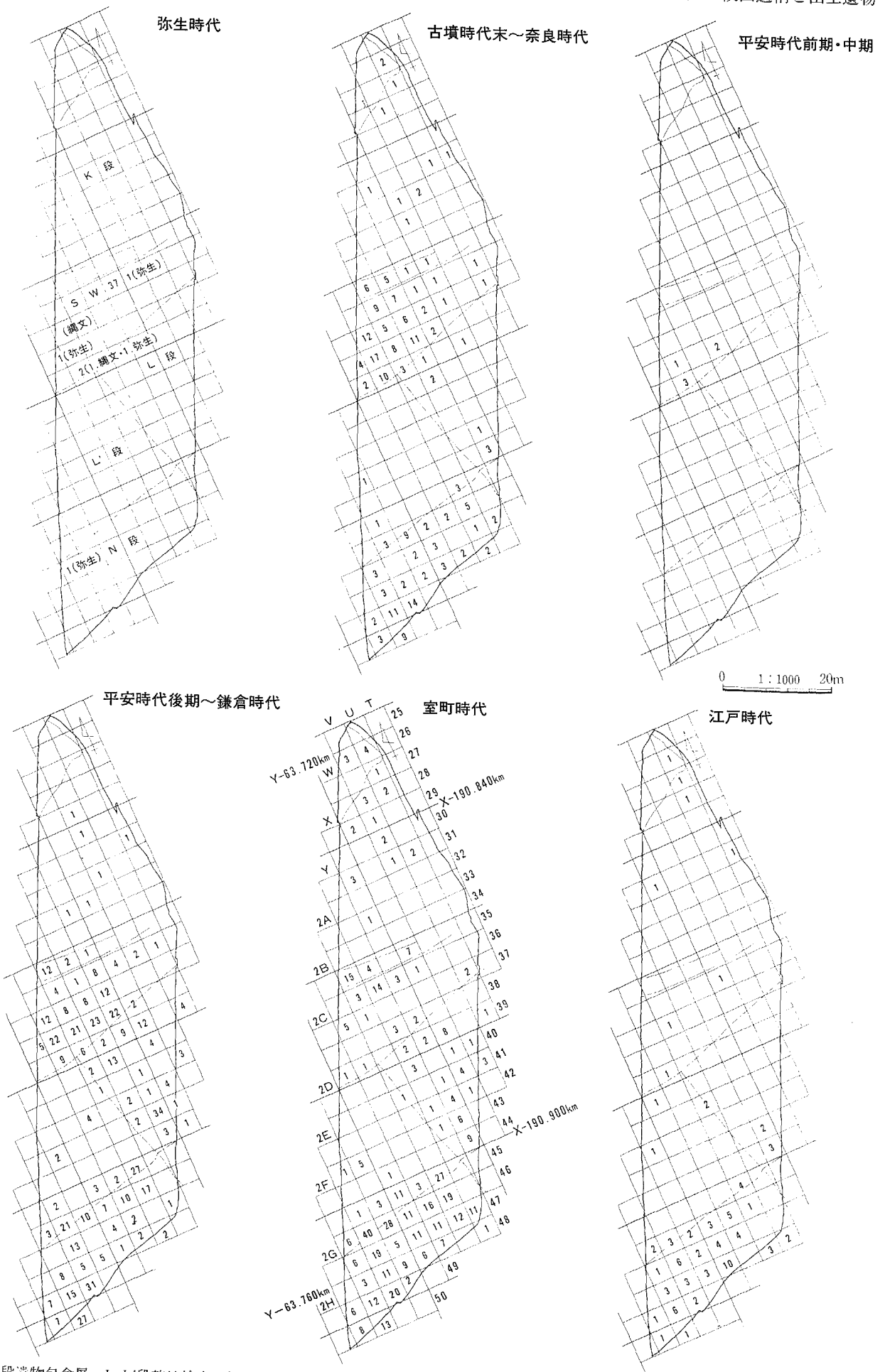
時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	92	40.0
		椀		
		捏鉢	4	1.74
		土釜	40	17.39
		鍋	3	1.30
		蓋		
	瓦器（質）	捏鉢	13	5.65
		土釜	28	12.17
		鍋		
		甕	1	0.43
		湯釜		
		火舎・香炉	1	0.43
	陶器	備前	21	9.13
		瀬戸美濃	4	1.74
		常滑		
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁	17	7.39
		白磁	6	2.61
		染付		
	朝鮮			
	その他	鍋	230	42.51
小計				
江戸	土師器（質）	皿		
		土釜・鍋		
		焙烙	1	1.59
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前		
		堺	4	6.35
		瀬戸美濃	4	6.35
		常滑		
		丹波	2	3.17
		伊賀信楽系	6	9.52
		肥前系陶器	7	11.11
		肥前系磁器	38	60.32
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付	1	1.59
小計			63	11.65
合計			541	99.99

表７　第Ⅲ区包含層出土遺物の構成比率１



L・L′段遺物包含層第4層～第6層、N段遺物包含層第4層～第8層

第49図　第III区包含層出土遺物の分布密度 1



K段遺物包含層、L・L'段整地検出・a層、N段遺物包含層第3層・整地土A層

第50図　第Ⅲ区包含層出土遺物の分布密度 2

含層の上層部では土師器などの細片を微量含むため、時期的な問題が残る。おそらく、本来のベースに最も近い自然堆積層や旧石器時代の堆積層が、奈良時代から平安時代の中で二次的に動かされた結果と考えられる。調査においてこれらの遺物を含む堆積層の範囲を確定することが出来なかったが、状況からして、かなり広範囲に広がるものと考えられる。

第Ⅲ区　L段・L'段遺物包含層第4層～第6層、落ち込みSW101

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器		2	0.16
	石器・石製品			
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀		
		高坏		
		甕・土釜		
		鍋		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	16	21.05
		蓋		
		鉢・捏鉢	1	1.32
		壺	13	17.11
		甕・鍋	45	59.21
		甑		
		甑		
		高坏		
		横瓶		
		平瓶		
		竈	1	1.32
小計			76	5.91
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	1	25.0
		甕・土釜		
		竈		
	黒色土器	坏・皿		
		椀	1	25.0
	須恵器		1	25.0
	緑釉			
	灰釉		1	25.0
小計			4	0.31
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	379	55.82
		捏鉢		
		土釜・甕	115	16.94
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	129	19.00
		皿	6	0.88
		足釜		
	須恵器（質）	椀・捏鉢	20	2.95
		壺・甕	2	0.29
	陶器	備前	10	1.47
		常滑	6	0.88
		瀬戸	1	0.15
	灰釉			
	中国製磁器	青磁	11	1.62
		白磁		
小計			679	52.84

時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	169	32.88
		椀		
		捏鉢	23	4.47
		土釜	140	27.24
		鍋	10	1.95
		蓋		
	瓦器（質）	捏鉢	18	3.50
		土釜	64	12.45
		鍋	2	0.39
		甕	16	3.10
		湯釜		
		火舎・香炉	6	1.17
	陶器	備前	32	3.23
		瀬戸美濃	3	0.58
		常滑	4	0.78
		丹波	1	0.19
		信楽		
	中国製磁器	青磁	22	4.28
		白磁	1	0.19
		染付	3	0.58
	朝鮮			
	その他	鍋		
小計			514	40.00
江戸	土師器（質）	皿	1	10.00
		土釜・鍋		
		焙烙		
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前		
		堺		
		瀬戸美濃		
		常滑	1	10.00
		丹波		
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器	3	30.00
		肥前系磁器	5	50.00
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付		
小計			10	0.78
合計			1,285	100

第Ⅲ区　K段遺物包含層、田畑の段SW37

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器		2	0.47
	石器・石製品		1	
弥生	弥生土器・古式土師器		3	0.71
	石器・石製品		3	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	7	5.51
		高坏		
		甕・土釜	5	3.94
		鍋		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	54	42.52
		蓋	5	3.94
		鉢・捏鉢	1	0.79
		壺	13	10.24
		甕・鍋	42	33.07
		甑		
		甑		
		高坏		
		横瓶		
		平瓶		
		竈		
小計			127	29.95
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	3	50.00
		甕・土釜		
		竈		
	黒色土器	坏・皿	1	16.67
		椀	2	33.33
	須恵器			
	緑釉			
	灰釉			
小計			6	1.42
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	120	62.38
		捏鉢		
		土釜・甕	15	7.85
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	33	17.28
		皿	3	1.57
		足釜		
	須恵器（質）	椀・捏鉢	6	3.14
		壺・甕	3	1.57
	陶器	備前	11	5.76
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
小計			191	45.05

時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	48	55.17
		椀		
		捏鉢	1	1.15
		土釜	4	4.60
		鍋	1	1.15
		蓋		
	瓦器（質）	捏鉢	7	8.04
		土釜	6	6.90
		鍋		
		甕	1	1.15
		湯釜	1	1.15
		燭台	1	1.15
	陶器	備前	8	9.20
		瀬戸美濃	2	2.30
		常滑	1	1.15
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁	6	6.90
		白磁		
		染付		
	朝鮮			
	その他	鍋		
小計			87	20.52
江戸	土師器（質）	皿		
		土釜・鍋		
		焙烙		
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前		
		堺		
		瀬戸美濃	1	12.50
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系	1	12.50
		肥前系陶器	2	25.00
		肥前系磁器	4	50.00
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付		
小計			8	1.89
合計			424	100.01

表8　第Ⅲ区包含層出土遺物の構成比率2

第４節　第Ⅳ区の検出遺構と出土遺物

第Ⅳ区の現況は、12段の田畑と休耕田から成り、北端と南端の現耕土面の高低差は約８ｍである。調査区の中に里道や水路が横切るため、それらを破壊しない程度に調査を進めていった。遺構の在り方は非常に単純で、室町時代の大規模な堀と、堀の外側になる東側には顕著な遺構は存在しない。

写真14　第Ⅳ区調査前の状況(北々東から)

１　基本層序（第51図、写真15）

第Ⅳ区は、西側の丘陵に最も近いことから、旧表土等の削平が著しく、明確な層序を示す区画はあまり認められない。最も広範囲を占めるＦ段における層序を参考にしてみる。上から耕土、床土、旧耕土・旧床土（図３層～図５層）が５cm前後で数面重複している。耕土と考えられる各堆積層の底面には、黒褐色粒の沈殿が認められる。これらの旧耕土、旧床土と考えられる層の南端では、30cm以上の堆積が認められる。調査地の西側に至っては、近代以後の山際までの開発が著しいことから、現代の耕土以外は存在しなかった。

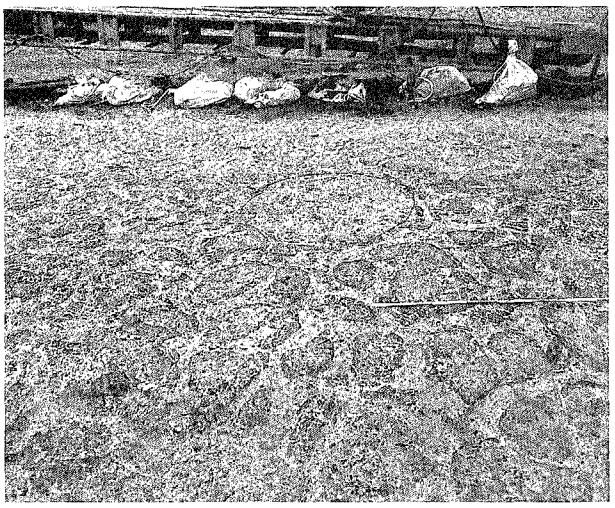
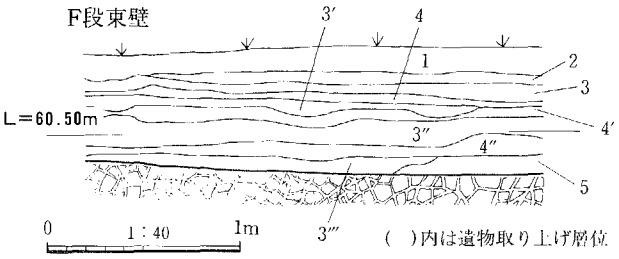


写真15　第Ⅳ区ベースの状況

堀ＳＨ１の東半部に広がるベースは、10ＹＲ6/8～7/6明黄褐色シルト層の亀裂に10ＹＲ7/1灰白色シルト層や10ＹＲ6/1褐灰色シルト層が入り込む、いわゆる乾痕層を成している（写真15）。この乾痕層のひび割れ層において、遺物は出土していない。

これらの旧耕土・旧床土は、第Ⅲ区のＫ段と類似するものであるが、層厚が非常に薄い点で第Ⅲ区と異なっている。



1．耕土　2．床土　3～5．旧耕土・旧床土(H層)
3．5Y 5/1 灰色シルト・細砂、10YR 6/8 明黄褐色シルト
　0.5～1cm黒褐色粒多量沈澱
4．2の床土より淡色、0.5cm黒褐色粒少量
5．10YR 4/1 褐灰色シルト、0.5～1cm黒褐色粒多量
ベース　10YR 6/8～7/6 明黄褐色シルトに
　　10YR 7/1 灰白色シルト・6/1 褐灰色シルトが亀裂状に入り込む

第51図　第Ⅳ区の基本層序

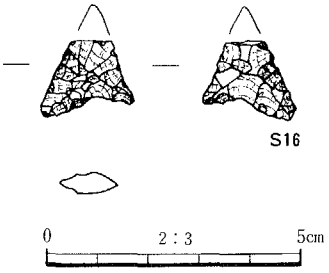
2　検出遺構と出土遺物（第54図）

第Ⅳ区では、当初平成４年度の試掘調査成果を受けて、奈良・鎌倉・室町・江戸時代の小規模な遺構・遺物の存在を予測していたが、大規模な堀の存在は予測していなかった。

写真16　第Ⅳ区自然流路SR7（西北西から）

自然流路ＳＲ７（写真16）

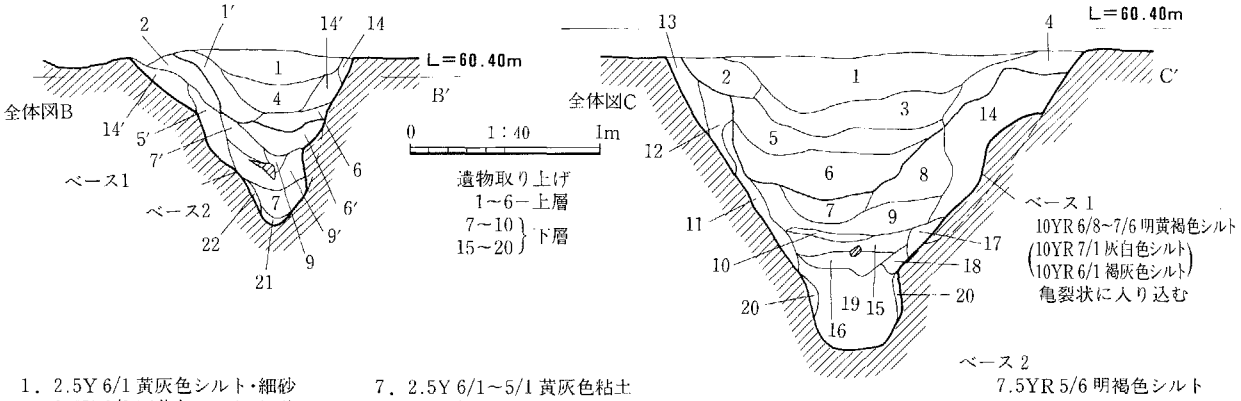
Ｅ段のＫ10－Ｈ10に位置し、東方向に延びる。幅1.5～３m、深さ60cm、延長13.4m以上の自然流路である。当初、平面検出において人為的な溝状遺構として掘削を始めたが、遺物が皆無で、平面形が非常に歪つであったり、ベース土が埋上の粗砂礫層の上に被っていたりする。時代が不明であるが、北側の堀地形推定方向の谷部から南流し、調査地のＢ段Ｍ８で東方向に流れを変化させたものである。埋土の大半は粗砂層から粗砂礫層である。この自然流路ＳＲ７の北側に並行して同規模の自然流路一条が東方向に延びているが、未掘削である。



第52図
第Ⅳ区遺構出土遺物実測図

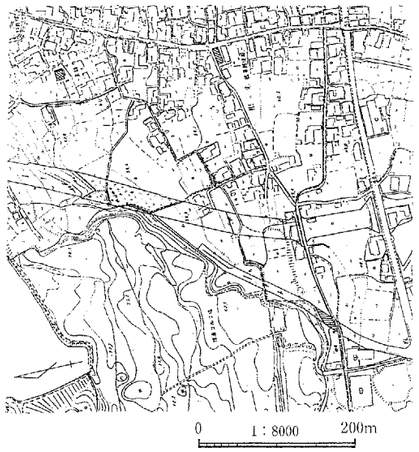
溝ＳＤ36（第52・53・98図、ＰＬ．27）

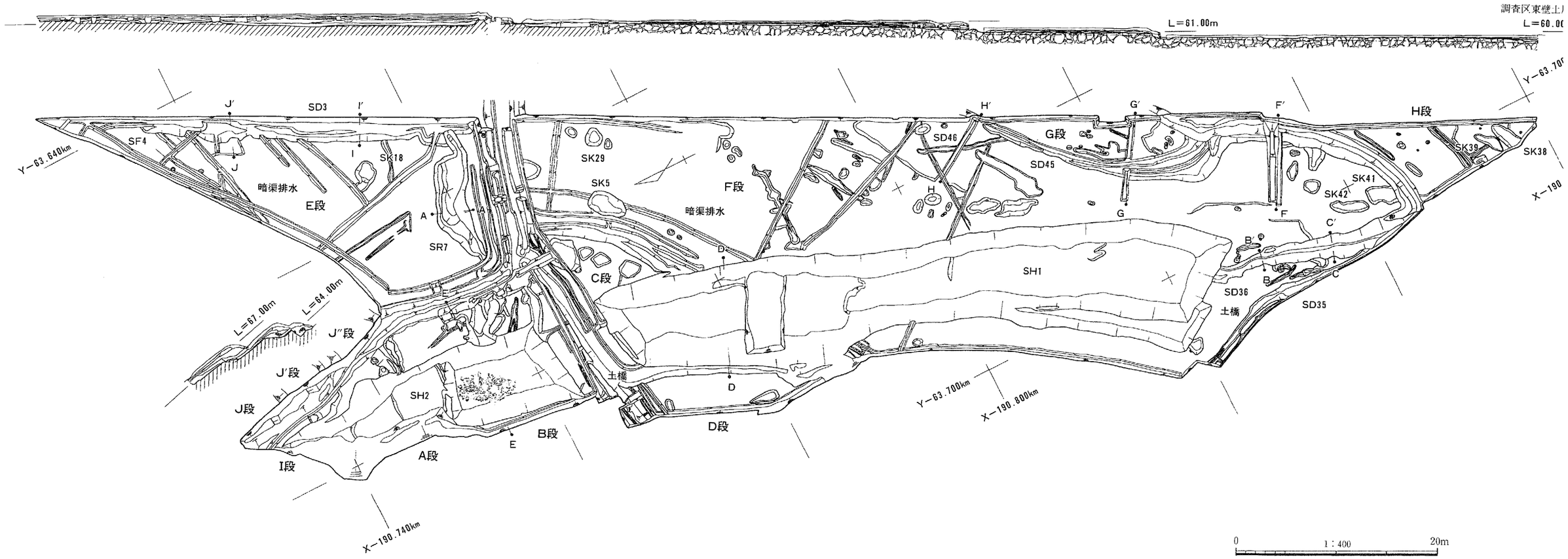
Ｆ段のＳ20－Ｔ30に位置し、南方向に延びるやや蛇行ぎみの溝である。幅1.1～2.5m、深さ0.9～1.6m、延長21.5m分を検出した。第Ⅲ区溝ＳＤ38の延長部分である。溝ＳＤ36の北端は堀ＳＨ１に削り取られる。南端は第Ⅲ区に続くが、近代以後の水田化に伴い、第Ⅳ区と第Ⅲ区の間で強烈に削平を受けている。埋土は溝ＳＤ38と同様に、上半が人為的埋上、下半が自然堆積層と考えられる。遺物は自然堆積が納まった時点で、人為的に一括投棄さ



1．2.5Y 6/1 黄灰色シルト・細砂
　2.5Y 6/2 灰黄色シルト・細砂
2．10YR 7/8 黄橙色シルト
　7/2 にぶい黄橙色シルトブロック状
3．2.5Y 6/3 にぶい黄色細砂・粗砂
4．2.5Y 6/2 灰黄色シルト
5．2.5Y 6/2 灰黄色細砂・粗砂
6．2.5Y 6/1 黄灰色シルト粘質土
　2.5Y 6/3 にぶい黄色細砂・粗砂
7．2.5Y 6/1～5/1 黄灰色粘土
8．4に類似色
　0.5～1cm風化礫中量
　2～3mm黒褐色粒多量
9．2.5Y 6/1～5/1 黄灰色粘土
10．2.5Y 6/4 にぶい黄色粗砂
11．2.5Y 4/1 黄灰色粘土
12．2に類似、やや淡色
13．2に類似
14．2に類似
　2.5Y 6/1 黄灰色シルト多い
　3mm黒褐色粒極多量
15．2.5Y 5/1～4/1 黄灰色粘土
　2.5Y 5/2 暗灰黄色粘土
16．N 4/1 灰色粘土
17．6に類似
18．16に17が入り込む
19．N 4/1 灰色粘土・細砂
　7.5GY 6/1～5/1 緑灰色
　風化礫多量
20．7.5YR 5/6 明褐色シルト
　5Y 5/4 オリーブ色シルト
21．7＋ベース2
22．ベース2の崩れ

第53図　第Ⅳ区溝SD36東西土層実測図





第54図　第IV区調査遺構全体図

れた部分が認められる。

土器類は、土師器小皿(814・815)・皿(816・817)・土釜(818・819)、瓦器椀(820～837)など644点が出土している。遺物の内、土師器皿が比較的形が整っているのに対して、瓦器椀は器形そのものが歪つになり、高台が形骸化するものが目立っている。中には無高台に近いものも認められる。土釜(819)は、本来の鍔部分が形骸化したものが貼り付けられていたり、鍔の無い部分も認められる。

堀ＳＨ１（第55・58・62・64・98・103・105・106図、表９、ＰＬ．23）

堀ＳＨ１は、Ｃ・Ｄ段－Ｆ段の山際に位置し、調査地の中で唯一全体の規模の把握できた堀である。堀の掘り込みは明確で、最狭幅7.3m～最大幅10.7m、深さ2.65m～最深4.05m、全長60.6mである。堀の掘形の断面形は、逆台形状を呈し、いわゆる箱堀状の形態を示している。東壁法面は傾斜角49°～63°、西壁法面は傾斜角51°～58°に掘削されている。

埋土の堆積は、土層観察（第55図土層Ｄ－Ｄ′）によると大きく三段階に分けることができる。第１層は近世～近代にかけての整地土、第２層は近世の整地土・人為的埋土と考えられる。第３層は大半が江戸時代前期の可能性をもつものであるが、遺物が殆どないため、時期判断し難い状況にある。埋土の堆積状況から、図34～36層が自然堆積層と考えられ、堀の機能していた時期に最も近い堆積土である。埋土の内、第３層西半にみられるような、２m前後もあるベース土の塊(図25～27層)が崩落した状態を呈している。崩落によって自然堆積を成していた粘土層・細砂層を押し跳ねているような状況にある。これらに前後して、有機分を多量に含む人為的埋土（図30層）が認められる。これらのことから、堀ＳＨ１の埋没は比較的早い時点から進んでいたものと考えられる。

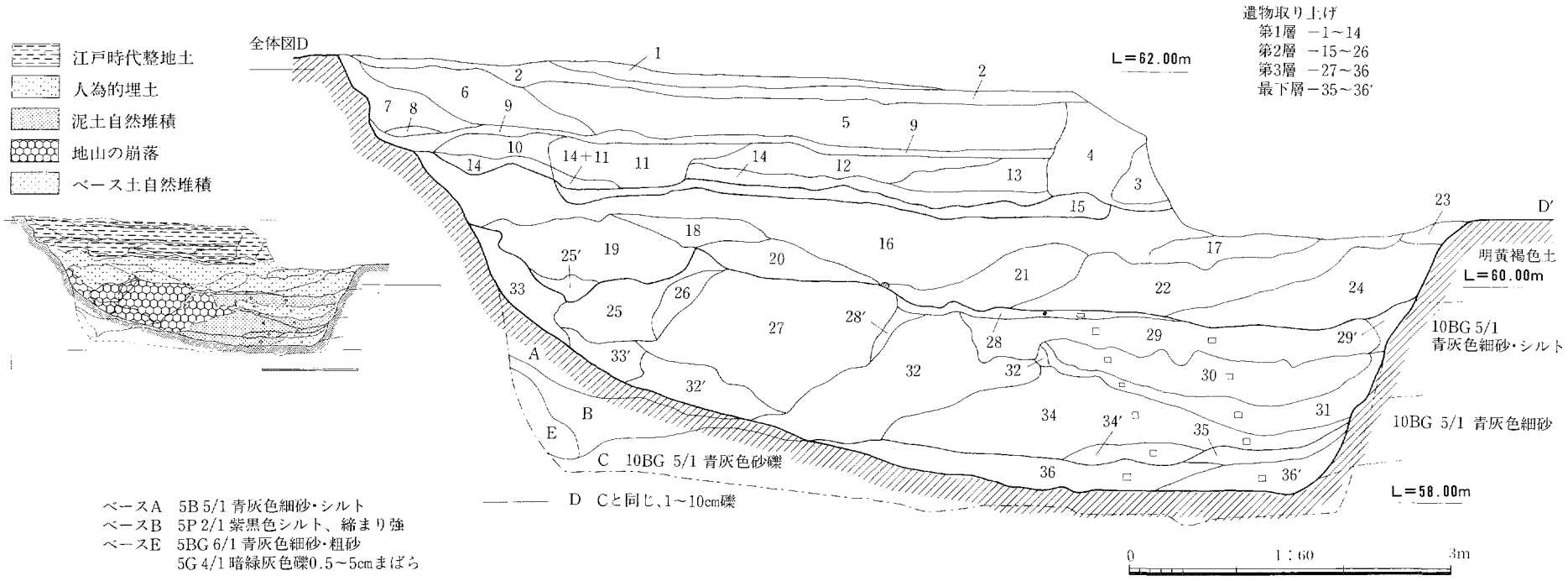
遺物は、土師器小皿(838・839)、備前壺(844)、木製品では漆器(919・922)、曲物底板(927)・桶側板(928・930)など16世紀代の遺物が主体を占めている。その他、自然遺物では松球果・松葉・炭化米・藁・水苔などがある。

堀ＳＨ１より一時期古いと考えられる堀

本来の堀ＳＨ１の南西側に位置し、Ｔ24・25－Ｒ20に延びるものである。大半は後出すると考えられる堀ＳＨ１に削り取られるため不明であるが、最も南端での形状規模は幅5.8m、深さ1.1m、延長18.4m分と小規模である。埋土は、基底部を省いて大半が人為的と考えられる堆積層である。遺物は、基底部の自然堆積層に載る状況で瀬戸美濃灰釉丸皿(840・841)、朝鮮粉青沙器碗(843)などの土器類と共に、大形の平瓦、漆塗の金属製喉輪(905)、砂岩製の石扉(914)、桶側板(929)・桶底板(932)、編籠(935)などが出土している。

この堀は、本来堀ＳＨ１と重複する位置にあり、堀ＳＨ１の掘削に伴い、大半が削り取られたものと考えられる。なお、現在の堀西肩と丘陵裾との間に、幅２～５m程度の平坦面を認めるが、これらは近代以後の水田化に伴い、山際まで削平された結果である。よって、本来堀ＳＨ１の壁面は急激な傾斜をもって、そのまま丘陵斜面に続くものであったと考えるのが妥当である。

第Ⅳ区における大規模な堀遺構は当初全く予測されておらず、協議を重ねた結果、年度内に該当区を全掘することが決定された。そのため堀ＳＨ２は人力掘削に努め、南側の堀ＳＨ１についてはやむを得ず大半を機械掘削排土することとなった。よって、遺物の大半は掘削土砂と共に散逸している。



第55図　第IV区堀SH1東西土層実測図

1．5Y 5/1～4/1 灰色シルト・細砂、7.5YR 5/8 明褐色細砂混合
2．1＋東側ベース土、5～10cm礫少量
3．2.5Y 6/3 にぶい黄色シルト・細砂、＋4がまだらに入る
4．5Y 6/1～5/1 灰色細砂、7.5YR 5/6 明褐色細砂が貫入
5．5Y 5/1 灰色細砂・シルト＋2、5～10cm礫多量
6．10YR 8/6～8/8 黄橙色シルト
10YR 5/6～5/8 黄褐色シルト
5Y 6/1 灰色細砂　} 混合状態
7．5Y 6/1 灰色細砂、10YR 5/6～5/8 黄褐色シルト・細砂
8．9に7.5YR 5/6 明褐色シルトが入り込む
9．N 4/0 灰色細砂、2.5Y 7/3 浅黄色粘土
10．5Y 5/1 灰色シルト・細砂、0.5cm礫まばら
11．10YR にぶい黄褐色礫5～15cm主体、9が少量入る
12．5Y 5/1 灰色細砂・シルト、一部ブロック状に礫入る
13．12より灰色が少ない、7.5YR 4/4 褐色細砂小ブロック多量
14．10YR 5/6 黄褐色シルト・細砂～6/8 明黄褐色シルト
10GB 7/1 明青灰色シルトが貫入する
15．10GY 5/1 緑灰色細砂、10BG 7/1 明青灰色粘土
10GY 5/1 緑灰色細砂、風化礫多量
16．2.5Y 4/2 明灰黄色細砂
10BG 6/1 青灰色シルト～4/1 暗青灰色細砂小ブロック多量
17．22より 2.5Y 4/1 黄灰色粘土小ブロック多量混じる
18．2.5Y 7/2 灰黄色シルト、5Y 6/4 オリーブ黄色細砂、汚ない土
19．2.5Y 7/2 灰黄色シルト、2.5Y 6/6 明黄褐色細砂
10BG 6/1 青灰色細砂小ブロック少量、他3種に分離可能
20．18に10BG 2/1 青黒色シルトブロック多量、汚ない土
21．10BG 4/1～3/1 明青灰色細砂、しまり無し
22．5BG 4/1 暗青灰色シルト、1～3cm礫多量、汚ない土
23．7.5YR 5/6 明褐色シルト、10YR 7/8 黄褐色シルト
24．10G 6/1 緑灰色礫0.5～1cm多量
10G 3/1 暗緑灰色粘土小ブロック少量
25．10G 5/1 緑灰色細砂、粘土混じり
10BG 4/1 暗青灰色細砂・シルト
26．10YR 3/1 黒褐色粗砂・細砂
27．7.5YR 5/6 明褐色細砂
7.5YR 4/1 褐灰色細砂　} 0.5cm礫中量堅く締まる
28．5BG 6/1 青灰色粘土、軟質
29．10GB 5/1 青灰色粘土、5G 4/1 暗緑灰色粘土小ブロック、軟質
29′．29より30に類似、礫多量
30．10BG 4/1 青灰色粗砂・粘土、10BG 4/1 暗青灰色粘土ブロック
汚ない土、1～2cm礫少量
31．10BG 5/1 青灰色粘土、軟質
10BG 3/1 暗青灰色粘土・細砂0.5～1cmの縞状に入り込む
32．10BG 4/1 暗青灰色細砂混粘土
2.5Y 3/1 黒褐色細砂混粘土　} 0.5cm礫多量堅く締まる
32′．10G 4/1 暗緑灰色礫多量
33．10YR 6/8 明黄褐色細砂、5G 5/1 緑灰色細砂、堅く締まる
33′．10YR 6/8 明黄褐色細砂、10GY 7/1 明緑灰色粘土、堅く締まる
34．10BG 4/1 青灰色細砂・シルト、10YR 3/1 黒褐色粘土縞状に入り込む
34′．34に1～2cm礫少量
35．10BG 4/1 暗青灰色粗砂、1～2cm礫多量
36．10BG 5/1 青灰色細砂、34に類似
下半に10YR 3/1 黒褐色細砂、N 5/0 灰色粘土細い縞状に入り込む
36′．10BG 5/1 青灰色細砂のみ

堀ＳＨ２（第56～58・60・64・99～101・103～113図、表９・10、ＰＬ．24～26）

堀ＳＨ２は、Ⅰ・Ａ・Ｂ段に位置する。堀の掘り込みは明確で、幅8.25m、深さ2.25m、全長28.8m分を検出した。ここで、堀掘削時の地形が遺っているものと考え、Ｂ段西側の一段高い平坦地までの高さを加えれば、深さ約4.7mに達するものである。堀の掘形の断面形は、明確な逆台形状を呈し、箱堀の形態を示している。東壁法面は傾斜角40°、西壁法面は傾斜角48°に掘削されている。堀には、Ａ段とＢ段の境目、Ｍ７において東西方向の高さ1.5m(南の堀底から)の段１が取り付き、北側で20cm低くなる。また、段１から5.4m北側で10cm高くなる段２が、さらに段２から5.1m北側で10cm高くなる段３が取り付く構造になる（第60図)。

埋土の堆積は、土層観察（第57図土層Ｅ－Ｅ′）によると、基本的に堀ＳＨ１と類似堆積を示すものと考えられ、大きく三段階に分けることができる。第１層は近世～近代にかけての整地土、第２層は近世の人為的埋土・自然堆積層と考えられる。第２層下部と第３層は、共に江戸時代の遺物を含まないが、後述する石造遺物の出土状況から、天正七年（1579）前後から天正十三年（1585）以後の堆積と考えられる。Ｂ段の堀ＳＨ２の石造遺物の下部には、木葉・草木などの有機分を多量に含んだ2.5Y 4/1黄灰色シルト層が約10cm堆積し、以下、砂礫・細砂・粘土が基底部まで約40cmに渡り堆積している。これらの石造遺物の下部の堆積土からは、奈良時代の須恵器数点が出土したのみである。

堀の北側は現在の田畑の区画の形から、さらに調査地外へ続くことが確認できる。現状地形や1958年の航空写真(ＰＬ．２)から、調査地から北側約80mの紀ノ川用水までの間で確認することができる。それ以北から住持池までの間は、南北方向の畦畔が遺存しているが堀の存在は不明確である。

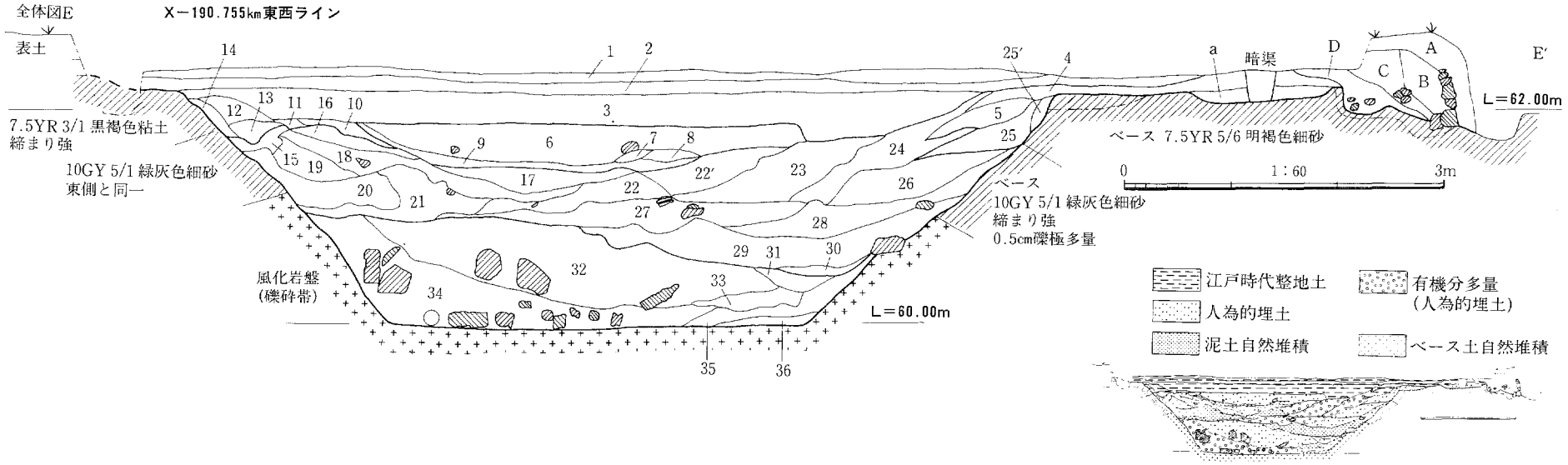
堀ＳＨ２からは、総数436基の石造遺物が堀の底に置いて捨てられた状態で出土している。第56図に示したＢ段の堀底に積み置かれた石造遺物（第１集石）は、436基の内の約６割である。約１割は、その上部の第２層・第２層下部からの出土で、残り約３割は北側の段１・２の西側斜面際からの出土である。段１・２出土の石造遺物（第２集石）は、大半がかなり乱れた状態であるが、西壁法面に沿うような状況であったものと考えられる。なお、段１・２出土の一部の石造遺物は、写真撮影や図面完了後に未掘部分のずれ落ちた土砂の中から採集したものを含んでいる。

石造遺物の内、一石五輪塔が約９割を占めている。紀年銘には、宝徳三年(1451)から天正七年(1579)までの資料が認められ、一石五輪塔・地蔵石仏・宝篋印塔・板碑の一部には、梵字や紀年銘などの彫り込みに金泥・黒漆・朱漆を塗り込んだ逸品が存在する。

土器類(845～865)は、奈良時代の須恵器を含みつつ、備前擂鉢(851)・壷(852～854)・徳利(856)、中国製青磁香炉(859)・景徳鎮窯系染付碗(860～863)・白磁、中国製褐釉など16世紀代のものが主体を占めている。土器類の破片点数は、上部のＡ１・２層で25点（内、江戸時代１点)、Ｂ～Ｃ層で143点（内、江戸時代16点)、第１層で75点（内、江戸時代１点)、第２層で127点（内、江戸時代４点)、下部の第２層下部・第３層で88点（江戸時代の遺物を含まない）が出土している。

その他、多数の瓦類が出土している。瓦類は、堀の中心付近の第２層から第３層にかけて集中して出土する傾向があり、直接、石造遺物の積み置かれた中に混じり込むことがなかったようである。このことから、石造遺物と瓦類の廃棄は、異なる段階に為されたものと考えられる。大形の平瓦(878・

第56図　第IV区堀SH 2 石造遺物出土状況実測図



遺物取り上げ
1～5・10・11・14・25－第1層
(1－B層、2～5－C層)
6～28－第2層
29～36－第2層下部・第3層

1．10YR 6/8 明黄褐色細砂、5BG 6/1～5/1 青灰色細砂混合
2．5Y 5/1 灰色細砂含むシルト、0.5～1cm礫中量
3．10YR 6/8 明黄褐色細砂、10YRにぶい黄褐色細砂
N 4/0 灰色細砂、0.5～1cm礫多量
4．2に類似で0.5～1cm礫多量、10YR 5/1 褐灰色細砂ブロック
5．3に類似色で0.5～3cm礫多量
6．10BG 4/1 暗青灰色細砂、0.5～1cm礫多量
N 4/0 灰色粘土小ブロック少量
7．5Y 5/2 灰オリーブ色細砂、10BG 4/1 暗青灰色粘土ブロック
8．5Y 5/2 灰オリーブ色粗砂
9．10BG 4/1 暗青灰色粘土
10．10YR 6/8 明黄褐色細砂、0.5～1cm礫多量
11．3に類似
12．2.5Y 5/1 黄灰色シルト、10YR 6/8 明黄褐色細砂(礫の風化)
13．2.5Y 6/1 黄灰色シルト、10YR 6/8 明黄褐色細砂(礫の風化)
14．3に類似、礫極多量
15．N 5/0 灰色シルト、細砂多量
16．10BG 4/1 暗青灰色細砂、0.5～1cm礫多量
17．10BG 4/1 暗青灰色細砂、N 5/0 灰色シルト・細砂小ブロック、
0.5～1cm礫多量
18．19＋20、0.5～1cm礫中量
19．10GY 6/1 緑灰色細砂、5cm礫
20．10G 6/1 緑灰色細砂、2cm礫稀れ、壁沿い0.5～1cm礫多量
21．10GB 4/1 暗青灰色粘土、細砂縞状に入り込む
22．10BG 6/1 青灰色粘土、10BG 4/1 青灰色粘土
22′．22に粗砂、0.5～5cm礫多量
23．22′に類似し、0.5～1cm礫極多量、粘土縞状に入り込む
N 3/0 暗灰色粘土ブロック、10BG 6/1 青灰色細砂
24．N 3/0 暗灰色粘土主体、10BG 6/1 青灰色細砂、0.5～1cm礫多量
25．3に類似色、0.5～1cm礫極多量
25′．0.5cm礫極多量
26．10GY 6/1 緑灰色粗砂、N 3/0 暗灰色粘土ブロック、0.5～1cm礫多量
27．22に類似色、粗砂礫0.5cm前後主体、礫は23と同じ
28．10BG 4/1 暗青灰色粗砂礫、N 3/0 暗灰色粘土ブロック、
礫0.5cm前後主体
29．10BG 3/1 暗青灰色粘土、10BG 6/1 青灰色粘土
2.5GY 暗オリーブ灰色粗砂縞状に入り込む
2.5Y 3/1 黒褐色シルト大ブロック少量
30．10BG 6/1 青灰色粘土
31．29に類似色、0.5～1cm礫中量
32．10BG 5/1 青灰色粗砂礫、0.5～1cm礫極多量、2～5cm中量
2.5Y 3/1 黒褐色シルト大ブロック少量
33．29に類似
34．10BG 6/1～5/1 青灰色粘土、2.5Y 3/1 黒褐色シルト
10G 6/1 緑灰色細砂、0.5～1cm礫少量
35．34に類似、2.5Y 3/1 黒褐色シルトブロック状、0.5～1cm礫多量
36．29に類似、縞状なし

a．SK12、10YR 6/6 明黄褐色シルト、5/6 黄褐色シルト
A．(表土)10YR 3/1 黒褐色細砂
B．(石垣裏込め) 2.5Y 6/6 明黄褐色細砂
C．2.5Y6/6 明黄褐色細砂、5Y 5/1 灰色細砂
10YR 6/8 明黄褐色細砂
D．1に類似し、礫ほとんどなし

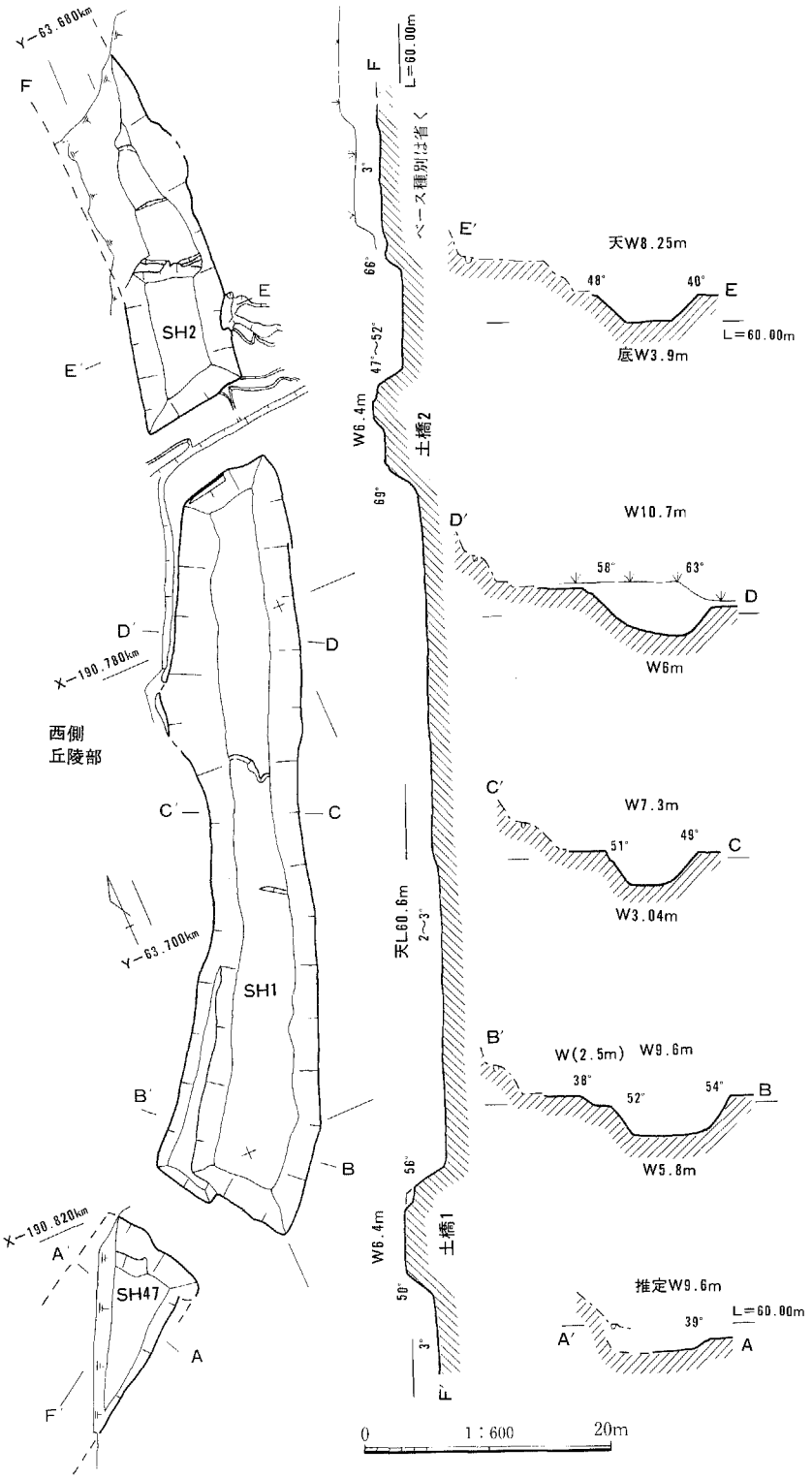
第57図　第Ⅳ区堀SH 2 東西土層実測図

879)、小形平瓦(880～882)・丸瓦(866)・軒丸瓦(867～872)・軒平瓦(873)などがある。この内、平瓦で法量の計測できたものの平均値は、大形平瓦（計測対象14点）で上端幅35.3cm、下端幅32.7cm、長さ42cm、厚み2.9cmである。小形平瓦(計測対象18点)で上端幅21.4cm、下端幅20.3cm、長さ26.8cm、厚み1.9cmである。両者共に、下端上面を面取りしたものが多数を占め、大形平瓦は2/3重ね置き、小形平瓦は1/2重ね置きの痕跡が認められる。金属製品では甲冑の一部(906・907)・鋤刃先(912)・鉄鍋(908)・鉄鍋の吊り金(909)・五徳(910)・竿秤の皿(911)などが、木製品では漆器椀(920・921)・桶側板(931)、底板(933・934)などが出土している。

石造遺物は、石材加工の技術的側面を反映して、鑿の掘り込みが連続して筋状を呈するものや、単発的に打ち込まれ不連続を呈するものの二系統に分けられる。

土橋（第58図）

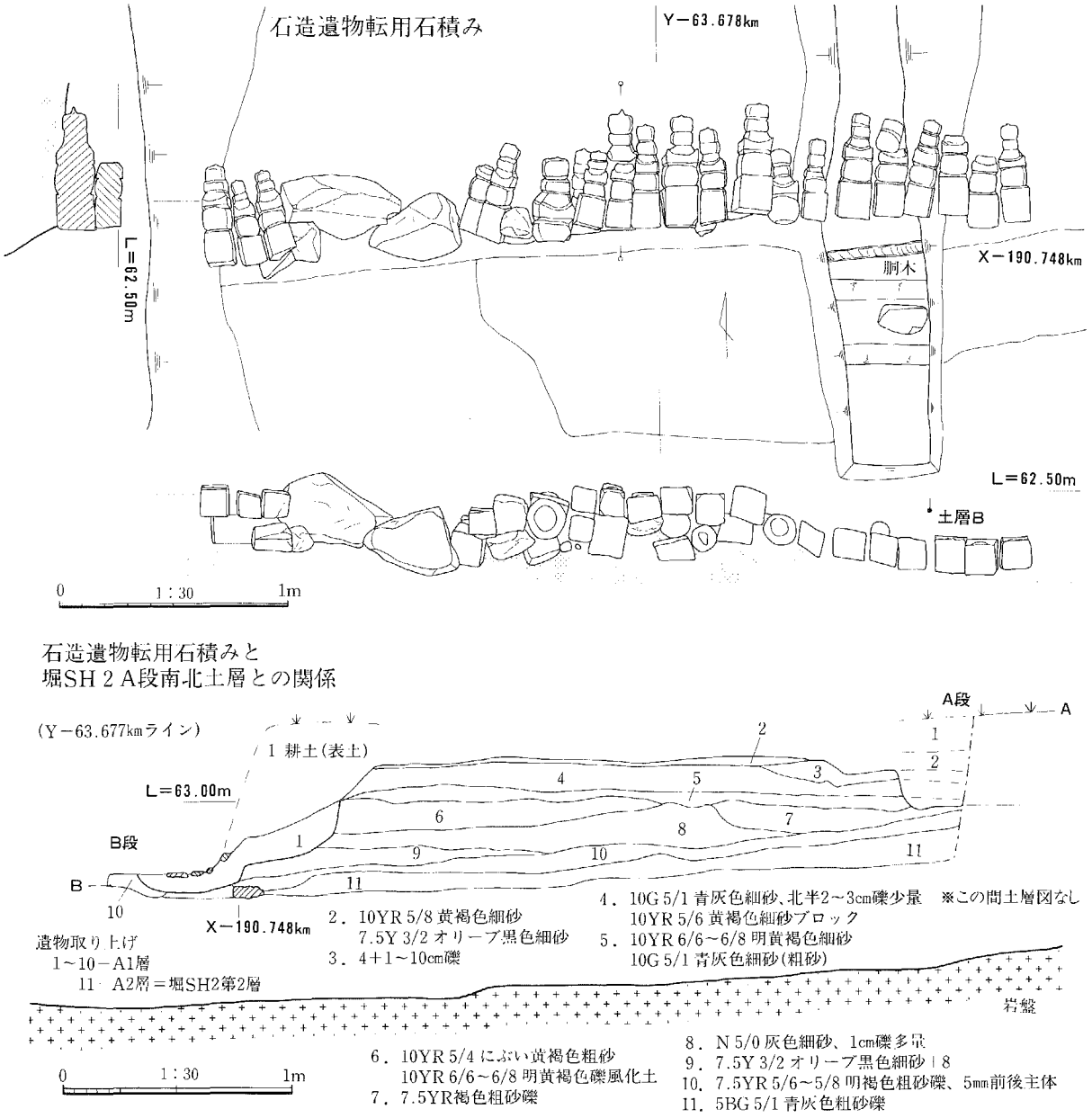
堀には南と北にそれぞれ一箇所の掘り残し部分が見られる。つまり西側の丘陵への通路となる土橋を造り出している。土橋１は堀ＳＨ１－第III区堀ＳＨ47の間に、土橋２は堀ＳＨ１－ＳＨ２の間に掘り残された通路である。土橋の幅は、共に6.4mを測る。第II区堀ＳＨ27－ＳＨ29の間の土橋に比べて狭くなる。この土橋上でも、土塁・杭列・柱穴などの諸施設を検出することができなかった。ここでも、現代の里道（畦道）・用水路が土橋を踏襲して位置し、町屋の方向へ延びている。



第58図　第III区・第IV区堀SH47－SH１－SH２断面実測図

石造遺物転用石積み（第59図、ＰＬ．27）

Ａ・Ｂ段に位置する堀ＳＨ２の埋土を掘り下げていく途中で、室町時代の一石五輪塔の地輪を南に向けて、小口積みした石積みを検出した。石積みは、現地形のＡ段の南裾の下部に当り、土留めの基礎を成しているものである。石積みの南端には、太さ10cmの胴木が東西に横たえられている。一石五輪塔の石積みは、最大二段認められる。丁度、堀ＳＨ２にかかる部分にのみ東西に施されたものである。堀ＳＨ２より東側は、ベースが堅いため施す必要がなかったものと考えられる。転用石積みと堀ＳＨ２埋土との関係は、転用石積みがＡ１層より下で、Ａ２層より上になる。また、Ａ２層とＢ段堀ＳＨ２第２層が同一層位にあり、江戸時代の遺物を含むことから、一石五輪塔の石積みはこの期以後に成されたものと考えられる。転用石積みの裏側には、裏込め等の造作は施されていなかった。なお、一石五輪塔は、29基が利用され、内１基に永禄三年（1560）（第115図1003拓影）の銘を有している。



第59図　第Ⅳ区石造遺物転用石積み実測図

堀ＳＨ2周辺の土坑（第60図、ＰＬ．26）

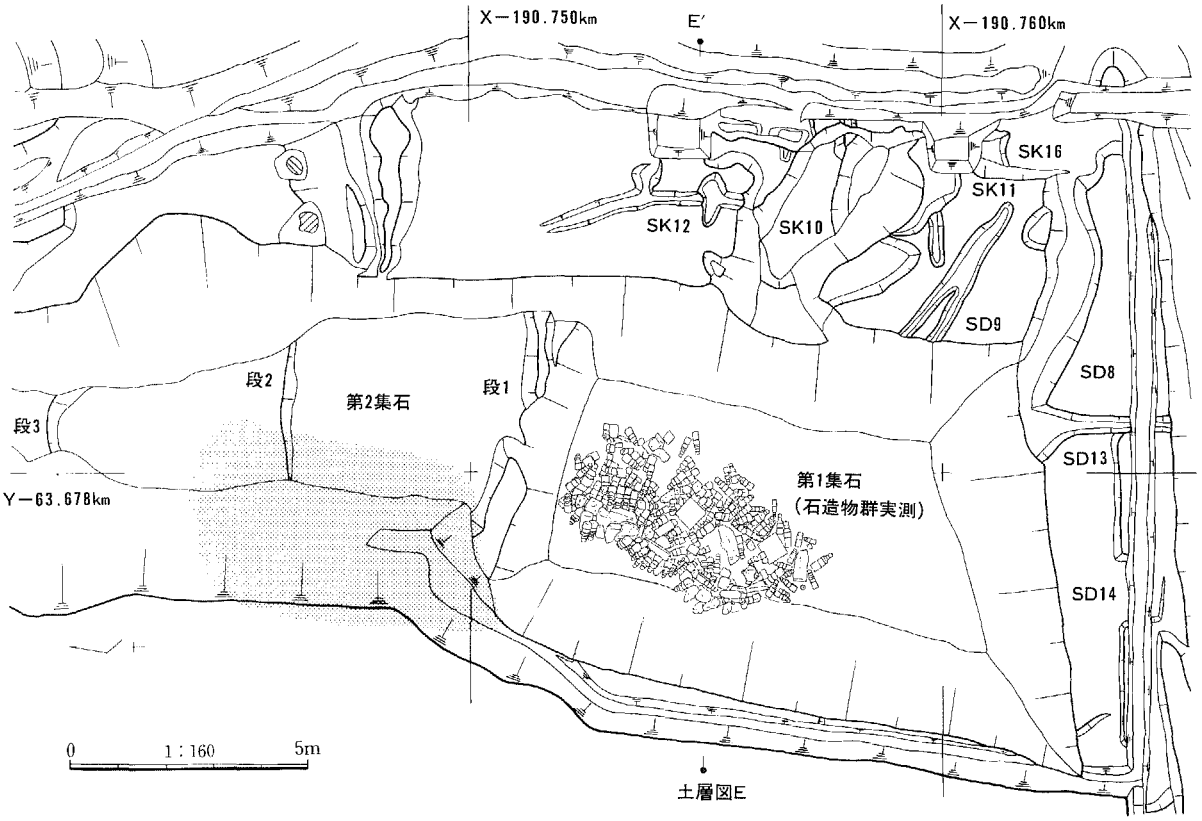
堀ＳＨ２の東側には、不整形な土坑ＳＫ10・11・16が重複して存在する。堆積土の状況から、土坑群より堀ＳＨ２が後出するものである。土坑ＳＫ10・11を合わせて、南北幅３ｍ、深さ76cmである。埋土は、堀ＳＨ２周辺の破砕帯の粗砂礫が堆積している。遺物が出土しているものの、上部からの出土であるため、土坑群そのものは既述した自然流路ＳＲ７の北側に並行して存在する自然流路の延長部分の可能性をもつものである。遺物は、土坑ＳＫ10から室町時代の土師器皿２点・土堝２点が、土坑ＳＫ16から奈良時代の須恵器２点が出土している。

堀ＳＨ2周辺の溝（第60図、ＰＬ．26）

溝ＳＤ8　堀ＳＨ２の南東隅、Ｂ段のＬ10－Ｋ10に位置し、湾曲して東方向に延びる。幅0.9～1.1m、深さ20～25cm、延長4.9m分を検出した。奈良時代の須恵器４点・陶棺身１点、室町時代の土師器１点などが出土している。堀ＳＨ２上部の堆積土を掘り込んで、江戸時代に属する遺構である。遺物は少ないが、第II区堀ＳＨ27と溝ＳＤ1030との関係に類似するもので、堀上部の凹地の滞水を排水する目的で掘削されたものと考えられる。

溝ＳＤ9　溝ＳＤ８同様にＢ段のＬ10に位置し、直線的に東方向に延びる。幅0.46m、深さ11cm、延長3.4m分を検出した。遺物は出土していない。

溝ＳＤ13　堀ＳＨ２の南端、Ｂ段のＭ10に位置し、直線的に南方向に延びる。幅0.3m、深さ31cm、延長３m分を検出した。遺物は出土していない。

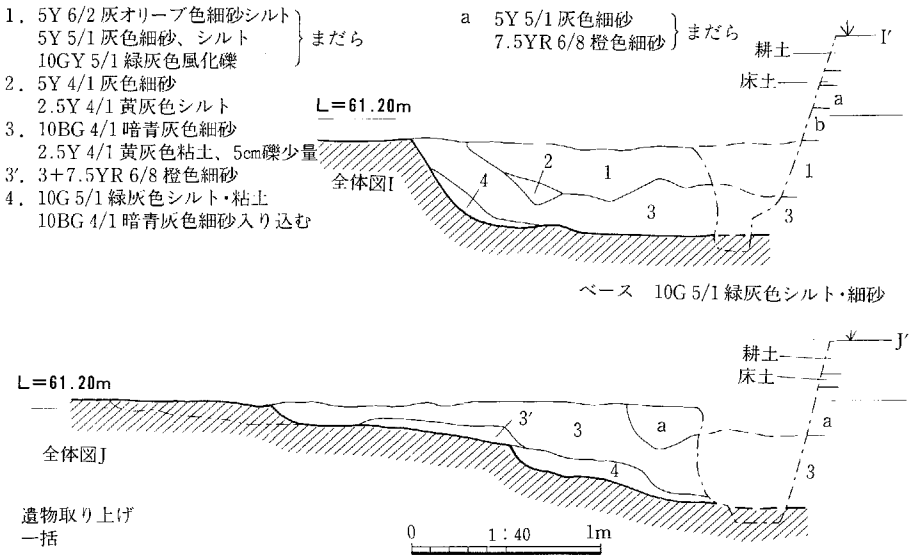


第60図　第IV区堀SH２と周辺の遺構

溝ＳＤ14　堀ＳＨ２の南側、Ｂ段のＮ10に位置する。幅1.8m、深さ24cm、延長0.5m分を検出した。遺物は、奈良時代の須恵器１点が出土している。

溝ＳＤ3（第61・100・106図、ＰＬ．27）

Ｅ段のＥ5－Ｇ11に位置し、直線的に北東－南西方向に延びる。幅１～２m分、深さ50～70cm、延長27m分しか検出できていない。埋土は、上半が人為的埋土（図１・２層）、下半が青灰色粘土・シルト（図３・４層）を主体とする自然堆積層と考えられる。土器類は、弥生土器の広口壺(874)、備前舟徳利(875)・丹波擂鉢(876)など26点が出土している。その他、室町時代の軒平瓦(877)・平瓦４点、江戸時代の瓦７点、木製品では下駄(923)などが出土している。



第61図　第Ⅳ区溝SD３東西土層実測図

溜め桝ＳＦ４

Ｅ段のＤ3・4に位置し、南北方向の長方形を呈している。東西7.5m以上、南北６m以上、深さ30cm以上である。西辺の南北方向に胴木が認められ、多数の板材が検出されている。土器類は出土していない。溜め桝ＳＦ４の痕跡は、ＰＬ．２の1958年の航空写真の調査地内外に方形区画を認めることができ、その時点で既に埋没していたものである。

その他の検出遺構と出土遺物

土坑ＳＫ5（第５図、写真６）　Ｆ段のＪ13に位置し、歪つな楕円形ぎみの土坑である。短軸（北東－南西）2.2m、長軸（北西－南東）3.9m、深さ46cmである。第２次確認調査２Ｋトレンチのｓ K09に該当する土坑である。遺物は、室町時代の土師器土釜(T21)・瓦質土釜(T23)などと共に江戸時代末～明治の陶磁器など多数が出土している。

その他、Ｆ段の南端Ｑ28～Ｓ30にかけて遺物包含層に切り込む土坑群が存在した。土坑ＳＫ５に類似し、土坑ＳＫ31・41・42などがある。遺物は、土坑ＳＫ31から丹波甕(902)、硯(915)などが出土している。このような土坑は、第Ⅲ区Ｋ段においても多数認められるものである。

土坑ＳＫ38　Ｈ段のＳ33に位置し、歪つな楕円形の土坑である。短軸(北々西－南々東)1.4m、長軸（西南西－東北東）3.1m以上、深さ17cmである。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ39　Ｈ段のＳ33・34に位置し、不整形の土坑である。短軸（北々西－南々東）0.64～1.04m、長軸（西南西－東北東）3.2m、深さ15cmである。遺物は出土していない。

溝ＳＤ45　Ｆ段のＮ22－Ｏ23に位置し、直線的で細長い土坑状を呈している。幅(西南西－東北東)0.9～1.65m、深さ６ｍ、延長7.75m分を検出した。遺物は出土していない。

溝ＳＤ46　Ｆ段のＭ20－Ｎ23に位置し、緩やかに蛇行する。幅0.5m、深さ５～８ｍ、延長8.8m分を検出した。遺物は出土していない。埋土は、Ｆ段の遺物包含層の堆積土に類似する。

第Ⅳ区　堀ＳＨ１全層

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器			
	石器・石製品			
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀		
		高坏		
		甕・土釜	1	3.57
		塝		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	13	46.43
		蓋	2	7.14
		鉢・捏鉢		
		壺	1	3.57
		甕・塝	11	39.29
		甑		
		甑		
		高坏		
		横瓶		
		平瓶		
		竈		
小計			28	47.46
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀		
		甕・土釜		
		竈		
	黒色土器	坏・皿		
		椀		
	須恵器			
	緑釉			
	灰釉			
小計				
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿		
		捏鉢		
		土釜・甕		
		塝		
	瓦器	椀・鉢	2	100
		皿		
		足釜		
	須恵器(質)	椀・捏鉢		
		壺・甕		
	陶器	備前		
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
小計			2	3.39

時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	16	61.54
		椀		
		捏鉢		
		土釜	1	3.85
		塝	1	3.85
		蓋		
	瓦器(質)	捏鉢		
		土釜		
		塝		
		甑		
		湯釜	1	3.85
		火舎・香炉		
	陶器	備前	1	3.85
		瀬戸美濃	3	11.54
		常滑		
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁		
		白磁	2	7.69
		染付		
	朝鮮	雑釉	1	3.85
	その他	塝		
小計			26	44.07
江戸	土師器(質)	皿	1	33.33
		土釜・塝		
		焙烙		
	瓦質	甑		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前		
		堺		
		瀬戸美濃		
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器		
		肥前系磁器	2	66.67
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付		
小計			3	5.08
合計			59	100

第Ⅳ区　堀ＳＨ２第２層下部・第３層

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器			
	石器・石製品			
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	8	10.81
		高坏		
		甕・土釜		
		塝		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	11	14.86
		蓋	1	1.35
		鉢・捏鉢		
		壺	9	12.16
		甕・塝	44	59.46
		甑		
		甑		
		高坏		
		横瓶		
		平瓶	1	
		竈		
小計			74	84.09
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀		
		甕・土釜		
		竈		
	黒色土器	坏・皿		
		椀		
	須恵器			
	緑釉			
	灰釉			
小計				
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿		
		捏鉢		
		土釜・甕		
		塝		
	瓦器	椀・鉢		
		皿		
		足釜		
	須恵器(質)	椀・捏鉢		
		壺・甕		
	陶器	備前		
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
小計				

時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	6	42.86
		椀		
		捏鉢	1	7.14
		土釜		
		塝		
		蓋		
	瓦器(質)	捏鉢		
		土釜		
		塝		
		甑		
		湯釜		
		火舎・香炉		
	陶器	備前	6	42.86
		瀬戸美濃		
		常滑		
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付	1	7.14
	朝鮮			
	その他	塝		
小計			14	15.91
江戸	土師器(質)	皿		
		土釜・塝		
		焙烙		
	瓦質	甑		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前		
		堺		
		瀬戸美濃		
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器		
		肥前系磁器		
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付		
小計				
合計			88	100

表９　第Ⅳ区遺構出土遺物の構成比率１

３　遺物包含層と出土遺物

Ｆ段の遺物包含層（第62・64・102図、表10）

第Ⅳ区の遺物包含層は、Ｆ段を中心として広がる堆積層である。堀ＳＨ１の整地土と考えられる埋土は、包含層から除外して考える。遺物包含層は、地形そのものが丘陵裾から南東方向に緩やかな傾

第Ⅳ区　堀ＳＨ２Ａ１層・Ａ２層・Ｂ層・ＢＣ層・Ｃ層・第１層・第２層

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器			
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器			
	石器・石製品			
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	5	2.15
		高坏		
		甕・土釜	1	0.43
		鍋		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	57	24.46
		蓋	24	10.30
		鉢・捏鉢		
		壺	18	7.73
		甕・鍋	125	53.65
		甑		
		甌		
		高坏	1	0.43
		横瓶		
		平瓶	2	0.86
		竈		
小計			233	62.97
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	1	100
		甕・土釜		
		竈		
	黒色土器	坏・皿		
		椀		
	須恵器			
	緑釉			
	灰釉			
小計			1	0.27
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	2	28.58
		捏鉢		
		土釜・甕	1	14.29
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	1	14.29
		皿	1	14.29
		足釜		
	須恵器（質）	椀・捏鉢	1	14.29
		壺・甕		
	陶器	備前	1	14.29
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
小計			7	1.89

時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	32	29.91
		椀		
		捏鉢	1	0.93
		土釜	1	0.93
		鍋	3	2.80
		蓋		
	瓦器（質）	捏鉢	1	0.93
		土釜		
		鍋		
		甕		
		湯釜	1	0.93
		火舎・香炉	3	2.80
	陶器	備前	40	37.38
		瀬戸美濃	6	5.61
		常滑		
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁	3	2.80
		白磁	3	2.80
		染付	4	3.74
	朝鮮			
	その他	黒釉	9	8.41
小計			107	28.92
江戸	土師器（質）	皿		
		土釜・鍋		
		焙烙		
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前		
		堺	2	9.09
		瀬戸美濃	2	9.09
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器	3	13.64
		肥前系磁器	13	59.09
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付	2	9.09
小計			22	5.95
合計			370	100

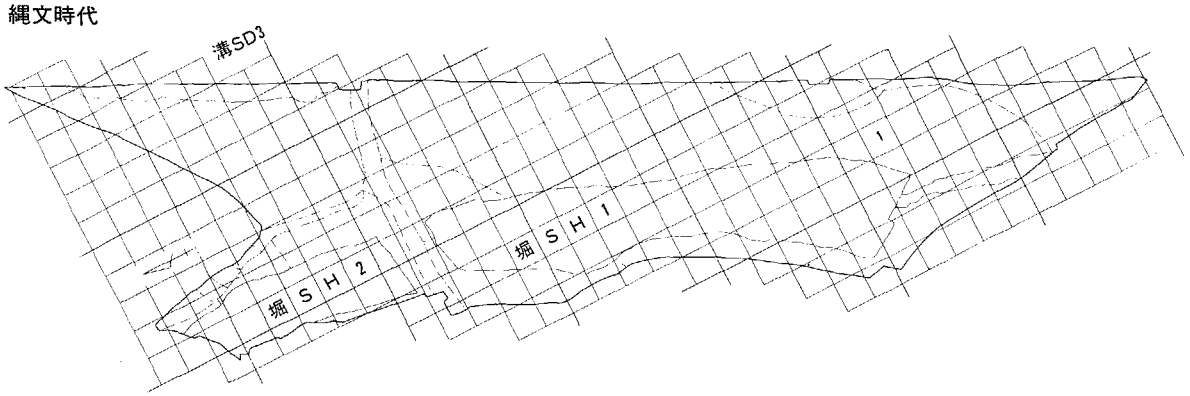
第Ⅳ区　Ｆ段ほか遺物包含層

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器		1	0.56
	石器・石製品			
弥生	弥生土器・古式土師器			
	石器・石製品			
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	2	3.28
		高坏		
		甕・土釜		
		鍋		
		製塩土器		
	黒色土器	椀		
	須恵器	皿・坏AB	16	26.23
		蓋	4	6.56
		鉢・捏鉢	1	1.64
		壺	11	18.03
		甕・鍋	27	44.26
		甑		
		甌		
		高坏		
		横瓶		
		平瓶		
		竈		
小計			61	34.27
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀		
		甕・土釜		
		竈		
	黒色土器	坏・皿		
		椀	2	100
	須恵器			
	緑釉			
	灰釉			
小計			2	1.12
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	10	31.25
		捏鉢		
		土釜・甕	7	21.88
		鍋		
	瓦器	椀・鉢	13	40.63
		皿	1	3.13
		足釜		
	須恵器（質）	椀・捏鉢	1	3.13
		壺・甕		
	陶器	備前		
		常滑		
		瀬戸		
	灰釉			
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
小計			32	17.98

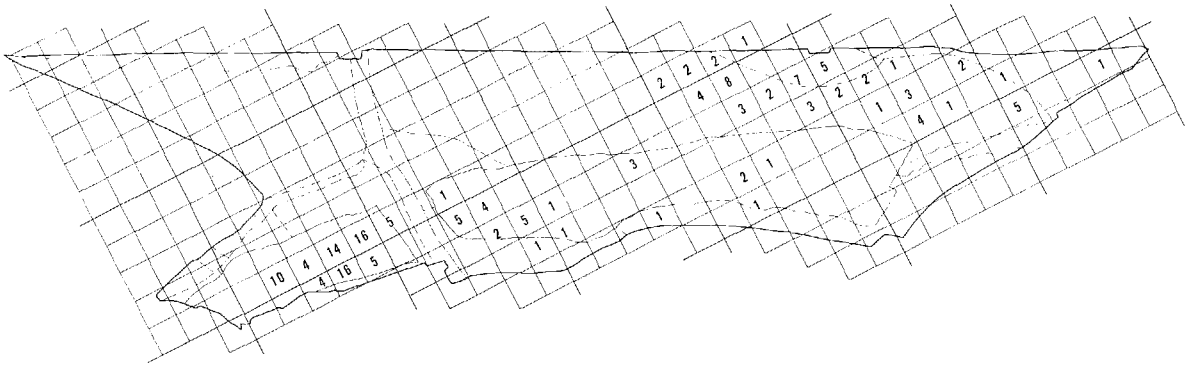
時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	47	58.02
		椀		
		捏鉢		
		土釜	16	19.75
		鍋		
		蓋		
	瓦器（質）	捏鉢	2	2.47
		土釜	6	7.41
		鍋		
		甕		
		湯釜		
		火舎・香炉	2	2.47
	陶器	備前	5	6.17
		瀬戸美濃	3	3.70
		常滑		
		丹波		
		信楽		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付		
	朝鮮			
	その他	鍋		
小計			81	45.51
江戸	土師器（質）	皿		
		土釜・鍋		
		焙烙		
	瓦質	甕		
		火舎・火鉢		
	陶磁器	備前	1	100
		堺		
		瀬戸美濃		
		常滑		
		丹波		
		伊賀信楽系		
		肥前系陶器		
		肥前系磁器		
		志野		
		織部		
		京焼系		
	中国製磁器	青磁		
		白磁		
		染付		
小計			1	0.56
合計			178	100

表10　第Ⅳ区遺構出土遺物の構成比率２

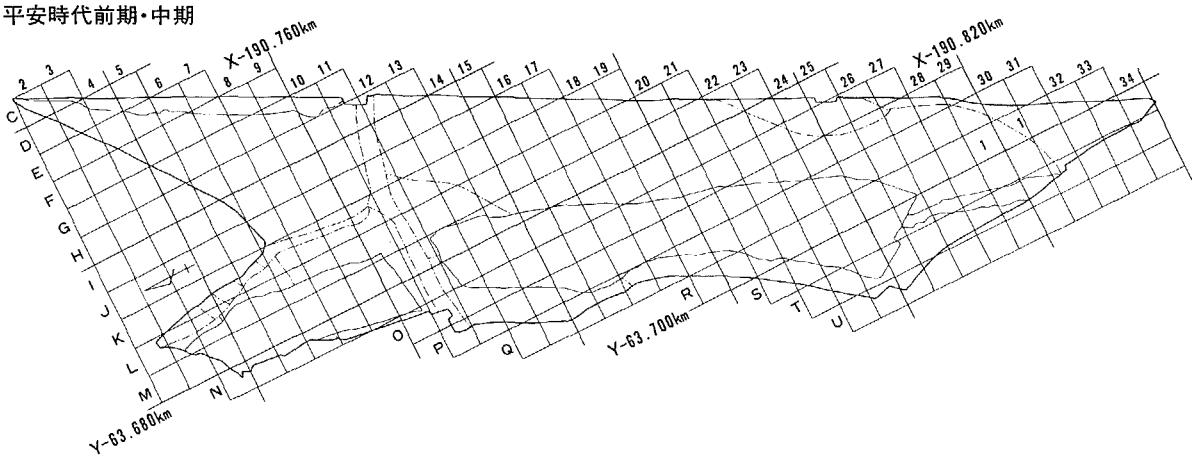
縄文時代



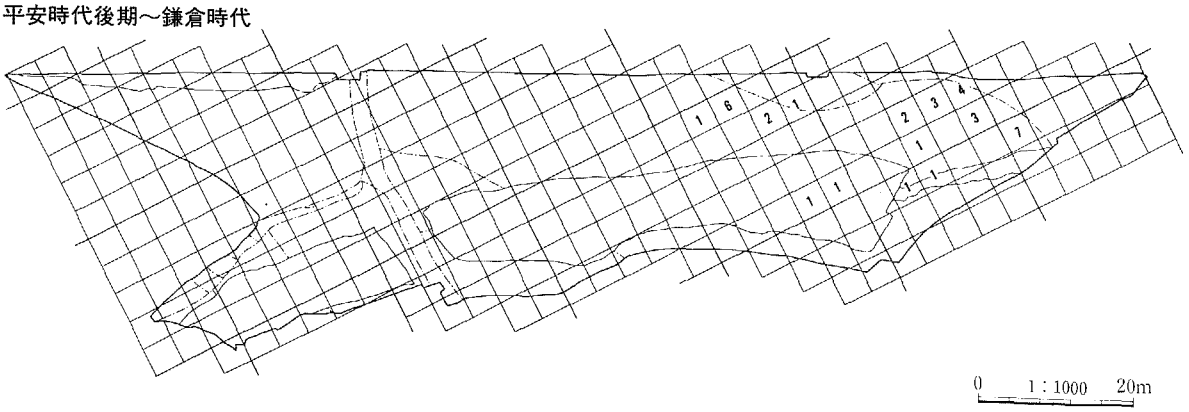
古墳時代末～奈良時代



平安時代前期・中期



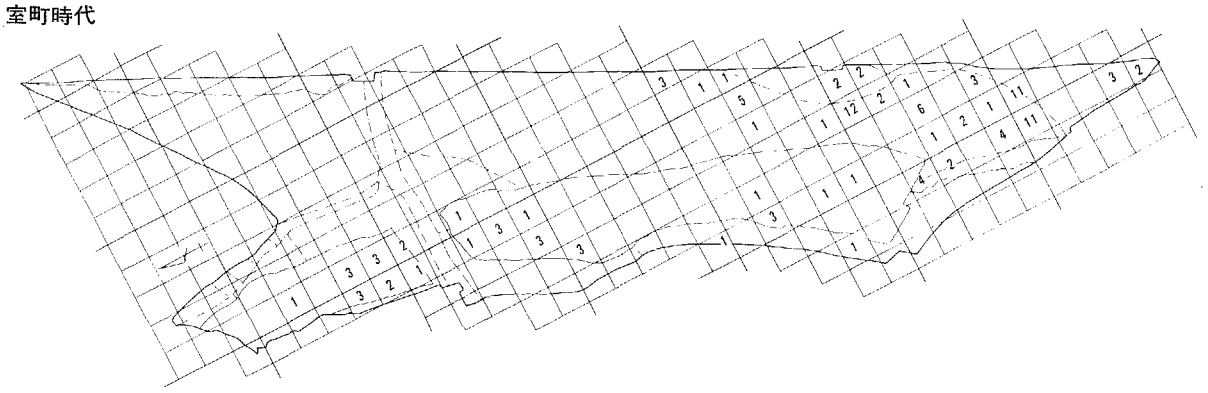
平安時代後期～鎌倉時代



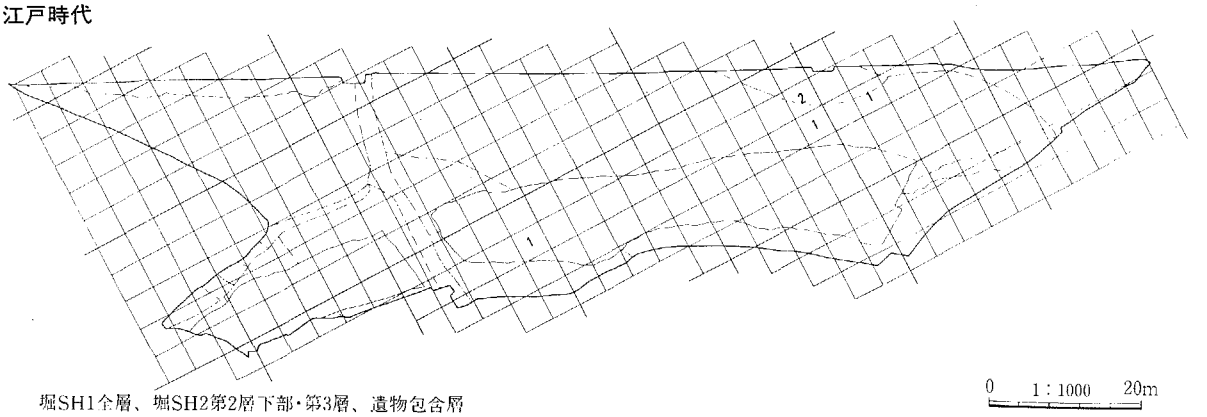
堀SH1全層、堀SH2第2層下部・第3層、遺物包含層

第62図　第Ⅳ区遺構・包含層出土遺物の分布密度 1

室町時代



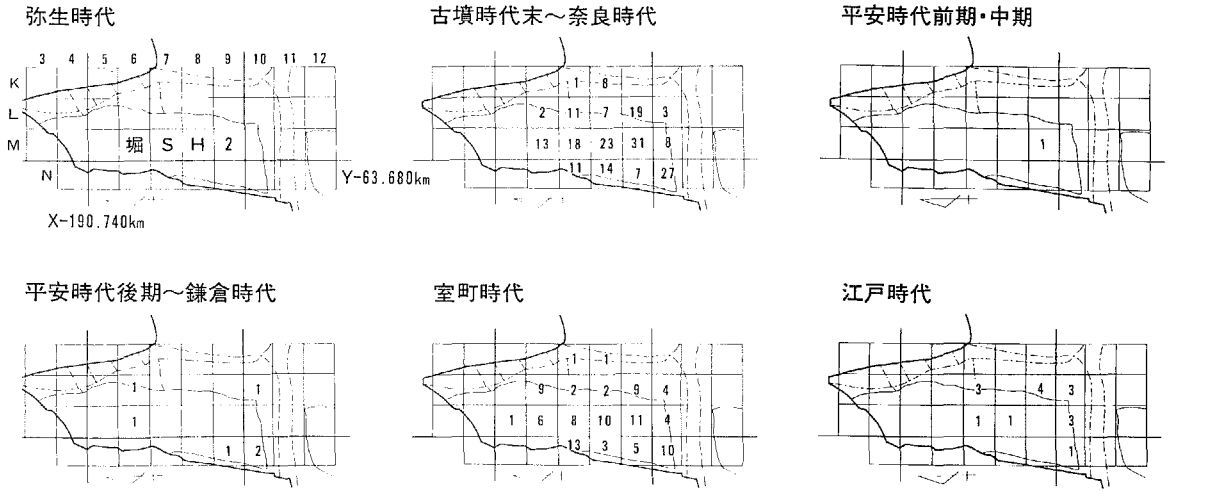
江戸時代



堀SH1全層、堀SH2第2層下部・第3層、遺物包含層

0　1：1000　20m

第62図　第Ⅳ区遺構・包含層出土遺物の分布密度１



堀SH2 A層、B層、C層、第1層、第2層

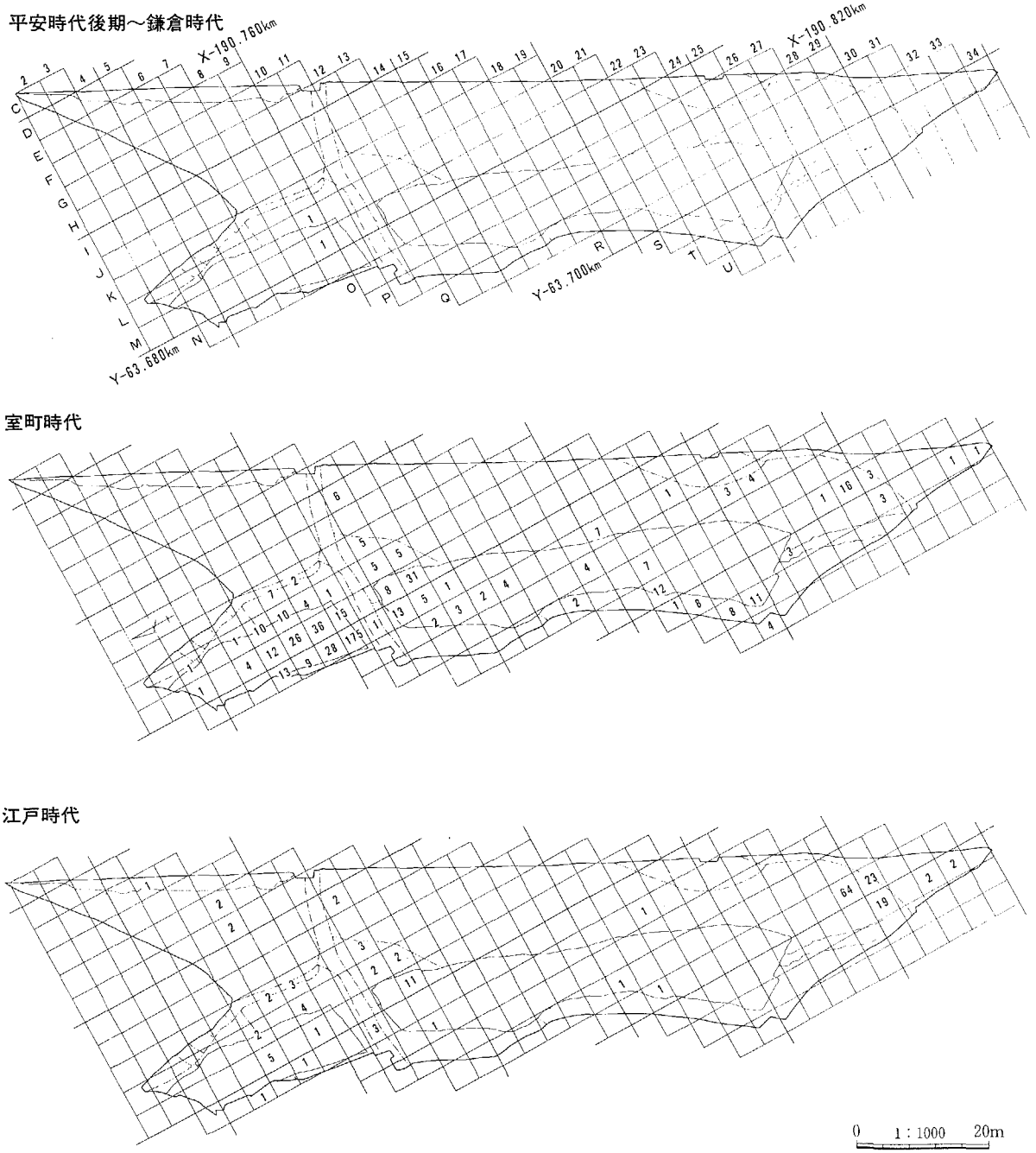
第63図　第Ⅳ区遺構・包含層出土遺物の分布密度２

0　1：1000　20m

斜をもち、その南東方向に厚く堆積する状況がある。この堆積層は、黒褐色粒の沈殿層が認められ、何層かに細分できるため、第Ⅲ区の段ＳＷ37に伴う堆積層と類似するものである。本来、遺物包含層は田畑の耕作土であったものと考えられる。遺物は、江戸時代の唐津蓋(886)を含み、室町時代の土師器皿(883)・土釜(884)、瀬戸美濃鉄釉瓶子(885)など178点が出土している。遺物の分布では、奈良時代の遺物がＦ段の中央寄りに多いのに比べて、室町時代の遺物はＦ段の南寄りに多い傾向がある。

J～J′段の遺物包含層

E段の北側に位置し、確認調査において調査の及ばなかった範囲の段々畑である。調査対象地外であったため、一部しか確認できていない。包含層の大半は、段々畑の造成のために斜面側に整地された堆積層である。整地土は厚さ0.5～1m積み置かれているが、上部は粗砂礫を多量に含む江戸時代～現代に至る整地土である。下部のベース直上の整地土（厚さ20cm）は、殆ど礫を含まず、室町時代の土師器皿・土釜などが出土している。



瓦の分布密度

第64図　第IV区遺構・包含層出土遺物の分布密度 3

第Ⅴ章　まとめ

第１節　出土遺物と検出遺構

１　出土遺物

調査地区全体から出土した遺物は５万点以上におよぶが、本書にはその中から主だったものについて掲載した。その内、古墳時代末～奈良時代の遺物が、凡そ全体の６割以上を占める。根来寺坊院跡として時期的に同じ性格をもつ遺物群は、全体の３割強である。

旧石器時代　旧石器時代に属する遺物には、サヌカイト製の細石刃１点・ナイフ形石器３点と剥片多数が出土している。第Ⅲ区の一部でベース層の遺物の確認を行ない、中世遺構のベース層が旧石器時代の純粋な包含層でないことが判明したが、調査地を含めて広範囲に旧石器時代の遺物の散布が想定される。

縄文～弥生時代　縄文～弥生時代の遺物は、縄文・弥生土器とサヌカイト製の石鏃・掻器などがある。土器は、縄文時代晩期の船橋式に併行する突帯文土器と粗製土器、弥生時代前期・中期に属するものが微量出土している。

弥生時代の遺物点数に含めたものには、微量ではあるが庄内式･布留式併行期の土器も認められる。

古墳時代末～奈良時代　古墳時代末～奈良時代の遺物の主体は、７世紀前半から８世紀中頃にかけてのものである。初期須恵器と思われる遺物は、第72図93に示した甕１点のみである。須恵器の中には、焼き歪みのある遺物が多いことや溶着した遺物が存在すること。また、窯体の一部が出土していることなどから、調査地ないしは付近に須恵器の窯が存在し、後世の何度かの開発に伴い、灰原にいたるまで削平を受けて消滅したものと考えられる。

平安時代前期・中期　平安時代前期・中期の遺物は、全体の中で最も少ない遺物量である。これらの大半は、10世紀を中心とした時期のものである。遺跡の消長として、この期の前後に空白期間を認めることができる。

平安時代後期～鎌倉時代　平安時代後期～鎌倉時代の遺物の主なものは、14世紀代のものである。12～13世紀代の日常的な遺物や中国製白磁・青磁も微量認められるが、比較的少ない状況にある。これらの遺物を伴う時期の遺構は明確ではない。

室町時代　室町時代としているが、出土遺物破片点数の算出基準とした年代観にそぐわない分類方法を採った場合もある。それは、14世紀後半～15世紀前半の中で断絶を認めることができない点にある。主体は、町屋の展開する14世紀後半～15世紀前半と根来寺坊院の繁栄期とされる16世紀後半に区分することが可能である。

江戸時代　江戸時代の遺物は、安土・桃山時代の遺物群を含みつつ、長期にわたるものである。大きくは、根来寺焼亡直後の16世紀末～17世紀前半、復興期の17世紀後半～18世紀、幕末から明治にか

けての19世紀後半の三段階に区分することができる。

2　出土遺物の比率と分布（表11・12）

出土遺物の破片点数を算出する目的は、以下の２点に要約される。一つは、遺構・遺物包含層の出土遺物の傾向・頻度を見ることによって、その性格を把握すること。もう一つは、調査地の全体傾向と既往の調査地（根来寺坊院跡山内）との相違を探ることにある。

本資料では、古墳時代末～鎌倉時代にかけての近隣での比較資料がないため、室町時代の遺物に限って比較せざるを得ない。

根来寺坊院跡山内の調査事例と比較してみると、ＮＧ80資料は狭い谷合の塔頭、ＮＧ81資料は広い盆地の塔頭と言う違いこそあるが、山内総体として捉えてみることにする。

本調査地区では、山内に比較して数量的な差が認められるものの、比率の上では土師器・瓦質の捏鉢・土釜・土堝が多い傾向にある。一方、瓦質の火舎・香炉、中国製の白磁・染付、備前焼が少ない。また、土師器の皿類、陶器の瀬戸美濃・常滑・丹波焼などは類似した傾向にある。

これらの比率の違いは、町屋に近い庶民的な在り方と坊院の建ち並ぶ山内の宗教施設との違いを如実に物語っているものと考えられる。また、土師器皿類の消費量、備前焼以外の陶器の流通量は基本的に変わらないことを示している。なお、通常、根来寺坊院跡山内で15世紀代に主流を占める白色系の土師器皿類は極僅かしか出土していない。

総合計

時代	種類	器種	点数	比率(%)
縄文	縄文土器		6	0.01
	石器・石製品		17	
弥生	弥生土器・古式土師器		95	0.19
	石器・石製品		138	
古墳末～奈良	土師器	皿・坏・椀	449	1.40
		高坏	23	0.07
		甕・土釜	629	1.95
		堝	2	0.01
		製塩土器	8	0.03
	黒色土器	椀	3	0.01
	須恵器	皿・坏AB	14,738	45.80
		蓋	2,204	6.85
		鉢・捏鉢	289	0.90
		壺	2,830	8.79
		甕・堝	10,782	33.51
		甑	6	0.02
		瓶	1	0.003
		高坏	73	0.23
		横瓶	23	0.07
		平瓶	57	0.18
		竈	62	0.19
小計			32,179	64.55
平安前・中期	土師器	皿・坏・椀	96	33.45
		甕・土釜	40	13.94
		竈	6	2.09
	黒色土器	坏・皿	11	3.83
		椀	124	43.21
	須恵器		4	1.39
	緑釉		3	1.05
	灰釉		3	1.05
小計			287	0.58
平安後期～鎌倉	土師器	皿・小皿	3,720	38.63
		捏鉢	5	0.05
		土釜・甕	1,273	13.22
		堝	6	0.06
	瓦器	椀・鉢	4,071	42.27
		皿	138	1.43
		足釜	49	0.51
	須恵器（質）	椀・捏鉢	172	1.79
		壺・甕	57	0.59
	陶器	備前	62	0.64
		常滑	12	0.12
		瀬戸	1	0.01
	灰釉		3	0.03
	中国製磁器	青磁	41	0.43
		白磁	20	0.21
小計			9,630	19.32

時代	種類	器種	点数	比率(%)
室町	土師器	皿・小皿	3,314	51.00
		椀	1	0.02
		捏鉢	144	2.22
		土釜	891	13.71
		堝	107	1.65
		蓋	8	0.12
	瓦器（質）	捏鉢	208	3.20
		土釜	365	5.62
		堝	26	0.40
		甕	73	1.12
		湯釜	27	0.42
		火舎・香炉	97	1.49
	陶器	備前	711	10.94
		瀬戸美濃	119	1.83
		常滑	48	0.74
		丹波	2	0.03
		信楽	1	0.02
	中国製磁器	青磁	194	2.99
		白磁	66	1.02
		染付	53	0.82
	朝鮮		6	0.09
	その他		37	0.58
小計			6,498	13.03
江戸	土師器（質）	皿	20	1.73
		土釜・堝	13	1.12
		焙烙	44	3.81
	瓦質	甕	2	0.17
		火舎・火鉢	8	0.69
	陶磁器	備前	68	5.88
		堺	32	2.77
		瀬戸美濃	93	8.04
		常滑	4	0.35
		丹波	60	5.19
		伊賀信楽系	33	2.85
		肥前系陶器	274	23.70
		肥前系磁器	453	39.19
		志野	7	0.61
		織部	1	0.09
		京焼系	12	1.04
	中国製磁器	青磁	1	0.09
		白磁	4	0.35
		染付	27	2.33
小計			1,156	2.32
合計			49,851	100

表11　第Ⅰ区～第Ⅳ区全出土遺物の構成比率

			〔ニ〕	〔ハ〕	〔ロ〕	計
中国製陶磁器	青磁	碗	174	140	48	362
		皿	13	16	38	67
		盤	67	36	5	108
		香炉	7	16	1	24
		瓶	31	4	0	38
		その他不明	13	35	0	48
		小計	308	247	92	647
	白磁	碗	5	4	0	9
		皿	428	143	75	646
		その他不明	52	124	5	181
		小計	485	271	80	836
	染付	碗	78	81	5	164
		皿	257	53	10	320
		その他	6	46	0	52
		小計	341	180	15	536
	黒(褐)釉四耳壺		138	4	1	143
	天目茶碗		20	0	0	20
	その他中国製		1	0	0	1
朝鮮陶磁器製		ソバ茶碗	0	5	0	5
		褐釉瓶	15	39	3	27
国産陶器・土器	美濃瀬戸系	天目茶碗	123	76	18	217
		〃 平碗	0	6	0	6
		灰釉皿	62	23	8	93
		〃 碗	3	0	0	3
		〃 盤	27	1	0	28
		〃 香炉	3	0	0	3
		〃 瓶	10	0	0	10
		おろし皿	1	0	0	1

			〔ニ〕	〔ハ〕	〔ロ〕	計
		その他	8	14	0	22
		小計	237	120	26	383
	備前	壺	1,427	1,230	499	3,156
		甕	1,814	1,028	908	3,750
		スリ鉢	118	77	57	252
		水屋甕	298	102	57	457
		徳利	190	77	90	357
		鉢	0	7	16	23
		その他	45	0	0	45
		小計	3,992	2,521	1,627	8,040
	信楽	壺	12	0	21	33
	丹波	壺	38	31	172	241
	常滑	甕	0	4	143	147
	不明焼しめ陶		13	0	0	13
	土師質瓦質土器	火鉢	227	322	2	551
		火舎	287	81	76	444
		こね鉢	288	37	2	327
		椀	5	2	0	7
		釜	1	0	0	1
		塙	4	0	2	6
		その他不明	127	5	0	132
		小計	939	447	82	1,468
	土師器	皿	6,495	1,573	208	8,276
	瓦器	椀	12	0	0	12
	総計		12,946	5,442	2,470	20,858

NG80出土土器総破片数

			〔ニ〕	〔ハ〕	〔ロ〕	NG80
青磁		碗	1.34	2.57	1.94	1.73
		皿	0.10	0.29	1.54	0.32
		盤	0.52	0.66	0.20	0.52
		小計	2.38	4.54	3.72	3.10
白磁		碗	0.04	0.07	0	0.04
		皿	3.30	0.62	3.03	3.10
		小計	3.75	4.98	3.24	4.01
染付		碗	0.60	1.49	0.20	0.79
		皿	1.99	0.97	0.40	1.34
		小計	2.63	3.31	0.61	2.57
黒釉四耳壺			1.07	0.07	0.04	0.69
褐釉瓶			0.12	0.72	0	0.27
美濃瀬戸系		天目茶碗	0.95	1.40	0.73	1.04
		灰釉皿	0.48	0.42	0.32	0.45
		盤	0.20	0.02	0	0.13
		小計	1.83	2.21	1.05	1.84
備前		壺	11.02	22.60	20.20	15.13
		甕	14.01	18.89	36.76	17.97
		スリ鉢	0.91	1.41	2.31	1.21
		水屋甕	2.30	1.87	2.31	2.19
		徳利	1.47	1.41	3.64	1.71
		小計	30.84	46.32	65.87	38.55
土師質瓦質土器		火鉢	1.75	5.92	0.08	2.64
		火舎	2.22	1.49	3.08	0.36
		こね鉢	2.23	0.68	0.08	1.57
		釜	0.008	0	0	0.005
		塙	0.03	0	0.08	0.03
土師器		皿	50.20	28.90	8.42	39.68

総破片数に対する器種別の割合(%)

	種類	器種	点数
中国	青磁	碗	109
		皿	14
		盤	12
		香炉	8
		瓶	1
		鉢	16
		托	1
		坏	1
		その他	15
		小計	177
	白磁	碗	4
		皿	895
		坏	18
		瓶	2
		その他	7
		小計	926
	染付	碗	68
		皿	406
		盤	25
		坏	3
		その他	7
		小計	509
	黒(褐)釉	四耳壺	149
	天目	碗	1
	赤絵	皿	3
	青白磁	梅瓶	15
	その他		5
	中国計		1,785
朝鮮	青磁	瓶	1
		ソバ茶碗	3
	輸入計		1,789

	種類	器種	点数
国産	美濃瀬戸	天目茶碗	54
		灰釉碗	8
		〃 皿	39
		〃 盤	6
		〃 瓶	10
		おろし皿	4
		その他	19
		小計	140
	備前	壺	773
		甕	1,395
		スリ鉢	20
		水屋甕	20
		徳利	222
		鉢	18
		その他	10
		小計	2,458
	信楽	壺	20
	丹波	壺	4
	常滑	甕	42
	不明焼しめ陶		10
	国産陶計		2,672
	土師質瓦質	火鉢	280
		火舎	35
		こね鉢	113
		塙	58
		椀	32
		その他	17
		小計	535
	土師皿		9,128
	瓦器	椀	20
		皿	10

種類	器種	点数
国産計		14,825
総計		16,614

	種類	器種	比率
中国	青磁	碗	0.66
		皿	0.08
		盤	0.07
		鉢	0.10
		香炉	0.05
		小計	1.07
	白磁	碗	0.02
		皿	5.39
		坏	0.11
		小計	5.57
	染付	碗	0.41
		皿	2.44
		盤	0.15
		小計	3.06
	黒釉四耳壺		0.90
	天目茶碗		0.006
	赤絵	皿	0.17
	青白磁	梅瓶	0.09
朝鮮	青磁	瓶	0.006
		ソバ茶碗	0.17
国産	美濃瀬戸	天目茶碗	0.33
		灰釉皿	0.23
		〃 瓶	0.06
		小計	0.84
	備前	壺	4.65
		甕	8.40

	種類	器種	比率
		スリ鉢	0.12
		水屋甕	0.12
		徳利	1.34
		鉢	0.11
		小計	14.79
	信楽	壺	0.12
	丹波	壺	0.02
	常滑	甕	0.25
	土師質瓦質	火鉢	1.69
		火舎	0.21
		こね鉢	0.68
		椀	0.19
		塙	0.35
	土師皿		54.95
	瓦器	椀	0.12
		皿	0.06

NG81出土土器総破片数（近世省く）

総破片数に対する器種別の組成比（%）

表12　根来寺坊院跡山内出土の遺物構成比率

3　円盤状土製品の法量分布（第65図）

第Ⅳ区の堀ＳＨ２などからも４点の出土を見るが、今回の出土品の大半は、第Ⅱ区の堀ＳＨ27・ＳＨ29の埋土や、その上層部の撹乱層から出土している物である。

従来、根来寺坊院跡の調査でも瓦や陶磁器の破片を打ち欠いて、円盤状の製品にした物が出土している。島根県富田川河床遺跡や広島県草戸千軒町遺跡でも多数出土例があり、「円盤状土製品」「円板状土製品」として報告されているが、用途が不明確である。本稿では打ち欠いた形態に従って「円盤状土製品」として、法量の分布を検討してみることにする。

個々の円盤状土製品の時期別の傾向を検討していないが、最も新しい物として、波佐見窯系の磁器や伊賀・信楽窯系陶器の転用品があることから、その所属時期の下限を江戸時代中期とすることができる。ただ、今回の資料から円盤状土製品の消長について、云々することは難しい。

最も出土量の多い瓦製（42点）では、直径8.2×8.9cm、重量240gと傑出する物が存在するが、分布領域は、直径3.5～６cm、重量30～110gに一定のまとまりを見出すことができる。中には、磨いて角を取る物も見受けられる。これは、富田川河床遺跡でも報告されているように、別の用途を考えるべきかもしれない。

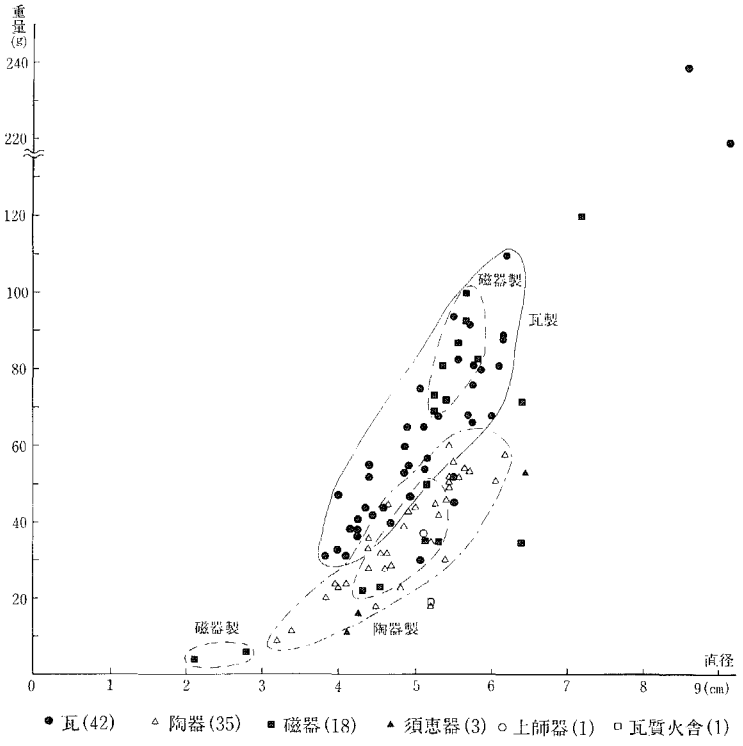
次に出土量の多い陶器製（35点）では、分布領域は直径３～６cm、重量10～60gに一定のまとまりがある。瓦製と領域が異なるのは、元々陶器より瓦の方が厚く、その分重量が増すためと考えられる。

磁器製（18点）は、若干数量が減少するが、瓦製・陶器製の分布領域の中に一定のまとまりが存在する。

須恵器製（３点）、土師器製（１点）、瓦質火舎製（１点）の物は極端に少ないが、分布としては陶器製の領域に近い傾向を示している。

以上の事から、転用品の種類によって重量の差が認められるが、寸法に同一の傾向を看守することができる。さらに、瓦の厚さや高台が遺存したままの磁器類の有ることを問題にすれば、重量よりむしろ寸法にその必要性があった物と考えられる。

時代、時期の限定できる遺構の出土でないため、その用途まで導き出すことはできないが、遊戯具、もしくは何らかの道具に付随して使用された物であったかもしれない。



第65図　円盤状土製品法量分布図

４　検出遺構

室町時代末期に根来寺の町屋の南側を区画する堀の存在は、従来の根来寺の在り方を根本的に改めざるを得ない遺構である。ここでは、根来寺坊院山内と直接関係するとみられる段階から記述する。

鎌倉時代：古い遺構の性格付け

第III区のＬ段北端に土坑が掘削されている状況から、Ｌ・Ｌ′段の開発が比較的早い時点での鎌倉時代に成されていたことが判明した。Ｌ段の北端に掘削された土坑墓や土坑にＳＫ240・ＳＫ241・ＳＫ166・ＳＫ314などがあり、これら土坑の掘削は平坦地の造成後に行なわれたものと考えるのが妥当である。一部の田畑の段々には、明らかに江戸時代後期まで待たねばならない部分も認められるが、丘陵裾の緩斜面の開発が鎌倉時代13世紀末～14世紀初頭に行なわれたことが判明した意義は大きい。

これは、根来寺坊院の発展過程の中での第II期に符合するものであるが、直接根来寺の発展過程と結び付くものであるかどうか検討する余地があろう。

室町時代前期：周辺部の大規模開発

この時期はＬ段～Ｎ段の柱穴群、Ｐ段の谷状地形の掘削等の開発が目立つ段階である。Ｌ段～Ｎ段の遺物包含層、Ｐ段の谷状地形の新しい遺物の大半は室町時代14世紀末～15世紀前半にかけての一群である。これらの検出遺構・遺物の出土状況から、当地域の本格的な開発が町屋の開発と期を同じくして行なわれたことが理解できる。根来寺坊院の発展過程の中での第III期に符合するものである。

室町時代後期：寺域と町屋への城砦施設の設置

この時期の遺構は、今次の調査で最も注目される丘陵裾や町屋を取り囲む堀の掘削される段階である。当該期の遺構と考えられるものは、堀以外に第II区Ｔ段の土坑群・溝ＳＤ４・ＳＤ６や第III区井戸ＳＥ283等が存在するが、前段階に比較して遺物量が減少する傾向にある。第II区堀ＳＨ27・ＳＨ29から当該期の遺物の出土をみるが、江戸時代の遺物に伴って出土した二次的な資料である。

当時期は、歴史の中で根来寺が最も隆盛を誇った段階で、根来寺坊院の発展過程の中での第IV期に符合するものである。堀の特殊性や石造遺物を省いた日常遺物の減少は、当調査区周辺における城砦施設の設置に伴い土地の利用方法が変化したものと考えられる。

石造遺物の廃棄と堀の埋没状況

石造遺物が大量に出土した第IV区堀ＳＨ２では、堀の掘削と石造遺物の廃棄の時期・理由が最大の課題となる。単純なようだが、断定し難い要素をはらんでいる。

一つの問題に、石造遺物が廃棄されたときに投げ捨てられたのではなく、堀底に積み置かれている状況がある（ＰＬ．25－３・４）。このことは、石造遺物を廃棄した時点では、水深が浅く泥土の堆積した状態であったことになる。堀内の堆積土の観察や調査で出土した板碑（第113図992）等に泥土に埋まっていた痕跡があり、これを裏付けるものである。また、土壌の花粉・珪藻分析結果においても、陸性珪藻の一種が優占することが報告されている。

第IV区堀ＳＨ２から出土した石造遺物の内、最新の紀年銘資料は組合式五輪塔の天正七年（1579）

銘である。堀の掘削後、少しの間を置いて石造遺物の廃棄が行なわれたとすれば、堀の掘削を1579年前後に置く考えになる。従って、堀の機能していた期間は、根来寺焼き討ち：天正十三年(1585)：までの短期間である。第Ⅱ区堀ＳＨ27・ＳＨ29においては、遺構の項で記述したように最下層にまで江戸時代の遺物が入り込むため、その掘削時期を明らかにすることができない。別の視点から、堀の開口が長期にわたり、調査地の東側に位置する町屋から廃棄物の投棄が為されたものと考えられる。

また、第Ⅳ区堀ＳＨ２では、石造遺物はかなりの高さまで積み置かれた状況を復元することができ、そのまま空堀にしておくと、堀そのものの機能が半減してしまうことが考えられる。このことから、その後に導水を行った可能性が考えられる。ただ、調査においては、導水や排水施設は確認されておらず、自然的な湧水・流水によってある程度の滞水が存在したものと考えられる。

石造遺物を廃棄した理由については、今回の考古学的な手法で解明することができないが、堀の北西側の丘陵に在する塔頭の何処かに安置されていたものが持ち運ばれたと考えるのが妥当であろう。

近隣の開発が進み、往古の趣がなくなりつつある昨今、いかにして根来寺の歴史的環境と現在の生活を融和させていくかが、重大な課題となってくるであろうことは必至である。調査によって得られた成果が、これらの課題に対して、多少なりとも貢献することになれば幸いである。

第２節　文献史料の記載

調査・整理の段階で根来寺に関する資料を当っていくうちに、僅かではあるが調査地に関係する幾つかの文献史料を見出すことができた。その多くは、諸先生方が既に、僧兵の軍事力や根来寺の城砦施設を検討する論巧の中で活用されている史料である。文献史料には、調査で検出した堀の存在や現在ゴルフ場になっている北西側の丘陵の性格を検討する際に非常に参考になる記述が認められる。このような文献史料には、次頁に示した５点が存在する。

調査で検出した堀や北西側の丘陵の性格を、文献史料の記述と対比して考えてみる。

史料１・２にみられる“西山”の記述は、現在の子字名“西ノ山”に相当するものと考えられる。そのことからすれば、『萩藩閥閲録』の“西山と申一城”“西山之城”、『藤堂文書』の“門前西山”の記述は、北西側の丘陵を示すものである。また、『萩藩閥閲録』から北西側の丘陵に在した勢力は根来寺僧兵四旗頭の内の一人、岩室坊の可能性が指摘できるものである。

堀の存在については、『紀伊續風土記』の“外堀の跡”や前代に遡る「紀伊國古城」の古記録を掲載した『和歌山縣那賀郡誌』の“根來古城”から、堀の推定位置や規模を読み取ることができる。その位置は、中世根来寺の町屋をも囲い込むことが記載されている。「紀伊國古城」の原典を探ることができなかったが、“根來古城”の位置は、まさしく調査地の北西側の丘陵に該当するものであり、また、堀の規模が具体的に記述されており、調査で検出した堀と過不足のないものである。堀の延長については、「紀伊國古城」の“前に堀有東西長五町一間”をそのまま現状地形に当てはめると、岩出町教育委員会が調査したＫ地点（第４・６図）の西側のゴルフ場登り口から町屋のメインストリートまでの範囲に比定することができる。

史料１　「根来主馬家の由緒書」『**萩藩閥閲録**』　慶長５年（1600）

私家筋之儀者、覚鑁上人開基紀州根来寺為住職、西山と申一城を抱、岩室坊 与申寺ニ在住仕候、天正年中秀吉公之不随上意候付而、西山之城 江御馬を被向、及一戦、岩室坊勢伝致討死、根来一旦及断絶候、住職之儀者俗縁之者相定候寺法 ニ付、勢伝甥勢祐を後住 ニ極置候得共、根来破滅之時、漸八歳ニ罷成、未入寺不仕、里 ニ居候故、親族共高野山安養院 江連退申候、由緒有之付而、彼寺ニ罷在候處、関原御陣 ニ付、勢祐貳拾八歳之時、御家御味方可仕之由、堅田大和（元慶）守・阿曽沼丹後（就郷）　守以両人被仰渡、御家□三萬石可被下置之由 ニ 而、御請申上之、根来之者召連、人数千三百三拾五人 ニ 而罷出、森口御張番被仰付、為御目代役阿曽沼丹後守被差出之。

史料２　「天正十三年秀吉公紀刕入之覚」『**藤堂文書**』

「根来寺へ御押詰、門前西山と申所御本陣をすへられ、其夜根来寺不残御焼拂候」

史料３　『**根来破滅因縁**』寛永13年（1636）正統房日誉

「二三日相過、太閤様宕（岩）室坊 ニ御座ヲ御立、諸軍ハ一山 ニ入渡リ」

史料４　『**紀伊續風土記**』明治43年（1910）第一輯　巻之二十四

西坂本村　邇志左加母登

田　畑　高		千四百六十石六斗一升一合
家	數	百九十軒
人	數	六百七十一人

森村の乾一町半にあり根來山へ登る阪の麓なるを以て坂本の名あり西にあるを西坂本といひ東にあるを東坂本といふ

東西相去ること十六町餘村の人口古へ根來盛なる時の外堀の跡とて今に東西四五町許の堀形遺れり村の北風吹峠を越れは泉州信達に至る行程三里なり

史料５　『**和歌山縣那賀郡誌**』　大正12年（1923）　那賀郡役所

根來古城　「紀伊國古城」に根來古城といふあり何頃のものか何人の築造に成りしや知らざれどありのまま茲に採録す

「西坂本一町西に根來古城あり総廻十町四十三間　東西二町二十七間　南北二町二十四間　山の高東の原十五間　西の原十九間

城山後北の方は鳶城山續城山の根に住持池あり東西は谷也谷底廣二十間有りて向は野山なり前に堀有東西長五町一間廣九間深一間今は田地也此堀北の方に土井あり東西五町十一間横行合四間半高一間半あり

總廻り十町堀長五町廣九間其北方に高一間半の土井を築けりと云へば相當規模大なりしなり

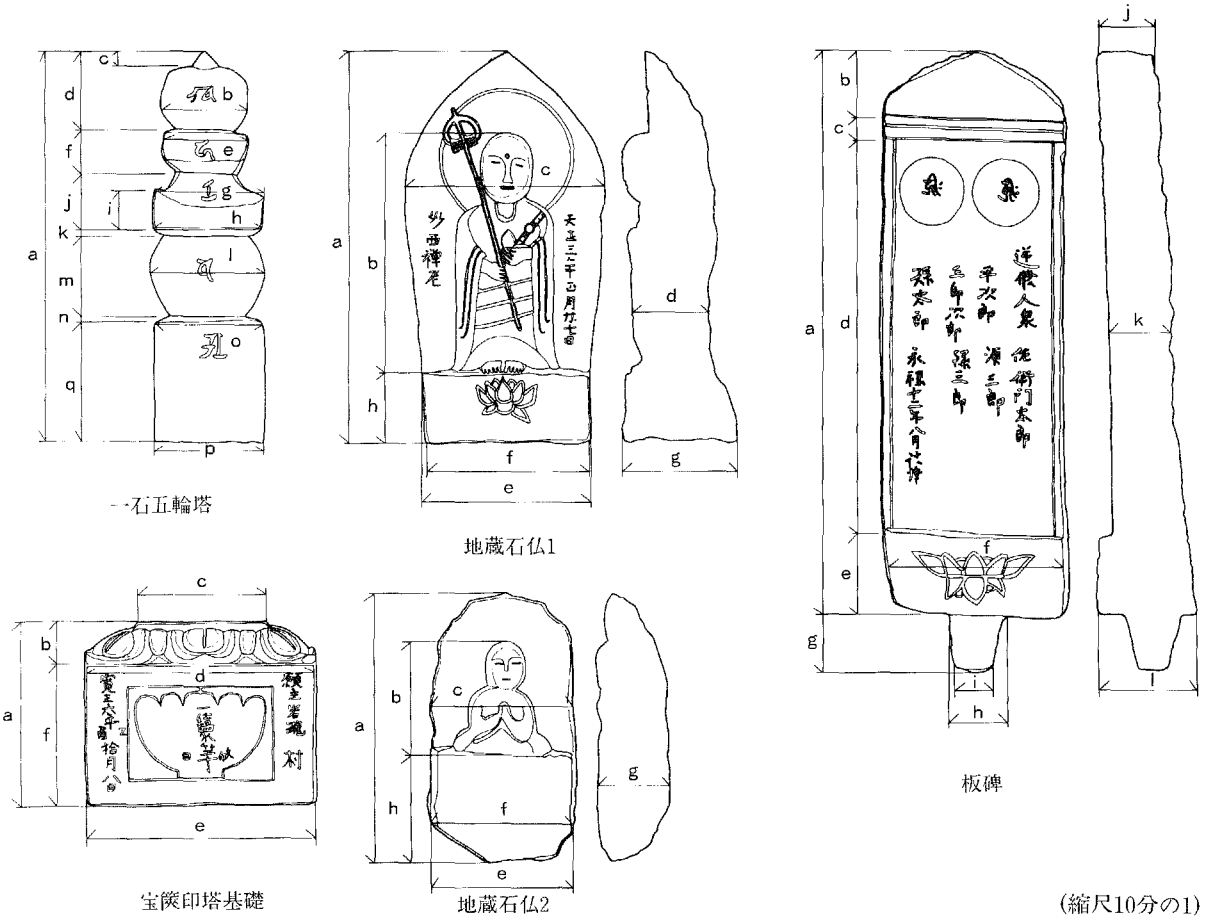
第３節　石造遺物の基礎資料作成

１　整理方法と計測（第66図）

石造遺物の大半は、第Ⅳ区堀ＳＨ２から出土している。その他、第Ⅳ区堀ＳＨ１、第Ⅱ区堀ＳＨ27上層部からの出土である。これらの石造遺物は、完存品の多いのが特徴であり、中には紀年銘を有する資料も多く含まれている。また、在銘品の中には、金泥や漆・墨書等を施した逸品も認められる。これらの石造遺物を資料化するに当り、一石五輪塔に主眼を置いて、出来る限りその寸法を計測することに努めた。計測と同時に、特徴的な部分の観察を行ない、巻末に掲載した一覧を作成している。

石造遺物は他の遺物と異なり、かなり重量の有るものばかりなので、遺物収納コンテナに収納すると同時に、出来る限り、抽出し易いように整理している。実測図・拓本として掲載できた物は、時間の制約により全体の一部である。

各石造遺物の計測部分は、第66図に示したとおりである。石造物の各種類において共通する項目を抽出し、組合式五輪塔・一石五輪塔・地蔵石仏・宝篋印塔・板碑・台座・その他に区分して行なっている。石造遺物の計測は、巻末の「石造遺物計測一覧」に示したとおりである。計測数値の中で、火輪の笠部の反りの角度、空輪の膨らみ・角張りなどの比率を出すに至っていない。



第66図　石造遺物の計測

今次の調査で出土した石造遺物は、全て和泉砂岩を石材としている。

後述するように、近隣に安置されている中世にかかる石造物のほとんどが和泉砂岩である。これは、石材の入手が容易な地域的な傾向による処が大である。中に、花崗岩などを認めることができる場合は、江戸時代以後の遺品と考えられるほどである。異なる石材として根来寺坊院山内において、板碑の資料で緑泥片岩が若干認められる程度である。

総　高		a
空輪	幅	b
	先端高	c
	高	d
風輪	幅	e
	高	f
火輪	軒上幅	g
	下幅	h
	軒高	i
	高	j
		k
水輪	幅	l
	高	m
地輪		n
	上幅	o
	下幅	p
	高	q

一石五輪塔

総　高		a
地蔵高		b
最大幅		c
奥　行		d
基礎	上幅	e
	下幅	f
	下奥行	g
	高	h

地蔵石仏１

総　高		a
地蔵高		b
最大幅		c
基礎	上幅	e
	下幅	f
	下奥行	g
	高	h

地蔵石仏２

総　高		a
枘穴	深	
	径	
反花座	高	b
	上端幅	c
台座	上幅	d
	下幅	e
	高	f

宝篋印塔基礎

上　幅	c
下　幅	e
総　高	a

台座
（宝篋印塔基礎に対応）

総　高		a
身部高		d
頂部山形高		b
二線切込高		c
根部	高	e
	幅	f
枘	高	g
	基部径	h
	下端径	i
奥行	上	j
	中	k
	下	l
側奥行	上	
	中	
	下	

板碑

石造遺物の計測部名称

2　石造遺物の総数（表13）

調査地から出土した石造遺物は、組合式五輪塔・一石五輪塔（安置式・埋込式）・地蔵石仏（立像・座像など）・宝篋印塔・板碑（三角・舟形）・台座・その他がある。これらの総数は、表13に示すとおりである。

出土総数 486点の内、大半の９割は一石五輪塔である。これらの点数は、石造遺物を資料化するために、完存品・欠損品の個々を各１点として算出している。

石造遺物においても、接合関係を努めて検討しているが、接合しなかった部分品も多々認められる。大半を占める一石五輪塔の内、梵字以外の何らかの銘を有するものは97点存在する。その他、組合式五輪塔では５点、地蔵石仏では３点、宝篋印塔では２点、板碑では１点が在銘品である。

奥付に掲載した道標は、旧淡路街道と根来寺山内に至る辻付近で出土した物である。

種類＼遺構	第II区 堀SH27上部	第IV区 堀SH１	第IV区 堀SH２	第IV区 転用石積み	計
組合式五輪塔	7		11(5)		18(5) *3.9%*
一石五輪塔（安置式）	1(1)	5	380(95)	29(1)	415(97) *89.2%*
〃　〃（埋込式）			4		4 *0.9%*
地蔵石仏（立像）			5(3)		5(3) *1.1%*
〃　〃（座像）	2		12		14 *3.0%*
宝篋印塔			5(2)		5(2) *1.1%*
板　碑（三角）			1(1)		1(1) *0.2%*
〃　〃（舟形）			3		3 *0.6%*
計	10(1)	5	421(106)	29(1)	465(108) *100.0%*
台　座	2 { 中1 小1		11 { 大3 中1 小7		13
その他		1 { 板石	4 { 板石2 長方体1 宝敷石1		5
江　戸	道　標1 台　石1 燈籠台座1				3

（　）内は在銘数

表13　石造遺物の種類別数量

3　石造遺物と銘文（表14～16）

石造遺物に施された銘文は、種類を異にすれば、宝徳三年（1451）～天正十二年（1584）までの資料が認められる。天正十二年銘をもつ一石五輪塔は、第Ⅱ区堀ＳＨ27上層部の不安定な埋土からの出土であり、二次的に動かされた室町時代の遺物と共に出土しているため、この資料の取扱いは慎重に成らざるを得ない。天正十二年銘を省けば、紀年銘資料は第Ⅳ区堀ＳＨ２・１から出土した物に限られる。

紀年銘を石造遺物の種類別にみると、組合式五輪塔では永正十二年(1515)～天正七年(1579)、一石五輪塔では宝徳三年（1451）～天正五年（1577）、地蔵石仏では天正二年（1574）と天正三年（1575）、宝篋印塔では寛正六年（1465）と元亀四年（1573）、板碑では永禄十二年（1569）に限られる。このように最も時期幅の長いものは一石五輪塔である。一石五輪塔の時期別の傾向をみると、宝徳三年（1451）から始まり、天文十一年（1542）、永禄十一年(1568)前後、天正四年(1576)前後の遺品が多く、全体の各ピークを迎えている。これらのピークは、根来寺坊院跡山内の出土資料の傾向と類似する部分と異にする部分が認められる。

全ての種類における在銘品の内、何らかの法名等を有する資料は、100点存在する。これらの法名は、法印・法師・禅門等の10種類が認められる。

石造遺物の種類を別にすれば、禅門・禅尼が多く、次いで法印・法師・俗名の順となる。これらを石造遺物の種類毎に

西暦年＼種類	組合式五輪塔	一石五輪塔	地蔵石仏	宝篋印塔	板碑	計
1450～1455		1				1
1461～1465				1		1
1510～1515	2	1				3
1521～1525		2				2
1526～1530		1				1
1531～1535		2				2
1536～1540	1	4				5
1541～1545		8				8
1546～1550		2				2
1551～1555		4				4
1556～1560		7				7
1561～1565		6				6
1566～1570	1	9			1	11
1558～1570		1				1
1571～1575		7	2	1		10
1576～1580	1	6				7
1581～1585		1				1
1573～1592 天正年間		1				1
計	5	63	2	2	1	73
名前・法名のみ		24				24
不明・消滅?		10	1			11
合計	5	97	3	2	1	108

表14　在銘石造遺物の数量

法名等＼種類	組合式五輪塔	一石五輪塔	地蔵石仏	宝篋印塔	板碑	計
大徳		(7)				(7)
大法印			(1)			(1)
法印		9 (37)	(57)	2	(6)	11(100)
大法師		(2)	(4)			(6)
法師	1	8 (54)	(9)		(2)	9 (65)
阿者利			(1)			(1)
僧都			(1)			(1)
禅門	2	29 (5)	(11)	1		32 (16)
禅定門			(1)			(1)
禅尼	2	22 (5)	2 (2)	1	(2)	27 (9)
霊位		1 (4)	(1)			1 (5)
大姉		2				2
計	5	71	2	4		82
童女		(1)				(1)
法界		1				1
菩提		1 (1)				1 (1)
俗名				1	6	7
名前のみ		9 (5)	(3)		(2)	9 (10)
合計	5	82(120)	2 (91)	5	6 (12)	100(224)

(　)内は、根来寺坊院跡山内

表15　在銘石造遺物と法名

西暦・和暦	記載型式 1	2	3	4	5	6	地輪 幅-高(cm)	名前・法名	総高(cm)
1451・宝徳3					○		+1.6	禅清禅尼	(31.9)空風欠
1511・永正8	○						+0.9	勢傳法印	(34.5)空風欠
1522・大永2		○					−0.4	道圓禅門	(47.0)空先一部欠
1525・大永5		○					−0.9	妙聖禅尼	(33.0)空風欠
1526・大永6	○						−1.3	道泉禅門	(50.8)空先一部欠
1535・天文4	○						−0.8	善心大姉逆修	(39.4)空風欠
〃　〃	○						−1.5	尊心大姉逆修	(34.7)空風欠
1537・天文6				○			−1.5	快尊法印	47.5
1538・天文7				○			−1.8	「Ⅱ」禅尼	(52.2)空先一部欠
1539・天文8		○					−2.2		(41.8)空先一部欠
1540・天文9	○						−1.9	妙雲禅尼	(46.5)空先一部欠
1542・天文11				○			±0.0	妙珎禅尼	50.3
〃　〃				○			+0.2	道心逆修	50.3
〃　〃				○			−0.6	妙法逆修	49.5
〃　〃				○			±0.0	妙祐逆修	48.7
〃　〃				○			+0.1	妙正逆修	(32.3)空風欠
1544・天文13	○						−2.3	妙善逆修	(55.3)空先大半欠
1545・天文14				○			+0.3	道珎禅門	48.7
〃　〃				○			−3.1	道源禅門	(30.1)空風欠
1547・天文16				○			+0.9	宗舜逆修	(49.0)空先一部欠
1549・天文18				○			−0.2	道金禅門	39.6
1552・天文21				○			+0.4	妙光禅尼	41.2
〃　〃				○			−3.7	妙忍禅尼	(38.4)空風欠
1553・天文22				○			−0.9	道永禅門	(43.4)空先一部欠
1555・天文24				○			−4.0	妙共禅尼	60.7
1556・弘治2				○			−0.8	快祐法印	(54.0)空先一部欠
1558・永禄元				○			−2.9	道祐禅門	56.8
1558・永禄1				○			−2.7	道西禅門	50.3
1559・永禄2				○			−1.9	道正逆修	40.3
1560・永禄3				○			−3.1	妙禅禅尼	(39.8)空風欠
〃　〃				○			−4.4	道泉禅門	53.7

西暦・和暦	記載型式 1	2	3	4	5	6	地輪 幅-高(cm)	名前・法名	総高(cm)
1560・永禄3				○			−2.2	乗阿弥陀仏	(47.7)空先一部欠
1561・永禄4				○			−1.1	道善禅門	47.8
〃　〃				○			−1.7	貞清法師	50.2
1562・永禄5				○			−1.4	覚泉法師	(55.7)空先一部欠
〃　〃				○			−1.5	道祐禅門	(43.4)空先一部欠
1563・永禄6				○			−1.7	快尊法印	(35.9)空風欠
1565・永禄8				○			−1.0	道心禅門	(50.3)空先一部欠
1566・永禄9				○			−2.6	快澄法師	54.0
1568・永禄11				○			−1.3	妙善禅尼	(42.7)空先欠
〃　〃				○			−1.1	道金禅門	43.3
〃　〃				○			−2.5	聖泉法師	(57.2)空先一部欠
〃　〃				○			−2.6	道見禅門	(43.8)空先半部欠
1569・永禄12				○			−1.4	妙性禅尼逆修	(34.4)空欠
〃　〃				○			−1.7	道性禅門	(43.8)空先半部欠
〃　〃				○			−2.4	仙聖菩提	(54.3)空先一部欠
1570・永禄13				○			(台形状) +0.4	道西	45.0
永禄年間				○			−0.6		(39.7)空先一部欠
1573・元亀4				○			−0.7	道明禅門	(45.0)空先一部欠
1574・天正2				○			−5.4	道秀禅門	(46.8)空欠
〃　〃				○			−6.5	秀箐法印	56.2
1575・天正3				○			−1.4	道泉禅門	48.2
〃　〃				○			−1.9	秀瑜法印	54.1
〃　〃				○			−1.1	妙善禅尼	(14.2)地輪のみ
1576・天正4				○			±0.0	定泉法師	50.5
〃　〃				○			−1.7	道明禅門	(28.9)空風欠
〃　〃				○			−2.6	道永	(31.8)空風欠
〃　〃				○			−1.7	澄勢法印	(49.7)空先一部欠
〃　〃				○			−2.2	徳□法印	49.8
1577・天正5				○			−2.1	妙善禅尼	(44.4)空先一部欠
1584・天正12				○			−1.4	清蔵法師	(16.0)地輪のみ
天正年間				○			−2.0		(47.2)空先一部欠

記載型式 1:左方年月日・右方法名 2:左方年月日割書・右方法名 3:左方年号・中央月日・右方法名
4:左方月日・中央法名・右方年号 5:左方月日・中央年号・右方法名 6:左方年号・中央法名・右方月日

総高(　)付は、一部欠損残在数値

表16　一石五輪塔の銘文記載型式と地輪の関係

みると、組合式五輪塔・一石五輪塔では禅門・禅尼、宝篋印塔では法印・禅門、板碑では俗名が認められる。

一方、根来寺坊院山内の資料でみると、宝篋印塔の資料が欠如するが、一石五輪塔や地蔵石仏でその傾向を推し量ることが可能である。山内の資料の内、一石五輪塔では法師・法印が多く、地蔵石仏では法印・法師等が多く認められる傾向にある。

出土資料の中でも、僅かに漆・墨書の遺存するものが認められ、大半の石造遺物には紀年銘ないしは法名が描かれていたものと考えられる。それらは永い歳月の内に剝落した可能性の高いものである。

4　一石五輪塔の法量（表17）

一石五輪塔の内、在銘品でその全法量を把握できたものが74点存在し、無銘品において201点の資料が存在する。これらの法量の規格性を検討するため、まず、年号の判別する資料をドットし、検討を行なっている。紀年銘資料がかなりの数で存在し、70年間程度の幅の中に集中するが、個別の年代毎では、僅かな資料数となる。そのため各年代や時期幅毎に一石五輪塔の規格性の変化を認めるに至っていない。

次いで、無銘品の一石五輪塔についても、図上にドットを落とし、検討を加えてみた。しかし、数量が増加するのみで、一石五輪塔の法量の規格性等を導き出すことができなかった。

完存する一石五輪塔の内、総高で最大60.7cm、最小31.5cmにおよぶ。この内、在銘品では最大60.7cm、最小37.8cmの範囲内にあり、無銘品では最大58.1cm、最小31.5cmと小振りとなる。また、一石五輪塔の総高と地輪の幅（石材の横幅）の関係をみると、在銘品のみでみた場合、地輪の幅に半寸刻み程度の規格性が読み取れそうだが、無銘品を含めて考えると不明瞭となる。

一石五輪塔の幅：高さの比率は、1：3.5を主軸として、1：3.9～1：3.1の範囲に集中する傾向があり、何らかの規格性を示すものである。本来、一石五輪塔等は、方柱状のある一定の規格のある石材から作り出されたものと考えられるが、それらを明確にすることができなかった。

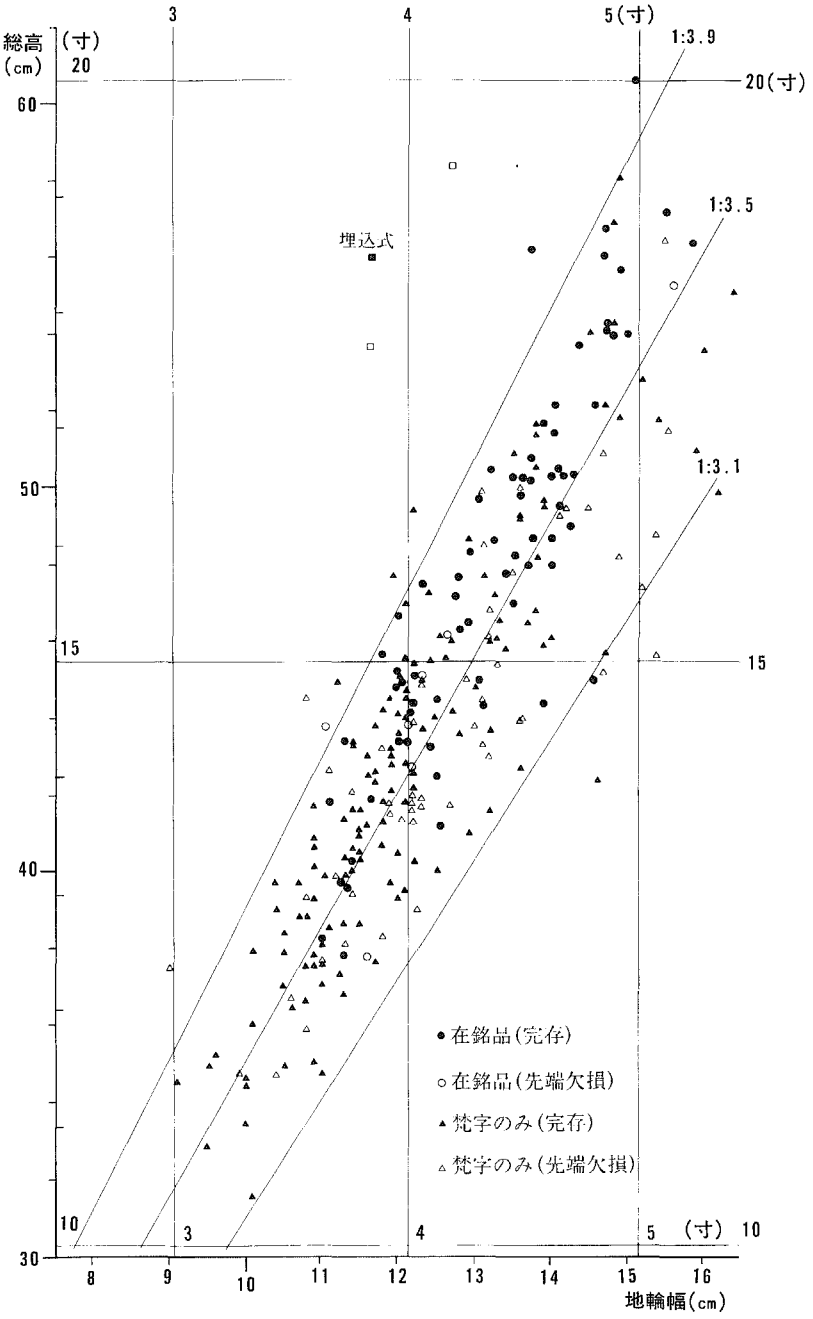


表17　一石五輪塔の法量分布

5　調査地周辺の石造物（写真17）

発掘調査と並行して、周辺部の石造物の所在を確認した。調査地周辺においても数多くの石造物の分布することが確認できた。調査地の北西側丘陵裾や丘陵を取り囲む田畑において、一石五輪塔・組合式五輪塔・台座などを、調査地の南東側の辻の祠（写真17-1）には多種類の石造物が認められる。

また、根来寺を含めた周辺部でみると、根来寺山内では根来無縁に一石五輪塔を初め、大量の資料が存在する。奥の院の参道脇には、多数の地蔵石仏が安置されている。周辺部では写真17に示す尼ケ辻・東坂本・西安上などに数々の石造物の集積を認めることができる。元より、これらの石造物は、その集積地の近くから出土した資料として把握することができる。辻の地蔵堂や祠に集められた石造物は、地蔵石仏が圧倒的多数を占め、安祥寺などの寺院境内では多種類が認められるようになる。

1．岩出町根来1072番地 辻の祠

5．根来寺山内大塔前無縁墓地

2．岩出町安上　安祥寺境内

6．根来寺山内大塔前無縁墓地

3．岩出町尼ヶ辻40番地　辻の地蔵堂

7．根来寺山内奥ノ院

4．岩出町西安上180番地　辻の地蔵堂

8．根来寺山内大門東側道沿

写真17　調査地周辺の石造物

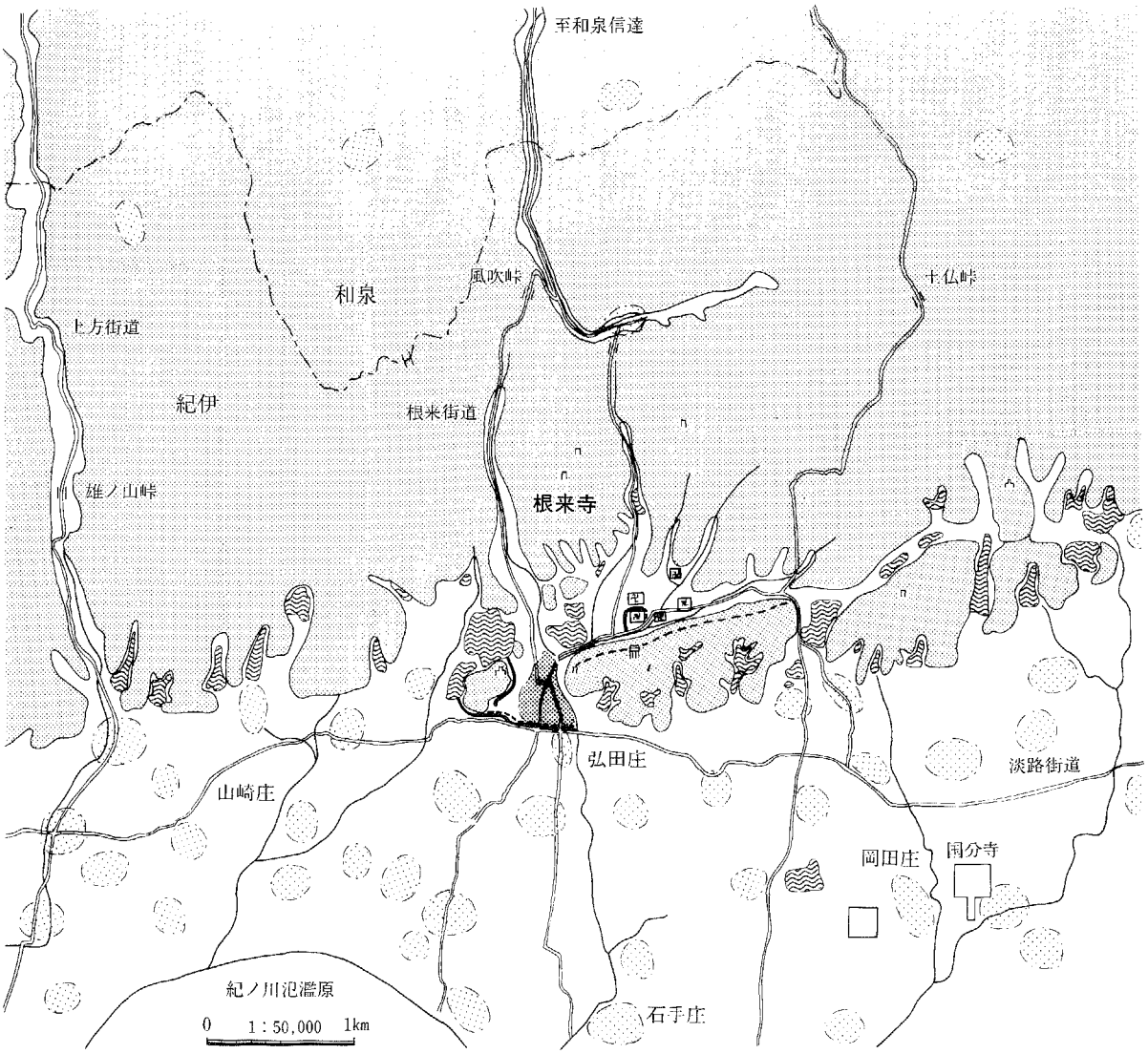
第4節　根来寺坊院跡における城砦景観の復元（第67・68図・写真18）

戦国時代末期の城砦的施設の一部を地図上に落しているが、村落は明治の地図を参考にしたため近世的な景観を与えるかもしれない。第67図に示す範囲が、紀伊における根来寺の経済圏の大半を表しているものと考えられる。

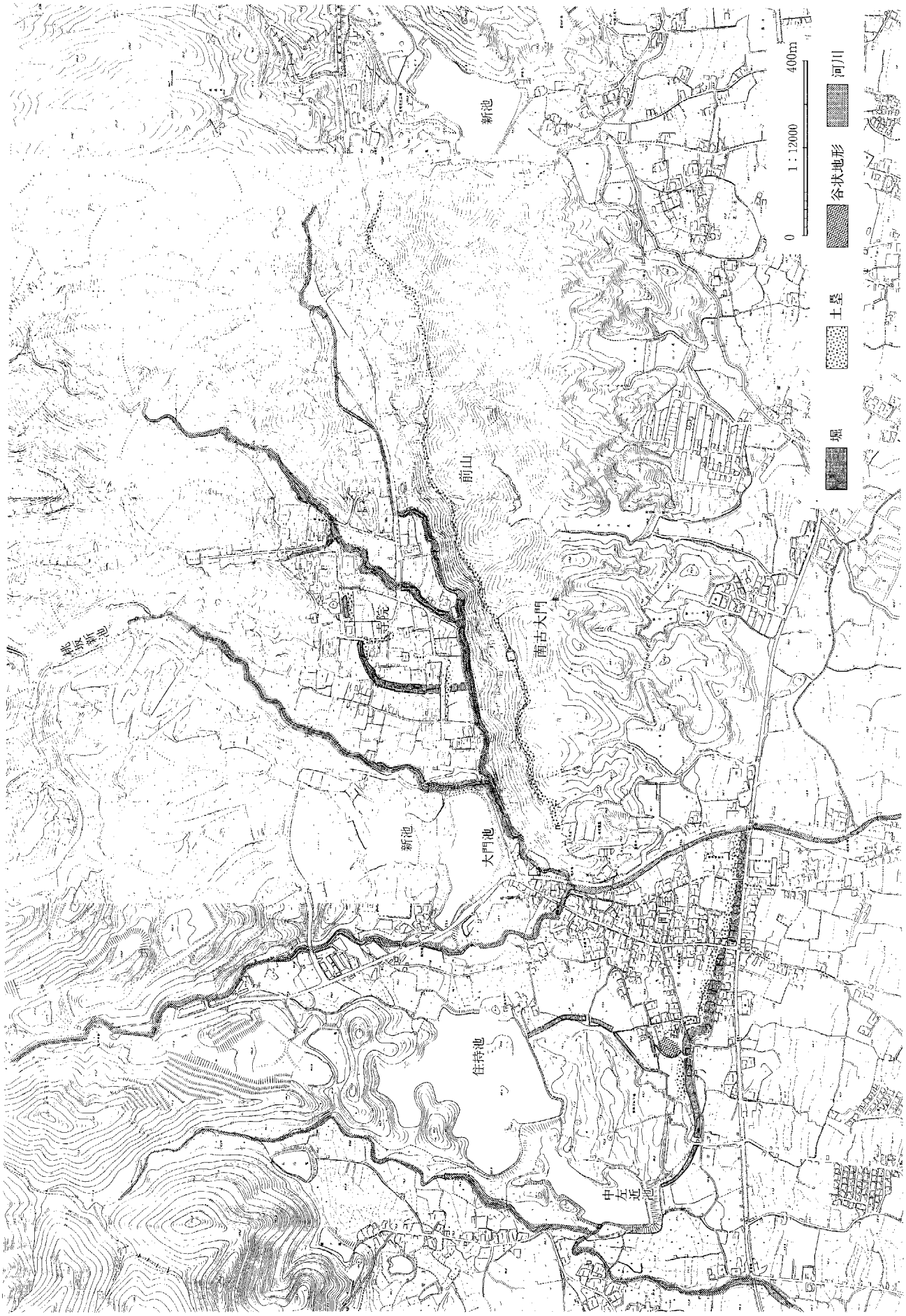
また、街道については、『歴史の道調査報告書』IIを参考にしている。当初から、淡路街道が近隣を東西に通じていたと考えられるが、堀の掘削により、街道は堀の外側の際に移動したものと考えるのが妥当であろう。根来街道と町屋の入口と堀の関係では、当初から街道としての南北道が存在し、それを土橋として残している。

山内の城砦施設の配置の状況は、要所要所の尾根筋の防備を固める状況にある。両側は「西ノ山」や堀・土塁の存在によって、町屋をも囲い込んだ大掛かりな施設を構築している。

これらの景観は、絵図に描かれていない。絵図そのものは、堂塔・坊院の記載に主眼を置いているため、城砦的施設は描かれていない。



第67図　戦国時代末期の根来寺及び周辺の様相



第68図　根来寺坊院における城砦的施設

1．住持池からの流水で満水になった堀跡(北々東から)

2．第IV区の北側に続く堀跡の地形(北々西から)

3．第II区の東側に続く堀跡の地形(西から)

4．根来町屋筋と前山(南々西から)

5．根来寺山内円明寺西側の堀跡(北々東から)

6．根来寺山内大門東側道沿いの土塁？(西南西から)

7．根来寺前山南古大門跡(東から)

8．根来寺前山稜線上の土塁(東から)

写真18　根来寺坊院に遺る城砦的施設ほか

付章

第１節　堀ＳＨ29出土　堝付着物の分析

堀ＳＨ29から出土した土堝(第77図265、PL. 34)は、形態上鍋の鋳型に酷似している。しかし、二次焼成を被けた痕跡が認められないなど、否定的な要素が強い。そこで、土堝内面に黒色物が厚く付着していたため、黒色物を分析することによって土堝の用途を検討することを試みた。

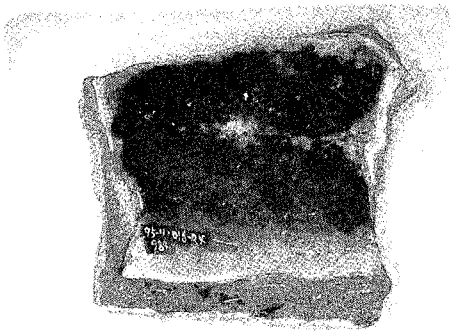
土堝付着物の分析　使用機器・原理　　(分析：元興寺文化財研究所保存科学センター)

・フーリエ変換型赤外分光光度計（ＦＴ－ＩＲ）(日本電子㈱製　ＪＩＲ－6000)

・赤外線を試料に照射することにより得られる、分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定する。

土堝付着物の分析結果

土堝内部の付着物をＦＴ－ＩＲで分析（ＫＢｒ錠剤法）した。また、堝本体の灰白色部分と黒色部分も同様に分析した。その結果、付着物および黒色部分は土堝に由来する吸収以外に、1400～1600cm^{-1}付近に吸収が確認できた（図１）。この吸収は木炭（炭化物の標準として分析）（図３）の吸収とほぼ一致しており何らかの有機物が炭化したものと推測できる。しかし、炭化物は素材（植物性･動物性）による違いが現れにくいため、この分析だけで素材まで確定することは困難であった。



分析場所（付着物）

付着物

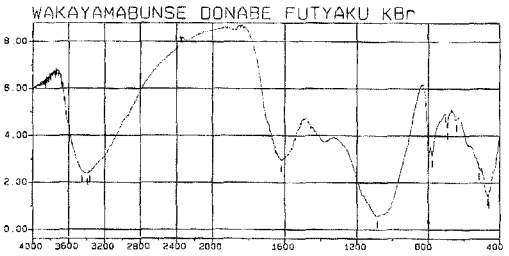


図１　付着物のＦＴ－ＩＲ分析チャート

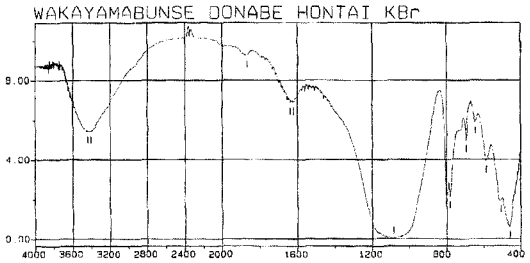


図２　灰白色部分のＦＴ－ＩＲ分析チャート

灰白色部分

分析場所（灰白色部分）

写真１　土堝の分析部位

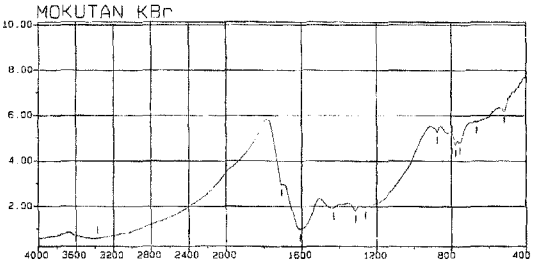


図３　木炭のＦＴ－ＩＲ分析チャート

第2節　堀ＳＨ１出土　喉輪の分析と保存処理

(財)元興寺文化財研究所保存科学センター　植田直見

1　はじめに

今回保存処理を行う喉輪は、鉄地に塗膜が施されたものである。そのため、通常の金属の処理では、塗膜に問題を生じる可能性が考えられるため、事前に材質や技法等の分析・調査を行った。それらをもとに、適切な保存処理を行うこととした。分析・調査から得られた知見と保存処理の概要を報告する。

2　分析および調査

塗膜の成分分析、塗膜の目視および断面観察、X線透過試験を行った。

(1)　方法

・成分分析

㈱日本電子製　JIR－6000フーリエ変換型赤外分光光度計(ＦＴ－ＩＲ)を用い、塗膜層の成分分析と、日立㈱製　EMAX2000 電子線マイクロアナライザー(ＥＰＭＡ)を用い、塗膜層と下地と思われる層の元素分析を行った。塗膜については①KBr錠剤法　②顕微赤外透過法で行う２通りの方法をとった。塗膜層および下地層は断面を線分析し、構成元素の組成を定性分析した。

・断面観察

微量の漆片をエポキシ樹脂に包埋後、ミクロトームで10μmの厚さに切断、永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡による観察を行った。

・X線透過試験

フィリップ社製X線透過試験装置(MG225型)を用い、内部の状態が把握できるように、X線の照射出力を調整しながら、透過撮影（フィルム－Fuji X-rayfilm IX100，増感紙－LF0 03）を行った。

(2)　結果

・成分分析

図２・３にＦＴ－ＩＲ分析の結果を示す。錠剤法および顕微赤外法の中層部は標準とする漆のピーク（図１）と同様に典型的な漆のピークが観察された（図３）。一方、顕微赤外法で測定した表面（最上層）は、漆特有のピークは見られるがかなりブロードになり全体的に劣化が進行した状況であることがわかった（図２）。下地層と見られる部分はＦＴ－ＩＲ分析の結果では土壌成分と漆（図４）との混合物であることが確認でき、EPMAによる元素分析（図５）ではSi(ケイ素)、Al（アルミニウム)、Fe（鉄）のピークが得られサビ下地と思われる結果が得られた。

・目視および断面観察

断面観察では下地の上に少なくとも３層漆が塗られていることがわかった。さらに、中層の色目などより松煙などの炭化物を混合している可能性も考えられる(写真１・２)。

次に、目視による観察では、色目やつやから、乾きの早い生漆を塗っているため、刷毛跡が残っ

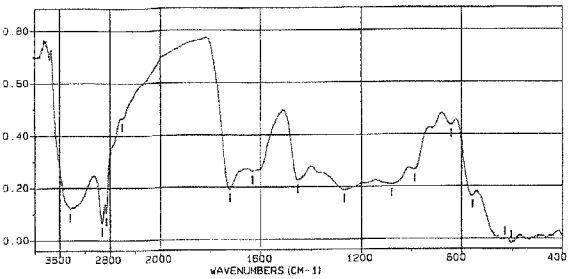


図１　標準とする漆のＦＴ－ＩＲ分析チャート

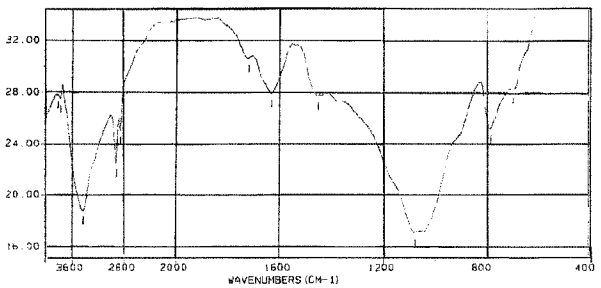


図４　漆膜下地層のＦＴ－ＩＲ分析チャート

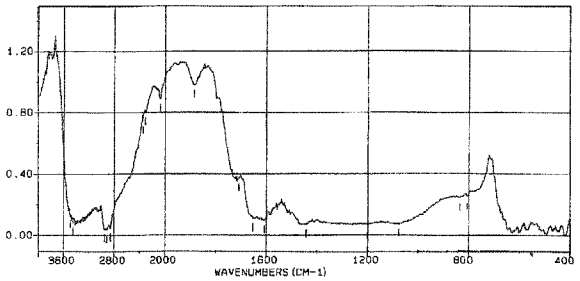


図２　漆膜最上層のＦＴ－ＩＲ分析チャート

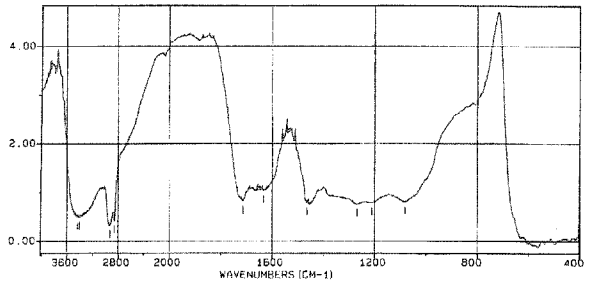


図３　漆膜中層のＦＴ－ＩＲ分析チャート

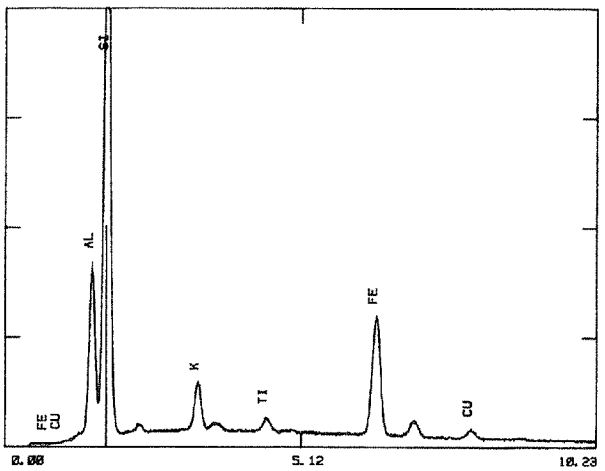


図５　漆膜下地層のＥＰＭＡ分析チャート

顕微鏡写真

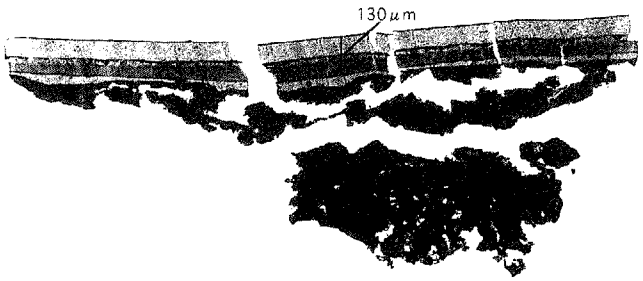


写真１　漆膜の断面１

写真２　漆膜の断面２

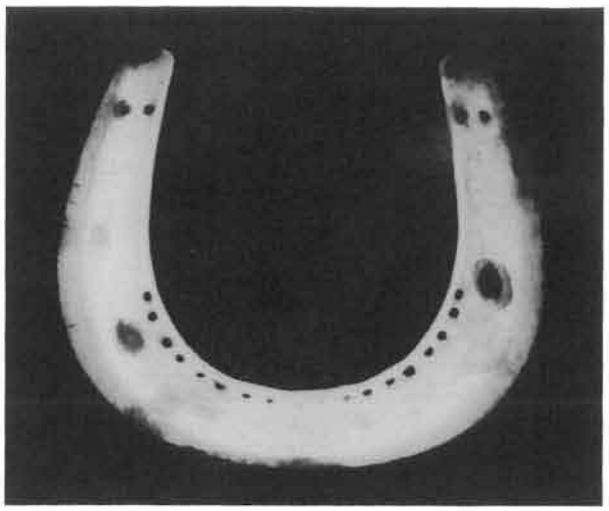


写真 3　X線写真

写真 4　喉輪細部 1

写真 5　喉輪細部 2

写真 6　喉輪細部 3

写真 7　喉輪細部 4

写真 8　保存処理前

写真 9　保存処理後

ていると思われる（写真４・５）。また、刷毛目が通っていることから、穴の部分をなにかでふさいで漆を塗ったのではなく、そのまま塗ったと思われ、穴の中に漆がたれているのが観察される（写真４・５）。表面は裏面や端部に比べると膜が厚く、そのため、膜が剥離し反り返ったものと考えられる（写真６）。端部の細かい膨らみは、熱などによる膨潤の可能性も考えられる（写真７）。

・X線透過試験

全体に鉄地の残存状態は良好であるが、一部塗膜の反りあがった部分や端部に錆化が進んでいるのが観察された。

3　保存処理

前記した分析および調査結果より、漆を第一に考えた処理方法を検討した。漆の膜がかなり厚いこと、全面に漆が塗られ、ところどころその漆がはがれ、反っていることより通常の鉄製品の保存処理（脱塩、樹脂含浸）が行えない。そこで、以下に記す方法で処理を行うこととした。

①処理前記録

②メスなどで錆取りを行う。

③防錆処置として撥水性を付与する有機チタネートを塗布する。

④金属露出部にフッ素アクリル共重合樹脂（商品名　Vフロン　大日本塗料㈱製）を塗布する。

⑤反りあがっている漆膜を復元、接着する。

⑥亀裂部分を樹脂(商品名　SV426　チバ・スペシャルティ・ケミカルズ㈱製)で補塡し、削り、アクリル絵具で古色仕上げを行う。

⑦ 処理後記録

しかし、反りが大きい漆膜を復元する処置では、①物理的に力を加えただけでは漆膜が堅く反りが戻らない、②水やアルコールなどを湿布する方法では若干弾力性が表れ、少しは反りが戻るが完全ではない。そこで、上記の処理工程中で⑤の工程を変更し、今後よい方法が開発された時に復元できるよう、また漆膜を破損しないように、シリコーン樹脂でスペーサーを作り鉄地と反りあがった漆膜の間に挟んで保護した。

4　保管管理

今回処理した喉輪は、漆を主にした処理であるため、金属部には完全な防錆処置が施されていない。そのため、湿度を管理することによって、錆の発生を押さえることとした。処理後の管理は、空調の整った部屋で保管することが望ましいが、今回は、湿度をコントロールするため調湿剤を用いた密閉容器中で、保管した。

5　さいごに

分析・調査によって得られた知見をもとに、適切な保存処理法を検討し処理を行った。しかし漆と金属の複合物である喉輪は、漆膜が厚い、金属部が漆でおおわれている、金属部の残存状態が良好なこと等により、それぞれの素材に適した処理が行えなかった。今後このような複合遺物に対する処理法の研究・開発を行うことが必要であると考える。

この処理にあたり、漆芸家北村昭斎氏にご教示いただきました。

第3節　漆器資料の分析と検討

(財)元興寺文化財研究所保存科学センター　北野信彦

1　はじめに

根来寺坊院跡からは、中世末～近世初頭頃の根来寺坊院関連および江戸時代の周辺地域関連の遺構・遺物が多数検出されており、この内には漆器資料も多く含まれている。今回、(財)和歌山県文化財センターの御厚意によりこれら出土漆器資料の製作技法について自然科学的手法を用いた調査を行う機会を得たので、その結果を報告する。

2　調査方法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり挽き物・板物の形態にする木胎製作の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、加飾、研磨作業を行なう漆工の工程から成り立っている。このような漆器資料の製作技法を調査することは、個々の資料の性格を正確に理解する上で有効な方法であり、これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考える上でも意味があるものと考えている。

本報告では、漆器資料の製作技法に関する調査として、まず形態、漆塗り表面の状況を表面観察した後、(1)用材選択、(2)木取り方法、(3)漆膜面の漆塗り構造、(4)色漆の使用顔料、等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行った。以下、項目別に調査方法を記す。

(1)　用材選択（樹種鑑定）

樹種の同定作業は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、遺物本体をできるだけ損傷しないように破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は常法に従い脱水し、検鏡プレパラートに仕上げた。

(2)　木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の調査は、樹種鑑定の切片作成時に同時に行なった。

(3)　漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に漆器資料の1mm×3mm程度の漆剥落片を採取し合成樹脂(エポキシ系樹脂／アラルダイトGY1251JP. ハードナーHY837) に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態等について顕微鏡観察を行なった。

(4)　色漆の使用顔料の定性分析

色漆に用いられた顔料の無機物に関する定性分析には、先の漆膜剥落片をカーボン台に取り付け、日立製作所S－415 型の走査電子顕微鏡に堀場製作所 EMAX－2000エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー）を連動させてそれを用いた。分析設定時間は500秒。点分析は30倍のスポット径で照射した。

3　調査結果

今回調査を行った根来寺坊院跡出土漆器資料は合計77点である。これらの漆器資料について、前項で項目別に記した方法を用いた調査を行った。その調査結果を表１に示す。

まず、本漆器資料の椀・皿等の挽物類の材の利用（用材選択性）は、いずれも広葉樹であるコナラ、シイノキ、ブナ、クリ、ケヤキ等にれ科、トチノキ、ホオノキ・コブシ等もくれん科、カツラ、サクラ亜属等ばら科、かえで科、トネリコ等もくせい科、クスノキ材、の合計12種類が確認された。

近世以降のろくろ挽き物である漆器椀類の用材には、早晩材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが靱性がある材が適材であるとされる(註１)。これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて分類すると表２に示すようになる。この点を考慮に入れて本漆器資料の用材選択の傾向をみてみると、最良材であるケヤキ、クスノキ材などと、かたや加工や入手の容易さという大量生産の点からみて極めて一般性が高いと考えられる適材のコナラ、シイノキ、ブナ・トチノキ材などの２種類のグループに分かれた。そして、挽き物類である本漆器資料の木取り方法をみてみると、本漆器資料は、いずれも横木地であり、(A)板目取り、(B)柾目取りの２種類に分類された（図１)。

次に、個々の漆器表面の漆塗り技法をみてみる。塗りは、地と文様からなり、無文様で地塗りのみの資料と、家紋や漆絵等の加飾が地外面あるいは地内面に施された資料に分かれた。漆塗り面の構造、特に、各漆器資料の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、無機物を含んでいないためピークがほとんど見出だされない資料と、Al(アルミニウム)、Si(シリカ)、K（カリウム)、Ca(カルシウム)、Fe (鉄) など粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料に分けられた。さらにこれらを顕微鏡観察することにより、前者を、炭粉を柿渋や膠などに混ぜて用いる炭粉下地(代用下地)、後者を、細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると理解した（註２)。そして地の漆塗り層は、それぞれ１層塗りから５層塗りまで見出だされ、文様等の加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた(写真１～10)。すなわち本漆器資料の漆塗り構造をみてみると、きわめて簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料から、堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ優品資料まで、いくつかのランク別資料に分類された（図２)。

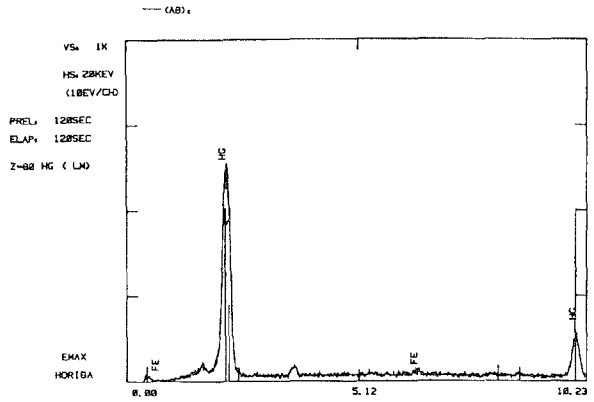


図３　赤色系漆（ベンガラ漆）のＸ線分析結果

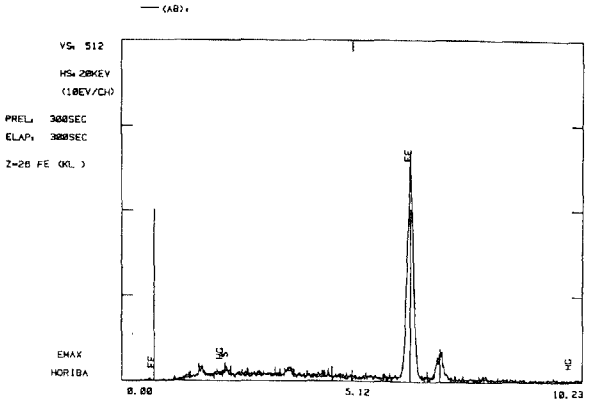


図４　赤色系漆（朱漆）のＸ線分析結果

次に色漆の性質についてみてみる。赤色系漆の使用顔料の定性分析結果では、Fe（鉄）が強く認められる資料（図３）、Hg（水銀）および S（硫黄）が強く認められる資料（図４）、この両者が強く認められる資料の三種類に分類された。これらをさらに顕微鏡観察することにより、それぞれベンガラ（酸化第二鉄Fe_2O_3）・朱（水銀朱 HgS）、さらにはこの両者である朱＋ベンガラという、２種類の異なる赤色顔料を用いた赤色系漆であると理解した（註３）。

以上、項目別に根来寺坊院跡出土漆器資料の材質および製作技法をみてみた。その結果、本漆器資料は、木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類から、吟味された素材からなる堅牢で複雑な漆工技法を有する優品資料に至るまで、幾つかのランク別のグループに分類された。そしてこれらは近世初頭段階の他地域の遺跡出土漆器資料のそれと比較してみても、若干の違いはあるものの基本的には極めて実用に即した生活什器である飲食器類を中心としていることが理解された。

さて、本漆器資料の中にはいわゆる「根来手」もしくは「根来塗」と呼称されるような地塗りのみの赤色系漆器が16例含まれている。漆工史の分野では広く知られる「根来塗」であるが、実際の中世～近世初頭頃の根来寺との関連性を示す史・資料が極めて少ないためか、実体には不詳な点が多いとされる(註４)。この点に関連して本漆器資料を検討すると、いずれも機能性を重視した漆器であるものの、用材選択性・下地・地の漆塗技法・赤色顔料ともに多岐におよんでいることが確認された。

（註）

(1)橋本鉄男(1979)『ろくろ　ものと人間の文化史31』　法政大学出版局

須藤　護(1982)『日本人の生活と文化⑤暮らしの中の木器』日本観光文化研究所編　ぎょうせい

(2)一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地（堅下地・本下地より堅牢性に欠ける）の可能性もある。しかし、出土資料のにかわと生漆の明確な科学的な識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とおいた。

(3)北野信彦(1994)「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・II－文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について－」『古文化財之科学39号』古文化財科学研究会

北野信彦(1997)「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・III－文献史料からみた赤色系漆に使用する朱の製法について－」『文化財保存修復学会誌　第41号』文化財保存修復学会

(4)一般に漆工史の分野では『根来塗』を機能性を重視した堅牢な素地からなる地塗りのみの朱漆器であり、①ケヤキ、ヒノキ材を中心とした木胎に、②本地や本堅地等のサビ下地を施す。③さらに堅牢性を追及するために縁部分等に布着せ補強を行う。④地の漆塗りは、下塗りの黒漆を数回塗り重ね、その上に朱（赤色硫化水銀：HgS）を用いた漆を塗り立て（花塗もしくは塗り放し）する。と規定している。

河田貞　編(1976)『根来塗　日本の美術５　No.120』至文堂

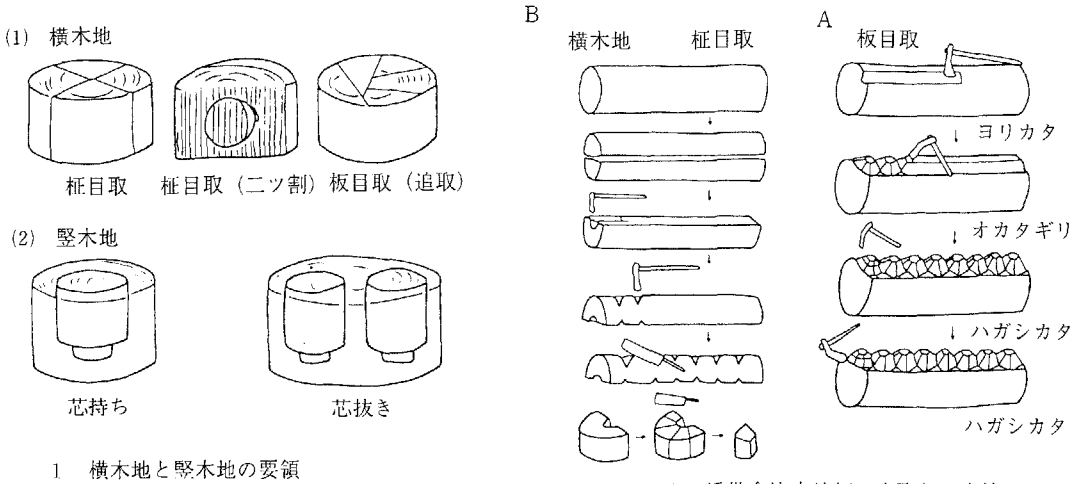
堺市立博物館　編(1986)『朱漆　「根来」その用と美』春季特別展図録

和高伸二・菅原正明（根来寺展実行委員会）編（1988)『根来寺展』根来大伝法院700年記念　根来寺展図録

A 環孔材	a．ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヰマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靭性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散孔材	b．サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c．ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d．エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白く軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

橋本鉄男『ろくろ、ものと人間の文化史31』1979などを参考にして作成

表2　ろくろ挽き物の用材分類



1　横木地と竪木地の要領
（末沢春一郎「近世以降木地師のロクロ製品技術の研究」原図）

2　近世会津木地師の木取りの方法
須藤（1982）より原図引用

図1　近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法

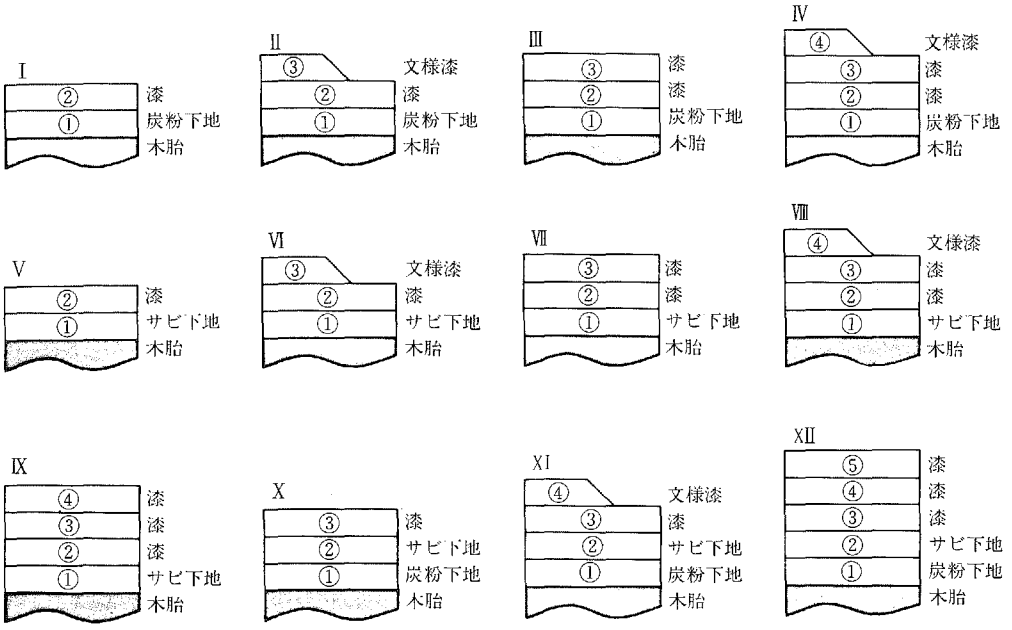
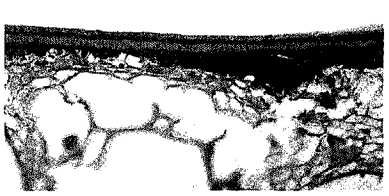


図2　漆塗り構造の分類

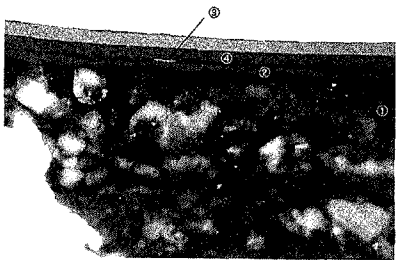
No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法 内	表面塗り技法 外	表面塗り技法 文様	使用顔料 内	使用顔料 外	使用顔料 文様	漆塗構造 内	漆塗構造 外	備考
〔R 3〕												
1	*	ケヤキ	A	赤	赤		朱	朱		多	多	5層塗直し
2		サクラ亜	A	赤	黒		朱			I	I	
3	*	ケヤキ	B	赤	赤		朱	朱		V	V	
4		コナラ	A	赤	黒	外-絵-赤	朱		朱	I	II	
5		コナラ	A	赤	黒		朱			III	III	
6	*	ケヤキ	B	赤	赤		朱	朱		VII	VII	黒－赤
7-1		トネリコ	B	赤	黒		朱			I	I	
7-2		コナラ	B	赤	黒	外-絵-赤	朱		朱	I	II	
8		カツラ	B	黒	黒	内-絵-赤			朱	I	II	
9		スダジイ	B	赤	黒	外-絵-赤	朱		朱	III	II	
10	*	ケヤキ	B	赤	赤		朱	朱		多	多	5層塗直し
11		ブナ	A	赤	黒		ベンガラ			I	I	
12	*	バラ科	A	赤	赤		朱	朱		III	III	黒－赤
13		トネリコ	B	赤	黒		朱			I	I	
14	*	バラ科	A	赤	赤		朱	朱		V	VII	うるみ黒－赤
15	*	バラ科	A	赤	赤		朱	朱		III	III	黒－赤
16		コナラ	A	赤	黒		ベンガラ			I	I	
17		ブナ	A	黒	黒					I	I	
〔R 4〕												
1		スダジイ	A	赤	黒	外-紋-赤	朱		朱	I	II	
2		ケヤキ	A	赤	赤	外-絵-黒	朱	朱		V	VI	
3		コナラ	B	黒	黒	内外-絵-赤			朱	II	II	
4		コナラ	B	赤	黒		朱			I	I	
5		トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
6		コナラ	A	赤	黒		朱			III	I	
7		クリ	A	黒？	黒？					－	－	
8		コナラ	A	赤	黒	外-絵-赤	朱＋ベンガラ		朱	I	II	
9	*	クスノキ科	A	赤	黒	高台-赤文字	朱		朱	IX	IX	
10	*	サクラ亜	B	赤	赤		朱	朱		VII	VII	内面焼き
11		コナラ	B	赤	黒	高台-赤文字	朱		朱	I	II	
12		カエデ	A	黒	黒					I	I	
13		トネリコ	A	赤	黒		朱			I	I	
14		コナラ	A	黒	黒							
15		スダジイ	A	赤	黒	外-絵-赤	朱		朱	I	II	
16		トネリコ	B	赤	黒	高台-赤文字	朱		朱	I	II	
17	*	トチノキ	A	赤	赤		朱	朱		VII	VII	うるみ黒－赤、布着せ
18-1		ブナ	B	赤	黒		朱			III	I	
18-2		サクラ亜	A	黒	黒					－	－	
19		広散孔	B	赤	黒		朱			I	I	
20-1		コナラ	A	赤	黒		朱			III	III	
20-2		コナラ	B	赤	黒	外-絵-赤	朱＋ベンガラ		朱	I	II	
21	*	ケヤキ	B	赤	赤		朱	朱		V＋V	V＋V	塗直し
22		カエデ	B	赤	黒		朱			I	I	
23	*	ケヤキ	A	赤	赤		朱	朱		VII	VII	黒－赤
24		クリ	A	赤	黒	外-絵-赤	朱		朱	I	II	
25		トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	ベンガラ		ベンガラ	I	II	
26		コナラ	A	赤	黒		朱			III	III	
27		ケヤキ	B	黒	黒	外-絵-赤			朱	I	II	
28		コナラ	B	赤	黒		朱			I	I	
29		クリ	A	黒	黒					I	I	
30		コナラ	A	－	－					－	－	
31	*	ケヤキ	B	赤	赤		朱＋ベンガラ	朱＋ベンガラ		X	X	
32		コナラ	B	赤	黒	外-絵-赤	朱		朱	I	II	
33		トネリコ	B	赤	黒		朱			III	III	黒－赤
34		ブナ	B	黒	黒					I	I	
35		カツラ	B	赤	黒	外-絵-赤	ベンガラ＋朱		朱	I	II	
36		コナラ	A	赤	黒	高台－赤文字			朱＋ベンガラ	I	II	
37		コナラ	A	黒	黒	高台－赤文字			朱＋ベンガラ	I	II	
38		バラ科	B	黒	黒	外-絵-赤			朱	I	II	
39-1		コナラ	B	赤	黒		朱			I	III	
39-2		スダジイ	A	赤	黒		朱			III	I	
40		コナラ	B	赤	黒		朱			I	I	
41		コナラ	A	赤	黒		朱			I	I	
42		トチノキ	A	赤	黒	外-紋-赤	ベンガラ		朱	I	II	
43		コナラ	A	赤	黒		朱			I	I	
44		広散孔	A	赤	黒		朱			I	I	
45		トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			I	I	
46		コナラ	B	－	－					－	－	
47		コナラ	B	－	黒					I	I	
48-1		ケヤキ	B	赤	黒		朱			VII	V	
48-2		ケヤキ	B	赤	黒		朱			V	V	
49		クリ	A	赤	黒		朱			III	III	
50	*	不明	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		I	I	
51		コナラ	A	黒	黒	内外-絵-赤			朱	II	II	
52	*	膜面		赤	黒		朱			VII	VII	粗粒朱、布着せ
A		シイノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	朱		朱	III	II	
B		シイノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	朱		朱	III	II	
C	*	トチノキ	A	赤	赤		朱	朱		I	I	

表1　漆器資料一覧

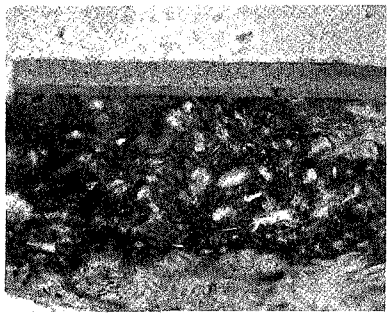
（凡例）根来手－＊



（×100）

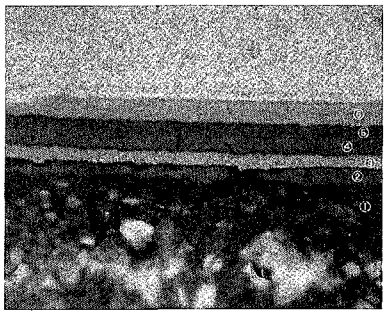


（×50）

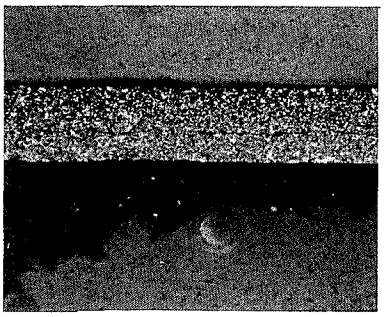


（×100）

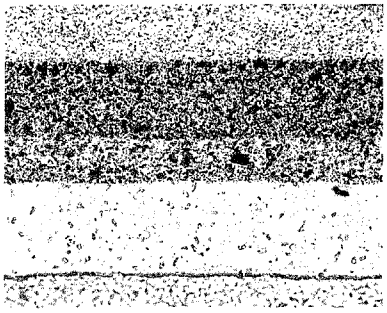
（×100）



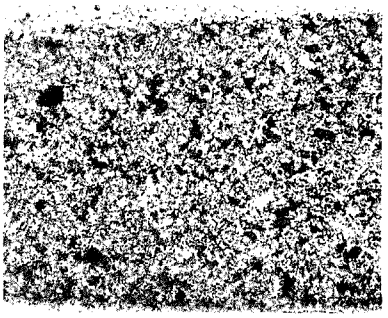
（×100）



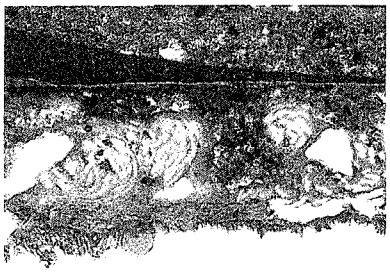
（×100）



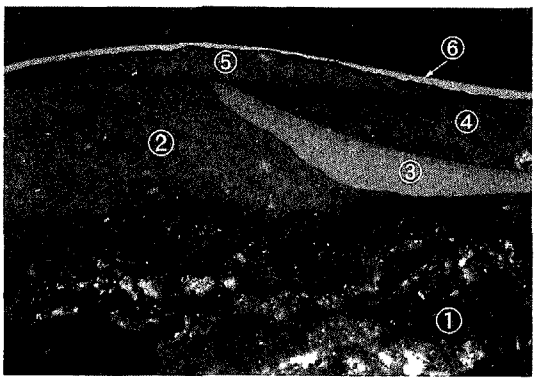
（×200）



（×300）



（×50）



（×50）

写真１　漆塗り構造の顕微鏡写真

第4節　根来寺坊院跡から出土した人骨と動物遺体

大阪市立大学医学部　安部みき子

根来寺坊院跡から出土した人骨および動物遺体は14世紀から17世紀にかけてのものである。これらの骨の保存状態が悪かったので、アルコールで脱水した後、Paraloid B－72で強化処置をした。出土骨片の総数は78片であり、このうち人骨が1片のみ出土している。遺構間での出土量の差は、第II区堀SH27が50片と最も多く、次いで第II区堀SH29の21片である。これらの遺構は16世紀から17世紀のもので、ウマの出土量が最も多い。

1　出土人骨

人骨が出土した遺構は第II区堀SH27であり、この層から出土している動物遺体に混入していた。出土部位は右の脛骨が1片のみであり、この骨の両骨端は破損していた。また、残存していた骨幹の保存も悪く、骨計測は出来なかった。しかし、ヒラメ筋線の発達はよかった。この人骨の性や年齢の推定は、骨片数が少ないため判定することが出来なかった。

この骨には刀傷などの痕跡は見られなかった。

2　出土動物遺体

本遺跡より出土した動物遺体は、イヌの下顎骨とイノシシの橈骨以外はすべてウシとウマであった。同定できた出土骨の種と部位を表1に、また、骨の部位の出現頻度と最小個体数を表2に示した。第II区谷状地形から出土した臼歯の破片と坐骨の一部はウマまたはウシの特徴を表している部位が破損しているため、同定できなかった。

ウマとウシの臼歯の計測値を表3、ウシの下顎骨の計測値を表4、イヌの下顎骨と臼歯の計測値を表5、長骨の計測値を表6、その他の出土骨の計測値を表7に示した。

本遺跡から出土した動物遺体の種名を下記に示す。

哺乳綱　CLASS MAMMALIA

食肉目　Order Carnivora

イヌ科　Family　Canidae

イヌ　Canis　familaris

偶蹄目

イノシシ科　Family　Suidae

イノシシ　Sus　scrofa

ウシ科　Family　Bovidae

ウシ　Bos　taurus

奇蹄目

ウマ科　Family　Equidae

ウマ　Equus　caballus

ａ　ウマ

本遺跡から出土したウマの最小個体数は６個体であった。このうち、第Ⅱ区堀ＳＨ27の最小個体数は３個体であり、出土骨片も27片と最も多かった。出土部位は主に四肢骨で、特に、中足骨と中手骨の出現頻度が高かった。第Ⅱ区堀ＳＨ29の最小個体数は２個体であり、後肢の出土量が多かった。第Ⅳ区土坑SK237では、上顎骨の保存が悪く、臼歯のみが釘植されていた状態で出土し、特に、右側の臼歯の残存が多かった。

資料番号８と９は前肢が肩帯で関節しているような状態で出土しており、同一個体の可能性が高い。

ウマの中手骨と中足骨の計測値（表６）より、林田ら（1957）の式を用い体高を推定した。林田ら（1957）が示した３通りの体高の推定方法で求めた推定値の平均値は、資料番号７が129.15cm、資料番号９－１が114.76cm、資料番号９－３が122.41cm、資料番号20が120.43cmであり、本遺跡出土のウマは114cmから130cmの範囲であった。これらの骨は、骨端線が見られないことより成体と思われる。林田(1957)が報告した鎌倉材木座の中世日本馬の体高は130cm前後のものが多く、最も小型のものは109cmである。材木座のウマは軍馬が主体であり、いわゆる中型馬が多く出土したとしている。本遺跡のウマは材木座のものより小さく小型ウマに属するが、九州在来のトカラウマは最大でも体高が約120cmであり、これよりも大きい。

ｂ　ウシ

本遺跡から出土したウシの最小個体数は３個体であり、第Ⅱ区堀ＳＨ27が２個体と最も多かった。ウシの出現頻度は同一個体と思われる下顎骨が一対出土し、このほかの部位は肩甲骨と中手骨以外すべて後肢であり、出現頻度は脛骨が最も多かった。

ｃ　その他の哺乳類

イヌは第Ⅱ区溝SD６（16世紀）から左下顎骨の一部とその下顎骨に釘植された第３・４前臼歯、第１・２後臼歯が出土している。このイヌの第１後臼歯の計測値（表５）を茂原ら（1987）が報告した鎌倉材木座出土のイヌと縄文時代の田柄貝塚のものとを比較すると、材木座と田柄貝塚の雄のイヌの平均値とよく似た値を示し、このイヌは雄であったと思われる。

イノシシは第Ⅱ区堀ＳＨ29（17世紀前半主体）から右の橈骨のみが出土している。この橈骨は近位端と骨幹は癒合し骨端線も消失していたが、遠位端が癒合していないため出土していない。この段階のイノシシは第２後臼歯が萌出しているが第３後臼歯は未萌出で、推定年齢は20ヶ月前後である。

３　まとめ

本遺跡から人骨が出土しているが、脛骨１片のみであり、保存状態も悪かったので、計測は出来なかった。この人骨が、ウマやウシの骨に混入した理由は不明である。

本遺跡の出土動物遺体は、そのほとんどがウマとウシでしめられ、出土部位は、ウマは頭骨と椎骨を除いて前肢、後肢ともに出土しているが、ウシは下顎骨、肩甲骨と後肢のみであった。出土状況はウマとウシの骨が個々に混在し、資料番号８と９のみが関節していたと考えられる。

最も出土量の多かったウマでは、体高の推定値からは日本の在来の中小型馬で、中世に軍馬として使われたものよりは小さい。

ウマとウシ以外には、イヌとイノシシのみが出土した。これらの骨には解体痕などは見られなかった。

＜参考文献＞

茂原 信生、小野寺 覚　1987「鎌倉材木座遺跡出土の中世犬骨」『人類誌』95：361－379

林田 重幸、山内 忠平　1957「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6：146—156

林田 重幸　1957「中世日本の馬について」『日本畜産学会法』28：301－306

表 2　根来寺坊院跡出土の動物遺体の出現頻度

		II区　堀SH27				II区　堀SH29					II区溝SD6	III区上坑SK237	
		ウマ		ウシ		ウマ		ウシ		イノシシ	イヌ	ウマ	
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
上顎第２前臼歯												1＊	1
第３前臼歯												1	
第４前臼歯						1						1	
第１後臼歯												1	
第２後臼歯												1	
第３後臼歯						1						1	
下顎骨				1	1						1＊		
下顎第２前臼歯													
第３前臼歯				1							1		
第４前臼歯				1							1		
第１後臼歯				1	1						1		
第２後臼歯				1	1						1		
第３後臼歯				1	1								
肩甲骨			1					1					
上腕骨	骨体	2	1										
	遠位	1											
橈骨	近位		1							1＊			
	骨体		2							1			
	遠位	1											
尺骨	近位		1										
	骨体		2										
第３手根骨			1										
中手骨	近位	2	2										
	骨体	2	2					1					
	遠位	2	2										
寛骨						1							
脛骨	近位	1					2＊	1	1				
	骨体	2		2＊				1	1				
	遠位			1									
中心＋第４足根骨				1									
舟状骨		1	1										
中足骨	近位	1	2	1		1		1	1				
	骨体	2	3＊	1		1		1	1				
	遠位		1			1		1	1				
距骨		2											
踵骨		1							1				
基節骨		2											
中節骨		1											

＊は遺構内の最小個体数

表１　根来寺坊院跡出土の遺体の一覧表

資料番号	種	左右	部　位	出土の状況	備考(出土地点・層位)
第Ⅱ区　堀ＳＨ27　16～17世紀（17世紀前半主体）					
1	不明		不明		W段２Ｊ66　中層砂礫・下層粘土粗砂互層
2	不明		長骨		W段２Ｊ66　下層粗砂礫互層
3-1	ウシ(？)	右	脛骨	近位・遠位破損	W段２K66　中層下位～下層
3-2	ウマ	右	中足骨		〃　〃
3-3	ウマ	左	中足骨	遠位破損	〃　〃
3-4	ウマ	右？	距骨		〃　〃
3-5	ウマ	右	脛骨	遠位破損	〃　〃
3-6	ウマ	右	足の舟状骨		〃　〃
3-7	ウマ	左	足の舟状骨		〃　〃
3-8	不明		不明		〃　〃
4-1	ウマ	?	基節骨		〃　〃
4-2	ウマ	?	中節骨		〃　〃
4-3	不明		不明		〃　〃
5-1	ウシ	右	脛骨	近位・遠位破損	〃　〃
5-2	ウシ	右	中足骨	遠位破損	〃　〃
5-2	ウシ	右	中心＋第４足根骨		〃　〃
6	大型の哺乳類		長骨		W段２K67　中層下位～下層
7	ウマ	左	中手骨		W段　Dの下
8	ウマ	左	肩甲骨		W段２K66　中層下位～下層
9-1	ウマ	左	中手骨		〃　〃
9-2	ウマ	左	尺骨と橈骨	近位・遠位破損	〃　〃
9-3	ウマ	右	中手骨		〃　〃
9-4	ウマ	左	第３手根骨		〃　〃
9-4	ウマ	左	上腕骨	近位・遠位破損	〃　〃
10	大型哺乳動物		骨片多数		〃　〃
11	ウシ	右	脛骨	近位破損	〃　〃
12-1	ウマ	右	中足骨	近位・遠位破損	〃　〃
12-2	ウマ	?	基節骨	骨端線わずかに残存	〃　〃
12-2	不明		長骨の骨片多数		〃　〃
13	ウマorウシ	左	脛骨	近位・遠位破損	W段２L66　中層下位～下層
14-1	ウシ	左	下顎骨	Ｍ１～Ｍ３まで釘植	W段２L67　下層面
14-2	ウシ	右	下顎骨	Ｐｍ３～Ｍ３まで釘植	〃　〃
14-3	ウマ	左	中足骨	近位・遠位破損	〃　〃
14-4	ウマ	右	脛骨	近位・遠位破損	〃　〃
14-4	ウマ	?	距骨		〃　〃
15	ウマ	右	上腕骨	近位破損	W段２K66　下層
16	ウマ	右	中手骨		〃　〃
17	ウマ	右	上腕骨	近位・遠位破損	〃　〃
18	不明		不明		W段２K67　中層上位　礫混青灰色粘土
19	ウマ	左	尺骨と橈骨	遠位破損	W段２L67　下層上位　南北ベルト図面
20	ウマ	左	中足骨		〃　〃
21	不明		不明		W段２Ｊ68　ベルト・下層
22	不明		不明		W段２Ｊ68　西半　下層粘土粗砂礫互層
23	不明		不明		W段２Ｊ68　下層粘土粗砂礫互層
24	ウマ	右	橈骨	遠位のみ出土	W段２K68　中層砂礫＋下層
25	ウマ	右	踵骨		W段２K68　中層下位　暗灰色粘土・中層砂礫含む
26	不明		長骨の骨幹		W段２K68　最下層上位
27	不明		長骨の骨幹		W段２L68　中層上位
28	ヒト	右	脛骨	近位・遠位破損	W段２L68　下層下位
29	不明		長骨の骨幹		〃　〃
第Ⅱ区　堀ＳＨ29　16～17世紀（17世紀後半主体）					
資料番号	種	左右	部　位	出土の状況	備考(出土地点・層位)
30	ウマ？	左	脛骨	近位・遠位破損	Ｖ段２Ｆ66　下層
31-1	ウシ	右	脛骨		〃　〃　一部最下層で取上げ
31-2	ウシ	右	中足骨		〃　〃　〃
32	ウマ	左	脛骨	近位・遠位破損	Ｖ段２Ｆ66　最下層
33	ウシ	?	中手骨	近位・遠位破損	Ｖ段２Ｇ66　下層上位
34	不明		長骨の骨幹		〃　下層
35	ウシ	左	中足骨	遠位端わずかに破損	〃　〃
36	ウシ	左	踵骨		〃　最下層
37	ウシ	左	脛骨	近位破損	Ｖ段２Ｆ67　下層
38	ウシorウマ		肋骨片		〃　〃
39	ウシ	右	肩甲骨		〃　〃　東壁拡張
39	ウシorウマ		肋骨片		〃　〃　〃
40	ウマ	右	上顎Ｍ３		Ｖ段２Ｇ67　中層砂礫
41	ウマ	右	上顎Ｐｍ４？		Ｖ段２Ｆ68　下層
42	不明		不明		Ｖ段２Ｇ68　下層
43	ウシorウマ		肋骨片		Ｖ段２Ｆ64　下層
44	不明		長骨？		Ｖ段２Ｈ64　中層
45	ウシorウマ		長骨の骨幹		Ｖ段２Ｆ65　中層下位　－120cm
45	ウシorウマ		肋骨片		〃　〃　〃
46	ウマ	右	中足骨		Ｖ段２Ｆ65　下層黄灰色微砂　－200cm
47	イノシシ	右	橈骨	遠位端遊離	Ｖ段２Ｇ65　中層下位　－120cm
48	ウマ	右	寛骨	腸骨なし	Ｖ段２Ｇ65　下層黄灰色微砂　－200cm
第Ⅱ区　谷状地形　16世紀					
資料番号	種	左右	部　位	出土の状況	備考(出土地点・層位)
49	ウシorウマ	右	坐骨		Ｒ段２Ｆ59　第24層
第Ⅱ区　溝ＳＤ６　16世紀					
資料番号	種	左右	部　位	出土の状況	備考(出土地点・層位)
50	イヌ	左	下顎骨と下顎Pm3~M2	歯は釘植	Ｔ・Ｓ段２Ｉ59側　最下層ベルトより東
第Ⅲ区　土坑ＳＫ237　14世紀					
資料番号	種	左右	部　位	出土の状況	備考(出土地点・層位)
51	ウマ？		臼歯破片		Ｌ段W42　包含層　第4層
52	ウマ	左	上顎Ｐｍ２		一括
52	ウマ		臼歯		〃
53	ウマ	右	上顎Ｐｍ２～Ｍ３		〃

表 3　ウマとウシの臼歯の計測値

種	資料番号	部位	左右	頬舌径	近遠心径	歯冠高(頬側)	歯冠高(舌側)
ウマ	40	上顎M3	右	21.97	29.08	18.38	20.33
ウマ	41	上顎Pm4	右	26.87	25.41	14.91	13.79
ウマ	52	上顎M2	右	22.51	23.65	64.65	55.68
ウマ	52	上顎M3	右	20.11	23.85	52.13	43.69
ウマ	53	上顎Pm3	左	23.95	22.51	—	45.81
ウマ	53	上顎M1	左	24.43	26.54	—	—
ウマ	53	上顎M2	左	22.87	23.18	59.58	51.46
ウマ	53	上顎M3	左	20.21	24.18	—	—
ウシ	14—1	下顎M1	左	13.77	22.51	18.14	14.14
ウシ	14—1	下顎M2	左	14.53	23.99	23.08	18.63
ウシ	14—1	下顎M3	左	14.56	35.07	16.15	15.81
ウシ	14—2	下顎Pm3	右	10.90	16.11	11.74	11.62
ウシ	14—2	下顎Pm4	右	11.72	19.34	14.53	13.82
ウシ	14—2	下顎M1	右	13.39	21.38	14.06	14.73
ウシ	14—2	下顎M2	右	14.20	25.41	18.69	19.02
ウシ	14—2	下顎M3	右	14.34	36.12	15.26	18.13

計測値の単位は㎜

表 4　ウシの下顎骨の計測値

資料番号	種	部位	左右	頬臼歯全長	前臼歯長	後臼歯長	Diastemc長	下顎体高(M3後)	下顎体高(M1の前)	下顎体高(Pm2の前)
14—1	ウシ	下顎骨	左	126.11	46.41	81.90	94.23	69.69	50.29	34.45
14—2	ウシ	下顎骨	右	128.25	46.70	82.90	—	—	50.46	—

計測値の単位は㎜

表 5　イヌの下顎骨と臼歯の計測値

資料番号	下顎第1後臼歯近遠心径	下顎体高（M1の前）	下顎体高（M1の後）
50	19.69	22.09	22.15

計測値の単位は㎜

表 6　大型哺乳動物の長骨の計測値

種	資料番号	部位	左右	最大長	近位関節		遠位関節		体高		
					横径	前後径	横径	前後径	推定値1	推定値2	推定値3
ウマ	3—2	中足骨	右	—	40.84	36.69	—	—			
ウマ	3—3	中足骨	左	—	40.65	35.93	—	—			
ウマ	4—1	基節骨	?	82.25	46.45	24.24	49.47	36.09			
ウマ	4—2	中節骨	?	43.90	49.77	23.69	52.79	29.57			
ウマ	7	中手骨	左	214.24	47.02	34.10	46.34	5.94	127.47	128.95	131.04
ウマ	9—1	中手骨	左	190.75	43.85	29.05	42.19	31.22	113.50	116.43	114.36
ウマ	9—3	中手骨	右	202.98	—	28.14	44.99	31.74	120.77	122.95	123.52
ウマ	12—2	基節骨	?	72.06	40.01	—	47.65	33.44			
ウマ	16	中手骨	右	—	44.10	30.42	31.36	43.29			
ウマ	20	中足骨	左	241.46	44.23	36.51	45.45	—	120.25	120.91	120.12
ウマ	46	中足骨	右	—	44.60	36.95	—	—			
ウシ	11	脛骨	右	—	—	—	55.30	41.71			
ウシ	31—1	脛骨	右	313.00	—	—	53.03	41.36			
ウシ	31—2	中足骨	右	206.31	45.04	40.07	49.29	27.90			
ウシ	35	中足骨	左	—	44.73	40.33	—	—			
ウシ	37	脛骨	左	—	—	—	58.81	44.26			
イノシシ	47	橈骨	右	(133.65)	—	—	—	—			

長骨の計測値の単位は㎜、体高の推定値は㎝

表 7　肩甲骨と寛骨の計測値

資料番号	種	部位	左右	肩甲頸幅	肩関節幅	関節窩幅
8	ウマ	肩甲骨	左	62.09	81.33	54.40
39	ウシ	肩甲骨	右	45.55	—	—

資料番号	種	部位	左右	寛骨臼長	腸骨体高	腸骨体幅
48	ウマ	寛骨	右	58.70	31.90	21.01

計測値の単位は㎜

第５節　土壌分析等からみた調査地の古環境

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

根来寺は、平安時代末に創建され、室町時代～戦国時代に僧兵の進出によって勢力を伸ばした寺院である。今回の調査成果の中で、重要なものの一つに、丘陵に沿って作られた堀がある。これは、文献資料にある「根来古城」に伴う堀に該当する可能性が高く、当時の「根来古城」の場所を推定する上で重要な発見であるといえる。

そこで、これらの堀が構築された時期の周辺環境や、堀の中の状況を調査する目的で、自然科学分析調査を実施することになった。調査にあたっては、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、大型植物遺体（種実・葉）同定、樹種同定、粒度分析の各手法を用いた。当社では、第２次、第３次、第４次の３回の調査に伴って、これらの分析を進め、逐次報告してきた。分析によって多くの資料が得られたが、本報告ではこれらをまとめ、特に重要と思われる成果を中心に報告する。

１　調査地点と分析試料

調査を行う遺構は、堀を中心とし、井戸や谷状遺構を対象にする。第II区のＳＥ14・ＳＨ27・ＳＨ29・谷状遺構、第III区のＳＨ47・ＳＥ283、第IV区のＳＨ１とＳＨ２の８つについて調査を行う。各遺構の詳細は、それぞれの項を参照されたい。分析を行った遺構の断面図と試料採取層位を図１・２に示す。なお、複数の断面から試料を採取した遺構もあるが、紙面の都合上、主要であると思われる断面のみを掲載する。これらの遺構から採取された試料をもとに、目的等を考慮して、珪藻分析53点、花粉分析54点、植物珪酸体分析８点、大型植物遺体同定35点、樹種同定３点、粒度分析25点を選択して実施した。

２　分析方法

各分析の方法は紙面の都合上掲載しないが、分析方法は当社で関わった報告書等で詳しく述べられている。特に汐留遺跡（パリノ・サーヴェイ株式会社，1996a）では、今回のものと分析手法が重なっていることから、分析方法はこれらを参照していただきたい。ここでは、結果や考察の際に関わってくる、特に必要と思われる事項のみ記す。また、分析成果は多岐にわたり、試料数も多いため、全てを掲載できなかった。このため、特に需要と思われる珪藻分析と花粉分析の成果の一部について、ダイアグラムの形で掲載した。

珪藻の生態性に関しては、塩分に対する適応性はLowe(1974)、pHと流水に対する適応性はHustedt(1937-1938)、陸生珪藻の区分は伊藤・堀内（1991）の分類に基づく（表１）。なお、解析にあたっては、Asai &Watanabe（1995）や安藤（1990）で示されている環境指標種を参考にする。

種実同定に関しては、発掘時に検出された大型のものを中心に行ったが、ＳＨ27、ＳＥ14、ＳＨ１等については土壌の水洗選別による微細な種実遺体の抽出、同定も行っている。

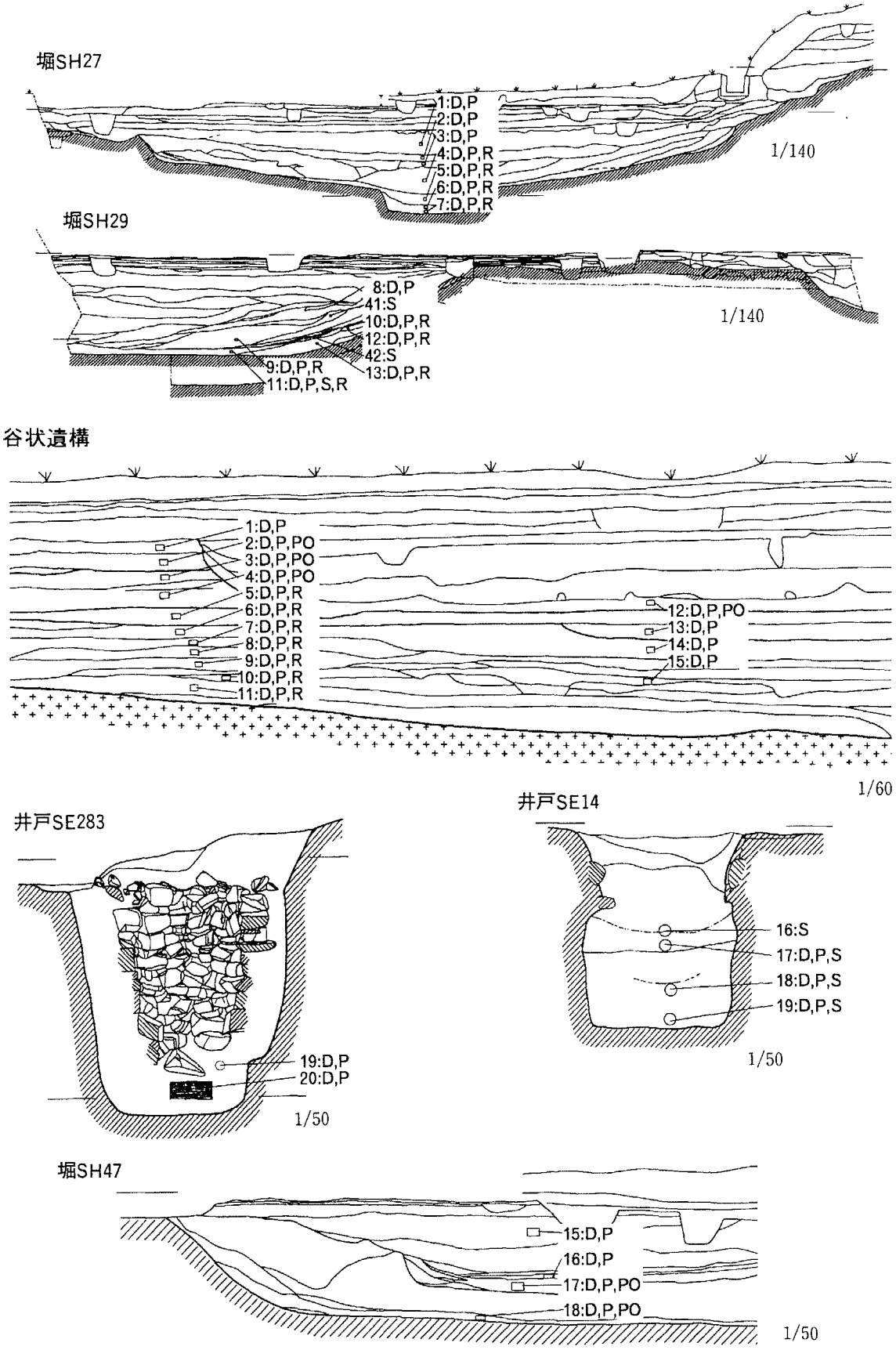


図１　各遺構の主要試料採取層位(1)

図中の記号は、D：珪藻分析、P：花粉分析、PO：植物珪酸体分析、R：粒度分析、S：大型植物遺体同定をそれぞれ行った試料をしめす。

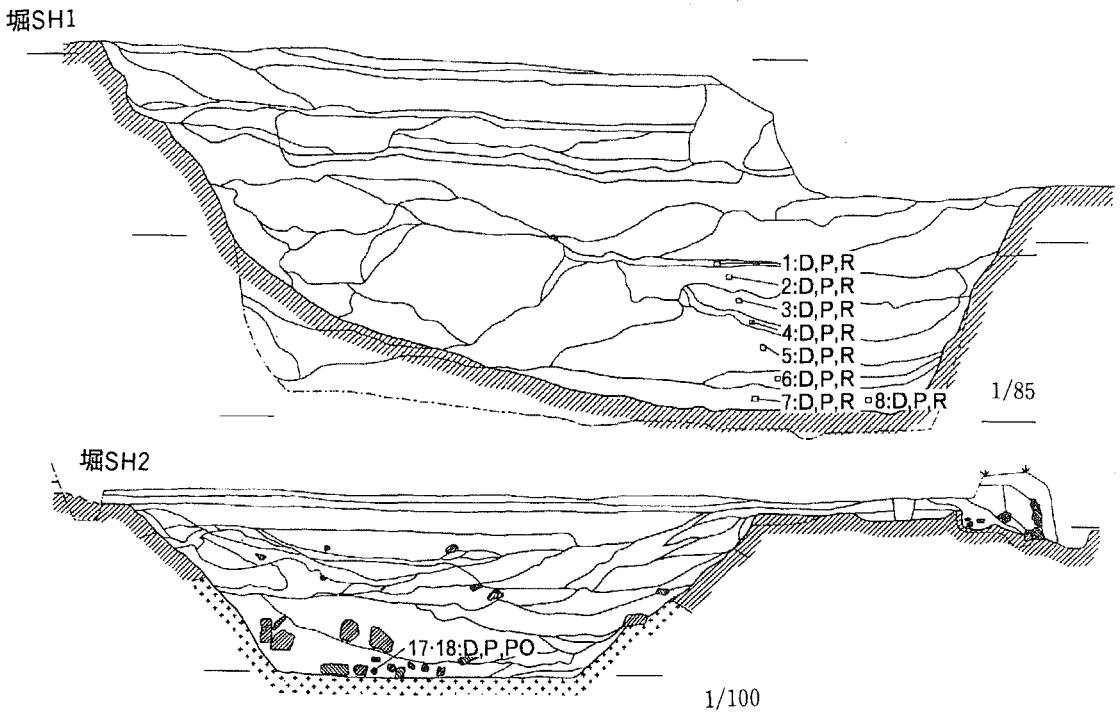


図２　各遺構の主要試料採取層位(2)

塩分濃度に対する区分		塩分濃度に対する適応性	生育環境（例）
海水生種	強塩生種（Polyhalobous）	塩分濃度40.0‰以上に出現	低緯度熱帯海域、塩水湖
	真塩生種（Euhalobous）	海産生種、塩分濃度 30.0～40.0‰に出現	一般海域（ex 大陸棚及びそれ以深の海域）
汽水生種	中塩生種（Mesohalobous）	塩分濃度 0.5‰～30.0‰に出現　強中塩生種（α-Mesohalobous）／弱中塩生種（β-Mesohalobous）	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟など
淡水生種	貧塩生種（Oligohalobous）	淡水生種：塩分濃度0.5‰以下に出現	一般陸水域（ex 池・沼・河川・沼沢地・泉）
塩分・ｐＨ・流水に対する区分		塩分・ｐＨ・流水に対する適応性	
塩分に対する適応性	貧塩－好塩性種（Halophilous）	小量の塩分がある方がよく生育する	高塩類域（塩水湖上域・温泉・耕作土壌）
	貧塩－不定性種（Indifferent）	小量の塩分があってもこれによく耐える	一般陸水域（湖沼・河川・沼沢地 etc）
	貧塩－嫌塩性種（Halophobous）	小量の塩分にも耐えることができない	湿原・湿地・沼沢地
	広域塩性種（Euryhalinous）	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現する	一般淡水～汽水域
ｐＨに対する適応性	真酸性種（Acidobiontic）	pH7.0以下に出現、pH5.5以下の酸性水域で最もよく生育する	湿原・湿地・火口湖（酸性水域）
	好酸性種（Acidophilous）	pH7.0付近に出現、pH7.0以下で最もよく生育する	湿原・湿地・沼沢地
	ｐＨ-不定性種（Indifferent）	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育する	一般陸水（ex 湖沼・池沼・河川）
	好アルカリ性種（Alkaliphilous）	pH7.0付近に出現、pH7.0以上で最もよく生育する	
	真アルカリ性種（Alkalibiontic）	pH8.5以上のアルカリ性水域にのみ出現する	アルカリ性水域（少ない）
流水に対する適応性	真止水性種（Limnobiontic）	止水にのみ出現する	流入水のない湖沼・池沼
	好止水性種（Limnophilous）	止水に特徴的であるが、流水にも出現する	湖沼・池沼・流れの穏やかな川
	流水不定性種（Indifferent）	止水にも流水にも普通に出現する	河川・川・池沼・湖沼
	好流水性種（Rheophilous）	流水に特徴的であるが、止水にも出現する	河川・川・小川・上流域
	真流水性種（Rheobiontic）	流水域にのみ出現する	河川・川・流れの速い川・渓流・上流域
陸生珪藻	陸生珪藻Ａ群（Terrestrial diatoms of Group A）	分布域が陸域の乾いた環境～湿り気のある環境にほぼ限定される耐乾性の強い種群	
	陸生珪藻Ｂ群（Terrestrial diatoms of Group B）	Ａ群に随伴するが、湿った環境や水中にも生育可能な種群	
	未区分陸生珪藻（Other Terrestrial diatoms）	陸生珪藻であるが、詳しい生態が未調査のもの	

表１　珪藻の生態性

3　分析結果

分析結果に関しては、具体的な数値は示していないが、その概略を表２にまとめた。また、珪藻化石と花粉化石の出現傾向は、重要な地点のみ図３・４に示してある。以下に各遺構毎に結果の概略を述べる。なお、分析結果は各遺構の堆積物の性格（表２参照）に沿って記述するが、明確になっていない遺構は、試料番号等で記した。

(1)　井戸ＳＥ14

化石は、遺構中位の15世紀前半以降の堆積物から多産する。珪藻化石では、流水不定性で付着性の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Gomphonema parvulum* 等が多産するが、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* も５％程度産出する。花粉化石では、ツタ属の割合が高く、マツ属も比較的多く検出されるが、他は種類数、個体数ともに少ない。木材では、マツ属、ヤナギ属、ヤマモモが、種実遺体では、マツ属、モモ、タデ属、カタバミ属などが検出される。

(2)　堀ＳＨ27

堆積層は大きく泥土自然堆積層（下部）、人為的埋土、泥土自然堆積層（上部）に分かれる。珪藻化石群集は、その違いから３つに区分されるが、おおよそ上記の堆積層の違いに沿った形で変化する。下部では、流水不定性の *Achnanthes minutissima* が多産する。また、止水性で浮遊性の *Aulacoseira granulata* var. *angustissima* も比較的多いが、この種は水深が1.5m以上ある湖沼域で浮遊生活する湖沼浮遊性種群（安藤，1990）に属する。さらに *Navicula confervacea* も検出されるが、この種は陸生珪藻のＢ群（伊藤・堀内，1991）であり、かつ有機汚濁の進んだ富栄養水域にも多産する好汚濁性種（Asai,K.&,Watanabe,T.，1995）にも属する。中部では、多産する種類はなく、富栄養水域に一般的な種類が主に検出される。主な種類のうち、*Stephanodiscus hantzschii* は、湖沼浮遊性種群の一種、*Cyclotella meneghiniana* は、浮遊性で河川最下流部に集中して出現する最下流性河川指標種群（安藤，1990）に属している。上部は、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* など耐乾性の強い陸生珪藻のＡ群が多産する。また、水深が１m前後以下で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢地や湿地に生育する沼沢湿地付着生種群（安藤，1990）の *Pinnularia gibba*、*Gomphonema gracile* などを伴う。

花粉化石は、木本類ではすべての層準でマツ属が優占する。一方草本花粉・シダ類胞子では、イネ科の割合が全ての試料で高い。また上位に向かって水生植物の種類数・個体数が増加する傾向にあるが、人為的埋土の上部ではアカウキクサ属が突出する。また微量ではあるが、寄生虫卵も検出される。

種実遺体では、泥土自然堆積層を中心に、アカマツ、モモ、ヒシなどの種実が検出される。

粒径組成は、泥土自然堆積層では粘土質な細粒堆積物であるが、人為的埋土では、上部に向かって砂質になる。

(3)　堀ＳＨ29

珪藻化石では、断面図とは別地点の基底凹部で、陸生珪藻Ａ群の *Navicula contenta*、*N. mutica* が多産し、同じ陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis* を伴う。ベース土自然堆積層では、止水性種で浮遊性の *Aulacoseira granulata*、*A. granulata* var. *anguslissima*、好塩性で

遺構名	堆積物の性格	珪藻化石	花粉化石	植物珪酸体など	大型植物遺体(材, 種実, 葉)	粒度組成
SE14		産出する試料が少ない。流水不定性の付着性種が多く、水生珪藻主体だが、陸生珪藻も若干見られる。	マツ属が多く、イネ科、オオバコ属などを伴う。ツタ属が著しく多く、しばしば塊状でみられる。		マツ属・ヤナギ属・ヤマモモの木材、マツ属・モモ・タデ属・カタバミ属・セリ科・カヤツリグサ科などの種実が検出	
SH27	泥土自然堆積層(上部)	陸生珪藻A群が多産し、沼沢湿地付着性種群を伴う。	マツ属とイネ科が多産し、ヒシ属など水生植物も多い。	寄生虫卵の検出。		
	人為的埋土	多産する種類は無く、富栄養水域に一般的な種類や、最下流性河川指標種群などがみられる。	マツ属とイネ科、アカウキクサ属が多産し、水生植物の種類数・個体数が増加する。	寄生虫卵の検出。		下部は粘土質だが、上部は砂質
	泥土自然堆積層(下部)	止水生種や浮遊性種が特徴的で、好汚濁性種や湖沼浮遊性種群が検出される。	マツ属とイネ科が多産する。	寄生虫卵の検出。	アカマツ、モモ、ヒシ、アオツヅラフジ、カタバミ属、ナデシコ科などの種子が検出。	粘土・シルトが主体の細粒な堆積物
SH29	人為的埋土	下部では止水性種が特徴的だが、上部では流水不定性種や好塩性種や富栄養水域に生育する種がみられる。	マツ属とイネ科、アカウキクサ属が多産し、水生植物の種類数・個体数が増加する。	寄生虫卵の検出。	ヒョウタン類の種実が検出。	下部は淘汰の悪い砂礫だが、上部ほど細粒化し、粘土層になる。
	ベース土自然堆積層	基底部凹部からは、陸生珪藻が多産。試料番号13は、人為的埋土に近似する。	マツ属とイネ科が多産する。			淘汰が悪い砂礫。
谷状遺構	16世紀後半	最上部では好汚濁性種が優占し、陸生珪藻や流水生種を伴うが、全体的に化石が少ない。	木本ではマツ属、草本ではイネ科が多産する。	イネ属、タケ亜科、ウシクサ族等の植物珪酸体が検出。	アカマツ、モモの種実が検出。	砂質で淘汰が悪い。
	15世紀前半～16世紀前半	化石が少ない。	アカガシ亜属が多く、マツ属とイネ科が増加傾向を示す。		アカマツ、モモの種実が検出。	砂質で淘汰が悪い。
SE283		流水不定性種などの水生珪藻や陸生珪藻が混在する。	マツ属、ブドウ属、イネ科が多いが、特にブドウ属が多く、塊状で検出。			
SH47		流水性種や陸生珪藻、沼沢湿地付着性種が特徴的に産出。	一部の試料で木本ではマツ属、草本ではイネ科が多産するが、多くの試料で化石が少ない。	イネ属、タケ亜科、ウシクサ族等の植物珪酸体が検出。イネ属の穎珪酸体や葉の組織片も検出。		
SH1	人為的埋土	下位に近似する。	化石が少ない。			下位に近似する。
	泥土自然堆積層(上部)	下位に近似する。	下位に近似する。			粘土が多く、粒径が細かい。
	人為的埋土	流水性種や流水不定性種が多く、陸生珪藻を伴う。	マツ属が優占し、イネ科がやや多いが、種類が少なく、単調である。			粘土、シルト分が多いが、やや砂質。
	泥土自然堆積層(下部)	好止水性が多く、流水不定性種も多産する。下部は化石が少ない。	化石が少ない。		アカマツの葉・種子・球果・雄花が検出される。	砂分、シルト、粘土がほぼ同率に含まれる。
	ベース土自然堆積層	化石が少ない。	化石が少ない。			砂分が多く、粘土、シルトが少ない。
SH2	泥土自然堆積層	一部の試料では好汚濁性種が優占し、陸生珪藻や流水生種を伴うが、全体的に化石が少ない。	マツ属が優占し、イネ科がやや多いが、種類が少なく、単調である。			

表2　各分析結果一覧

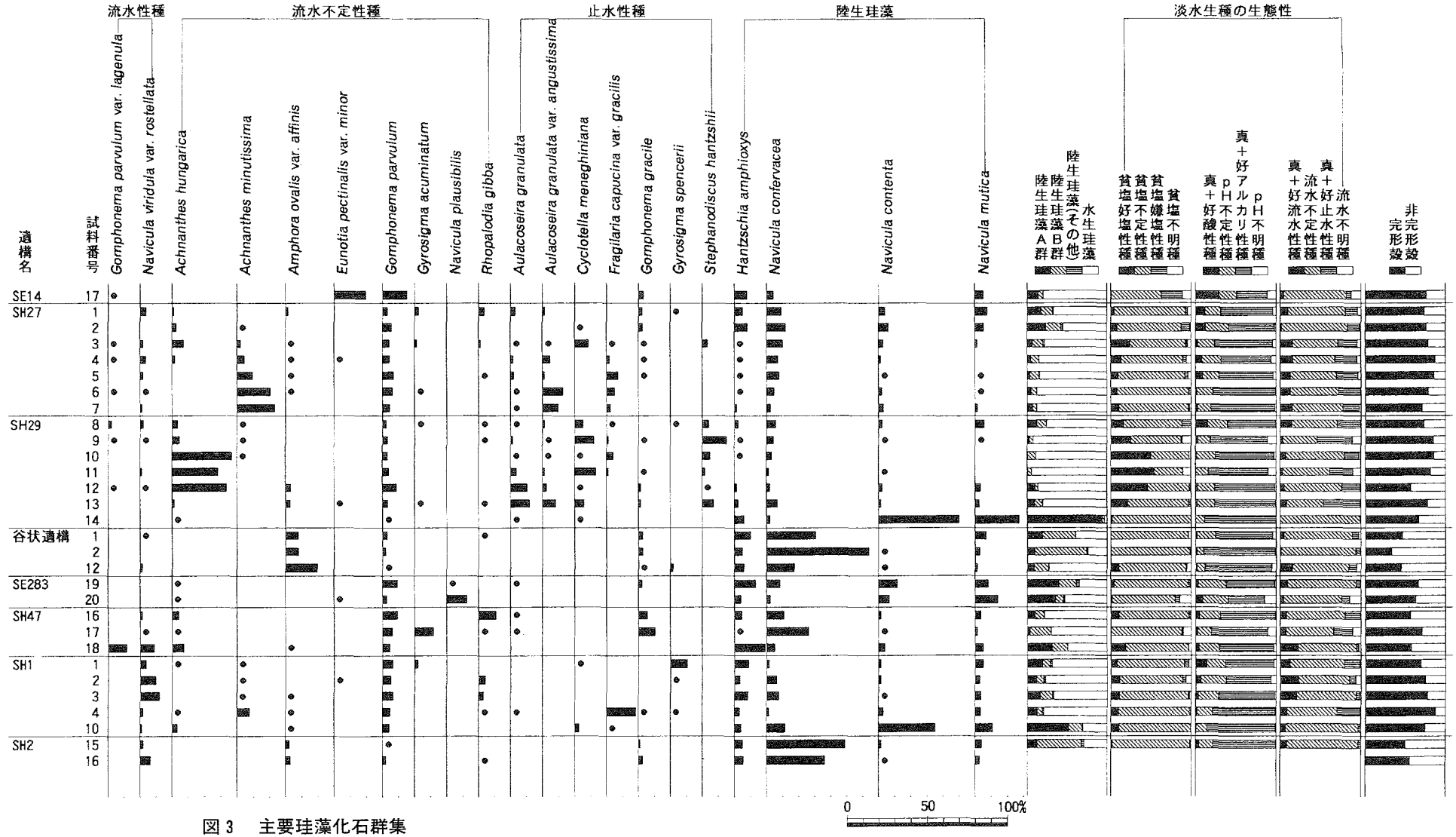


図 3　主要珪藻化石群集

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満の試料について検出した種類を示す。

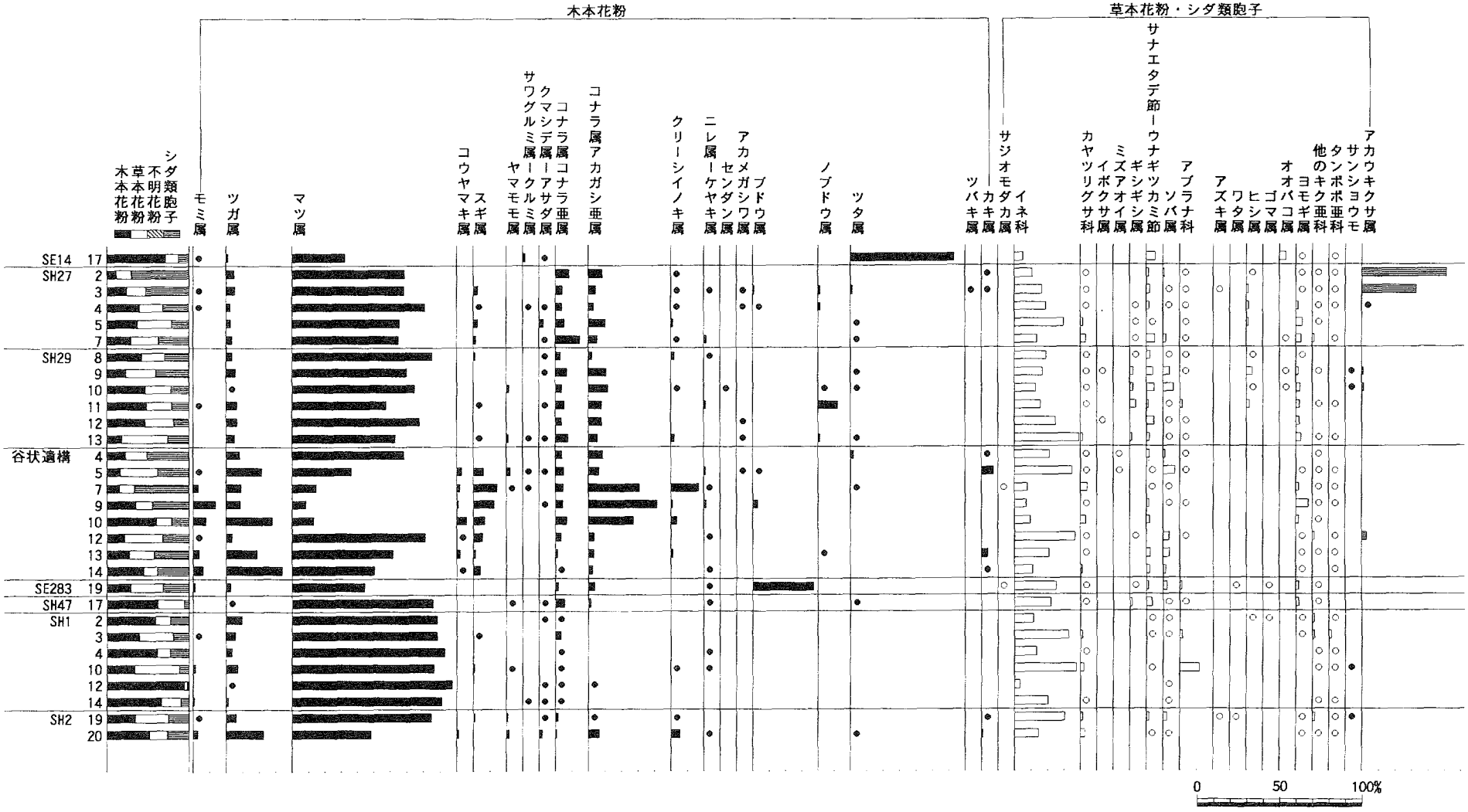


図4　主要花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、○●は1％未満の試料について検出した種類を示す。

好止水性種の *Amphora veneta*、流水不定性で好汚濁性種の *Navicula pupula* が産するが、際だって多い種類は認められない。人為的埋土は、下部と上部で組成が異なる。下部では流水不定性の *Achnanthes hungarica* が優占し、前試料で産出した浮遊性種や好止水性種を伴う。優占種の *Achnanthes hungarica* は、好塩性の種で、汚濁に対しても中腐水域～強腐水域まで生育する（Lange-Bertalot, 1995)富栄養種である。また上部では、最下流性河川指標種群の *Cyclotella meneghiniana*、湖沼浮遊性種群の *Stephanodiscus hantzschii* が多産する。

花粉化石では、木本花粉はすべての層準でマツ属が優占する。草本花粉・シダ類胞子は、イネ科の割合が全ての試料で高い。またＳＨ27同様上位に向かって水生植物の種類数・個体数が増加する傾向にある。また、微量ではあるが寄生虫卵が検出される。

種実遺体では、ヒョウタン類が検出される。粒径組成は、ベース土自然堆積層ならびに人為的埋土の下部は淘汰の悪い砂礫であるが、上部ほど細粒化し、粘土層となる。

(4) 谷状遺構

珪藻化石は全体的に少なく、検出されるのは16世紀後半の堆積物の上部のみである。試料番号12は、流水不定性で付着性の *Amphora ovalis* var. *affinis*、陸生珪藻Ｂ群の *Navicula confervacea* が多産し、好流水性の *Gyrosigma scalproides*、*Navicula elginensis* var. *neglecta*、流水不定性の *Anomoeoneis sphaerophora*、耐乾性の強い陸生珪藻のＡ群の *Hantzschia amphioxys* が約10％産出する。試料番号１・２は、陸生珪藻Ｂ群の *Navicula confervacea* が優占する。これに伴い、*Amphora ovalis* var. *affinis*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* が10％前後産出する。

花粉化石は、15世紀前半～16世紀前半と16世紀後半の堆積層で組成が変化する。前者は、木本花粉ではアカガシ亜属の割合が高く、ツガ属、マツ属、スギ属、シイノキ属を伴う。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科の割合が高い。一方後者は、木本花粉ではマツ属の割合が高く、ツガ属も比較的多い。草本花粉では、イネ科の割合が高いが、他は種類数、個体数ともに少ない。

植物珪酸体は、16世紀後半の堆積物について実施し、イネ科、タケ亜科、ウシクサ族などが検出されている。粒径組成は、全体的に砂質で、淘汰が悪い組成である。

(5) 井戸ＳＥ283

珪藻化石群集は、水生珪藻と陸生珪藻とが混在する。曲物内の土壌では、流水不定性の *Navicula plausibilis*、陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys*、*Melosira ruttneri*、*Navicula contenta*、*N. mutica* などが多産する。最下層では、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*N. mutica*、陸生珪藻Ｂ群の *Navicula confelvacea*、*Stauroneis obtusa* が多産する。

花粉化石は、最下層のみから検出される。木本花粉ではマツ属とブドウ属が多く、草本花粉ではイネ科が多い。なお、ブドウ属は塊の状態で検出される。

(6) 堀ＳＨ47

16世紀後半の堆積層は、好流水性の *Gomphonema parvulum* var. *lagenula*、*Navicula viridula* var. *rostellata*、流水不定性の *Achnanthes hungarica*、陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula*

mutica、*Nitzschia brevissima* などが多く産出する。17世紀の堆積層になると、流水性種は減少し、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、*Rhopalodia gibba*、好止水性で沼沢湿地付着生種の *Gomphonema gracile*、陸生珪藻のＢ群であり好汚濁性種でもある *Navicula confelvacea* が多産する。

一方花粉化石が検出されたのは17世紀の堆積層１点のみである。木本花粉ではマツ属が、草本花粉ではイネ科が多く検出される。また、植物珪酸体では、イネ属、タケ亜科、ウシクサ族などの植物珪酸体が検出されるほか、イネ属に由来する穎珪酸体や葉の組織片も検出される。

(7)　堀ＳＨ１

珪藻化石が検出されるのは、泥土自然堆積層（下部）の上部と、人為的埋土よりも上位の試料のみである。泥土自然堆積層（下部）は、好止水性の *Fragilaria capusina* var. *gracilis* が優占し、流水不定性の *Achnanthes minutissima*、*Gomphonema parvulum*、*Synedra ulna* が多産する。ＳＨ１では、試料番号１～４から珪藻化石が産出する。人為的埋土よりも上位では、好流水性でかつ中～下流性河川指標種（安藤，1990）の *Navicula viridula* var. *rostellata*、*Achnanthes lanceolata*、流水不定性の *Gomphonema parvulum* が多産する。また、陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* も伴う。

一方地点は異なるが、泥土自然堆積層（下部）相当層（試料番号９・10）では、陸生珪藻のＡ群の *Navicula contenta* が優占し、同じくＡ群の *Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、陸生珪藻のＢ群の *Navicula confervacea*、*Nitzschia brebissima* が多産する試料もある。

花粉化石の保存はあまり良くなく、人為的埋土と泥土自然堆積層（上部）から検出される。木本花粉ではマツ属（とくに複維管束亜属）の割合が高く、他の種類は、種類数・個体数ともに貧弱である。また、草本花粉はイネ科の割合が高く、ソバ属、ゴマ属など栽培植物の少数ながら検出される。また、泥土自然堆積層からマツ属の球果に混じって、葉や雄花序、種子が検出された。

粒径組成は、ベース土自然堆積層が砂分が多い傾向にあるが、泥土自然堆積層（下部）では砂、シルト、粘土がほぼ同量含まれる。人為的埋土になると、より粘土質になるが、砂分も多く含まれており、淘汰も悪い。泥土自然堆積層（上部）よりも上では、より粘土が大部分を占めるようになり、粒径の細かい堆積物へと変化する。

(8)　堀ＳＨ２

珪藻化石群集の特徴は、陸生珪藻Ｂ群でかつ好汚濁性種の *Navicula confervacea* が優占し、陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、好流水性で中～下流性河川指標種の *Navicula viridula* var. *rostellata*、*Achnanthes lanceolata*、流水不定性の *Amphora ovalis* var. *affinis*、*Cymbella silesiaca* を伴う。

花粉化石群集の傾向はＳＨ１と近似する。木本花粉ではマツ属（とくに複維管束亜属）の割合が高く、他の種類は、種類数・個体数ともに貧弱である。また、草本花粉はイネ科の割合が高く、ソバ属、ワタ属、ゴマ属など栽培植物が少数ながら検出される。

4　各遺構の環境変遷

(1)　井戸ＳＥ14

下部は化石が少なく、急速に埋積が進んだものと考えられる。遺物等も多いことから、人為的に埋め戻した可能性も考えられる。

遺構覆土の中部にあたる第３層下部は、木の葉などの植物遺体も多いことから、自然堆積層であると考えられるが、珪藻化石の結果からいえば、富栄養でやや水深があるような環境が示唆される。このことから、井戸が破棄され埋められたあと放置され、雨水や地下水など若干水がたまったような状態が伺われる。ＳＥ14で特異的なのは、花粉化石の産状である。虫媒花で花粉生産量が少ないツタ属が多産し、しばしば塊状でみられることから局地性を反映していると考えられる。遺構内の花粉分析は、局地的な植生を反映する場合があり、遺構の性格を知る上で、重要な情報が得られる場合がある。例えば、千葉県市原市の上総国分尼寺で行われた井戸の花粉分析（辻，1984）や、奈良女子大構内遺跡で行われた溝の花粉分析（金原，1990）では、局地的な植生や遺構埋積時の季節性について論じられている。今回の結果もこれに類する結果であり、井戸が埋積する際に、傍らに生育していたツタが花ごと埋積したため、塊状で多量に検出されたとみられる。

(2)　堀ＳＨ27

泥土自然堆積層（下部）が堆積する頃は、珪藻化石群集の特徴から、かなりの（遺構のレベルからいえば２m以上？）水深があり、水質は塩類が溶存する富栄養な水質であったと考えられる。水生植物由来の花粉化石が少ないが、これは水深が深く水生植物が繁茂しにくいような状況であったか、あるいは浚渫等で人為的に管理されていたためと考えられる。これらのことから、当時の環境は水深が少なくとも２m近く存在する、淀んだ池沼のような水域であったことが示唆される。

人為的埋土の頃になると、埋積が進んだため浅くなり、水生植物の繁茂（ヒシ、ガガブタなど）や遺物などの投棄などによって富栄養化が促進したものと思われる。特に最上部ではアカウキクサ属が多産することから、汚濁が進んで水深がさらに浅く、かつ淀んだ水域になったと思われる。この人為的埋土は、化石の保存が良く、有機質で、かつ徐々に浅くなっていく課程が分析の結果から伺われる。これらのことからすると、人為的な埋土というよりはむしろ自然堆積層的な様相が伺われる。これについては、堆積学的な検討や遺物の状況などもふまえて総合的に判断する必要があろうが、少なくとも、急激に埋められたのではなく、ある程度の期間をおいて徐々に埋積した可能性は高いと思われる。

泥土自然堆積層では、さらに水深は浅くなって沼沢地化したと考えられる。また、陸生珪藻も低率ながら認められるようになることから、表土の混入や、しばしば乾燥した状態にさらされていたことが示唆される。また水質は、引き続き富栄養な状態が維持されたと考えられる。なお、堀内からは、鞭虫、廻虫の卵が検出される。これらは１gあたりに換算しても数十個前後であり、１ccあたり１万個以上検出されるトイレ遺構（金原正明，金原正子，1994）とは状況的に異なっている。ただし、今回寄生虫卵が見つかったことは、富栄養化の原因の一つとして、屎尿の混入の可能性もあり興味深い。トイレ遺構ほど高率ではないものの、遺構中から寄生虫卵が検出される例は、東京都葛飾区上千葉遺跡（パリノ・サーヴェイ株式会社，1996b）などいくつか知られている。遺構中から検出される寄生虫

遺構名	堆積物の性格	時代性	堆積環境	古　植　生	栽培植物
SE14		15世紀前半～？	富栄養で水深がわずかにあるような、沼沢地的な環境。	丘部にはマツ、ヤマモモ（植栽？）などの樹木、林縁部にはツタやヤナギなどの低木類、低地には、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属などの草地が広がる。	モモ、イネ
		13世紀後半	化石が少ない。急速に埋積が進んだと考えられるが、人為的可能性もある？	化石の保存が悪い。	特になし
SH27	泥土自然堆積層（上部）	17世紀前半	埋積が進んで浅くなり、富栄養な沼沢地的環境へ変化。	下部に類似する	ソバ
	人為的埋土	17世紀前半	下位と同じであるが、土などの投棄により水深が浅くなり、上部では沼沢地化。また、さらに富栄養化が進む（屎尿の混入？）。	富栄養化に伴い、堀の中はヒシなどの水生植物で覆われる。浅くなるにつれて、アカウキクサなどが生育する富栄養の沼沢域に変化。	ソバ、アズキ、モモ
	泥土自然堆積層（下部）	16世紀前半	あるていどの水深がある（２ｍ程度？）富栄養で淀んだ池沼的環境。	堀の周囲を中心にマツ（植栽？）が生育。堀の中の植生はまだ貧弱。	ソバ
SH29	人為的埋土	17世紀後半	SH27の人為的埋土と類似。	SH27の人為的埋土と類似。	ソバ
	ベース土自然堆積層	16世紀後半	上位と近似。ただし、基底の凹部からは、陸生珪藻が多産。周囲からの崩落か？	人為的埋土の下部と類似する。	ソバ
谷状遺構		16世紀後半	最上部では、流水の影響があり、水深が浅く、富栄養な沼沢地的環境。下部では化石が少なく、急速に埋積が進んだ可能性がある。	堀の周囲を中心にマツ（植栽？）が生育。遺構周辺はイネ科やカヤツリグサ科などの草地か？	ソバ、イネ
		15世紀前半～16世紀前半	化石が少ない。急速に埋積が進んだと考えられる。	丘陵を中心にシイ・カシ類などの照葉樹林に覆われる。林縁部や人里にはマツなどの陽樹やイネ科など草地が分布。	ソバ
SE283		16世紀後半	様々な生態性の珪藻が混在することから、埋積（人為的？）の際、様々な由来の土が使われる。	周辺の森林植生は、同時期の他の遺構と同様。ブドウ属が遺構の脇に生育していた。	ソバ、ワタ、ゴマ
SH47		17世紀	富栄養で水深がわずかにあるような、沼沢地的な環境。	マツやイネ科が多く、同時期の遺構の結果と類似する。イネ（籾殻や藁？）が投棄された可能性もある？	ソバ
		16世紀後半	流水の影響を受ける。地表面からの土壌崩落？	花粉化石の保存が悪い。	
SH1	人為的埋土	17世紀	下位に類似する。	化石の保存が悪い。	
	泥土自然堆積層（上部）	17世紀	下位に類似する。	下位に近似する。	ソバ、ゴマ
	人為的埋土	17世紀	流水の影響を受ける。地表面からの土壌崩落？	マツやイネ科が多く、同時期の遺構の結果と類似する。	ソバ
	泥土自然堆積層（下部）	16世紀後半	水深があり、流れの少ない水域。	マツが、堀の脇に生育（植栽か？）。	ソバ
	ベース土自然堆積層	16世紀後半	地山からの崩落土であるため、化石が取り込まれにくい。	化石の保存が悪い。	
SH2	泥土自然堆積層	16世紀後半	富栄養な水域であったと思われるが、珪藻化石の保存が悪く、詳細は不明。	堀の周囲を中心にマツ（植栽？）が生育。遺構周辺はイネ科やカヤツリグサ科などの草地か？	ソバ、ワタ、アズキ

表３　各遺構の性格と環境変遷

卵の解釈については、今後の資料蓄積が待たれるところである。

(3) 堀ＳＨ29

ＳＨ29に関しては、人為的埋土を中心に調査を実施した。基本的な状況はベース土自然堆積層も含め、ＳＨ27の人為的埋土と同様な変遷をしていると考えられる。なお、基底部から陸生珪藻が多産するが、これは地表面からの落ち込みなどの影響が考えられる。

(4) 谷状遺構

谷状地形の珪藻化石の産状をみると、検出される層準が上部層に限られている。流水に対しては流水不定性種が優占するが、好流水性種も認められる。また、陸生珪藻のＢ群の *Navicula confervacea* が多く検出されるが、陸生珪藻を多く伴わないことから、水生珪藻として生育していたと判断される。さらに、本種は有機汚濁の進んだ水域に特徴的な好汚濁性種（Asai,K.&,Watanabe,T., 1995）でもある。これらを考慮すると、堆積環境としては、流水の影響がある水深の浅い場所で、富栄養水域で水成堆積したと考えられる。他の層準からは、珪藻化石がみられないが、水生植物の花粉化石が断片的に検出されていることからすると、水の影響は常に受けていたものと思われる。堆積物の粒径にばらつきがあり、淘汰が悪いことからすると、増水等による一過性の堆積物である可能性が指摘される。このため堆積速度が早く、珪藻化石が取り込まれにくかったことが示唆される。

(5) 堀ＳＥ283

遺構覆土から産出する珪藻化石群集は、水生珪藻と陸生珪藻とがほぼ半数ずつ混在する。また、多産する種類が少なく、構成する種類数も多い。このように生育場所を異にする複数の種類が混在する点を考慮すると、井戸遺構から産出する珪藻化石の多くは異地性である可能性が大きい。このような点から、井戸内埋積物中の珪藻化石群集は、埋積状況を反映しているのではなく、土壌の由来（河川性の堆積物？）を表しているものと推定される。

なお、本遺構ではブドウ属が多産し、しばしば塊状で検出される。このような産状は、ＳＥ14で検出されたツタ属と同様な産状であり、近傍に生育していたものに由来すると思われる。

(6) 堀ＳＨ47

珪藻化石群集から推定される環境は、水深が浅く、富栄養な水域が示唆される。また、陸生珪藻の検出などから、表土による埋積が進んだ可能性もある。さらに、試料番号18が堆積する頃は流水の影響を受けていたことも考えられる。花粉化石は一部の試料からしか検出されない。花粉化石は好気的環境下に弱いことを考慮すれば、堆積後に分解した等の理由が考えられるが、現段階では不明である。一方、イネ属の植物珪酸体が多産し、穎や葉の組織片などが見られることから、稲籾や稲藁の投棄なども考えられる。

(7) 堀ＳＨ１

泥土自然堆積層（下部）上部より上位で珪藻化石が産出したが、全体的に珪藻化石の産出が極めて少ない。このように化石の産出が少ない原因については、堆積物中に珪藻が取り込まれにくい環境があったことが考えられる。なお、珪藻が産出するようになる層準を境として粒径組成が変化し、砂質な堆積物から粘土質な堆積物へと変化する。また、これを境にして花粉化石も検出されるようになる。

このような状況から考えると、砂質な堆積物では、堆積速度も早く化石が取り込まれにくかったが、粒径が細かくなると、化石が多く取り込まれるようになったと推定される。泥土自然堆積層（下部）の上部では、好止水性の珪藻化石が多産することから、流れのない水域であったと考えられる。その上位の人為的埋土になると、中～下流性河川指標種を多産するようになることから、何らかの理由で堀内に流れが存在するようになったと推測される。また、陸生珪藻も比較的多く産出するが、これらは堀の周囲の乾いた場所などから二次的に流入したと考えられ、人為的に投棄された土壌に由来する可能性がある。なお、人為的埋土の粒径組成は、前後の層準の組成と比べると、砂質で淘汰が悪いことから自然堆積層とは異質であるが、珪藻化石では大きな変化がみられない。おそらく、人為的に埋める際に、自然堆積の土とある程度混ざってしまった可能性もある。

図２に示した場所とは別地点であるが、堀の最下層から、陸生珪藻の中でも特に耐乾性の強い陸生珪藻のＡ群が優占する傾向がみられる。しかし、堆積物をみると水成堆積物の様相を呈しており、また植物遺体も多いことから、風成層である可能性は薄い。種実遺体の大部分はマツ属であることから、堀の縁に生育していたものに由来するとすれば、堀の崩落などにより地表面から陸生珪藻が落ち込んだ可能性もある。したがって、本層では陸生珪藻が多いが、堀内が乾燥していたとは必ずしもいえない。

堀周辺の植生に関して特筆すべきはマツ属の検出状況である。堀内からは花粉が多量に検出され、球果、雄花序、葉も検出されている。このような化石の産状からすると、かなり局地性が高いと考えられる。検出された化石の形態から、アカマツであると考えられることから、当時堀の脇には、アカマツが植えられていたと考えられる。堀など人工的な堆積物の場合、植物化石が局地性を反映していることがあり、これによって当時植栽されていた植物に関する情報が得られることがある。東京都葛飾区の葛西城では、花粉化石の結果や絵図から、当時の堀周辺に植栽されていた植物の種類について検討を行っている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1989）。今回の場合も、溝周辺の局地的な植生を反映しているとみられ、興味深い結果であるといえる。

(8)　堀ＳＨ２

ＳＨ２の最下層にあたる青灰色細砂、青灰色粘土では、水中にも陸上の好気的環境にも耐性のある陸生珪藻のＢ群の一種である *Navicula confervacea* が優占する。しかし、本種以外に陸生珪藻は少なく、水生珪藻が多産することから本種は水中に生育していたと考えられる。本種は、現在の水域では有機汚濁の進んだ富栄養水域に多産する好汚濁性種（Asai,K.&,Watanabe,T.，1995）とされている。よって、青灰色細砂、青灰色粘土が堆積する頃、堀内には水が存在し、水質的には富栄養であったと考えられる。なお、分析を行った試料の中には、化石の少ない試料も多い。化石が少ない原因については先に述べた堆積速度の関係などがあげられるが、はっきりしない。

5　中世末～近世の古植生変遷と栽培植物

16世紀後半以降の堀などから、マツ属の花粉が多量に検出され、また種子、葉、花序もみられることから、丘城の縁辺部や堀の周りを中心にアカマツが広く分布していたものと推測される。一方、15

世紀前半～16世紀前半にあたる谷状地形の下部では、マツ属の割合はさほど多くなく、モミ属、ツガ属、アカガシ亜属、シイノキ属などが多い結果となっている。モミ属やツガ属は温帯性の針葉樹林の要素であり、アカガシ亜属やシイノキ属は照葉樹林の主要な要素である。このことから、当時の周辺は照葉樹や温帯性針葉樹からなる暖温帯林であったと考えられる。マツ林の急増は、植林や人為的な森林の伐採による二次林の増加によるものと考えられる。これまでの結果をみると、マツ属の急増期は室町時代末以降と考えられるが、これが、根来寺の盛衰とどう関わりがあるのかを検討していく必要がある。

今回分析を行った遺構は、丘陵と低地の境界部分にあたり、林縁部から低地にかけて分布する。このような場所には、ツタやノブドウ、ブドウ属、アオツヅラフジなどの蔓性木本やアカメガシワ等の低木類は林縁部に生育していたものと推定される。

草本類は、主に低地に分布していたものと考えられる。タケ亜科やウシクサ族などのイネ科をはじめ、カタバミ属、オオバコ属、スベリヒユ属、ウシクサ族等、人里などの開けた場所に生育する種類が多い。このことから、遺跡周辺は開けた草地であったと思われる。また、遺構から検出された種実遺体や花粉化石をみると、水生植物の種類も多いことから、低湿地も河川沿いを中心に存在していたと考えられる。さらに、イネ属の植物珪酸体が検出されていることから、湿地での稲作が示唆される。

これまで検出された植物化石のうち、栽培のため渡来した種類を列挙すると、イネ、モモ、アズキ、ソバ、ワタ、ゴマがあげられる。これらは栽培され、利用されていたものと推定される。また、植栽されていた可能性のあるものに、アカマツ、センダン、カキ、ヤマモモ、ガマズミ属等があるが、これらは自生することから、その判断は慎重に行う必要があろう。

6　まとめ

今回８基の遺構を対象に調査を行い、その結果を一覧表にまとめた(表３)。埋積過程の傾向としてはいくつかの傾向に分けられる。一つは、ＳＨ１、ＳＨ２、ＳＨ47等にみられる傾向である。下部では堆積速度が早く、流水の影響を受け、化石が少ない層準もいくつかみられる。上部では、流水の影響を受けながらも沼沢地化・富栄養化が進んでいく。もう一つはＳＨ27やＳＨ29にみられる傾向である。水深が深く、池沼的な状況から徐々に浅くなり、水生植物が水面を覆うような富栄養な環境へと変化する。

今回は、主に微化石を中心にして検討を行ったが、詳細に検討するためには、堆積物や遺物の状況も加味しながら総合的にまとめていく必要がある。特に、堆積学的な検討を加えて、自然堆積層と人為的埋土の比較検討を行っていくことは重要である。次の機会にはこれらの課題を加味して展開していきたいと思う。

＜引用文献＞

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous

taxa. Diatom,10,35-47.

安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42,p.73-88.

Hustedt, F.(1937-1938)Systematische und okologische Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java, Bali und Sumatra Nach dem Material der Deutschen limnologischen SundaExpedition. Teil I ～III, Band.15,p.131-506,Band.16,p.1-155,274-394.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.

金原正明 (1990) 遺構における植物遺体分析について－堆積物の季節性など－. 日本文化財科学会第７回大会研究発表要旨集, p.22-23.

金原正明・金原正子 (1994) 堆積物中の情報の可視化. 可視化情報, 14(53), p.79-84.

Lange-Bertalot,H.(1995)Rote Liste der Kieselalgen(Bacillariophyceae) Deutschlands.Schr.-R.f. Vegetationskde. H.28 000-000 BfN, Bonn-Bad Godesberg p.1-31.

Lowe, R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p.In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat.Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency,Cincinati.

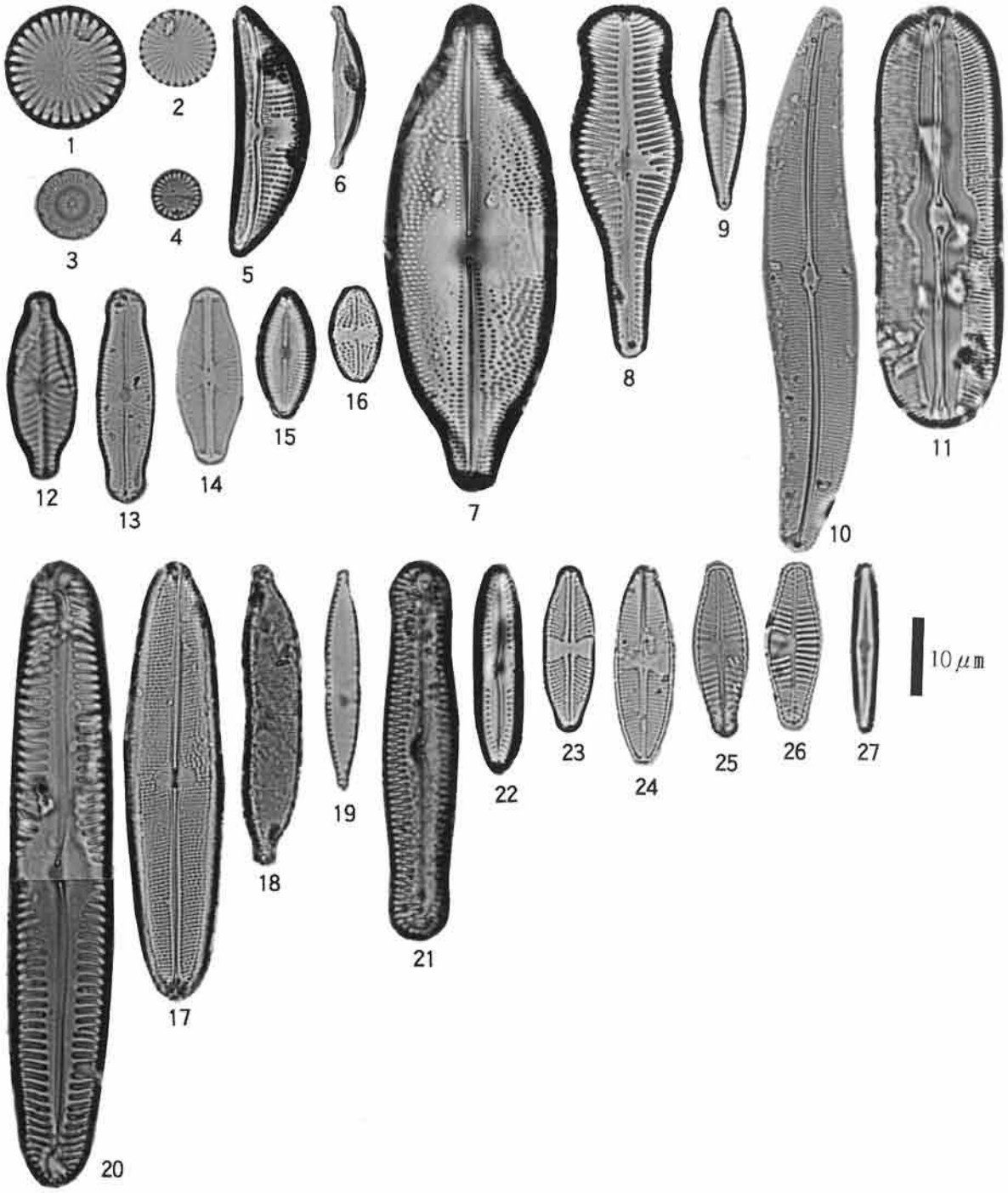
パリノ・サーヴェイ株式会社 (1989) 花粉化石から見た葛西城跡の古植生.「葛飾区遺跡調査会調査報告第５集　葛西城Ⅷ　第３分冊」, p.138-157,葛飾区遺跡調査会.

パリノ・サーヴェイ株式会社 (1996a) 自然科学分析.「汐留遺跡 (第３分冊)－汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－」, p.103-320, 汐留地区遺跡調査会.

パリノ・サーヴェイ株式会社 (1996b) 自然科学分析.「葛飾区遺跡調査会調査報告第35集　上千葉遺跡　葛飾区西亀有１丁目12番地点発掘調査報告書」, p.242-275, 葛飾区遺跡調査会.

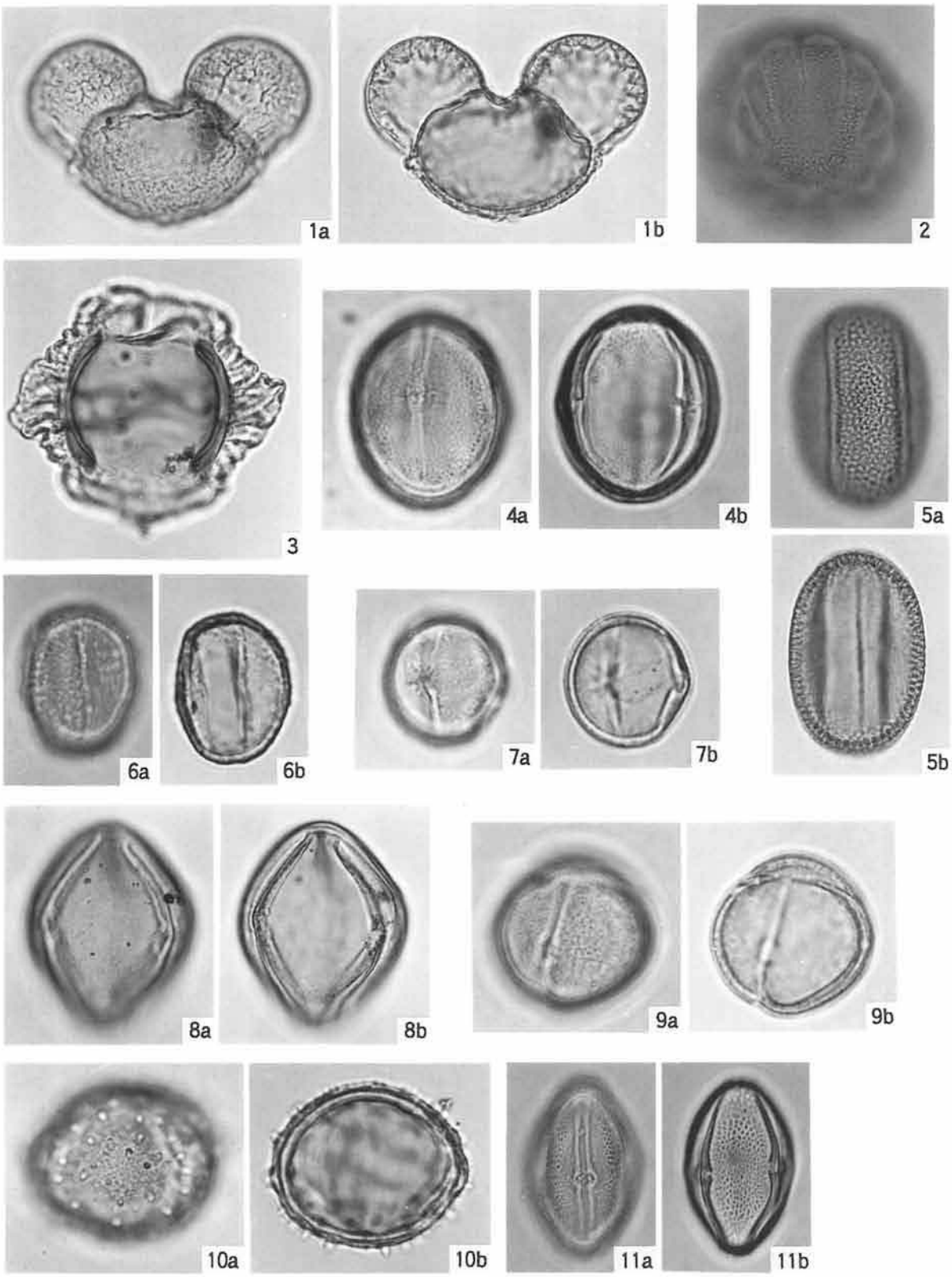
辻　誠一郎 (1984) 井戸内埋積物の季節性.「古文化財の自然科学的研究」, p.492-493,同朋社.

写真１　珪藻化石



1.*Cyclotella meneghiniana* Kuetzing(SH27;3)
2.*Stephanodiscus hantzshii* (Grun.)Cleve(SH27;3)
3.*Cyclotella pseudostelligera* Hustedt(SH27;3)
4.*Cyclotella atomus* Hustedt(SH27;4)
5.*Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.)V.Heurck(谷状遺構;12)
6.*Amphora montana* Krasske(SH27;7)
7.*Anomoeoneis sphaerophora* (Kuetz.)Pfitzer(谷状遺構;12)
8.*Gomphonema truncatum* Ehrenberg(SH27;5)
9.*Gomphonema parvulum* Kuetzing(SH27;2)
10.*Gyrosigma scalproides* (Rabh.)Cleve(谷状遺構;12)
11.*Navicula americana* Ehrenberg(谷状遺構;12)
12.*Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.)Patrick(SH:10)
13.*Navicula pupula* Kuetzing(SH27;4)
14.*Navicula contenta* Grunow(SH1;10)
15.*Navicula confervacea* (Kuetz.)Grunow(SH27;2)
16.*Navicula mutica* Kuetzing(谷状遺構;1)
17.*Neidium alpinum* Hustedt(谷状遺構;12)
18.*Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow(SH1;2)
19.*Nitzschia palea* (Kuetz.)W.Smith(SH27;5)
20.*Pinnularia gibba* Ehrenberg(SH1;10)
21.*Pinnularia acrosphaeria* W.Smith(SH1;4)
22.*Pinnularia schroederii* (Hust.)Krammer(谷状遺構;12)
23.*Stauroneis obtusa* Lagerst(谷状遺構;1)
24.*Achnanthes hungarica* Grunow(SH27;3)
25.*Achnanthes lanceolata* (Breb.)Grunow(SH27;3)
26.*Achnanthes lanceolata* (Breb.)Grunow(SH27;3)
27.*Achnanthes minutissima* Kuetzing(SH27;6)

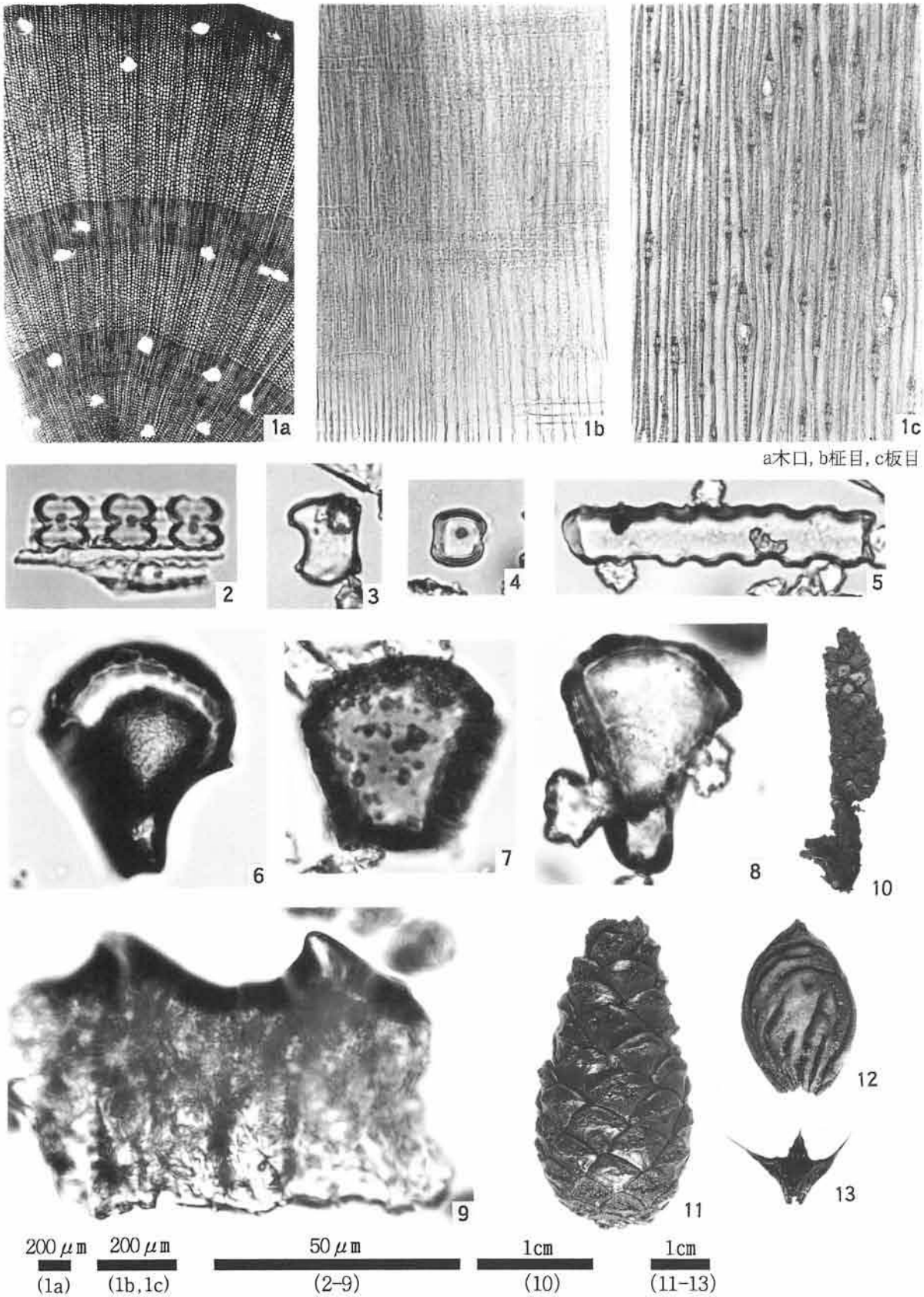
写真２　花粉化石



50 μm (1-3,5,8,11)　　50 μm (4,6,7,9,10)

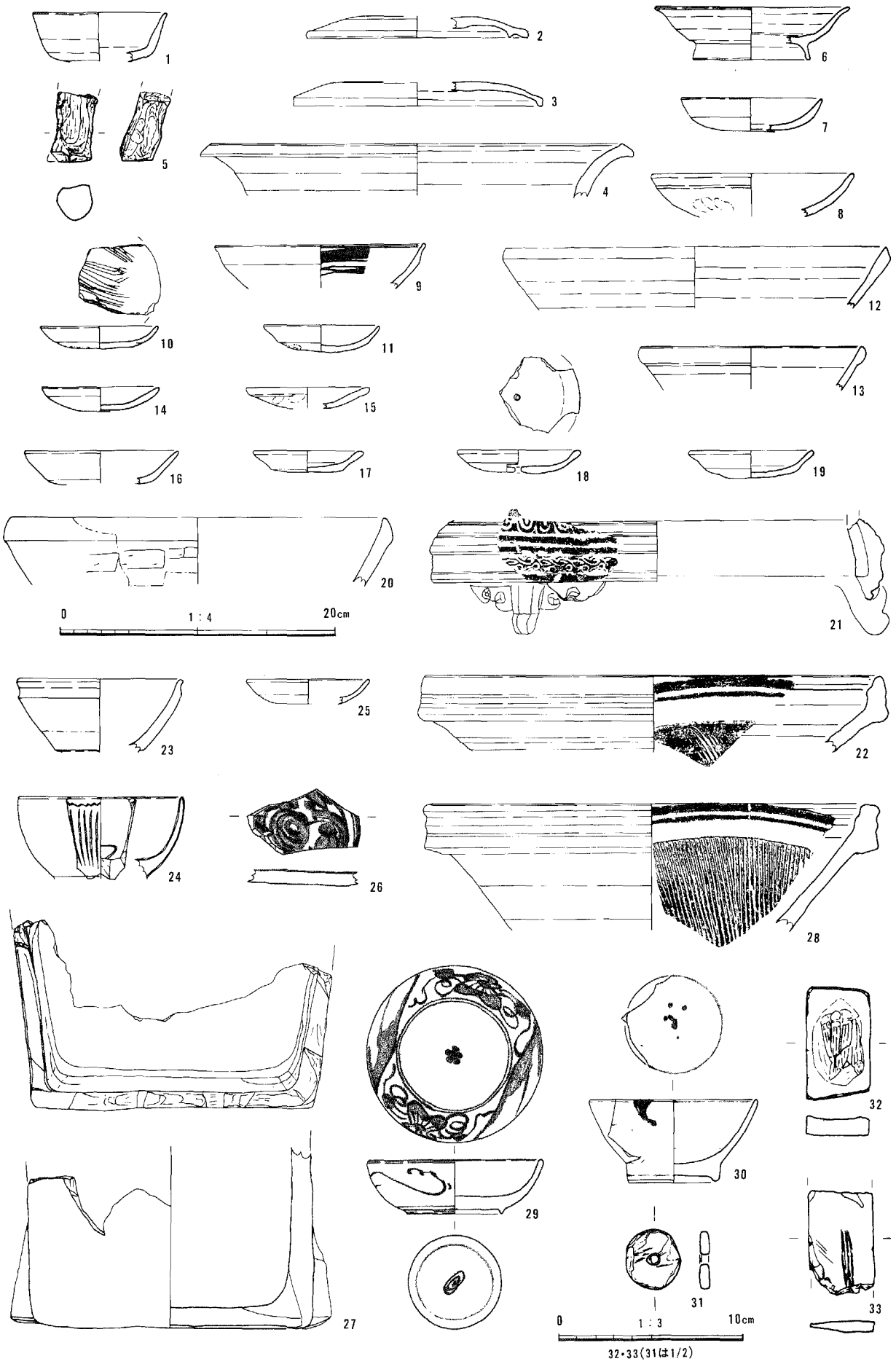
1. マツ属(SH27;2)
2. ゴマ属(SH1;2)
3. ヒシ属(SH27;1)
4. ノブドウ属(SH29;11)
5. ソバ属(SH27;1)
6. コナラ属コナラ亜属(SH27;1)
7. コナラ属アカガシ亜属(SH29;11)
8. カキ属(谷状遺構;5)
9. ギシギシ属(SH29;11)
10. オミナエシ属(SH29;11)
11. ツタ属(SE14;17)

写真 3　木材・植物珪酸体・種実遺体

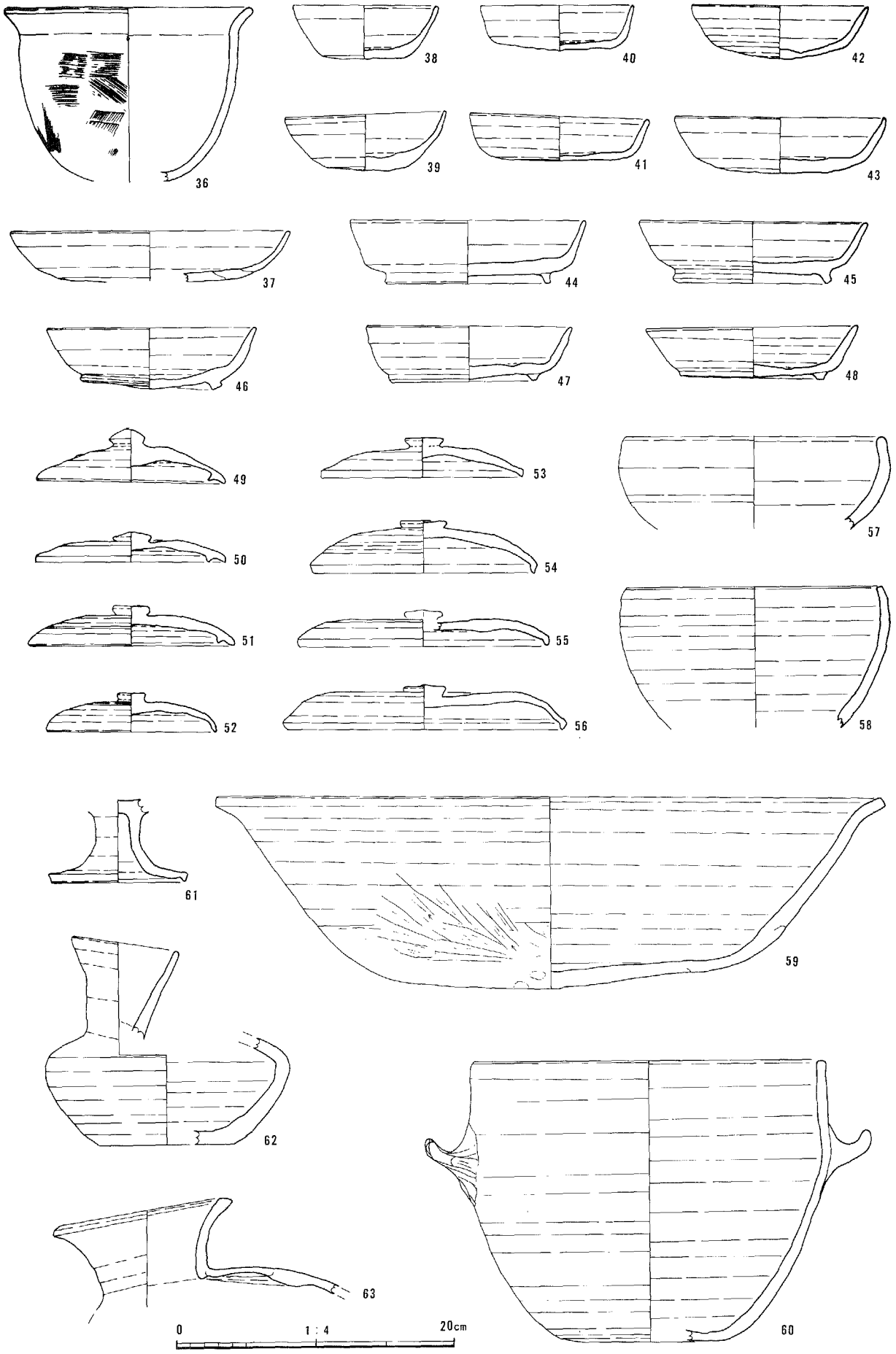


1. マツ属複維管束亜属(SE14;31)
2. イネ属短細胞列(谷状遺構;12)
3. タケ亜科短細胞珪酸体(谷状遺構;2)
4. ヨシ属短細胞珪酸体(谷状遺構;2)
5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(谷状遺構;4)
6. イネ属機動細胞珪酸体(谷状遺構;3)
7. タケ亜科機動細胞珪酸体(谷状遺構;2)
8. ウシクサ族機動細胞珪酸体(谷状遺構;2)
9. イネ属穎珪酸体(谷状遺構;2)
10. マツ属(雄花序　SH1;13)
11. アカマツ(SE14;21)
12. モモ(谷状遺構;28)
13. ヒシ(SH27;35)

出土遺物実測図

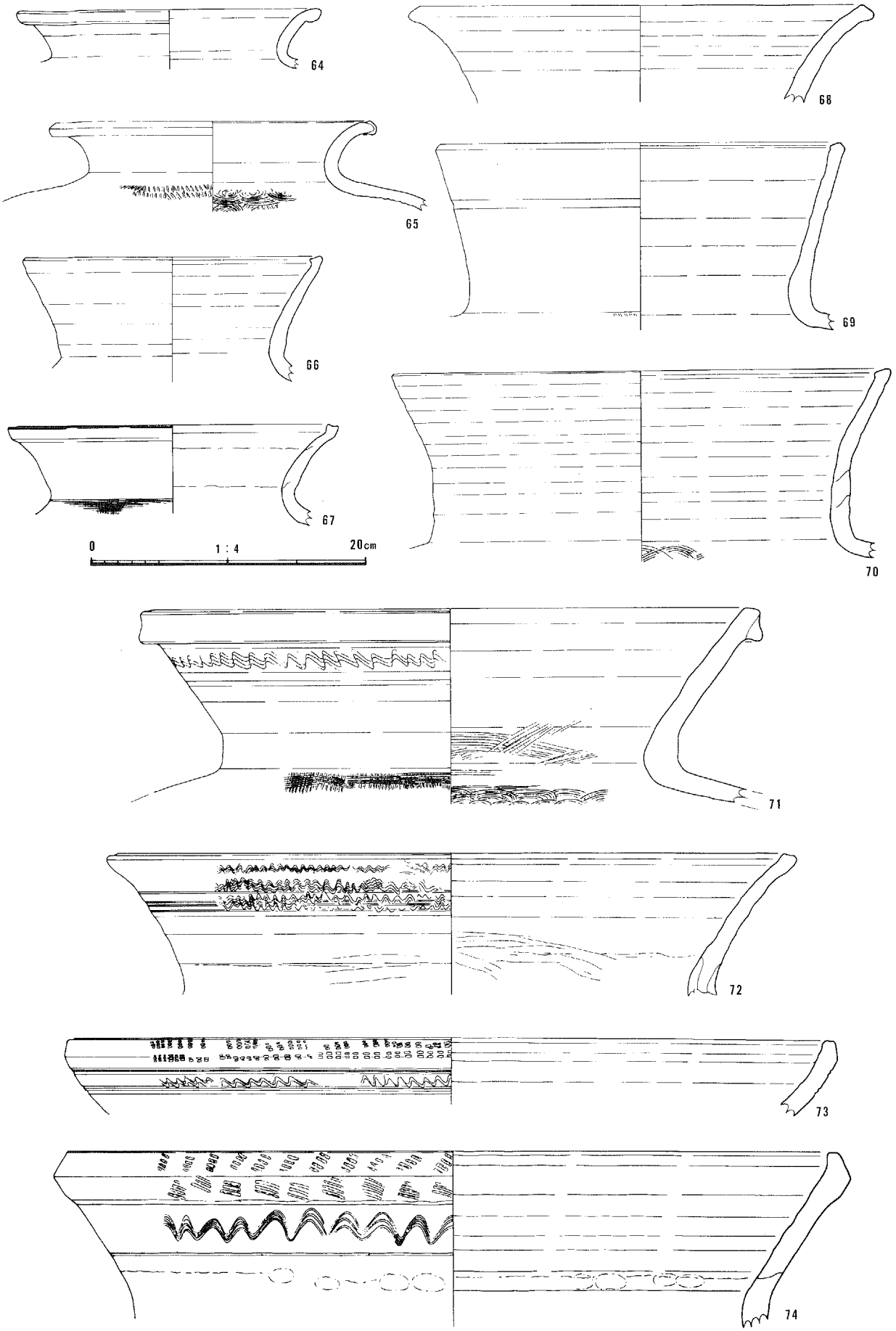


第69図　第Ⅰ区遺構・包含層出土遺物実測図



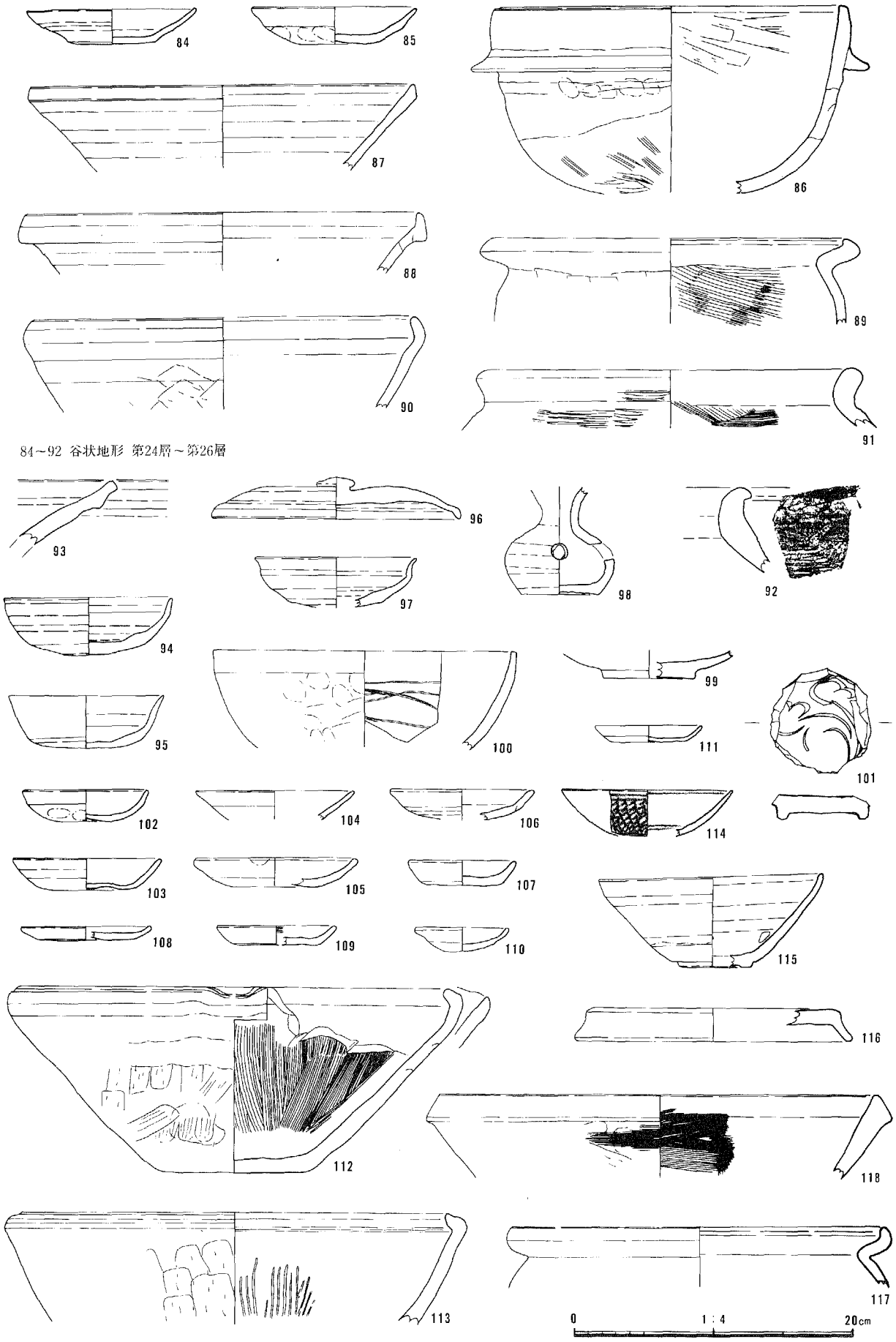
谷状地形 第24層～第26層

第70図　第II区遺構出土遺物実測図 1



谷状地形 第24層～第26層

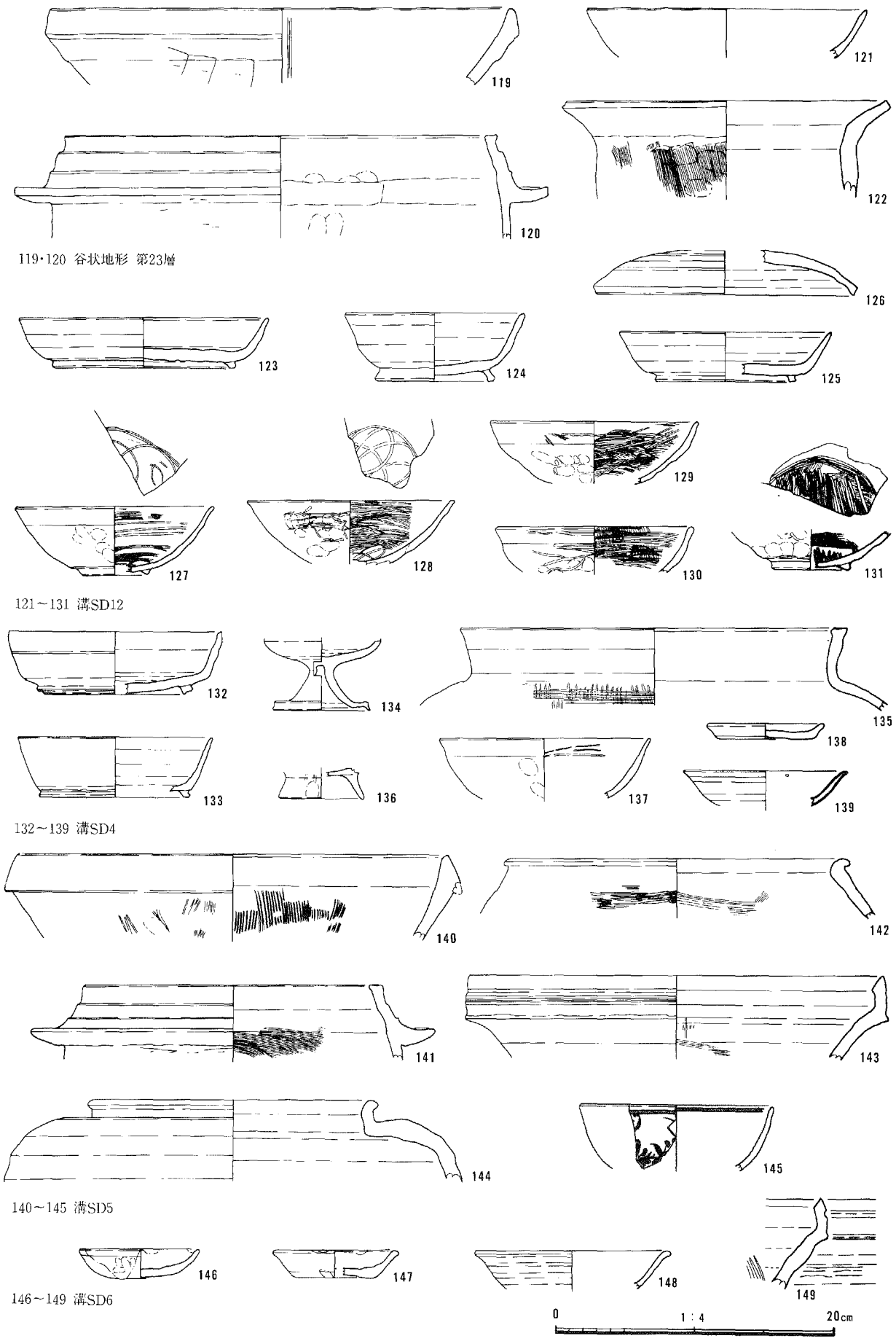
第71図　第II区遺構出土遺物実測図 2



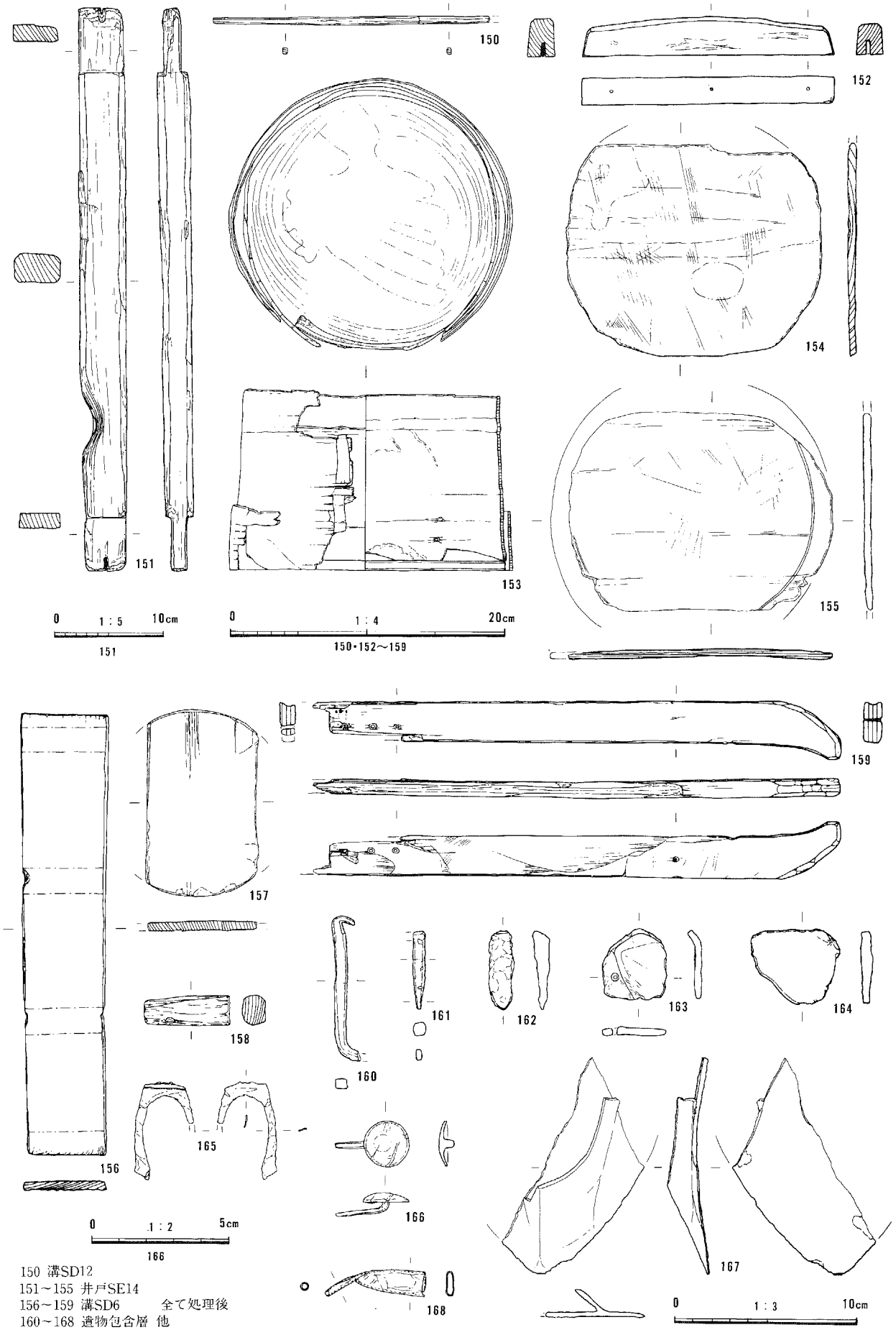
84～92 谷状地形 第24層～第26層

93～118 谷状地形第11～13層下の礫層、第22層、第23層

第72図　第II区遺構出土遺物実測図 3

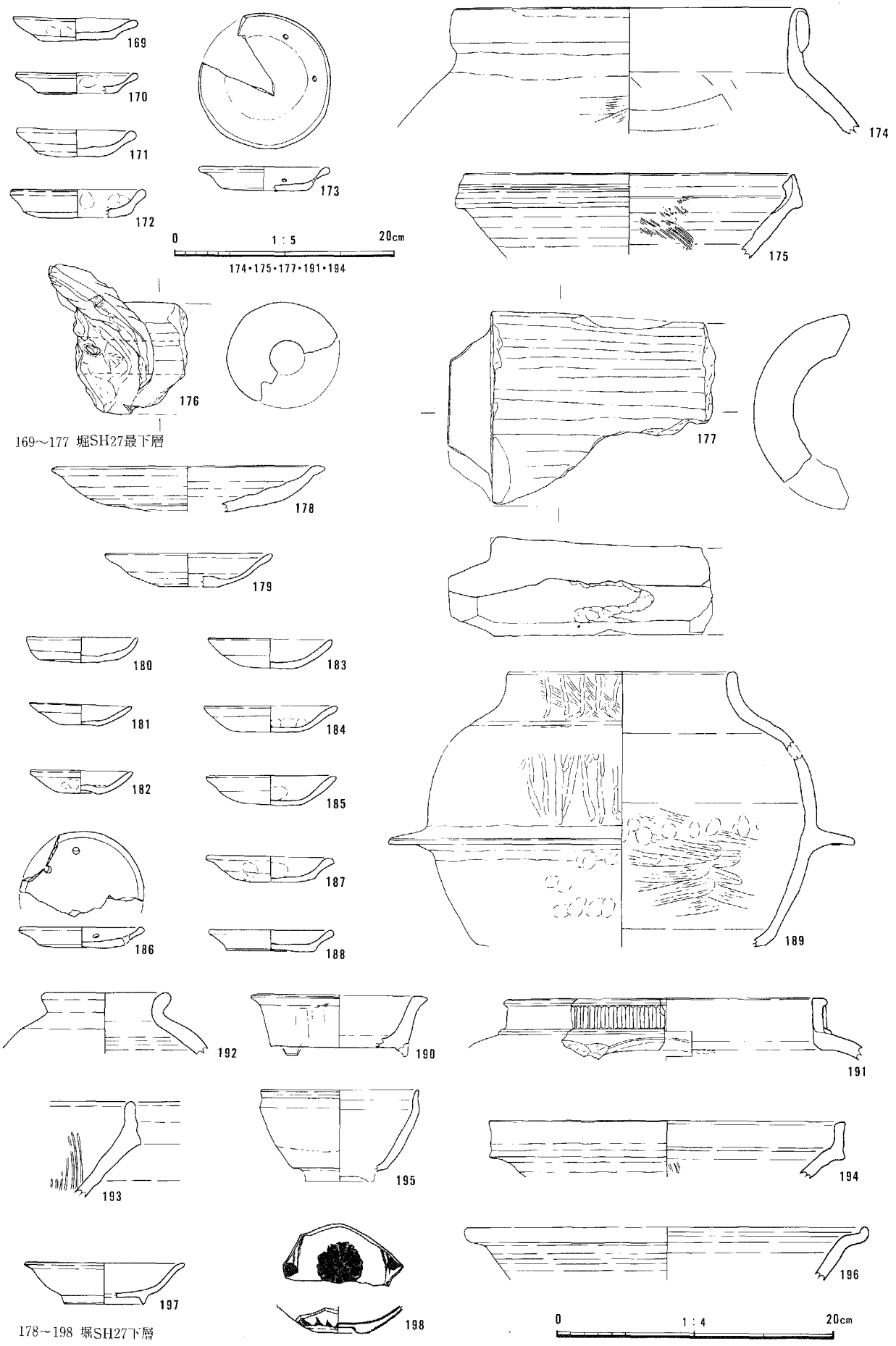


第73図　第II区遺構出土遺物実測図4

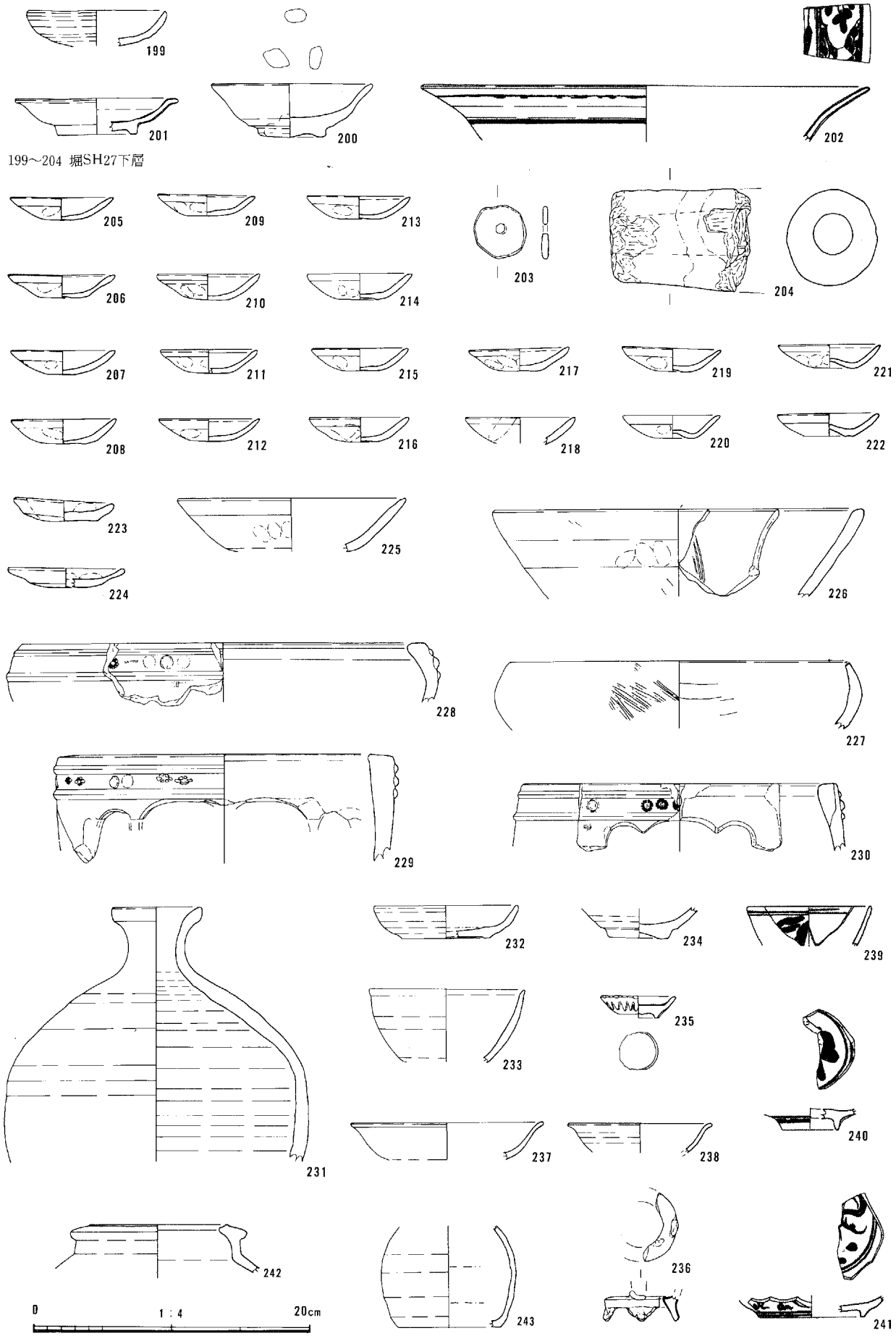


150 溝SD12
151～155 井戸SE14
156～159 溝SD6　　全て処理後
160～168 遺物包含層 他

第74図　第II区遺構出土遺物実測図 5



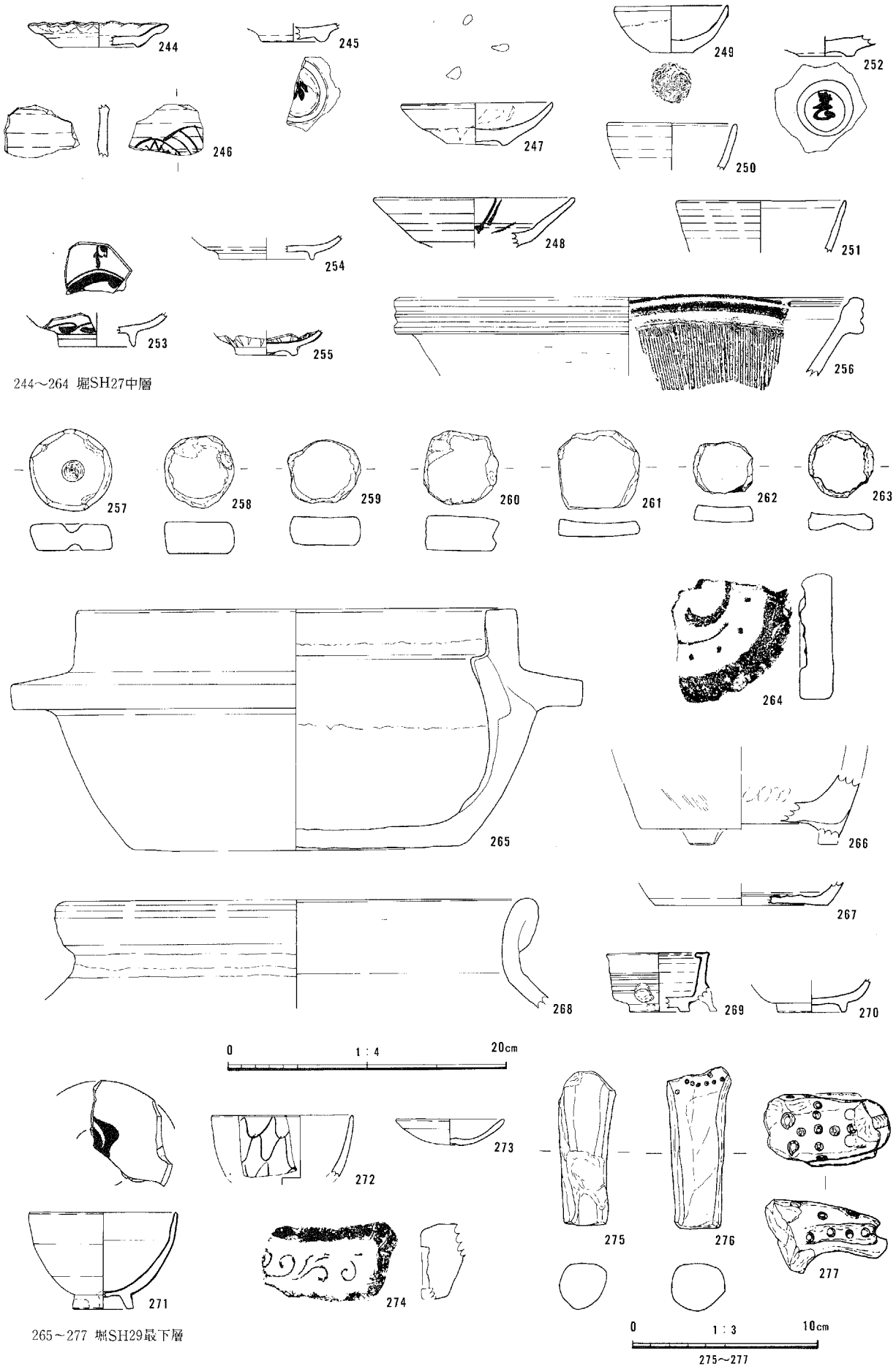
第75図　第II区遺構出土遺物実測図 6



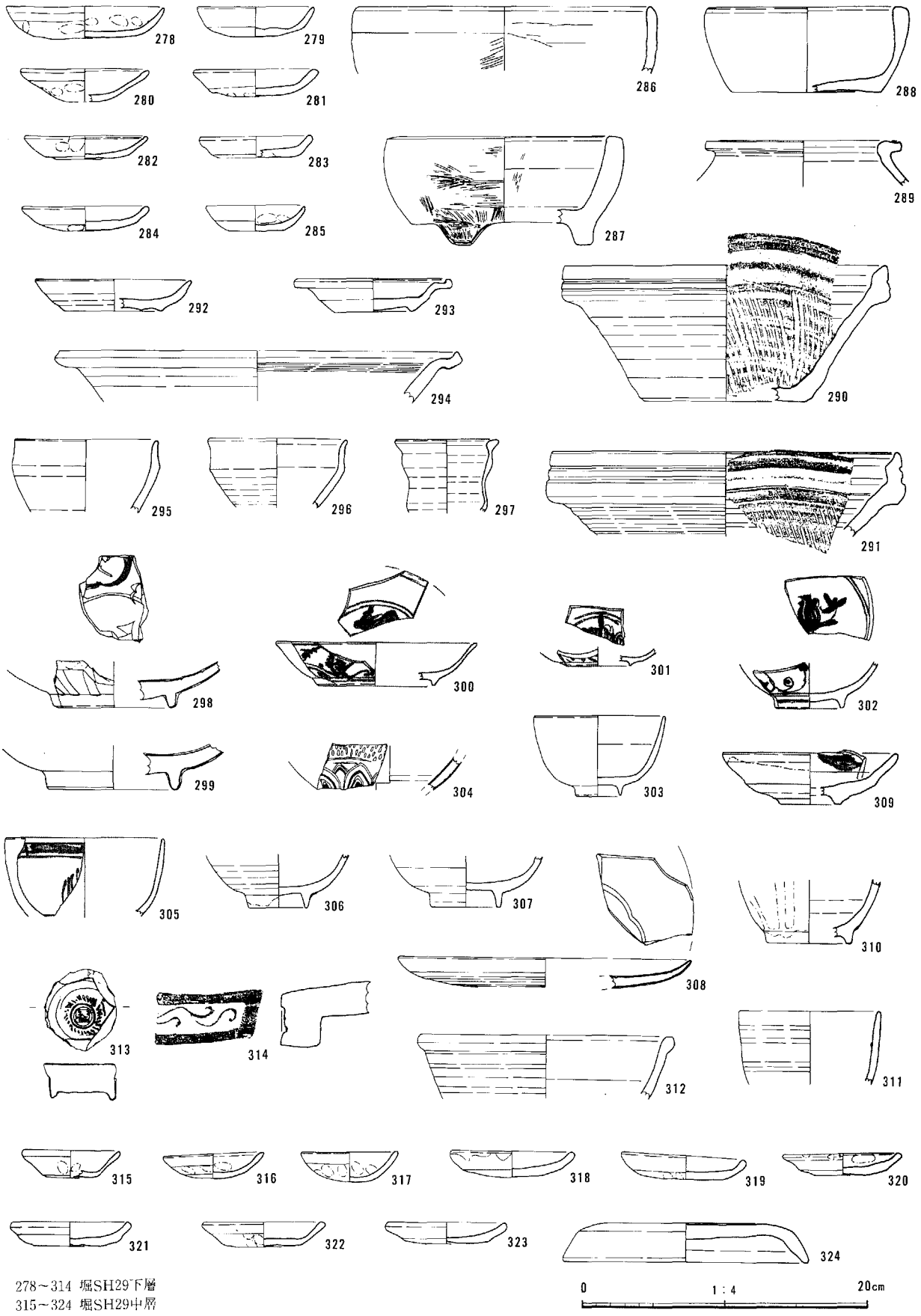
199～204 堀SH27下層

205～243 堀SH27中層

第76図　第II区遺構出土遺物実測図 7

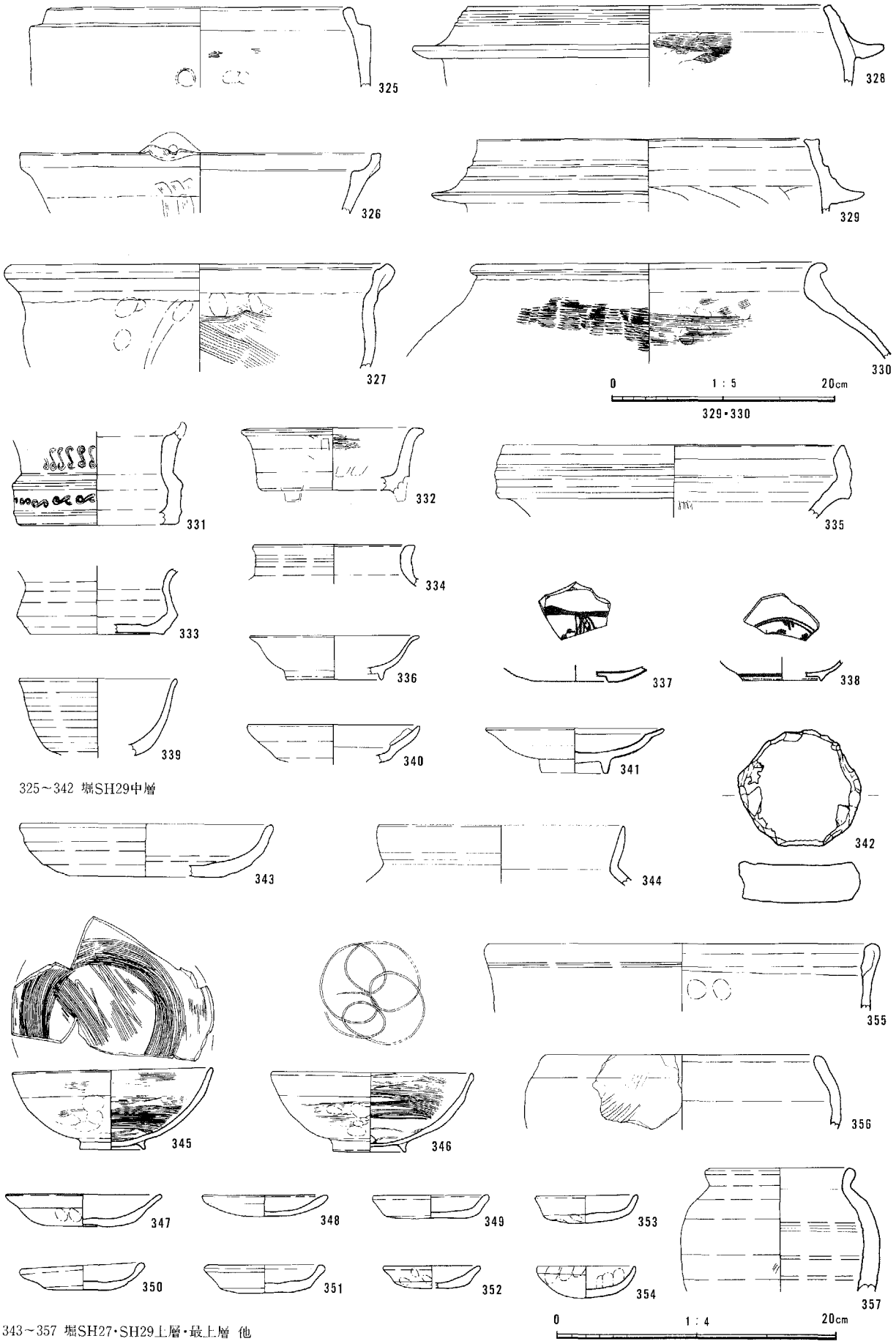


第77図　第II区遺構出土遺物実測図 8



278～314 堀SH29下層
315～324 堀SH29中層

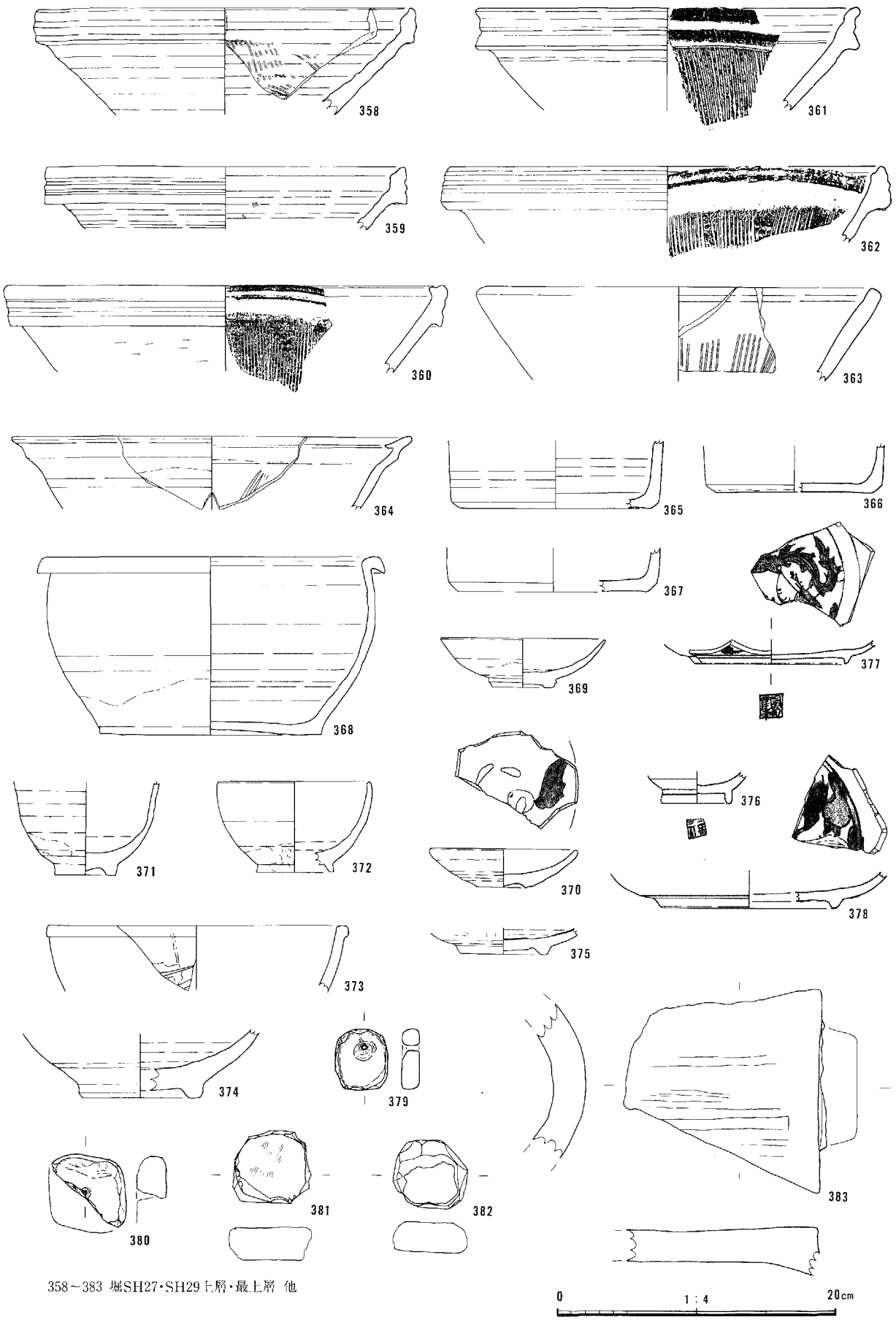
第78図　第II区遺構出土遺物実測図 9



325～342 堀SH29中層

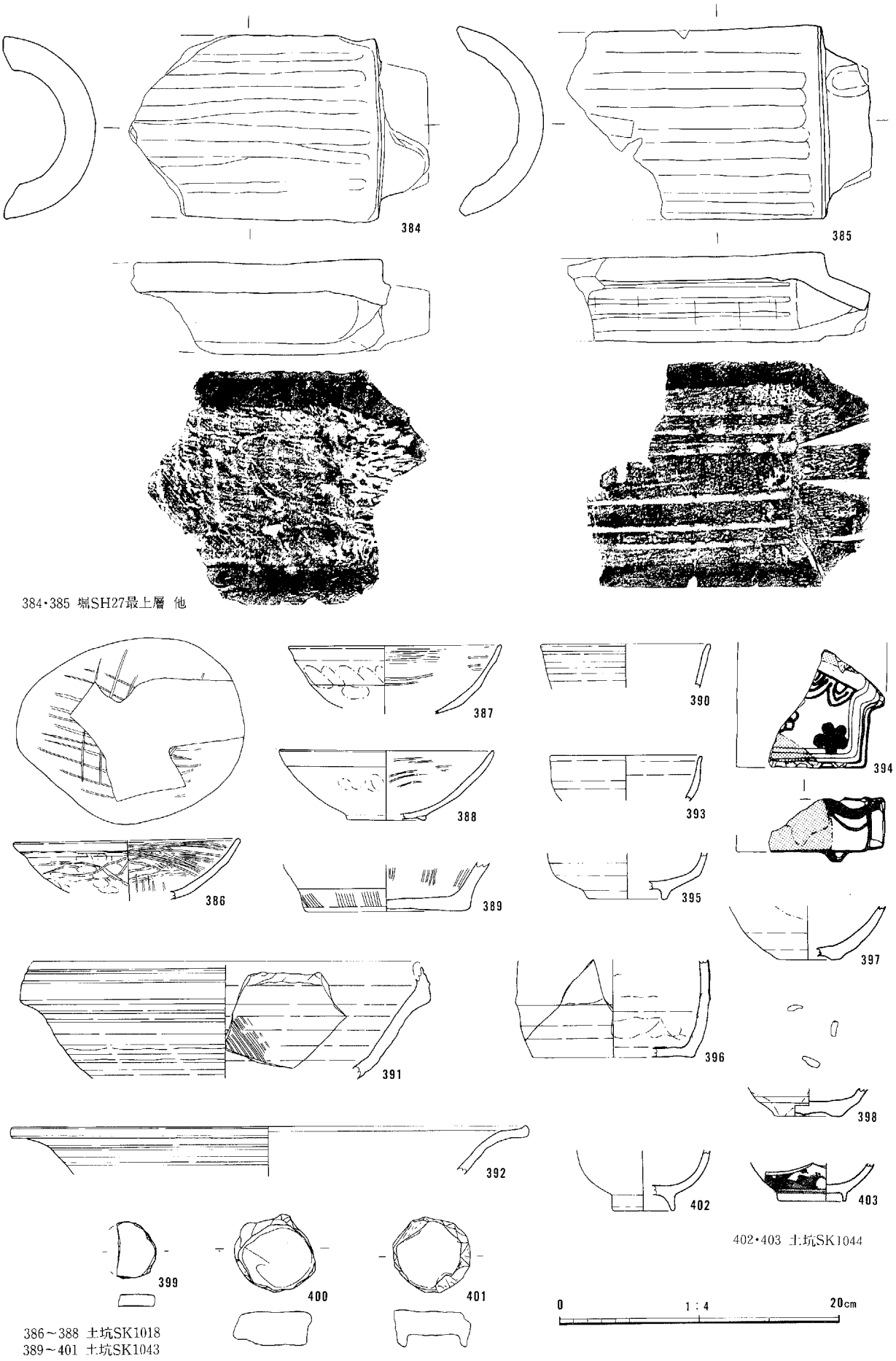
343～357 堀SH27・SH29上層・最上層 他

第79図　第II区遺構出土遺物実測図10

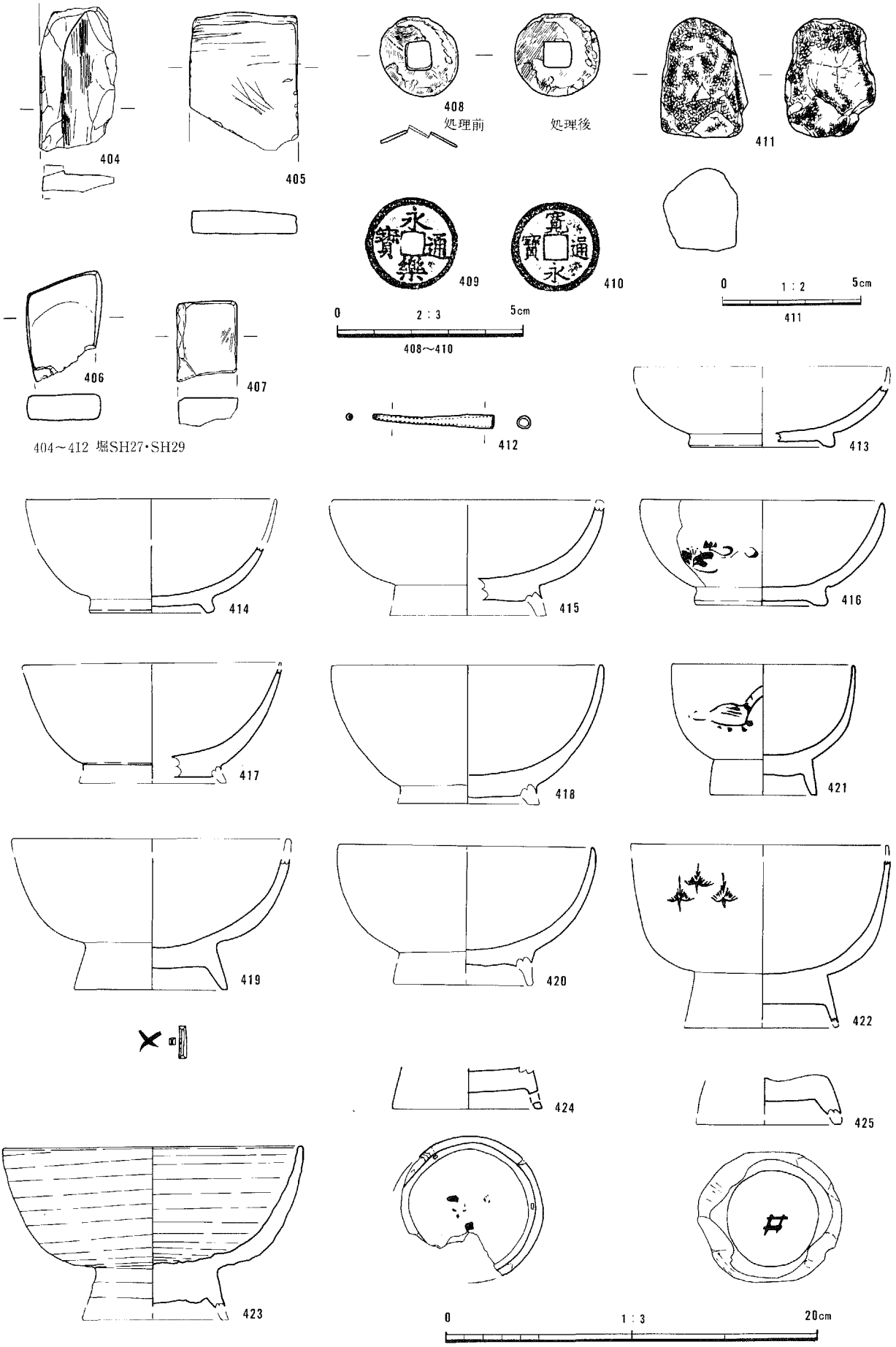


358～383 堀SH27・SH29上層・最上層 他

第80図　第II区遺構出土遺物実測図11



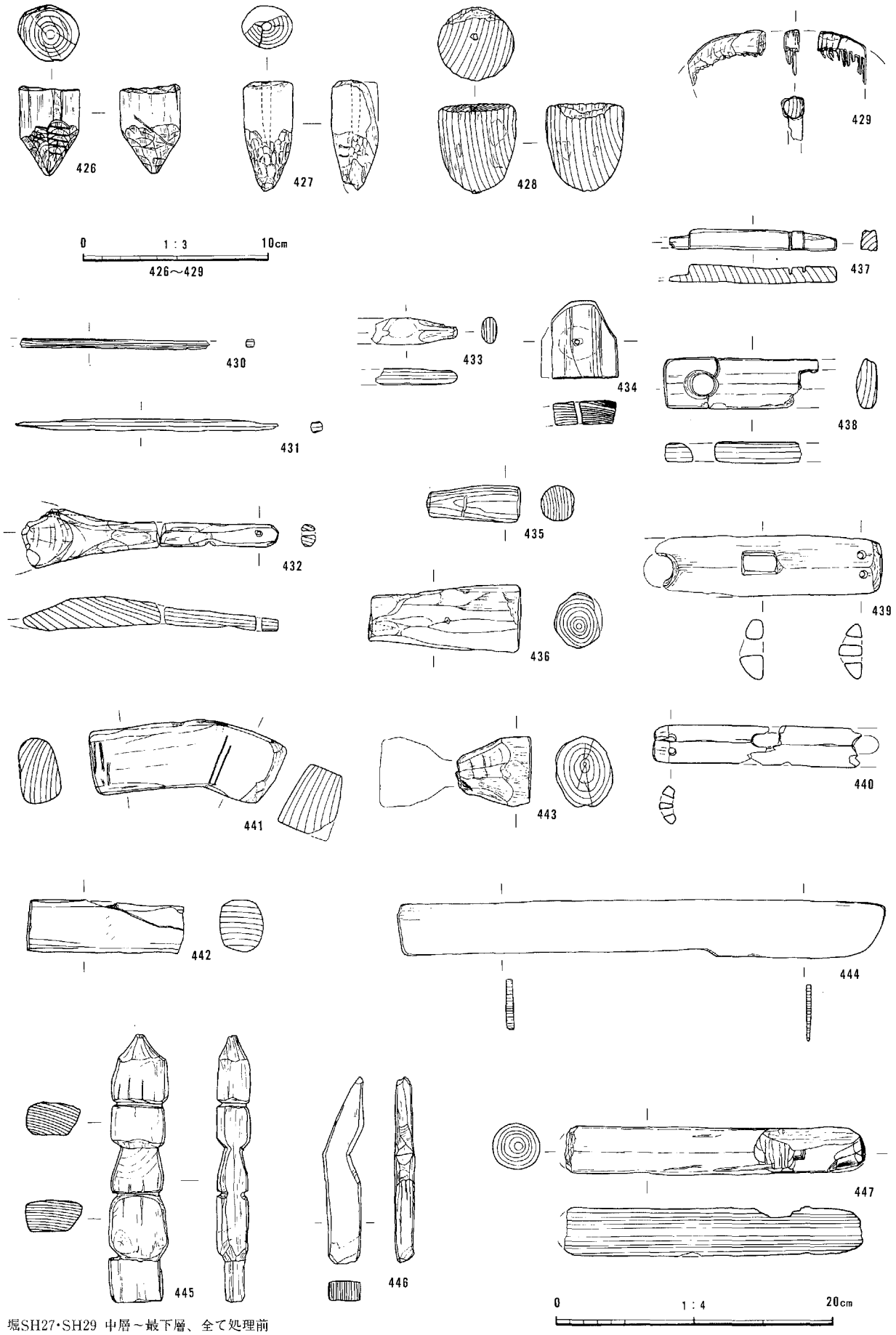
第81図　第II区遺構出土遺物実測図12



404～412 堀SH27・SH29

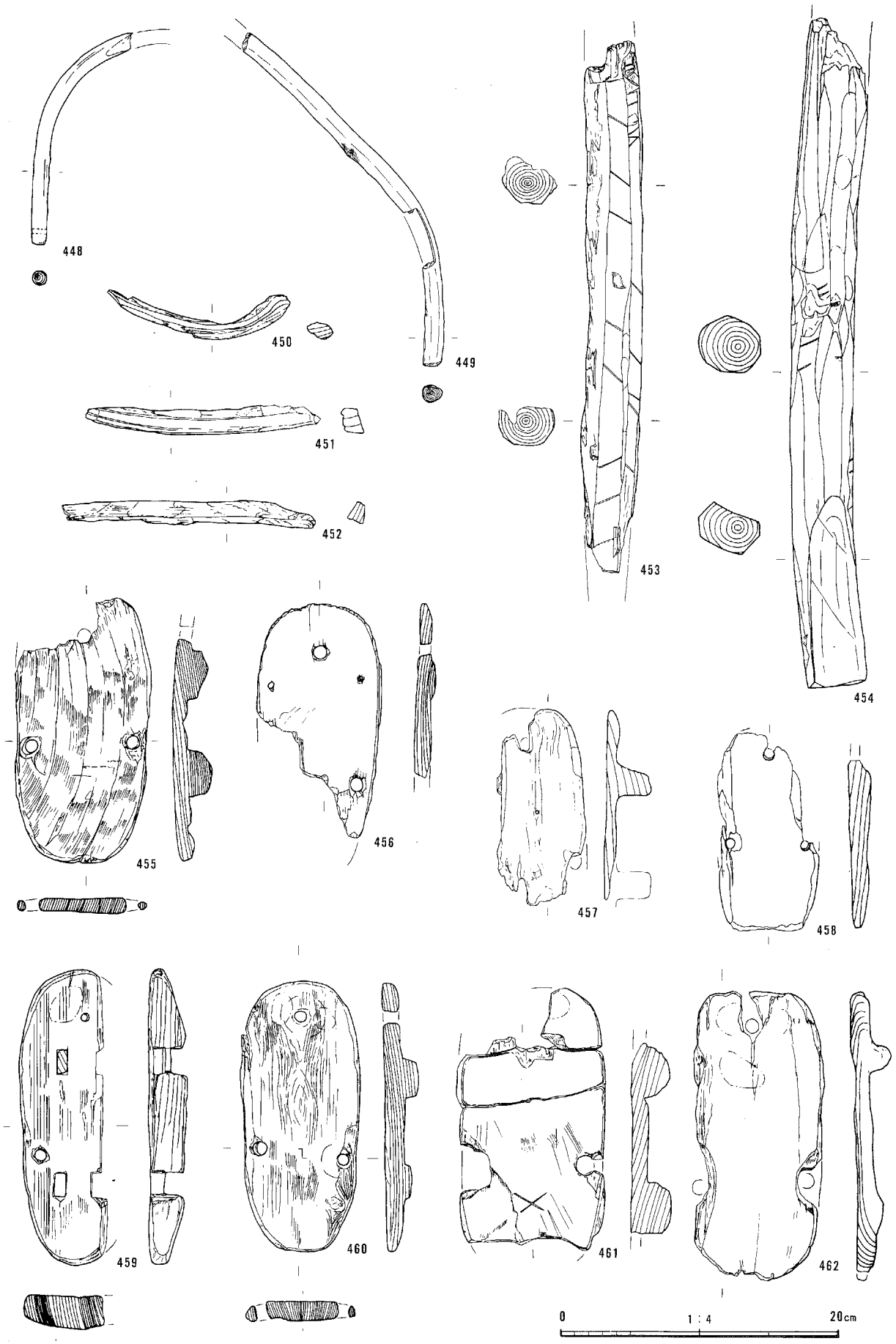
413～425 堀SH27・SH29中層～最下層 漆器・全て処理前

第82図　第II区遺構出土遺物実測図13



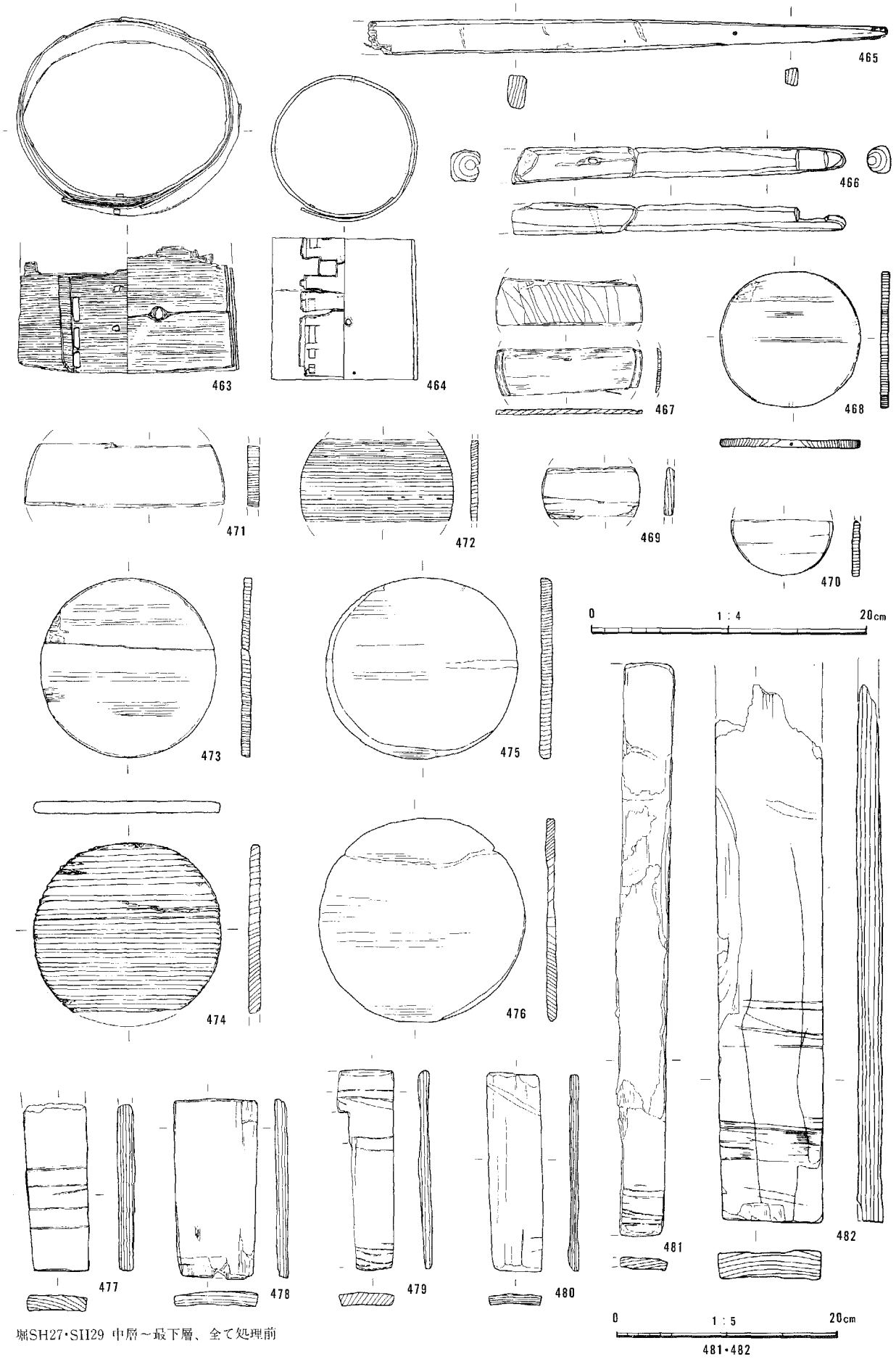
堀SH27・SH29 中層～最下層、全て処理前

第83図　第II区遺構出土遺物実測図14



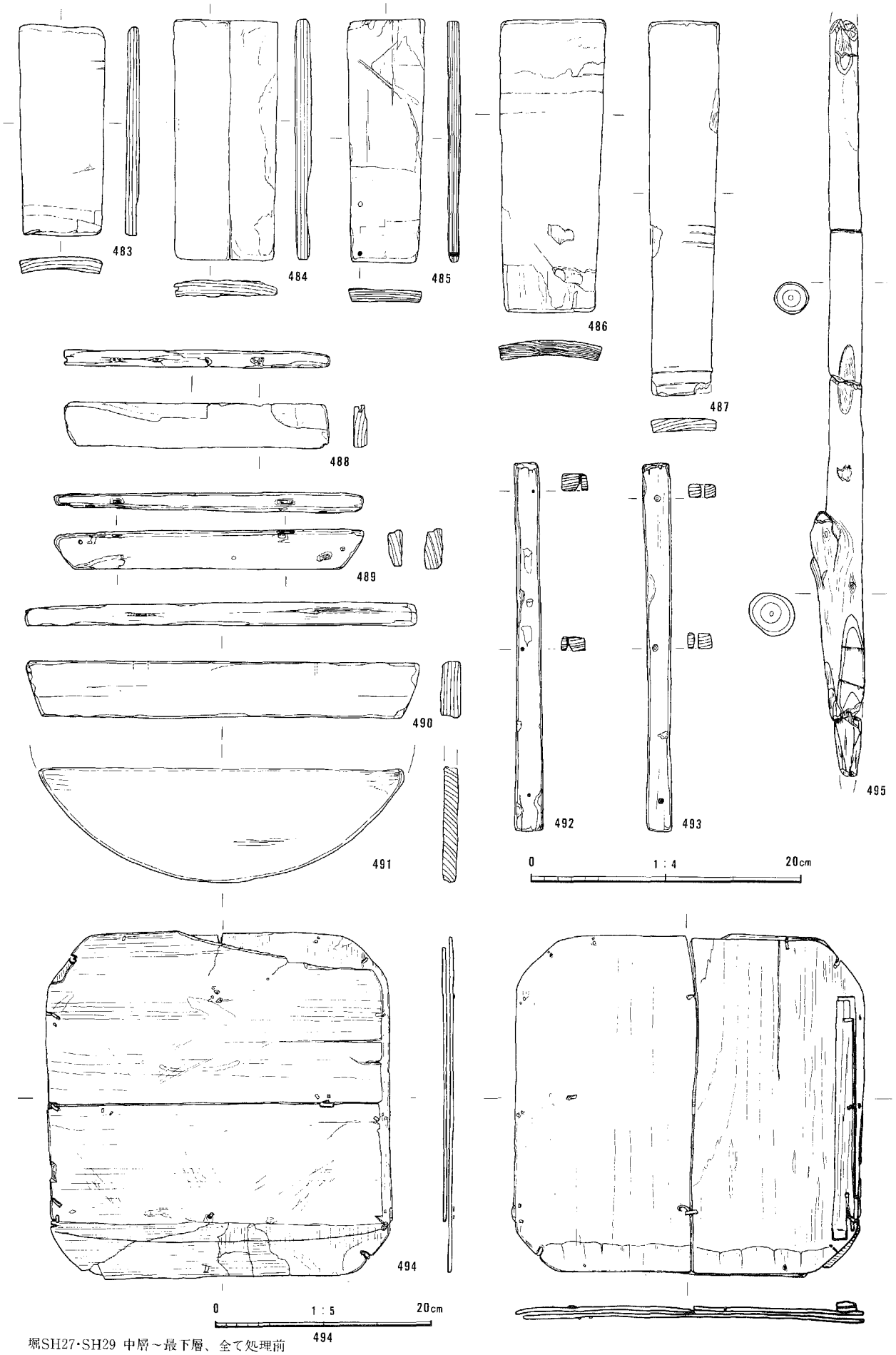
堀SH27・SII29 中層～最下層、456・457のみ処理後

第84図　第II区遺構出土遺物実測図15



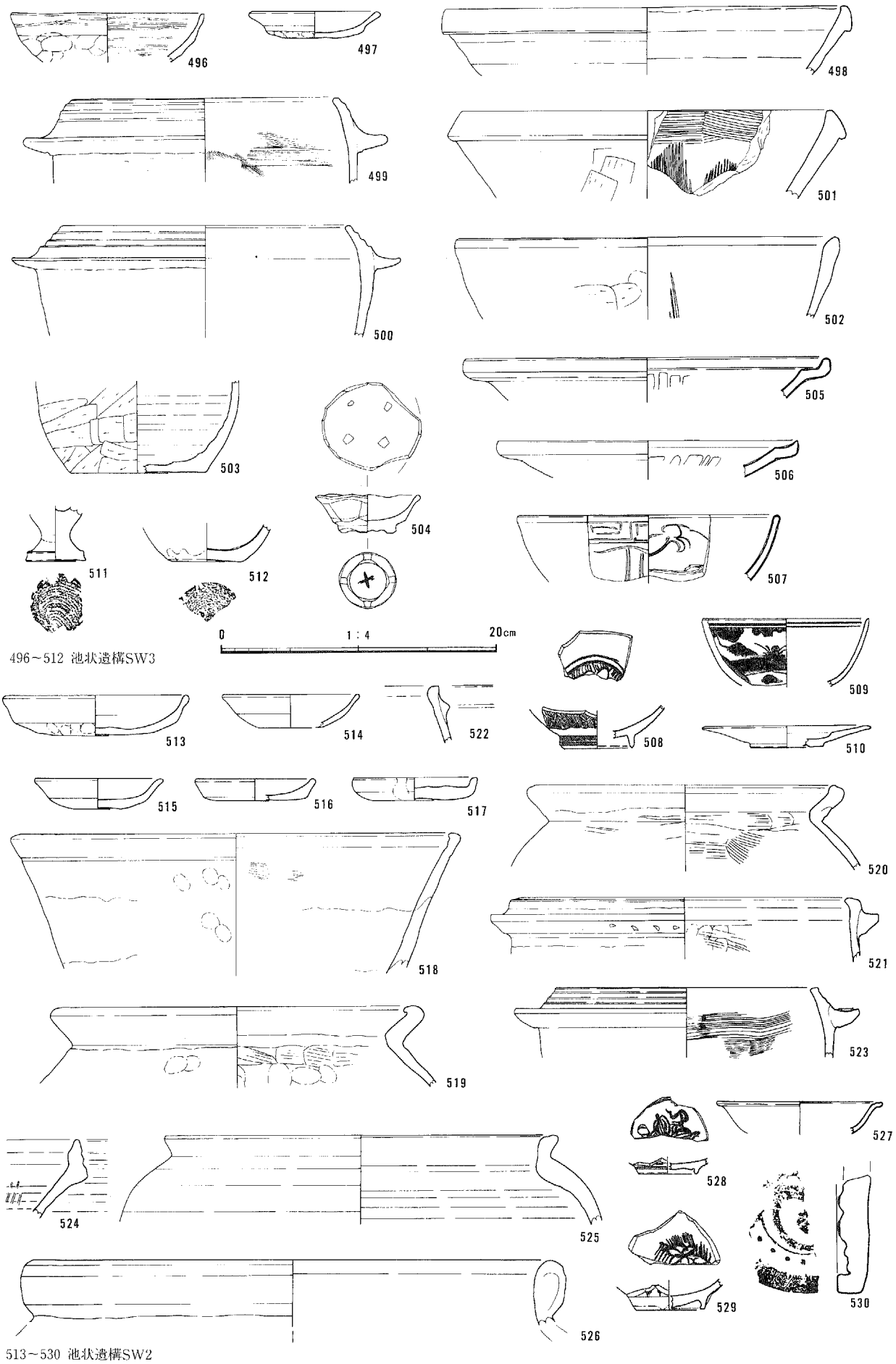
堀SH27・SH29 中層～最下層、全て処理前

第85図　第II区遺構出土遺物実測図16

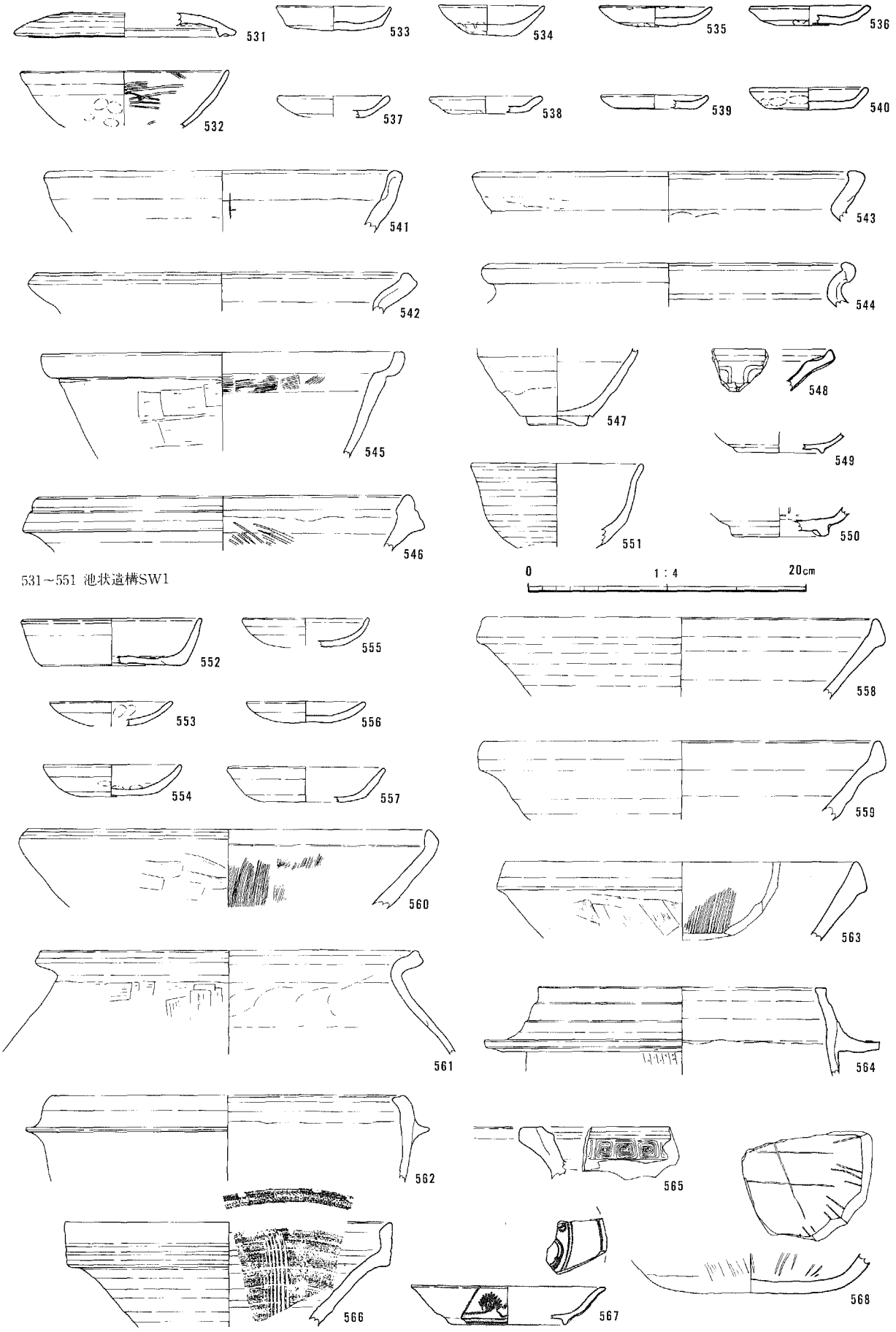


堀SH27・SH29 中層～最下層、全て処理前

第86図　第II区遺構出土遺物実測図17



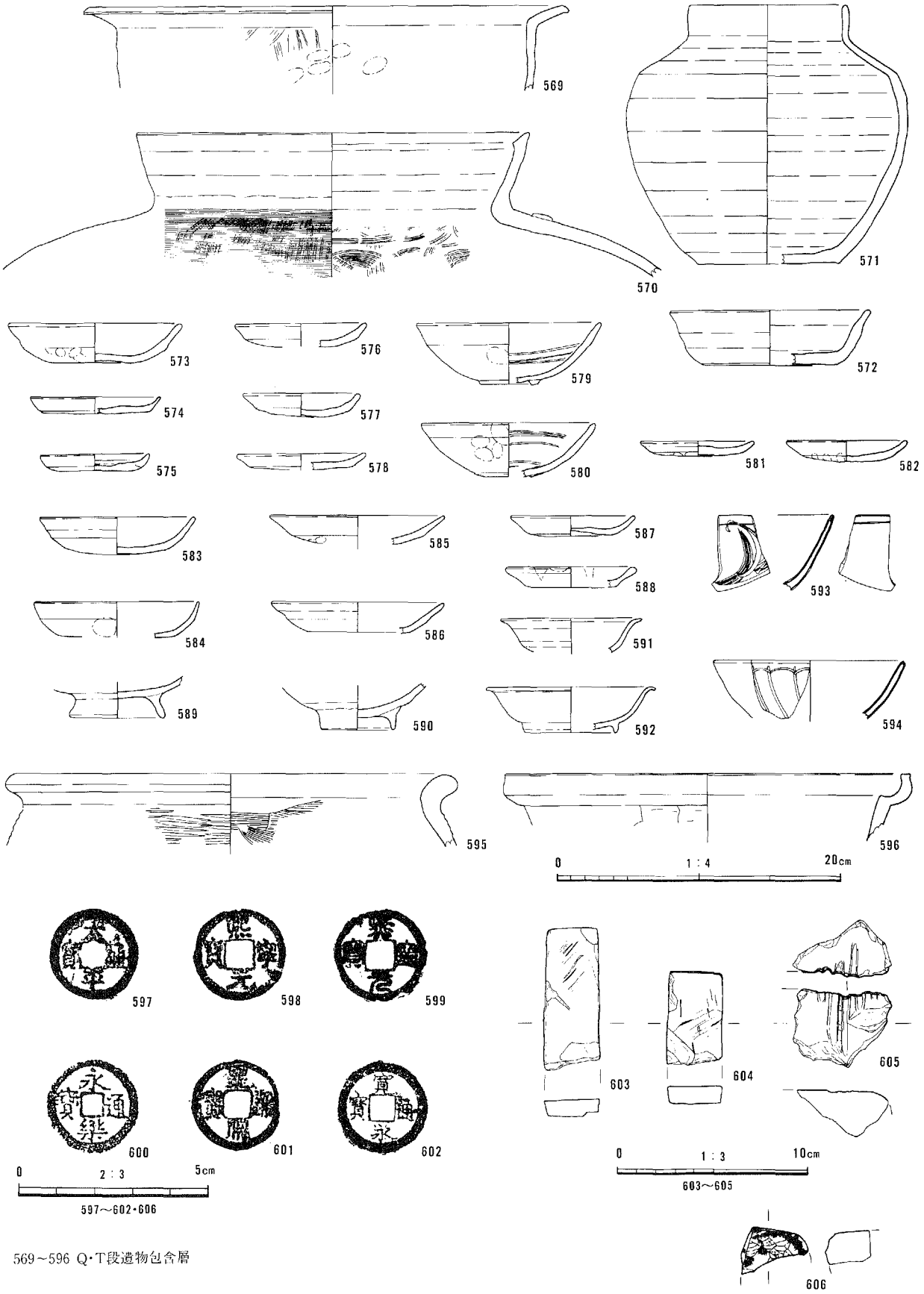
第87図　第II区遺構出土遺物実測図18



531～551 池状遺構SW1

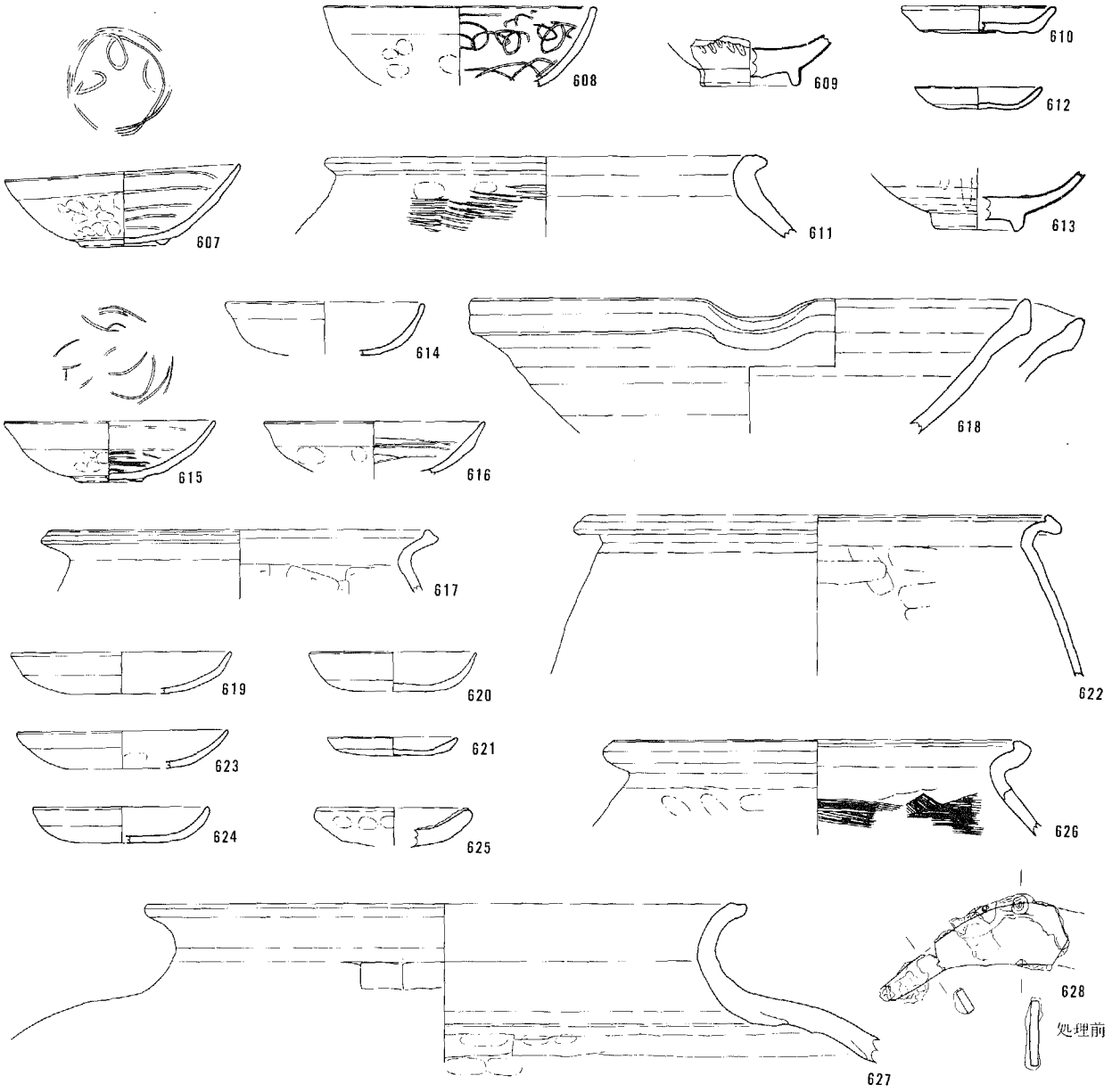
552～568 R段整地土 他

第88図　第II区遺構出土遺物実測図19

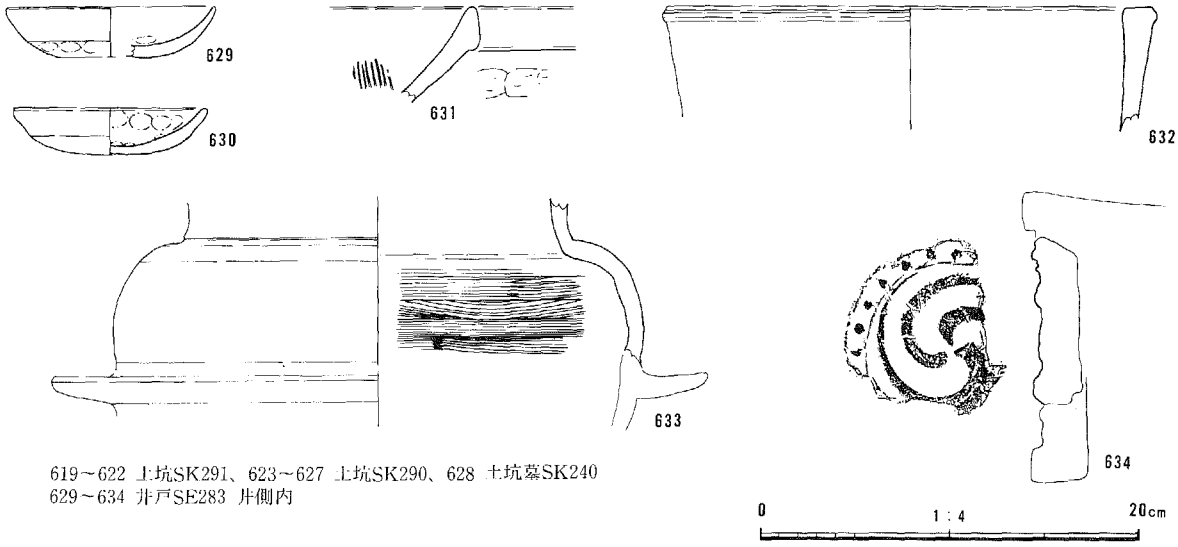


569～596 Q・T段遺物包含層

第89図　第II区包含層他出土遺物実測図

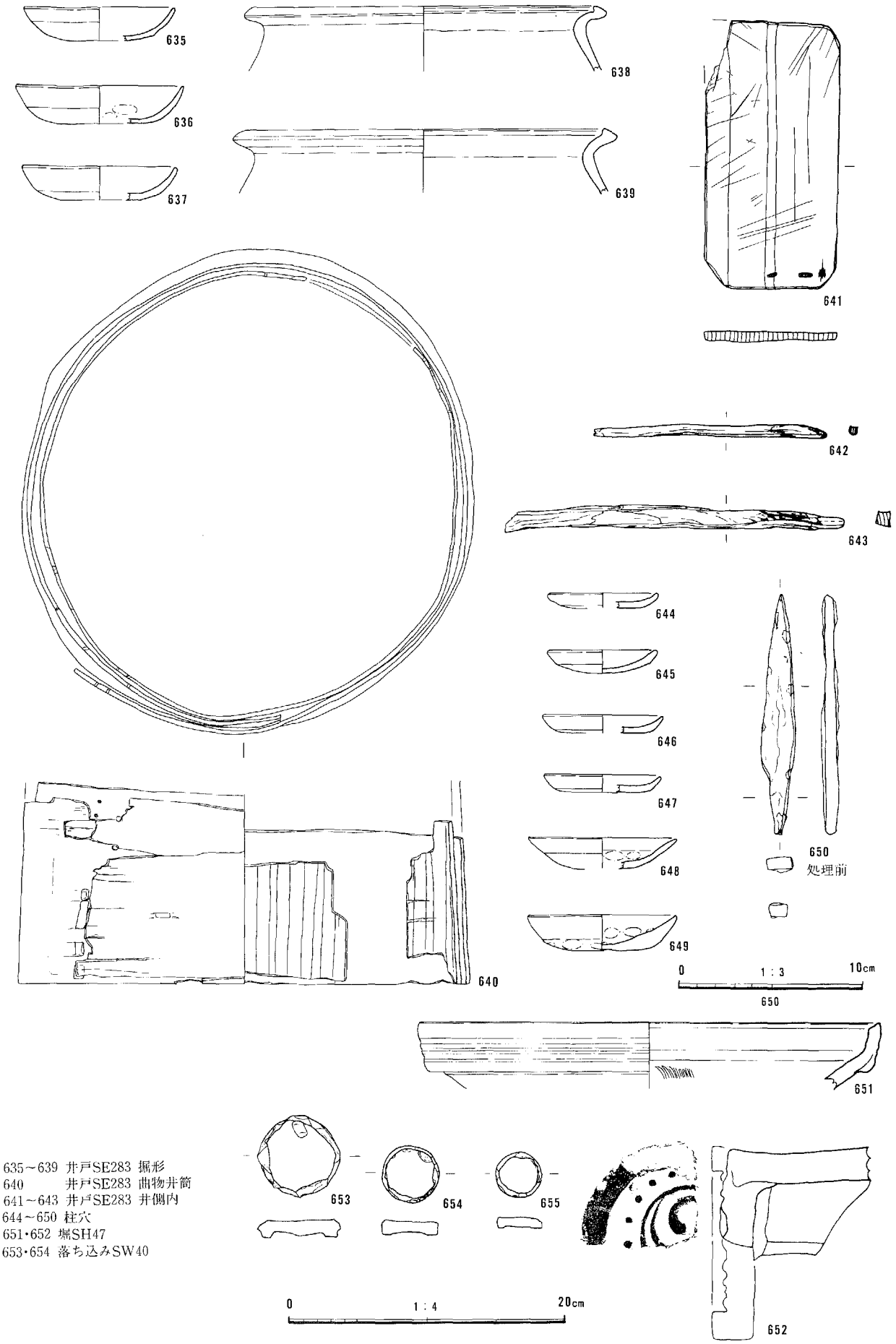


607～609 溝SD38、610・611 溝SD39、612 溝SD289、613 溝SD198
614 土坑SK234、615 土坑墓SK241、616 土坑SK244、617 土坑SK285、618 土坑SK237



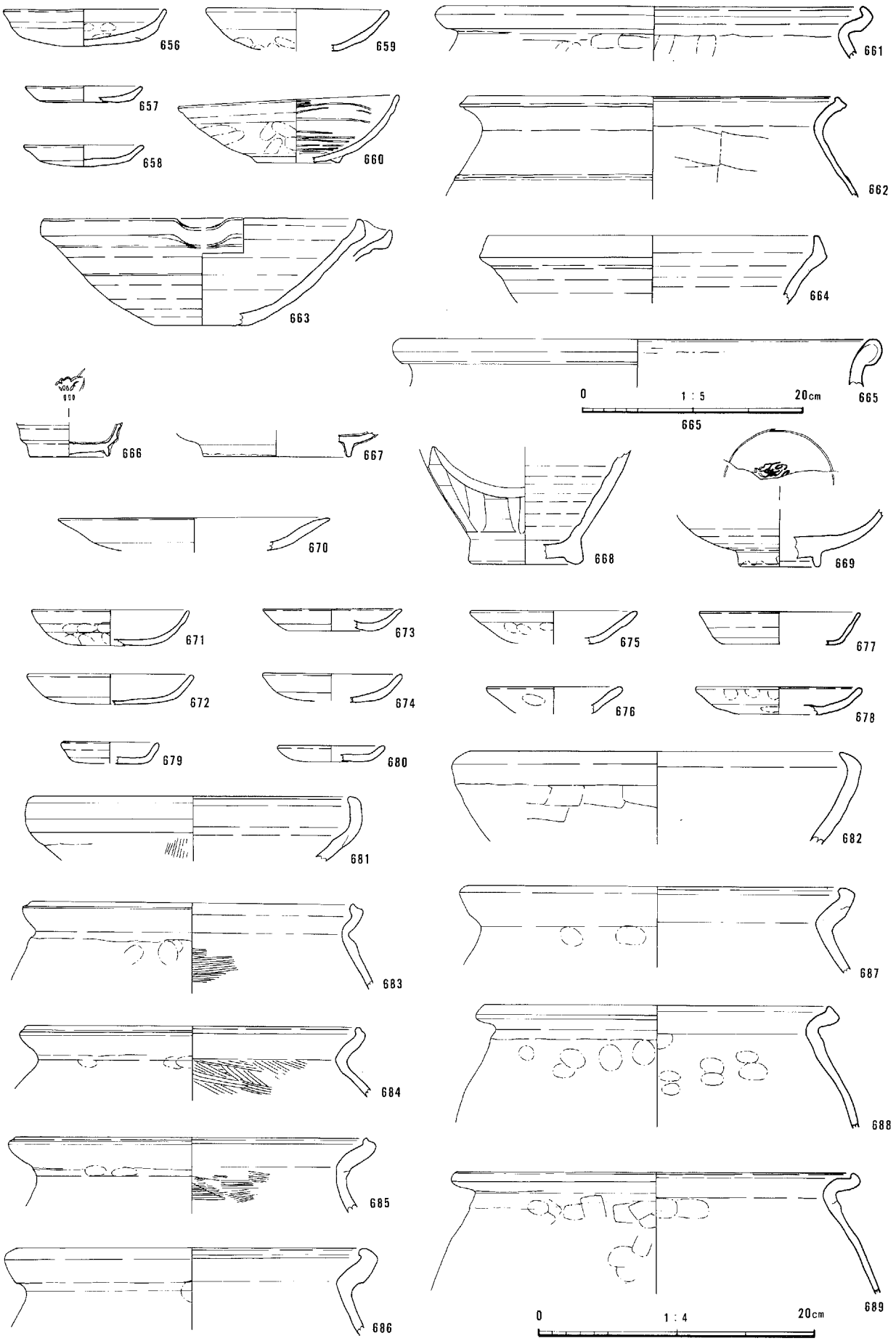
619～622 土坑SK291、623～627 土坑SK290、628 土坑墓SK240
629～634 井戸SE283 井側内

第90図　第Ⅲ区遺構出土遺物実測図1



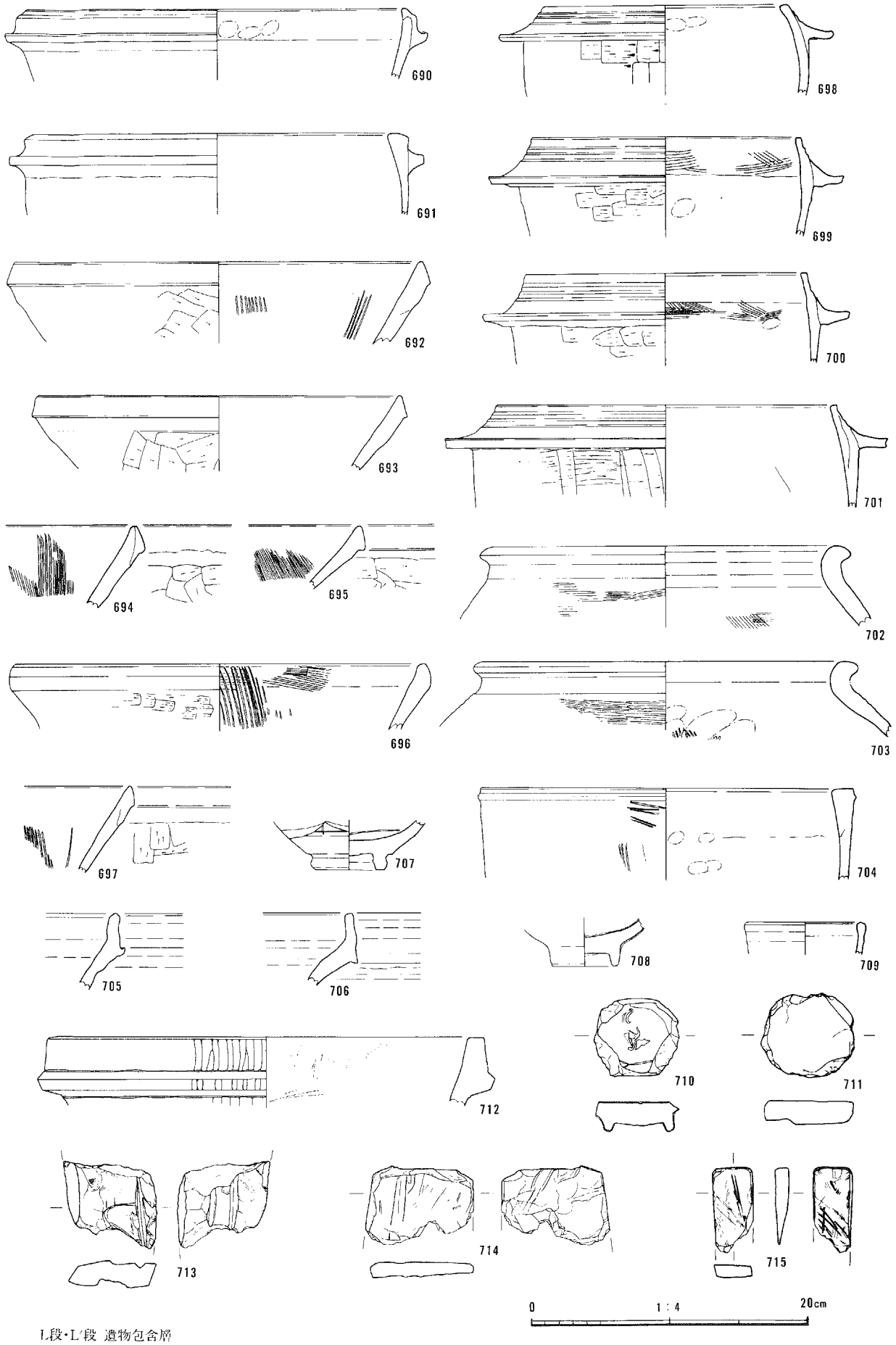
635～639 井戸SE283 掘形
640 井戸SE283 曲物井筒
641～643 井戸SE283 井側内
644～650 柱穴
651・652 堀SH47
653・654 落ち込みSW40

第91図 第Ⅲ区遺構出土遺物実測図 2



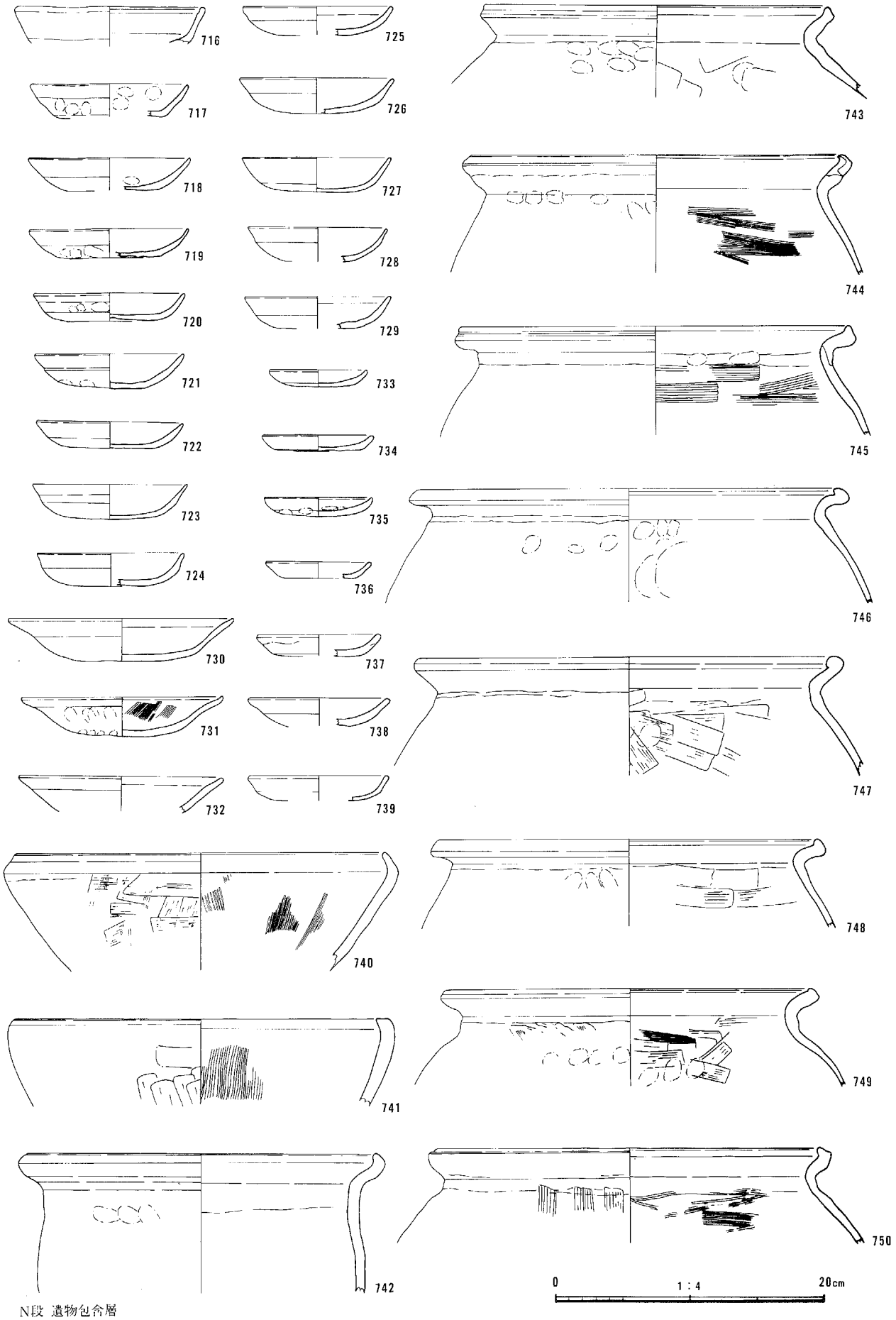
L段・L′段 遺物包含層

第92図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図 1

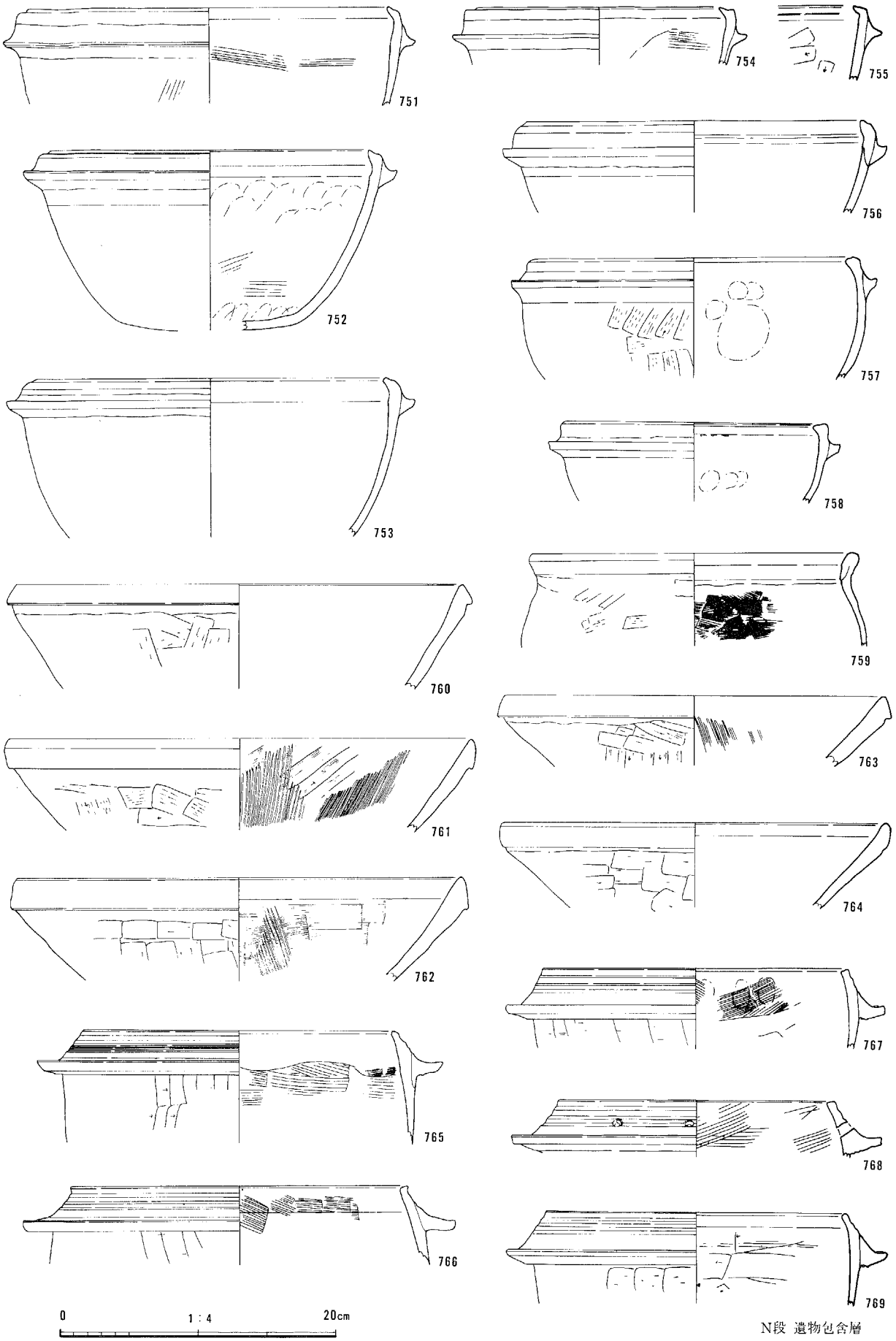


L段・L′段 遺物包含層

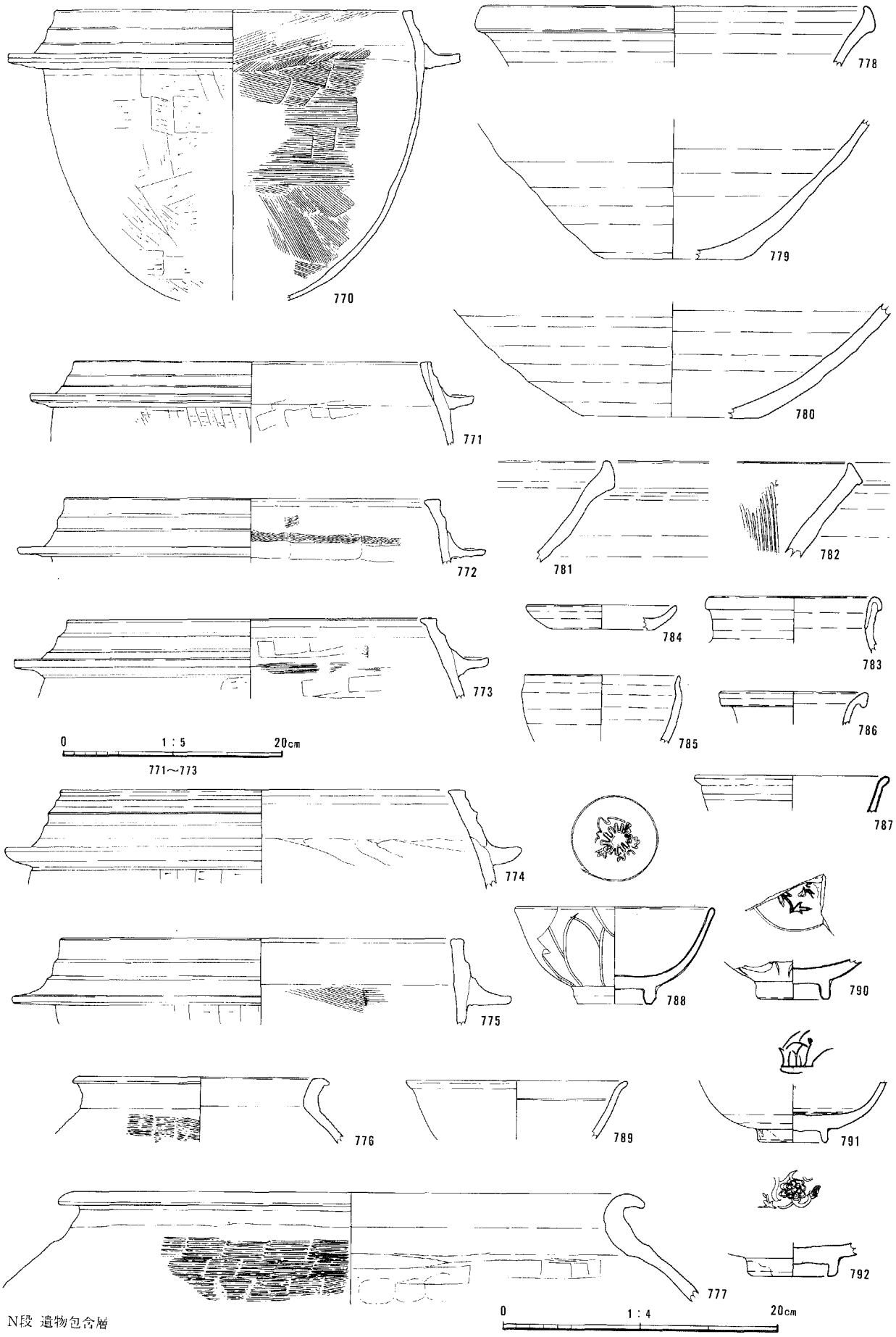
第93図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図 2



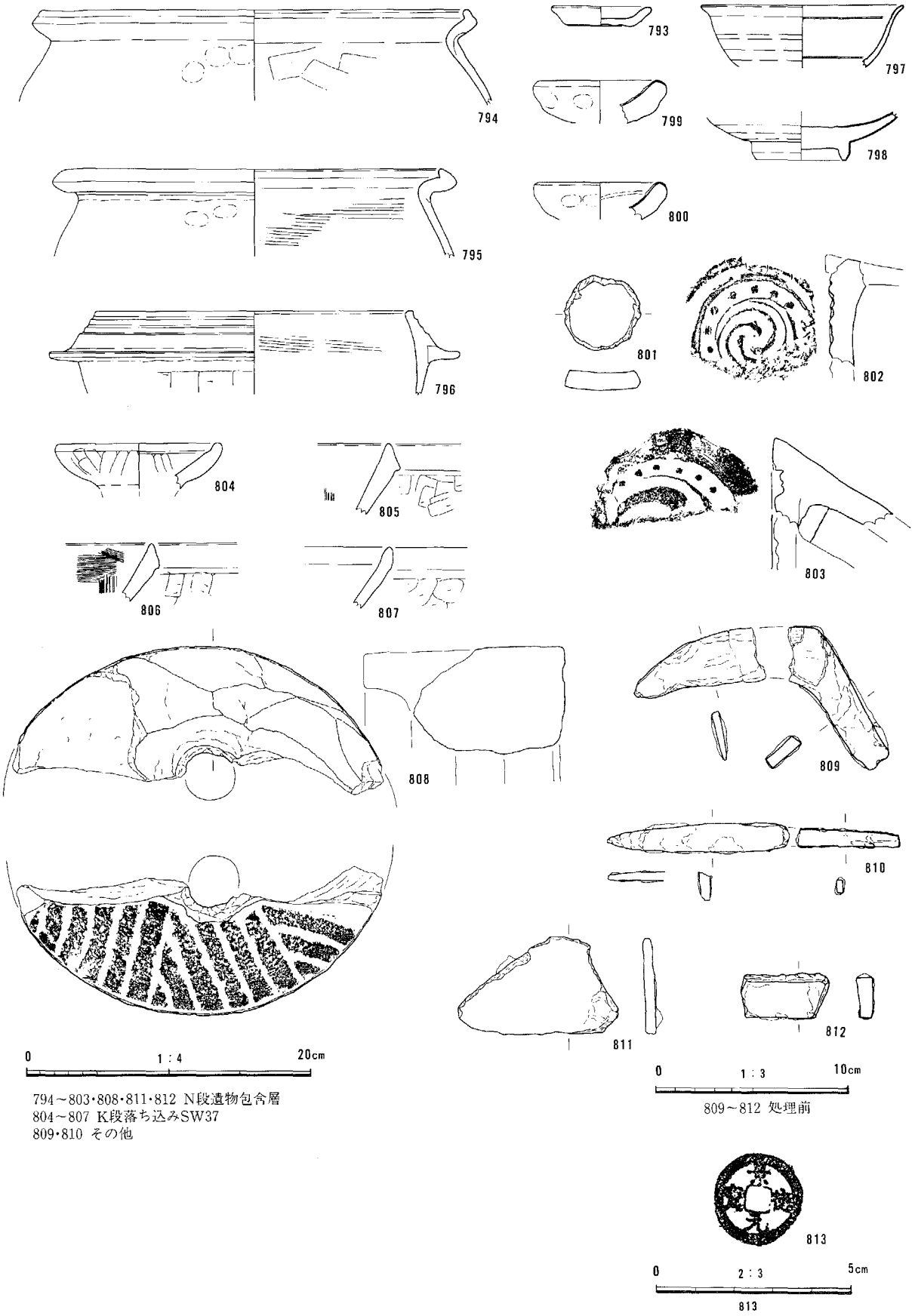
第94図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図 3



第95図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図 4



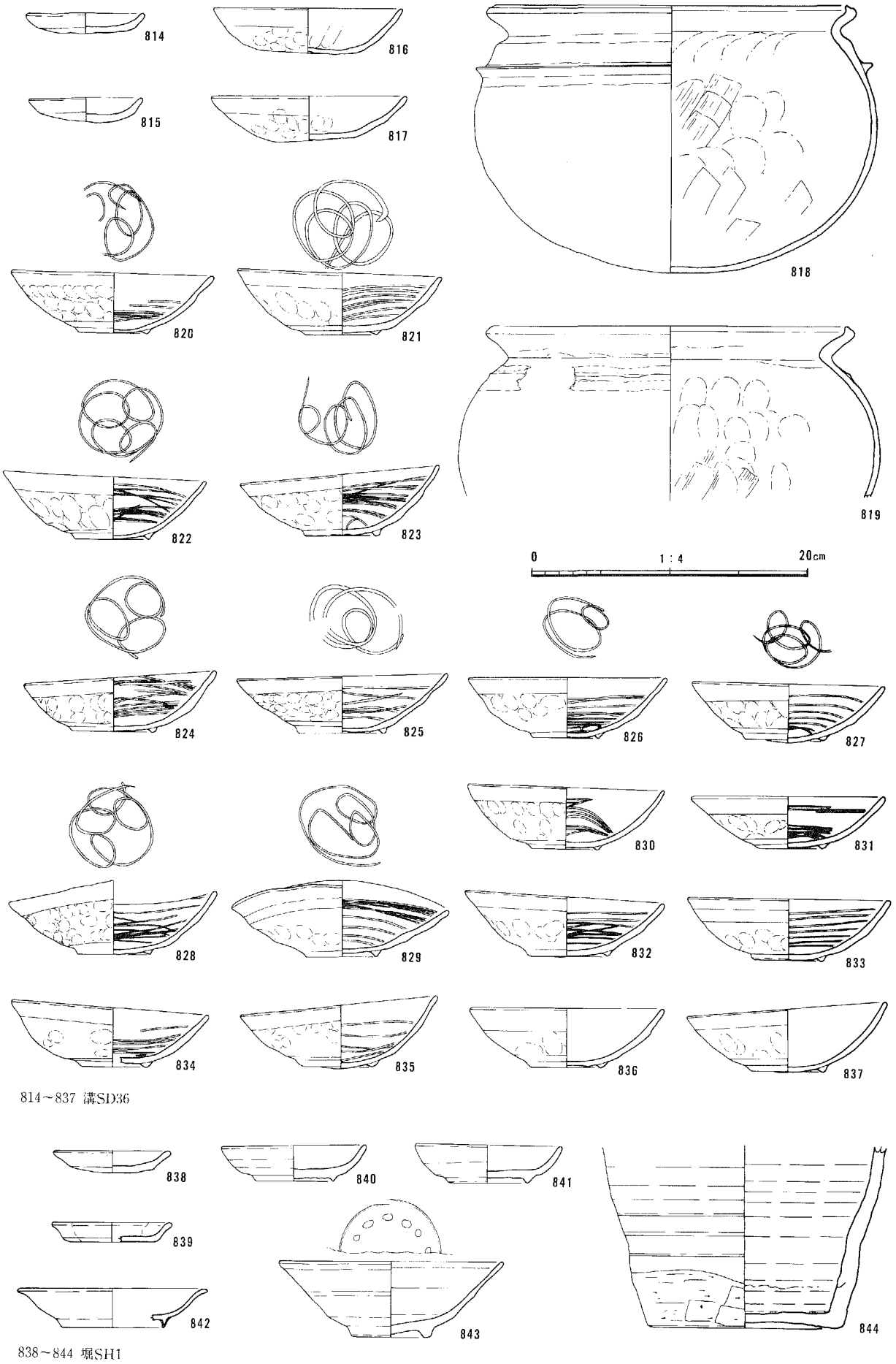
第96図　第Ⅲ区包含層出土遺物実測図 5



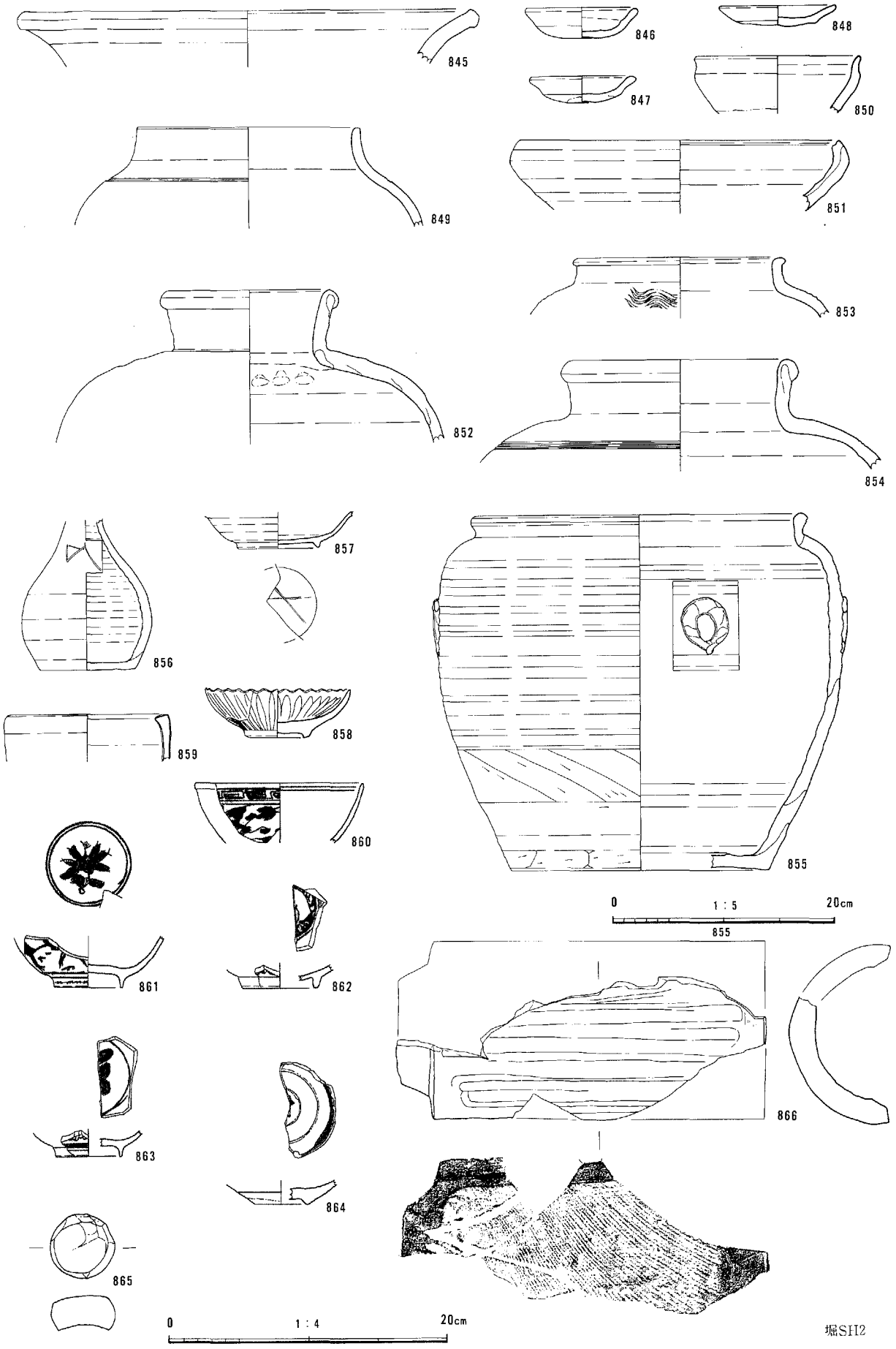
794～803・808・811・812 N段遺物包含層
804～807 K段落ち込みSW37
809・810 その他

809～812 処理前

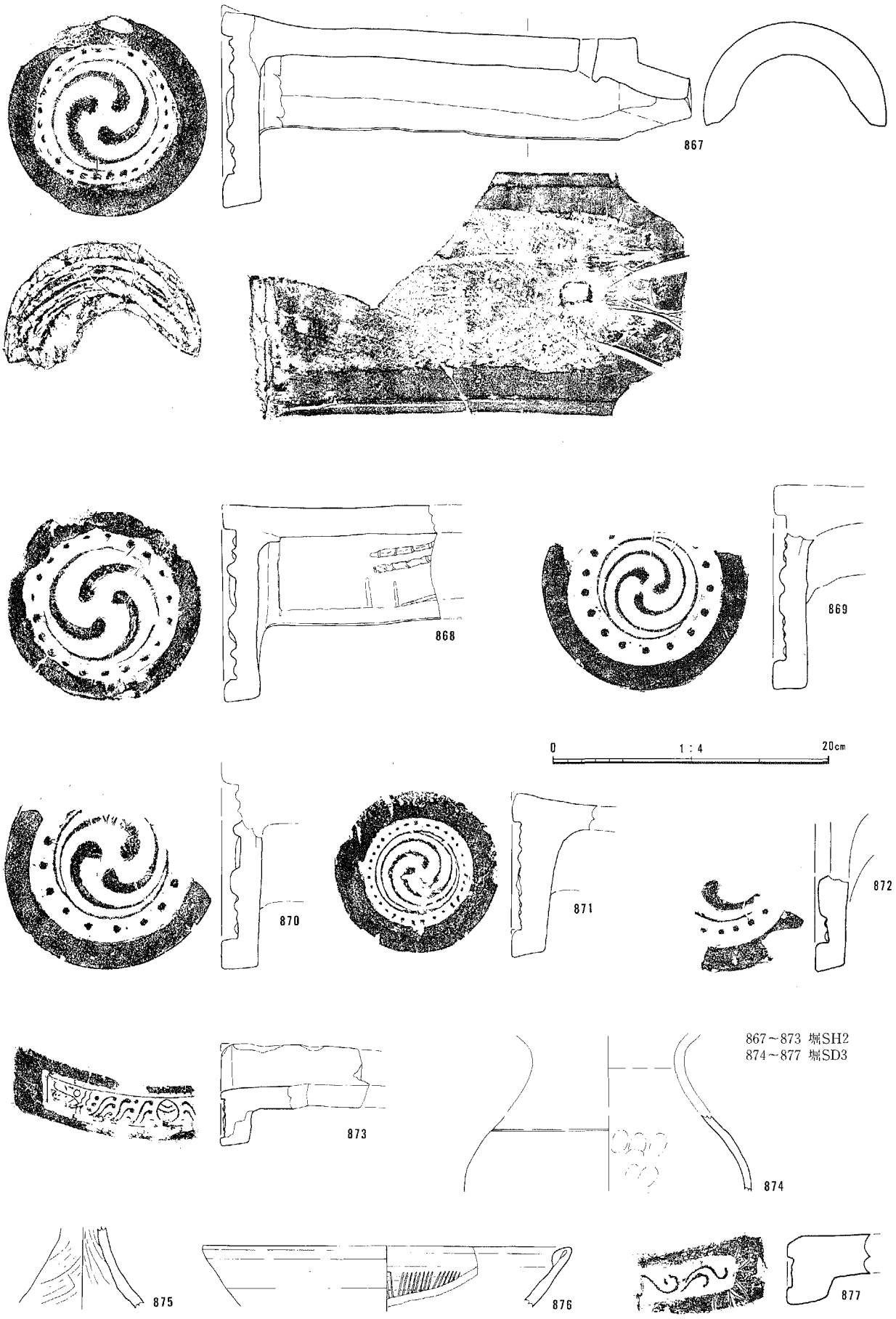
第97図　第Ⅲ区遺構・包含層出土遺物実測図



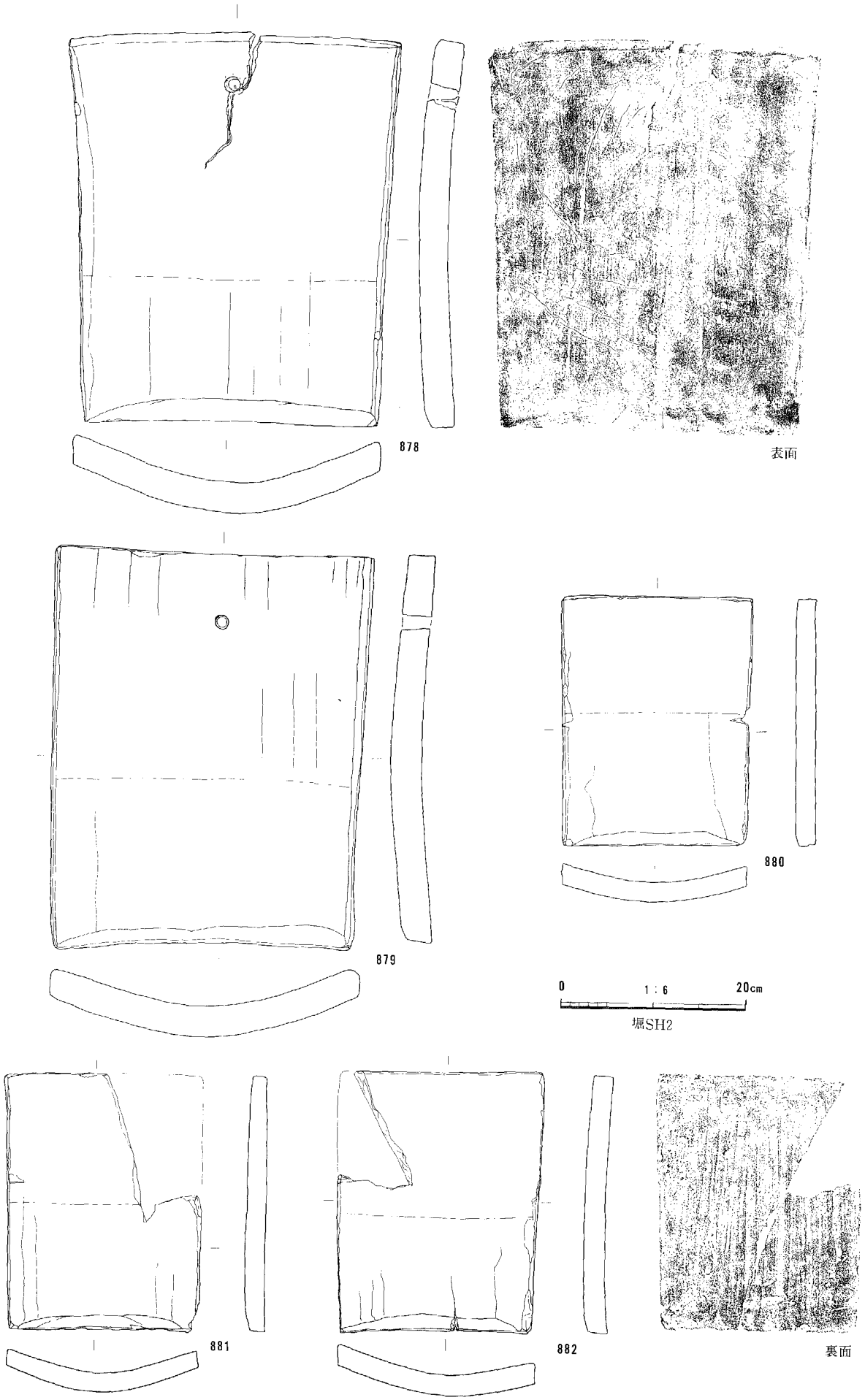
第98図　第Ⅲ区遺構出土遺物実測図 1



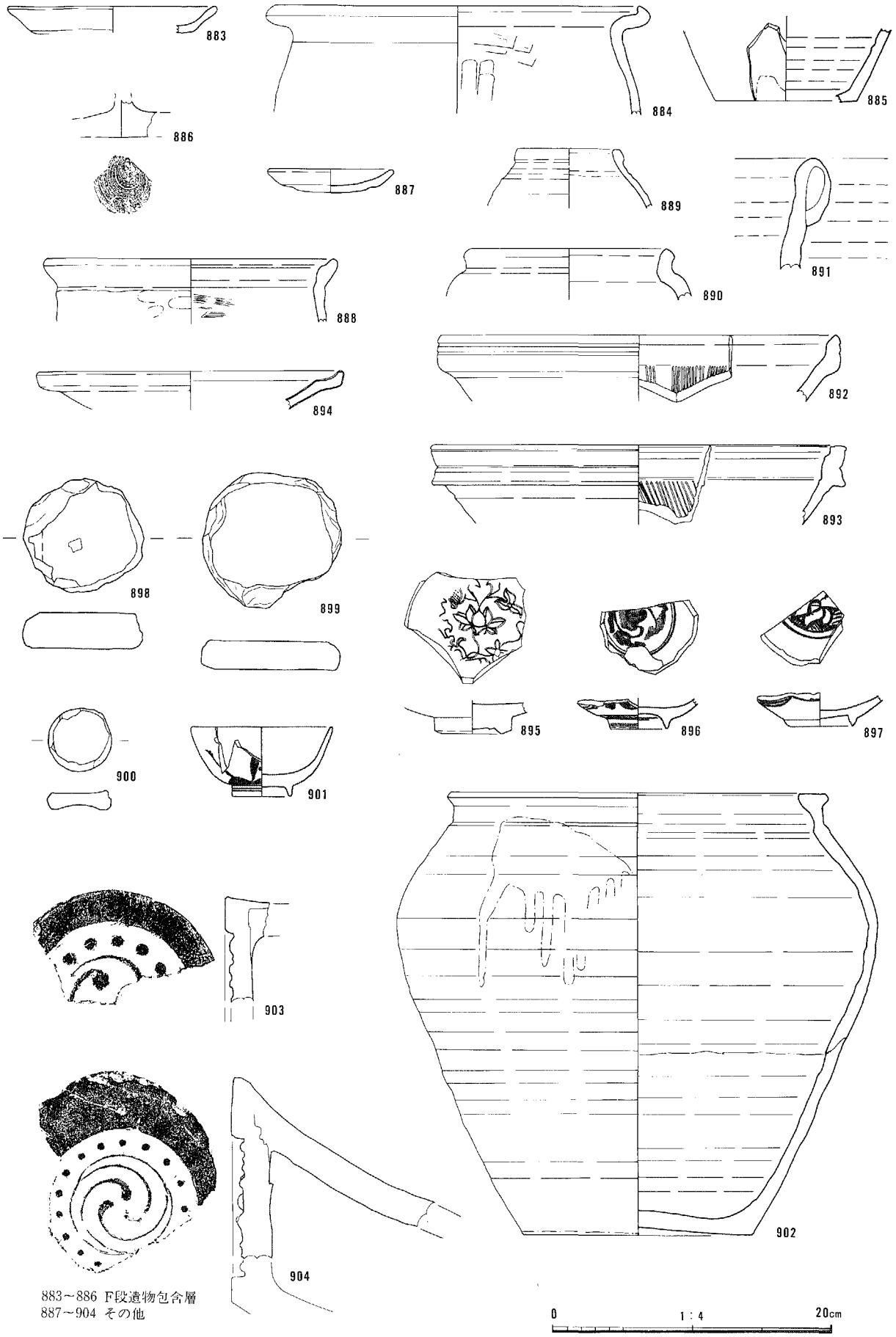
第99図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図 2



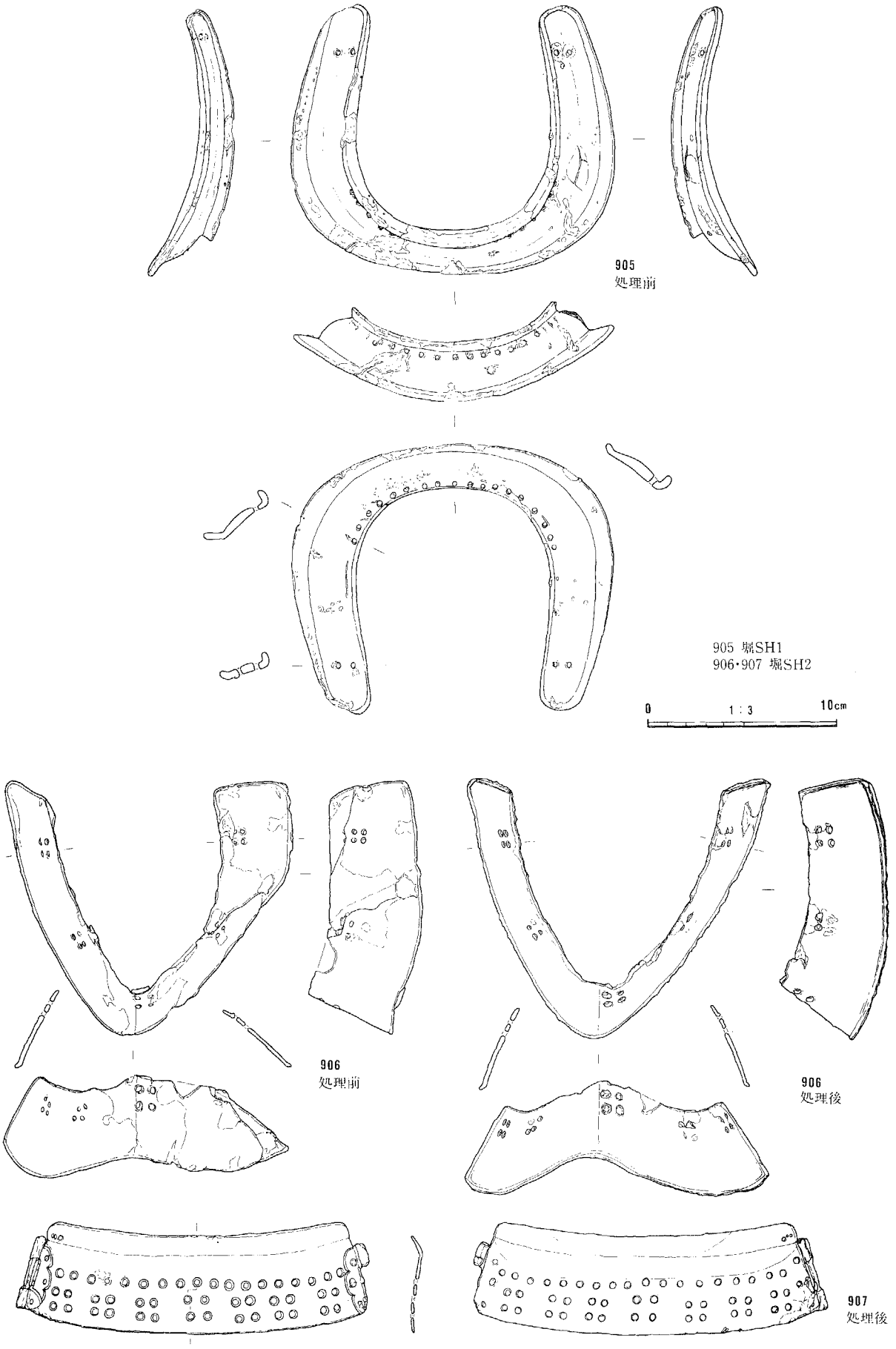
第100図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図 3



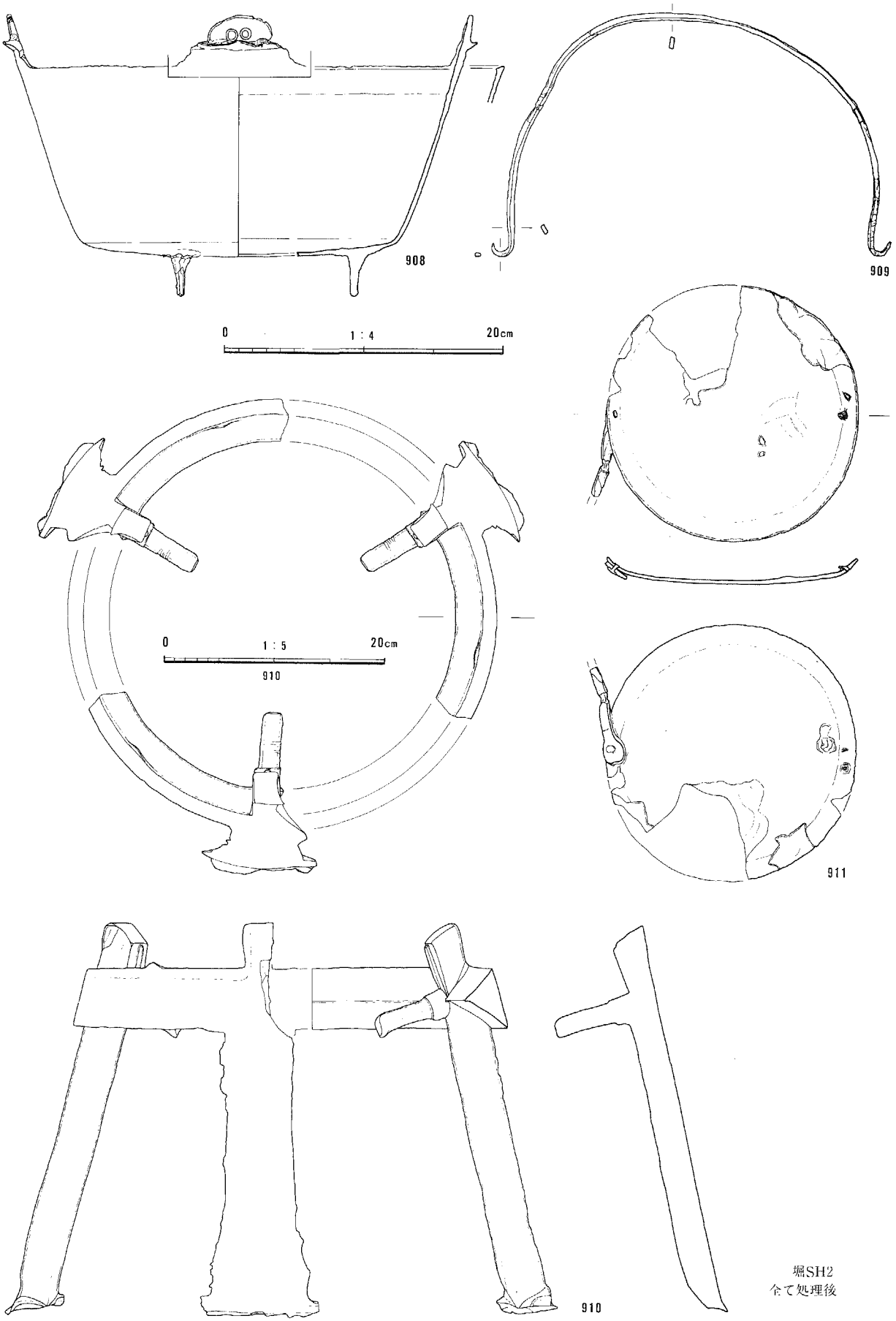
第101図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図 4



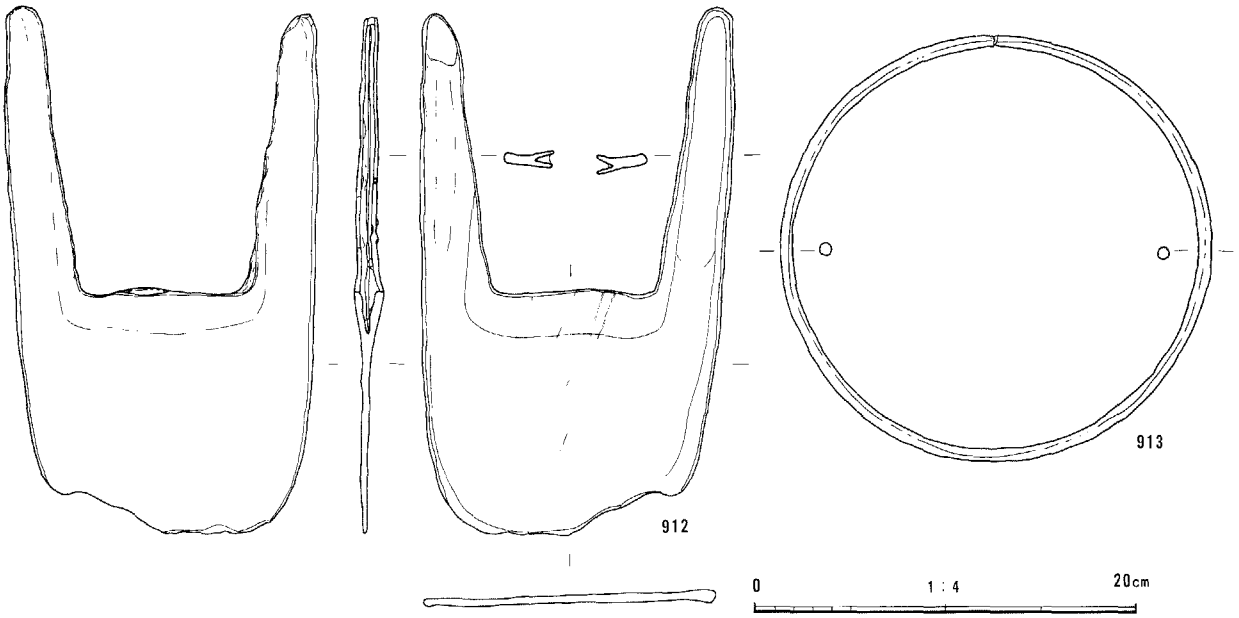
第102図　第Ⅳ区包含層他出土遺物実測図



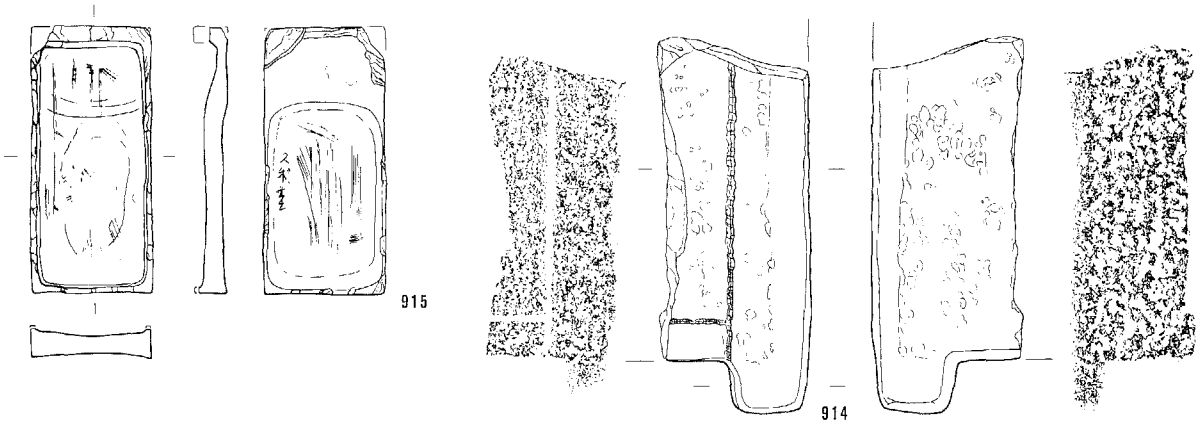
第103図　第IV区遺構出土遺物実測図 5

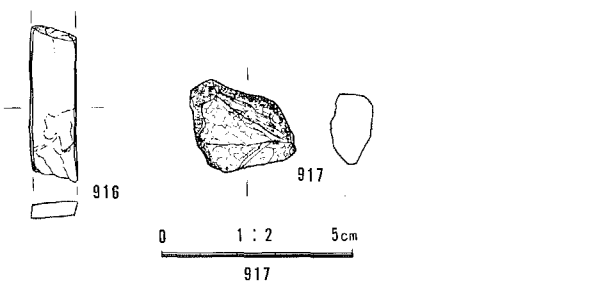


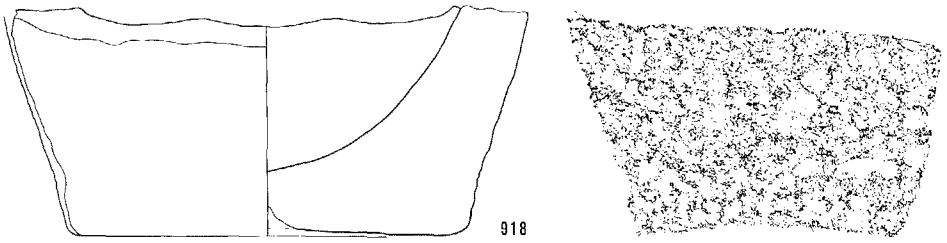
第104図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図 6



912・913・916 堀SH2 処理前
914 堀SH1

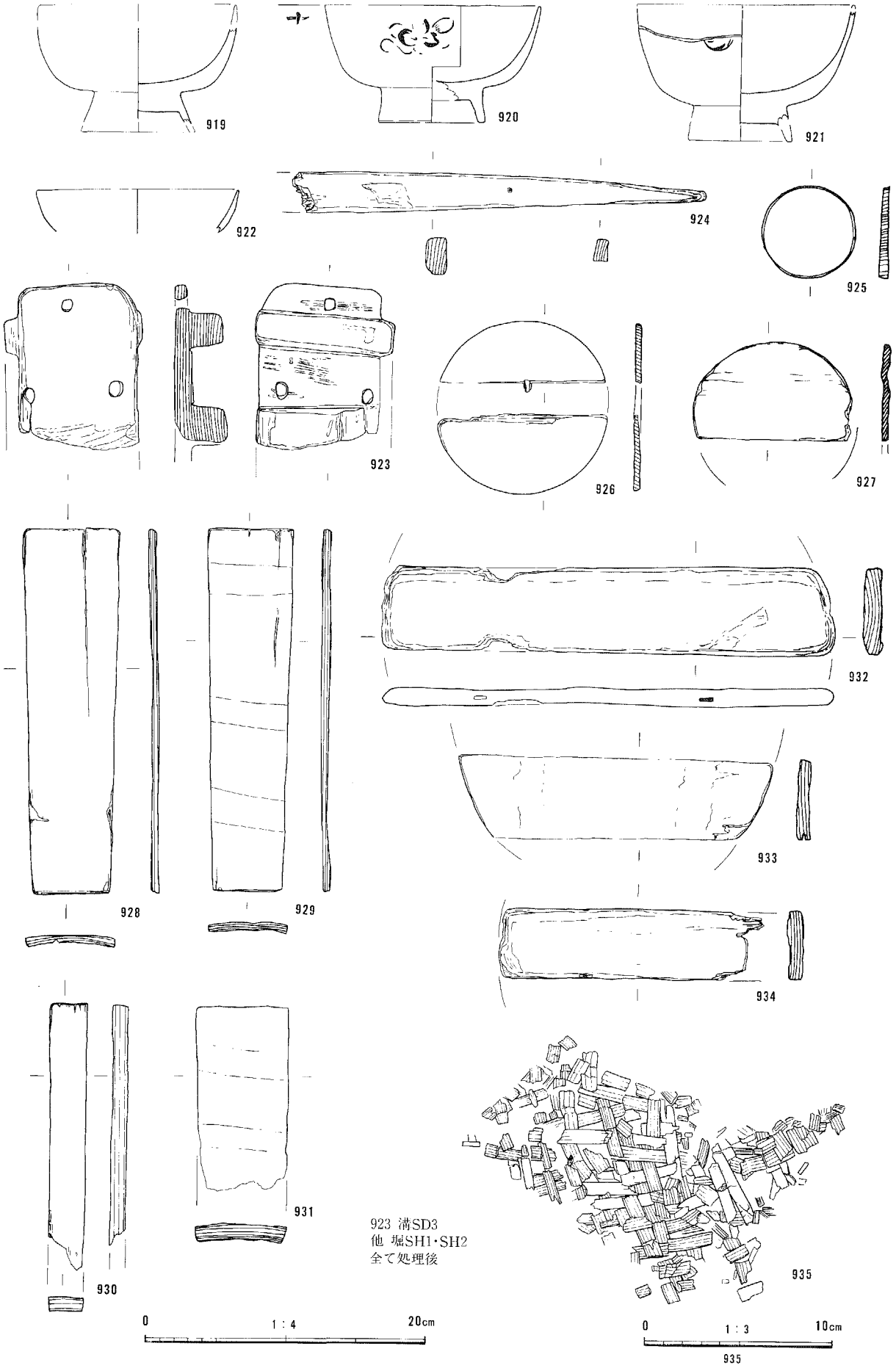




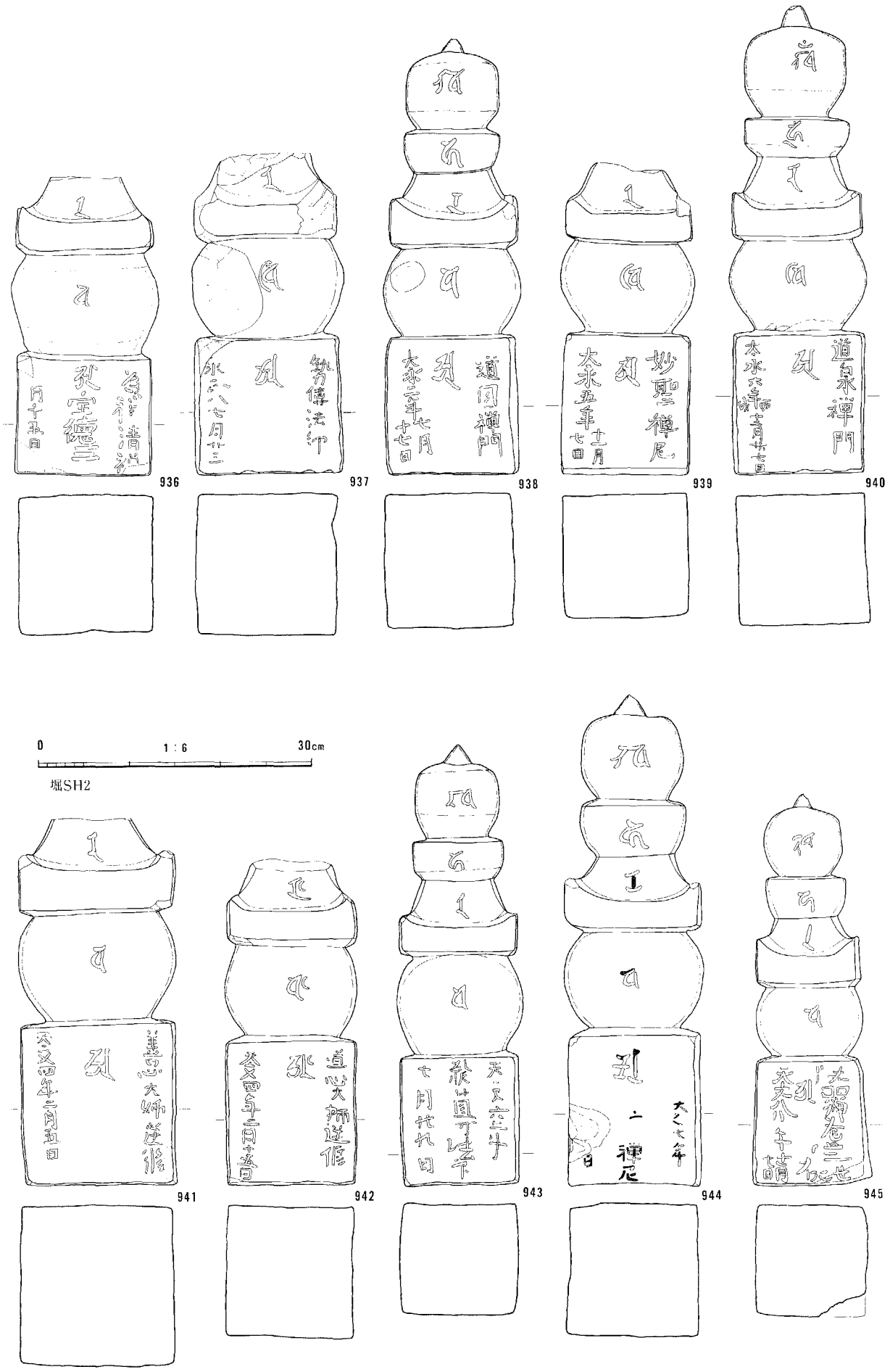


915 土坑SK31-d
917・918 B段

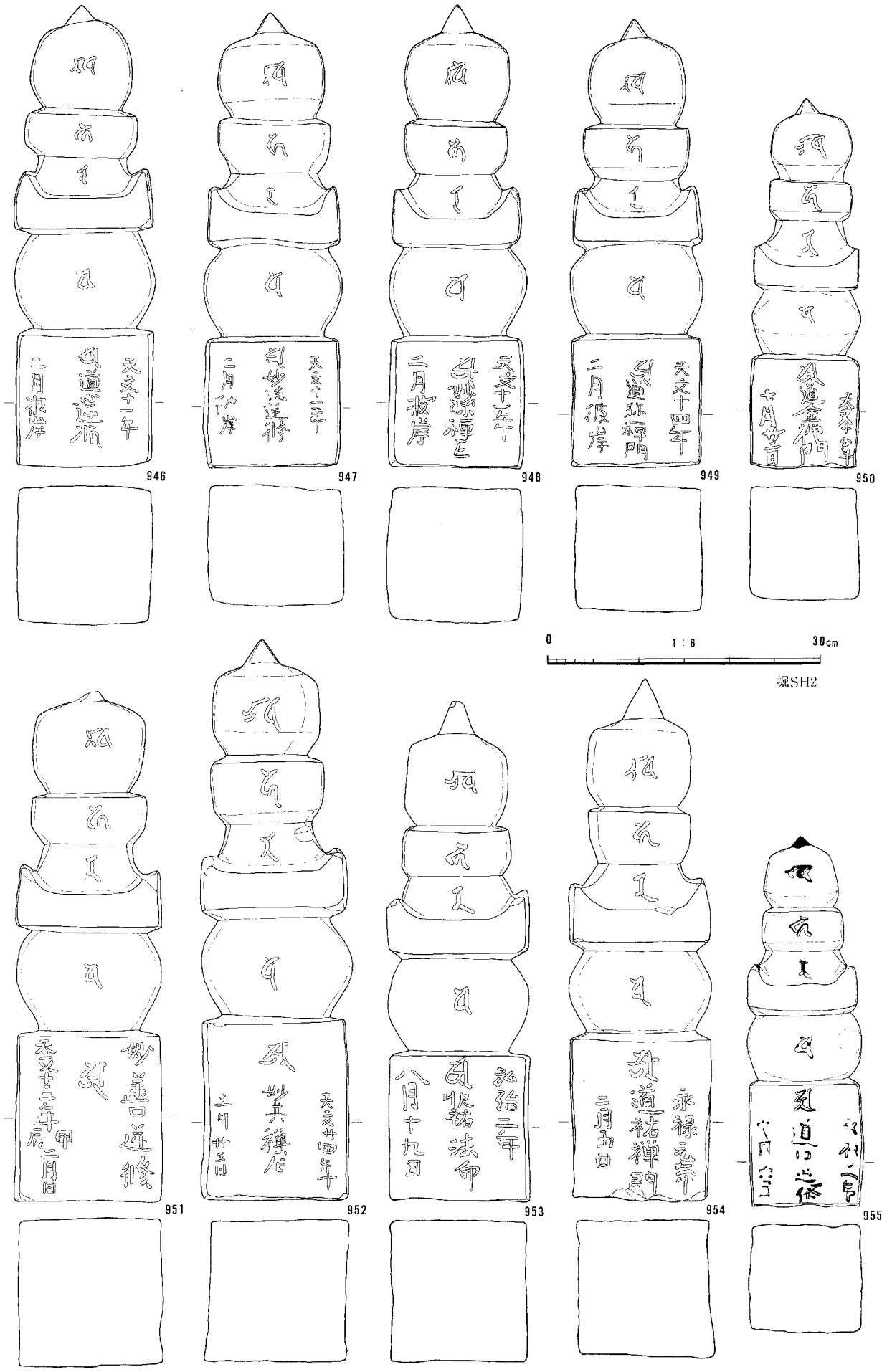
第105図　第IV区遺構出土遺物実測図 7



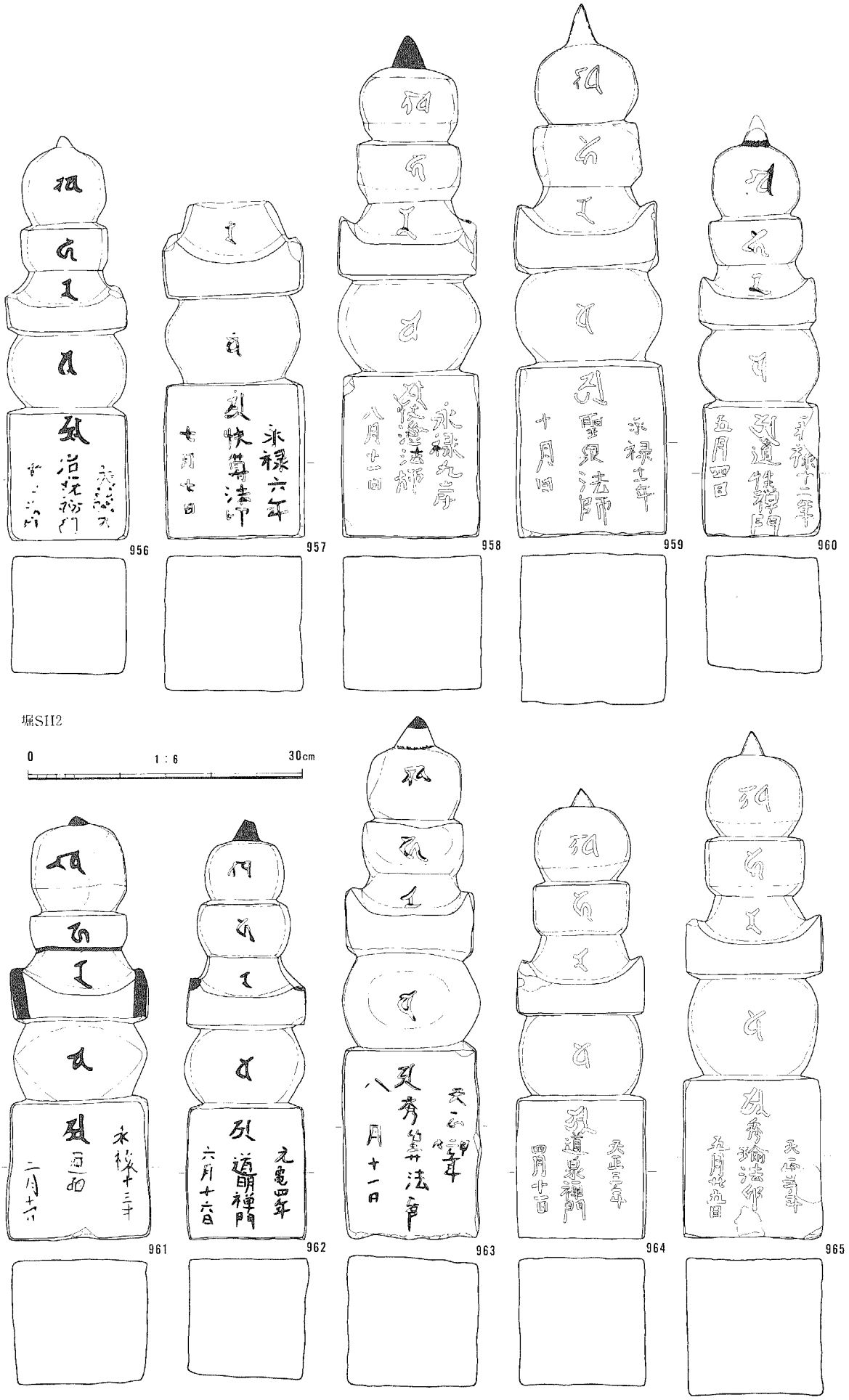
第106図　第IV区遺構出土遺物実測図 8



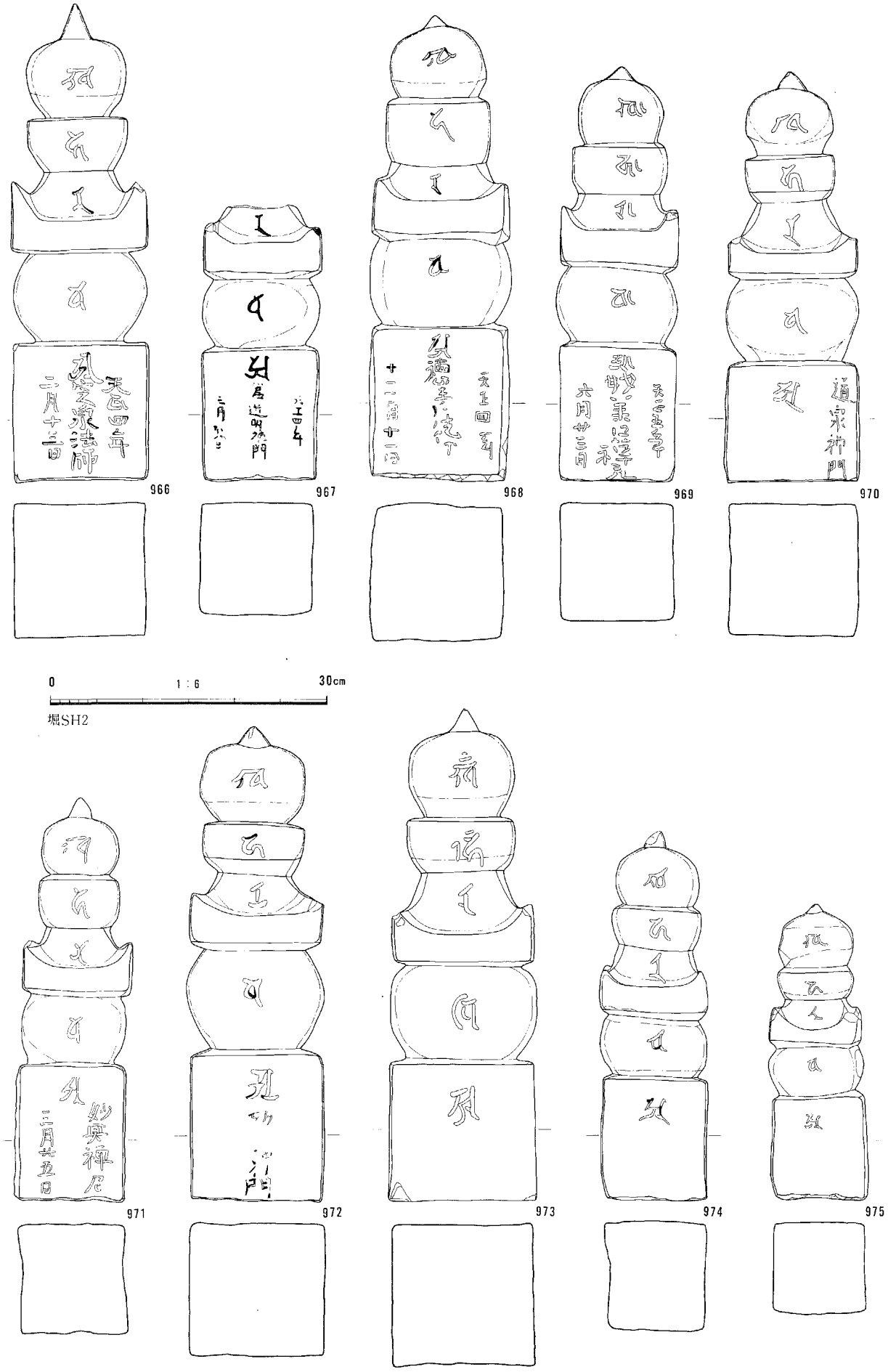
第107図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図 9



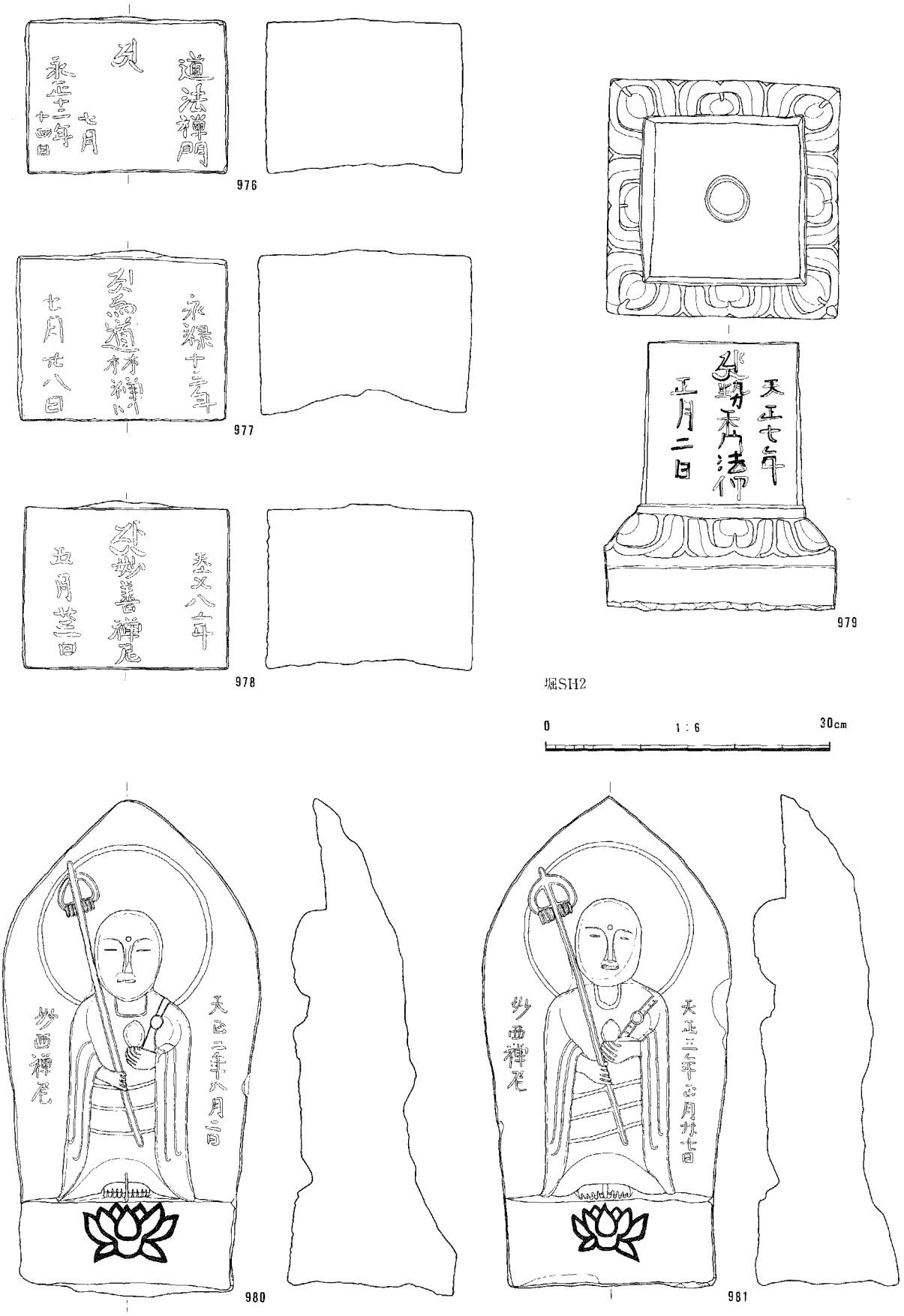
第108図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図10



第109図　第IV区遺構出土遺物実測図11

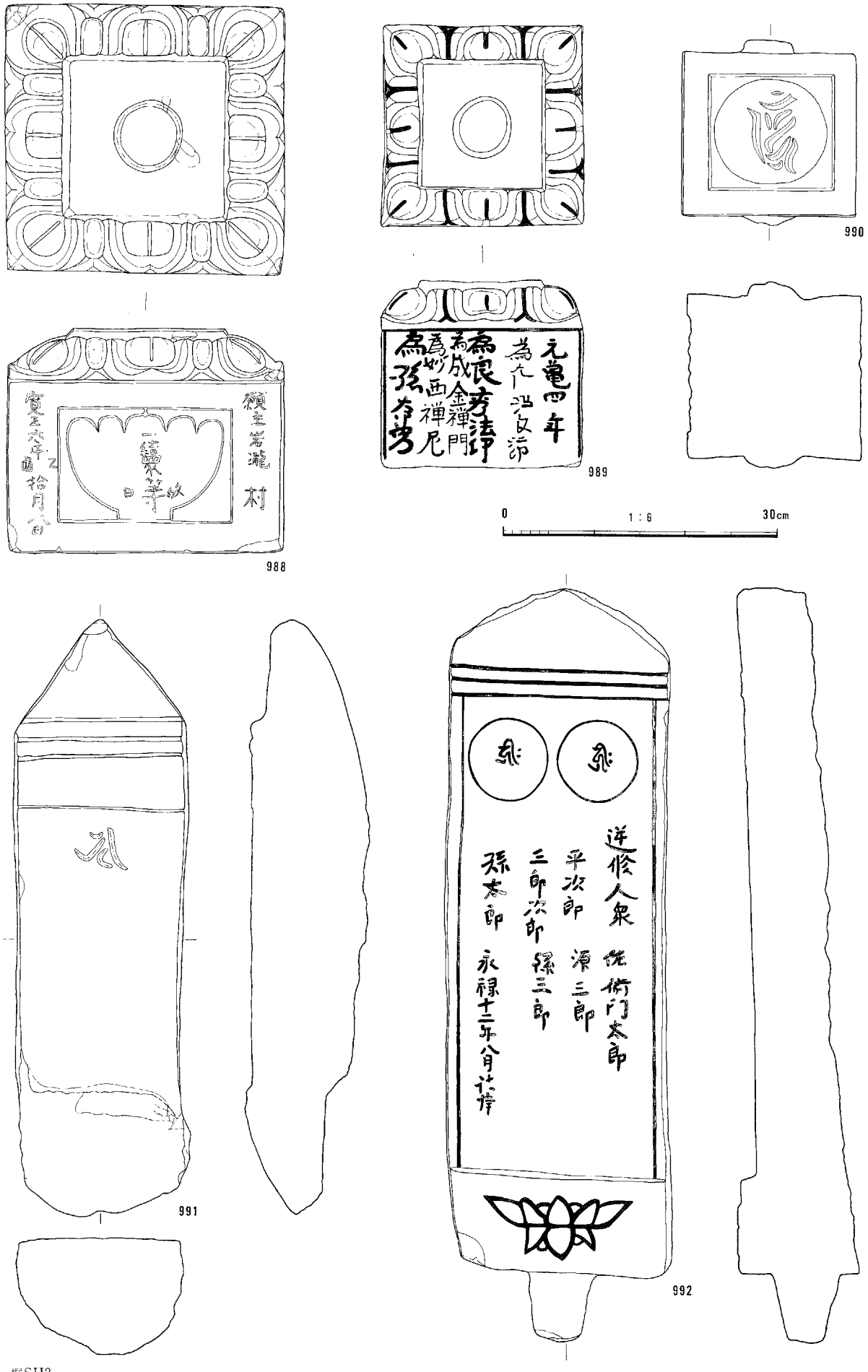


第110図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図12



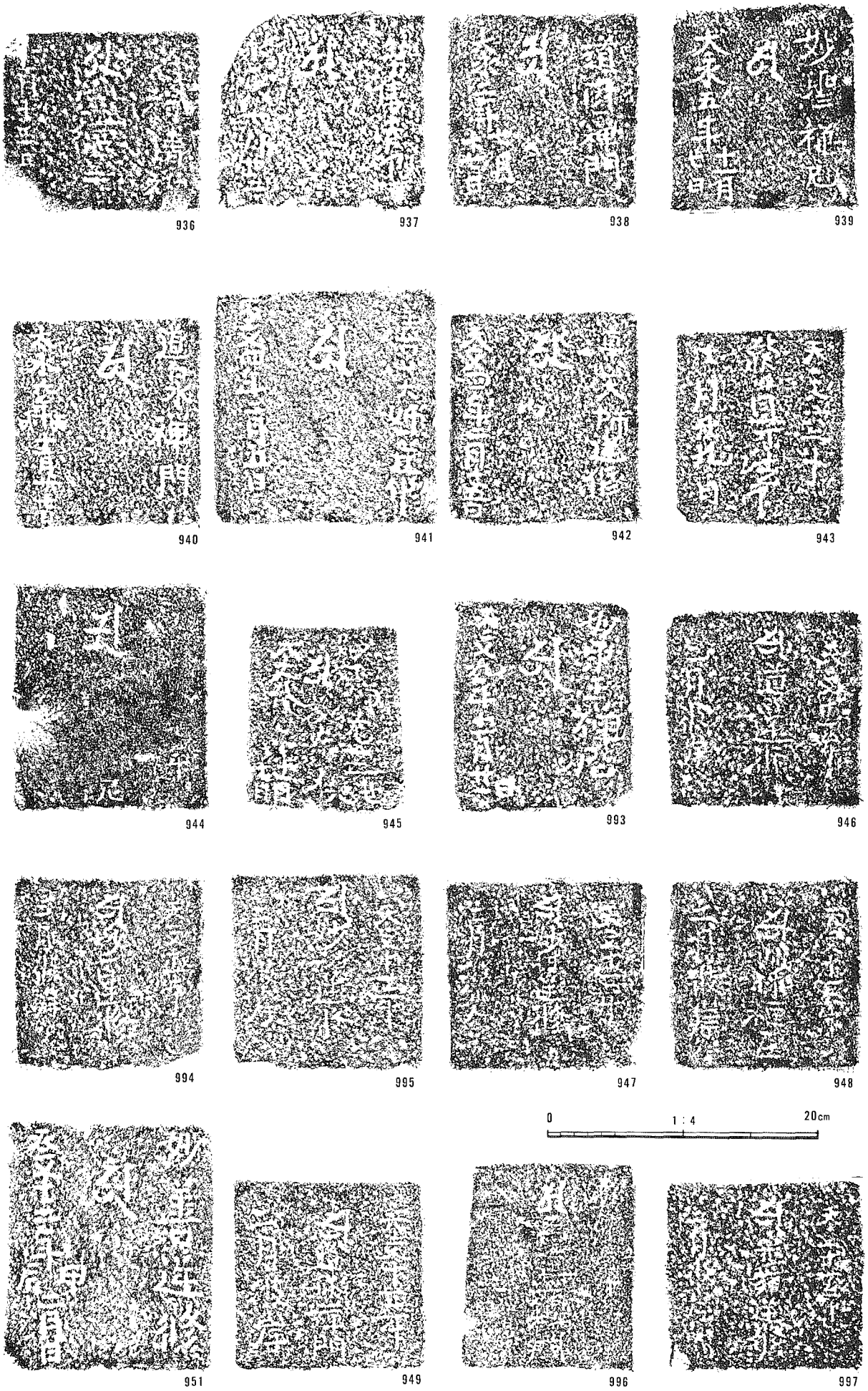
第111図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図13

第112図　第Ⅳ区遺構出土遺物実測図14

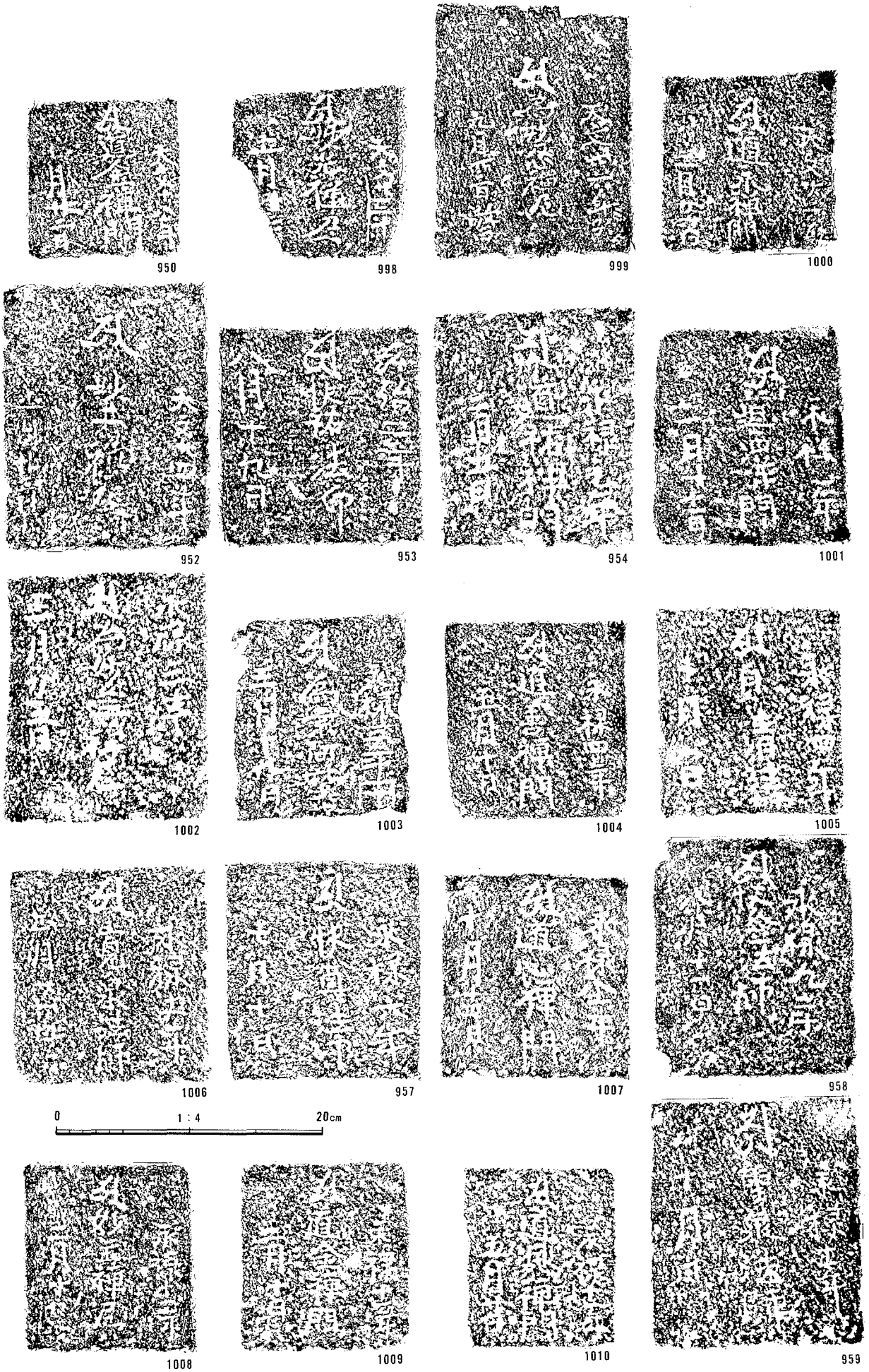


堀SII2

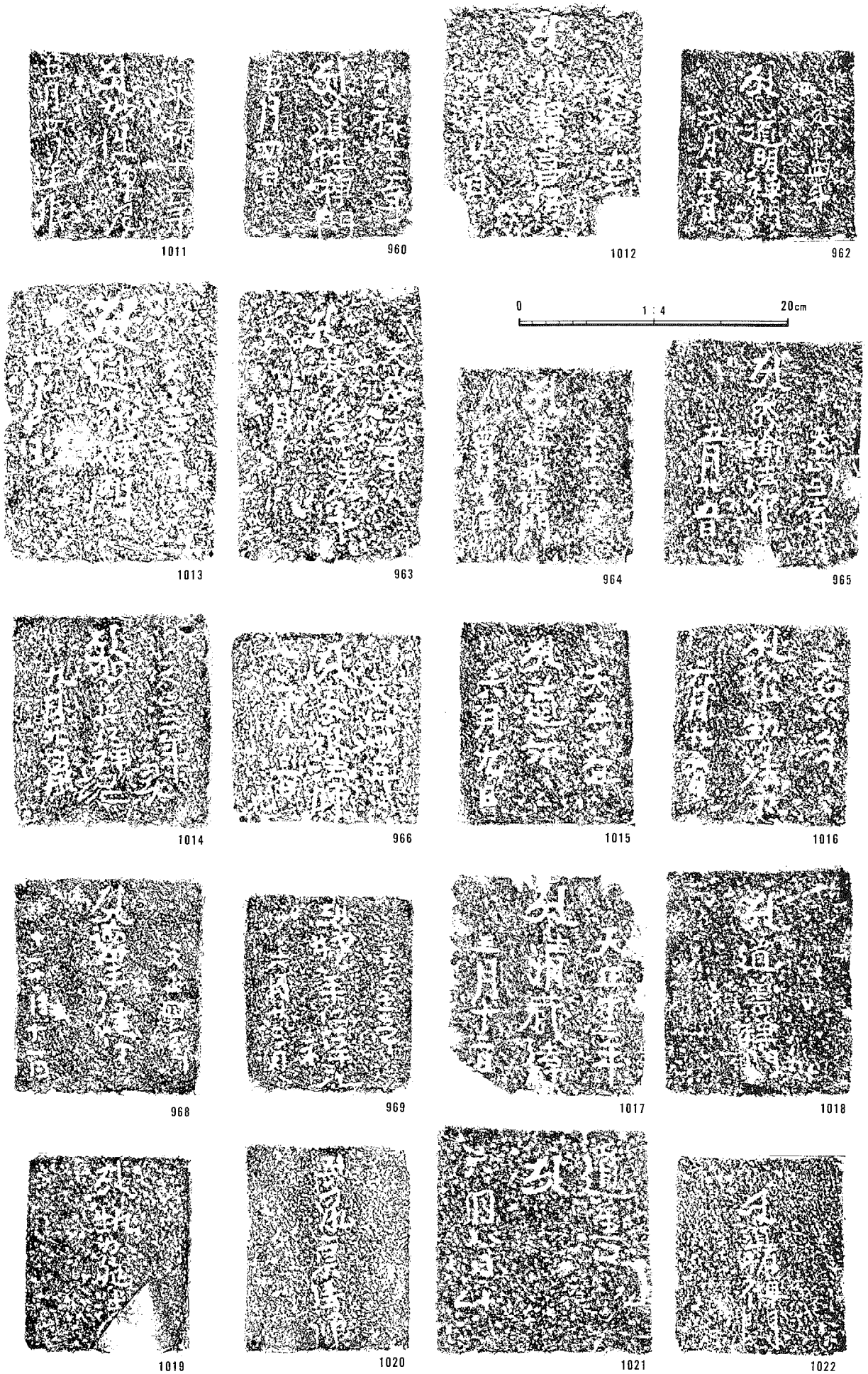
第113図　第IV区遺構出土遺物実測図15



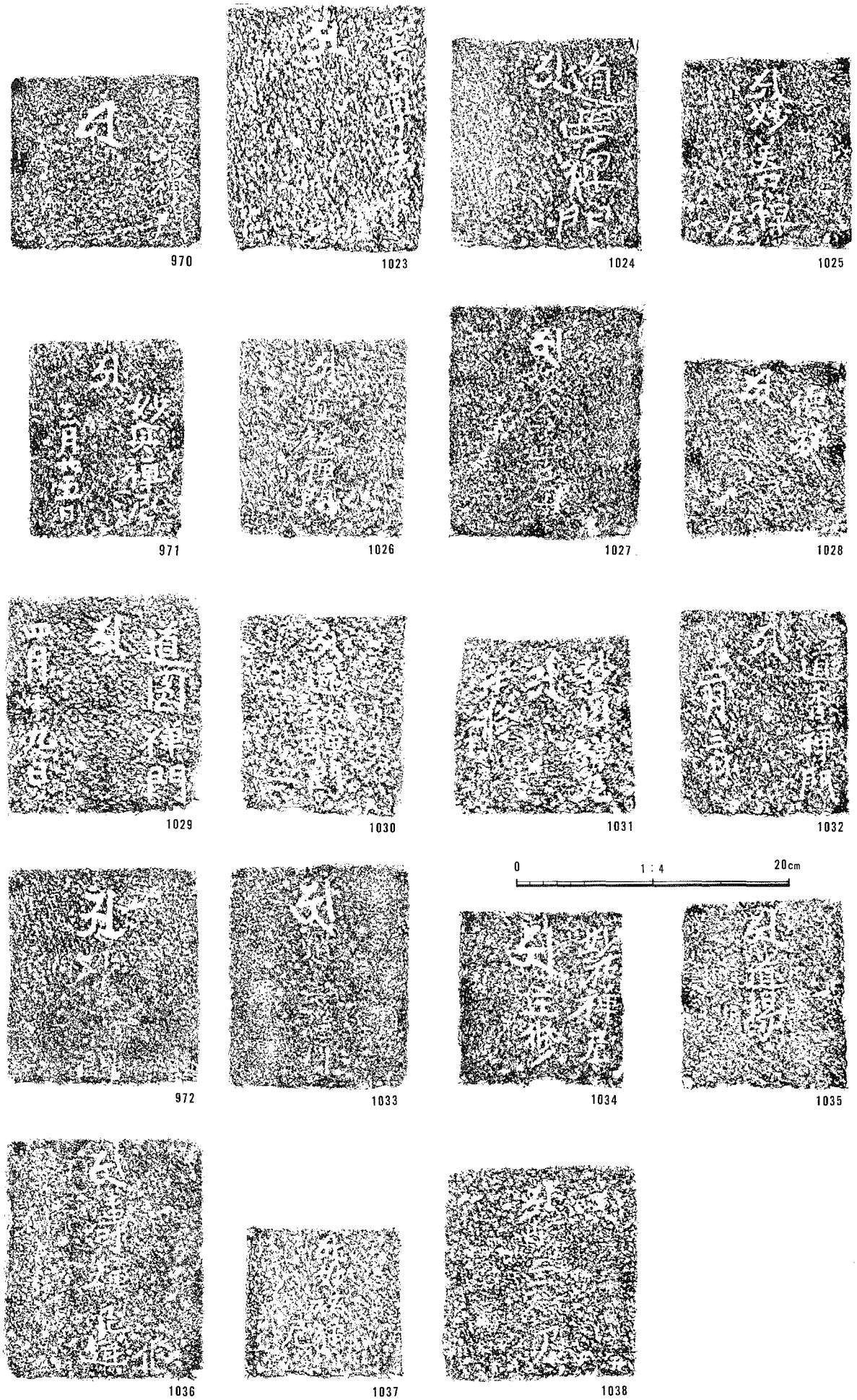
第114図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影 1



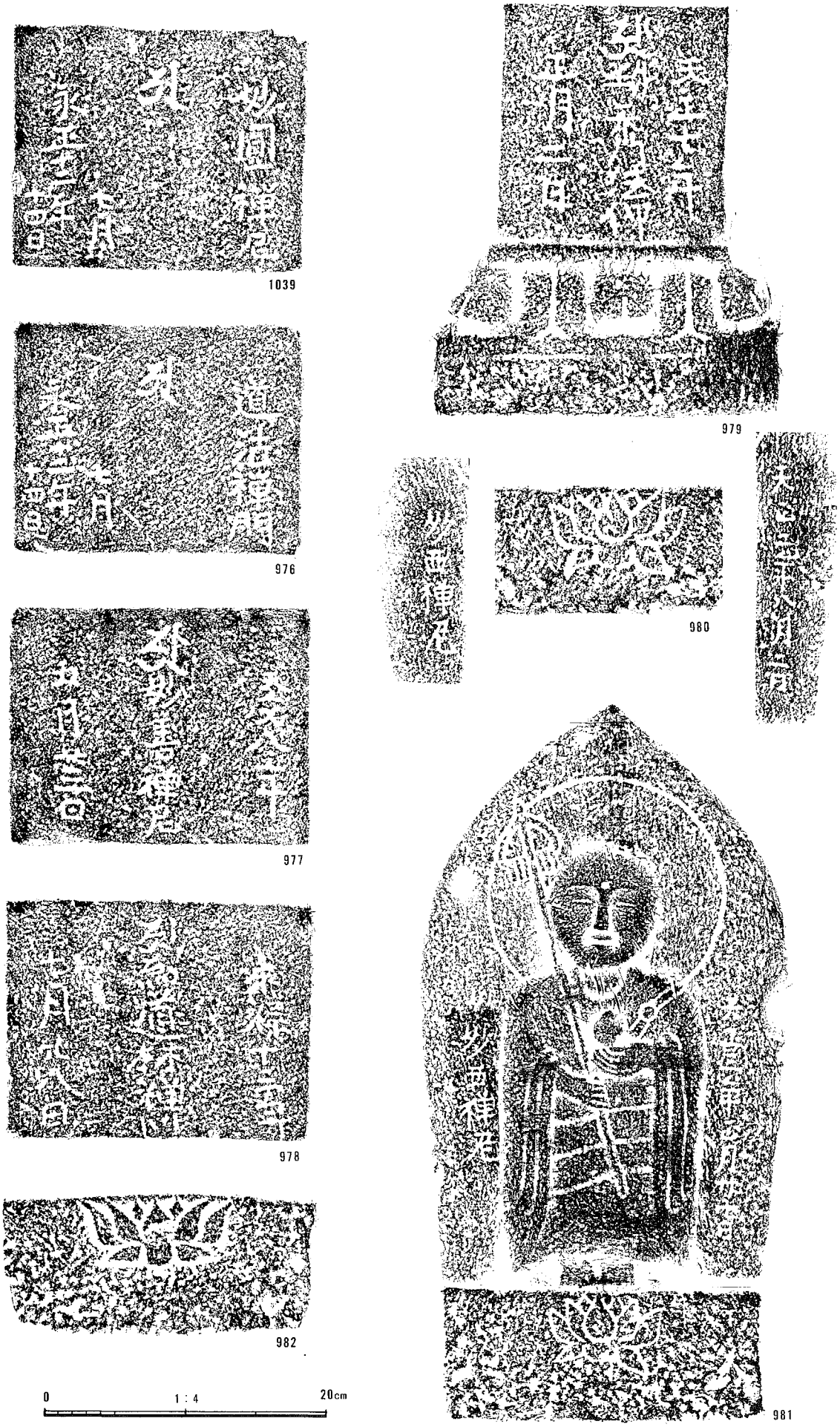
第115図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影 2



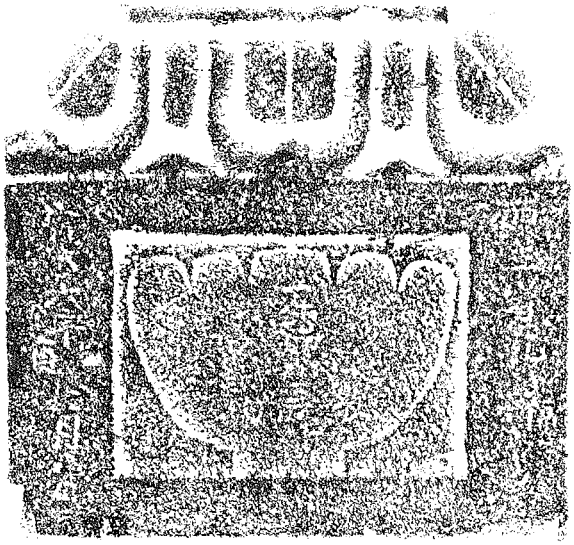
第116図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影 3



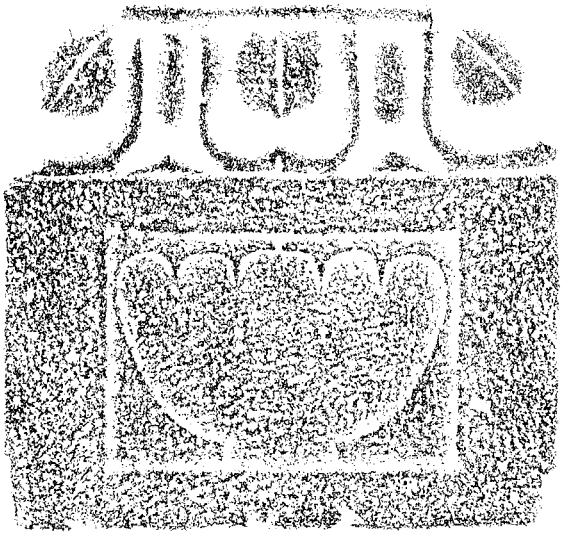
第117図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影 4



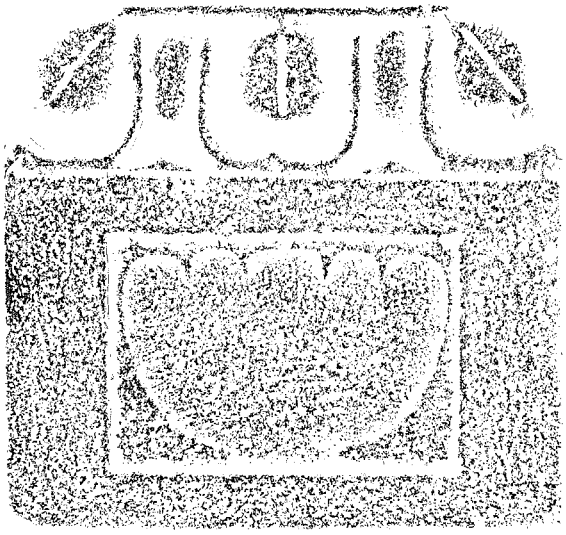
第118図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影 5



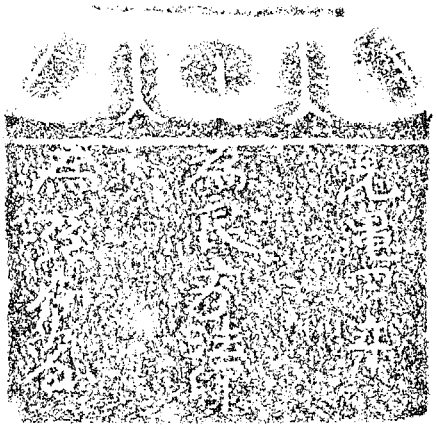
988正面



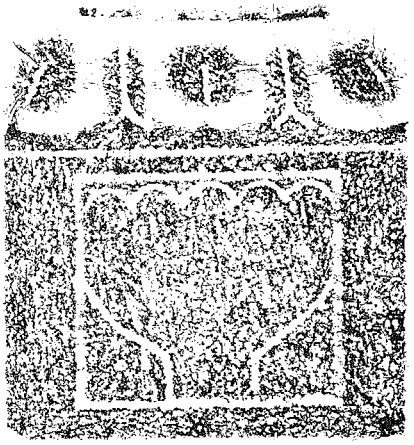
988右側面



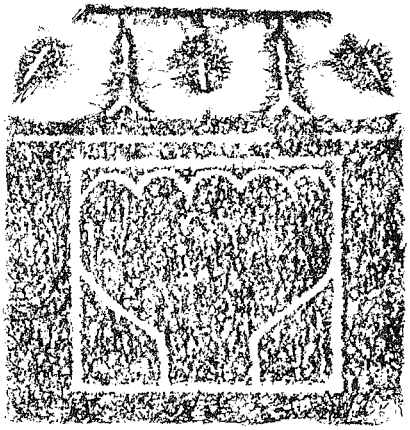
988左側面



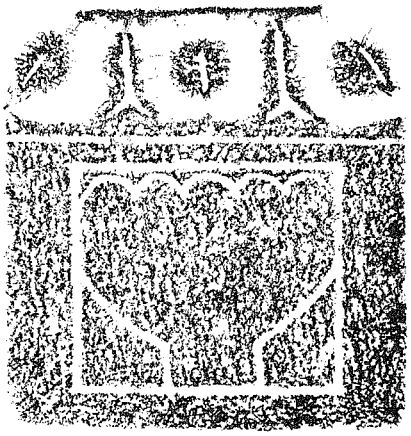
989正面



989右側面



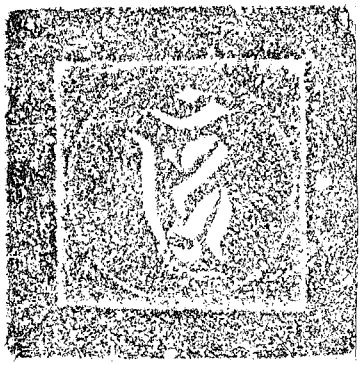
989背面



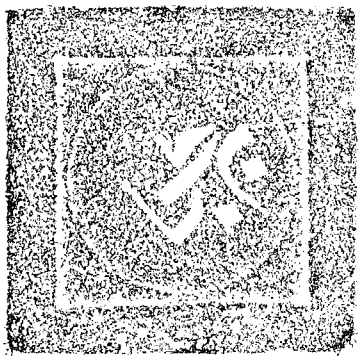
989左側面

0　1：4　20cm

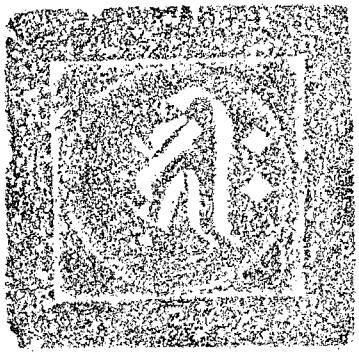
第119図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影 6



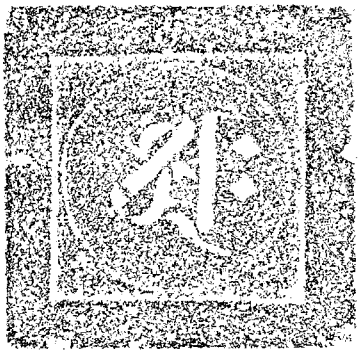
990東方



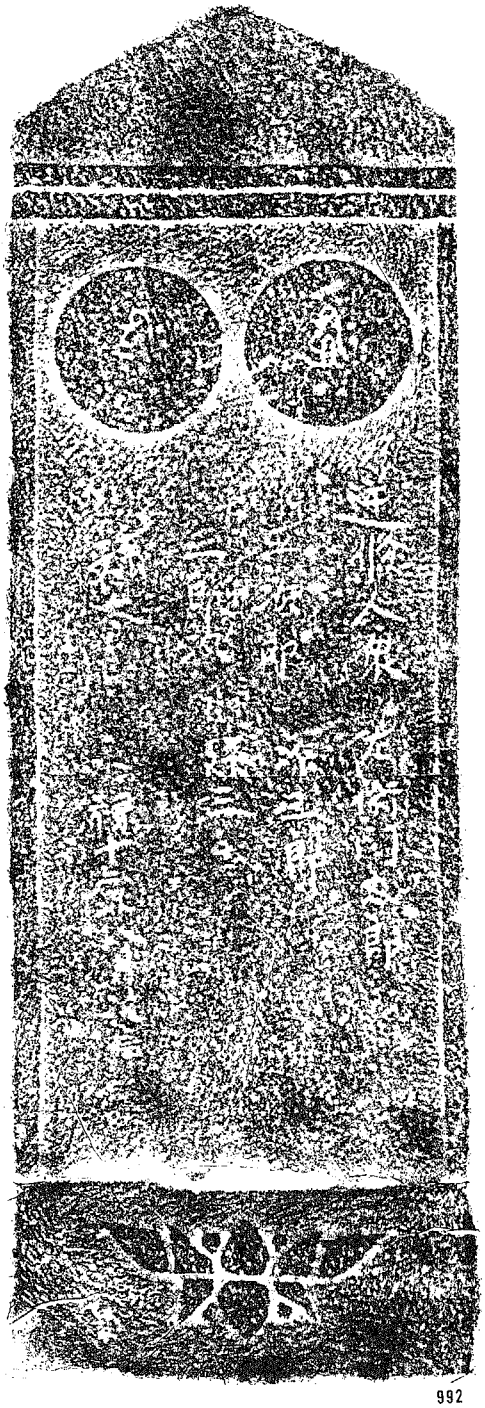
990南方



990西方



990北方



992

0　1：4　20cm

第120図　第Ⅳ区出土石造遺物拓影 7

出土遺物一覧

凡例

・出土遺物登録番号の付け方

各調査次毎に遺構種類や区画、日付を整理して、１番から通し番号を付して登録している。表中では、調査次数のコード番号の末尾の記号を冠して、「ＲＴ１－○○○、Ｒ１－○○○・・・」などと記載している。

・実測遺物登録番号の付け方

各調査次毎に、土器・土製品・瓦・石器など出土遺物破片点数表に準じて、１番から通し番号を付して登録している。表中では、調査次数のコード番号の末尾の記号を冠して、「ＲＴ１－□□□、Ｒ１－□□□・・・」などと記載している。実際の遺物には、「実測」の「実」を取って、「実□□□、実□□□・・・」の注記を行なっている。木製品・金属製品は、土器・石器類と区別して各調査次毎に、各々１番から通し番号を付して登録している。

・出土遺物への一般的な注記方法

出土遺物には、白絵の具もしくは黒絵の具で、各調査次毎のコード番号＋出土遺物登録番号および実測遺物登録番号「実□□□」を併記している。

・報告書掲載遺物の検索

遺物は、別途「調査報告書用遺物　コンテナ収納状況台帳」に準じて検索することが可能である。

また、遺物収納コンテナの側ラベルには、挿図の通し番号と遺構名を記載しているので、出土遺物一覧の該当項目の登録番号を探して頂ければ、その遺物を検索できるようにしている。

・出土遺物一覧では、土器類の形態・胎土などの観察項目は掲載していない。

・表中の法量・重量の記載で、（　）付は残存値を表している。

出土遺物一覧 1

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
T 1	第5図	RT2-7	RT2-7	Kトレ・機械掘削	須恵器・坏
T 2	〃	RT2-103	RT2-112	Tトレ・SD01	〃 ・〃
T 3	〃	RT2-21	RT2-38	Lトレ・機械掘削	〃 ・〃
T 4	〃	RT2-92	RT2-108	Sトレ・SK01	〃 ・〃
T 5	〃	RT1-16	RT1-10	Cトレ・第3層	〃 ・蓋
T 6	〃	RT2-83	RT2-98	Sトレ・第5層	〃 ・蓋
T 7	〃	RT1-11		Bトレ・第3層	〃 ・〃
T 8	〃	RT2-43	RT2-71	Qトレ・第6層	〃 ・蓋
T 9	〃	RT2-106	RT2-118	Uトレ・第3層	〃 ・坩
T10	〃	RT2-29	RT2-51	Nトレ・P01	〃 ・鉢
T11	〃	RT2-45	RT2-71	Qトレ・第6層	〃 ・甕
T12	〃	RT2-75	RT2-90	Rトレ・SK02	須恵質・土玉・14.2g
T13	〃	RT2-36	RT2-61	Pトレ・第7層	〃 ・脚状土製品
T14	〃	RT2-65		Rトレ・第15層	瓦器・椀
T15	〃	RT2-67	RT2-86	Rトレ・第16層	〃 ・〃
T16	〃	RT2-4	RT2-6	Kトレ・機械掘削	須恵質・捏鉢
T17	〃	RT2-100	RT2-110	Tトレ・第2層	土師器・小皿
T18	〃	RT2-25	RT2-42	Mトレ・SK01	〃 ・〃
T19	〃	RT2-116	RT2-124	Uトレ・SK01	〃 ・〃
T20	〃	RT2-87	RT2-104	Sトレ・SD01第7・8層	〃 ・〃
T21	〃	RT2-19	RT2-29	Kトレ・SK09	〃 ・土釜
T22	〃	RT2-23	RT2-41	Mトレ・機械掘削	〃 ・鍋
T23	〃	RT2-18	RT2-29	Kトレ・SK09	瓦質・土釜
T24	〃	RT2-61	RT2-83	Rトレ・第4層	瓦質・甕
T25	〃	RT2-34	RT2-58	Pトレ・第3層	瀬戸美濃灰釉・丸皿
T26	〃	RT2-76	RT2-96	Sトレ・第3層	瀬戸美濃灰釉・折縁皿
T27	〃	RT2-22	RT2-40	Lトレ・自然流路02	瀬戸美濃鉄釉・天目碗
T28	〃	RT2-57	RT2-84	Rトレ・第4層	瀬戸窯灰釉・おろし皿
T29	〃	RT2-80	RT2-98	Sトレ・第5層	青磁・碗
T30	〃	RT2-56	RT2-89	Rトレ・第16層	白磁・菊皿
T31	〃	RT2-30	RT2-53	Oトレ・SK01	堺・擂鉢
T32	〃	RT2-2	RT2-3	Dトレ・SK01	唐津窯灰釉・鉢
T33	〃	RT2-35	RT2-58	Pトレ・第1層	土師質・犬状土製品
第Ⅰ区　遺物包含層他					
1	第69図	R1-2	R1-80	E4S36・包含層	須恵器・坏
2	〃	R1-3	R1-47	W4S32・包含層	〃 ・蓋
3	〃	R1-5	R1-49	W4S32・包含層	〃 ・〃
4	〃	R1-6	R1-18	E8S28・包含層	〃 ・甕
5	〃	R1-9	R1-137	W4S40・包含層	〃 ・土馬の脚？
6	〃	R1-10	R1-32	E8S32・包含層	〃 ・高台付坏
7	〃	R1-13	R1-113	W16S36・包含層	土師器・小皿
8	〃	R1-11	R1-183	W4S44・包含層	〃 ・皿
9	〃	R1-15	R1-168	E4S44・包含層	瓦器・椀
10	〃	R1-16	R1-189	W8S44・包含層	〃 ・小皿
11	〃	R1-17	R1-281	E16より東側・包含層	〃 ・小皿
12	〃	R1-18	R1-189	W8S44・包含層	須恵質・捏鉢
13	〃	R1-20	R1-247	EW00S84・遺構検出	層内碗窯系白磁・碗
14	〃	R1-26	R1-336	不明	土師器・小皿
15	〃	R1-29	R1-218	W12S56・包含層	〃 ・〃
16	〃	R1-21	R1-336	不明	土師器・白色系皿
17	〃	R1-24	R1-27	EW00S30・包含層	土師器・小皿
18	〃	R1-28	R1-93	W4S36・包含層	〃 ・〃
19	〃	R1-27	R1-336	不明	〃 ・〃
20	〃	R1-31	R1-32	E8S32・包含層	瓦質・捏鉢
21	〃	R1-32	R1-46	W4S32・包含層	〃 ・風炉
22	〃	R1-42	R1-9	暗渠内より東部	備前・擂鉢
23	〃	R1-39	R1-93	W4S36・包含層	瀬戸美濃鉄釉・天目碗
24	〃	R1-35	R1-251	E8S100・包含層	青磁・碗
25	〃	R1-38	R1-212	W12S52・包含層	白磁・小皿
26	〃	R1-44	R1-41	EW00S32・包含層	漳州窯系染付・盤
27	〃	R1-41	R1-328	ウメオケNo.121	瓦質・角火鉢
28	〃	R1-43	R1-335	不明	堺・擂鉢
29	〃	R1-46	R1-331	ウメオケ	波佐見・皿
30	〃	R1-60	R1-137	W4S40・包含層	〃 ・広東碗
第Ⅱ区　縄文土器					
34	第32図	R3-264	R3-707	R段2F59・谷状地形・第25・26層	縄文土器・深鉢
第Ⅱ区　土坑SK11					
35	第18図	R3-308	R3-900	P段SK11一括	須恵器・甕
第Ⅱ区　谷伏地形第24～26層					
36	第70図	R3-192	R3-602	P段2D56・第24・26層	土師器・甕

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
	第70図	R3-192	R3-904	P段2F56・第24・26層	
37	〃	R3-265	R3-707	R段2F59・第25・26層	土師器・皿
38	〃	R3-193	R3-592	P段2E55・第24・26層	須恵器・坏
39	〃	R3-194	R3-592	〃 〃 ・第24・26層	〃 ・〃
40	〃	R3-196	R3-978	〃 2E58・第24・26層	〃 ・〃
41	〃	R3-197	R3-631	〃 2H57・第24・26層	〃 ・〃
42	〃	R3-195	R3-590	〃 2D55・第24・26層	〃 ・〃
43	〃	R3-199	R3-957	〃 2E57・第24・26層・下層	〃 ・〃
44	〃	R3-185	R3-565	〃 2F58・第24層	〃 ・〃
45	〃	R3-186	R3-550	〃 2D55・ 〃	〃 ・〃
46	〃	R3-201	R3-591	〃 2E55・第24・26層	〃 ・〃
47	〃	R3-269	R3-728	U段2F62・63・第24・26層	〃 ・〃
48	〃	R3-200	R3-586	P段2F54・第24・26層	〃 ・〃
49	〃	R3-248	R3-979	〃 2E58・第25層	〃 ・蓋
50	〃	R3-191	R3-637	〃 2G58・第24・25層	〃 ・〃
51	〃	R3-187	R3-550	〃 2D55・第24層	〃 ・〃
52	〃	R3-188	R3-550	〃 〃 ・ 〃	〃 ・〃
53	〃	R3-266	R3-707	R段2F59・第25・26層	〃 ・〃
54	〃	R3-204	R3-596	P段2F55・第24・26層	〃 ・〃
55	〃	R3-202	R3-592	〃 2D55・第24・26層	〃 ・〃
56	〃	R3-203	R3-592	〃 2E55・第24・26層	〃 ・〃
57	〃	R3-207	R3-592	〃 〃 ・第24・26層	〃 ・鉢
58	〃	R3-206	R3-592	〃 2E55・第24・26層	〃 ・〃
59	〃	R3-210	R3-592	〃 〃 ・第24・26層	〃 ・盤
			R3-596	〃 2F55・第24・26層	
			R3-956	〃 2E55・第25層	
			R3-958	〃 2E55・第26層最下層	
60	〃	R3-205	R3-591	〃 〃 ・第24・26層	〃 ・把手付鉢
			R3-601	〃 2D56・第24層・26層	
			R3-980	〃 2E58・第25層	
61	〃	R3-223	R3-583	〃 2D54・第24・26層	〃 ・高坏
62	〃	R3-224	R3-591	〃 2E55・第24・26層	〃 ・平瓶
63	〃	R3-225	R3-601	〃 2D56・第24・26層	〃 ・〃
64	第71図	R3-213	R3-634	〃 2E58・第24・26層	〃 ・甕
65	〃	R3-219	R3-591	〃 2E55・第24・26層	〃 ・〃
66	〃	R3-214	R3-606	〃 2G56・第24・26層	〃 ・〃
67	〃	R3-211	R3-653	〃 2E58・第24・26層下部	〃 ・〃
68	〃	R3-216	R3-580	〃 2F53・第24・26層	〃 ・〃
			R3-950	〃 2E54・第24・26層	〃 ・〃
69	〃	R3-215	R3-607	〃 2G56・第24・26層	〃 ・〃
			R3-635	〃 2G58・第24・26層	
			R3-697	R段2F60・第24層	
			R3-725	U段2F63・灰黄色細砂	
			R3-953	P段2E55・第14・16層	
70	〃	R3-220	R3-524	〃 2E56・第22層	須恵器・甕
			R3-552	〃 2G55・第24層	

出土遺物一覧 2

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
			R3-634	P段2E58・第24・26層	
			R3-635	〃 2G58・第24・26層	
			R3-647	〃 2H58・第24・26層	
71	第71図	R3-222	R3-473	R段2H59・第6・7層＋22層	須恵器・甕
			R3-530	P段2F57・第22層	
			R3-532	〃 2F58・第22層	
			R3-559	〃 2E57・第24層	
			R3-616	〃 2G57・第24・26層	
			R3-639	P段2H58・第24・26層	
			R4-11	K段No.9＋30右より北黄色土撹乱	
72	〃	R3-218	R3-537	P段2G57・第22層上部	須恵器・甕
			R3-623	〃 2G57・第24＋26層	
			R3-644	〃 2H58・第24＋26層	
73	〃	R3-217	R3-540	〃 2H58・第22＋24層	須恵器・甕
			R3-582	〃 2D54・第22＋24層	
			R3-635	〃 2G58・第22＋24層	
			R3-638	〃 2H58・第24・26層	
			R3-646	〃 2H58・第22＋24層	
			R3-685	〃 2F59・第22層上バサバサ	
74	〃	R3-221	R1-18	F段S28E8・包含層	須恵器・甕
			R3-286	Q段SD16下層黒色土灰白色	
			R3-525	P段2F56・第22層	
			R3-582	〃 2D54・第24・26層	
			R3-590	〃 2D55・第24・26層	
			R3-667	〃 2H59・第26層	
75	第33図	R3-226	R3-618	〃 2G57・第24・26層	須恵器・竈？
			R3-635	〃 2G58・第24・26層	
			R3-667	〃 2H59・第26層	
76	〃	R3-227	R3-621	〃 2G57・第24・26層	須恵器・竈？
77	〃	R3-228	R3-637	〃 2G58・第24・25層	〃 ・〃
78	〃	R3-229	R4-1098	W段SH27・2K68最下層上位	〃 ・？
79	〃	R3-230	R3-638	P段2H58・第24・26層	〃 ・竈？
			R3-658	〃 2G58・第24・26層	
80	〃	R3-235	R3-538	〃 2F55・第22＋24層	須恵器・陶棺身
			R3-649	N段2C48・包含層第6層	〃 ・ 〃
81	〃	R3-236	R3-606	P段2C56・第24＋26層	須恵器・陶棺蓋
82	〃	R3-239	R3-591	〃 2E55・第24・26層	〃 ・陶棺？
			R3-635	〃 2G58・第24＋26層	
		R3-238	R3-708	R段2G59・第25・26層	
83	〃	R3-270	R3-698	U段2F60・第24層	〃 ・不明製品
			R3-699	〃 2F60・第24層上部	
			R3-732	〃 2F62・第26層	
84	第72図	R3-262	R3-1005	R段2E61・第24～26層	土師器・皿
85	〃	R3-190	R3-563	P段2H57・第24層	〃 ・〃
86	〃	R3-244	R3-429	〃 SW3・2C53・第14・16層	瓦質・土釜
			R3-457	〃 SW3・2D53・第17～20層上部	
			R3-575	P段2D53・第24・26層	
			R3-578	〃 2D53・2E53・第24・26層	
			R3-588	〃 2C55・第24・26層	
87	第72図	R3-245	R3-521	〃 2G55・第22層	須恵質・捏鉢
			R3-538	〃 2F55・第24・26層	
			R3-650	〃 2F54・第24・26層上部	
			R3-961	〃 2E56・第13・15層	
88	〃	R3-246	R3-600	〃 2H55・第24・26層	須恵質・捏鉢
89	〃	R3-263	R3-1000	R段2E60・第24～26層	土師器・土釜
90	〃	R3-241	R3-600	P段2H55・第24・26層	〃 ・捏鉢
91	〃	R3-243	R3-633	〃 2D58・第24・26層	瓦質・甕
92	〃	R3-242	R3-618	P段2G57・第24・26層	瓦質・甕
第II区　谷状地形第11～13層の礫層・第22層・第23層					
93	第72図	R3-253	R3-685	R段2F59・第22層上バサバサ	須恵器・甕
94	〃	R3-170	R3-518	P段2D55・第22層	〃 ・坏
95	〃	R3-169	R3-524	〃 2E56・第22層	〃 ・〃
96	〃	R3-171	R3-524	〃 2E56・第22層	〃 ・蓋
97	〃	R3-172	R3-518	〃 2D55・第22層	〃 ・高坏
98	〃	R3-178	R3-539	〃 2G58・第22＋24層	〃 ・鉢
99	〃	R3-173	R3-523	〃 2E56・第22層	緑釉・碗
100	〃	R3-247	R3-521	〃 2G55・第22層	瓦器・鉢
101	〃	R3-176	R3-537	〃 2G57・第22層上部	円盤状土製品（青磁碗）125g
102	〃	R3-181	R3-545	〃 2D57・第23層	土師器・小皿
103	〃	R3-259	R3-693	R段2D59・第23層暗灰緑色砂礫	〃 ・小皿
104	〃	R3-254	R3-693	〃 2F60・第22層	〃 ・皿
105	〃	R3-164	R3-510	P段2C53・第11～13層下の礫層	土師器・小皿
106	〃	R3-256	R3-693	R段2D59・第23層暗灰緑色砂礫	〃 ・小皿
107	〃	R3-163	R3-512	P段2C56・第11～13層下の礫層	〃 ・小皿
108	〃	R3-174	R3-523	〃 2E56・第22層	瓦器・小皿
109	〃	R3-175	R3-537	〃 2G57・第22層上部	〃 ・〃
110	〃	R3-252	R3-683	R段2F60・第22層上バサバサ	土師器・小皿
111	〃	R3-257	R3-693	〃 2D59・第23層暗灰緑色砂礫	〃 ・〃
112	〃	R3-165	R3-125	検出2C49	〃 ・捏鉢
			R3-323	P段SW1・2D57・第5層（7層）	
			R3-428	〃 SW2・2D57・第11～13層＋22層下の礫有り	
			R3-447	P段SW3・2E55・第14・16層　下部一部22層	
			R3-459	P段SW3・2D53・第17～20層下部	
			R3-467	R段田畑整地＋α・2E59・第6～7層	
			R3-474	R段東壁側溝2D60・第6・7層	
			R3-498	〃 2E60・第6～7層下部	
			R3-509	P段2C54・第11～13層下の礫層	
			R3-510	〃 2C55・第11～13層下の礫層	
113	〃	R3-255	R3-682	R段2E60・第22層上バサバサ	土師器・捏鉢
			R3-689	〃 2F60・第22層	
114	〃	R3-168	R3-513	P段2D55・第11～13層下部	景徳鎮窯系染付・碗
115	〃	R3-261	R3-693	R段2D59・第23層暗灰緑色砂礫	瀬戸美濃灰釉・平碗

出土遺物一覧 3

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
116	第72図	R3-182	R3-543	P段2D55・第23層	土師器・蓋
117	〃	R3-179	R3-540	〃 2H58・第22+24層	〃 ・土釜
118	〃	R3-166	R3-510	〃 2C55・第11～13層下の礫層	瓦質・捏鉢
119	第73図	R3-260	R3-694	R段2D59・60第23層	〃 ・〃
120	〃	R3-183	R3-544	P段2D56・第23層	瓦質・土釜
第II区　溝SD12					
121	第73図	R3-76	R3-304	P段2D54・第24+26層灰緑色砂礫	土師器・坏
122	〃	R3-77	R3-303	〃 2E53・第24+26層灰緑色砂礫	〃 ・甕
123	〃	R3-78	R3-294	O段2B51・青灰色礫まじり	須恵器・皿
124	〃	R3-79	R3-306	P段2E54・最下層灰緑色砂礫層	〃 ・坏
125	〃	R3-80	R3-306	〃 2E54・最下層灰緑色砂礫層	〃 ・〃
126	〃	R3-81	R3-209	〃 2E54・灰緑色砂礫層	〃 ・蓋
127	〃	R3-82	R3-307	〃 東肩2C53	瓦器・椀
128	〃	R3-85	R3-297	O段2A50・第5'層灰色細砂	〃 ・〃
129	〃	R3-83	R3-292	〃 2B51・灰緑色砂礫層下部	〃 ・〃
			R3-293	P段2C51・灰緑色礫下部	
130	〃	R3-86	R3-297	O段2A50・第5'層灰色細砂	〃 ・〃
131	〃	R3-84	R3-292	〃 2B51・灰緑色砂礫層下部	〃 ・〃
第II区　溝SD4					
132	第73図	R3-55	R3-229	O段2E51・第7～9層	須恵器・坏
			R3-291	P段SD16・2E54・灰緑色砂礫層	
133	〃	R3-56	R3-220	O段2C50	〃 ・〃
134	〃	R3-59	R3-237	〃 2E51・第10層	〃 ・高坏
135	〃	R3-58	R3-234	〃 2C50・第10層	〃 ・甕
136	〃	R3-60	R3-225	〃 2E50・第7～9層	土師器・脚台付皿
137	〃	R3-61	R3-242	〃 2B50・上層南北ベルト	瓦器・椀
138	〃	R3-62	R3-196	〃 2B50・第5層	〃 ・小皿
139	〃	R3-64	R3-233	〃 2G52・第7～9層	白磁・皿
第II区　溝SD5					
140	第73図	R3-65	R3-251	R段2H59・第21層類似土西肩	瓦質・擂鉢
141	〃	R3-66	R3-251	〃 2H59・第21層類似土西肩	〃 ・土釜
142	〃	R3-67	R3-253	〃 2H59・第21層類似土西肩	〃 ・甕
143	〃	R3-69	R3-258	〃 2I59・下層	備前・擂鉢
144	〃	R3-68	R3-251	〃 2H59・第21層類似土西肩	〃 ・壺
145	〃	R3-70	R3-255	〃 2H59・第21層類似上　灰緑色砂礫　撹乱含む	景徳鎮窯系染付・碗
第II区　溝SD6					
146	第73図	R3-74	R3-276	T段南北ベルトより西下層	土師器・小皿
147	〃	R3-72	R3-277	T・S段2H59・側ベルト東最下層	〃 ・〃
148	〃	R3-75	R3-275	T段ベルト東・下層	白磁・皿
149	〃	R3-73	R3-278	〃 2I60・61・最下層	備前・擂鉢
第II区　堀SH27最下層					
169	第75図	R4-146	R4-1100	W段2L66・最下層中位	土師器・小皿
170	〃	R4-139	R4-1086	〃 2K67・最下層	〃 ・〃
171	〃	R4-137	R4-1086	〃 2K67・最下層	〃 ・〃
172	〃	R4-138	R4-1086	〃 2K67・最下層	〃 ・〃
173	〃	R4-147	R4-1103	〃 2K67・最下層下位	〃 ・〃
174	〃	R4-142	R4-960	〃 2L68・中層砂礫+α下層	備前・甕
			R4-1093	W段2K67・最下層上位	
175	第75図	R4-143	R4-1098	〃 2K68・最下層上位	備前・擂鉢
176	〃	R4-223	R4-1098	〃 2K68・最下層上位	鞴・羽口
177	〃	R4-141-1	R4-1083	〃 2J66・最下層	丸瓦
第II区　堀SH27下層					
178	第75図	R3-23	R3-863	S段2K65・下層下部	須恵器・高坏
179	〃	R4-121	R4-1061	W段2K69・粘土粗砂礫互層	〃 ・椀
180	〃	R4-112	R4-1049	〃 2J67・粘土粗砂互層	土師器・小皿
181	〃	R4-106	R4-1026	S段2J66・崩落土下層含む	〃 ・〃
182	〃	R4-105	R4-1026	〃 2J66・崩落土下層含む	〃 ・〃
183	〃	R4-113	R4-1044	W段2J66・下層粘土粗砂互層	〃 ・〃
184	〃	R4-114	R4-1044	〃 2J66・下層粘土粗砂互層・中層砂礫	〃 ・〃
185	〃	R4-115	R4-1044	W段2J66・下層粘土粗砂互層・中層砂礫	〃 ・〃
186	〃	R4-122	R4-1057	W段2J67・下層粘土粗砂礫互層	〃 ・〃
187	〃	R4-108	R4-1032	W段2L66・下層・緑礫混	〃 ・〃
188	〃	R4-107	R4-1031	〃 2L66・下層	〃 ・〃
189	〃	R4-134	R4-955	〃 2J68東南端・中層砂礫	瓦質・湯釜
			R4-1039	〃 2L67・下層	
			R4-1049	〃 2J67・下層粗砂互層中層砂礫含む	
			R4-1058	W段2J67・下層粘土粗砂礫互層	
			R4-1059	W段2K67・下層粘土粗砂礫互層	
			R4-1065	W段2K68・下層粘土粗砂礫互層	
			R4-1071	W段2L67・下層上位	
190	〃	R4-109	R4-1038	〃 2J68・ベルト下層	瓦質・香炉
191	〃	R4-123	R4-1058	〃 2J67・下層粘土粗砂礫互層	〃 ・風炉
192	〃	R4-124	R4-1058	W段2J67・下層粘土粗砂礫互層	備前・壺
193	〃	R3-24	R3-863	S段2K65・下層下部100～140cm	〃 ・擂鉢
194	〃	R4-127	R4-1062	W段2J68西半・下層粘土粗砂礫互層	〃 ・〃
195	〃	R4-130	R4-1060	W段2K69・下層粘土粗砂礫互層	瀬戸美濃鉄釉・天目碗
196	〃	R4-129	R4-1052	W段2J66・下層粘土粗砂礫互層	瀬戸美濃灰釉・盤
197	〃	R4-110	R4-1028	W段2K66・下層	白磁・皿
198	〃	R4-118	R4-1045	〃 2J66・下層粘土粗砂互層	景徳鎮窯系染付・皿
199	第76図	R4-117	R4-1045	W段2J66・下層粘土粗砂互層	唐津・皿
200	〃	R4-132	R4-1052	W段2J66・下層粘土粗砂互層	唐津灰釉・皿
201	〃	R4-111	R4-1031	W段2L66・下層	漳州窯系白磁・皿
202	〃	R4-119	R4-1046	W段2K66	漳州窯系染付・盤
203	〃	R4-135	R4-1076	〃 2L67・下層下位	土師器・土製紡錘車・7g
204	〃	R4-214	R4-1046	〃 2K66・下層粘土粗砂互層	鞴・羽口
第II区　堀SH27中層					
205	第76図	R3-22	R3-861	S段2J66・下層（中層に該当）	土師器・小皿
206	〃	R3-19	R3-861	〃 〃 〃	〃 ・〃
207	〃	R3-20	R3-861	〃 〃 〃	〃 ・〃
208	〃	R3-11	R3-861	〃 〃 〃	〃 ・〃
209	〃	R3-17	R3-861	〃 〃 〃	〃 ・〃
210	〃	R3-13	R3-861	〃 〃 〃	〃 ・〃

出土遺物一覧 4

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
211	第76図	R4-58	R4-969	W段2M69・中層砂礫	土師器・小皿
212	〃	R3-15	R3-861	S段2J66・下層（中層に該当）	〃・〃
213	〃	R3-14	R3-861	〃 〃 〃	〃・〃
214	〃	R3-9	R3-861	〃 〃 〃	〃・〃
215	〃	R3-21	R3-861	〃 〃 〃	〃・〃
216	〃	R3-10	R3-861	〃 〃 〃	〃・〃
217	〃	R3-12	R3-861	〃 〃 〃	〃・〃
218	〃	R4-59	R4-946	W段2M69・中層	〃・〃
219	〃	R3-16	R3-861	S段2J66・下層（中層に該当）	〃・〃
220	〃	R3-7	R3-861	〃 〃 〃	〃・〃
221	〃	R3-18	R3-861	〃 〃 〃	〃・〃
222	〃	R3-8	R3-861	〃 〃 〃	〃・〃
223	〃	R4-75	R4-994	W段2M68・中層上位青灰色粘土・上層黄灰色粘質土	〃・〃
224	〃	R4-73	R4-983	W段2K66・中層上位・細砂粗砂	〃・〃
225	〃	R4-57	R4-964	W段2K69・中層砂礫	〃・〃
226	〃	R4-60	R4-955	〃 2J68・東南・中層砂礫	〃・捏鉢
227	〃	R4-76	R4-996	〃 2K68・南縁・中層上位青灰色粘土（上層灰色粘土）	〃・塝
228	〃	R3-6	R3-396	P段SW1・2F58・第21層	瓦質・火舎
			R3-861	S段2J66・下層（中層に該当）	
229	〃	R3-4	R3-278	T段SD6・2I60・61最下層	〃・〃
			R3-479	R段東壁側溝2D60第6・7層	
			R3-855	S段2K65・下層・青灰色砂礫＋上層一部（中層に該当）	
230	〃	R3-5	R3-861	S段2J66・下層（中層に該当）	〃・〃
231	〃	R4-61	R4-800	W段2J68・撹乱耕土	備前・無徳利
			R4-840	〃 2K69・SK1043上層灰色粘土礫混	
			R4-844	W段SK1043・2K69・上層	
			R4-860	W段2I67・電柱撹乱	
			R4-941	〃・2L68・上層礫混灰色粘土	
			R4-968	〃・2M69・中層砂礫角礫	
			R4-996	〃・2K68南縁・中層上位青灰色粘土（上層灰色粘土）	
232	〃	R4-93	R4-1012	W段2L68東半・中層下位	瀬戸美濃灰釉・丸皿
233	〃	R4-62	R4-960	〃 2L68・中層砂礫＋α下層	瀬戸美濃鉄釉・天目碗
234	〃	R4-95	R4-1017	〃 2L67・中層下層・暗青灰色粘土	〃・天目碗
235	〃	R4-5	R4-862	W段2J・2K67・青灰色土黄橙色直下サブトレー括	中国青磁・輪花皿
236	〃	R4-74	R4-983	W段2K66・中層上位・細砂粗砂	青磁・茶杓置き？
237	〃	R4-96	R4-1021	W段2K68・中層下位暗青灰色粘土（中層砂礫含む）	白磁・皿
238	〃	R4-94	R4-1013	W段2L68・中層下位	〃・皿
239	〃	R4-63	R4-963	〃 2J69南縁・中層砂礫	景徳鎮窯系染付・碗
240	〃	R4-83	R4-988	〃 2J68・中層上位・青灰色粘土	漳州窯系染付・碗
241	〃	R4-71	R4-980	W段2M68・中層上位	景徳鎮窯系染付・皿
242	〃	R4-64	R4-945	〃 2L69・中層	中国褐釉・壺
243	〃	R4-97	R4-1016	〃 2L67・中層下位暗青灰色粘土	朝鮮粉青沙器・舟徳利
244	第77図	R4-78	R4-991	W段2K68・中層上位青灰色粘土	瀬戸美濃鉄釉・鬢皿
245	〃	R4-102	R4-1022	〃 2K68・中層下位暗灰色粘土中層礫含む	志野系・皿
246	〃	R4-67	R4-953	W段2J68・中層砂礫（上層）	志野・向付
247	〃	R4-99	R4-1021	〃 2K68・中層下位・暗青灰色粘土（中層砂礫含む）	唐津灰釉(胎土目)・皿
248	〃	R4-100	R4-1017	W段2L67・中層下位・暗青灰色粘土	絵唐津・皿
249	〃	R4-101	R4-1015	W段2K67・中層下位・暗青灰色粘土	唐津灰釉・ぐい呑
250	〃	R4-66	R4-963	W段2J69・南縁・中層砂礫	唐津・碗
251	〃	R4-81	R4-988	〃 2J68・中層上位・青灰色粘土	〃・〃
252	〃	R4-98	R4-1017	W段2L67・中層下位・暗青灰色粘土	唐津・皿
253	〃	R4-84	R4-996	W段2K68・南縁中層上位青灰色粘土	漳州窯系染付・碗
254	〃	R4-144	R4-1093	W段2K67・最下層上位	景徳鎮窯系白磁・皿
				〃 2K68中層下位暗青灰色粘土（中層砂礫含む）	
255	〃	R4-70	R4-980	W段2M68・中層上位	景徳鎮窯系青磁・輪花皿
256	〃	R4-65	R4-954	〃 2J68西南・中層砂礫	堺・擂鉢
257	〃	R4-87	R4-988	〃 2J68・中層上位青灰色粘土	有孔土製品・(瓦) 68g
258	〃	R4-69	R4-957	W段2K68・中層砂礫	円盤状土製品・(瓦) 65g
259	〃	R4-86	R4-996	〃 2K68・南縁中層上位青灰色粘土（上層灰色粘土）	〃・(〃) 54g
260	〃	R4-104	R4-1022	W段2K68・中層下位・暗灰色粘土中層砂礫含む	〃・(〃) 92g
261	〃	R4-103	R4-1022	W段2K68・中層下位・暗灰色粘土中層砂礫含む	円盤状土製品・(備前) 54g
262	〃	R4-72	R4-975	W段SL67・中層上位	円盤状土製品・(絵唐津) 24g
263	〃	R4-68	R4-961	〃 SJ69・中層砂礫（最上層・上層）	〃・(瀬戸美濃) 29g
264	〃	R4-91	R4-1005	W段2L67・中層上位礫混青灰色粘土	軒丸瓦
第II区　堀SH29最下層					
265	第77図	R4-215	R4-875	W段SH27の上・2J67・2～4層	瓦質？・塝
			R4-895	〃 SH27・2I68・最上層	
			R4-984	〃 SH27・2K66・中層上位細砂粗砂	
			R4-1170	V段2G68・中層上位	
			R4-1173	〃 2G66・中層	
			R4-1185	〃 2G66・下層	
			R4-1214	〃 2G66・下層上位	
			R4-1219	〃 2F66・最下層	
266	〃	R4-216	R4-1218	〃 2F66・〃	瓦質・火舎
267	〃	R4-217	R4-1223	〃 2G66・〃	備前・徳利
268	〃	R3-44	R3-897	〃 2G65・〃	〃・甕
269	〃	R4-218	R4-1219	〃 2F66・〃	青磁・聞香炉
270	〃	R4-221	R4-1226	〃 2G67・〃	肥前系・碗
271	〃	R3-46	R3-897	〃 2G65・〃	波佐見・染付天目碗
272	〃	R4-219	R4-1226	〃 2G67・〃	〃・碗
273	〃	R4-222	R4-1224	〃 2F66・〃 門部	土師器・小皿
274	〃	R3-45	R3-895	〃 2F65・最下層	軒平瓦
275	〃	R4-225	R4-861	V段SH27EWベルト2I・2J67・サブトレー括	須恵器・土馬
276	〃	R4-226	R4-1017	W段SH27・2L67中層下位暗青灰色粘土	〃・〃
			R4-1196	V段2F67・下層	
277	〃	R4-224	R4-1225	〃 2G66・最下層	〃・〃

出土遺物一覧 5

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
第Ⅱ区　堀ＳＨ29下層					
278	第78図	R4-201	R4-1211	Ⅴ段２Ｇ66・下層上位	土師器・皿
279	〃	R4-183	R4-1202	〃　２Ｆ68・下層	〃　・小皿
280	〃	R3-39	R3-891	〃　２Ｆ64・〃	〃　・〃
281	〃	R4-181	R4-1191	〃　２Ｇ66・〃	〃　・〃
282	〃	R4-180	R4-1191	〃　２Ｇ66・〃	〃　・〃
283	〃	R4-185	R4-1202	〃　２Ｆ68・〃	〃　・〃
284	〃	R4-182	R4-1191	〃　２Ｇ66・〃	〃　・〃
285	〃	R3-38	R3-892	〃　２Ｆ65・〃	〃　・〃
286	〃	R4-198	R4-1206	〃　２Ｆ67・下層砂礫	〃　・鍋
287	〃	R4-186	R4-1191	〃　２Ｇ66・下層	瓦質・火舎
288	〃	R4-187	R4-1195	〃　２Ｆ67・〃	〃　・香炉
289	〃	R4-207	R4-1214	〃　２Ｇ66・下層上位	備前？・壺
290	〃	R4-210	R4-1198	〃　２Ｆ67・下層東壁拡張	備前・擂鉢
			R4-1204	〃　２Ｆ68・〃　〃　〃	
291	〃	R4-202	R4-1215	〃　２Ｇ67・下層上位	〃　・〃
292	〃	R4-209	R4-1216	〃　２Ｆ66・下層下位	瀬戸美濃灰釉・丸皿
293	〃	R4-195	R4-1192	〃　２Ｇ66・下層	〃　・折縁皿
294	〃	R3-40	R3-892	〃　２Ｆ65・〃	瀬戸美濃・鉢
295	〃	R4-188	R4-1189	〃　２Ｇ66・〃	瀬戸美濃鉄釉・天目碗
296	〃	R4-189	R4-1200	〃　２Ｇ67・〃	〃　・〃　〃
297	〃	R4-190	R4-1199	〃　２Ｇ67・〃	信楽・徳利？
298	〃	R4-194	R4-1199	〃　２Ｇ67・〃	青磁・盤
299	〃	R4-191	R4-1185	〃　２Ｆ66・〃	〃　・碗
300	〃	R4-193	R4-1203	〃　２Ｆ68・〃	染付・皿
301	〃	R4-192	R4-1202	〃　２Ｆ68・〃	〃　・皿
302	〃	R3-43	R3-890	〃　２Ｆ64・〃	漳州窯系染付・碗
303	〃	R3-42	R3-888	〃　２Ｆ65・中層下位	景徳鎮窯系白磁・碗
			R3-892	〃　２Ｆ65・下層	
304	〃	R3-41	R3-890	〃　２Ｆ64・〃	象眼青磁粉青沙器・鉢
305	〃	R4-213	R4-1198	〃　２Ｆ67・下層東壁拡張	波佐見・碗
306	〃	R4-206	R4-1215	〃　２Ｇ67・下層上位	〃　・〃
307	〃	R4-199	R4-1206	〃　２Ｇ68・下層砂礫	伊万里・陶胎染付碗
308	〃	R4-205	R4-1215	〃　２Ｇ67・下層上位	波佐見・皿
309	〃	R4-196	R4-1191	〃　２Ｇ66・下層	唐津・胎土目絵皿
310	〃	R4-203	R4-1213	〃　２Ｇ66・下層上位	唐津鉄釉・碗
311	〃	R4-197	R4-1188	〃　２Ｆ66・下層	肥前系唐津・碗
312	〃	R4-204	R4-1215	〃　２Ｇ67・下層上位	〃　・鉢
313	〃	R4-200	R4-1206	〃　２Ｇ68・下層砂礫	円盤状土製品・(青磁碗) 83g
314	〃	R4-208	R4-1215	〃　２Ｇ67・下層上位	軒平瓦
第Ⅱ区　堀ＳＨ29中層					
315	第78図	R3-31	R3-885	Ⅴ段２Ｈ65・中層	土師器・小皿
316	〃	R3-37	R3-889	〃　２Ｇ65・中層下位	〃　・〃
317	〃	R3-30	R3-882	〃　２Ｇ64・中層	〃　・〃
318	〃	R4-168	R4-1183	〃　２Ｇ68・〃	〃　・〃
319	〃	R4-169	R4-1183	〃　２Ｇ68・〃	〃　・〃
320	〃	R3-29	R3-884	〃　２Ｇ65・〃	〃　・〃
321	〃	R4-157	R4-1162	〃　２Ｇ67・中層砂礫	〃　・〃
322	〃	R3-28	R3-884	〃　２Ｇ65・中層	〃　・〃
323	〃	R4-156	R4-1162	〃　２Ｇ67・中層砂礫	〃　・〃
324	〃	R4-170	R4-1170	〃　２Ｇ68・中層上位	〃　・蓋
			R4-1177	〃　２Ｇ67・中層	
325	第79図	R4-158	R4-1162	〃　２Ｇ67・中層砂礫	〃　・火舎
326	〃	R4-165	R4-1166	〃　２Ｇ66・中層上位	瓦質・鍋
327	〃	R3-32	R3-885	〃　２Ｈ65・中層	〃　？・鍋
328	〃	R4-164	R4-1170	〃　２Ｇ68・中層上位	〃　・土釜
329	〃	R4-171	R4-1171	〃　２Ｆ66・中層東壁拡張	〃　・〃
330	〃	R3-33	R3-879	〃　２Ｇ65・中層	〃　・甕
			R3-885	〃　２Ｈ65・中層	
331	〃	R4-173	R4-1182	〃　２Ｇ68・中層混(上層)	〃　・香炉
332	〃	R4-174	R4-1146	〃　２Ｇ68・上層	〃　・〃
			R4-1182	〃　２Ｇ68・中層混	〃　・〃
333	〃	R4-159	R4-1157	〃　２Ｇ67・中層砂礫	備前・水指
			R4-1160	Ⅴ段２Ｇ68・中層砂礫含む（上層下位）	
334	〃	R4-175	R4-1172	〃　２Ｇ66・中層上層下位	備前・壺
335	〃	R4-176	R4-1182	〃　２Ｇ68・中層砂礫	〃　・擂鉢
336	〃	R3-34	R3-882	〃　２Ｇ64・中層	白磁・皿
			R3-884	〃　２Ｇ65・〃	〃　・〃
337	〃	R4-161	R4-1161	〃　２Ｇ68・中層砂礫	景徳鎮窯系染付・皿
338	第79図	R3-35	R3-884	Ⅴ段２Ｇ65・中層	景徳鎮窯系染付・皿
339	〃	R4-166	R4-1166	〃　２Ｇ66・中層上位	唐津・碗
340	〃	R4-163	R4-1162	〃　２Ｇ67・中層砂礫	唐津（胎土目）・皿
341	〃	R4-178	R4-1174	〃　２Ｆ67・中層	波佐見青磁・皿
342	〃	R4-179	R4-1174	〃　２Ｇ66・〃	円盤状土製品・(瓦) 240g
第Ⅱ区　堀ＳＨ27・ＳＨ29上層・最上層他					
343	第79図	R4-150	R4-1111	Ⅴ段２Ｆ67・一括東壁	須恵器・皿
344	〃	R4-34	R4-911	Ｗ段ＳＨ27・２Ｉ２Ｊ69最上層トレンチ南壁沿い	〃　・鍋
345	〃	R4-28	R4-874	Ｗ-Ⅴ段土橋～ＳＨ27 ＥＷベルト２Ｉ２Ｊ67・第２～４層	瓦器・椀
346	〃	R4-27	R4-863	Ｗ段ＳＨ27・２Ｉ66・２～４層　暗青灰色細砂上端	〃　・〃
347	〃	R4-152	R4-1133	Ⅴ段ＳＨ29・２Ｇ66上層	土師器・小皿
348	〃	R4-148	R4-1101	Ⅴ段ＳＨ27・２Ｋ67最下層下位	〃　・〃
349	〃	R3-25	R3-868	Ⅴ段２Ｇ64・淡灰橙色細砂	〃　・〃
350	〃	R4-149	R4-1103	Ｗ段ＳＨ27・２Ｋ67最下層下位	〃　・〃
351	〃	R3-2	R3-835	Ｓ段ＳＤ27・２Ｊ65第５層汚土	〃　・〃
352	〃	R4-1	R4-739	Ｗ段２Ｋ69・暗渠1024	〃　・〃
353	〃	R4-35	R4-914	〃　ＳＨ27攪乱・２Ｊ69最上層暗渠埋土含む	〃　・〃
354	〃	R4-47	R4-912	Ｗ段ＳＨ27・２Ｍ68上層黄灰色粘質土	〃　・〃
355	〃	R3-3	R3-850	Ｓ段ＳＤ27・２Ｊ65第７層	〃　・鍋
356	〃	R4-48	R4-943-a	Ｗ段ＳＨ27・２Ｌ69上層礫混灰色粘土	〃　・〃
357	〃	R3-1	R3-829	Ｓ段２Ｉ65・第５～７層	備前・壺
358	第80図	R4-36	R4-918	Ｗ段ＳＨ27・２Ｋ69最上層攪乱含む	〃　・擂鉢
359	〃	R4-153	R4-1146	Ⅴ段ＳＨ29・２Ｇ68上層	堺・擂鉢
360	〃	R4-154	R4-1140	〃　ＳＨ29・２Ｇ67　〃	〃・〃
361	〃	R4-39	R4-901	Ｗ段ＳＨ27・２Ｊ68最上層	〃・〃
362	〃	R4-4	R4-778	Ⅴ段２Ｆ69・攪乱1013一括	備前・擂鉢
363	〃	R4-3	R4-739	Ｗ段２Ｋ69・暗渠1024	丹波・擂鉢
364	〃	R4-33	R4-867	〃　ＳＨ27・２Ｊ66・第２～４層	志戸呂・擂鉢
365	〃	R4-37	R4-919	〃　ＳＨ27・２Ｌ69・最上層	備前・水指
366	〃	R4-38	R4-914	〃　ＳＨ27・２Ｊ69攪乱最上層埋土含む	〃　・〃
367	〃	R4-31	R4-881	Ｗ段ＳＨ27・２Ｊ69第２～４層最上層	〃　・〃
368	〃	R4-40	R4-873	Ｗ段ＳＨ27・２Ｊ67東西ライン暗渠含む	瀬戸系・鉢
369	〃	R4-41	R4-900	Ｗ段ＳＨ27・２Ｍ68・２Ｊ68　最上層	嬉野内ノ磯窯・皿
370	〃	R4-2	R4-733	Ⅴ・Ｗ段排土	絵唐津・皿
371	〃	R4-49	R4-937	Ｗ段ＳＨ27・２Ｍ69・上層	唐津長石釉・碗
372	〃	R4-50	R4-943-a	〃　ＳＨ27・２Ｌ69・上層礫混灰色粘土	唐津鉄釉・天目碗
373	〃	R4-32	R4-874	Ｗ・Ⅴ段・土橋～ＳＨ27・ＥＷベルト２Ｉ２Ｊ67・第２～４層	唐津・鉢
374	〃	R4-42	R4-920	Ｗ段ＳＨ27・２Ｌ69・最上層暗渠埋土含む	〃　・〃
375	〃	R4-29	R4-866	Ｗ段ＳＨ27・２Ｊ66・２～４層	白磁・皿
376	〃	R4-52	R4-943-a	〃　ＳＨ27・２Ｌ69・上層礫混灰色粘土	漳州窯系染付・碗
377	〃	R3-27	R3-876	Ⅴ段ＳＨ29・２Ｈ64・上層	景徳鎮窯系染付・皿
378	〃	R4-53	R4-935	Ｗ段ＳＨ27・２Ｋ68・上層	漳州窯系染付・盤
379	〃	R4-56	R4-936	〃　ＳＨ27・２Ｍ68・上層	有孔土製品・26g

出土遺物一覧 6

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
380	第80図	R4-151	R4-1115	V段SH29・2F66・最上層	有孔土製品・(瓦) 47g
381	〃	R4-54	R4-943-a	W段SH27・2L69・上層礫混灰色粘土	円盤状土製品・(瓦) 94g
382	〃	R4-55	R4-943-a	W段SH27・2L69・上層礫混灰色粘土	〃 ・(瓦) 57g
383	〃	R4-145	R4-1089	W段SH27・2K66最下層上位	雁振瓦
第II区　堀SH27最上層他					
384	第81図	R4-46	R4-925	〃 SH27・2J69・最上層粗砂	丸瓦
385	〃	R4-6	R4-821	W段2J67・撹乱1031一括	〃
第II区　土坑SK1018					
386	第81図	R4-9	R4-833	W段2I67・68	瓦器・椀
387	〃	R4-10	R4-833	〃 〃 ・〃	〃 ・〃
388	〃	R4-11	R4-833	〃 〃 ・〃	〃 ・〃
第II区　土坑SK1043					
389	第81図	R4-12	R4-841	W段SH27・2M69・上層　黄灰色粘質土灰色粘土	瓦質・捏鉢
390	〃	R4-21	R4-841	W段SH27・2M69・上層　黄灰色粘質土灰色粘土	朝鮮粉青沙器・碗
391	〃	R4-13	R4-844	W段SH27・2K69・上層	備前・擂鉢
392	〃	R4-15	R4-841	W段SH27・2M69・上層　黄灰色粘質土灰色粘土	瀬戸美濃・盤
393	〃	R4-14	R4-836	W段2L69	美濃窯系鉄釉・天目碗
394	〃	R4-20	R4-839	〃 SH27・2L69・上層灰色粘土	織部・向付
395	〃	R4-19	R4-838	〃 SH27・2L69・上層	波佐見・碗
396	〃	R4-18	R4-841	〃 SH27・2M69・上層　黄灰色粘質土灰色粘土	唐津・水指
397	〃	R4-17	R4-846-a	W段SH27・2K69・中層上位	〃 ・碗
398	〃	R4-16	R4-841	〃 SH27・2M69・上層　黄灰色粘質土灰色粘土	〃 ・皿
399	〃	R4-22	R4-839	W段SH27・2L69・上層　灰色粘土	円盤状土製品・(須恵器) 11g
400	〃	R4-24	R4-844	W段SH27・2K69・上層	〃 ・(瓦) 76g
401	〃	R4-23	R4-844	〃 〃 ・〃 ・〃	〃 ・(青磁碗高台部) 87g
第II区　土坑SK1044					
402	第81図	R4-26	R4-850	V段2F69・下層	肥前系・碗
403	〃	R4-25	R4-850	〃 〃 ・〃	波佐見・〃
第II区　池状遺構SW3					
496	第87図	R3-128	R3-431	P段2E54・第14・16層一部22層	瓦器・椀
497	〃	R3-129	R3-451	〃 2D57第14・16層一部礫層	土師器・小皿
498	〃	R3-146	R3-458	〃 2E53第17～20層上部	須恵質・捏鉢
499	〃	R3-132	R3-448	〃 2G55第14・16層第22層含む	瓦質・土釜
500	〃	R3-133	R3-451	P段2D57第14～16層＋一部礫層	〃 ・〃
501	〃	R3-130	R3-446	P段2G56第14・16層上部	〃 ・捏鉢
502	〃	R3-131	R3-451	〃 2D57第14・16層＋一部礫層	〃 ・〃
503	〃	R3-134	R3-452	P段2E58第14・16層＋一部礫層	備前・壺
504	〃	R3-139	R3-452	P段2E58第14・16層＋一部礫層	白磁・角杯
505	〃	R3-149	R3-456	P段2D52第17～20層上部	青磁・盤
506	〃	R3-138	R3-450	〃 2C56第14・16層＋一部礫層	〃 ・〃
507	〃	R3-137	R3-953	P段2E55・第14・16層	青磁・鉢
508	第87図	R3-141	R3-441	P段2F56・第14・16層	染付・碗
509	〃	R3-140	R3-452	〃 2E58・第14・16層＋一部礫層・第22層を含む	〃 ・〃
510	〃	R3-143	R3-430	P段2D54第14・16層一部22層	嬉野内ノ磯窯緑釉・皿
511	〃	R3-136	R3-446	P段2G56・第14・16層	瀬戸美濃・燭台
512	〃	R3-135	R3-452	〃 2E58第14・16層＋一部礫層	唐津鉄釉・瓶
第II区　池状遺構SW2					
513	第87図	R3-109	R3-428	P段2D57第11～13層下部礫有り＋22層	土師器・皿
514	〃	R3-111	R3-421	P段2C54第11～13層一部礫層	〃 ・小皿
515	〃	R3-110	R3-422	P段2C55第11～13層下の礫層含む	〃 ・小皿
516	〃	R3-107	R3-407	P段2C54・第11～13層	〃 ・小皿
517	〃	R3-108	R3-426	〃 2H5・6第11～13層	〃 ・小皿
518	〃	R3-120	R3-428	〃 2D57第11～13層＋22層下部礫有り	〃 ・捏鉢
			R3-467	R段2E59・田畑整地土＋α　第6～7層	
519	〃	R3-112	R3-428	P段2D57第11～13層下部礫有り＋22層	土師器・土釜
520	〃	R3-113	R3-428	P段2D57第11～13層下部礫有り＋22層	
521	〃	R3-114	R3-405	P段センターより西側T第8層＋淡灰色細砂	〃 ・鍋
522	〃	R3-115	R3-423	P段2C55第11～13層＋一部礫層	〃 ・〃
523	〃	R3-116	R3-423	P段2C55第11～13層＋一部礫層	瓦質・土釜
524	〃	R3-119	R3-408	P段2D54・第11～13層	備前・擂鉢
525	〃	R3-117	R3-117	〃 2D54下部第11～13層	〃 ・壺
526	〃	R3-118	R3-408	〃 2D54・第11～13層	〃 ・甕
527	〃	R3-121	R3-416	〃 2F55・ 〃	白磁・皿
528	〃	R3-123	R3-413	〃 2D55・ 〃	景徳鎮窯系染付・皿
529	〃	R3-122	R3-409	〃 2D54・ 〃	〃 ・〃
530	〃	R3-125	R3-413	〃 2D55・ 〃	軒丸瓦
第II区　池状遺構SW1					
531	第88図	R3-87	R3-397	P段2G58・第21層	須恵器・蓋
532	〃	R3-88	R3-386	〃 2G57・ 〃	瓦器・椀
533	〃	R3-89	R3-383	〃 2E57・ 〃	土師器・小皿
534	〃	R3-92	R3-397	〃 2G58・ 〃	〃 ・〃
535	〃	R3-94	R3-326	〃 2E57・第5～7層	〃 ・〃
536	〃	R3-91	R3-398	〃 2H58・第21層	〃 ・〃
537	〃	R3-93	R3-398	〃 2H58・ 〃	〃 ・〃
538	〃	R3-95	R3-317	〃 2D56・第5～7層	〃 ・〃
539	〃	R3-90	R3-316	〃 2D56・2E56第5層（～7層）	〃 ・〃
540	〃	R3-53	R3-309	〃 南縁センターより東半　段整地砂礫層＋α上層	〃 ・〃
541	〃	R3-96	R3-398	P段2H58・第21層	〃 ・捏鉢
542	〃	R3-98	R3-393	〃 2D58・ 〃	〃 ・土釜
543	〃	R3-97	R3-393	〃 〃 ・〃	〃 ・〃
544	〃	R3-99	R3-389	〃 2H57・ 〃	〃 ・〃
545	〃	R3-100	R3-357	〃 2E57・第15層	瓦質・鍋
546	〃	R3-105	R3-317	〃 2D56・第5～7層	備前・擂鉢
547	〃	R3-101	R3-374	〃 2E56・第21層	瀬戸美濃・天目碗
548	〃	R3-102	R3-324	〃 2D57・第5（～7層）	青磁・盤
549	〃	R3-103	R3-344	〃 2E58・第5'～7'層	白磁・皿

出土遺物一覧 7

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
550	第88図	R3-54	R3-309	P段南縁センターより東半段整地砂礫層＋α上層	青磁・皿
551	〃	R3-106	R3-354	P段2F56・第15層	唐津・碗
			R3-358	〃 2F57・ 〃	
			R3-365	〃 2F58・ 〃	
第II区　R段　整地土地					
552	第88図	R3-150	R3-471	2D59・第6～7層	須恵器・坏
553	〃	R3-155	R3-486	2G61・第6・7層	土師器・小皿
554	〃	R3-50	R3-141	検出2H52	土師器・皿
555	〃	R3-153	R3-465	2D59・第6～7層	〃 ・小皿
556	〃	R3-154	R3-474	2D60・第6・7層	〃 ・〃
557	〃	R3-47	R3-1010	不明	〃 ・皿
558	〃	R3-152	R3-500	2G60・第6～7層下部	須恵質・捏鉢
559	〃	R3-151	R3-478	2G60・第6・7層	〃 ・〃
560	〃	R3-161	R3-446	2E59・第6～7層	土師器・捏鉢
			R3-480	2G60・2G61・第6・7層	
			R3-483	2H60・第6・7層第21層類似	
561	〃	R3-156	R3-473	2H59・第6・7層＋第22層	〃 ・土釜
562	〃	R3-157	R3-495	2H60・第6～7層上部	〃 ・鍋
563	〃	R3-158	R3-465	2D59・第6～7層	瓦質・捏鉢
564	〃	R3-159	R3-465	2D59・第6～7層	〃 ・土釜
565	〃	R3-49	R3-52	整地撹乱・田畑整地土2J59	〃 ・火舎
566	〃	R3-162	R3-501	2H60・第6～7層下部	備前・擂鉢
567	〃	R3-52	R3-159	検出2G55	染付・皿
568	〃	R3-48	R3-39	整地撹乱2E58	土師器・捏鉢
第II区　Q・T段　遺構包含層					
569	第89図	R3-274	R3-781	Q段2H53・第7・8層上部	土師器・甕
570	〃	R3-277	R3-217	〃 SD4・2H52・第7・8層	須恵器・壺
			R3-743	〃 北側東半T第5層＋礫混6層より上	
571	〃	R3-267	R3-718	U段谷状地形2G63a層	〃 ・〃
572	〃	R3-276	R3-786	Q段2I53・第7・8層下部	〃 ・坏
573	〃	R3-289	R3-783	〃 2I54・第7・8層上部	土師器・皿
574	〃	R3-271	R3-753	〃 2J57・第6層	〃 ・小皿
575	〃	R3-273	R3-745	〃 2I54・2I53・第6・7層	〃 ・小皿
576	〃	R3-278	R3-771	〃 2I55・第7・8層	〃 ・〃
577	〃	R3-279	R3-787	〃 2H54・第7・8層下部	〃 ・〃
578	〃	R3-280	R3-786	〃 2I53・第7・8層下部	〃 ・〃
579	〃	R3-284	R3-788	〃 2H54・第7・8層下部	瓦器・椀
580	〃	R3-285	R3-764	〃 2I53・第7・8層	〃 ・〃
581	〃	R3-286	R3-764	〃 2I53・第7・8層	〃 ・小皿
582	〃	R3-287	R3-784	〃 2H53・第7・8層下部	〃 ・〃
583	〃	R3-272	R3-754	〃 2J58・第6層	土師器・皿
584	〃	R3-281	R3-761	〃 2G53・第7・8層	〃 ・〃
585	〃	R3-290	R3-767	〃 2H55・第7・8層	〃 ・〃
586	〃	R3-293	R3-815	T段2K63・第6層上	〃 ・〃
587	〃	R3-288	R3-765	Q段2I54・第7・8層	〃 ・小皿
588	〃	R3-298	R3-919	T段SK39・一括	〃 ・〃
589	〃	R3-282	R3-786	Q段2I53・第7・8層下部	〃 ・高台付椀
590	〃	R3-283	R3-786	〃 2I53・第7・8層下部	〃 ・〃
591	〃	R3-292	R3-790	〃 2I55・第7・8層下部	白磁・皿
592	〃	R3-296	R3-803-a	T段2J59・第5～6層	〃 ・〃
593	第89図	R3-297	R3-907	P段SK20・2G54一括	青磁・碗
594	〃	R3-295	R3-801-b	T段2K62・第1～3層	〃 ・〃
595	〃	R3-294	R3-810	〃 2L62・第6層より上＋6層西壁サブトレ	土師器・甕
596	〃	R3-291	R3-780	Q段2G53・第7・8層上部	瓦質・鍋
第III区					
607	第90図	R4-272	R4-216	K段SD38・T35・中層	瓦器・椀
608	〃	R4-273	R4-213	〃 〃 T35・上層褐色礫混	〃 ・〃
609	〃	R4-276	R4-209	〃 〃 T31・上層	青磁・碗
610	〃	R4-274	R4-225	〃 SD39・T35・灰褐色砂礫	土師器・小皿
611	〃	R4-275	R4-225	〃 〃 T35・〃	瓦質・土釜
612	〃	R4-466	R4-722	N段SD289・2C47・礫層　南側EW礫	土師器・小皿
613	〃	R4-341	R4-359	L段SD198・2B45	青磁・碗
614	〃	R4-337	R4-343	〃 SK234・W41	土師器・皿
615	〃	R4-339	R4-349	〃 SK241・一括	瓦器・椀
616	〃	R4-340	R4-351	〃 SK244・X43	〃 ・〃
617	〃	R4-342	R4-493	L'段SK285・2D45	土師器・土釜
618	〃	R4-338	R4-346	L段SK237・一括	須恵質・捏鉢
619	〃	R4-462	R4-704	N段SK291・西半一括	土師器・皿
620	〃	R4-464	R4-704	〃 〃 ・ 〃	〃 ・〃
621	〃	R4-463	R4-704	〃 〃 ・ 〃	〃 ・小皿
622	〃	R4-465	R4-703	〃 〃 ・ 〃	〃 ・土釜
623	〃	R4-458	R4-712	〃 SK290・NSベルト一括	〃 ・皿
624	〃	R4-459	R4-702	〃 〃 2B47・上層	〃 ・皿
625	〃	R4-470	R4-701	〃 〃 2A47・上層	〃 ・坩堝
626	〃	R4-460	R4-701	〃 〃 2A47・上層	〃 ・土釜
627	〃	R4-407	R4-422	L'段包含層落ち・2E46・a層	常滑・甕
			R4-480	〃 〃 2B45・2A45・第5層	
			R4-621	N段包含層2A47・第4層	
			R4-664	〃 〃 2A47・西半・2A48一部西半・第6層	
			R4-700	N段SE283・2B45・中層大礫灰色	
			R4-702	N段SK290・2B47・上層	
629	〃	R4-349	R4-491	L'段SE283・2B45	土師器・皿
630	〃	R4-350	R4-510	〃 SE283・2B45・最下層	〃 ・〃
631	〃	R4-351	R4-508	〃 SE283・2B45・井側内中層	瓦質・捏鉢
632	〃	R4-353	R4-700	N段 〃 ・2B45・中層	〃 ・火舎
633	〃	R4-352	R4-451	L'段包含層2A45西半・第4・5層	〃 ・湯釜（茶釜）
			R4-629	N段東側溝Y47・一括	
			R4-700	〃 SE283・2B45・中層大礫灰色	
634	〃	R4-361	R4-508	L'段SE283・2B45・井側内中層	軒丸瓦
635	第91図	R4-355	R4-505	〃 〃 掘形埋土	土師器・皿
636	〃	R4-357	R4-505	〃 〃 〃	〃 ・〃
637	〃	R4-356	R4-505	〃 〃 〃	〃 ・〃
638	〃	R4-358	R4-505	〃 〃 〃	〃 ・土釜
639	〃	R4-359	R4-507	〃 〃 掘形中層一括	〃 ・〃
644	〃	R4-343	R4-381	L段V40　Pit181	〃 ・小皿
645	〃	R4-344	R4-381	〃 〃	〃 ・〃
646	〃	R4-347	R4-381	〃 〃	瓦器・小皿
647	〃	R4-348	R4-381	〃 〃	〃 ・〃
648	〃	R4-346	R4-387	〃 Pit203・-3cm一括	土師器・皿
649	〃	R4-345	R4-539	L'段SE43・Pit319	〃 ・〃
651	〃	R4-270	R4-186	K段南側SH47・上層下部	備前・擂鉢

出土遺物一覧 8

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
652	第91図	R4-266	R4-185	K段ベルトより北西半SH47上層下半	軒丸瓦
653	〃	R4-269	R4-234	K段SW40・WX31・一括第7層	円盤状土製品・(唐津) 46g
654	〃	R4-268	R4-234	〃 〃 〃・〃	〃・(瀬戸美濃) 23g
655	〃	R4-267	R4-234	〃 〃 〃・〃	〃・(瀬戸美濃) 9g
第Ⅲ区　遺物包含層					
656	第92図	R4-278	R4-285	L段SW101内・Y40一括	土師器・皿
657	〃	R4-289	R4-316	〃 Y44・第4層	〃・小皿
658	〃	R4-290	R4-310	〃 X43東半・第4層	〃・〃
659	〃	R4-291	R4-306	〃 W43・第4層	〃・皿
660	〃	R4-294	R4-307	〃 〃・〃	瓦器・椀
661	〃	R4-304	R4-457	L'段2C45・第4層	土師器・土釜
662	〃	R4-295	R4-324	L段Y44・第4層下部＋L段南縁	〃・〃
663	〃	R4-296	R4-319	L段X43・第4層下部	須恵器・捏鉢
664	〃	R4-333	R4-482	L'段包含層西落ち・2C45・第5層	〃・〃
665	〃	R4-329	R4-456	〃 2B45・第4第5層	備前・甕
			R4-467	〃 東NSベルト・2A45・第4・第5層	
666	〃	R4-332	R4-451	〃 2A45西半・第4・第5層	青磁・坏
667	〃	R4-280	R4-290	L段SW101・W41暗灰色土	〃・皿
668	〃	R4-301	R4-332	L'段SK102・2C45・淡黄粘土質土	白磁・瓶子
	〃		R4-423	L'段2E46・a層	
669	〃	R4-277	R4-259	L段Y40・第4層面整地検出	白磁・鉢
670	〃	R4-308	R4-474	L'段南縁Y45・第4層	土師器・皿
			R4-478	〃 2A44・第4層	
671	〃	R4-293	R4-310	L段X43東半・第4層	〃・皿
672	〃	R4-281	R4-293	〃 SW101・X42暗灰色土	〃・〃
673	〃	R4-321	R4-451	L'段2A45西半・第4・第5層	〃・小皿
674	〃	R4-306	R4-475	〃 南縁Y45・第4層	〃・〃
675	〃	R4-300	R4-445	〃 2E46・第3・第4層	〃・皿
676	〃	R4-320	R4-459	〃 2C45・第4・第5層	〃・小皿
677	〃	R4-307	R4-457	〃 2C45・第4層	〃・皿
678	〃	R4-299	R4-445	〃 2E46・第3・第4層	〃・皿
679	〃	R4-292	R4-315	L段X44・第4層	〃・小皿
680	〃	R4-305	R4-463	L'段2D46・第4層	〃・〃
681	〃	R4-282	R4-278	L段SW101・V39暗灰色礫層	〃・捏鉢
682	〃	R4-322	R4-453	L'段2A45東半・第4・第5層	〃・〃
683	〃	R4-309	R4-457	〃 2C45・第4層	〃・土釜
684	〃	R4-283	R4-285	L段SW101内・Y40・一括	〃・〃
685	〃	R4-284	R4-286	〃 SW101・W39・暗灰色粘土質礫土	〃・〃
686	〃	R4-323	R4-459	L'段2C45・第4・第5層	〃・〃
687	〃	R4-315	R4-463	〃 2D46・第4層	〃・〃
			R4-468	〃 〃・第4層下部	
688	〃	R4-318	R4-481	〃 包落ち2C45・第4・第5層	〃・〃
689	〃	R4-279	R4-353	L段SW101内集石EWベルトW39・一括	〃・〃
690	第93図	R4-324	R4-465	L'段2B45・第4・第5層	〃・塝
691	〃	R4-297	R4-322	L段X44・第4層下部	〃・〃
692	〃	R4-286	R4-286	〃 SW101・W39暗灰色粘土質礫土	瓦質・捏鉢
693	〃	R4-311	R4-463	L'段2D46・第4層	〃・〃
694	〃	R4-310	R4-476	〃 南縁Y44・第4層	〃・〃
695	〃	R4-316	R4-470	L'段2F46・第4層下部	〃・〃
696	〃	R4-285	R4-286	L段SW101・W39・暗灰色粘土質礫土	土師質・捏鉢
697	図93図	R4-325	R4-459	L'段2C45・第4・第5層	瓦質・捏鉢
698	〃	R4-287	R4-286	L段SW101・W39・暗灰色粘土質礫土	〃・土釜
699	〃	R4-326	R4-451	L'段2A45西半・第4・第5層	〃・〃
700	〃	R4-327	R4-459	〃 2C45・第4・第5層	〃・〃
701	〃	R4-334	R4-480	〃 包含層落ち2A45西半2B45・第5層	〃・〃
702	〃	R4-312	R4-463	L'段2D46・第4層	〃・甕
703	〃	R4-302	R4-332	L段SK102・2C45・淡黄粘土質土	〃・〃
			R4-422	L'段2E46・a層	
704	〃	R4-303	R4-419	L段SK102・2B45・淡黄粘土質土	〃・火舎
705	〃	R4-298	R4-322	L段X44・第4層下部	備前・擂鉢
706	〃	R4-335	R4-480	L'段包含層落ち2A45西半2B45・第5層	〃・〃
707	〃	R4-313	R4-463	L'段2D46・第4層	青磁・碗
708	〃	R4-328	R4-455	〃 2B45・第4・第5層	〃・〃
709	〃	R4-336	R4-480	〃 包含層落ち2A45西半2B45・第5層	瀬戸美濃灰釉・筒香炉
			R4-577	N段2B46・第3層	
710	〃	R4-314	R4-463	L'段2D46・第4層	円盤状土製品・(青磁) 93g
711	〃	R4-330	R4-459	〃 2C45・第4・第5層	〃・(瓦) 81g
716	第94図	R4-405	R4-663	N段2G50・第6層	土師器・坏
717	〃	R4-371	R4-555	〃 2B47・A層	〃・皿
718	〃	R4-373	R4-569	〃 東NSベルト2A46・A層	〃・〃
719	〃	R4-400	R4-619	〃 2B46・第4層大礫	〃・〃
720	〃	R4-399	R4-619	N段2B46・第4層大礫	土師器・皿
721	〃	R4-430	R4-669	〃 2E48・第7層	〃・〃
722	〃	R4-428	R4-674	〃 2E49・〃	〃・〃
723	〃	R4-429	R4-674	〃 〃・〃	〃・〃
724	〃	R4-434	R4-692	〃 2D48東半・第8層	〃・〃
725	〃	R4-398	R4-619	〃 2B46・第4層大礫	〃・〃
726	〃	R4-433	R4-682	〃 2A47南端・2A48北端第8層	〃・〃
727	〃	R4-426	R4-674	N段2E49・第7層	〃・〃
728	〃	R4-432	R4-692	〃 2D48東半・第8層	〃・〃
729	〃	R4-427	R4-674	〃 2E49・第7層	〃・〃
730	〃	R4-439	R4-690	〃 2D49一部2D48・第8層	〃・大皿
731	〃	R4-438	R4-690	〃 〃・〃	〃・〃
732	〃	R4-437	R4-690	〃 〃・〃	〃・〃
733	〃	R4-431	R4-647	〃 2E49・第7層	〃・皿
734	〃	R4-385	R4-631	〃 2D48・第4層	〃・小皿
735	〃	R4-467	R4-717	〃 2B47・2C47・遺構埋土ベース面検出	〃・〃
736	〃	R4-401	R4-619	N段2B46・第4層大礫	〃・〃
737	〃	R4-436	R4-690	〃 2D49一部2D48・第8層	〃・皿
738	〃	R4-372	R4-557	〃 2E47・A層	〃・〃
739	〃	R4-435	R4-690	〃 2D49一部2D48・第8層	〃・〃
740	〃	R4-412	R4-620	〃 2A47・第4層	〃・捏鉢
			R4-627	〃 Y47・第4層	
			R4-645	〃 2A47・第6層	
			R4-701	〃 SK190・2A47・上層	
741	〃	R4-403	R4-643	〃 2C45・46・第4第5層	〃・〃
742	〃	R4-415	R4-665	〃 2A47・第6層	〃・土釜
743	〃	R4-386	R4-615	〃 2A46・第4層	〃・〃
			R4-623	〃 2B47・第4層	
744	〃	R4-416	R4-666	〃 Y47南半・第6層	〃・〃
745	〃	R4-441	R4-690	〃 2D49一部2D48第8層	〃・〃
746	〃	R4-388	R4-618	〃 2B46・第4層	〃・〃
747	〃	R4-414	R4-652	〃 2D48・第6層	〃・〃
748	〃	R4-442	R4-690	N段2D49一部2D48・第8層	〃・〃

出土遺物一覧 9

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
749	第94図	R4-413	R4-616	N段2A46・第4層	土師器・土釜
			R4-621	〃 2A47・ 〃	
			R4-652	〃 2D48・第6層	
750	〃	R4-440	R4-690	〃 2D49一部2D48・第8層	〃 ・〃
751	第95図	R4-445	R4-692	〃 2D48東半・第8層	〃 ・塝
752	〃	R4-443	R4-631	〃 2D48・第4層	〃 ・〃
			R4-656	〃 2D49・第6層	
			R4-690	〃 2D49一部2D48・第8層	
753	〃	R4-444	R4-631	〃 2D48・第4層	〃 ・〃
			R4-690	〃 2D49一部2D48・第8層	
754	〃	R4-446	R4-690	〃 〃 〃 ・〃	〃 ・〃
755	〃	R4-417	R4-652	〃 2D48・第6層	〃 ・土釜
756	〃	R4-390	R4-621	〃 2A47・第4層	〃 ・塝
757	〃	R4-402	R4-619	〃 2B46・第4層大礫	〃 ・〃
758	〃	R4-389	R4-618	〃 〃 ・第4層	〃 ・〃
759	〃	R4-404	R4-640	〃 東NSベルト2A47第4層or6層	〃 ・〃
760	〃	R4-392	R4-568	L・N段2C46・A層面整地第4層	瓦質・捏鉢
761	〃	R4-418	R4-644	N段2A47・第6層	〃 ・〃
762	〃	R4-419	R4-656	〃 2D49・ 〃	〃 ・〃
763	〃	R4-447	R4-681	〃 2A47・第8層	〃 ・〃
764	〃	R4-391	R4-633	〃 2E48・第4層	〃 ・〃
765	〃	R4-448	R4-613	〃 YサブトレY－63.730km東側一括	〃 ・土釜
			R4-647	N段東NSベルト2A47・第6層	
	〃		R4-683	N段東NSベルト2A47・第8層	
766	〃	R4-369	R4-569	N段東NSベルト2A46・A層第4層含む	瓦質・土釜
767	〃	R4-425	R4-451	L'段2A45西半・第4第5層	〃 ・〃
			R4-666	N段Y47南半・第6層	
768	〃	R4-449	R4-688	〃 2C48・第8層	〃 ・〃
769	〃	R4-450	R4-491	L'段2K283・2B48	〃 ・〃
			R4-682	N段2A47南端・2A48北端・第8層	
770	第96図	R4-452	R4-656	N段2D49・第6層	
			R4-674	〃 2E49・第7層	
			R4-690	〃 2D49一部2D48・第8層	
771	〃	R4-451	R4-688	〃 2C48・第8層	〃 ・〃
772	〃	R4-420	R4-664	〃 2A47西半・2A48西半一部・第6層	〃 ・〃
773	〃	R4-454	R4-467	L'段東NSベルト2A45・第4層下部	〃 ・〃
			R4-480	L'段包落ち2B45・2A45西半・第5層	
			R4-614	N段東側Y-サブトレ一括	
			R4-644	〃 2A47・第6層	
			R4-684	〃 Y47・第8層	
774	〃	R4-455	R4-551	〃 南斜面2F49・2F50・南面現地表から-100～200cm	〃 ・〃
			R4-631	N段2D48・第4層	
			R4-652	〃 2F49・A層	
			R4-690	〃 2D49一部2D48・第8層	
775	〃	R4-453	R4-682	〃 2A47南端・2A48北端・第8層	〃 ・〃
776	〃	R4-421	R4-646	N段Y46・第6層	〃 ・礫
777	〃	R4-456	R4-622	〃 2A47・第4層＋礫	〃 ・〃
			R4-664	〃 2A47西半・2A48一部西半・第6層人頭大礫	
			R4-665	N段2A47・第6層10cm礫少	
			R4-682	〃 2A47南端・2A48北端・第8層	
			R4-687	〃 2B48北半・第8層	
778	〃	R4-370	R4-555	〃 2B47・A層	須恵質・捏鉢
779	〃	R4-383	R4-624	〃 〃 ・第4層	〃 ・〃
780	第96図	R4-384	R4-623	N段2B47・第4層	須恵質・捏鉢
			R4-703	〃 SK291・東半一括	
781	〃	R4-387	R4-454	L'段NSベルト2A45第4層	須恵質・捏鉢
			R4-569	N段東NSベルト2A46・A層・第4層含む	
782	〃	R4-365	R4-629	N段Y47・東側溝一括	備前・擂鉢
783	〃	R4-406	R4-649	〃 2C48・第6層	〃 ・小壺
784	〃	R4-393	R4-635	〃 2F48・第4層	瀬戸美濃灰釉・丸皿
785	〃	R4-394	R4-610	N・L'段2A45・南縁黄色土混第4層	瀬戸美濃鉄釉・天目碗
786	〃	R4-409	R4-665	N段2A47・第6層	白磁・(四耳) 壺
787	〃	R4-457	R4-675	〃 2F49・第6層	青磁・碗
			R4-690	〃 2D49一部2D48・第8層	
788	〃	R4-408	R4-270	L段X44・第4層面整地検出	〃 ・〃
			R4-456	L'段2B45・第4第5層	
			R4-460	〃 2D45・第4層	
			R4-652	N段2D48・第6層	
789	〃	R4-423	R4-664	〃 2A47西半・2A48西半一部・第6層	〃 ・〃
790	〃	R4-396	R4-627	N段Y47・第4層	〃 ・〃
791	〃	R4-395	R4-617	〃 2A46・2Y46・第4層	〃 ・〃
			R4-643	N段2C45・46・第4層・5層	
792	〃	R4-422	R4-667	〃 Y47北半・第6層	青磁・碗
793	第97図	R4-376	R4-581	〃 2C46・第3層	土師器・皿
794	〃	R4-377	R4-593	〃 2E47・第3層	〃 ・土釜
795	〃	R4-374	R4-556	〃 2C47・A層	〃 ・〃
796	〃	R4-378	R4-586	〃 2B47・第3層	瓦質・土釜
			R4-614	〃 サブトレ東側Y-・一括	
797	〃	R4-379	R4-577	〃 2B47・第3層	青磁・碗
798	〃	R4-380	R4-582	〃 2D46・第3層	〃 ・〃
799	〃	R4-468	R4-552	〃 南斜面2E49・2F50南面	土師器・堝
800	〃	R4-469	R4-574	N段2A46・第4層	〃 ・〃
801	〃	R4-382	R4-588	〃 2C47・第3層	円盤状土製品・(丹波) 43g
802	〃	R4-411	R4-645	〃 2A47・第6層	軒丸瓦
803	〃	R4-367	R4-508	L'段SE283・2B45井側内中層	瓦・鳥衾
804	〃	R4-264	R4-136	K段SW37・Y36・第3'＋4'層	瓦質・不明製品
805	〃	R4-261	R4-156	〃 〃 X38・α層	〃 ・捏鉢
806	〃	R4-263	R4-127	〃 〃 W35・第3'＋4'層	〃 ・〃
807	〃	R4-262	R4-124	〃 〃 ・2A35・第3'＋4'層	〃 ・〃

第Ⅳ区　溝SD36

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
814	第98図	R2-2	R2-371-2	F段第1ベルト南	土師器・小皿
815	〃	R2-1	R2-371-1	〃 第1-2ベルト間北側上層	〃 ・〃
816	〃	R2-4	R2-342	〃 〃 中央上層	〃 ・皿
			R2-360	〃 〃 南側上層	
817	〃	R2-3	R2-371-4	〃 第1ベルト上層	〃 ・〃
818	〃	R2-6	R2-336	〃 土器溜り上層	〃 ・土釜
			R2-337	〃 ベルト間中央上層一括	
			R2-351	〃 第1-2ベルト間中央上層	
819	〃	R2-7	R2-337	〃 ベルト間中央上層一括	〃 ・〃
			R2-338	〃 第1-2ベルトの中間上層	
820	〃	R2-14	R2-341	〃 第1-2ベルト間中央上層	瓦器・椀
821	〃	R2-15	R2-348	〃 〃 〃	〃 ・〃
822	〃	R2-9	R2-343	〃 〃 〃	〃 ・〃
823	〃	R2-12	R2-347	〃 〃 〃	〃 ・〃
824	〃	R2-13	R2-365	〃 〃 北側上層	〃 ・〃

出土遺物一覧10

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類・器種・備考
825	第98図	R2-17	R2-341	F段第1-2ベルト中央上層	瓦器・椀
826	〃	R2-16	R2-341	〃 〃 〃	〃・〃
			R2-360	〃 〃 南側 〃	〃・〃
827	〃	R2-8	R2-350	〃 〃 中央上層	〃・〃
828	〃	R2-10	R2-340	〃 〃 中央上層	〃・〃
829	〃	R2-11	R2-344	〃 〃 〃	〃・〃
830	〃	R2-20	R2-343	〃 〃 〃	〃・〃
831	〃	R2-25	R2-339	〃 〃 〃	〃・〃
832	〃	R2-24	R2-359	〃 第2ベルト南側上層	〃・〃
833	〃	R2-21	R2-352	〃 第1-2ベルト間中央上層	〃・〃
834	〃	R2-19	R2-336	〃 土器溜り上層	〃・〃
			R2-337	〃 ベルト間中央上層一括	
			R2-354	〃 第1-2ベルト間中央上層	
835	〃	R2-22	R2-356	〃 〃 〃	〃・〃
836	〃	R2-23	R2-353	〃 〃 〃	〃・〃
837	〃	R2-18	R2-337	〃 ベルト間中央上層一括	〃・〃
			R2-364	〃 第1-2ベルト間北側上層	
第IV区　堀SH1					
838	第98図	R2-35	R2-114	D段14・15・第2・3層	土師器・小皿
839	〃	R2-26	R2-91	南端	〃・〃
840	〃	R2-32	R2-102	F段R21西肩・第2層上部	瀬戸美濃灰釉・丸皿
841	〃	R2-33	R2-102	〃 〃・〃	〃・〃
842	〃	R2-31	R2-113-2	D段N14・第2層	白磁・皿
843	〃	R2-34	R2-100	F段R21・西肩・第2層上部	朝鮮粉青沙器・碗
844	〃	R2-29	R2-94	〃 T23・第1層下部第2層上部	備前・壺
第IV区　堀SH2					
845	第99図	R2-59	R2-181	A段L6・第2層	須恵器・甕
846	〃	R2-58	R2-189	〃 N7・〃	土師器・小皿
847	〃	R2-52	R2-214	B段M9・〃	〃・〃
848	〃	R2-43	R2-146	A段N7・BC層	〃・〃
849	〃	R2-53	R2-209	B段M8・第2層	瓦質・湯釜
850	〃	R2-44	R2-149	〃 N8・BC層	瀬戸美濃鉄釉・天目碗
851	〃	R2-63	R2-247	〃 N9・第2層下部	備前・捏鉢
852	〃	R2-61	R2-183	A段M6・第2層	〃・壺
853	〃	R2-64	R2-190	〃 〃・第3層	〃・種壺
854	〃	R2-54	R2-208	B段M8・第2層	〃・壺
855	〃	R2-46	R2-132	A段M5・A1層	〃・水屋甕
			R2-137	〃 A2層	
			R2-140	B段L8・B層	
			R2-178	A段M7・第1層	
			R2-213	B段L9・第2層	
856	〃	R2-60	R2-182	A段M6・第2層	〃・徳利
857	〃	R2-49	R2-206	B段M10・第1層	白磁・皿
858	〃	R2-50	R2-207	B段M10・第1層	〃・輪花皿
859	〃	R2-42	R2-164	排土	青磁・香炉
860	〃	R2-65	R2-257	B段M9・第3層	景徳鎮窯系染付・碗
861	〃	R2-51	R2-159	B段M9・C層	〃 〃
			R2-198	B段M8・第1層	
862	〃	R2-48	R2-127	B段東側畦	〃 〃
863	〃	R2-47	R2-180	A段N7・第1層	〃 〃
864	〃	R2-45	R2-162	B段M10・C層	漳州窯系染付・皿
865	〃	R2-66	R2-260	B段M9・第3層	円盤状土製品・(瓦)56g
866	〃	R2-74	R2-250	B段N10・第2層下部	丸瓦
867	第100図	R2-69	R2-223-2	B段N10・第2層	軒丸瓦
			R2-249	B段N10・第2層下部	
			R2-277	B段N9・第2層下部	
868	〃	R2-68	R2-222	B段N10・第2層	軒丸瓦
869	第100図	R2-71	R2-258	B段M9・第3層	軒丸瓦
870	〃	R2-70	R2-262	B段N10・第3層	〃
871	〃	R2-67	R2-181	A段L6・第2層	〃
872	〃	R2-72	R2-140	B段L8・B層	〃
873	〃	R2-73	R2-201	B段M9・第1層	軒平瓦
第IV区　溝SD3					
874	第100図	R2-123	R2-329	E段SD3周辺	弥生土器・広口壺
875	〃	R2-90	R2-325	E段東側側溝ベルトより南	備前・船徳利
876	〃	R2-91	R2-328	E段5・6第2ベルト付近	丹波・擂鉢
877	〃	R2-92	R2-325	E段東側側溝ベルトより南	軒丸瓦
第IV区　堀SH2					
878	第101図	R2-89	R2-240-2	B段M8・第2層下部	大形平瓦
879	〃	R2-81	R2-211-2	B段M8・第2層	〃
880	〃	R2-76	R2-262	B段N10・第3層	平瓦
881	〃	R2-75	R2-223-2	B段N10・第2層	〃
			R2-262-2	B段N10・第3層	
882	〃	R2-78	R2-262	B段N10・第3層	〃
第IV区　F段遺物包含層					
883	第102図	R2-93	R2-47	L20・H層	土師器・皿
884	〃	R2-94	R2-53	L22・H層	〃・土釜
885	〃	R2-95	R2-59	G段O24	瀬戸美濃鉄釉・瓶子
886	〃	R2-97	R2-60	P24・H層	唐津・蓋
第IV区　その他					
887	第102図	R2-99	R2-296	耕土G段H段の間G段側水路下	土師器・小皿
888	〃	R2-111	R2-19	暗渠E段　一時期占い？	〃　土釜
889	〃	R2-103	R2-273	耕土etc　B段C段の間拡張	褐釉・小壺
890	〃	R2-102	R2-277	表土B段E段の間E段側畦畔・青灰色細砂	備前・〃
891	〃	R2-108	R2-19	暗渠E段　一時期占い？	〃　甕
892	〃	R2-100	R2-287	表土E段下段の間E段側畦畔	備前・擂鉢
893	〃	R2-101	R2-288	E段F段の間E段側畦畔下・茶灰褐色細砂	堺・擂鉢
894	〃	R2-96	R2-295	F段G段の間下段側南縁・灰褐色細砂	青磁・盤
895	〃	R2-98	R2-6	表土　排土	白磁・碗
896	〃	R2-110	R2-25	耕土C段南面	景徳鎮窯系染付・碗
897	〃	R2-109	R2-1	排土	〃 〃
898	〃	R2-106	R2-273	耕土etcB段C・D段の間拡張	円盤状土製品・(瓦)200g
899	〃	R2-112	R2-18	暗渠E段　南側	〃・(瓦)225g
900	〃	R2-105	R2-277	表土etcB段E段の間E段側畦畔・青灰色細砂	〃・(瀬戸美濃)33g
901	〃	R2-104	R2-286	表土etcE段F段の間F段側畦畔	波佐見・染付碗
902	〃	R2-119	R2-316	SK31C、F段	丹波・甕
903	〃	R2-107	R2-276	表土B段D段の間D段北端畦畔	軒丸瓦
904	〃	R2-37	R2-10	排土	瓦・鳥衾

出土遺物一覧11

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類	法量 (cm) 長	幅	厚	重量(g)	石材	備考
T34	第5図	RT2-119	RT2-58	Pトレ・第3層・灰褐色弱砂質土	砥石	(6.1)	2.9	2.0	(63)	凝灰岩質	
T35	〃	RT2-118	RT2-43	Mトレ・SK01	〃	(12.1)	5.9～7.1	5.3～5.8	(840)	砂岩	
T36	〃	RT2-117	RT2-32	Kトレ・北端SK09	〃	(12.7)	10.3	4.5～8.1	(1,530)	〃	焼成被ける
第Ⅰ区　縄文～弥生											
S1	第11図	R1-47	R1-260	E20S120・包含層	石鏃	1.8	1.2	0.2	0.40	サヌカイト	
S2	〃	R1-48	R1-239	W4S72・包含層	〃	(1.8)	1.8	0.4	(0.80)	〃	
S3	〃	R1-50	R1-138	W4S40・包含層	〃	2.2	1.6	0.3	0.81	〃	
S4	〃	R1-49	R1-141	W4S40・包含層	〃	2.9	1.7	0.4	1.20	〃	
S5	〃	R1-57	R1-237	E4S72・包含層	〃	(2.9)	0.9～1.6	0.5	(1.99)	〃	
S6	〃	R1-56	R1-146	W8S40・包含層	〃	2.7	2.5	0.3～0.5	2.99	〃	
S7	〃	R1-51	R1-262	EW00S104・包含層	掻器	8.1	6.2	1.0	41.22	〃	
第Ⅱ区　旧石器～弥生											
S8	第32図	R3-299	R3-749	Q段2I55・包含層第6′層	ナイフ形石器	5.9	2.1	1.2	11.63	サヌカイト	
S9	〃	R4-227	R4-733	VW段・排土	〃	6.0	2.0	0.9	10.89	〃	
S10	〃	R3-300	R3-786	Q段2I53・包含層第7～8層下部	〃	5.0	1.8	1.2	8.17	〃	
S11	〃	R4-229	R4-1227	W段2I66・包含層暗褐色土	掻器	5.4	8.7	1.3	61.67	〃	
S12	〃	R4-228	R4-1182	V段2G68・SH29中層混土層	〃	7.1	3.6	0.8	24.36	〃	
第Ⅲ区　旧石器～弥生											
S13	第47図	R4-483	R4――	N段ベース断割A3	細石刃	1.7	0.8	0.2	0.38	サヌカイト	
S14	〃	R4-482	R4――	N段ベース断割A1	石鏃	2.4	1.5	0.2	0.66	〃	
S15	〃	R4-480	R4-552	N段2E49、2F50南面・採集	〃	2.0	2.1	0.4～0.6	2.65	〃	
第Ⅳ区　縄文											
S16	第52図	R2-124	R2-361	F段・SD36第1ベルトより南・上層	石鏃	(1.5)	1.8	0.4	(0.84)	サヌカイト	
第Ⅰ区　古墳～江戸											
31	第69図	R1-52	R1-288	D区EW00より東側・包含層	有孔円盤	(2.2)	0.3	0.3	(2.22)	滑石	
32	〃	R1-53	R1-336	出土地不明	砥石	6.1	3.5	1.0	41	凝灰岩質	
33	〃	R1-54	R1-336	〃	〃	(5.7)	3.5	0.6	(18)	泥岩	
第Ⅱ区　堀SH27											
404	第82図	R4-234	R4-1031	W段2L66、SH27・下層	硯	(7.7)	(3.9)	(1.0)	(39)	頁岩	砥石に転用？
405	〃	R4-232	R4-1045	W段2J66、SH27・下層 粘土粗砂互層、中層砂礫	砥石	(7.5)	(5.8)	(1.25)	(98)	泥石	
406	〃	R4-231	R4-881	W段2I69、SH27・2～4層最上層	砥石	(4.9)	4.0	1.4	(35)	玄武岩質	
407	〃	R4-233	R4-1066	W段2K68、SH27・下層粘土粗砂礫互層	〃	(4.3)	3.2	1.6	(34)	泥石・鳴滝岩	
411	〃	R4-236	R4-988	W段2J68、SH27・中層上位青灰色粘土	火打ち石	4.3	3.1	2.6	55	石英	
第Ⅱ区　谷状地形他											
603	第89図	R3-302	R3-480	R段2G60・61、第6～7層	砥石	(7.1)	2.9	0.9	(40)	泥岩	板状剥離
604	〃	R3-303	R3-992	R段2E60、谷状地形・第22層	〃	(4.9)	2.85	0.9	(27)	〃	
605	〃	R3-301	R3-540	P段2H58、谷状地形・第22層＋24層	〃	(4.2)	5.2	2.4	(38)	凝灰岩質	
606	〃	R3-306	R3-809	T段2J62、第6層の上＋a・b層	火打ち石	(1.8)	(1.2)	1.2	(2.5)	チャート	
第Ⅲ区　遺物包含層											
712	第93図	R4-476	R4-447	L′段2A44、第4第5層暗灰含む	石鍋	器高(4.9)	径30.6		(172)	滑石	
713	〃	R4-478	R4-451	L′段2A45西半、第4第5層	砥石	(6.3)	6.4	1.3～1.8	(77)	泥石	
714	〃	R4-477	R4-470	N段2F46、第4層下部	〃	(4.6)	7.4	1.0	(61)	〃	
715	〃	R4-479	R4-433	L′段2A45、第4層面整地検出	〃	(6.2)	2.8	1.0	(20)	〃	
808	第97図	R4-475	R4-628	N段Y47、第4層	挽臼(上臼)	高(10.4)	径29	―	(3,320)	砂岩	
第Ⅳ区											
914	第105図	R2-132	R2-101	F段R21、第2層上部	石扉	(19.9)	(8.0)	4.3	(1,270)	砂岩	
915	〃	R2-127	R2-317	F段SK31d	硯	14.2	6.3	1.7	(225)	頁岩	
916	〃	R2-128	R2-164	排土	砥石	(8.3)	2.45	0.8	(32)	泥岩	
917	〃	R2-131	R2-125	B段	火打石	2.4	2.8	1.2～0.9	(9.75)	チャート	
918	〃	R2-126	R2-124	耕土B段東端畦畔南半、灰褐色細砂	石臼	器高12.1	口径27.6	4.1	(2,280)	砂岩	

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類	法量（cm） 長	幅（径）	厚（高）	重量（g） 処理前	処理後	備考
160	第74図	R3-10	Q段2H54、包含層・第7・8層下部	鉄釘	(7.8)	0.7	0.5		(7)	
161	〃	R3-8	T段2J60、包含層・第5・6層	〃	(4.2)	0.3～0.7	0.7		(4)	
162	〃	R3 12	P段2F55、SW3・第14・16層	鉄のみor楔	4.1	1.4	0.15～0.85		12	
163	〃	R3-15	R段2F59、整地土・第15層	不明鉄片	3.7	3.6	0.2～0.4	15		未処理
164	〃	R3-11	Q段2I55、包含層・第7・8層	不明鉄製品	(4.9)	(4.0)	0.5		(18)	
165	〃	R3-7	P段2E56、SW1・第21層	銅薄板製品	(5.2)	(3.3)	0.02		(1)	
166	〃	R3-6	R段2F60、谷状地形・第22層	銅製留金具	2.0	径1.7	0.1		3	
167	〃	R3-13	S段2I64、SD27・第6・7層、撹乱 淡青灰色細砂	鉄犂	(15.8)	(7.3)	0.4		(210)	
168	〃	R3-16	P段2G55、検出	キセル吸口	5.7	径0.3（吸口）	－	2.53		未処理
第II区　SH27・SH29他										
408	第82図	R4-8	V段2F68、SH29下層、東壁拡張	無文銭	－	径2.2	0.062	2.03		
409	〃	R4-5	W段2K67、SH27中層砂礫	永楽通宝	－	径2.5	0.138	3.16		
410	〃	R4-7	V段2I66、第2～4層の下、暗青灰色シルト	寛永通宝	－	径2.5	0.112	2.99		
412	〃	R4-2	W段2K69、2L69一括、SK1008	キセル吸口	6.55	径0.3～0.7	0.1	5.46		未処理
第II区　遺物包含層他										
597	第89図	R3-1	R段2H59、SD5・第21層類似土	太平通宝	－	径2.3	0.05		1.82	
598	〃	R3-4	P段2C52、SW3・第17～20層上部	熙寧元宝	－	径2.4	0.05～0.1		3.01	
599	〃	R3-3	P段2E57、SW1・第15層	〃	－	径2.4	0.1		2.46	
600	〃	R3 14	P段2B53、西肩・谷状地形肩	永楽通宝	－	径2.5	0.1	2.70		未処理
601	〃	R3-5	P段2F58、谷状地形・第22層	不明	－	径2.4	0.05		1.90	
602	〃	R3-2	P段2F58、谷状地形・サブトレ	寛永通宝		径2.3	0.1		2.44	
第III区　遺構										
628	第90図	R4-1	L段SK240	鎌状鉄製品	(11.35)	1.6～4.25	1.0	(59)		
650	第91図	R4-9	L段X41、Pit127	槍先形鉄製品	12.85	0.5～1.8	0.8～0.95	44		
第III区　遺物包含層										
809	第97図	R4-12	K段　撹乱26・一括	鉄鎌	(15.4)	2.1～2.6	0.2～0.8	(43)		
810	〃	R4-4	K段　撹乱・一括	小刀	(15.1)	0.6～1.4	0.3～0.6	(33)		未処理
811	〃	R4-10	N段2E49、包含層・第6層	不明鉄片	8.4	(5.0)	0.4～0.6	(65)		
812	〃	R4-11	N段2D48、包含層・第6層	不明鉄製品	4.6	2.4	1.0	18		
813	〃	R4-6	L段W41、SW101・暗灰色土	景徳元宝	－	径2.4	0.116	2.40		
第IV区　堀SH1										
905	第103図	R2-9	F段R21、第2層上部西肩から－0.7m	喉輪（武具）	高14.1	全幅17.3	0.6		240	
第IV区　堀SH2										
906	第103図	R2-2	A段N7、第3層	?（武具）	13.7（奥行）	全幅16.2	高5.5～5.9	170	150	
907	〃	R2-1	A段N7、第3層	垂（武具）	18.8	5.2	0.2	120	120	
908	第104図	R2-5	B段N8、第3層下部	鉄鍋	口径31.6	底径22.4	全高20.4	(1,100)	(1,050)	3片
909	〃	R2 6	B段N9、第2層下部石造物群の上	鉄鍋の吊金	全幅29.0	0.8	0.35	80	80	
910	〃	R2-4	B段M8、第2層	五徳	35.9	脚6.2～10.6	脚2.8～3.0	(2,770)	(2,700)	
911	〃	R2-7	B段N9、第2層下部石造物群の上	捍秤（竿秤の皿）	－	径18.4×18.5	0.25	(340)	(280)	
第IV区　堀SH2										
912	第105図	R2-3	B段M10、第3層下部	鋤刃先	27.6	全幅16.2	刃先0.3～0.5	740	710	
913	〃	R2-8	B段N9、第2層下部	鉄輪	外径22.4	内径21.2	径0.6	150	140	

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類	法量(cm) 長	幅(径)	厚(高)	備考
150	第74図	R3-1	Q段2B50、SD12灰緑色砂礫層	箸	20.3	0.4～0.5	0.3～0.4	断面八角形
151	〃	R3-11	Q段SE14、第3層下部	柄付加工材	51.2	4.3	2.7	出柄
152	〃	R3-14	Q段SE14、第3層灰色シルト	蓋板把っ手	18.5	高2.0～2.8	1.6～2.0	木釘痕3ケ
153	〃	R3-12-1	Q段SE14、第3層下部	曲物	－	径18.8×20.8	0.5	漆容器、内面全面黒漆付着
154	〃	R3-62	Q段SE14、第5層	蓋板	－	径18.8	0.5	
155	〃	R3-13	Q段SE14、第3層下部	曲物底板	－	径(19.4)	0.5	153と密着して出土
156	〃	R3-20	T段SD6、下層最下層、ベルトより西	桶側板	32.4	5.6～6.2	0.6	
157	〃	R3-16	T段SD6、下層、ベルトより東	曲物底板	－	径13.5	0.65	
158	〃	R3-18	T段SD6、下層、ベルトより東	栓状木製品	6.4	1.7～2.2	1.7	
159	〃	R3-19	T段SD6、下層最下層、ベルトより西	不明木製品	39.0	2.3～3.1	1.1～1.4	小孔3ケ
第II区　堀SH27・SH29								
413	第82図	R4-う19	W段2L69、SH27中層	漆器椀	器高(3.3)	高台径7.8	0.4～0.7	内朱、外黒
414	〃	R4-う33	V段2F66、SH29最下層	〃	〃 (3.7)	〃 6.6	0.3～0.7	内にぶい朱、外黒
415	〃	R4-う12	W段2K67、SH27最下層上位	〃	〃 (5.3)	－	0.5～0.8	内外黒
416	〃	R4-う35	V段2G68、SH29下層	〃	〃 5.7	口径13.0	0.3～0.6	内朱、外黒・草花朱文様
417	〃	R4-う8	W段2K66、SH27下層、粘土粗砂礫互層	〃	〃 (6.1)	〃 13.8	0.2～0.4	内朱、外黒
418	〃	R4-う6	W段2K69、SH27中層砂礫・下層粘土粗砂礫互層	〃	〃 (7.1)	〃 14.6	0.2～0.5	内朱、外木肌
419	〃	R4-う11	W段2L67、SH27最下層上位	〃	〃 (7.2)	高台径8.4	0.4～0.7	内朱、外黒、高台内×朱文
420	〃	R4-う3	W段2M69、SH27下層	〃	〃 (6.4)	口径13.8	0.2～0.5	全体に黒、黒色の上に朱僅少
421	〃	R4-う5	W段2L67、SH27中層上位	〃	〃 (7.1)	〃 9.8	0.3～0.6	内朱、外黒・亀朱文様
422	〃	R4-う32	V段2G67、SH29下層	〃	〃 (9.0)	高台径8.4	0.3～1.6	内朱、外黒・鶴朱文様
423	〃	R4-う34	V段2F66、SH29最下層	〃	〃 (8.8)	口径16.0	0.4～2.3	白木のまま
424	〃	R4-う9	W段2K66、SH27下層・粘土粗砂礫互層	〃	〃 (2.2)	高台径(8.1)	1.2	内朱、外黒・高台内朱文
425	〃	R4-う36	W段2G67、SH29中層砂礫	〃	〃 (2.0)	〃 7.8	1.0	内朱、外黒・高台内＃朱文
426	第83図	R4-1	W段2L69、SH27中層	独楽	－	径3.25	高4.7	
427	〃	R4-38	W段2K66、SH27下層	〃	－	径2.7	高5.85	先端に黒色の着色有り
428	〃	R4-2	W段2K67、SH27中層上位・礫混青灰色粘土	〃	－	径4.2	高4.8	
429	〃	R4-82	W段2J69、SH27中層上位・青灰色粘土粗砂混	櫛	(9.5)	(2.9)	0.7～1.1	
430	〃	R4-89	V段2G66、SH29下層上位	箸	(13.5)	径0.4～0.6		断面四角形or六角形
431	〃	R4-88	V段2G66、SH29最下層	〃	(18.7)	径0.8		断面六角形
432	〃	R4-84	W段2J68、SH27東肩中層・粘土粗砂互層	匙	(18.8)	(1.6～3.9)	0.9～2.2	両端表面炭化
433	〃	R4-66	W段2L67、SH27中層上位	紡織具？	(6.2)	0.8～2.0	0.9～1.2	
434	〃	R4-80	W段2L66、SH27中層上位	駒形木製品	5.5	4.7	1.7～1.6	3mm孔、表裏径2.7cmの円形圧痕
435	〃	R4-126	V・W段　排土	栓	6.7	径1.9～2.5		切り込み有り
436	〃	R4-50	W段2J68、SH27東肩中層砂礫	〃	10.9	径3.3～4.9		八角？
437	〃	R4-46	W段2J67、SH27中層砂礫	組合せ角材	(11.9)	1.3	1.1	切り込み2ケ所有り
438	〃	R4-7	W段2J66、SH27下層上位・粘土粗砂互層	組合せ木製品	(11.1)	3.6	1.5	
439	〃	R4-116	V段2G66、SH29下層	組合せ木製品	(16.5)	4.3	1.7	
440	〃	R4-53	W段2J67、SH27中層砂礫・下層粘土粗砂互層	加工竹製品	(15.0)	2.8	0.6～0.9	
441	〃	R4-75	W段2J68、SH27下層・粘土粗砂礫互層	不明木製品	14.2	4.7	2.6～3.6	
442	〃	R4-86	V段2G66、SH29下層	柄？	11.2	3.8	3.0	
443	〃	R4-39	W段2K68、SH27最下層上位	編錘？	(5.4)	径5.1		
444	〃	R4-99	V段2F64･65、SH27崩落土一括	笊状木製品	35.6	3.6～4.1	0.3～0.5	
445	〃	R3-24	V段2G65、SH29中層下位・灰色微砂	木製五輪塔	19.0	4.1	2.0	墨書なし
446	〃	R4-128	V・W段　排土	不明木製品	13.4	(2.5)	1.4	
447	〃	R4-56	W段2J67、SH27最下層	丸木	(21.8)	径3.2～3.4		両先端加工痕
448	第84図	R4-30	W段2K66、SH27下層・粘土粗砂互層	籠の吊り手？	(17.3)	径1.1		先端に穴
449	〃	R4-33	W段2K67、SH27最下層上位	加工木	(28.9)	径1.3×1.4		先端小刀で数回カット
450	〃	R4-110	V段2G67、SH29下層	木製道具？	13.0	0.5～1.6	0.7～1.8	片端炭化
451	〃	R4-90	V段2G68、SH29上層中層混	〃	16.6	1.3～2.2	1.2	〃
452	〃	R4-117	V段2F67、SH29下層	〃	18.4	1.6	1.3	〃
453	〃	R4-51	W段2L67、SH27最下層中位	側面加工角木	(38.4)	径(3.9×4.1)		片端炭化・ヤリ鉋痕、断面六角
454	〃	R4-67	W段2H68、SH27下層下位	〃	(48.2)	径4.4		先端炭化・側面加工痕
455	〃	R4-3	W段2J68、SH27東肩中層・粘土粗砂互層	下駄	(19.2)	9.2	1.2	歯前後ともマメツ著しい
456	〃	R3-57	S段2J65、SD27青灰色砂礫	〃	(16.8)	8.9	0.6～1	右足？、歯補強釘穴2ケ
457	〃	R3-58	S段2J65、SD27青灰色砂礫	〃	(13.9)	(6.0)	0.9	
458	〃	R4-69	W段2K68、SH27下層・粘土粗砂礫互層	〃	14.1	(7.0)	1.6	小形(子供用？)
459	〃	R4-9	W段2J66、SH27下層上位・粘土粗砂互層	〃	21.3	(5.9)	2.6	差し歯下駄
460	〃	R4-4	W段2J66、SH27下層・粘土粗砂礫互層	〃	19.4	8.6	2.4	楕円形、歯前後とも摩滅著しい
461	〃	R4-15	W段2K67、SH27最下層上位	〃	(18.9)	10.8	2.9	
462	〃	R4-26	W段2J66、SH27中層砂礫 下層粘土粗砂互層	〃	(20.8)	8.9	1.0～1.3	擦り減

※漆器椀の実測遺物登録番号は、付章第3節の表1のNo.に一致する。

遺物番号	挿図番号	実測遺物登録番号	出土地区・遺構・層位	種類	法量（cm）			備考
					長	幅(径)	厚(高)	
463	第85図	R4-5	W段2K67、SH27最下層上位	柄杓	上径15.4	下径16.0	高(9.2)	上口縁部欠損、桜皮で接合
464	〃	R4-118	V段2G67、SH29下層	〃	－	径10.6	高10.3	木釘3ケ所
465	〃	R4-55	W段2J67、SH27最下層	柄杓・柄	(37.8)	2.4	0.9～1.2	木釘有
466	〃	R4-77	W段2K66、SH27下層・粘土粗砂礫互層	柄杓・柄	(24.2)	1.0～2.4	1.1～2.2	〃
467	〃	R4-32	W段2K66、SH27下層下位・粘土粗砂互層	曲物・底板	10.6	2.6～3.4	0.3	側板転用、内面底部に柿渋痕跡
468	〃	R4-81	W段2J67、SH27下層・粘土粗砂礫互層	〃	－	径9.6×10.3	0.6	曲物板と板の間に多量渋
469	〃	R4-61	W段2J68、SH27下層ベルト	柄杓・底板？	7.0	(3.7)	0.7	
470	〃	R4-73	W段2K69、SH27中層上位・SK1043含む	曲物・底板	径7.3	4.1	0.5	
471	〃	R4-34	W段2K69、SH27中層砂礫 南縁下層・粘土粗砂礫互層	〃	14.5	4.7	0.8	
472	〃	R4-10	W段2K67、SH27最下層上位	曲物・底板	11.2	(5.7)	0.5	
473	〃	R4-41	W段2L68、SH27中層砂礫＋下層	〃	－	径13.0	0.7	
474	〃	R3-21	V段2F65、SH29最下層	〃	－	径13.4	0.7	
475	〃	R4-106	V段2G66、SH29下層	〃	－	径13.7	0.8	
476	〃	R4-105	V段2G66、SH29下層	〃	－	径14.9	0.7	
477	〃	R4-74	W段2L67、SH27中層上位	桶・側板	(12.2)	3.9～4.5	0.9～1.2	
478	〃	R4-35	W段2K66、SH27下層・粘土粗砂互層	〃	13.1	5.3～6.0	0.6～0.8	
479	〃	R4-87	V段2G66、SH29中層上位	〃	14.5	3.1～4.0	0.3～0.6	文字？有
480	〃	R4-22	W段2J67、SH27中層上位 青灰色粘土粗砂混	〃	14.2	3.5～3.9	0.5～0.7	少し黒ずみキズ有
481	〃	R4-100	V段2F64･65、SH29崩落土一括	〃	52.7	(4.6)	0.7～1.2	
482	〃	R4-31	W段2K67、SH27最上層上位	〃	(49.4)	9.5	2.1～2.5	裏面炭化
483	第86図	R4-62	W段2L66、SH27中層上位	〃	15.2	5.8～6.4	0.8～1.0	タガ痕跡
484	〃	R4-98	V段2F64･65、崩落土一括	〃	17.7	7.1～7.6	0.9～1.1	
485	〃	R4-14	W段2L67、SH27中層下位・暗青灰色粘土緑礫混	〃	17.7	4.8～5.6	0.7～0.9	木釘有
486	〃	R4-107	V段2G66、SH29下層	〃	21.5	6.4～7.6	1.0～0.7	底板痕跡
487	〃	R4-104	V段2G67、SH29下層	〃	28.1	4.3～5.2	0.6～1.2	〃
488	〃	R4-44	W段2J66、SH27下層・粘土粗砂礫互層	桶・底板	19.5	3.3	1.0	継ぎ留め木釘痕
489	〃	R4-20	W段2J66、SH27下層	〃	19.8～23.0	2.6～2.9	1.4	〃
490	〃	R4-114	V段2G67、SH29下層上位	〃	29.9	4.1	1.1～1.4	継ぎ留め枘穴2ケ
491	〃	R4-113	V段2F67、SH29下層	〃	27.7	8.4	1.0～1.1	
492	〃	R4-11-1	W段2K66、SH27最下層上位	加工角材	27.0	1.6～2.0	1.0～1.2	木釘有り、真ん中少し窪む
493	〃	R4-11-2	W段2K66、SH27最下層上位	〃	27.0	1.6～2.0	1.1	〃
494	〃	R4-85	V段2G66、SH29最下層	折敷	32.6	31.6	0.3	2枚合せ
495	〃	R4-48	W段2L66、SH27中層上位	杭？	55.8	径3.8	－	
第Ⅲ区								
640	第91図	R4-120	L'段SE283	曲物・井筒	径33.3	厚1.0～1.5	高(14.7)	
641	〃	R4-121	L'段SE283	折敷	19.2	9.6	0.7	
642	〃	R4-122	L'段SE283	木製道具？	16.9	0.5～0.9	0.4～0.6	片端炭化
643	〃	R4-123	L'段SE283	〃	25.0	0.8～1.7	0.6～1.0	〃
第Ⅳ区								
919	第106図	R2-14	D段MNO12･13、SH1・第2層	漆塗椀	推径(14)	高(7)	0.5～1.2	内朱・外黒・朱文様
920	〃	R2-15-1	A段M6、SH2・第2層	〃	径15.2	高8.4	0.3～0.9	内朱・外黒・草花・十字朱文様
921	〃	R2-15-2	A段M6、SH2・第2層	〃	推径(15.5)	高(8.1)	0.3～1.2	内朱・朱文様
922	〃	R2-16	F段T24、SH1・第1層下部南肩から－1m犬走り	〃	径14.4	高(3.1)	厚0.4	内外朱
923	〃	R2-1	E段・SD3・東側側溝ヘドロ地帯ベルトより南	下駄	(11.8)	(10.1)	1.4	裏面筋に漆状の黒色物付着
924	〃	R2-2	堀跡　排土	柄杓の柄	(29.9)	2.8～0.7	1.6～0.8	木釘有
925	〃	R2-7	B段M8、SH2・第2層・第1層含む？	曲物・底板	－	径6.6～6.7	0.4～0.6	木釘6ケ所
926	〃	R2-8	B段M9、SH2・第2層下部	曲物・蓋板	－	径12.2	0.4～0.3	桜皮
927	〃	R2-9	D・F段13～17、SH1・第1層＋α	曲物・底板	径11.5	(6.9)	0.5～0.3	
928	〃	R2-18	F段中央、SH1・第2・3層	桶側板	26.2	6.8～5.6	0.6～0.4	
929	〃	R2-5	F段R21、SH1・第2層上部	〃	26	4.8～6	0.3～0.6	タガ痕跡
930	〃	R2-11	D・F段13～17、SH1・第2層	〃	(19.3)	2.7	1.1～1.0	
931	〃	R2-4	B段N10、SH2・第2層	〃	(13.25)	6.6	1.2	タガ痕跡
932	〃	R2-17	F段S22、SH1・第1層下部西肩から－0.7m	桶底板	(32.8)	6.3	1.3	継ぎ留め木釘
933	〃	R2-6	B段N8、SH2・第2層下部	〃	22.8	5.8～5.5	0.9	〃
934	〃	R2-3	A段N7、SH2・第3層	〃	(19)	5	1.2	〃
935	〃	R2-13	下段T23、SH1・第2層上部西肩から－0.7m	網籠	(21)	(16)	0.1	

石造遺物計測一覧

凡例

・計測一覧の掲載順は、以下のとおりである。

一石五輪塔 —— 紀年銘資料 —— 年代順
　　年号の判らない在銘資料 —— 任意順
組合式五輪塔 —— 紀年銘資料のみ
地蔵石仏 —— 紀年銘資料
宝篋印塔 —— 紀年銘資料他
板碑 —— 紀年銘資料または完存品
一石五輪塔 —— 梵字のみ資料　総高の高い順
一石五輪塔 —— 梵字のみ資料　埋込式
地蔵石仏 —— 無銘品資料　立像・座像　総高の高い順
台座 —— 上幅の大きい順に記載

・出土地点・層位は、大別層位を記載している。

・在銘品は、銘文のある面を東方として記載している。

・陰刻・紀年銘等の項に紀年銘の施法を記載している。

・銘文等の崩し字（略字もしくは異体字）は、支障のない程度に楷書体に書き改めている。

・観察備考のタテ書き梵字は、上から空風火水地輪の順で記載している。

・寸法、重量記載で、（　）付は残存値を表している。

・東方面で計測できなかった物は、計測した方面を記載している。

・欄中の横太罫線は接合した部位を表す。

・各種類の後に、第II区出土石造遺物で計測できたものを掲載している。

・一石五輪塔の内、銘文のない資料で空風火水輪の何れかの欠損したものは、地輪のみ計測しているが、未掲載である。数量65基。

・一石五輪塔の内、空風火水輪何れかが単独になったものは、未計測である。数量48基。

・組合式五輪塔の内、在銘品以外で空風火水地輪何れかが単独になったものは、計測しているが未掲載である。数量6基。

・左端の最下段項目「金石文集成続編」とは、巽三郎・愛甲昇寛・小賀直樹『紀伊國金石文集成－続編－』1995年発行を示す。

石造遺物計測一覧 1

挿図番号	第107図	第107図	第107図	第107図	第107図	第107図	第107図	第107図	第107図		第107図	第114図	第108図	第114図
写真図版	PL.51	PL.51	PL.51	PL.51	PL.51	PL.51	PL.51	PL.51	PL.51		PL.51		PL.51	
遺物番号	936	937	938	939	940	941	942	943	944		945	(拓影)993	946	(拓影)994
遺物名称	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位	堀2M6第2層	堀2 石造物群実測 (208)	堀2 石造物群実測 (147)	堀2 石造物群実測 (75)	堀2 石造物群実測 (100)(123)	堀2A段 M6第3層	堀2 石造物群実測 (132)	堀2 石造物群実測 (94)	堀2第3層 A段M6or B段M7Ⓑ		堀2A段第2層 区画不明	堀2 石造物群実測 (88)	堀2 石造物群実測 (109)	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 4
出土遺物登録番号	401	265-208	265-147	265-75	265-123 265-100	266-22	265-132	265-94	231 267-2		428 486	265-88	265-109	268-4
陰刻 紀年銘等	陰刻 為禅清禅尼 宝徳三 五月十五日	陰刻 勢傳法印 永正八七月廿三	陰刻 道圓禅門 大永二年七月十七日	陰刻 妙聖禅尼 大永五年十一月七日	陰刻 道泉禅門 大永六年丙戌十二月廿七日	陰刻 善心大姉逆修 天文四年二月五日	陰刻 尊心大姉逆修 天文四年二月十五日	陰刻 天文六年 七月廿九日 快尊法印	陰刻＋黒漆 天文七年 □□禅尼 八月□日		陰刻 □□禅尼逆修也 天文八年十一月七日	陰刻 妙雲ヵ禅尼 天文九年五月廿一日	陰刻 天文十一年 道心逆修 二月彼岸	陰刻 天文十一年 妙正逆修 二月彼岸
(西　暦)	(1451)	(1511)	(1522)	(1525)	(1526)	(1535)	(1535)	(1537)	(1538)		(1539)	(1540)	(1542)	(1542)
観察備考	判読不明瞭	水地輪東南方一部欠		地輪西方彎曲				空輪先端黒漆僅か 地輪東方凹有り	東方面梵字刻黒漆 四方梵字 地輪東方一部欠	キャク・カク・ラク・バク・アク ケン・カン・ランバン・アン キャー・カー・ラー・バー・アー キャ・カ・ラ・バ・ア			地輪南方北方一部欠	地輪隅一部欠 偏平な形
寸法(cm) 総高	(31.9)	(34.5)	(47.0)	(33.0)	(50.8)	(39.4)	(34.7)	47.5	(52.2)		(41.8)	(46.5)	50.3	(32.3)
空輪 幅			10.6		11.0			9.3	11.1		8.5	10.2	11.0	
空輪 先端高			(1.7)一部欠		(2.4)一部欠			2.0	(1.8)一部欠		(1.4)一部欠	(1.4)一部欠	1.7	
空輪 高			(9.1)		(11.9)			10.3	(10.8)		(8.7)	(9.6)	11.2	
風輪 幅			10.6		11.4			10.1	11.5		8.4	10.9	11.8	
風輪 高			5.8		4.5			4.5	5.9		4.2	4.9	5.5	
火輪 軒上幅	14.2	(14.6)西方	(13.8)	(13.2)	(14.0)	(16.6)一部欠	(13.5)	12.3	(14.0)		(10.6)	13.6	13.7	(14.1)西方
火輪 下幅	14.3	(14)西方	13.6	13.0	13.7	16.5	(13.6)	12.2	13.7		10.6	13.3	14.2	14.1 西方
火輪 軒高	3.7	(4.7)西方	(4.5)	(3.5)	(4.2)	(5.5)	(4.3)	4.0	(4.8)		(4.6)	4.6	4.6	(6.1)西方
火輪 高	7.5	9.3	7.3	(8.3)	8.6	(9.5)	(8.8)	7.7	7.8		7.3	7.2	7.5	(7.6)
	0.5	0.3	0.6	0.4	0.6	0.4	0.4	0.5	0.6		0.5	0.8	0.8	0.7
水輪 幅	15.9	16.8西方	15.5	14.1	15.1	17.5	14.7	13.8	15.6		10.5	13.4	15.2	15.5
水輪 高	10.3	10.6	9.6	9.5	9.5	11.9	10.0	10.2	10.7		7.4	8.5	10.7	9.7
	0.6	0.3	0.6	0.4	0.7	0.3	0.3	0.5	0.6		0.4	0.7	0.8	0.6
地輪 上幅	14.6	14.7西方	13.6	13.3	13.7	16.5	13.8	12.3	14.0		10.8	12.8	14.2	14.0
地輪 下幅	(14.6)	15.1西方	13.4	13.7	13.8	16.5	13.7	12.3	14.1		11.4	13.0	13.8	13.5
地輪 高	13.0	14.0	13.9	14.4	15.0	17.3	15.2	13.8	15.8		13.3	14.8	13.8	13.7
重量(kg)	(15.2)	(16.9)	16.1	(12.0)	17.5	(23.8)	(14.5)	11.8	17.9		9.2	15.2	17.5	(12.4)
金石文集成続編	(2)P140	(7)P141	(10)P142	(11)P142	(12)P142	(13)P142	(14)P142	(15)P143	(16)P143		——	(18)P143	(20)P144	(23)P144

石造遺物計測一覧 2

挿図番号	第114図	第108図	第108図	第108図	第108図	第114図	第114図	第108図	第115図	第115図	第115図	第108図	第108図	第108図
写真図版		PL.51	PL.52	PL.52	PL.52							PL.52	PL.52	PL.52
遺物番号	(拓影)995	947	948	951	949	(拓影)996	(拓影)997	950	(拓影)998	(拓影)999	(拓影)1000	952	953	954
遺物名称	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位	堀2 石造物群実測 151	堀2 石造物群実測 51	堀2 石造物群実測 135 223	堀2M6第2層	堀2 石造物群実測 218	堀2 石造物群実測 9	堀2 石造物群実測 87	堀2 石造物群実測 7 14-2	堀2 石造物群実測 14-1	堀2 石造物群実測 44	堀2 石造物群実測 108	堀2 石造物群実測 28 54	堀2 石造物群実測 32	堀2 石造物群実測 226
出土遺物登録番号	265-151	265-51	265-223 265-135	226	265-218	265-9	265-87	265-14-2 265-7	265-14-1	265-44	265-108	265-28 265-54	265-32	265-226
陰刻紀年銘等	陰刻 天文十一年 月 妙祐逆修 二月彼岸	陰刻 天文十一年 月 妙法逆修 二月彼岸 字つぶれ	陰刻 天文十一年 月 妙珎禅尼 二月彼岸	陰刻 妙善逆修 月 天文十三年甲辰二月日	陰刻 天文十四年 月 道珎禅門 二月彼岸	陰刻 天文十四年 月 為道源禅門 八月廿三日	陰刻 天文十六年 月 宗舜逆修 二月彼岸	陰刻 天文十八年 月 道金禅門 七月廿二日	陰刻 天文廿一年 月 妙光禅尼 五月廿二日	陰刻 天文廿一年壬子 月 為妙忍禅尼 九月廿二日敬白	陰刻 天文廿二年 月 道永禅門 二月廿六日	陰刻 天文廿四年 月 妙共禅尼 十一月廿三日	陰刻 弘治二年 月 快祐法印 八月十九日	陰刻 永禄元年 月 道祐禅門 二月五日
(西暦)	(1542)	(1542)	(1542)	(1544)	(1545)	(1545)	(1547)	(1549)	(1552)	(1552)	(1553)	(1555)	(1556)	(1558)
観察備考	空輪先端部縦割れ					陰刻判読しづらい		形良	地輪東方一部欠		地輪西方ノミ跡のない部分有り	地輪北方一部欠		空輪先端が大きく尖る
寸法(cm) 総高	48.7	49.5	50.3	(55.3)	48.7	(30.1)	(49.0)	39.6	41.2	(38.4)	(43.4)	60.7	(54.0)	56.8
空輪 幅	11.0	11.8	11.2	12.2	10.7		11.8	8.8	8.9		9.7	12.0	11.2	11.1
空輪 先端高	2.0	2.3	2.9	(1.2)大半欠	2.5		(1.2)一部欠	1.8	1.5		(1.4)一部欠	2.6	(3.6)一部欠	4.6
空輪 高	11.4	11.7	12.4	(10.9)	12.0		(10.3)	8.7	8.1		(8.4)	12.5	(13.4)	13.9
風輪 幅	11.7	12.3	11.3	12.6	11.6		12.6	9.0	9.9		10.3	12.5	11.6	11.0
風輪 高	5.4	5.6	5.5	5.3	5.6		6.0	4.5	5.1		4.6	7.5	5.6	6.3
火輪 軒上幅	13.5	(14.1)	(13.0)	(15.8)南方	(13.5)	(11.5)西方	13.8	11.6	(13.2)	(14.0)	12.4	(14.6)	(15.0)	14.9
火輪 下幅	13.6	14.2	13.5	15.7 南方	13.6	11.5 西方	14.0	11.6	12.6	14.0	12.4	14.8	15.0	14.6
火輪 軒高	5.3	5.3	5.9	6.3 南方	5.5	(4.1)西方	(5.3)	3.8	4.2	6.5	(4.8)	(5.7)	(5.2)	6.2
火輪 高	7.2	7.4	8.0	9.2	7.1	(5.9)	7.0	6.9	7.3	(9.2)	7.6	9.6	8.1	9.0
	0.6	0.7	0.5	0.5	0.6	0.4	0.9	0.4	0.5	0.5	0.6	0.8	0.6	0.4
水輪 幅	14.7	15.0	14.9	16.2	14.7	12.4	14.7	12.0	12.9	15.2	13.1	16.7	15.4	15.5
水輪 高	9.6	10.1	10.0	11.2	9.2	8.1	10.8	7.3	7.5	10.0	8.8	10.4	10.2	9.6
地輪	0.5	0.4	0.3	0.3	0.7	0.4	0.6	0.3	0.5	0.3	0.5	0.8	0.3	0.6
地輪 上幅	14.0	14.2	13.7	15.7	13.6	11.9	14.2	11.2	12.4	(14.5)	12.0	15.2	15.0	15.0
地輪 下幅	14.0	14.1	13.6	15.6	13.9	12.6	14.3	11.5	12.7西方	15.0	(12.1)	15.0	15.0	14.4
地輪 高	14.0	13.6	13.6	17.9	13.5	15.3	13.4	11.5	12.2	18.4	12.9	19.1	15.8	17.6
重量(kg)	17.0	16.6	17.0	25.0	15.1	(10.0)	17.3	9.1	12.0	(18.0)	12.3	25.6	21.0	20.9
金石文集成続編	(22)P154	(21)P144	(19)P143	(24)P144	(25)P144	(26)P145	(27)P145	(28)P145	(29)P145	(30)P145	(31)P145	(32)P145	(33)P146	(34)P146

石造遺物計測一覧 3

挿図番号	第115図	第108図		第115図	第115図		第115図	第115図	第115図	第109図	第109図		第115図	第109図
写真図版	ＰＬ.52	ＰＬ.52						ＰＬ.52		ＰＬ.52	ＰＬ.52		ＰＬ.52	ＰＬ.53
遺物番号	(拓影)1001	955		(拓影)1002	(拓影)1003		(拓影)1004	(拓影)1005	(拓影)1006	956	957		(拓影)1007	958
遺物名称	一石五輪塔	一石五輪塔		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔		一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位	堀2M7第2層	堀2M7第2層		堀2 石造物群実測 224	A段石積み	A段堀2M6第3層	堀2 石造物群実測 56	堀2 石造物群実測 184	堀2 石造物群実測 175 189	堀2A段 M6第3層 Ⓓ	堀2M7第2層		堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 34	堀2 石造物群実測 35 41
出土遺物登録番号	237	233		265-224	263-7	452	265-56	265-184	265-189 265-175	267-4	236		268-34	265-35 265-41
陰刻 紀年銘等	陰刻 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄一年 道西禅門 二月廿一日	朱漆描き 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄□年カ 道正逆修 十月□六日	𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿(北) □𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿(西) 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿(南) 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿(東)	陰刻 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄三年 為妙善禅尼 正月廿五日	陰刻 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄三年甲(ヶ) 為乗阿弥陀仏 三月十九日	黒漆描き 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄□年カ申奥 道泉禅門	陰刻 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄四年 道善禅門 五月十日	陰刻 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄四年 貞清法師 十月一日	陰刻 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄五年 覚泉法師 正月廿一日	黒漆＋金泥描き 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄五年 道祐禅門 十月□日	陰刻＋黒漆＋金泥 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄六年 快尊法印 七月七日	𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿(北) 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿(西) 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿(南) 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿(東)	陰刻 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄八年 道心禅門 十月十四日	陰刻＋朱漆 𑖨𑖽𑖟𑖸𑖨𑖿 永禄九年 快澄法師 八月十一日
(西　暦)	(1558)	(1559)カ		(1560)	(1560)	(1560)	(1561)	(1561)	(1562)	(1562)	(1563)		(1565)	(1566)
観察備考		梵字刻朱漆＋金泥 他三方朱漆描き梵字 火輪軒反り先端朱漆 空輪先端朱漆＋金泥 判読不明瞭	キャク・カク・ラク・バク・アク □ーカン・ラン・バン・アン キャー・カー・ラー・バー・アー キャ・カ・ラ・バ・ア		時宗の念仏信仰	梵字刻黒漆			先端が大きい	梵字刻黒漆＋金泥 空輪先端黒漆＋金泥	四方梵字 東方梵字刻黒漆＋金泥	(ラー・バー・アー) (ラ・バ・ア) (ラク・バク・アク) (ラン・バン・アン)	地輪上部一部欠	陰刻僅かに朱漆の痕跡 軒反り部１ヶ所に朱漆 空輪先端朱漆＋金泥
寸法(cm) 総高	50.3	40.3		(39.8)	(47.7)	53.7	47.8	50.2	(55.7)	(43.4)	(35.9)		(50.3)	54.0
空輪 幅	10.4	8.2			8.8	9.3	9.3	10.0	10.8	8.9			9.0	10.9
空輪 先端高	2.8	1.0			(2.0)一部欠	1.8	1.5	2.3	(4.7)一部欠	(1.5)一部欠			(2.9)一部欠	2.6
空輪 高	10.4	7.8			(9.1)	10.5	8.5	10.2	(13.3)	(9.4)			(9.9)	11.1
風輪 幅	10.5	8.9			9.7	10.2	10.0	10.9	11.6	9.4			10.2	11.2
風輪 高	5.2	4.2			5.8	5.9	6.2	5.3	6.4	4.3			6.4	6.3
火輪 軒上幅	(13.8)西方	11.4		(15.7)	(13.3)	(14.1)	(13.8)	13.6	14.8	12.1	(14.8)西方		13.4	15.0
火輪 下幅	13.7 西方	11.4		16.6	(13.2)	14.5	(13.9)	13.5	15.0	12.1	14.7		13.6	14.9
火輪 軒高	(5.7)西方	4.5		(7.1)	6.2	(6.2)	6.9	6.0	5.5	4.1	(6.4)		5.6	(6.0)
火輪 高	8.8	6.8		(10.4)	8.7	9.4	8.8	9.3	9.5	7.1	9.7		8.4	8.4
	0.2	0.2		0.6	0.3	0.3	0.4	0.5	0.5	0.7	0.4		0.6	0.5
水輪 幅	14.0	12.4		15.9	13.5	14.7	13.7	14.2	16.3	13.1	14.9		14.5	15.5
水輪 高	9.2	7.8		10.0	8.5	8.6	9.1	9.2	9.5	8.0	9.4		9.4	9.8
	0.3	0.2		0.5	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.3	0.2		0.5	0.5
地輪 上幅	13.0	11.4		15.0	12.9	14.2	13.5	13.7	15.0	12.1	14.6		13.9	(14.7)
地輪 下幅	14.0	11.4		15.5	12.7	14.5	13.3	13.7	14.8	12.1	14.5		14.4	(14.9)
地輪 高	16.2	13.3		18.3	15.0	18.7	14.5	15.4	16.3	13.6	16.2		15.1	17.4
重　量(kg)	16.6	10.0		(19.9)	14.4	20.0	15.0	16.9	21.0	11.8	(16.0)		17.0	20.0
金石文集成続編	35P146	59P151		36P146	40P147	60P151	37P146	38P146	39P147	42P147	43P147		47P148	48P148

石造遺物計測一覧 4

挿図番号	第115図	第115図	第115図	第109図	第116図	第109図	第116図	第109図		第109図	第116図	第109図		第109図
写真図版				PL.53		PL.53	PL.53	PL.53		PL.53		PL.53		PL.53
遺物番号	(拓影)1008	(拓影)1009	(拓影)1010	959	(拓影)1011	960	(拓影)1012	961		962	(拓影)1013	963		964
遺物名称	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔		一石五輪塔
出土地点・層位	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 20	堀2 石造物群実測 (103)	堀2 M7A第2層	堀2 石造物群実測 (96)	堀2 石造物群実測 (39)	堀2 石造物群実測 (2)	堀2 石造物群実測 (117)	堀2 石造物群実測 (237)	堀2M7第2層	堀2M6第2層	堀2 石造物群実測 (144)	堀2 石造物群実測 (21)		堀2A段第3層-α M6M7西端 N6N7東端 30
出土遺物登録番号	268-20	265-103	416	265-96	265-39	265-2	265-117	265-237	431	227	265-144	265-21		268-30
陰刻 紀年銘等	陰刻 永禄十一年 妙善禅尼 二月十日	陰刻 永禄十一年 道金禅門 二月十日	陰刻 永禄十一年 道見禅門 五月廿四日	陰刻 永禄十一年 聖泉法師 十月六日	陰刻 永禄十二年 妙性禅尼 五月四日逆修	陰刻 永禄十二年 道性禅門 五月四日	陰刻 永禄十二年 仙聖菩提 十月廿日	朱漆＋金泥描き 永禄十三年 道西 二月十四日	黒漆描き？ 水カ	陰刻＋黒漆 元亀四年 道明禅門 六月十六日	陰刻 天正二年 道秀禅門 六月十日	陰刻＋黒漆・黒漆描き 天正二戊申年 秀等法印 八月十一日	東 南 西 北	陰刻 天正三年 道泉禅門 四月十一日
(西暦)	(1568)	(1568)	(1568)	(1568)	(1569)	(1569)	(1569)	(1570)	(1558~1570？)	(1573)	(1574)	(1574)		(1575)
観察備考	地輪一部欠		水・地輪の北方少し窪む	空輪先端細長い 軒角張る		梵字刻黒漆 空輪先端黒漆跡	地輪東方一部欠	梵字刻朱漆＋金泥 火輪軒反り朱漆＋金泥 風輪と火輪の間巻線朱漆 空輪先端朱漆＋金泥	地輪東方上部一部欠 判読不明	空輪と火輪軒反り先端黒漆 火輪西方歪つ 地輪上端一方欠	地輪南方一部欠	梵字刻黒漆 空輪先端と火輪軒反り部黒漆の跡？ 他三方梵字黒漆描き 十一日は黒漆描き	キャク・カク・ラク・バク・アク ケン・カン・ラン・バン・アン キャー・カー・ラー・バー・アー キャ・カ・ラ・バ・ア	
寸法(cm) 総高	(42.7)	43.3	(43.8)	(57.2)	(34.4)	(43.8)	(54.3)	45.0	(39.7)	(45.0)	(46.8)	56.2		48.2
空輪 幅	7.9	8.3	7.4	11.1		9.5	10.7	10.4	8.5	8.8		10.1		10.1
空輪 先端高		0.7	(1.0)半部欠	(4.8)一部欠		(2.2)半部欠	(1.8)一部欠	1.1	(1.3)一部欠	(2.4)一部欠		3.3		2.0
空輪 高	(6.3)	6.8	(7.2)	(13.1)	(0.5)	(9.5)	(10.4)	10.6	(8.0)	(9.0)		11.2		9.6
風輪 幅	8.6	9.1	8.3	11.9	10.0	10.1	11.3	10.7	9.3	10.1	13.2	10.7		10.3
風輪 高	5.9	5.9	5.9	7.0	4.7	5.2	7.1	4.0	5.6	5.5	7.2	6.1		6.0
火輪 軒上幅	(12.3)	12.2	11.5	15.2	12.4西方	12.2	(14.7)	14.5	(11.1)	(12.8)	16.1	13.5		13.2西方
火輪 下幅	12.2	12.4	11.7	15.3	12.4西方	12.3	14.7	14.0	10.9	12.8	16.1	13.3		13.7西方
火輪 軒高	5.2	5.6	5.3	(6.0)	4.2西方	4.4	(6.3)	5.5	(4.6)	(5.2)	(5.3)	6.1		5.5西方
火輪 高	7.8	8.3	8.2	8.3	6.7	6.5	9.5	7.0	6.7	7.6	7.3	7.9		8.5
	0.5	0.5	0.3	0.6	0.3	0.4	0.5	0.5	0.2	0.2	0.6	0.6		0.4
水輪 幅	12.0	12.8	11.0	16.0	13.3	13.2	14.7	14.9	11.8	13.2	17.4	15.0		13.5
水輪 高	8.4	7.8	8.4	9.7	8.3	8.0	9.3	8.3	7.2	8.7	10.6	9.7		8.4
	0.3	0.5	0.2	0.5	0.2	0.4	0.4	0.4	0.2	0.3	0.5	0.5		0.4
地輪 上幅	12.2	12.2	11.3	15.3	12.3	12.0	14.7	13.8	11.1西方	12.9	15.6	13.7		13.5
地輪 下幅	12.2	12.6	10.8	15.7	12.3	12.3	14.8	15.3	11.4西方	13.2	14.8	13.8		13.6
地輪 高	13.5	13.5	13.6	18.0	13.7	13.8	17.1	14.2	11.8	13.7	20.6	20.2		14.9
重量(kg)	(11.0)	12.0	10.5	23.5	(11.1)	12.1	20.3	15.0	9.6	12.5	(23.5)	19.0		15.5
金石文集成続編	(49)P148	(50)P149	(51)P149	——	(53)P149	(54)P149	(56)P150	(57)P150	(92)P157	(65)P152	(68)P153	(71)P153		(73)P154

石造遺物計測一覧 5

挿図番号	第109図	第116図	第110図	第110図		第116図	第116図	第110図	第110図	第116図		第116図	第116図	第116図
写真図版	PL.53		PL.53	PL.53			PL.53	PL.54	PL.54					PL.54
遺物番号	965	(拓影)1014	966	967		(拓影)1015	(拓影)1016	968	969	(拓影)1017		(拓影)1018	(拓影)1019	(拓影)1020
遺物名称	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位	堀2 石造物群実測 235	堀2 石造物群実測 158	堀2 石造物群実測 240	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 12		堀2M7第2層	堀2 石造物群実測 180	堀2 石造物群実測 232	堀2 石造物群実測 154	W段2I66 第2-第4層 堀SH27上部	堀2 石造物群実測 187	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 3	堀2 石造物群実測 93	堀2 石造物群実測 185
出土遺物登録番号	265-235	265-158	265-240	268-12		426	265-180	265-232	265-154	868	265-187	268-3	265-93	265-185
陰刻 紀年銘等	陰刻 𑖨 秀瑜法印 天正三年 五月廿五日	陰刻 𑖨 九月廿四日 妙善禅尼位 天正三年霊	陰刻＋黒漆 𑖨 二月十三日 定泉法師 天正四年	黒漆＋金泥描き 𑖨 三月廿八日 為道明禅門 天正四年	地輪底面 □□□ □□□ □□□ 見 祈 求 我 □ ム	陰刻 𑖨 六月九日 道永 天正ママ年	陰刻 𑖨 六月廿六日 澄勢法印 天正ママ年	陰刻＋黒漆 𑖨 十二月十一日 徳□法印 天正四年	陰刻 𑖨 六月廿三日 妙善禅尼 天正五年	陰刻 𑖨 三月十二日 清蔵法師 天正十二年	陰刻 𑖨 □ 天正 □□□□	陰刻 𑖨 道善禅門	陰刻 𑖨 勢亀法印	陰刻 𑖨 泉宗法師
(西暦)	(1575)	(1575)	(1576)	(1576)		(1576)	(1576)	(1576)	(1577)	(1584)	(1573～1592)			
観察備考	軒先鋭く形良		四方梵字 東方梵字刻黒漆 他三方梵字墨書 判読不可 空輪先端の基部に溝有り、 先端・軒反り部が鋭く尖る	梵字刻黒漆＋金泥 火輪軒反部黒漆＋金泥 地輪底面墨書				梵字刻黒漆 陰刻不明瞭 火水輪に切れがなく全体に丸みを帯びる	𑖨 キー カー ラー バー アー	東方右上・左下欠		地輪西南方一部欠	地輪東方・北西方一部欠	地輪東方一部欠 先端太い
寸法(cm) 総高	54.1		50.5	(28.9)		(31.8)	(49.7)	49.8	(44.4)		(47.2)	(35.1)	(45.2)	46.7
空輪 幅	13.0		10.5				9.4	10.5	9.5		10.2		8.5	9.3
空輪 先端高	2.5		3.6				(3.5)一部欠	1.2	(1.5)一部欠		(2.3)一部欠		(1.2)一部欠	2.8
空輪 高	11.0		11.5				(10.8)	9.0	(8.2)		(10.5)		(8.5)	10.2
風輪 幅	10.4		10.5				10.0	11.5	10.5		10.3		9.2	9.7
風輪 高	6.4		5.9				6.4	6.9	5.4		7.4		5.5	5.2
火輪 軒上幅	(14.7)		(14.5)	(12.5)		12.1南方	(13.1)	14.0	(12.5)		12.8	(14.0)北方	(12.2)	12.1
火輪 下幅	14.7		14.1	12.2		12.0南方	12.8	13.7	12.4		12.5	14.0 北方	12.1	12.2
火輪 軒高	5.8		7.2	(4.7)		5.0南方	(4.6)	5.4	5.7		4.4	5.4 北方	5.1	4.8
火輪 高	8.4		9.1	(6.9)		(7.3)	7.5	7.8	7.6		4.9	(8.1)	8.0	7.2
火輪	0.7		0.3	0.6		0.3	0.4	0.5	0.5		0.3	0.4	0.6	0.7
水輪 幅	14.5		14.5	12.8		13.0	13.3	15.4	13.6		13.3	14.9	12.9	12.5
水輪 高	10.6		9.2	7.3		8.7	9.4	9.3	8.0		8.9	9.6	7.8	8.1
地輪	0.4		0.4	0.3		0.2	0.5	0.5	0.4		0.5	0.4	0.6	0.3
地輪 上幅	14.8	14.0	14.2	12.2		12.5	13.1	13.8	12.4	(14.5)	12.8	13.9	12.0	11.9
地輪 下幅	14.7	14.3	14.0	12.0		13.0	13.0	13.4	12.0	(14.7)	12.7	14.1	12.0	12.1
地輪 高	16.6	15.2	14.1	13.8		15.3	14.7	15.8	14.3	16.0	14.7	16.6	14.2	15.0
重量(kg)	18.5	(8.8)	16.1	(9.0)		(10.5)	14.0	18.9	12.0	(8.2)	13.5	(15.0)	11.7	12.0
金石文集成続編	(74)P154	(75)P154	(77)P154	(78)P154		(79)P155	(80)P155	(81)P155	(83)P155	——	(91)P156	(93)P157	(94)P157	(95)P157

石造遺物計測一覧 6

挿図番号	第116図	第116図	第110図	第117図	第117図		第117図	第110図	第117図	第117図	第117図	第117図	第117図	第117図
写真図版			ＰＬ.54					ＰＬ.54	ＰＬ.54					
遺物番号	(拓影)1021	(拓影)1022	970	(拓影)1023	(拓影)1024		(拓影)1025	971	(拓影)1026	(拓影)1027	(拓影)1028	(拓影)1029	(拓影)1030	(拓影)1031
遺物名称	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位	堀2第3層 A段M6orB段 M7㋓	堀2 石造物群実測 101	堀2 石造物群実測 125	堀2 石造物群実測 174	堀2 石造物群実測 152	堀2 石造物群実測 107	堀2 石造物群実測 ㊳	堀2 石造物群実測 ⑤	堀2 石造物群実測 ㊷	堀2 石造物群実測 234	堀2 石造物群実測 212	堀2 石造物群実測 238	堀2 石造物群実測 124	堀2 石造物群実測 116
出土遺物登録番号	267-11	265-101	265-125	265-174	265-152	265-107	265-38	265-5	265-82	265-234	265-212	265-238	265-124	265-116
陰刻紀年銘等 (西暦)	陰刻 阿 道善 六月八日□	陰刻 阿 道祐禅門	陰刻 阿 道泉禅門	陰刻 阿 長尊法師	陰刻 阿 道□禅門	□茌	陰刻 阿 妙善禅尼	陰刻 阿 妙興禅尼 三月廿五日	陰刻 阿 道祐禅門	陰刻 阿 妙金禅尼	陰刻 阿 徳祐	陰刻 阿 道圓禅門 四月十九日	陰刻 阿 道祐禅門	陰刻 阿 妙円禅尼 逆修
観察備考				火輪の軒が鋭く 角張り形良		西方下部墨書描き 法界 菩提の省略	火輪西方一部欠		軒角張る		火輪東方一部欠	形良	全体に細長い	
寸法(cm) 総高	(56.4)	44.5	(44.4)	56.1	50.5	(41.9)	(42.5)	43.4	45.1	51.7	(32.4)	50.3	(44.1)	(44.4)
空輪 幅	11.6	8.5	9.6	12.0	10.5	9.0	7.7	8.3	8.7	10.6		11.2	7.8	10.2
空輪 先端高	(1.9)一部欠	2.1	(2.1)一部欠	3.6	2.1	(2.0)一部欠	(1.4)一部欠	2.1	1.7	3.0		2.8	(1.8)一部欠	(1.1)一部欠
空輪 高	(11.2)	8.8	(8.9)	12.6	11.2	(9.4)	(7.2)	8.4	8.8	11.7	(0.6)	11.0	(7.8)	(9.0)
風輪 幅	12.0	8.8	9.7	12.0	10.6	9.7	8.9	8.6	8.6	11.0	9.1	11.5	8.4	11.0
風輪 高	5.8	4.5	5.0	7.0	4.8	4.8	5.1	5.5	5.5	5.4	4.3	5.5	5.4	4.6
火輪 軒上幅	15.5	12.8	(14.0)	15.7	(13.5)	11.6	(12.0)	11.4	(12.4)	14.0	(11.1)西方	(14.2)	12.5	13.0
火輪 下幅	15.7	12.0	13.9	15.2	13.5	11.5	12.0	11.3	12.0	(13.7)	10.9 西方	13.9	12.3	12.7
火輪 軒高	6.3	4.3	(3.6)	5.7	4.5	(4.3)	5.8	5.1	5.6	5.0	(3.5)	(4.8)	4.9	4.0
火輪 高	10.4	7.5	8.2	7.2	8.5	6.0	8.0	6.8	7.5	7.4	7.1	7.1	7.1	7.4
	0.6	0.6	0.5	0.6	0.3	0.5	0.4	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.6	0.4
水輪 幅	17.1	12.8	14.8	16.5	14.5	12.1	12.8	11.3	12.3	14.5	12.6	14.6	12.0	14.6
水輪 高	11.4	8.2	9.0	11.3	10.1	6.3	7.9	7.3	8.0	9.9	6.9	10.1	8.2	9.7
	0.5	0.5	0.5	0.3	0.2	0.4	0.3	0.4	0.7	0.3	0.5	0.2	0.5	0.6
地輪 上幅	15.6	12.5	13.8	14.9	13.1	11.7	12.4	11.3	12.2	14.0	10.7	14.1	12.3	12.9
地輪 下幅	16.1	12.5	14.0	14.5	13.3	11.6	12.6	11.3	12.3	13.8	10.4	14.5	12.0	13.3
地輪 高	16.5	14.4	12.3	17.6	15.4	14.5	13.6	14.5	14.1	16.6	12.6	16.0	14.5	12.7
重量(kg)	24.8	11.1	14.6	23.0	15.0	9.5	11.5	10.0	11.5	17.2	(8.3)	17.1	10.4	14.0
金石文集成続編	(96)P157	(97)P157	(98)P157	(99)P157	(100)P157	(101)P158	(102)P158	(103)P158	(104)P158	(105)P158	(106)P158	(107)P158	(108)P158	(109)P158

石造遺物計測一覧 7

挿図番号	第117図	第110図		第117図	第117図	第117図	第117図	第117図	第117図					
写真図版	ＰＬ.54	ＰＬ.54												
遺物番号	(拓影)1032	972		(拓影)1033	(拓影)1034	(拓影)1035	(拓影)1036	(拓影)1037	(拓影)1038					
遺物名称	一石五輪塔	一石五輪塔		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位	堀2 石造物群実測 53	堀2A段 M6第3層		堀2 石造物群実測 105	堀2N10第2層 下部	堀2A段 M7第3層	堀2M6第2層	堀2M6第2層	堀2 石造物群実測 230	堀2 石造物群実測 120	堀2N9第2層	堀2 石造物群実測 49 127	堀2 石造物群実測 102	堀2 石造物群実測 17
出土遺物登録番号	265-53	266-21		265-105	482	267-19	415	414	265-230	265-120	467	265-127 265-49	265-102	265-17
陰刻紀年銘等 (西暦)	陰刻 二月三日 道秀禅門	陰刻＋黒漆＋金泥 妙蓮禅門	(北) (西) (南) (東)	陰刻 道善禅門	陰刻 妙祐禅尼 逆修	陰刻＋黒漆 道揚	陰刻＋朱漆 壽善尼逆修	陰刻 妙祐尼禅	陰刻 年号 月日 禅尼	陰刻 逆修 陰刻不明瞭	陰刻 月 日		墨書 判読不明	
観察備考	火輪の西方が狭く北方が斜め	東方梵字刻黒漆＋金泥 四方梵字 東方梵字特に大きい	キャ・カ・ラ・バ・ア キャ・カ・ラ・バ・ア キャ・カ・ラ・バ・ア キャ・カ・ラ・バ・ア			梵字刻黒漆 空輪先端黒漆	「禅」に朱漆僅かに残る		水輪歪つ		判読不明瞭	梵字刻黒漆	東方梵字刻黒漆 他三面梵字墨書描き 火輪角張る	梵字刻黒漆 に僅かに金泥残る 地輪南方一部剝離 地輪西方一部欠
寸法(cm) 総高	(45.1)	51.5		48.3	(27.6)	44.8	(36.3)	37.8	(48.0)	52.2	48.6	46.3	(41.3)	(48.0)
空輪 幅	6.2	11.3		9.8		8.7		7.5	9.8	11.2	10.1	10.3	8.1	10.5
空輪 先端高	(0.9)大半欠	2.1		1.1		3.1		0.9	(2.0)一部欠	1.3	1.6	2.1	(1.4)大半欠	(1.8)一部欠
空輪 高	(7.7)	10.6		9.2		9.1		6.9	(9.8)	9.7	9.2	10.0	(7.4)	(9.2)
風輪 幅	7.5	11.4		10.3		9.1		8.0	10.8	11.5	10.8	9.9	9.0	10.6
風輪 高	5.4	5.4		5.5		5.6		4.8	4.8	5.8	5.1	4.5	5.2	4.3
火輪 軒上幅	12.2	(14.0)		(12.9)	(11.8)南方	12.3西方	(13.5)	(10.7)	13.2	15.0	(12.7)	(12.9)	(12.3)	(13.7)
火輪 下幅	12.4	13.8		13.0	11.8 南方	12.1西方	14.2	11.1	13.4	14.5	12.9	(12.8)	12.2	13.5
火輪 軒高	5.8	5.3		(5.3)	4.2 南方	5.6西方	(5.7)	4.2	5.5	5.3	5.5	4.9	(5.1)	(4.6)
火輪 高	8.4	8.0		7.7	(6.8)	8.0	(8.6)	7.1	7.4	8.9	8.6	8.0	7.6	9.3
	0.4	0.5		0.5	0.2	0.5	0.2	0.4	0.5	0.7	0.3	0.5	0.6	0.3
水輪 幅	11.2	15.0		13.8	12.6	12.3	15.0	11.8	14.0	14.7	14.3	13.5	12.5	14.8
水輪 高	8.3	10.7		9.0	7.9	7.3	9.6	7.2	9.8	9.4	9.7	9.2	7.6	10.5
地輪	0.3	0.5		0.3	0.1	0.4	0.3	0.3	0.2	0.7	0.2	0.5	0.6	0.3
地輪 上幅	12.2	13.9		12.9	12.1	11.9	14.2	11.3	13.9	14.6	13.3	12.8	12.1	13.7
地輪 下幅	12.4	14.2		13.0	12.1	12.1	14.2	11.3	14.1	14.5	13.2	12.8	12.0	13.7
地輪 高	14.6	15.8		16.1	12.6	13.9	17.6	11.1	15.5	17.0	15.5	13.6	12.3	14.1
重量(kg)	10.5	18.0		14.0	(9.0)	10.9	(16.3)	8.2	16.0	20.0	15.5	23.1	10.6	16.0
金石文集成続編	(110)P159	(111)P159		(112)P159	(113)P159	(114)P159	(115)P159	——	——	——	——	——	——	——

石造遺物計測一覧 8

挿図番号		第110図					第118図	第111図	第111図	第111図	第111図			
写真図版							PL.54	PL.54	PL.54	PL.54	PL.54			
遺物番号		974					(拓影)1039	976	977	978	979			
遺物名称	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	組合式五輪塔	組合式五輪塔	組合式五輪塔	組合式五輪塔	組合式五輪塔	組合式五輪塔	組合式五輪塔	組合式五輪塔
出土地点・層位	堀2 石造物群実測 140 142	堀2 石造物群実測 24	堀2 石造物群実測 134	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 28	堀2M7第2層	堀2M6第2層	堀2 石造物群実測 128	堀2 石造物群実測 215	堀2 石造物群実測 141	堀2 石造物群実測 66	堀2 石造物群実測 129	堀2 石造物群実測 201	堀2 石造物群実測 67	堀2 石造物群実測 79
出土遺物登録番号	265-140 265-142	265-24	265-134	268-28	232	399	265-128	265-215	265-141	265-66	265-129	265-201	265-67	265-79
陰刻 紀年銘等 (西暦)	黒漆描き 𑖀𑖽𑖨 (1515)	黒漆描き 𑖀𑖽𑖨	朱漆描き？ 𑖀𑖽𑖨	𑖀𑖽𑖨	—	—	陰刻 𑖀𑖽𑖨 永正十二年十七月十四日 妙圓禅尼 (1515)	陰刻 𑖀𑖽𑖨 永正十二年十七月十四日 道法禅門 (1515)	陰刻 𑖀𑖽𑖨 五月廿三日 妙善禅尼 天文八年 (1539)	陰刻 𑖀𑖽𑖨 七月廿八日 為道林禅門 永禄十三年 (1570)	陰刻＋黒漆 𑖀𑖽𑖨 正月二日 勢秀法師 天正七年 (1579)	四方梵字 𑖀𑖽𑖨𑖀 (東)ア (南)アー (西)アン (北)アク		
観察備考	梵字刻黒漆 地輪西方一部欠	梵字刻黒漆	梵字刻黒漆 空輪先端きれいな円形ノミ跡、全体にふくらみのある形でくびれが少ない 軒の反りが少ない	梵字刻黒漆 空輪先端欠けるが僅かに黒漆の痕跡？	梵字刻朱漆 軒角張る 火輪少し歪つ	梵字刻朱漆	上面中央凸 東方上部一部欠	上面中央凸 ほとんどなし	上面中央凸 整った形	上面中央凸 底面中央凹	地輪＋台座	上面中央凸	上面中央凸 ほとんどなし 底部加工痕	上面中央凸 底部加工痕
寸法(cm) 総高	44.9	(39.2)	(46.2)	(38.8)			18.2	16.0	17.3	17.6	27.7	20.6	17.3	17.6
空輪 幅	10.0	9.1	11.3	9.4										
空輪 先端高	2.1	(1.8)一部欠	(1.8)半部欠											
空輪 高	9.5	(8.2)	(7.9)	(6.5)										
風輪 幅	9.8	9.6	11.5	9.8										
風輪 高	5.5	4.6	4.8	4.0										
火輪 軒上幅	12.3	(11.2)	13.8	11.7	(14.2)	(14.0)北方								
火輪 下幅	12.2	11.1	13.2	11.7	(14.4)	13.5 北方								
火輪 軒高	5.3	4.7	(5.5)	4.5	(5.9)	(5.2)								
火輪 高	7.4	6.9	8.1	6.5	(8.1)	(8.5)					枘穴 深 3.1			
	0.7	0.4	0.7	0.6							〃 径 4.7			
水輪 幅	13.0	11.7	14.2	12.7	13.8	16.0					地輪上幅16.0			
水輪 高	7.6	6.0	8.2	7.0	(9.3)	(9.3)					〃 下幅16.1			
地輪	0.4	0.5	0.4	0.5			突出部高 1.4	0.3	0.6	0.9	〃 高 16.6	突出部高0.8	0.3	1.0
地輪 上幅	11.8	11.0	12.8	11.8			20.9	20.3	20.8	21.5	台座上幅17.0	24.7	21.1	20.4
地輪 下幅	12.3	11.0	(12.5)	11.4			20.6	20.4	21.0	21.2	〃 下幅23.2	24.6	20.9	20.4
地輪 高	13.8	12.6	16.1	13.7			16.8	15.7	16.7	16.7	〃 高 11.1	19.8	17.0	16.6
重量(kg)	12.4	8.8	16.2	(10.5)	(6.0)	(7.0)	19.0	16.5	19.3	19.8	25.5	31.1	19.8	17.9
金石文集成続編	——	——	——	——	——	——	(8)P141	(9)P141	(17)P143	(58)P150	(84)P155	——	——	——

石造遺物計測一覧 9

挿図番号	第111図	第111図
写真図版	PL.55	PL.55
遺物番号	980	981
遺物名称	地蔵石仏	地蔵石仏
出土地点・層位	堀2M10第2層	堀2M6第2層
出土遺物登録番号	238	230
陰刻 紀年銘等	陰刻 天正二年八月二日 妙西禅尼 (1574)	陰刻 天正三年正月廿七日 妙西禅尼 (1575)
観察備考	蓮台陰刻＋朱漆 背面粗い加工痕 右手錫杖 左手宝珠 立像 舟形	蓮台陰刻＋朱漆 背面粗い加工痕 右手錫杖 左手宝珠 立像 舟形
寸法(cm) 総高	50.6	50.7
地蔵高	30.4	31.0
最大幅	27.5	26.1
奥行	10.2	10.0
基礎 上幅	23.4	22.0
基礎 下幅	22.8	21.7
基礎 下奥行	17.9	15.5
基礎 高	8.9	9.1
重量(kg)	22.5	20.8
金石文集成続編	(70)P153	(72)P153

挿図番号	第113図	第113図	第113図		
写真図版	PL.56	PL.56	PL.56	PL.56	
遺物番号	988	989	990	2024	
遺物名称	宝篋印塔基礎	宝篋印塔基礎	宝篋印塔塔身	宝篋印塔笠	宝篋印塔相輪
出土地点・層位	堀2 石造物群実測 (60)	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 32	堀2M6第2層	堀2 石造物群実測 (16)	堀2M6第2層
出土遺物登録番号	265-60	268-32	228	265-16	229
陰刻 紀年銘等	陰刻 願主岩瀧村□□□ 一結衆敬白等 寛正六年乙酉拾月八日 (1465)	〔正面〕 為孫左衛門 黒漆描き 陰刻＋朱漆＋黒漆 為妙西禅尼 黒漆描き 為成金禅門 黒漆描き 為良秀法印 陰刻＋朱漆＋黒漆 為□□良法印 黒漆描き 元亀四年 陰刻＋朱漆＋黒漆 何所有南北 一切念□ 黒漆描き 〔左側面〕 七世父母 □□□□ □□□寂滅□ □□□□東西 〔背面〕 □□□□□□ □□□□□□ □□□□□□ 黒漆描き □□ □□□□ □□□□ □□□□ ケン・ウン・ラ・ビ・ア (1573)	西(キリーク) 北(アク) 東(ウン) 南(タラーク)		
観察備考		〔右側面〕 不明	四方梵字		九輪圏線・請花 陰刻＋朱漆 宝珠上請花欠損
寸法(cm) 総高	23.8	20.1	20.5	26.1	(26.5)
枘穴 深	4.0	3.6		上端幅12.8	伏鉢上端径11.1
枘穴 径	6.3	6.3		中 幅32.6	〃 下端径11.1
				下端幅20.7	〃 高 6.7
反花座 高	5.3	5.0		上端枘穴深6.5	枘基部径5.4
反花座 上端幅	17.3	13.4		径6.8	下端部4.7
台座 上幅	30.0	22.0	上幅 18.7	下端枘穴深1.9	高 4.6
台座 下幅	30.0	22.0	下幅 18.6	径7.0	
台座 高	18.3	15.1	高 18.1		
重量(kg)	50.1	21.0	16.1	40.5	(4.2)
金石文集成続編	(3)P140	(66)P152	——	——	——

挿図番号	第113図	第113図
写真図版	PL.56	PL.56
遺物番号	992	991
遺物名称	板碑	板碑
出土地点・層位	堀2 石造物群実測 (159)	堀2 石造物群実測 (126)
出土遺物登録番号	265-159	265-126
陰刻 紀年銘等	陰刻 逆修人衆 平次郎 佐衛門太郎 三郎次郎 源三郎 孫三郎 孫太郎 永禄十二年八月彼岸 (1569)	
観察備考	陰刻中に黒漆＋金泥の痕跡あり 三角板碑	背面粗い加工 舟形
寸法(cm) 総高	73.5	64.4
身部高	51.3	31.2
頂部山形高	9.0	10.8
二線切込高	3.2	9.2
根部 高	10.3	13.2
根部 幅	23.4	18.0
枘 高	7.5	
枘 基部径	8.0	
枘 下端径	5.0	
奥行 上	7.2	
奥行 中	8.2	13.0
奥行 下	12.8	
側奥行 上	5.0	
側奥行 中	7.0	
側奥行 下	7.5	
重量(kg)	36.1	24.0
金石文集成続編	(55)P150	——

挿図番号								第110図	
写真図版									
遺物番号								973	
遺物名称	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位	堀2A段 M6第3層 ③	堀2A段M6 B段M7or 第3層Ⓒ	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 40	堀2第2層 区画不明	堀2 石造物群実測 173	I段堀2第2層 M4	A段石積み	堀2A段M6 第3層	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 24
出土遺物登録番号	266-3	267-3	268-40	488	265-173	387	263-18	267-23	268-24
観察備考	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ 全体的に大きい	梵字のみ 265-155 265-229 空・風・火水輪 北方1/4欠 キャーカーラーバーアー	梵字のみ 軒が鋭く形良	梵字のみ	梵字のみ 形が整っている	梵字のみ ケンウンラビア	梵字のみ
寸法(cm) 総高	58.1	(56.9)	(56.5)	55.1	(54.3)	(54.1)	53.6	52.9	52.8
空輪 幅	10.3	11.5	11.5	13.6	11.4	11.1	11.3	11.5	10.2
空輪 先端高	3.8	(1.8)一部欠	(1.4)半部欠	3.0	(3.5)一部欠	(1.7)一部欠	2.4	2.6	3.0
空輪 高	11.8	(11.2)	(10.9)	12.5	(13.2)	(10.5)	11.1	11.4	11.0
風輪 幅	11.0	11.5	11.8	13.1	11.8	12.0	11.6	11.7	11.0
風輪 高	6.4	6.6	7.3	6.0	5.3	6.0	5.1	6.1	6.4
火輪 軒上幅	15.6	(14.7)	(14.6)	(15.4)	14.7	(14.3)	16.0	(15.2)	(14.7)
火輪 下幅	15.3	14.8	(14.7)	15.4	14.7	14.2	15.9	15.0	14.5
火輪 軒高	6.9	(5.8)	5.5	(6.5)	6.7	(5.5)	5.9	5.6	6.0
火輪 高	9.8	8.2	10.4	9.9	9.1	10.2	10.2	9.2	9.1
	0.5	0.5	0.8	0.6	0.4	0.7	0.4	0.4	0.4
水輪 幅	15.9	15.8	16.3	17.6	15.4	15.6	17.3	15.9	15.2
水輪 高	9.8	10.2	9.8	11.3	10.3	9.7	11.2	10.6	9.0
	0.4	0.5	0.9	0.6	0.3	0.8	0.4	0.2	0.3
地輪 上幅	14.8	14.6	15.3	16.3	14.7	14.4	16.0	14.9	14.5
地輪 下幅	15.0	14.9	15.6	16.4	14.9	14.6	16.0	15.5	14.4
地輪 高	19.4	19.7	16.4	14.0	15.7	16.1	15.2	15.0	16.6
重量(kg)	24.4	23.2	24.5	21.5	20.5	19.2	23.8	20.5	19.5

挿図番号									
写真図版									
遺物番号									
遺物名称	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位	堀2 石造物群実測 110	堀2 石造物群実測 ①	堀2 石造物群実測 72	堀2 石造物群実測 42	堀2A段M7 第2層	堀2 石造物群実測 227	堀2 石造物群実測 153	堀2M9第2層 下部	堀2A段 M6第3層
出土遺物登録番号	265-110	265-1	265-72	265-42	393	265-227	265-153	478	266-20
観察備考	梵字のみ 火輪軒角張る 空輪下部の方 が幅が広い	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ 空輪が大きい	梵字のみ 軒下そり上がる □ カンランバンアン	梵字のみ 火輪北方の軒 一部欠 地輪北西方一 部欠	梵字のみ 地輪が少し低い 形良 ケンウンラビア	梵字のみ	梵字のみ
寸法(cm) 総高	(52.2)	51.9	51.8	51.7	(51.5)	(51.4)	(51.0)	(50.9)	(50.9)
空輪 幅	9.7	10.5	10.8	12.2	11.3	12.1	11.9	10.1	10.2
空輪 先端高	(3.7)一部欠	2.2	2.6	2.4	(0.5)大半欠	(1.4)一部欠	(2.5)一部欠	(1.1)半部欠	(1.6)一部欠
空輪 高	(12.1)	10.3	11.0	10.3	(9.1)	(9.6)	(11.4)	(9.2)	(9.9)
風輪 幅	10.5	10.7	11.7	12.1	11.4	11.5	12.1	11.1	10.6
風輪 高	6.0	6.1	15.9	5.0	5.1	5.4	4.6	6.9	5.3
火輪 軒上幅	14.5	(14.8)	15.3	14.0	15.6	(13.1)西方	(16.0)	(14.3)	(13.1)西方
火輪 下幅	14.5	14.3	15.7	14.0	15.4	13.0 西方	15.8	14.8	13.1 西方
火輪 軒高	5.5	5.6	5.5	5.5	5.5	(5.2)	(4.6)	6.2	(5.0)西方
火輪 高	8.0	8.5	7.6	9.0	10.5	9.8	8.6	9.2	8.9
	0.6	0.5	0.9	0.5	0.8	0.6	0.6	0.2	0.4
水輪 幅	15.1	15.5	17.0	15.6	16.2	14.1	17.0	14.5	14.8
水輪 高	9.7	10.5	11.4	10.5	11.1	9.3	11.2	9.2	10.2
	0.6	0.4	0.5	0.4	0.6	0.6	0.2	0.2	0.4
地輪 上幅	14.6	14.8	15.3	13.8	15.4	13.7	15.8	14.7	13.4
地輪 下幅	14.8	14.9	15.4	13.8	15.7	13.8	16.0	14.7	13.5
地輪 高	15.2	15.6	15.7	16.0	14.3	16.1	14.4	16.0	15.8
重量(kg)	18.1	21.0	22.4	18.2	21.5	17.1	21.7	18.5	17.0

石造遺物計測一覧10

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2A段 M6第3層	堀2A段 M6第3層	堀2 石造物群実測 216	堀2 石造物群実測 148	A段石積み	堀2M8第2層	堀2 石造物群実測 36	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 1	堀2 石造物群実測 33
出土遺物登録番号		266-6	266-17	265-216	265-148	263-14	461	265-36	268-1	265-33
観察備考		梵字のみ	梵字のみ 空輪の梵字のところ半部欠	梵字のみ 全体に安定感有り 形良 ケン カン ラ ビ ア	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ 471-1地輪と接合	梵字のみ 地輪の底部の四方が欠落、下幅測定不可 ケン カン ラ ビ ア	梵字のみ	梵字のみ
寸法(cm)	総高	(50.6)	50.0	(49.9)	(49.9)	(49.7)	(49.5)	(49.5)	(49.5)	(49.5)
	空輪 幅	10.9	10.0	11.8	10.2	10.0	10.6	10.5	10.7	10.5
	空輪 先端高	(2.4)一部欠	1.4	(1.3)一部欠	(1.6)	(2.1)一部欠	(0.9)一部欠	(0.9)大半欠	(1.3)大半欠	(2.0)一部欠
	空輪 高	(9.8)	8.9	(9.0)	(9.6)	(10.7)	(11.0)	(9.2)	(9.3)	(11.0)
	風輪 幅	11.5	10.5	12.1	11.0	10.0	10.3	10.1	11.3	10.7
	風輪 高	5.8	6.0	5.1	5.9	5.8	4.9	5.3	5.2	5.5
	火輪 軒上幅	(13.5)	13.8	16.2	(13.1)	13.6西方	12.8	(14.8)	(12.6)西方	13.3西方
	火輪 下幅	13.5	13.8	16.2	12.5	13.4西方	12.7	(14.8)	14.0 西方	13.5西方
	火輪 軒高	5.7	5.6	4.4	(4.3)	5.5西方	5.4	5.0	(4.9)西方	4.0西方
	火輪 高	9.8	9.7	9.3	9.4	7.7	8.2	10.0	8.8	8.5
		0.6	0.6	0.6	0.3	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5
	水輪 幅	14.3	14.7	18.2	14.0	14.5	13.6	14.6	15.2	14.6
	水輪 高	9.8	8.7	9.5	9.2	8.5	9.0	10.8	9.3	9.5
	地輪	0.4	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.6	0.4	0.7
	地輪 上幅	13.7	13.4	16.1	13.0	13.7	12.2	14.5	14.1	13.8
	地輪 下幅	13.8	13.7	16.2	13.2	14.0	12.2		14.2	14.0
	地輪 高	14.4	15.7	15.9	15.1	16.1	15.4	13.2	16.0	13.8
重量(kg)		16.3	16.5	24.0	16.0	16.5	15.2	17.2	18.0	15.5

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 25	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 26	A段石積み	堀2 石造物群実測 111	堀2N10第2層下部	堀2A段 M6第3層	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 25	堀2 石造物群実測 204	堀2A段 M6A第2層 1/5
出土遺物登録番号		265-25	268-26	263-10	265-111	485	266-24	268-25	265-204	407
観察備考		梵字のみ	梵字のみ 地輪東方下一部欠 地輪西方上一部欠	梵字のみ ケン カン ラ ビ ア	梵字のみ 水輪がどっしりしている ケン ウン ラ ビ ア	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ ケン ウン ラ ビ ア	梵字のみ 西方梵字 風火水輪北方1/7欠 ケン カン ラン バン アン	梵字のみ ケン カン ラ ビ ア
寸法(cm)	総高	(49.3)	49.3	49.2	(48.8)	(48.7)	(48.5)	(48.2)	48.2	(47.8)
	空輪 幅	11.0	10.5	11.7	11.5	10.3	10.1	10.7	11.0	10.3
	空輪 先端高	(2.0)半部欠	2.2	1.5	(2.3)半部欠	(0.9)半部欠	(1.9)一部欠	(1.4)半部欠	1.6	(1.4)半部欠
	空輪 高	(10.1)	10.9	10.4	(10.2)	(9.0)	(10.8)	(9.3)	9.4	(9.1)
	風輪 幅	11.1	11.0	11.4	6.0	10.3	10.9	10.5	11.1北方	10.9
	風輪 高	4.6	6.4	5.0	12.0	5.1	5.2	5.8	4.9	4.6
	火輪 軒上幅	14.2	(13.5)	(13.4)	(15.2)	(13.4)	(13.0)	14.8	14.5北方	13.9西方
	火輪 下幅	14.1	13.3	13.2	15.2	(13.3)	13.0	14.6	14.5北方	13.8西方
	火輪 軒高	5.8	5.7	5.3	(5.0)	6.3	4.7	5.5	4.8北方	4.9西方
	火輪 高	8.2	8.7	7.7	8.6	8.7	7.9	9.5	8.8	8.7
		0.5	0.5	0.6	0.6	0.4	0.4	0.6	0.6	0.6
	水輪 幅	14.2	13.8	15.1	16.0	14.2	14.5	15.7	15.5北方	14.6
	水輪 高	9.1	8.0	10.1	7.6	9.1	9.6	9.3	9.4	9.5
	地輪	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4	0.5	0.5	0.8
	地輪 上幅	13.9	13.4	13.6	15.2	12.5	13.1	14.8	13.7	13.6
	地輪 下幅	14.2	(13.7)	13.6	15.6	13.3	13.1	15.0	13.8	13.3
	地輪 高	16.2	14.3	14.9	12.8	16.0	14.2	13.2	14.6	14.5
重量(kg)		15.7	15.4	18.0	19.1	16.5	15.5	18.4	16.0	15.1

石造遺物計測一覧11

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2A段 M6第2層 2/5	堀2 石造物群実測 ㊷	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 18	堀2 石造物群実測 (149)	堀2 石造物群実測 (164)	堀2 石造物群実測 (176)	堀2A段 M6第3層 14+α	堀2 石造物群実測 ㊲	M8B第1層
出土遺物登録番号		400	265-52	268-17	265-149	265 164	265-176	264-15	265-37	457
観察備考		梵字のみ 全体に角張る 特に空・地輪 高い	梵字のみ 地輪の北方が 狭く全体歪つ	梵字のみ 水輪が太い 𑖀𑖽𑖟ケンカンラビア	梵字のみ 地輪東方下部 一部剝離	梵字のみ 地輪の角が美 しく 全体に形良	梵字のみ 地輪南方一部 欠 火地輪の幅西 方で小さくな る	梵字のみ 地輪東方上一 部欠 𑖀𑖽𑖟ケンカンラビア	梵字のみ 地輪が小さい 𑖀𑖽𑖟ケンカンラビア	梵字のみ
寸法(cm)	総高	47.7	47.7	(47.4)	(47.3)	(47.2)	47.0	46.8	(46.8)	(46.5)
	空輪 幅	10.2	9.7	11.4	8.9	10.1	10.3	10.0	10.1	10.4
	空輪 先端高	3.1	0.8	(0.9)半部欠	(2.0)一部欠	(1.8)	1.5	1.8	(1.7)一部欠	(1.2)一部欠
	空輪 高	10.7	9.2	(8.8)	(8.9)	(9.3)	9.4	8.7	(10.5)	(9.0)
	風輪 幅	10.4	10.4	12.8	9.1	10.8	10.8	10.0	10.2	10.5
	風輪 高	5.7	6.2	5.4	6.1	4.5	4.3	5.7	4.7	4.7
	火輪 軒上幅	(12.0)西方	12.3	(15.2)	12.6	(13.8)	12.4	(13.2)西方	(13.5)西方	(13.4)
	火輪 下幅	12.2 西方	12.3	(15.2)	12.5	13.4	12.4	13.2 西方	13.3 西方	13.6
	火輪 軒高	(4.4)西方	4.1	(5.4)	5.7	(4.2)	(4.5)	(5.5)西方	4.4 西方	5.1
	火輪 高	6.9	7.6	9.2	8.1	8.0	8.4	8.9	8.4	7.8
		0.5	0.6	0.3	0.6	0.3	0.6	0.4	0.6	0.6
	水輪 幅	13.5	13.1	17.0	12.0	14.5	13.5	14.8	14.1	13.4
	水輪 高	7.2	7.9	10.0	8.6	9.9	8.8	8.6	9.9	9.4
	地輪	0.6	0.6	0.3	0.3	0.5	0.4	0.3	0.5	0.3
	地輪 上幅	12.3	13.0	15.0	12.3	13.5	12.4	13.4 西方	13.1	13.7
	地輪 下幅	11.6	13.1	15.3	(12.5)	13.5	12.2	14.1 西方	13.3	13.7
	地輪 高	16.1	15.6	13.4	14.7	14.7	15.1	14.2	12.2	14.7
重量(kg)		13.5	14.0	19.4	12.3	15.9	12.6	15.4	13.9	15.5

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 ㊻	堀2 石造物群実測 (181)	堀2M7第2層	堀2A段 M6第3層 ②	堀2A段 M6第2層 6/14	A段石積み	堀2 石造物群実測 (168)	堀2 石造物群実測 (192)	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 33
出土遺物登録番号		265-76	265-181	425	266-2	264-6	263-3	265-168	265-192	268-33
観察備考		梵字のみ 南方火水地輪 一部欠 地輪東方北方 一部欠	梵字のみ 地輪東方左下 少し欠 先端が鋭く尖 る	梵字のみ 𑖀𑖽𑖟ケンカンラビア	梵字のみ	梵字のみ 地輪西方一部 欠、東方角一 部欠下部一部 剝離、火輪三 方角欠 𑖀𑖽𑖟ケンカンラビア	梵字のみ 406空風輪と 接合	梵字のみ 𑖀𑖽𑖟ケンカンラビア	梵字のみ 西方の右下欠 全体に形良	梵字のみ 水輪やや太い 𑖀𑖽𑖟ケンカンラビア
寸法(cm)	総高	46.5	46.3	(46.1)	(46.1)	46.1	46.1	(46.0)	46.0	(45.9)
	空輪 幅	10.2	9.2	9.9	8.9	9.9	9.4	10.5	8.5	10.0
	空輪 先端高	1.2	3.1	(1.0)半部欠	(1.0)一部欠	1.6	2.0	(2.2)一部欠	1.7	(0.8)半部欠
	空輪 高	9.3	11.4	(8.6)	(9.0)	8.4	9.6	(9.9)	8.7	(8.1)
	風輪 幅	11.2	9.3	10.4	9.5	10.0	9.3	10.1	8.9	9.9
	風輪 高	5.7	4.3	4.4	4.9	6.2	3.8	4.4	5.8	4.5
	火輪 軒上幅	13.6	(11.7)	(13.3)	12.0	計測不可	(12.9)	13.3	12.0西方	(14.0)
	火輪 下幅	13.7	11.6	13.3	11.9	計測不可	(13.3)	13.2	12.1西方	13.9
	火輪 軒高	(5.6)	5.0	5.2	4.5	(5.2)	5.0	4.5	5.9西方	(4.7)
	火輪 高	7.4	7.3	8.1	8.2	8.1	7.5	7.3	8.3	7.5
		0.6	0.3	0.5	0.4	0.4	0.5	0.6	0.4	0.4
	水輪 幅	14.0	12.4	14.4	13.7	15.7	13.7	14.5	12.5	15.4
	水輪 高	7.9	8.5	9.2	9.8	8.2	8.6	9.1	8.8	9.8
	地輪	0.5	0.3	0.6	0.3	0.5	0.4	0.5	0.2	0.4
	地輪 上幅	(12.6)	11.6	13.1	12.5	(14.0)	13.4	13.0	12.5	13.9
	地輪 下幅	14.0	12.0	13.3	12.4	(14.0)	13.2	13.3	12.8	13.8
	地輪 高	15.1	14.2	14.7	13.5	14.3	15.7	14.2	13.8	15.2
重量(kg)		17.2	11.9	14.9	12.8	12.9	15.6	13.9	11.6	16.0

石造遺物計測一覧12

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 ⑬	堀2A段 M6第3層	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 19	堀2A段 M6第2層 3/14	堀2 石造物群実測 (119)	堀2A段M6or B段M7第3層 Ⓝ	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 7	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 29	堀2M7第2層
出土遺物登録番号		265-13	266-23	268-19	264-3	265-119	267-14	268-7	268-29	444
観察備考		梵字のみ 全体のバランス良 地輪の東方一部欠	梵字のみ 明確 地輪の底凹む	梵字のみ 全体に面長 軒の幅が狭く上部の方が長い	梵字のみ 479の空風輪と接合 形良 地輪の高さが低い	梵字のみ 角が丸味をおびる	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ 地輪が細長い	梵字のみ
寸法(cm)	総高	(45.8)	(45.7)	45.7	(45.6)	45.6	(45.5)	(45.5)	45.4	(45.4)
	空輪 幅	10.3	10.9	10.1	9.8	9.9	9.0	9.2	9.5	10.4
	空輪 先端高	(2.3)一部欠	(1.7)一部欠	3.2	(1.4)半部欠	(1.5)一部欠	(1.3)一部欠	(2.2)一部欠	3.0	
	空輪 高	(10.6)	(8.5)	11.4	(9.3)	(8.6)	(8.8)	(9.3)	9.9	(8.2)
	風輪 幅	10.5	11.7	10.4	9.6	10.3	9.0	9.4	10.0	10.1
	風輪 高	4.6	5.8	5.0	5.2	5.6	4.8	5.5	5.6	5.3
	火輪 軒上幅	13.3西方	14.4	(12.2)	(16.2)	12.0	12.4	(11.7)	(11.5)	(12.7)西方
	火輪 下幅	13.3西方	14.3	12.2	16.2	12.0	12.2	12.0	(12.3)	12.5 西方
	火輪 軒高	4.2西方	4.7	(3.6)	(3.2)	4.5	4.4	5.0	(5.4)	5.3
	火輪 高	7.3	8.7	7.6	8.0	8.2	7.9	6.9	7.4	7.1
		0.6	0.5	0.6	0.8	0.9	0.4	0.6	0.4	0.7
	水輪 幅	14.4	15.8	12.6	15.5	13.7	13.0	13.2	12.7	13.7
	水輪 高	9.2	9.5	7.6	10.2	8.3	8.9	8.8	7.1	8.0
		0.2	0.6	0.3	0.5	0.8	0.4	0.4	0.4	0.6
	地輪 上幅	13.4	14.6	11.8	15.0	12.7	12.2	12.1	(12.0)	13.1
	地輪 下幅	13.4	14.7	11.8	15.7	12.5	12.6	12.1	12.4	13.4
	地輪 高	13.3	12.1	13.2	11.6	13.2	14.3	14.0	14.6	15.5
重量(kg)		13.8	17.2	11.5	17.5	12.5	13.0	12.5	11.9	(13.7)

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2A段M6or B段M7第3層 ⑪	A段石積み	堀2 石造物群実測 (236)	堀2M7第2層 下部	堀2M7第2層	堀2 石造物群実測 (143)	堀2 石造物群実測 ㉞	堀2N10第2層	堀2 石造物群実測 (239)
出土遺物登録番号		267-8	263-16	265-236	450	438	265-143	265-34	468	265-239
観察備考		梵字のみ ケンカンラビア	梵字のみ	梵字のみ 火輪北東方1/4 西南方1/4欠	梵字のみ	梵字のみ 東方右下欠損 377空風火水輪と接合	梵字のみ	梵字のみ 全体的に細長い	梵字のみ ケンカンラバア	梵字のみ 地輪東方一部欠 地輪やや長め 水輪南方へこみあり
寸法(cm)	総高	(45.2)	(45.1)	(45.0)	45.0	45.0	45.0	(44.9)	44.8	44.7
	空輪 幅	9.8	9.6	10.0	9.4	9.0	10.2	8.5	9.5	9.0
	空輪 先端高	(0.5)大半欠	(1.1)一部欠	(0.7)大半欠	2.5	1.3	1.5	(0.9)半部欠	1.4	1.0
	空輪 高	(7.4)	(8.8)	(8.6)	10.1	7.2	10.2	(7.9)	8.9	8.5
	風輪 幅	10.3	9.7	10.4	9.7	9.1	10.5	8.9	9.8	9.4
	風輪 高	5.2	4.8	4.5	4.9	4.3	5.5	6.0	8.9	4.8
	火輪 軒上幅	(14.8)	12.2	(9.1)	(12.4)	(10.7)	12.3	11.7	(12.9)	(11.4)
	火輪 下幅	14.7	12.1	(9.6)	12.5	(10.7)	12.2	11.6	12.6	11.5
	火輪 軒高	5.1	5.0	(3.4)	5.1	(4.7)	4.5	5.0	4.2西方	(4.6)
	火輪 高	9.0	7.2	7.8	7.8	8.0	7.4	7.5	8.2	6.8
		0.5	0.7	0.3	0.6	0.5	0.6	0.5	0.5	0.4
	水輪 幅	16.1	11.9	13.8	12.8	12.1	13.2	12.5	13.5	12.7
	水輪 高	10.3	8.3	8.9	7.8	7.4	7.8	8.5	9.2	7.3
		0.5	0.6	0.4	0.5	0.5	0.5	0.4	0.6	0.5
	地輪 上幅	14.6西方	11.8	12.8	12.2	11.2西方	12.3	12.1	12.8西方	12.0西方
	地輪 下幅	14.7西方	12.1	12.9	12.4	11.2西方	12.3	12.4	13.1西方	12.2西方
	地輪 高	12.4	14.7	14.5	13.3	12.9	13.0	14.1	13.1	16.4
重量(kg)		18.0	11.5	13.6	12.5	8.9	12.0	10.5	13.2	11.5

石造遺物計測一覧13

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2A段 M6第3層 ⑤	堀2 石造物群実測 ㊼	堀2 石造物群実測 (113)	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 [8]	堀2M6第2層	堀2 A段M6第2層 2/14	堀2 石造物群実測 (242)	堀2 石造物群実測 (69)	堀2 石造物群実測 (203)
出土遺物登録番号		266-5	265-47	265-113	268-8	421	264-2	265-242	265-69	265-203
観察備考		梵字のみ 底磨きがある	梵字のみ 地輪の南方が狭く全体に歪つ	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ 地輪西方一部欠	梵字のみ	梵字のみ 西方地輪に2ヵ所凹みがあるが全体に形良
寸法(cm)	総高	(44.5)	(44.5)	(44.5)	44.5	44.5	(44.4)	44.2	(44.2)	(44.1)
	空輪 幅	9.6	9.3	9.5	8.8	8.7	9.0	9.9	8.6	8.9
	空輪 先端高	(1.8)半部欠	(1.3)半部欠	(1.1)一部欠	3.0	2.1	(1.4)半部欠	2.5	(3.0)一部欠	(2.3)一部欠
	空輪 高	(8.8)	(8.4)	(9.1)	9.1	9.1	(8.6)	8.8	(10.2)	(9.4)
	風輪 幅	10.1	9.8	9.7	9.0	9.2	9.7	10.0	9.2	9.5
	風輪 高	5.8	4.7	4.8	5.8	5.8	5.9	4.6	5.3	5.6
	火輪 軒上幅	(11.9)北方	(12.0)	12.1	12.0 西方	(12.2)	(12.1)西方	(12.3)	11.9	(12.1)
	火輪 下幅	12.5 北方	12.1	12.0	(11.8)西方	12.2	12.0 西方	12.2	11.7	12.0
	火輪 軒高	5.5	4.4	4.5	5.4	5.4	5.4	(4.4)	5.2	(5.0)
	火輪 高	7.6	7.3	7.0	7.6	7.5	7.6	6.6	7.5	7.8
		0.5	0.4	0.6	0.3	0.4	0.3	0.5	0.7	0.6
	水輪 幅	13.4	12.3	12.9	12.7	11.6	12.9	13.5	12.0	12.7
	水輪 高	7.6	8.2	8.3	7.9	7.4	7.9	8.9	7.0	7.0
	地輪	0.7	0.4	0.2	0.1	0.3	0.3	0.6	0.5	0.5
	地輪 上幅	12.6	11.0	12.2	12.3	11.9	12.1	12.5	11.7	12.0
	地輪 下幅	13.6	10.6	(11.9)	12.7	11.8	12.3	12.8	11.8	12.0
	地輪 高	13.5	15.1	14.5	13.7	14.0	13.8	14.2	13.0	13.2
重量(kg)		14.0	10.0	12.0	11.1	11.0	12.1	12.5	10.5	11.2

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2L7第1層	堀2 A段M6第2層 5/5	堀2 石造物群実測 (210)	堀2 石造物群実測 (139)	堀2 石造物群実測 ㉒	堀2 石造物群実測 (197)	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 [5]	堀2 石造物群実測 ㊽	堀2 石造物群実測 ㉙
出土遺物登録番号		391	402	265-210	265-139	265-22	265-197	268-5	265-80	265-29
観察備考		梵字のみ ケン カン ラ ビ ア	梵字のみ	梵字のみ 地輪東方一部欠 地輪北方えぐれている	梵字のみ 火輪東方の東南角と西方の西南角が欠 ケン カン ラ ビ ア	梵字のみ	梵字のみ 地輪西方短い 空輪東方欠 □ ウン ラ ビ ア	梵字のみ ケン カン ラ ビ ア	梵字のみ 空輪下の方ですぼんでいる(変わっている) 西方角一部欠	梵字のみ 地輪が短い
寸法(cm)	総高	(44.0)	44.0	(44.0)	(43.9)	43.9	43.9	43.8	(43.7)	(43.7)
	空輪 幅	9.6	10.4	8.7	9.2	7.5	10.1	8.7	8.4	8.6
	空輪 先端高	(0.8)大半欠	2.4	(2.3)一部欠	(0.8)半部欠	2.3	1.5	2.5	(0.9)一部欠	(1.9)一部欠
	空輪 高	(7.9)	10.5	(9.2)	(8.0)	9.0	8.4	9.5	(7.8)	(8.5)
	風輪 幅	10.0	10.6	9.9	9.6	8.1	10.6	9.0	9.2	9.1
	風輪 高	4.3	4.9	5.2	4.2	5.5	5.1	4.7	5.2	5.5
	火輪 軒上幅	(13.4)西方	11.8	12.2	(13.4)北方	(12.4)西方	(12.8)	(12.4)	(12.1)	12.6
	火輪 下幅	13.2 西方	12.1	12.1	(13.3)北方	12.2 西方	(12.9)	12.1	11.9	13.2
	火輪 軒高	(4.2)西方	4.9	4.3	(4.2)北方	5.0 西方	(2.8)	5.4	(3.9)	3.9
	火輪 高	7.4	7.1	7.2	8.2	7.2	7.0	7.7	7.1	8.1
		0.7	0.4	0.6	0.5	0.6	0.4	0.2	0.5	0.4
	水輪 幅	15.1	12.4	12.7	14.1	12.5	14.7	12.3	12.6	13.3
	水輪 高	9.8	7.4	8.2	9.0	7.9	9.5	7.7	8.4	9.0
	地輪	0.5	0.7	0.6	0.4	0.4	0.6	0.2	0.4	0.6
	地輪 上幅	13.6	12.4	11.9	13.0	12.0	13.5	12.1	11.9	13.0
	地輪 下幅	13.7	12.5	12.3	13.0	12.3	13.6	11.2	12.6	13.4
	地輪 高	13.4	13.0	13.0	13.6	13.3	12.9	13.8	14.3	11.6
重量(kg)		14.9	11.7	11.2	13.7	10.9	13.8	10.5	11.5	11.6

石造遺物計測一覧14

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 (146)	堀2A段M7 第3層	堀2 石造物群実測 (182)	M8BC層	堀2 石造物群実測 (179)	A段石積み	A段石積み	M8BC層	堀2 石造物群実測 (241)
出土遺物登録番号		265-146	267-20	265-182	458	265-179	263-26	263-4	459	265-241
観察備考		梵字のみ 265－191空風輪と接合	梵字のみ	梵字のみ 265-30空風輪と接合	梵字のみ 地輪西方右一部欠	梵字のみ 地輪西方底部一部欠	梵字のみ	梵字のみ 火輪東方の右大きく欠損	梵字のみ	梵字のみ 空風輪の東・西方より南・北方が短く偏平
寸法(cm)	総高	(43.6)	(43.6)	43.4	(43.3)	43.3	(43.2)	(43.2)	(43.0)	43.0
	空輪 幅	9.1	9.5	9.4	10.0	9.0	9.1	8.9	8.9	9.3
	空輪 先端高	(0.9)半部欠	(1.4)一部欠	1.1		1.1	(1.7)半部欠	(1.6)一部欠	(1.0)半部欠	2.4
	空輪 高	(7.9)	(8.3)	9.4	(8.6)	8.4	(9.7)	(9.0)	(7.8)	10.1
	風輪 幅	9.4	9.6	9.0	10.4	8.8	9.5	8.8	9.1	9.2
	風輪 高	6.0	4.7	4.6	4.4	3.9	5.0	4.9	5.8	4.2
	火輪 軒上幅	12.4	(11.8)	10.3西方	(13.2)	11.0	(12.0)西方	(11.6)西方	12.6	(11.9)
	火輪 下幅	12.4	11.7	10.0西方	13.2	11.0	11.9 西方	(11.7)	12.5	(12.1)
	火輪 軒高	(4.2)	(4.4)	4.1西方	4.1	4.3	(5.2)西方	5.4	5.2	(4.9)
	火輪 高	7.3	6.9	7.0	6.9	7.6	7.4	7.7	7.5	6.7
		0.5	0.4	0.7	0.6	0.4	0.4	0.6	0.3	0.5
	水輪 幅	13.2	13.0	12.0	15.1	12.1	12.8	12.5	12.7	12.6
	水輪 高	8.1	8.8	9.0	7.9	8.5	8.0	7.8	7.7	7.3
		0.5	0.4	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.1	0.2
	地輪 上幅	12.7	11.8	11.2	13.6	(11.2)	11.9	11.8	12.8	11.7
	地輪 下幅	12.8	12.2	11.5	12.5	11.6	11.7	11.9	13.6	11.4
	地輪 高	13.3	14.1	12.4	14.5	14.1	12.3	12.8	13.8	14.0
重量(kg)		12.4	11.6	10.0	13.9	10.0	11.5	11.0	11.8	10.2

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 (98)	堀2 石造物群実測 (178)	堀2 石造物群実測 (71)	堀2 石造物群実測 (205)	A段石積み	堀2M6第2層	堀2A段N7第2層	堀2 石造物群実測 (198)	堀2 石造物群実測 (246)
出土遺物登録番号		265-98	265-178	265-71	265-205	263-22	422	447	265-198	265-246
観察備考		梵字のみ 空輪先端かなり長い 全体に歪つで計測しづらい雑な作り？	梵字のみ 地輪南方一部欠	梵字のみ	梵字のみ 火輪東方左下欠 ケン □ ラ ビ ア	梵字のみ 全体的に南方北方が細い	梵字のみ 火輪の東方軒上左欠	梵字のみ 地輪の底凹み有り	梵字のみ ケン ウン ラ ビ ア	梵字のみ 地輪東方右下角欠
寸法(cm)	総高	43.0	42.8	42.8	42.7	(42.6)	42.6	42.5	42.4	42.3
	空輪 幅	8.9	9.0	9.0	9.4	9.3	8.9	8.6	10.7	8.4
	空輪 先端高	3.9	2.7	2.0	1.7	(1.4)一部欠	1.5	1.8	1.6	2.5
	空輪 高	11.2	10.2	9.8	13.4	(9.5)	8.7	8.9	8.8	8.7
	風輪 幅	9.3	9.5	9.1	9.1	9.6	8.8	8.9	11.0	9.2
	風輪 高	4.4	4.6	4.3	4.4	4.3	4.8	5.1	4.3	4.7
	火輪 軒上幅	11.1西方	11.8	(11.9)	(12.8)西方	(11.1)	11.9西方	11.7西方	(14.3)	(12.0)
	火輪 下幅	11.0西方	(11.8)	11.6	13.3 西方	(11.1)	11.7西方	11.6西方	14.2	(11.9)
	火輪 軒高	4.7	4.6	(5.0)	(4.3)西方	4.8	5.1西方	4.3西方	(4.3)	(5.2)
	火輪 高	6.7	6.5	7.7	6.6	6.2	7.6	7.2	6.9	7.7
		0.6	0.4	0.5	0.4	0.6	0.4	0.6	0.4	0.5
	水輪 幅	12.0	12.4	12.5	14.9	11.8	12.3	12.5	15.8	12.3
	水輪 高	6.7	6.7	7.0	8.3	7.4	6.8	7.5	8.5	6.9
		0.4	0.3	0.4	0.6	0.4	0.5	0.5	0.2	0.2
	地輪 上幅	11.9	(11.8)	12.0	13.5	10.9	12.1	11.4	14.5	11.7西方
	地輪 下幅	11.8	12.3	11.7	13.7	11.2	12.2	11.7	14.7	11.7西方
	地輪 高	13.0	14.1	13.3	13.4	14.2	13.2	12.6	13.3	13.6
重量(kg)		8.9	10.2	11.0	13.5	8.6	11.1	10.5	15.0	9.9

石造遺物計測一覧15

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 115	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 21	堀2M7第2層	堀2 石造物群実測 106	A段石積み	堀2A段M7 第3層	堀2 石造物群実測 163	堀2 A段M6第3層	堀2 石造物群実測 97
出土遺物登録番号		265-115	268-21	437	265-106	263-11	267-18	265-163	453	265-97
観察備考		梵字のみ 火水地輪西方にノミ加工跡のない部分あり 地輪形不良	梵字のみ 全体に面長 地輪が長い	梵字のみ 443空風火水輪と接合 地輪東方上部一部欠	梵字のみ 地輪西方角一部欠	梵字のみ 火輪地輪全体に丸味を帯びる	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ 地輪斜めに半部欠	梵字のみ 軒角張る
寸法(cm)	総高	42.2	(42.1)	(42.1)	(42.0)	(41.9)	(41.8)	(41.8)	(41.8)西方	(41.8)
	空輪 幅	9.8	8.9	8.6	9.6	9.4	8.7	8.9	8.7	9.6
	空輪 先端高	1.2	(0.6)大半欠	(1.0)	(0.3)大半欠	(1.8)半部欠	(1.3)大半欠	(1.5)半部欠	(0.5)半部欠	(1.6)一部欠
	空輪 高	8.6	(7.5)	(8.3)	(7.1)	(8.5)	(7.8)	(9.3)	(7.1)	(8.9)
	風輪 幅	10.0	9.6	9.4	10.0	10.1	9.0	9.4	9.5	9.5
	風輪 高	5.4	5.3	5.4	4.9	4.8	5.3	4.1	5.0	4.9
	火輪 軒上幅	12.3	11.9	(12.0)西方	12.5	(12.3)西方	(12.1)南方	(12.0)	11.7	(11.9)
	火輪 下幅	12.3	11.5	11.9 西方	12.4	12.3 西方	12.1 南方	11.7	11.8	11.8
	火輪 軒高	5.3	4.8	(3.2)西方	(4.3)	5.3 西方	5.1 南方	(5.7)	5.2	5.2
	火輪 高	7.7	6.8	7.0	7.8	7.5	7.4	7.6	7.4	6.5
		0.7	0.4	0.6	0.5	0.6	0.4	0.2	0.5	0.5
	水輪 幅	14.0	11.5	12.7	13.1	12.9	11.4	12.5	12.6	12.5
	水輪 高	8.2	7.0	7.6	8.9	7.7	7.4	7.8	7.0	7.6
	地輪	0.5	0.3	0.2	0.3	0.4	0.3	0.5	0.7	0.2
	地輪 上幅	12.5	11.1	11.9西方	12.5	12.3	11.7	12.0	12.2西方	11.7
	地輪 下幅	11.8	11.6	11.8西方	12.3	12.3	12.1	12.1	計測不可	12.4
	地輪 高	11.1	14.8	13.0	12.5	12.4	13.2	12.3	14.1西方	13.2
重量(kg)		11.5	9.0	10.4	12.5	12.0	10.0	11.0	9.0	10.8

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2M7第2層	堀2 石造物群実測 15	堀2 石造物群実測 55	堀2A段 M6第3層	堀2 石造物群実測 219	A段石積み	堀2 石造物群実測 40	堀2 石造物群実測 220	堀2 石造物群実測 217
出土遺物登録番号		427	265-15	265-55	266-15	265-219	263-1	265-40	265-220	265-217
観察備考		梵字のみ 424空風輪と接合 地輪の東方角が縦に欠	梵字のみ 火輪西方一部欠 風輪が小さい ケン カン ラ ビ ア	梵字のみ	梵字不明	梵字のみ 形良	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ 梵字の形良 ケン ウン ラ ビ ア	梵字のみ 地輪東・北方一部欠 火輪の軒南西・北西方ほとんど欠
寸法(cm)	総高	(41.8)	(41.7)	(41.7)	(41.6)	41.6	41.6	41.6	41.6	(41.5)
	空輪 幅	8.6	9.7	10.2	9.6	10.0	9.1	8.3	9.2	9.1
	空輪 先端高	(1.4)一部欠	(1.2)一部欠	(1.3)一部欠	(0.7)大半欠	2.1	1.4	0.9	1.3	(0.6)大半欠
	空輪 高	(9.5)	(9.3)	(7.7)	(6.8)	9.8	8.3	7.7	8.4	(7.7)
	風輪 幅	8.4	9.5	10.9	9.5	9.6	9.2	9.1	9.4	9.7
	風輪 高	4.0	3.7	4.7	5.1	3.7	4.6	5.3	4.3	5.2
	火輪 軒上幅	11.8西方	11.0	12.7	(12.3)	(11.9)	11.2	(12.1)西方	(12.9)	(12.0)
	火輪 下幅	11.9西方	10.8	12.6	12.3	11.7	11.4	12.5 西方	(12.9)	11.9
	火輪 軒高	5.1	4.5	5.2	(4.5)	(3.8)	4.6	4.0 西方	(3.7)	5.2
	火輪 高	7.1	6.8	6.3	7.1	7.0	6.8	7.0	7.7	7.5
		0.4	0.5	0.4	0.3	0.4	0.2	0.5	0.5	0.5
	水輪 幅	12.9	12.0	13.2	13.7	12.4	11.8	12.5	13.7	12.9
	水輪 高	8.1	8.8	7.7	9.2	7.9	6.9	6.9	8.3	8.2
	地輪	0.2	0.4	0.5	0.5	0.3	0.2	0.3	0.5	0.4
	地輪 上幅	11.9西方	10.9	12.0	12.4	11.4	11.2	11.0	13.1	(11.8)
	地輪 下幅	11.6西方	10.8	12.6	12.4	11.5	11.5	11.7	13.2	11.9
	地輪 高	12.5	12.2	14.4	12.6	12.5	14.6	13.9	11.9	12.0
重量(kg)		10.0	9.8	12.4	12.0	9.7	10.5	10.0	12.1	11.0

石造遺物計測一覧16

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 (104)	堀2 石造物群実測 (85)	堀2 石造物群実測 (169)	堀2 A段M6A第2層	堀2 石造物群実測 (112)	堀2 石造物群実測 (48)	堀2 石造物群実測 (213)	堀2 A段M6第2層 3/5	堀2 石造物群実測 (166)
出土遺物登録番号		265-104	265-85	265-169	408	265-112	265-48	265-213	403	265-166
観察備考		梵字のみ 火輪軒角張る	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ ケンウンラビア	梵字不明 空風火輪に比べ水地輪が細長い	梵字のみ 火輪軒が弯曲 ケンウンラビア	梵字？ 地輪の下極めて斜め	梵字不明
寸法(cm)	総高	(41.5)	41.4	(41.3)	41.3	41.2	(41.1)	41.0	(40.9)	(40.9)
	空輪 幅	8.5	8.6	9.3	8.8	8.8	8.9	8.9	8.7	9.0
	空輪 先端高	(1.3)一部欠	2.1	(0.8)大半欠	1.7	1.9	(0.2)	1.8	(1.5)	(1.6)一部欠
	空輪 高	(8.5)	9.2	(8.5)	7.9	8.5	(6.0)	8.8	(8.3)	(8.2)
	風輪 幅	8.4	8.6	9.2	8.9	8.9	8.6	8.0	8.9	9.1
	風輪 高	4.8	4.4	4.1	5.3	4.3	3.5	5.2	4.0	4.7
	火輪 軒上幅	(11.8)	(11.0)	(11.2)	12.1	11.2	11.2	(12.0)	10.9	(11.0)
	火輪 下幅	11.8	10.8	11.1	11.9	11.1	11.5	12.3	11.2	(11.1)
	火輪 軒高	5.2	(4.3)	(3.8)	4.6	4.0	3.1	(4.1)	4.3	(4.8)
	火輪 高	7.1	6.9	6.5	6.9	6.5	7.4	6.7	6.1	7.5
		0.6	0.5	0.4	0.4	0.6	0.4	0.5	0.3	0.6
	水輪 幅	12.2	11.5	12.2	12.2	12.1	11.8	13.6	11.9	11.2
	水輪 高	7.2	6.8	8.8	7.4	8.2	8.9	7.2	7.7	6.2
		0.4	0.3	0.5	0.5	0.5	0.3	0.5	0.5	0.5
	地輪 上幅	11.8	11.0	11.4	(11.5)	11.5	11.5	12.7	11.3	(10.9)
	地輪 下幅	11.9	11.5	10.9	12.0	11.6	11.5	13.0	11.7	(10.8)
	地輪 高	12.9	13.3	12.5	12.9	12.6	14.6	12.1	14.0	13.2
重量(kg)		10.8	10.0	9.8	10.7	9.5	10.1	10.5	10.5	8.5

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 (114)	堀2M8第2層	堀2 石造物群実測 (91)	堀2A段M6or B段M7 第3層(M)	堀2 石造物群実測 (186)	堀2 石造物群実測 (86)	堀2M6第2層	堀2 石造物群実測 (81)	堀2 石造物群実測 (92)
出土遺物登録番号		265-114	463	265-91	267-13	265-186	265-86	419	265-81	265-92
観察備考		梵字のみ 地輪底部が粗加工	梵字のみ 水地輪南方化石含む 433空風輪と接合	梵字のみ 水輪北方にへこみあり 地輪東方一部欠 ケンウンラビア	梵字のみ 267-16空風輪と接合 地輪が歪つで小さい	梵字のみ ケンウンラビア	梵字のみ 火水輪の東方凹み有り	梵字のみ 268-14空風火水輪と接合 地輪南方底部中央一部欠	梵字のみ 東方地輪底部一部欠	梵字のみ 地輪南・東方一部欠
寸法(cm)	総高	40.7	(40.6)	40.6	(40.5)	40.5	40.5	(40.4)	(40.3)	(40.3)
	空輪 幅	8.4	8.5	9.3	10.1	9.9	9.0	9.0	8.5	9.3
	空輪 先端高	0.5	(1.1)	1.2	(1.0)	1.2	1.4	(1.5)一部欠	(0.7)一部欠	(1.5)
	空輪 高	6.5	(8.5)	8.2	(7.9)	8.4	8.4	(8.8)	(6.7)	(7.6)
	風輪 幅	8.5	9.0	9.3	9.8	10.3	9.6	9.4	9.1	10.3
	風輪 高	3.6	5.1	4.6	5.0	4.6	4.6	5.7	4.8	5.2
	火輪 軒上幅	11.4	11.0	(11.2)	11.7	11.0西方	(11.5)	(11.6)	(12.0)	(12.1)
	火輪 下幅	11.4	10.7	11.2	11.7	10.9西方	11.5	11.6	12.0	(12.0)
	火輪 軒高	3.3	4.7	4.0	4.5	4.8西方	(4.5)	(4.3)	4.8	(4.2)
	火輪 高	6.8	7.1	5.9	7.7	5.9	6.2	6.6	7.8	6.9
		0.4	0.4	0.7	0.6	0.5	0.4	0.4	0.4	0.6
	水輪 幅	12.4	11.1	13.0	13.5	12.4	13.0	11.7	12.4	13.0
	水輪 高	8.7	6.3	7.4	6.8	8.1	7.6	5.9	7.3	8.4
		0.4	0.3	0.5	0.6	0.4	0.5	0.3	0.4	0.4
	地輪 上幅	11.6	(10.5)	(11.1)	11.8	11.2	12.0	11.4	12.0	12.0
	地輪 下幅	11.9	11.2	(11.6)	11.1	11.7	12.0	11.2	(11.0)	(12.4)
	地輪 高	14.3	12.9	(13.3)	11.9	12.6	12.8	12.7	12.9	11.2
重量(kg)		11.0	8.6	10.5	10.2	9.8	10.0	8.9	10.5	10.5

石造遺物計測一覧17

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 ⑩	堀2 石造物群実測 (160)	堀2 石造物群実測 ㊺	A段石積み	堀2 石造物群実測 (183)	堀2A段M6or B段M7 第3層Ⓖ	堀2 石造物群実測 (118)	堀2 石造物群実測 (222)	堀2M6第2層
出土遺物登録番号		265-10	265-160	265-45	263-24	265-183	267-7	265-118	265-222	413
観察備考		梵字のみ 西方東方が南方北方より狭い 水輪が長い	梵字のみ ケンカンラビア	梵字のみ	梵字のみ 地輪東方下欠	梵字のみ	梵字のみ	軒反部目立たない摩滅 地輪底部歪つ キリーク(東) タラーク(南) ウン(西) アク(北)	梵字のみ 火輪の北方中央部に凹有り 地輪北方左下に少し凹有り ケンウンラビア	梵字のみ 火輪下一部欠
寸法(cm)	総高	40.1	(40.0)	(40.0)	(40.0)	(39.9)	39.9	39.9	(39.7)	(39.7)
	空輪 幅	8.6	8.5	10.3	8.6	8.3	9.0	8.7	8.6	8.6
	空輪 先端高	1.0	(1.5)一部欠	(1.2)一部欠	(1.3)一部欠	(0.3)大半欠	1.2	0.9	(1.2)一部欠	(2.3)一部欠
	空輪 高	7.5	(8.0)	(8.3)	(8.3)	(7.9)	7.5	6.5	(7.6)	(8.9)
	風輪 幅	8.7	9.0	10.4	9.0	8.2	9.1	8.8	9.1	9.2
	風輪 高	4.2	3.5	5.1	4.1	4.6	4.5	4.8	3.6	4.2
	火輪 軒上幅	(10.5)	11.4	(12.0)	(11.3)西方	10.9	(11.2)	10.5	10.8	10.7西方
	火輪 下幅	10.1	11.6	(11.8)	(11.3)西方	(10.6)	11.4	10.5	10.5	10.5西方
	火輪 軒高	5.0	(4.2)	5.1	(4.6)西方	4.7	(5.1)	2.8	4.3	4.2西方
	火輪 高	7.3	7.7	6.6	7.5	6.6	6.9	6.5	7.5	6.7
		0.5	0.3	0.5	0.4	0.5	0.3	0.4	0.4	0.5
	水輪 幅	12.1	12.0	12.7	12.0	10.6	12.0	11.7	10.8	11.4
	水輪 高	9.0	7.5	6.4	6.6	7.3	8.0	6.7	7.3	6.8
	地輪	0.4	0.5	0.4	0.2	0.5	0.4	0.6	0.3	0.5
	地輪 上幅	10.5	11.7	12.0	11.3	10.9	11.3	11.0	10.4	10.5
	地輪 下幅	11.2	(11.5)	13.0	11.5	11.4	11.3	11.1	10.3	10.8
	地輪 高	11.2	12.5	12.7	12.9	12.5	12.5	14.4	13.4	12.6
重量(kg)		10.0	9.7	12.0	8.8	9.3	9.5	9.8	7.9	8.5

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 (231)	堀2 A段第2層	堀2 A段M6第2層	堀2 石造物群実測 ㉖	堀2 石造物群実測 (221)	堀2 石造物群実測 ㊿	堀2 A段M6第2層	堀2M8第2層	堀2 石造物群実測 ⑫
出土遺物登録番号		265-231	446	405	265-26	265-221	265-90	398	465	265-12
観察備考		梵字のみ 地輪東方左上の角に丸み有り	梵字のみ ケンカンラビア	梵字のみ	梵字のみ 火輪の東・北方角一部欠 地輪西方中央に凹み有り	梵字のみ 火輪の形歪つ	梵字のみ 水輪の幅少し狭い 石の質が異なる	梵字？	梵字のみ	梵字のみ 火輪東方一部欠
寸法(cm)	総高	39.7	(39.5)	(39.4)	(39.3)	(39.3)	39.3	(39.0)	(39.0)	38.8
	空輪 幅	9.8	8.0	8.5	8.6	7.7	8.0	8.7	7.9	8.3
	空輪 先端高	1.3	(0.5)一部欠		(0.2)大半欠	(1.1)一部欠	0.6	(0.5)大半欠	(2.7)一部欠	1.4
	空輪 高	8.5	(6.1)	(6.4)	(8.1)	(6.7)	7.7	(6.7)	(8.8)	8.0
	風輪 幅	10.2	8.9	9.1	8.9	8.5	8.7	9.4	8.6	9.0
	風輪 高	4.7	4.8	5.7	4.4	4.4	5.2	3.8	3.7	5.1
	火輪 軒上幅	11.8	11.8	11.2	(10.1)	11.0	(11.4)	(12.2)	10.3	10.2西方
	火輪 下幅	(12.2)	12.1	11.3	10.1	11.1	11.4	12.3	10.2	10.6西方
	火輪 軒高	4.5西方	4.6	4.7	4.0	4.8	(4.5)	3.8	4.3	4.5西方
	火輪 高	5.8	7.0	6.8	6.7	6.7	7.0	7.3	6.5	6.9
		0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5
	水輪 幅	12.7	13.2	11.9	11.7	12.0	11.8	12.9	10.9	12.2
	水輪 高	7.3	7.5	7.1	6.9	6.6	5.4	8.9	6.9	6.2
	地輪	0.4	0.4	0.5	0.5	0.4	0.6	0.6	0.4	0.5
	地輪 上幅	11.8	12.1	11.4	10.7	11.0	11.9	12.1	10.4	10.7
	地輪 下幅	12.0	12.1	11.3	10.9	10.5	12.0	12.4	10.4	10.7
	地輪 高	12.6	13.3	12.4	12.3	14.1	12.9	11.2	12.2	11.6
重量(kg)		10.2	10.6	(9.5)	8.7	8.2	10.0	11.1	8.3	9.0

石造遺物計測一覧18

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 ④	堀2 A段M6第3層	堀2 石造物群実測 225	A段石積み	堀2 石造物群実測 46	堀2 石造物群実測 233	堀2 石造物群実測 58	堀2 A段M6第3層 14	堀2 A段M6第2層 12/14
出土遺物登録番号		265-4	454	265-225	263-8	265-46	265-233	265-58	265-14	264-12
観察備考		梵字のみ 地輪西方一部欠	梵字のみ	梵字のみ 火輪南方の軒一部欠	梵字のみ 地輪の下部丸み有り	梵字のみ 空風火輪の南・西方の角欠	梵字のみ 火輪南方左軒部一部欠 ケン ウン ラ ビ ア	梵字のみ 地輪が小さい ケン カン ラ ビ ア	梵字のみ	梵字不明
寸法(cm)	総高	38.8	(38.7)	(38.7)	(38.5)	38.5	38.4	(38.3)	(38.1)	(38.1)
	空輪 幅	8.5	8.7	9.3	8.3	8.9	8.8	9.5	8.5	8.1
	空輪 先端高	1.5	(0.6)一部欠	(1.8)一部欠	(0.9)一部欠	2.1	1.1	(0.8)半部欠	(0.6)大半欠	(2.3)一部欠
	空輪 高	12.0	(7.5)	(7.8)	(7.5)	9.0	8.0	(7.8)	(7.0)	(8.2)
	風輪 幅	9.0	9.3	9.6	9.4	9.4	9.0	9.7	9.2	8.6
	風輪 高	4.0	4.8	4.8	4.6	4.8	3.8	3.7	4.0	4.3
	火輪 軒上幅	10.9	(11.8)	(11.8)西方	(11.1)	11.4	11.0	(11.8)	(10.5)	10.4西方
	火輪 下幅	10.8	11.4	11.6 西方	11.1	11.2	(10.9)	11.6	10.4	10.6西方
	火輪 軒高	4.1	4.3	(4.8)西方	(4.2)	3.9	(3.3)	(4.3)	(3.7)	4.5
	火輪 高	7.0	6.6	6.3	5.7	6.2	6.6	5.8	5.0	6.3
		0.4	0.4	0.6	0.5	0.3	0.2	0.6	0.5	0.4
	水輪 幅	12.0	11.7	12.3	12.4	11.6	11.5	12.5	12.1	11.4
	水輪 高	7.1	6.7	5.8	7.0	6.6	7.9	6.7	7.1	6.8
	地輪	0.4	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.3	0.5	0.5
	地輪 上幅	10.8	11.2	11.5	11.1	11.0	10.3	11.5	11.1西方	10.9
	地輪 下幅	10.7	11.3	(11.5)	11.0	11.2	10.6	12.0	11.4西方	11.1
	地輪 高	11.9	12.3	12.9	12.8	11.1	11.4	10.3	14.0	11.6
重量(kg)		8.7	8.8	8.9	9.1	8.8	7.8	10.0	9.0	8.2

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		A段石積み	堀2 石造物群実測 150	堀2 石造物群実測 50	堀2 石造物群実測 243	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 38	堀2 石造物群実測 68	A段石積み	堀2M8第2層 下部	堀2 石造物群実測 70
出土遺物登録番号		263-25	265-150	265-50	265-243	268-38	265-68	263-20	475	265-70
観察備考		梵字のみ 地輪の東方左一部欠	梵字のみ 空輪の南方一部削られる	梵字のみ 火輪東南方角が欠 地輪西・北方底が狭くなる	梵字のみ	梵字のみ	梵字のみ 地輪東北方角斜めに欠	梵字のみ 地輪東方下一部欠	梵字のみ 267-21空風火水輪と接合	梵字のみ 地輪西方2/5欠 265-228地輪2/5と接合 ケン カン ラ ビ ア
寸法(cm)	総高	37.9	37.0	37.8	(37.7)	37.6	37.6	37.5	(37.5)	37.5
	空輪 幅	8.8	8.0	8.7	8.7	8.6	9.2	9.4	7.8	7.1
	空輪 先端高	0.9	1.8	0.8	(1.0)一部欠	1.1	1.1	1.3		0.5
	空輪 高	6.7	8.1	8.0	(7.7)	11.8	7.8	8.2	(6.6)	6.3
	風輪 幅	9.3	8.6	8.7	8.9	8.5	10.0	9.9	7.9	8.0
	風輪 高	3.6	3.1	4.2	4.3	4.8	3.9	4.2	4.0	3.4
	火輪 軒上幅	(10.9)	(10.8)	11.0西方	(11.0)	(11.0)	12.2	10.7西方	(10.0)	(10.9)
	火輪 下幅	10.8	10.7	11.0西方	11.0	11.0	12.0	10.9西方	10.2	10.5
	火輪 軒高	4.4西方	4.1	3.9西方	4.5	(4.3)	4.4	(4.0)	(3.9)	(3.5)
	火輪 高	6.4	6.3	6.1	6.6	6.7	5.8	6.2	6.7	6.6
		0.5	0.3	0.4	0.3	0.5	0.6	0.3	0.3	0.6
	水輪 幅	11.7	11.3	11.6	12.2	11.5	13.3	11.7	11.1	11.1
	水輪 高	7.9	7.1	7.2	7.6	6.4	6.7	5.6	7.1	7.6
	地輪	0.4	0.4	0.5	0.3	0.7	0.3	0.2	0.4	0.4
	地輪 上幅	10.2	10.4	10.8	10.9	11.0	11.9	10.8	10.0	10.8
	地輪 下幅	(10.0)	10.5	11.0	11.0	11.1	11.5	(11.0)	8.0	10.8
	地輪 高	12.4	11.9	11.5	10.9	11.5	12.5	12.8	12.4	13.8
重量(kg)		8.5	7.4	8.1	8.0	8.1	10.0	8.8	(7.0)	6.2

石造遺物計測一覧19

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 99	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 31	堀2 石造物群実測 190	堀2 A段M7第3層	堀2 石造物群実測 161	堀2M6第2層	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 6	堀2M8第2層 下部	A段石積み
出土遺物登録番号		265-99	268-31	265-190	264-17	265-161	412	268-6	472	263-19
観察備考		梵字のみ 歪つな形 西方火輪隅一部欠	梵字のみ 17空輪31風火水地輪が接合 ケンカンラビア	梵字のみ 火輪南方左隅欠 地輪北方底部欠	梵字のみ	梵字のみ 地輪平行四辺形	梵字のみ 空輪の西方一部欠	梵字のみ	梵字のみ 265-156空風輪と接合	梵字のみ
寸法(cm)	総高	(37.3)	(37.0)	37.0	(36.8)	(36.7)	(36.6)	36.4	(36.0)	(35.9)
	空輪 幅	9.1	8.3	8.5	8.2	8.7	8.8	8.1	8.3	8.8
	空輪 先端高	(1.5)一部欠	(0.4)一部欠	1.4	(0.9)一部欠	(0.2)大半欠	(1.4)一部欠	0.8	(1.0)	(0.8)半部欠
	空輪 高	(7.1)	(7.1)	7.3	(6.6)	(6.9)	(6.5)	6.8	(6.9)	(6.6)
	風輪 幅	10.0	8.4	9.6	8.3	9.1	8.3	8.4	8.2	9.3
	風輪 高	4.3	3.9	4.6	4.2	4.1	3.9	3.5	3.5	4.1
	火輪 軒上幅	(11.7)	(11.0)	10.9	(10.4)	(10.8)	10.4	10.5	9.8	(11.1)
	火輪 下幅	12.0	(10.8)	10.9	10.3	10.6	10.3	(10.5)	9.8	11.2
	火輪 軒高	(3.8)	3.2	4.2	(3.9)	3.8	3.2	3.9	(3.2)	4.3
	火輪 高	6.0	6.2	6.2	5.7	6.0	6.7	6.7	6.7	6.2
		0.6	0.4	0.3	0.3	0.5	0.7	0.3	0.3	0.5
	水輪 幅	12.6	11.3	12.1	10.8	11.8	11.3	10.5	11.1	11.8
	水輪 高	6.1	6.7	7.0	6.2	6.7	6.8	6.6	7.1	5.6
	地輪	0.6	0.6	0.5	0.4	0.5	0.6	0.2	0.4	0.4
	地輪 上幅	12.0	(10.9)	10.6	10.9	10.2	10.6	10.5	10.1	11.0
	地輪 下幅	(11.0)	(11.0)	(10.3)	11.6	11.0	10.9	10.7	10.1	10.6
	地輪 高	12.6	12.1	11.1	13.4	12.0	11.4	12.3	11.1	12.5
重量(kg)		9.9	8.2	8.5	8.2	8.0	8.0	7.2	7.0	8.3

挿図番号										
写真図版										
遺物番号										
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 36	堀2M7第2層	堀2 石造物群実測 65	堀2 A段M6第3層 7	堀2 A段M6第3層	堀2M6第2層	堀2A段第3層+α M6M7西端 N6N7東端 17	堀2A段M6or B段M7 第3層下	堀2 石造物群実測 83
出土遺物登録番号		268-36	436	265-65	266-7	267-22	420	268-17	267-6	265-83
観察備考		梵字のみ 地輪東方隅斜め切り落し 地輪細長い	梵字のみ ケンカンラビア	梵字のみ 全体が細長い	梵字のみ ケンカンラビア	梵字のみ	梵字のみ 空輪西方一部欠 ケンカンラビア	梵字のみ ケンカンラビア	梵字のみ	梵字のみ
寸法(cm)	総高	(35.2)	35.0	34.9	34.9	(34.7)	34.7	34.7	(34.6)	34.5
	空輪 幅	7.1	8.0	8.1	8.0	7.2	7.4	7.9	8.4	7.8
	空輪 先端高	(0.8)一部欠	0.9	0.4	0.9	(0.5)半部欠	0.8	1.2	(1.3)一部欠	1.6
	空輪 高	(5.9)	6.8	7.5	7.0	(5.3)	6.4	7.5	(7.1)	6.8
	風輪 幅	7.8	8.5	8.2	8.3	7.8	7.7	8.3	8.5	8.0
	風輪 高	4.4	3.0	4.3	3.7	4.5	3.5	3.5	3.5	3.9
	火輪 軒上幅	9.7	(10.6)北方	8.9	10.3	(10.1)	(10.5)	(9.6)西方	10.0西方	(9.2)
	火輪 下幅	9.8	(10.5)北方	9.0	10.2	10.1	10.5	9.6 西方	10.0西方	9.2
	火輪 軒高	3.0	4.2 北方	3.6	4.2	(3.1)西方	(4.0)	3.5 西方	3.1西方	(3.7)
	火輪 高	5.6	6.6	4.6	5.8	5.6	6.4	6.1	5.9	6.1
		0.4	0.4	0.6	0.4	0.3	0.3	0.3	0.2	0.4
	水輪 幅	10.2	12.1	9.7	11.7	11.2	11.4	11.0	11.0	9.9
	水輪 高	6.5	6.9	6.3	6.6	6.9	6.6	6.5	6.3	6.2
	地輪	0.4	0.5	0.4	0.5	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2
	地輪 上幅	9.3西方	10.7	9.3	10.5	10.4	10.7	9.9	9.8	9.0
	地輪 下幅	9.8西方	11.1	9.7	10.5	10.3	11.2	9.9	10.1	9.2
	地輪 高	12.0	10.8	11.3	10.9	11.8	11.2	10.5	11.3	10.9
重量(kg)		6.6	7.2	6.0	7.5	6.6	7.5	6.4	6.6	5.9

石造遺物計測一覧20

挿図番号						第110図				
写真図版										
遺物番号						975				
遺物名称		一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 M7第2層	堀2 A段M6第3層 ⑬	石垣の下 A段-(B段)	堀2 A段M7第3層	堀2 石造物群実測 (209)	A段石積み	堀2 石造物群実測 ⑭	堀2 石造物群実測 (165)	堀2 石造物群実測 ㉓
出土遺物登録番号		430	266-13	390	267-26	265 209	263-27	265-74	265-165	265-23
観察備考		梵字のみ	梵字のみ 地輪西方の左下少し斜め	梵字のみ 空輪計測不可	梵字のみ 全体的に小さい 風輪一部欠	梵字のみ	梵字のみ 地輪が長い 265-64の空輪と接合 埋込式	梵字不明 火輪が長い 埋込式	梵字不明 火輪が長い 軒が一部欠 軒反部が短い 埋込式	梵字不明 空輪縦斜めに欠 地輪埋込にしては短い 火輪北方一部欠 軒反部が全体に変化がない 埋込式
寸法(cm)	総高	34.4	(33.4)	(33.0)	32.8	31.5	(58.4)	(55.5)	(53.7)	(36.5)
	空輪 幅	7.9	6.2	——	7.5	8.3	9.7	7.8	7.5	——
	空輪 先端高	0.8	(1.1)一部欠		5.9	(1.3)一部欠	(1.3)半部欠	(1.0)一部欠	(0.3)大半欠	
	空輪 高	5.8	(5.3)	(5.0)	1.0	(7.1)	(7.0)	7.7	(7.2)	(4.5)
	風輪 幅	8.3	7.4	7.9	7.8	8.3	10.3	9.0	8.7	7.9
	風輪 高	4.3	4.3	4.0	4.0	3.2	5.0	5.9	5.6	3.9
	火輪 軒上幅	10.1	9.7	10.2	(10.4)	(9.7)西方	13.5西方	(11.1)	(11.4)	(9.0)
	火輪 下幅	10.0	9.9	10.0	10.6	9.4 西方	13.3西方	10.8	(11.6)	9.2
	火輪 軒高	3.0	2.7	(4.3)	(3.2)	(3.3)西方	3.6西方	(3.2)	(3.0)	(3.6)
	火輪 高	5.9	6.2	6.5	5.4	5.0	7.6	8.8	8.7	5.5
	火輪	0.3	0.6	0.5	0.5	0.3	0.4	0.3	0.5	0.5
	水輪 幅	10.5	10.5	10.5	10.2	10.1	14.2	12.3	12.6	10.8
	水輪 高	6.0	6.2	6.0	6.2	5.1	8.5	8.3	8.2	6.4
	地輪	0.3	0.3	0.5	0.3	0.5	0.4	0.5	0.4	0.2
	地輪 上幅	9.9	9.7	9.2	9.3	9.8	13.2	11.7	11.6	(10.5)
	地輪 下幅	10.0	10.2	9.7	(9.7)	10.3	12.1	11.4	11.5	(10.4)
	地輪 高	11.8	10.5	10.5	10.5	10.3	(29.5)	24.0	23.1	15.5
重量(kg)		6.2	5.4	5.9	5.2	5.1	19.2	13.0	13.5	8.0

挿図番号		
写真図版		
遺物番号		
遺物名称		一石五輪塔
出土地点・層位		堀2 石造物群実測 (211)
出土遺物登録番号		265-211
観察備考		梵字不明 地輪の西方右下少し欠 埋込式
寸法(cm)	総高	(33.5)
	空輪 幅	
	空輪 先端高	
	空輪 高	
	風輪 幅	
	風輪 高	
	火輪 軒上幅	(11.5)
	火輪 下幅	11.2
	火輪 軒高	3.0
	火輪 高	6.6
	火輪	0.3
	水輪 幅	12.3
	水輪 高	8.8
	地輪	0.2
	地輪 上幅	11.2
	地輪 下幅	11.4
	地輪 高	17.6
重量(kg)		(8.9)

石造遺物計測一覧21

挿図番号	第112図	第112図		第112図					
写真図版	PL.55	PL.55	PL.55	PL.55					
遺物番号	982	983	2023	987					
遺物名称	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏
出土地点・層位	堀2 石造物群実測 59	堀2 石造物群実測 122	堀2 石造物群実測 157	堀2 石造物群実測 6	堀2 石造物群実測 199	堀2 石造物群実測 162	堀2 石造物群実測 200	堀2 石造物群実測 244	堀2 M7第2層下部
出土遺物登録番号	265-59	265-122	265-157	265-6	265-199	265-162	265 200	265-244	449
観察備考	蓮台陰刻＋朱漆（わずかに残る） 右手錫杖 左手宝珠 立像、前面きれいな加工、顔立ちが少し違う	右手錫杖 左手宝珠 立像	合掌 体部は線を刻んで凸凹を表現 総体に稚拙 立像	合掌 座像	上生 座像 頭部欠落 全体に加工跡が少ない	合掌 座像 片方の側面加工の痕跡が見られない	合掌 座像 底部は斜めの状態で加工の跡が見られない	合掌、座像 底部は斜めの状態で加工の跡が見られない、背面中央加工跡見られない	背面粗い加工痕 合掌、座像 下方斜めに切れている
寸法(cm) 総高	45.4	41.7	34.0	65.9	(54.7)	51.2	50.0	49.0	(41.1)
寸法(cm) 地蔵高	26.4	23.0	19.6	21.9	(14.0)	16.6	17.3	18.5	20.4
寸法(cm) 最大幅	23.3	17.1	17.4	30.6	33.0	23.5	26.1	19.6	23.6
寸法(cm) 基礎 上幅	20.4	16.6	15.9	21.7	32.7	23.3	23.1	19.0	23.2
寸法(cm) 基礎 下幅	(19.4)	13.7	17.0	20.3		23.5	26.1	20.0	－
寸法(cm) 基礎 下奥行	13.4	10.0	14.0	19.6	21.2	16.0	14.0	10.5	12.9
寸法(cm) 基礎 高	8.6	13.1	8.0	32.2	35.4	26.5	20.4	28.1	12.5
重量(kg)	14.5	9.3	11.6	61.8	28.0	24.5	19.0	15.0	16.9

挿図番号	第112図		第112図			第112図		
写真図版	PL.55		PL.55			PL.55		
遺物番号	984		985			986		
遺物名称	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏	地蔵石仏
出土地点・層位	堀2 石造物群実測 121	堀2 石造物群実測 62	堀2M7第2層	堀2 A段M6第3層	堀2 A段M6第3層 8	堀2N10第2層	SH29V段 排土	SH29V段 2G66 下層上位
出土遺物登録番号	265-121	265-62	441	266-16	266-8	470	733-3	1209
観察備考	双体地蔵 合掌 座像	合掌 座像 不安定、粗い加工	背面粗い加工痕 右手錫杖 左手宝珠 座像 全体に加工が簡素	合掌 座像	合掌 座像 背面加工の跡が見られない	合掌 座像	合掌 座像 基礎及び背面加工の跡が見られない	合掌 座像 基礎に加工の跡があまり見られない 背面粗加工
寸法(cm) 総高	38.1	38.0	(37.8)	37.6	36.8	34.7	41.0	33.4
寸法(cm) 地蔵高	左16.7右16.5	13.8	18.7	17.1	15.7	14.9	13.3	15.4
寸法(cm) 最大幅	30.4	20.3	21.5	22.1	19.6	18.9	22.1	19.8
寸法(cm) 基礎 上幅	30.0	20.1	18.5	22.1	19.1	18.7	20.9	19.2
寸法(cm) 基礎 下幅	30.4	——	——	20.2	18.9	18.9	21.3	(16.3)
寸法(cm) 基礎 下奥行	12.0	12.5	11.4	10.6	11.8	9.8	13.2	8.9
寸法(cm) 基礎 高	12.0	15.5	13.2	21.2	18.7	13.9	18.0	13.2
重量(kg)	15.8	9.8	13.0	12.0	11.5	9.2	17.8	8.0

挿図番号									
写真図版									
遺物番号									
遺物名称	台座	台座	台座	台座	台座	台座	台座	台座	台座
出土地点・層位	堀2 石造物群実測 95	堀2 石造物群実測 27	堀2 石造物群実測 18	堀2A段第3層＋α M6M7西端 N6N7東端 27	堀2M7第2層	堀2 A段M7第2層	堀2 石造物群実測 214	堀2 石造物群実測 61	堀2M7第2層
出土遺物登録番号	265-95	265 27	265-18	268-27	235	395	265-214	265-61	442
観察備考			斜めに1/4残存	上部中央凹む			形が全体に歪つ		上幅の中央部細く凹む
寸法(cm) 上幅	39.5	36.5	36.3	32.1	17.1	16.0	15.0	14.5	14.4
寸法(cm) 下幅	48.8	49.4	49.4	41.0	26.3	25.3	21.5	22.0	21.7
寸法(cm) 総高	11.3	14.5	14.6	13.4	10.2	10.6	9.4	9.5	10.4
重量(kg)	64.0	80.0	21.1	44.8	13.5	13.0	9.0	9.0	9.4

挿図番号				
写真図版				
遺物番号				
遺物名称	台座	台座	台座	台座
出土地点・層位	堀2 石造物群実測 207	堀2 A段M7第1層	W段2I69 第2-4層	W段2I69 第2-4層
出土遺物登録番号	265-207	394	878	877
観察備考				
寸法(cm) 上幅	14.1	14.0	28.7	17.3
寸法(cm) 下幅	20.5	22.2	40.1	27.0
寸法(cm) 総高	9.5	10.8	11.5	9.0
重量(kg)	8.0	10.5	35.0	12.1

石造遺物計測一覧22

参考文献

根来寺坊院跡に関する発掘調査報告書

1978　上田秀夫ほか『根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅰ』和歌山県教育委員会・㈳和歌山県文化財研究会

1979　上田秀夫ほか『根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅱ』和歌山県教育委員会

1980　上田秀夫ほか『根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅲ』和歌山県教育委員会

1980　上田秀夫『根来寺坊院跡ＫＭ地区発掘調査概報』和歌山県教育委員会

1981　上田秀夫『根来寺坊院跡　昭和55年度』和歌山県教育委員会・㈳和歌山県文化財研究会

1982　上田秀夫『根来寺坊院跡　昭和56年度』和歌山県教育委員会

1982　上田秀夫『根来寺西部地区遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会

1982　上田秀夫『岩出町運動広場発掘調査概報』㈳和歌山県文化財研究会

1983　上田秀夫『根来寺坊院跡　昭和57年度』和歌山県教育委員会

1984　辻林　浩ほか『根来寺坊院跡　昭和58年度』和歌山県教育委員会

1985　辻林　浩ほか『根来寺坊院跡　昭和59年度』和歌山県教育委員会

1986　辻林　浩ほか『根来寺坊院跡　昭和60年度』和歌山県教育委員会

1987　辻林　浩ほか『根来寺坊院跡　昭和61年度』和歌山県教育委員会

1988　村田　弘ほか『根来寺坊院跡　昭和62年度』和歌山県教育委員会

1988　佐伯和也『根来寺坊院跡－町道根来・北大池線改良舗装工事に伴う事前発掘調査概報－』㈶和歌山県文化財センター

1988　黒石哲夫ほか『根来寺坊院跡－岩出町立歴史民俗資料館建設に伴う発掘調査－』㈶和歌山県文化財センター

1989　村田　弘『根来寺坊院跡　昭和63年度』和歌山県教育委員会

1989　辻林　浩『根来寺坊院跡－根来公衆便所設置に伴う発掘調査－』㈶和歌山県文化財センター

1989　村田　弘『根来寺坊院跡－岩出町根来地区普通農道整備事業に伴う発掘調査－』㈶和歌山県文化財センター

1990　村田　弘『根来寺坊院跡　平成元年度』和歌山県教育委員会

1991　佐伯和也『根来寺坊院跡－広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査－』和歌山県教育委員会

1991　村田　弘ほか『根来寺坊院跡－前山地区宅地造成工事に伴う調査－』㈶和歌山県文化財センター

1992　村田　弘『根来寺坊院跡　平成２・３年度』和歌山県教育委員会

1992　窪田雅秀『平成３年度　岩出町遺跡調査概要報告書』（根来寺坊院跡の調査）岩出町教育委員会

1993　冨加見泰彦『根来寺坊院跡　平成４年度』㈶和歌山県文化財センター

1993　窪田雅秀『平成４年度　岩出町内遺跡発掘調査概要』（根来寺坊院跡の調査）岩出町教育委員会

1994　村田　弘『根来寺坊院跡　平成５年度』和歌山県教育委員会・㈶和歌山県文化財センター

1994　窪田雅秀『平成５年度　岩出町内遺跡発掘調査概要』（根来寺坊院跡の調査）岩出町教育委員会

1994　佐伯和也ほか『根来寺坊院跡－広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』和歌山県教育委員会・㈶和歌山県文化財センター

1995　辻林　浩『根来寺坊院跡』和歌山県教育委員会

1995　村田　弘『根来寺坊院跡－大谷川改修に伴う発掘調査－』㈶和歌山県文化財センター

1995　窪田雅秀『平成６年度　岩出町内遺跡発掘調査概要』（根来寺坊院跡の調査）岩出町教育委員会

1996　窪田雅秀ほか『平成７年度　岩出町内遺跡発掘調査概要』（根来寺坊院跡の調査）岩出町教育委員会

1996　窪田雅秀『根来寺坊院跡発掘調査概報』－保養施設・食堂建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－　岩出町遺跡調査会

1997　窪田雅秀ほか『平成８年度　岩出町内遺跡発掘調査概要』（根来寺坊院跡の調査）岩出町教育委員会

根来寺坊院跡に関する発掘調査現地説明会資料

1976.3.23　「根来寺旧境内発掘調査概要」㈳和歌山県文化財研究会

1977　「昭和51年度事業　岩出地区緊急調査事業報告書」和歌山県教育委員会

1977　「根来寺旧坊院跡地名表」（昭和51年度　岩出地区遺跡調査）和歌山県教育委員会

1978.1.21　「昭和52年度　根来寺坊院跡発掘調査現地説明会資料」㈳和歌山県文化財研究会

1979.2.24　「昭和53年度　根来寺旧境内遺跡発掘調査資料」和歌山県教育委員会・㈳和歌山県文化財研究会

1981.7.11　「昭和56年度　根来寺西部地区遺跡発掘調査現地説明会資料」和歌山県教育委員会・㈳和歌山県文化財研究会

1984.12.1　「根来寺坊院跡発掘調査現地説明会資料」㈳和歌山県文化財研究会

1985.12.15　「根来寺坊院跡発掘調査現地説明会資料」㈳和歌山県文化財研究会

1987.12.12　「昭和62年度　根来寺坊院跡発掘調査現地説明会資料」和歌山県教育委員会・㈶和歌山県文化財センター

1989.3.11　「根来寺坊院跡発掘調査現地説明会資料」㈶和歌山県文化財センター

1989.11.4　「根来寺坊院跡現地説明会資料」㈶和歌山県文化財センター

1991.3.16　「根来寺坊院跡現地説明会資料」㈶和歌山県文化財センター

1994.3.12　「根来寺坊院跡発掘調査現地説明会資料」㈶和歌山県文化財センター

1996.2.25　「根来寺坊院跡発掘調査現地説明会資料」岩出町教育委員会・岩出町遺跡調査会

根来寺坊院跡に関する発掘調査報告

1977　上田秀夫「遺跡詳細分布調査の報告－根来寺旧境内地区－」『和歌山県埋蔵文化財情報』No.2　㈳和歌山県文化財研究会

1977　上田秀夫ほか「根来寺旧境内遺跡発掘調査の概要」『和歌山県埋蔵文化財情報』No.4　㈳和歌山県文化財研究会

1977　上田秀夫「根来寺旧境内発掘調査中間報告」『和歌山県埋蔵文化財情報』No.5　㈳和歌山県文化財研究会

1979　上田秀夫ほか「昭和53年度　根来寺旧境内遺跡発掘調査略報」『和歌山県埋蔵文化財情報』No.13　㈳和歌山県文化財研究会

1986　村田　弘「和歌山県根来寺坊院跡」『日本考古学年報』36（1983年度版）　日本考古学協会

1988　黒石哲夫「岩出町立歴史民俗資料館建設に伴う事前調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1987』㈶和歌山県文化財センター

1988　村田　弘「根来農道工事に伴う事前調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1987』㈶和歌山県文化財センター

1988　村田　弘「坊院の調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1987』㈶和歌山県文化財センター

1989　村田　弘「坊院の調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1988』㈶和歌山県文化財センター

1989　佐伯和也「岩出町道根来・北大池線改良工事に伴う調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1988』㈶和歌山県文化財センター

1989　佐伯和也「広域営農団地農道整備事業に伴う調査(1)」『㈶和歌山県文化財センター年報1988』㈶和歌山県文化財センター

1989　河内一浩「広域営農団地農道整備事業に伴う調査(2)」『㈶和歌山県文化財センター年報1988』㈶和歌山県文化財センター

1989　辻林　浩「根来公衆便所設置に伴う事前調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1988』㈶和歌山県文化財センター

1990　村田　弘「根来寺坊院跡の調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1989』㈶和歌山県文化財センター

1990　佐伯和也「広域営農団地農道整備事業に伴う第２次調査(1)」『㈶和歌山県文化財センター年報1989』㈶和歌山県文化財センター

1990　佐伯和也「広域営農団地農道整備事業に伴う第２次調査(2)」『㈶和歌山県文化財センター年報1989』㈶和歌山県文化財センター

1991　村田　弘「根来寺坊院跡の調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1990』㈶和歌山県文化財センター

1991　佐伯和也「広域営農団地農道整備事業に伴う根来寺坊院跡の第３次調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1990』㈶和歌山県文化財センター

1991　藤井保夫『根来寺坊院跡－発掘調査10年の歩み－』和歌山県教育委員会

1992　佐伯和也「和歌山県那賀郡岩出町根来寺坊院跡遺跡」『日本考古学年報』43（1990年度版）　日本考古学協会

1992　村田　弘「根来寺坊院跡の調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1991』㈶和歌山県文化財センター

1992　村田　弘「根来寺坊院跡（前山地区）の調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1991』㈶和歌山県文化財センター

1993　冨加見泰彦「根来寺坊院跡の発掘調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1992』㈶和歌山県文化財センター

1993　土井「根来寺坊院跡範囲確認等の試掘調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1992』㈶和歌山県文化財センター

1994　村山　弘「根来寺坊院跡の調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1993』㈶和歌山県文化財センター

1994　冨加見泰彦「根来寺坊院跡の県道工事に伴う第１次発掘調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1993』㈶和歌山県文化財センター

1994　土井「根来寺坊院跡の県道工事に伴う第２次発掘調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1993』㈶和歌山県文化財センター

1995　土井「県道改良工事に伴う根来寺坊院跡の発掘調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1994』㈶和歌山

県文化財センター

1996　土井「根来寺坊院跡（県道泉佐野岩出線）の発掘調査」『㈶和歌山県文化財センター年報1995』㈶和歌山県文化財センター

根来寺坊院跡に関する考古学論巧ほか

1977　上田秀夫「根来寺旧境内遺跡　陶磁器その１」『和歌山県埋蔵文化財情報』No.６・７合併号　㈳和歌山県文化財研究会

1977　宇野慎敏「根来寺旧境内遺跡出土遺物図録」『和歌山県埋蔵文化財情報』No.８　㈳和歌山県文化財研究会

1978　宇野慎敏「根来寺坊院址資料紹介」『和歌山県埋蔵文化財情報』No.９　㈳和歌山県文化財研究会

1980　上田秀夫「紀伊根来寺の発掘調査」『月刊文化財』206　文化庁

1980　上田秀夫「紀伊根来寺の発掘調査」『日本城郭大系』第十巻　㈱新人物往来社

1980　小山靖憲ほか「特集　根来寺遺跡」『和歌山県史研究』７　和歌山県史編さん委員会

1982　上田秀夫「報告：根来寺出土の染付について」『貿易陶磁研究』No.２　日本貿易陶磁研究会

1982　上田秀夫「根来寺坊院跡の発掘調査」『佛教芸術』142　毎日新聞社

1983　藤井譲治「根来衆の軍事力について－岩室坊を中心に－」『根来寺に関する総合的研究』昭和五七年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書

1983　熱田　公ほか『根来寺に関する総合的研究』昭和五七年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書

1983　上田秀夫「根来寺第Ⅲ地区出土の元染付とその他の中国陶磁」『貿易陶磁研究』No.３　日本貿易陶磁研究会

1983　「根来寺坊院跡」『和歌山県史』考古資料　和歌山県史編さん委員会

1985　上田秀夫「根来寺における高麗・李朝の陶磁器について」『貿易陶磁研究』No.５　日本貿易陶磁研究会

1985　村田　弘「根来寺における白土器の消長」『和歌山県埋蔵文化財情報』17　㈳和歌山県文化財研究会

1985　上田秀夫「14～16世紀の染付，青磁，白磁の編年の現状」『和歌山県埋蔵文化財情報』17　㈳和歌山県文化財研究会

1986　根来山誌編纂委員会『根来山誌』晃洋書房

1988　村田　弘「根来寺坊院跡出土滑石製容器」『㈶和歌山県文化財センター年報　1987』㈶和歌山県文化財センター

1988　村田　弘「紀伊国における中世土師質皿の法量変化について－中世土師質皿研究ノート(2)－」『求真能道』歴文堂書房

1988　和高伸二・菅原正明『根来寺展』根来寺展実行委員会

1988　村田　弘「根来寺坊院跡における焼土出土遺物とその組成」『貿易陶磁研究』No.８　日本貿易陶磁研究会

1988　窪田雅秀「根来寺坊院跡（ＮＧ８６）出土の中国陶磁」『貿易陶磁研究』No.８　日本貿易陶磁研究会

1989　村田　弘「織豊期の根来寺の様相」『清須－織豊期の城と都市－研究報告編』

1992　菅原正明「甕倉出現の意義－中世経済の一側面－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集

1993　水島大二「寺を守った城砦群」『摂河泉文化資料』第42・43号　摂河泉文庫

1993　藤井保夫「根来寺興亡を伝える広域農道「紀の川地区」について」『農道研究会』第11号　農道研究会

1994.6.25　土井「根来城発掘について－県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う根来寺坊院跡第２次発掘調査－」『第２回学習会』発表資料　和歌山城郭調査研究会

1994.8.21　土井「発掘調査から考える中世根来寺とその城郭化」『根来の歴史をたずねて』講演資料　岩出町民俗資料館

1994　「根来古城出土の石造遺物」『第５回文化財速報展リーフレット』㈶和歌山県文化財センター

1994.10.23　土井「発掘調査からみた「根来寺の戦国時代」」『埋もれた歴史を知ろう講演会』講演資料和歌山県立紀伊風土記の丘

1994　菅原正明「根来寺」『歴史読本』㈱新人物往来社

1995　菅原正明「泉南紀北の支配者　根来寺」『中世の風景を読む　第五巻 信仰と自由に生きる』　新人物往来社

1995　水島大二ほか『定本・和歌山県の城』郷土出版社

1995　土井「根来寺－中世根来寺をとり囲む城砦施設－」『定本・和歌山県の城』㈱郷土出版社

1996　辻林　浩「紀州根来寺」『歴史群像シリーズ45　豊臣秀吉』学習研究社

1996.4.14　土井「戦国時代末期根来寺の城砦化」　関西近世考古学研究会　４月例会報告資料

1996　「根来寺」『日本の城　古代～戦国編』西ケ谷恭弘監修　世界文化社

石造遺物関係

1941　原豊次郎「紀伊の板碑(其ノ四)根來山を中心として分布する板碑」『紀伊考古』第四巻第六号

1942　原豊次郎「紀伊有田郡の板碑（其ノ一)」『紀伊考古』第四巻第三号　紀伊考古学雑誌発行会

1942　原豊次郎「紀伊の板碑（其ノ四）　根来山を中心として分布する板碑」『紀伊考古』第四巻第六号紀伊考古学雑誌発行会

1967　日下部朝一郎『石仏入門』国書刊行会

1974　巽　三郎・愛甲昇寛『紀伊國金石文集成』㈲真陽社

1975　巽　三郎ほか『高野山奥之院の地寶』－高野山奥之院埋蔵文化財総合調査報告書－和歌山県文化財学術調査報告書　第六冊　和歌山県教育委員会・高野山文化財保存会

1978　橘　信秀「粉河の石佛」『粉河文化』粉河町文化協会

1979　武内雅人・北野隆亮「ＫＺ地区出土の一石五輪塔」『根来寺坊院跡発掘調査概報 III』和歌山県教育委員会

1981　梅田正之ほか『熊取町の石造物』熊取町教育委員会

1982　藤澤典彦「石造遺物」『高野山発掘調査報告書』㈶元興寺文化財研究所

1982　藤澤典彦ほか『高野山発掘調査報告書　奥之院・宝性院跡・東塔跡・大門』㈶元興寺文化財研究所考古学研究室

1987　佐々木好直『広瀬地蔵山墓地跡－奈良県山辺郡山添村広瀬所在の経塚・墓地跡－』『奈良県文化財調査報告書　第51集』奈良県立橿原考古学研究所

1988　愛甲昇寛「紀北地方の石造美術とその石材」『求真能道』

1989　木下浩良「花岳寺蔵高野山参詣曼荼羅に見える一石五輪塔について」『密教学会報』第二十八号

1990　愛甲昇寛『高野山の石造美術』真言史学会

1991　木下浩良「高野山一石五輪塔の概要について」『関西近世考古学研究』II　関西近世考古学研究会

1991　木下浩良「高野山一石五輪塔にみられる朱書・朱入の銘文について」『高野山大学仏教学会報』第十六号

1993　北野隆亮「根来寺における中世後期の石造物」『摂河泉文化資料』第42・43号　摂河泉文庫

1993　藤澤典彦ほか『五輪塔の研究－平成四年度調査概要報告－』㈶元興寺文化財研究所

1994　南川孝司ほか「大阪府泉南市信達　葛畑・楠畑の石造物実測調査概要」『摂河泉』会報第24号　摂河泉地域史研究会

1994　横田　明「犬鳴山七宝瀧寺の中世石造物について－板碑を中心にして－」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要２』㈶大阪府埋蔵文化財協会

1994　西山昌孝「寛弘寺墓地の中世石造物」『寛弘寺遺跡発掘調査概要 III』大阪府教育委員会

1994　福澤邦夫『千早赤坂村の石造文化財Ⅰ』千早赤坂村文化財調査報告書　第４集　千早赤坂村教育委員会

1994　木下浩良「高野山一石五輪塔の研究」『密教学研究』第二十六号

1995　巽　三郎・愛甲昇寛・小賀直樹『紀伊國金石文集成－続編－』㈲真陽社

1995　南川孝司ほか『大阪府泉南郡岬町　淡輪別所中世墓地実測調査報告』摂河泉地域史研究会

1995　藤澤典彦ほか『五輪塔の研究－平成六年度調査概要報告－』㈶元興寺文化財研究所

1996　橘　信秀『和歌山県那賀郡石仏史』那賀郡老人クラブ連合会

1996　江見正己ほか『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査』３　宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群・粧田山城跡・大村遺跡他『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113』岡山県古代吉備文化財センター

1996・1997　横田　明・西山昌孝・小林義孝「一石五輪塔は何を語るのか　書を持ち、墓地を巡ろう」『歴史民俗学』第６号・第７号　歴史民俗研究会

武具関係

1987　笹間良彦『図録　日本の甲冑・武具事典』柏書房

円盤状土製品関係

1979　『草戸千軒町遺跡－第27次発掘調査概要』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

1984　『富田川－飯梨川河川改修に伴う宮山川河床遺跡発掘調査報告　(4)－』島根県教育委員会

1985　志田原重人「中世のあそび」『草戸千軒』No.144　第13巻第3号　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

1990　『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告III』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

1995　『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅴ』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

その他

1971　千地万造「和泉山脈の地形と地質」『和泉葛城山系自然公園学術調査報告』㈶日本自然保護協会

1988　長谷正紀・関口靖之ほか「紀北・泉南間の交通の現状をさぐる」『和歌山地理』第８号　和歌山地理学会

報告書抄録

ふりがな	ねごろでらぼういんあと
書名	根来寺坊院跡
副書名	県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う根来工区発掘調査報告書
編著者名	土井　孝之
編集機関	財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒640　和歌山県和歌山市広道２０番地　TEL0734-33-3843
発行年月日	西暦　１９９７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ねごろでらぼういんあと 根来寺坊院跡	わかやまけん 和歌山県 ながぐん 那賀郡 いわでちょう 岩出町 ねごろ 根来	32670	16	34度 17分 2秒	第１次確認調査 19911118～19911205 第２次確認調査 19921124～19930210 第３次確認調査 19930601～19930628 第１次調査 19930714～19931117 第２次調査 19931221～19940326 第３次調査 19950109～19950327 第４次調査 19950911～19960315	160 583 480 2,605 3,030 1,894 2,720	県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う事前調査
				東経 °′″			
				135度 3分 55秒			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
根来寺坊院跡	散布地 集落 城館	旧石器時代	遺物包含層	ナイフ形石器・細石刃・剥片	
		縄文時代～弥生時代	遺物包含層 土坑　２基	石鏃・掻器・剥片、縄文土器、弥生土器	
		古墳時代末～奈良時代	遺物再堆積（谷状地形）	須恵器各種、陶棺、塼、土馬	奈良時代、調査地周辺は窯場。
		奈良時代	土坑　１基	須恵器大形甕	甕を谷状地形の肩部に埋置。
		鎌倉時代後期	溝　１条 土坑墓４基	土師器、瓦器、須恵器、中国製磁器、金属製品	
		室町時代	谷状地形 柱穴群 土坑　10基 井戸　２基 堀　５条 落ち込み２基 池状遺構３基 遺物包含層	土師器、瓦質土器、国産陶磁器（備前・常滑・瀬戸美濃・丹波・信楽）、中国製磁器、朝鮮製陶磁器、瓦、木製品（独楽・折敷・曲物・下駄・桶・箸・漆器）金属製品（武具：喉輪・垂、鉄鍋・五徳）、砥石、火打ち石、石扉、石造遺物（一石五輪塔・地蔵石仏・宝篋印塔他）、獣骨	調査地の南側で検出した大規模な堀は、根来寺の町屋をも囲い込むものと推定される。調査地の北側で検出した堀には、堀底に約 500 基の石造遺物が捨て置かれていた。石造遺物の中には、銘文の記載に金泥・朱漆・黒漆を多用した逸品が認められる。
		江戸時代	溝　５条 土坑・鋤溝	国産陶磁器（肥前系陶磁器・丹波・織部・志野・堺・伊賀）	